
- - - 守護者になりました - - -

黒天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- - - 守護者になりました - - -

【Nコード】

N8733L

【作者名】

黒天使

【あらすじ】

神に（故意に）殺され（勝手に）【世界】の守護者となった（された）仁神 刻。

彼はリリカルなのはの世界で奔走する。

チートと言いながら・・・あんまチート性能フルに使ってません。まあそれでも十分強いですが。後、微妙にアンチが入っています。ついでに所々ダークな話もあり。そういうものに拒絶反応がある人は回れ右を。

現在の状況、

序章編終了

無印編終了、

A・S編終了、

幕間編開始。

感想、評価、誤字訂正、絶賛受付中!!

お知らせ。(最終更新2010/9/6)

この作品の主人公はかなりチートです。

またダークな話も所々に含まれているのでそのようなものが合わない方は回れ右をした方がいいかもしれません。

文章の一(ある程度大幅な)修正、と加筆情報

2010/6/08 原因不明のエラーで編集不可になったので

色々と編集を加えながら新たに投稿し始めました

2010/6/11 ユニゾンデバイス、アリアの名前をソニアに変えました

理由・・・リーゼアリアとかぶるから

2010/6/18 014さらに加筆しました。一番最後に書いてある文章です

2010/7/10 ソニアについて少し変更しました

2010/9/01 刻の実力をやや下げました。いくらなんでも強くなるのが速すぎなんです。

刻のバリアジャケットを漆黒のローブにしました。

(二つとも本編には全くと言っていいほど影響はありません)

001 プロローグ？（前書き）

本文約六百字増えました

あ、後あとがきはそのままコピペしてきます

001 プロローグ？

Side ????

目が覚めるとそこは辺り一面真っ白の空間だった。

・・・俺のほかにも誰がいるけど。

誰だろうかあいつら？

ま、戦闘意思はないっばいし、とりあえず無視しよう。

にしても……………

「なんなんだ？この真理の部屋みたいな場所？俺自分の部屋で寝たよな？」

「ようこそ。ここは（あ、そうかこれはまだ夢の中なんだ）

……………あの、ちょっと？ おい、ちょっと話きたい（よおし早く起きるぞー）（わしを無視するな！！）

ってかお主、わしのこと気づいてるよ（あれおかしいなー痛みを感じてるぞー）

……………泣いていい？いいよね。　　うわー（うるさいわ！

！！）（ブゲラ！！）」

グシャ（ 回し蹴りが誰かにクリーンヒットした音）

ドカ（何かに誰かがぶつかつた音）周りにはなにも無いはずなのに（

ズルズル・・・ドサ（誰かがどこかに落ちた音）床も無いはずなのに（）

・・・少々お待ち下さい

「で、おまえは誰なわけ？」

「ううう・・・わしは神様じゃよ。 仁神 刻にかみとき」

「へー、神様（仮）ですか。それでお（ちょっと待て（

こいついきなり話の出鼻をくじきやがった
何なんだよ……原因は分かるけど

「何ですか一体。」

「（仮）ってなんじゃ！！わしは本物じゃぞ！」

「俺は本物と認めていない。（なぜじゃ！！） いや思いつきり泣いてたじゃん

正直、今のお前からは威厳のかけらも感じ取れない」

「うっうっうっ」

涙ぐむ自称神

正直おっさんの泣きそつな顔は萌える要素はまったくなく、むしろマジでキモイ

こいつ見た目は威厳ありそうだが、実際これだからな……ほんとうぜー

「あーうっせえなー（泣）とか（笑）とかが付くよりはいいだろ。」

「ちょっと待て（泣）は分かりたくないが分かるが、（笑）てなん

じゃー!!

わし、とつても痛い人みたいじゃないか!!

「俺があんたを見下してるってことです。」

思いつきり下げずんだ視線を送りながら言ってる

「ぐす……」

ついにはすすり泣き始める自称神、だがうざいのでそんなのは無視し話を進めることにする

「で、ここは一体どこで、そして俺は何でここにいるんだ。」

「ここはわしの世界。それ以外には言いようがない。」

そしてお主がここにいる理由じゃが……ぶっちゃけわしが殺して魂をここに連れてきた。」

………ちょっと待て、

いま聞き捨てならんセリフが聞こえたぞ

「なあ、俺の聞き間違いか？」

今何かおまえが俺を殺したって言ったよう（言ったぞ。ちなみに死因は直径一センチ隕石がお前の頭にクリーンヒット）」

こいつ……サムズアップして片目つぶりながら言いやがった。

「何『すごいだろ』みたいなポーズしてんだ!!」

つてかなにやってくれてんだてめえ!!なんか寿命の操作でも間違えたのか!!」

「いや。完全にわしが故意にやった。」

このやる……えぱりながら言いやがった……

「ふざけんじゃねー!!」。

なに神が人間殺してんだ、しかも故意に。殺してやる!!」

「いや神は基本不死身だし。一片たりとも残さず消滅させられでもしない限りすぐに生き返るぞ?細胞一つでもあれば再生可能じゃほゝお……じゃあ遠慮はいらないな?」

あ……失言だった?つてうおゝ!!目ゝ……怖!!」

きつと今俺は般若の形相なんだろう
だがそんなの関係ね〜!!!!

「ちよつくんな!!」

「が!!」

このやる……俺を結界に閉じ込めやがった

バシャン

……水、かぶせやがった
しかも氷水を……

「ちよつと頭冷やして落ち着け。わしがお前をここに連れて来たの
は理由が有るんじゃ。」

……ち抵抗する手段はねえか

「……理由？」

「そう、まぶちちゃんのお前に守護者の第十三柱をやってほしい。」

001 プロローグ？（後書き）

刻

「ここできるとかよ」

黒

「なんか3000超えそうだってんで」

刻

「はー。今日中には続きは投稿するんだろっな？」

黒

「もち。できれば第一話も投稿する。」

刻

「まあ頑張れや。宿題もしろよ。明日までにレポート英語で400字だろ？」

「言っとくが他人のとかHPのコピーはめだぞ。此処の学校そついうの検索するソフト充実してるから絶対ばれる。」

黒

「言ってたもんね。まあ何とかします。」

002 プロローグ？（前書き）

タイピングでムズイ。

キーボード見ずにとか、無理だつて。

002 プロローグ？

Side 刻

「は？守護者？」

「そう守護者の第十三柱。ああ、やって欲しいとは言ったが、もう手続きは終わってるから。」

「このやる、またあっさりと聞き捨てならんことほざきやがった！！」

「なに勝手にやってんだ！！」

「んな訳の分からん物に勝手にするな。ってか、なんだよそれ！！」

「ひどい言いようじゃの。とんでもなく栄やかなんじゃぞ。なんせ世界の守護者なんじゃから。」

「……………世界の守護者？」

「そう。ああ、安心せい。そうは言っても大したことはない。あの

方の加護をもらえるんじゃないから怖いものなどなしじゃ。それじゃ、行こうかの。」

そうやって神（仮）は俺をどこかにひきづりながら連れて行くとした。……鼻歌を歌いながら。

曲名は……ドナドナ？

こいつまじでドウシテクレヨウ？

「いや全然説明してくれてないんだけど。……ああもう分かったよ。守護者だろうと破壊者だろうとやってやるよこれでいいか！！」
で、俺は何をしたらいんだ！」

こうなりややけだ。あの方とかいう奴が加護（たぶんなんかとつもない力だと思っ）をくれるっぽいしそれつかってこの爺シックスナイン（99・9999%）殺しにしてくれる。

「まあ途中です。あ、あの方にわしが勝手にお前を殺し守護者にしたことを言っんじゃないぞ。」

「とりあえず、何で言ったらいけないんだ？
てかあの人って誰？」

「ああ、いってなかったの。理由はの（お前が手柄欲しさに勝手に
人殺して守護者にしたとばれたら怒られるからだろ。この俺に。）」

あ、やっともう一人のやつが喋った。

・・・・・・・・ん？何だ急に動きとめて？
・・・・・・・・なんか心なしか冷や汗書いてるな？

Side 神（仮）

この声はまさか・・・・・・・・

ぎぎぎぎぎ（首を後ろに回す音）

.....

「ぎゃああああああ。 な、何であなた様がここに。 と言うか何時からいつ（え？最初から居たじゃん）何じゃと刻。 なんで教えてくれんかった!!」

「いや、俺は自分の存在濃度、対君限定で落としてたからふつうは分からん。 まあそれは置いといて。ゼウスくん（にやり）」

はははhahaha.....終わった。

S i d e
刻

こいつゼウスだったんだ。まさか本当に神か。まあ4割ぐらいそうじゃないかと思ってたが(すくな!!!最初からわし神だって言うてたじゃろ)うるさいな。

「うるさいぞ神(屑)。耳元で騒ぐな。てか、かってに思考読むな」

「さらにひどくなった!!!」

「(駄)じゃないぞ、刻」

「おお創造神様」

「こいつは神だ^{クズ}」

キョウセイイベント

ゼウス ノ ショウゴウ カミ ガ キエ、 カミトカイテクズト
ヨム ヲ テニイレタ

「ぐは!!」

あ、吐血した

だが、哀れとも何とも思わない
いいぞ創造神、もっとやれ。

「さてこんな眷属だとは思いたくないが一応眷属の屑ゼウスが迷惑
をかけてすまん。」

なんか後ろでゼウスが「終わった。」とか「もうわしは・・・。」と
か「創造神に嫌われてしもつた」とか呟きながら涙にくるまれているけど無視無視。

。「もう諦めましたよ。それにしても、あなたが創造神ですか・・・
。なんかとても若くないですか?」

いや、本当に若いんだ。
どれくらいって？

ゼウス 軽く80は超えてる。威厳のありそうな（ありそうだけ
の）じいさん。

創造神 どう見ても20代。人のよさそうな今流行りの服を着こな
したお兄さん。

「神にとって姿や年齢なんて関係ないからな。これでも俺、かるく
40桁超えるぐらいは生きてるぞ」

「もう表せる単位ねえよ。」

「ははは。まあそんなんだ。ちなみにアテネのやつは5歳ぐらいの
女の子の姿とってるぞ。」

なんでも毎朝鏡をあの姿で見るのが楽しみなんだとか。」

「……………ナルシストなのか。幼女趣味なのか反応に困
るな」

まあどっちにしても変態か。

「まあな、ちなみにゼウスがああ、の恰好してるのは（偉そうだからか？）（そのとうり）」

なんか、ああ、この姿なら人々の畏怖を一身に・・・とか言っ悦に入ってたぞ（十分痛々しいじゃねえか！！！！）」

なにが「とつても痛い人みたいじゃないか！！」だ！！
十二分に痛々しいわ！！！！

「はあ、神ってあんなのばっかりですか、創造神さま（ちょっと待て刻）」

なんだよ、てか身だしなみが元に戻ってるよ。さっきまで血と涙でぐちよぐちよだったのに。

「なんでそんな格好のやつが創造神だと一発で信じるんじゃ！！！！
・・・・・・・・・・は！？
創造神様、そんな格好なんて言ってすみません。十分神々しいお姿です。」

なんかどんどん自分の立場悪くしてるよゼウスまあもう底辺だろうけど

「いやなんか信用できるんだよ。・・・お前と違って。」

これでも俺は自他ともに人を見る目があると認められているんだ。

「ははは、確かに言い眼してるな。」

そっぴや、創造神なんていちいち言うのは面倒だろ。

俺の名はヴィシユヴァカルマン、カルマとでも呼んでくれ。

さてと、そろそろ本題に入ろうか。」

・・・ヴィシユヴァカルマンって工匠神の名だよな？

002 プロローグ？（後書き）

刻

「まだ続くのプロローグ？」

黒

「次で終わりだ。」

刻

「それにしてもお前焦りすぎ。一回ぐらい原稿消去して書き直してんじゃん」

黒

「それもいい経験だよ」

003 そして守護者に（プロローグ？）（前書き）

待たせたわりにあまり改良できませんでした

003 そして守護者に（プロローグ）

Side カルマ

まったくあいつは。

まあけがの功名か。

こいつは良い守護者になるだろう。

さつき思考回路をのぞいてみたが、素質としては十三柱を任せるとは十分だ。

ま、こんな人生歩んできたらくついつい思考するようになるのも当然か。

Side 刻

「……………さてと、そろそろ本題に入るつか。」

あ、（いろいろとインパクトがある話題があったから）すっかり忘れてた。

俺確か守護者の第十三柱になるんだっけ。

「忘れてました。俺は守護者の第十三柱になるんでしたね。

でも何やるんですか？

ってか俺たちの世界ってそんなにやばいんですか？（いやお前のいた世界というわけではない。含まれてはいるが）

は？なんだっつーお前は並行世界という単語を知っているか？「まあ」

さまざまなifの世界。

可能性があるだけ分裂していく無限と言っていていいほど存在するもの。極めて近いが限りなく遠い世界だったよな。

「おまえはTトウWウNンEンの者たちから世界を守ってほしい。

まあいきなり言っても分からないだろう。

少し話に付き合ってもらおう。

あれは今から5847211年ぐらい前だった「長、五百八十四万七千二百十一年前！！！！」

てかそんだけのはつきりしてるんなら《ぐらい》なんてつけんな）失礼な分まではつきりしておらん（十分すぎるわ！！！！）」

訂正、こいつもやつぱどこかおかしい神ってみんなこんなやつぱつかk「神ならこれぐらい標準装備だよ。あと性格だけどなにも言わないどいてやれ、長生きしてるとな、なんか楽しみ見つけたり、はっちゃけないとやっていけないんだ。」

また心読まれた……。

それにしても、楽しみとか、はっちゃけるって言ってもあれはないだろ。

まあそれもいいか。

……もう考えるのやめよ。

もういいや……そうだあいつらは神なんだ……なら何でもありだろ。（達観）

「では改めて、その時俺のつくったさまざまな世界が消え始めた、そこから派生した並行世界も含めすべてだ。

俺は原因を探した。

たとえば作った後、基本放置だと言っても、俺の作った大事な息子が殺されたようなものだ。

そしてついに原因を見つけた。

それはTニWニNニEニ（The World that is sure
Not to Exist）（存在しないはずの世界）（に住まう
者たちノーバディーだった。
しかし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

この後を要約すると、

その者たちはこの無数に分裂した世界をすべて消し去り完全なる無
を作り出そうとしている。

すでにかかりの世界が消えてしまっている。

消し去ろうとしたがそいつら是对神に特化した対抗手段を持ってい
たため創造神でさえも対処できなかった。

しかし、神以外なら対抗できることが分かった。（それでも普通の
やつらが対抗できないぐらいは強かったが）

そこで残りの世界を守るために生み出されたシステムが守護者、そ
れぞれのその並行世界も含めた【世界】に一人ずつ。

基本守るのは自分担当の【世界】俺の場合は第十三【世界】「フ
アンタジア」

しかし担当外の世界にも行くことは可能。(別に手伝いに行っても、遊びに行っても良い。仕事をちゃんとやってくれば。)

守護者は全部で14人分、ただしさつきまで第十三柱はいなかった。理由は負けて殺されたから。

前述のとおり、ノーバディーは通常なら並みの人が手足が出ないくらい強いが、そこは最高神である創造神の加護(ついでに眷属たちのも)が付くので大抵楽勝に勝てる。

しかし中には、^{デプト}副隊長、^{イクスト}隊長たる者達がい、さらに^{マスターマインド}トップに王がいる。

階級が上がるほど強さは爆発的に上がる。前の十三柱はイクスト(その中でもかなり強かったらしいが)に殺られたちなみに最下層は^{ワスト}一般兵

また、マスターマインドがイクストを生み出し、イクストがデプトを、デプトがワストを生み出している。

なのでマスターマインドを倒せばイクストは生まれなくなり、そしてイクストがいなくなればデプトが……というふうになる。

なのでなんとしてもマスターマインドを見つけ出し、倒さなければいつまでたつてもきりが無い
でないとい永遠にネズミ算だから

TWNEとは創造神がまだ【世界】を作っていない場所。

なのでこちらからマスターマインドを探し出すのは事実上不可能。存在がわかっただけでも奇跡。

とのこと。

「さてそれでは、お前はお前の住む地球に行ってもらうに行ってもらう。「え？そうなの？」 ああ。理由はいくつがあるが大まかにまとめるとそこはノーバディーの出現頻度の多いポイントに一番近いからだ。ちなみにここに住めないのは、俺達と共に住むとお前の存在が神に近寄ってしまい、対抗できなくなってしまうからだ。」

なるほどな。……て、あれ？

「ちょっと待っておれ死んでしまっただけで生き返るの？」

「いや、先ほどの理由で、お前はお前がいたのとは違う地球に行ってもらう。」

どんな所かと言うと・・・そうだな、お前の世界にあったアニメ『リリカルなのは』とほぼ変わらん」

リリカル・・・ああ、あの科学じみた魔法の世界ね・・・えらい戦闘技術の発達した

まあ、戦闘を学ぶには当たり障りのないところか・・・

「さて、住む場所とか戸籍とか金とかはこっちで用意しておく。身の回りで何か要望があるか？」

「じゃあ・・・、あ、そう言えば時期的にいつ？」「無印の五年ぐらい前」そうか、4歳ぐらいの年齢にしてくれ。詳しい容姿は・・・不細工じゃなかったら何でもいいよ。(いざ考えるとうまく想像できないから)」

「分かった。じゃあ送ろうか。あ、向こう行ったらお前の本拠地虚数空間にでも作れ。あとたまにはこっちに遊びにでも来い。歓迎するぞ。滞在するのはだめだが。」

よし楽しめそうだ・・・てあれ？

「ちょっと待って。『なんだ？』俺の能力は？チートにしてくれる

んじゃないの？」

「何だそんなことか。」

カルマは心配して損したって表情をして言った

「お前はおれたちの加護を受けたんだ。治癒能力は神とほぼ同じだし、年齢操作できるから、事実上ほぼ不老不死だ。基本身体能力さえオリンピック選手と違ってアリと巨象と言うのもおこがましいぐらい隔絶してる。魔力も基本でさえほぼ無限大だし、それに精霊とかも息をするように使役できる。あと能力だが………
・まあ手っ取り早く言うとな不完全な全知全能だと思っでいいぞ。」

不完全？………ああ、できないことがあるってことか

「たとえばどんなことが出来ないんだ？」

「ん〜そうだな、お前はアカシックレコードのアクセス権を持つてるんだけど。これの未来の情報への接続だけはできないな。それに俺達と違って使用による脳の負荷が半端ない。だから使用には気を付けるよ。これ使っで頭が物理的に湯だったやつ過去の守護者にいたから。他には生命創造もできないな………死者蘇生なら俺が手助けすればできるけど………あとは………ないかな。」

・・・?
「

・・・・・・・・・それでも十分すぎるほどチートだね。

「これでも前のやつ死んだんだよな。」

「このレベルになると技の強さもだが、精度とか速さとか戦略的とかが要求されるからな。前のやつも不意を突かれてやられてたし。」

なるほど、気をつけよう。

「じゃあ送るぞ。次に目覚めたらお前の家の中だ。」

そうして俺の意識はフェードアウトしていった。

ちなみにこの間ゼウスは「創造神を愛称で……」「うらやましい」「それに比べてわしは……」「はははははは」とか呟いたり。乾いた笑いを発していた。

……後で慰めに行くかな。なんかかわいそうだ。
……ん？待てよ？まだ『お礼』をしてなかったな……。
。

うん、訂正……能力に慣れたらぼこりに行こーっと。

003 そして守護者に（プロローグ？）（後書き）

黒

「疲れた」

刻

「御苦労さま、にしてもプロローグ1・2は一緒によかったんじゃないか？」

黒

「いやね、おれってこれ携帯でよく読むから、あんまり長いといういろと見にくいって知ってたんだ。そしたらページ10000ぐらいだった。」

刻

「ああ、実験だったわけね」

黒

「そういうこと、でもさ俺の読んてる作家たちってつまりいつも3000ぐらい書いてるってことだろ。まじできついつて」

刻

「まあ体調には気をつけて書け。一週間以上書かないと読者が離れるからな、少なくとも三日に一度は投稿しろよ」

黒

「ああ」

刻

「まあそれよりお前は今からあれだな。
レポート明日までに英語で800字。
ちゃんとかけよ。」

黒

「ぐは。

ああやってやるよ。

でもなんで一回生一ヶ月経たないうちからこんなハードなんだ
よ」

刻

「がんばれ。

人間やれば何でもできる」

感想 and 評価よろしくお願いします。

004 身の回り確認(前書き)

改訂前約1000字 改訂後約2000字

やったー。倍近く増えたぜ!!

004 身の回り確認

Side刻

「…………知らない天井だ…………」

俺はおもむろに体を置き上がらせ、自分の姿をそばにあった鏡で確認してみる。

黒髪黒眼の……………っていうか年齢を下げた転生前と同じ姿だな……………肉付きはこっちの方がいいみたいだけど。

……………にしてもやっぱり視線低いな。
まあ四歳児だとこれが当たりまえか。

さてと、此処は……………

(おい、ゼウスー!!)

情報を習得すべくゼウスに念派をつなぐ

(ってなんじゃい。いきなり呼び捨てか？)

(現状俺がお前に敬う気持ち是一片たりともあると思ってるのか？)

(それは・・・まあ、・・・すまんかったの。)

(たく・・・まあいい。)

まあ、おかげであんな体験が出来たんだからよしと無理やり納得してやろう

やっぱ、想像するのと実体験するのは衝撃が全く違ったからな・・・

(で、今の俺はどう言った状況なんだ？)

(ああ、大雑把に言つと) 正確に、詳しく言え！)
・・・はい。
)

結論から言つと俺は海鳴にある高級そうなマンションの一室に住んでいることになってるらしい。

家族関係は両親は一年ほど前に他界。
祖母たちもとつくに死んでいるということ。

一人暮らし出来る理由はそう言った認識障害がなされているかららしい。

まあ、両親をもらっても困るからこっちの方が良かったかもしれないが。

説明の後一通り家を探索（と言うほどでもなかったが）した結果、家具とかはすべて揃っていた。

ただ食品はなかったので後で買いに行かないと。

ちなみにお金は一銭も無かった。

うち、相変わらず抜けてやがる。あとで引き出しに行かないとな。

え？ どうやってかって？

まあこう・・・ATMに近づいて電気系統の能力で・・・。

さて、確認も終わった所でまずは能力確認して慣れておかないとな
・・・

思いついたら即行動。

意識をアカシックレコードにつないでとある設計図をダウンロード
する。

(その情報を取り出すだけで、それに付属する余計なものまで一気に知識として押し寄せてきて頭がクラッシュ寸前になり、修業が一通り終わったらよほどでない限り絶対使用しないと心に誓った。)

俺は能力確認をすべく先程作った【別荘】(魔法先生ネギまより)の中に転移した。

内装は荒野だけだけどな・・・

「さてと・・・先ずは・・・」

うんやっぱあれかな？

えっと・・・やや腰をおとして・・・、

「かゝめゝはゝめゝ」

男としてやっぱ『かめはめ波』はあこがれるでしょ！！

みんな一度はポーズ取ったことあるだろ？

え、ない？俺だけ？まさかゝ・・・。

ど・・・つてあれ？なんかめちやくちや氣が集まって来てんですけど・・・

・・・なんか・・・あまりのエネルギーに・・・体中がら冷や汗が・・・

「つて、うおゝゝゝゝゝゝゝ！！！」

急いで俺はその氣の塊を遠くの方へ放った

そして・・・

ギューーン・・・・・・・・カッ！！

遠くのお山達が・・・・・・・・一瞬で消え去りました　まる

わーいすごいぞ、あたって最強ね（激しく現実逃避）

・・・・・・・・・・まじで能力の制御習得しようと思った。

その後、俺は力の制御を練習し、

アカシックレコードを慎重に使いつつ、引き出した魔法などを片っ端から使ったり、合成して使ったりして、使うのに慣れたら力を隠す練習をしました。

傍からは今のおれの魔力はぐらいにしかけいそくできないぜ！

ここまで来るのにいろいろな『ドラマ』があった気がするけどそん

なことは無かったぜ！！

核戦争でもあったかのような大地の元、俺はふと上を見上げる

た）
．．．．．ああ、空が青いな〜〜（以上現実逃避でし

あ、そうだ！！翠屋に行こうと）逃亡（

翠屋

カランカラン

店の扉を開くと中はお菓子の甘くておいしそうなにおいが俺の鼻をくすぐった。

「いらっしやいませ」

カウンターには桃子さんと土朗さんがいた

うん、アニメの時と寸分たがわぬ格好だな

おかしいよな〜〜STSの時もこの二人って（他の人達（熟年組）も）この恰好から代わり映えしてな！！！！？（ガガ・ガガ（世
界化から何らかの力を受けました））

さ、シュークリームでも買おつと

「あ、持ち帰りでシュークリームを二つください。」

「ほう……ありがとうございます。」

土朗さんがなぜか見透かすような視線を送ってきた

「はいどうぞ。」

しっかりとしてるはね僕。何歳？」

「四歳ですね」

「じゃあなのはと同年ね。できたら友達になって和えてくれない？」

「もちろんいいですよ。ではまた今度。」

そして俺は帰路についた。

………土朗さん、俺が桃子さんと話してる間ずっと俺を観察してたな……

御神の剣士としてなにかきづいたのか？

でも何所で気付いたんだ？

剣術とか古流武術とかはアカシックレコードからダウンロードして体になじませただけ、

無意識の身のこなしが変わるぐらいはやってないぞ？

s i d e 士朗

さっきの男の子只者ではなかったな。

うちの娘と変わらぬ年なのにあの雰囲気。

いったい何を見てきたのやら。

それにしても、いつか手合わせを願ってみたいものだな。

身のこなしはまだまだだが、何か隠している気がする。

ひょっとしたら私が負けるかもしれん。

実力を確かめてみたい!!

s i d e 刻

(ぶるっ)なんか寒気がするぞ、へんだな?病気なんかにはかからないはずなのに。

おまけ 自分の力について調べていた時の一場面

「……………なんで俺のDNAにジェノバ細胞と一致する部分があるんだよ……………
ん?……………ちょっと待て何だコレ。

【blood seed】?血の種?俺吸血鬼につながってんの?

おい神共!!俺にいったいどんな加護つけたんだ~~~~!!!!!!」

……………ちなみにそれに関して副作用みたいなものはないと分かった。

確かにいいところ取りだけ……………正直微妙な気分。

004 身の回り確認（後書き）

刻

「次回題名はノーバディーとの初戦闘」

アンケートの募集状態は目次の「お知らせ」をご覧ください。

005 ノーバディーとの初戦闘(前書き)

黒

「ではさっさと」

刻

「早…!!」

今回の訂正結果、約四百字アップ

005 ノーバディーとの初戦闘

その日、刻は夜中にいきなり目が覚めた。

「これは一体…まさか!! (刻ノーバディーが現れた) カルマか。」

カルマから刻に念派が届く

(そつだ気配は感じるか? (ああ、この何だか引き裂かれているような気配か) ああそつだ。すぐに向かってくれ。(了解))

そして刻はノーバディーのいる世界へ時空間転移した。

『ノーバディーとの初戦闘か。どんな奴なんだ?』といった恐怖半分好奇心による楽しみ半分といった感じで

……で

(なあこれって本当に生物か？機械にしか見えないんだけど。)

カルマに怪訝な顔をしながら念派をつなぐ

しかし彼の反応はもっともだ。

なぜなら………

刻の目の前には手足は四本ずつ、そのうち一つはマシンガンみたいなものを持っており、もうひとつの腕の先には円盤の刃物がついたマネキンみたいなやつらがわらわらいた。

………マジで不気味なロボットにしか見えないってかなんかスパークしてる気がするし

(そいつらに一般的な《生物》のカテゴリは当てはまらんよ。
反物質の煙みたいなやつとかもいたからな。
ちなみにそこら辺にいるのは全部ワストだ、だが奥にいるほかのより大きいやつはデプトだ気をつけるよ。)

刻は奥を見る……確かにほかの個体よりも大きなやつがいた。
しかし姿が人を馬鹿にしてるようにしか思えない。

そいつはブロックのような手足を持ち、顔は上下の部分がややへこんだ楕円状、目や口の部分は穴があいて………ってかぶ

つちやけL EGOの人型ブロック。

全く恐怖感がわいてこない、まあ……顔の部分凝視してたら
少しわいてくるような気もするが……
……とにかくくどう見てもワストのほうが強そうだ。

(なんか激しくやる気がそがれるんだけど……)

(言っとくがまじで強いぞ？死ぬなよ？)

(へーい。

それじゃあ仁神刻、いつきまゝす)

そして刻は敵の群れに突っ込んで行った

バサ、グシャ、ギイン、ビュン、ドガ、ゴー、ピキピキ……バリ
ーン

ドガガガ、ドゴーン、ぴきつつっ………、ゴーン

ただ今無双中です。バックミュージックは（Give Me All Your Love）

ワストのやつらは見た目と違ってきつい攻撃（腕伸ばして攻撃してきたり、A＋クラスとしか思えない魔力弾で弾幕はつてきたり。刃を飛ばしてきたり）をしたが、刻はそれを軽く超えるチート

投影で宝具発射して『壊れた幻想』^{プロクン・ファンタズム}使ったり、アルテマ唱えたり、『打ち砕くもの（ミヨルニル）』でつぶしたり、ジャッジメントで敵撃ちまくったりして倒しまくっていた

あんな姿をしていなかったら、はたから見たらいじめも良いところだろう

ワスト達が何かをまきちらしながら消えていく

………んぞ、

S i d e
刻

「デプト以外は倒し終わったわけだが……っちい!!」

こいつかなり強い。妖刀正宗で切りつけたけど、軽くひびが入るだけでもその後かなり強力バリアはったらしくちつとも攻撃が通らない、

魔法のほうはもともあの殻(?)自体がかなりの耐性を持っているらしくダメージが見られなかった。

しかも、ものすごく柔軟で速い動きをしている(エヴァみたいな)、そのうえその間体のあちこちからレーザービームっぽい奴とか魔弾とか発射してきやがってまともに近づけねえ!!!

なっ今度は飛びやがった!!!

なにする気だ?

ん?何か腹の部分が開いたぞ?………てつくそ!!

「織天覆う七つの円環!!」
ロー・アイマス

ギャリリリリ…ギシ…ビシ…

そこより放たれた砲撃を織天覆う七つの円環ロー・アイアスで何とか防ぐ

危なかった、四枚も割る威力って……。

ち、さつさと決着付けないとやばいな。何か動きが俺に対処してきてるし、学習能力高いな……。て、また来た、くそ……！

ヒュン

ドガー……！！！！

どうすれば……。ん？良いこと思いついた

トレス 投影『《白眼》強化ver』！！！！

これで相手に流れているエネルギーがはっきり見えるようになった。

俺の考えが正しいなら……。

「やっぱりだ、砲撃を打つ瞬間あいつは必要な場所だけバリアを消

している。

しかも殻の中なら普通に魔法攻撃が通る！！
なら打つ瞬間それ以上の砲撃を叩きこめば。」

そうと決めればさっそく実行だ！！

「出る乖離剣エア！！！！」

出力最大、充填開始！！！！」

乖離剣エアを出し、魔力を送り込む

三つの円筒型の刃が回転し、魔力を高めて圧縮される

……何か魔力詰め込みすぎてバチバチいいだしたが気にしない！！

……帰ったら修理&強化するか……。

よし腹の殻(?)が開いた。いまだ！！！！

「くられ『天地乖離す開闢の星』エヌマ・エリシュ！！！！！！」

少しの間拮抗したかと思うと、俺の砲撃が相手をぶちぬいた。

そして相手はアカイアメヲフラセナガラキエティツタ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「気のせいじゃなかったんだな」

ワストを倒していた辺りから気になっていたことだったが、相手を傷つけるたび紅い雫が飛び散ってるように見えた、すぐに消えたから気のせいかと思っていたが今を見て、本当だったと確信した。

「「生物」か・・・・・・・・」

何かすつきりしないけど帰るか・・・・・・・・。。

帰ったらとりあえず基地に行って専用の武器の強化、魔法の作成しよう・・・・・・・・。。。

デプトでこの強さだったんだ、イクストの強さっていったい……

勝てるのかなマスターマインドに……。

あ、そうだ。デバイスも作ろうかな？

話し相手が身近にいないってさびしいし……。

005 ノーバディーとの初戦闘（後書き）

黒

「というわけで「ノーバディーとの初戦闘」でした」

刻

「いやちよつと待て、俺これからこんなスプラッタな目に合わないといけないのか？」

黒

「しょうがないじゃん、設定上こうなるんだから。」

刻

「はぁー。そういやお前デバイスの案って作ってたのか？」

黒

「お前が非人格型アームドデバイスとインテリジェントデバイスとユニゾンデバイスを一つずつ持つって言う設定だけけど？
変更する可能性大だけど。」

刻

「それでいいのか作者ー！」

黒

「まあ速攻で作ります
ではこんな駄作を呼んでくれた皆様に精一杯の感謝を」

刻

「リリなのの人気に乗っかっているせいだと思いますがpV200

00を超えてました」

黒

「アンケートはまだまだ募集中です内容は目次のトップにある」お知らせ」で！」

刻

「次回「第十四^{アルマ}」世界」でまた会いましょう」

006 第十四【世界】（アルマ）（前書き）

旧約2800字 今回4885字
むっちゃ増えました

後投稿遅れてすみません。

あまりに訂正したいところが多かったんで、いつそのこと全部書き直す
ことにしたんです。

戦闘描写、前よりは良くなったかな？

8/24 話の内容変更しました。

具体的に言っと刻のこの時点のレベルを大幅ダウン

006 第十四【世界】（アルマ）

「ガアアアア………ッッ！ ブファ……ゴフ……」

刻は蹴りをもろに食らい、地面をバウンドしつつ何百メートルも吹き飛ばされ吐血する

アバラが何本かいかれ内臓のいくつかもつぶれた気配がしたが、それは瞬く間に治癒されて行くのを感じる

「そんなのじゃあすぐに死ぬわよ！ さあ、早く立ちなさい！」

そんな刻を見据えアルシエは叫んだ

回想

Side 刻

あの後基地にこもって武器・魔法開発したり修業したりして、何とかデプトは普通に倒せるようになりました。

でもまだイクスト以上のレベルのやつには会っていません。

カルマに聞いたらイクストはマスターマインドから生まれる上、中々生まれることはないので数はほかのやつらよりも圧倒的に少ないとのこと。

ま、当たり前か。

それに来てくれない方がこっちも嬉しいし。

まだ勝てる自信全くないからな！！！！

デバイス？もちろん作りましたよ。

まずアームドデバイス「エア」

いやね、乖離剣エアせっかく改造するならどうせならデバイス化してしまえっと思っただけ色々改造してたらこうなりました。

俺の全快でも耐えられるのを前提にして改造してたら……、も

のすごく凶悪なデバイスになりました。

どれくらいって？

魔力流しながら振ると次元が切れて、10%ぐらいの『天地乖離す開闢の星』^{エヌマ・エリシュ}で次元震が起こるくらい。

そんで魔法強化機能付き、大体倍率×10カードリッジ装填でもつとアップ。

ちなみに処理に必要な分だけの最低限の人工知能は搭載しています。

いやだってね、このデバイス普段から持ち歩くわけにはいかないじゃないん。

完全にそこのロストログイアクラス超えてるし。

普段絶対使い道がない!!!!!!

後作ったのは、ユニゾンデバイス（ソニア）

外装姿は大人のC・C・

小型は子供の妖精のような姿。

処理能力はと言うと・・・・・・・・管理局にあるスパコン数百万台分・

と聞いたやつ。

俺は自重はしません！！！！生き残るためなら！

んで、ノーバディーとの初戦闘から大体半年が経ったころ。

カルマから念派が届いた

（お前、今時間あるか？）

（ああ。大丈夫だけど？）

（んじゃあ、第十四【世界】（アルマ）にある基地の座標を送るか
らちょっと行って来い。）

（？ん、ああ分かった・・・・・・・・）

ってなわけで、第十四【世界】（アルマ）の守護者の基地に来た俺。

ソニアはお留守番してもらっています。

そして……、

「あなたが新しい【守護者】の第十三柱ね。……小さな子供ね……。」

「いや確か精神は十歳とチヨイぐらいだっただってカルマの野郎が言っただぞ。少なくとも俺の世界じゃすでに働いている奴もいるんだが。」

「それでも十分子供じゃない……。まあ、でもなったものはどうしようもないわね。」

俺の目の前に黒の髪を腰の少し上ぐらいまで伸ばした、青い目の二十代後半ぐらいのお姉さんと、茶髪で明るい茶色の目の……。ぶつちやけB L C K C A T のトレインな人がいる。

あ、こっちに来た

「こんにちは、私は【守護者】第十四柱 アルシェ＝ブライト。」

二つ名は『夜天に舞う黒姫』よ。そしてこっちはグレン」

「よ、俺は第七【世界】（エブナント）の守護者グレン＝ブルーム
フィールドだ。ちなみに二つ名は『ノクターンオブディクス闇光』だな。」

「アルシエさんにグレンさんですね。僕は仁神 刻と言います【
守護者】第十三柱を担当させてもらっています。．．．．．
．．．．．ところで二つ名って何ですか？」

「ああ、俺たちのことを表したやつさ。ま、コードネームみたい
なもんだ。お前の分も後で考えてやるよ。」

「はあ．．．．．」

この人達は皆、中二病患者なのだろうか？

特にアルシエさんのが痛い

「さて早速だけどテストを受けてもらおうから。」

アルシエさんがいきなり良く分からないことを言い出した

「はあ．．．．．ってテスト!?!」

「そ。あ、でも内容は簡単よ私と模擬戦するだけだから。」
「あ、その……分かりました。」

いかん、話が急に進みすぎてよく分からない。
まあとりあえずこの人と戦って勝てばいいのかな？

「さっ、始めるわよ。」

まあとりあえず、模擬戦だろうからそんなに危険じゃあ、そうだ
？……ん？

「私の二つ名、痛いって思ったでしょ？」

アルシエさんが笑顔で話しかけて来た。

……でも……目が……目が……！

「ちょっ！！グレンさ（サツ）目をそらさないでくださいー！？」
「さあ、地獄の渡し賃の貯蔵は十分？」

ヤバ………おれ死んだ？

そうして話は冒頭に戻る。

「チイイ!!」

ダダダダダ

俺が二丁のジャツジメントで弾幕を張る

「あまい!！」

サツ ガガガガガガ

しかしアルシエはそれを難なく避けこちらに疾走する

「ツク詠唱破棄、魔法の射手、サギタ・マギセリエス連弾・氷の120矢」クラキアーリス「雷の暴風」ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス

俺は「氷の120矢」クラキアーリスで牽制し「雷の暴風」ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンスで狙い撃つがそれも難なくかわされ

「はああ」
「くっ!」

瞬く間に距離を詰められてしまう。

アルシエのクナイを刻は銃身で弾くが、その間にアルシエは残りの距離を一気に詰め、手に持ったわき差しのような小刀で銃を分断し

「ぐあああああ」

俺のわき腹に容赦ない蹴りを叩きこむ。

刻は吹き飛ぶが、体勢を立て直しつつきりもみで攻撃するがアルシエはそれも難なくかわし俺から距離を取る

タツ………ヒュ

地面に足がついた次の一瞬で、地を思いっきり蹴り、剣を創りつつ瞬歩でアルシエに突撃する
しかしアルシエはそれに反応し見事なカウンターで剣ごと刻を切り裂き吹っ飛ばす

「ぐ………はあ………はあ………クソ……！」

戦い始めてから何十回目になるか分からない即死クラスの傷を負い、恐ろしい速さで治癒されるが、その痛みにうめきながら刻はアルシエをにらみつける

アルシエは同じ場所にとどまっており俺の一挙一動を注意深く見ていた

(くそ………実力が違いすぎる。俺に合わせて戦闘方法を次々変え、戦術を組みなおして対応してくるせいでちっとも攻撃が当たらねえ。しかも、かなりの威力で反撃して来やがる！)

「これであなたは154回敗北。もうやめましょうか？」

(だが……)

「ま……まだ……もう一度だ!!」

「別にいいわよ……じゃあ……はあああー
ー」

そして刻は再びアルシエと攻防を始める

だがまた刻が押され始め、そしてアルシエの価値化と思えたとき

(此処だ!!!)

「ツアアア!!!」

「つつ!・・・」

アルシエの行動パターンをできるだけ分析した刻は、わずかな隙を見つけた!!!

アルシエはとどめを刺そうとするといつもより大きな動きを見せる。刻はそこをついた!

だが

「つく!!!」

当りが浅かったうえ、威力をほとんど殺されてしまった。

しかもそのままアルシエは一気に俺から距離を放し完全に態勢を立て直してしまう

(くそ・・・絶対こんなチャンスは二度と与えてくれないぞ・・・)

歯噛みする刻、その時

パンー！！

「ハイ、そこまで！！」

グレンが手を叩いて試験終了の合図を発した

アルシエは構えをやめるが刻は訳が分からず呆然とする

そんな刻を眼の端に二人は話し合う

「どうだった？」

「まだまだだけど、最後までクリーンヒットもらっちゃったわね。合格でいいわよ。あなたは？」

「未熟なところは上げてたらきりないけど……期待は十分できそうさ。俺も合格と。」

そして二人は刻の方へ向かい

「よし。刻、お前は合格だ。それじゃ、お前にかけてあったリミッター全部解除するぞ。」

グレンがそんなことを言った

「あの、合かk・・・ってリミッター！！　なにそれ！？」

刻は混乱しつつ叫ぶ

「ああ、お前にはリミッターが掛けられててせいぜい四割ぐらいまでしか力が出せないようになってたんだ。」

「なんで！！　そんなんだったら最初から解除してくれてたら楽だったのに！！」

「主な理由は、力になれるためだな。俺たちがもらった力は何んでもなく大きいんだ。暴走なんかさせたら目も当てられない状態になってしまう。だからある程度力を自由に使えるようにしておかないといけない。後もう一つはさっきお前が言ったことだ。」

突然グレンが殺気を刻に放ちはじめた！

刻は脚が恐怖でくすんで動けなくなる！！

「え・・・？」

「お前さっき言っただろ『最初から解除してくれてたら楽だったのに』ってな。おごるなよ。確かに俺たちはとんでもない力をもらった、だが敵はとてつもなく強い。」

実際お前の前の十三柱はおれたちの中で二番目に強かった。だが負けて死んだんだ！！

『ただ強い力を』なんて甘い考えをしてたらすぐに死ぬぞ！！！！』

グレンが最後には怒鳴るように言ってきた

「す、すみませんでした。」

俺の様子を見てっグレンが殺気を納める
どうやら感傷的になっていたらしく、グレンはぼつの悪そつに頬を
かいた

「いや、わかったならいい。俺も少し熱くなりすぎた。でもこ
れだけは心に刻んでおいてくれ。」
「分かりました。」

「よし……じゃあやるぞアルシエ」
「分かったわ」

そしてグレンとアルシエがこちらに手を伸ばすと俺の周りに魔法陣
を展開させた

俺の中で何かが外れていくような感覚がする

「・・・・・・・・・・よし、これでリミッターは全部解除したぞ」

「・・・・・・・・・・下手に使えば暴れそうな力・・・・・・・・なるほど、かえったらすぐに修行して力をつけます！」

「ああ。あ、そうだ、少し考えておいてくれ。俺たちは戦うために力を持った、だが力は戦うためだけのものではない。これを戦い以外で生かすも殺すも俺たち次第だ。」

「・・・・・・・・・・分かりました」

俺の言葉にグレンがうなづく

「さてと、それじゃあそろそろお別れだ。俺の基地の位置情報を渡しておこう。おまえのは？」

「あ、これです。」

「それじゃあ交換しましょ」

俺達はお互いに基地の座標を教え合った

「んじゃ、いつでも俺の【世界】に来てくれ歓迎するぞ。その代わり俺もたまにお邪魔するがな。」

「私の方もね。」

「ああ、留守にすることの方が多いかもしれませんが待ってますよ。んじゃあまた。」

そして俺は自分の【世界】に帰って行った。

006 第十四【世界】（アルマ）（後書き）

刻

「まってるよ……。すぐに追いついてやる！……！」

黒

「おう、がんばりな。」

黒

「さてアンケートですが「基地の概要」の募集は5/2までとさせていただきます。」

刻

「今のとこくれたのは白狐様だけですね。」

黒

「白狐様ありがとうございます。あなたが私たちに感想をくれた最初で今のところ唯一のお方です。」

刻

「ちなみにほかのアンケートは5月末ぐらいに締め切ります。では、この作品を読んでくださった皆様に心からの感謝を」

黒

「次回あのキャラと遭遇します。お楽しみに。」

ここまでのあとがきは前回の分をコピペしています
ここからが今回のあとがき

黒

「つかれた〜〜〜!!」

刻

「昨日のうちに投稿するんじゃないの？」

黒

「前書きでも言ったんだけどあまりに訂正したいところが多かったから書き直すことにしたんだ。

前回のやつからコピペしたのは最初の十行分ぐらいだよ……」

刻

「そうか……で、できはどうだ？」

黒

「少しだけ前回のやつに合わせて書きはしたけど、自分としては満足いく出来になったかな？」

此処までのやつもそうだったけど、見直してたらほんと自分の駄文さで恥ずかしかったから。」

ソニア

「まあ確かにずいぶん……て言うか無茶苦茶修正が加えら

れてるよね」

刻

「此処までの話、全部前回投稿してた分の二倍近くまでボリュームが増えたからな……」

黒

「ああ……まあ自分が成長したってことで楽観的に行きま
す。
出ないとやっていけん。」

刻

「まあ頑張れよ？此処からの章、前回のやつでさえ全て、3000
字超えてんだから」

黒

「まあ、ぼちぼち、できるだけ速やかにいきます。
一日一話が確実に。って気持ちで。」

刻

「がんばってくれ。」

ソニア

「では感謝コーナー

この作品をここまで読んでくれた皆様に心からの感謝を。
HAZUKI様、餡子入りパスタライス様、月光閃火様、紅雫様、
感想&アンケート投稿ありがとうございました。」

黒

「修正前から読んでくれた皆様、作者は自分が（現状満足いくまで）改良したつもりですがどうでしょうか、今回から読んでくれた皆様、この作品の流れはどうでしょう？」

改良点などがある場合は遠慮なく感想に書き込んでください。誤字なども、作者は気をつけているんですがあつたら報告をお願いします。

後できたら評価も」

刻・ソニア・黒

「「「これからもよろしくお願いします！」「」「」

007 予想外の遭遇（前書き）

又時間が飛びます。

今回の修正結果「約750字増加」

007 予想外の遭遇

あの後おれは、必死に修業し、七割ぐらいまでなら（ギリギリだが）力を制御して解放できるようになった。

それによってノーバディーを倒す効率も上がりました。

スプラッタなのにも慣れましたよ。

全くなれたくなんかなかったけどさ……。

ああ、そうだ。

あとあの後、第五【世界】（トーラット）の守護者メリエル・モアとも会いました。

理由は俺の能力の掌握レベルを自分も確かめてみたいからちょっとこっちの基地に来てって呼ばれたから。

但しこっちのテストでは、怪しい機械に囲まれた部屋で言われたと

おりに能力を発動するだけだったけど。

ちなみにこの人の二つ名は『真実の探究者』とのこと。
理由はそのまんま。

アカシックレコードがあるから分らないことはないんじゃないかって聞いたら「世の中には教えてもらうことは不可能であり、自分で答えを見つけるしかない問題や、他人と自分とは違う正解にたどり着く問題が多数あるのだよ。」

「……まあ一番の理由は私が考えるのが好きだからだが、
」といわれた。

ちなみに姿は深紅の髪をポニーテールにした緑の目の中学生ぐらいの女の子でした。

だがここで（やや想像はしてたが）驚愕の真実、俺が学校は行かないのかといったことを聞いたら、自分はこの姿が気に入ってるからこうしてるだけ。

実際は5000歳をとうに超えている。と言われてびっくりした。

……その後、俺以外の【守護者】は全員最低でも4ケタを超えていると言われてさらに驚いたが……。

・ ・ ・ ・ ・ ンで、第十四【世界】（アルマ）に行ってから三カ月が経とうとしていたころ

「っ、ノーバディーの気配！！
ついに地球にも表れやがったか！！」

で、そこで現場に行き結界はって敵を殲滅したのは良かったんだけどさ・・・。

「君はいつたい何者だ？」

なぜか士朗さんが現場のすぐ近くについて、俺の戦う姿見られてしま
ったんだよこれが

あはははは・・・・・・・・orz。

S i d e 士朗

私は仕事を終わらせ帰ろうとしていたところいきなりどこからとも
なく現れた（化け物）という言葉しか思いつかないようなやつらに
遭遇した。

どうしようかと近くに潜んで考えていたら、いきなり黒色のレーザー

—のようなものがやつらに降り注ぎ、
そのすぐ後、小さな影がやつらに飛び込んでいき、やつらをものす
ごい勢いで殲滅していった。

しかも、よく見たらあの子はいつか翠屋に来た子供じゃあないか。

なんであんな小さい子がこんなところに。

ここは中国なんだが……。

そんなことを考えているうちに、あの子はほとんどのやつらをかた
ずけてしまった

………終わったようだな。

あの子が帰ろうとしていたので私はすぐに飛び出し話しかけた。

「君はいったい何者だ？」

S i d e 刻

どうしようか、みられたかな？

・・・・・・・・絶対見られたよな・・・・・・・・。

「どこから見てました？」

「君がアイツラの上空から砲撃みたいなのを叩きこんで、突っ込んでいったところだな。」

つまり最初からだな・・・・・・・・。

「で・・・・、君はいつたい何者なんだ？」

「（刻、どじするの？）」「

どうするのかソニアが俺に聞いてくる
はあ……………とりあえず……………。

カルマに聞くか

そう結論づけカルマに通信（念波）をつなぐ

（カルマー）

（なんだ？）

（わりい。一般人（たぶん）に見つかった。）

（お前相手を一般人として見てないな……………）

いや……………だってなあ……………？

俺ほどではないとはいえ、こいつらも軽く人外だろ？

（どうする？説明しても大丈夫？）

（その【世界】の担当はお前だ。【世界】を壊さない限りは自由に
していいぞ。）

（分かった。ありがとう。）

カルマのやつも俺の自由にしているって言うてるし……
じゃ、適当に説明しますか。

刻「分かりました、とりあえず説明します。僕は仁神 刻【守護者】の一人です。」

S i d e 士朗

彼は私が質問した後、少しの間黙っていたかと思うと……

「……僕は仁神 刻、【守護者】の一人です。」

そう彼は言った。

「そうか……。私はt(高町 士朗……ですよね。御神の剣士の。)っ知っているのか!!」

私は思わず戦闘隊形をとる。

だが彼はそれを歯牙にかけた様子も無くはなす

「べつに、最初翠屋で会った時、俺を不必要な位観察してたでしょう……。」

少し気になって調べたんです……。

ああ、そう構えないでください別に敵対する気はないんで。

僕が知ってるのは、後はあなたの家族構成と御神の大まかなことぐらいます。」

「家族に手をd(さっき言ったはずです。敵対する気はないと……。まあそちらから攻敵対行動を取って来るならその限りではありませんが……。(ギロツ)」

そう言っつてとんでもない殺気を放つてきた。
こんな子供がなんて殺気を放つんだ……
思わず身震いしてしまったぞ

S i d e 刻

士朗さんに軽く殺気を放つたら驚いていたようだ（表情には出さな
かったけど。）

「分かった。すまなかつたな。
ところで【守護者】とは何だ？」

「いわゆる、裏の組織のひとつですよ。」

まちがってないよね。

「そんな組織聞いたことないが。」

まあ、そうだろうな

ってか聞いたことあっても、その組織は絶対俺達とは何の関係も無い

「それは、あなたがまだ表の方にいるからです。

まあ裏の奥の世界でも僕たちのことを知っているひとはほとんど居ないでしょうけど。」

「これでも私はかなり深いところまで知っているつもりなんだが」

士朗さんが怪訝そうな顔をして言う

「魔法って知ってます？（馬鹿にしてるのか？）

すみません訂正します。

魔法が本当に存在するって知ってますか？

詠唱型でもデバイス使用型でも調和式でもなんでも良いんで。」

「いや……。知らないな。」

「あなたが知っているのはその程度の裏つてことですよ。」

たとえば……。

ソニア、ユニゾンアウト。(俺の話に合わせてくれ。)

ぴか!!

「こんばんわ。

私は刻のユニゾン兼インテリジェントデバイス、ソニアです。(わかった。)

俺はソニアとのユニゾンを解く

士朗さんは目を見開いていた

……まあいきなり女の子が俺がら出てきたらそんな反応もするか……

「「じついつのとかですね。」

「それにあなたが最初に見た黒い砲撃、あれは刻がはなった魔力砲撃です」

「そうなのか……君が倒していたやつらは？」

「あれはノーバディーという奴らです。

どんな奴らなのかと言われてもこっちもよく分からないんで割愛させていただきます。

とりあえず言えるのは、あいつらは【世界】を壊すということですね。」

「ちなみにあいつらを倒すのを生業にするのが刻たち【守護者】です。」

「そうだったのか。それにしても君みたいなちいさな子供までこんな世界を・・・いや、私も知らないような裏の世界に住んでいるなんて・・・。」

士朗さんが複雑そうな顔をする

心配してくれるのはうれしいが・・・正直その心配はきゆだ俺は絶対に質量兵器と気では死なないし、裏の世界で生きる覚悟もとつくにできている

・・・まあ、こんなこと言うわけにもいかないんで、

「なりふり構っていられないんですよ。構成人数なんか僕を入れてたった十四人です。」

「少なすぎないか?・・・いや・・・そこまで裏の組織なのか・・・。」

何かかつてに想像膨らまされてるな……まあこっちにしては
好都合だけど

「まあ、想像にお任せしますよ。っで、とりあえず僕はこのあたり
の世界（というか【世界】）を担当しているんです。」

「ん？世界？」

「ええ世界です。ここ以外にもたくさん世界はありますよ。」

「一面水の世界とか。砂漠だけの世界とか。
次元世界とか呼んでいますね管理局は」

「管理局とは？」

「やば……ばらし過ぎたか？」

「……まあここまで来たら言うか。」

「他のやつには言わないよう頼むばいいんだし」

「そう言った次元世界を管理するとか言っている大組織ですよ。」

「ちなみにここは第九十七管理外世界「地球」らしいですよ。」

「そんなのがあるのか。本当に私は世界の一部しか知らなかったのだな。」

いや〜〜そんな悲観しなくても良いと思うぞ？

「いえ、こんなの普通裏の人間だって知りませんから。さて、これで十分ですか？」

「ああ、すまなかつたね。」

できればまた、翠屋に来てくれ。桃子もあいたがっていたよ。そうだ、できれば組手もしてくれないか？」

「……やっぱ士朗さんってバトルマニアだな。いきなり良い笑顔出したよ……」

「はは、気分が乗れば伺いますよ。」

あ、僕たちのことは（他言無用だろ？分かっているさ）すみません、ありがとうございます。

では僕達は、転移魔法で帰るんでさようなら。」

「また。」

そして僕達は士朗さんと別れた。

S i d e 士朗

「……………」

では僕達は、転移魔法で帰るんで。

さようなら。」

そう言っつて彼らは私の目の前から消えた。

魔法か……………。

私知らないようなことはまだまだあるのだな……………。

ちよつどいい、ここらを切に私は裏の世界から出るとするかな。

私には翠屋という場所ができたのだし……。

S i d e
刻

まさか、原作主要キャラよりも先に士朗さんと知り合いになるとは
な……。

しかも魔法のこととか教えてしまったし…。

まあ、黙っててもらおうように頼んどいたから大丈夫かな…。

007 予想外の遭遇（後書き）

黒

「というわけで「予想外の遭遇」でした。」

刻

「士朗さんとか……。」

黒

「原作主人公クラスのキャラとは言ってないぞ俺は。」

刻

「まあ、初遭遇とも言ってはなかったけどさ。」

黒

「それになのはどのイベントはどうしようか本当に悩んでるんだよね。」

「なのははユーのとくつつけるつもりだし。」

刻

「そんなのバラしていいの？」

「そっぴゃおれは？」

黒

「それ以外のキャラとのハーレム予定だけど？なにか？」

刻

「いや……もういい。」

黒 「ではこんな作品を読んでくださった皆様に心からの感謝を。」

刻

「次回は？」

黒

「ぶつちやけまだ未定。
でも確実に一年は飛ぶ。」

刻

「今からそれで大丈夫かよ……。」

黒

「大丈夫。A'sまでの超大まかな流れは決まってるから。
そこまでは確実に書ける。」

刻

「さいですか……。」

此処までが旧verのあとがき

此処からが今回のあとがきです

黒 「今回はあまり修正するところができなかった……」

ソニア

「でも七百字以上増えたんだね……本文結局4000字超えたし……」

黒

「そんだけ描写とかが屑だったんだよ……
……元の文なんか会話ばっかだったんだから……
でも直したけどまだ会話ばっかなんだよな……もう少し描写入
れたいんだけど……うまく書けない。」

刻

「まあ……そのうち気が向いたらまた挑戦すればいい。
では感謝コーナーこの作品を読んでくれあ皆様に心からの感謝を」

黒

「HAZUKI様……出演ですか……今は少し忙しいんですけど
よつと難しいですね……
でも時間ができたら書いてみます!!」

刻

「他の皆様も一言でもいいので感想をお願いします。
作者の原動力なんでやっば」

黒

「感想が来ないとなえるよね……」

刻

「お前さうつと恐ろしいこと言っつな……」

008 土朗さんのお見舞い（前書き）

修正前3000字ちょっと 修正後4882字

むっちゃ加筆と訂正しました。

ホント前の分と見比べると天と地の差……

やば……自分で言っただけ悲しくなってきた……

ブローグ？が大体1500字、それを思うとほんと……うん……
……そうだな……一話だけで1800字近く増加とか普通
ありえねえよ。

008 土朗さんのお見舞い

今私は血だまりの中に倒れている

任務の途中強敵に出会い大けがをってしまったのだ……

どうやら私の状態はかなりヤバいらしい……体の感覚が……

ふと私の目も前にかすんだ映像が映り始める……

そこに映っていたのは私の家族たちだった

（走馬灯か……なのは……恭也……美由希……桃子……）

闇に浸食されてかすれていく思考で考えたのは愛する家族の事

正直これは死んだかもしれない……みんな……すまない……

だんだんと暗闇が迫ってくる……体が寒くなってきた……

(くそ・・・・・・・・死にたくない・・・・・・・・まだ・・・・・・・・死にたくない・・・・・・・・)

ん、薬品のおい・・・・・・・・!？
私は生きているのか!!

「うつ」

そうして私が目をあけると・・・・・・・・。

「起きたか」

目の前に「ちらをのぞきこんでくる私の知っている子供の姿があった

008 土朗さんのお見舞い。(ついでになのはとの遭遇)

.....時は少し戻る

S i d e 刻

アルシエ達と会ってから半年後、久しぶりに地球に帰ってきた俺は
士朗さんに会いにソニアと翠屋に向かっていた

え？どういうことかって？

いいやあの後自分の仕事をしながら様々な次元世界を移りまわって
たんだよ。

【世界】中の裏組織をできるだけ味方につけておくためにさ。

理由は俺が未来に起こそうとしている計画を成功させるために必要
なプロセスだからだ。

ほかに、持っているカードをできるだけ多くするため。とか、

.....まあぶっちゃけるとこの発端は俺の、（閻組

織まとめてるってかっこよくない!!)とかいう馬鹿らしい思いつきなんだけどね。

それ言ったらソニアにあきれられた。

そんな顔するな、ため息をつくな、男として憧れるもんがあるんだよ。

俺だけかもしれないけどさ!!!!!!

ちなみに俺達は心を集めていた某機関員の姿で行動している。

んで、聞き分けの悪い奴らはおれが魔王式 O H A N A S I
(または説得という名の力による脅迫)をして言うときかせたり
している。

ただし、俺の考えている一線ってやつを超えてるやつらは問答無用
で殲滅してるけど。

そんなわけで裏の世界で俺は「黒衣の指導者」、ソニアは「漆黒の
魔女」、二人合わせたので「敵に回してはいけない者達」「人外姉
弟」とか言われています。

あとは・・・あ、そうだ俺の味方のやつらで『ライトヴァイス』っ

て組織作りしました。

みんなには。ある程度の犯罪までなら容認する代わりに何か重大なことがあるばこちらに情報を渡すこととこちらの要望にはできるだけ応じることを全員に徹底させた。

後は組織ごとにあつたりなかつたり……。 (発掘組織なら出た口ストギアならこちらに売ること。情報専門の組織ならこちらの依頼を最優先にすること、など。)

その代わりある程度のバックアップとかしてあげてるので支持率はかなり高いです。

s i d e E N D

カランカラン

「いらつしやい……あら、久しぶり。一年ぶりぐらいかしら？
会いたかったわよ。」

あら……そちらは？」

刻とソニアが翠屋に入るとカウンターにいた桃子が話しかけて来た。
心なしか少しやつれているように見える。

それにしても刻のことを覚えていたのか……。
コイツラ一度しか会ったことないのに。

「すみません。いろいろ忙しくて来る暇がなかったんです。
こちらは僕の姉のソニア。」

「こんにちはソニアと言います。」

質問に答える二人

桃子さんは「そう……」とほほ笑む

「あらあら、私は桃子。よろしくねソニアちゃん。それじゃあご注文は？」

「おれはシュークリーム一つ。あとミルクティーで。」

「私はチーズケーキとアイスコーヒーを下さい。」

「ありがとうございます。」

注文を取り商品を用意する桃子

そのふと思いついたように刻が話しかける

「そうだ。士朗さんはいますか？」

それを聞いた桃子さんは少し驚き・・・つらそうな顔をした

それを見、首をかしげる刻とソニア

「夫を知っているんですか？」

この言葉で、士朗さんはちゃんと約束を守ってくれたと確信する二人

「ええ、たまたま会って話す機会があったんですよ。その時またここに来るよう誘われていたんですが……結局、こんなに来るのが遅れてしまいました。」

それを聞き納得したようにうなづく桃子
しかし顔は相変わらず悲しそうだった

「そうだったんですか。」

「はい……。」

で、士朗さんは？」

桃子は俯いて答える

「今は入院しているんです。」

「「ええ!!」「」

それを聞き驚く二人、
そして刻は心の中で悔しがる。

そうだ……そんなイベントがあつたじゃないか!!

何で忘れてたんだ！！

・・・・・・・・と

「ええ、実は夫は少し危険な仕事をしてて・・・・・・・・。
実話大けがをしましてまって・・・・・・・・。
意識不明で入院中なんです。」

それを聞き顔を曇らせるソニア

刻は切り出す

「そうだったんですか・・・・・・・・。
・・・・・・・・土朗さんがいる病室を教えてくださいませんか？
後でお見舞いに行きたいんで。」

「・・・・・・・・ありがとう。」

そして刻たちは桃子から土朗さんの病室を教えてもらい
見舞いに行くことにした。

ただソニアは途中の公園で待つてると言つて途中で刻と別れたが・
・
・
・
刻が理由を聞くとなぜか今、余り会いたい気分で
はないとのこと

そして刻は士朗の病室にやつて来た

刻は士朗の寝ているベッドの横に立ち、見下ろす

それにしても、士朗の様子は本当にひどかった

士朗自身の格好もそうだが、周りにあるモニタリングなどの設備の
多さがそれをさらに物語っている

何で面会謝絶にしてないんだ？
おかしいだろ担当医師！！！！！！

……まあそのおかげで刻は士朗のいる病室にに楽に入ることができたんだけどさ……

とりあえず……。

「劣化版リジエネ！……んで後は気つけ薬と。」

刻は本当はケアルガあたりで一気に治したかったが、いきなり傷が治ってたら病院関係者に怪しまれてしまう。

なのでリジエネを、それも劣化させ使うことにした。
現場にいたら話は簡単だったのだが……

「うっ……」

……と、そんなことを刻が考えているうちに士朗がめをさました

「起きたか」

刻は白眼の応用で士朗の体を調べながら言う……一応もう大丈夫そうだが……

刻は白眼を解除する

「仁神か……ここは？」

士朗は体を起こそうとするがうまくいかないらしい

それを制し刻は答える

「ここは海鳴総合病院。
それにしても驚いたぞ。久しぶりに翠屋に行ったらお前が瀕死の傷を負って、意識不明の重体で入院中って聞いて。」

それを聞き士朗が顔を曇らせる
おそらく家族たちのことでも考えたのだろう

「そうか……すまないな……。」

「まあリジエネ……治療力促進魔法な。こいつをかけといたから一週間もあれば退院できるだろ。ほんとは完全回復魔法とか使いたいんだが、ここで使うわけにはいかないんだ。……すまないな。」

「いや、治療力促進魔法をかけてくれただけでもありがたいよ。ありがとう。」

「そうか。じゃあ俺はもう帰るよ。いつこつちに帰って来れるか分からないんだから無茶はするなよ（大丈夫さ）ん？」

「僕は今日限りで裏の世界から抜けるよ。」

それを聞き刻は少しだけ目を見開く

「……そうなのか？」

「ああ、まあ実はまえまえから考えていたことではあったんだがな。今回で決心がついたよ。」

これからは翠屋一筋でやるぞ。」

士朗はどこか吹っ切れたように言う

それを聞き刻はどこか微笑む

「そうか。じゃあ頑張ってくださいね。

じゃあ俺はこれで。」

「またどこかに行くのか？」

部屋を出て行こうとする刻の背中に士朗が話しかける

「ああ、やることがたくさんあるからな……。」

「仁神達も裏をやめる気はないのか？」

「それすると世界がやばいんでね。」

もはやノーバディー的にも闇組織的にも。

刻は少し裏の世界に介入し過ぎたせいで（裏の深いところで）有名になりすぎた

(もうここまで来たらひたすら深くまで落ちていくしかないんだ)

刻はそんなことを考えている表情も気配も全く出さずに思う。

「そうか」

「ああ、でも俺はけっこう楽しんでやってるんで心配無用ですよ。」

軽く笑いながら刻は士朗に言う

士朗はしばらくその表象を見続けたあとため息をついた

「……………なるほどな、だけど気をつけろよ。」

「大丈夫さ……………俺は本当の意味で殺されても死なない化け物だから。」

それと俺のことは刻でいいですよ。
じゃあな。」

そして刻は自嘲気味に笑いながら病室を後にした

少し複雑そうな表情をしながら刻は歩いていく

気配に敏感な人が見れば、今の彼からは様々な感情の詰まったオーラが漏れ出ているのが分かっただろう

そうこうしているうちに刻は公園の前に来た

「あ、刻こっちだよ〜〜〜」

ソニアの声が聞こえ、刻ははっとしたように表情をいつもように戻す。
だがすぐに、少しだけ表情を引きつらせた。

なぜならソニアが遊んでいたのは……なんか見覚えのある茶髪の子だったからだ

「ソニアお姉ちゃん、この人だれ？」

こちらに気づいた女の子がソニアに聞く

「刻よ。 士朗さんはどうだった？」

「ああ、あれなら一週間ぐらいで退院できさ（本当！！）えっと、君は？」

刻は途中で会話に飛び込んできたさっきの子の名前を聞く
まあ、答えは分かり切っているんだが……

「私は高町なのはだよ。
お父さんが大丈夫って本当？」

それを聞き刻は心の中で空を仰ぐ（ああ、やっぱり未来の魔王だよ。）と

「そっか俺は仁神刻。君の父さんって士朗さんのことかい？」

「そっだよー！」

「そっか。士朗さんなら大丈夫だよ。

あの人はちよつとした知り合いでね。さっき病室にお見舞いに行ってきたんだけど目を覚ましてたよ。」

「ほんとー!!！」

刻の報告を聞いた瞬間、なのはが満面の笑顔になり始める
心なしか目がきらきら輝き始めたようにも見える

「ああ、なのはちゃんもお見舞いに行つてあげたら？
そしたら士朗さん、きつとあつという間に良くなるよ。」

「うん！行つてくるのー!!！」

じゃあねソニアお姉ちゃん。

ありがとう、刻お兄ちゃん。」

「いや俺はたぶん君と同じど（タタタタ・・・）
・・・・・・・・・・・・・・・・わき目も振らず行つちやつたよ。」

刻の言葉を聞いた瞬間、お礼を言い全力で疾走するなのは

あっという間に遠ざかっていき、もう姿が見えない……

こいつ本当に運動音痴なのか？

あの足なら世界狙えるんじゃないのか？

と刻がふと疑問に思ったのも致し方がないだろう

と、そこへソニアが刻の隣に来て言う

「嬉しかったんだよ。

隠してるつもりみえたかったが、落ち込んでたのは明らかだったから。」

「ま、そりゃそうか。」

刻はそれにならず

「所でお姉さん口調で接してたのか？いつもと違うぞ？」

「そりゃあね、だって見た目私あの子よりずっと年上だし。あ、変だった？」

「んや。別に違和感はなかったが？」

そして刻とソニアと共に公園を後にした。

『リジエネ』

FFより。数秒ごとに体力回復

008 土朗さんのお見舞い（後書き）

黒

「ふう、なんとか今日中に書き終わられた。」

刻

「おつかれさま。にしてもこのタイトルひどくない？」

黒

「実際お前なのはとあんまり話してないだろ。」

刻

「まあそれもそうか。」

黒

「ではこの作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。
後二・三話で無印に入ります。」

刻

「次回「ハヤテとの遭遇」でまた会いましょう。
なのはとは扱いが違うな。」

黒

「お前のハーレム入り確定の人物だk（だからそういうの此処で言うな！！）」

此処までが修正前のあとがき

此処からが修正後のあとがきです

黒

「燃え尽きた……燃え尽きたぜ……」

刻

「じゃあ次も頑張れよ？」

黒

「お前今のおれの言葉聞いてた!？」

刻

「HAZUKI様、バルディッシュ様、ルファイト様、K(21)様、兵隊様、和様から感想が来たぞ？」

黒

「よし!!頑張ります!!」

ソニア

「あはは・・・それにしても私の名前変えたんだね」

黒

「リーゼアリアとかぶるからな・・・ちよつど書き直してるし、良かったかなと。」

まあ、和様から指摘もらうまでそんなこと忘れてただけだね。

さて、では感謝コーナーこの作品を読んできた皆様に心からの感謝を

p.vは二万五千を超えました、うれしい限りです!!」

「さて・・・次も頑張れよ?」

「分かってるよ・・・今度は何文字増えるんだろ?」

「さあ・・・修正前の分はクズだからな・・・」

「グハ!!・・・そんなこと言っな!!」

「普通修正で1800字も増えないと思うぞ?」

これちよつと短めの一話分あるじゃん?

実際プロローグ?だって1500字ぐらいだろ?」

「ちよつ・・・」

009 (たぶん)何でもない日常(前書き)

前半と後半で少し書き方が違います

刻がなのはに会ってからさらに、二年後

ある高層マンションの頂上に二つの人影が現れる

「聞け、皆のもの………私は海鳴に帰ってきたぞ
!」

「なにわざわざ両手広げて叫んでるのよ、刻……。
でもほんと久しぶりね」

自分の帰還を高らかに宣言する刻、それを見ているのは隣にいるソ
ニア以外誰一人としていないが

まあ、ネタに走ってはいるが彼らが地球に帰ってきて喜んでい
るのは本当だ。

理由はある。

この二年間、刻は未来に備え着実に準備を進めていた。

この間に彼が力を入れたのは二つ。

一つ目はライトヴァイスのさらなる躍進、こちらの理由は言わなくても分かるだろう。

もうひとつは、企業「ビハインド」設立と、その成長である。

これは本来の目的のほかに刻の金の出所としての役割も果たしている。

さて・・・特徴だが、

刻はライトヴァイスの中で、純粋に研究したいとかいった裏組織を全員、研究・開発部門に入社させた。（させたと言っても、そこには全くいざこざは無く、むしろ全員もろ手を挙げ、刻に感謝しながら嬉々として入社した。）

金がなかったからといった理由で裏の世界に入ったやつらも従業員

員として入社、皆さん涙流して喜んでました。

うん、不景気って怖いね！！

しかも彼らは裏の世界を生き抜いてき、しかも刻が目を付けた強者達。

客のニーズに着実にこたえる商品を開発、おかげで「ビハインド」は新参の企業としては異様を通り越して異常な売り上げを記録。

そして「ビハインド」は刻の想像以上の速さで成長し、あつという間に次元世界をいくつもまたにかける超巨大総合企業になった。

ちなみに彼らが喜んで入社した理由は簡単だ、彼らはひたすら研究がしたかったのである。

だが、研究費がない、材料が普通では手に入らない、研究するには様々な許可を取らなくてはいけない……ってか申請しても絶対させてもらえない、e t c。

といった理由で裏の世界で生きるようになったのがほとんどなのである。

そこで「ビハインド」は、研究などは 管理局が禁止している内容でさえも 申請をすればよほどのものでない限りすんなり通り、研究費なども破格の条件で捻出し、研究室、材料なども申請すればあらゆる手を使い用意する、e t c。

といったかなりの優遇措置を設けたからだ。

もちろん管理局の指定する違法研究の場合は特殊な場所で行わせることになっているのだが。

もうひとつ「ビハインド」には特徴がある。

この会社、情報管理、漏洩防止、一線を越えた犯罪行為の監視を異常なほど徹底して行っている。

『組織は腐る』という言葉が日本にはある。
だが、この会社でそれを起こすわけにはいかない。

対策の例としては、
一部のセキュリティは刻が直々に開発し、アルハザードの技術さえも超えている。
といった内容や、

主要な部署は、刻が徹底的に調査した見込んだ者達しか送りこんでいない。しかも彼らには絶対に裏切ら無いように簡単な呪をかけておくという徹底ぶりを行っている。

万が一を起こさないように行ったこの措置を聞けば、刻の覚悟のほどが分かるだろう。

そして、そのような活動をしていたため、ついにこの二年間、一回たりとも彼らは地球に帰って来なかったのだ！！

海鳴に帰って来た刻の喜びは推して知るべしだろう！！

「……でもな………ずっと濃い生活していたせいか、それとも意外とあの土朗さんの状況がショッキングだったのか分かんないけど。」

俺が鳴海を離れたのが昨日のように思えるんだよな。」

「メタネタはやめた方がいいわよ一刻。」

「……すみません、私の解説覆すようなこと言っの、
やめてください」

「主人公にも平凡な日々はあります（たぶん、きっと）」

「にしても、電気とかは止められていないだろうけど、絶対埃まみれだぞ俺の実家」

「しっかり掃除しないとねー少なくとも9年はこっちにすむんだから。」

そう、刻はこれからは、あちこち飛び回りながらの生活ではなく、再び海鳴の実家を拠点として活動を行うのだ。

理由？もちろん私立聖祥大附属小学校に入学するためです。

入試？こいつなら余裕でしょ。

ってなわけで、その数日後……

刻は私立聖祥大附属小学校の入試を受けた。

ん？どつせ満点だろって？

さあ……？

刻々、そこんとこどうなんだ？

「ふ、それはリンディー茶ぐらい甘いよワトソン（即死レベルってことですね、分かります）k
……途中で口はさまないでほしいな、ま、とりあえず、ジヤスト88%だよ。」

へえ〜〜〜なんで？

「いやだつてさ、満点なんかとつたら入学式で読む新入生代表の辞考えないといけないじゃん。
そんなめんどくさいこと俺はしたくない。」

あ〜〜なるほどね……」それにしてもさ、」んっどつした？

「あれ絶対小学校の入試問題じゃないって。」

なんか変な問題でもあったわけ？

「いやそんなんじゃないかなかったんだけどさ、例えば数学で二ケタ同士の掛け算やらされたよ。」

「あれって確か小学二年か三年生で習うだろ？」

「そっぴやそっぴだね、でも進学校なんだからその位なら出すでしょ？」

「そうかもしれないけどさ……“英語”ってのもあったんだよ、なんでさ!？」

「それ習うの中学校からだろ!?!?!」

「何でこんな問題あるんだよ。」

「ふむ……でもさ……」

「なのはやつ、普通にレイジングハートと会話してただろ？」

「知ってる人はやっぱ知ってるんだろ？」

「まあとりあえず、なのははこの学校に合格できるほどの知識があったんだ。」

「これならレイジングハートと話せてたのも納得ってことにしとけ。」

「まあ……、そう言うことにしとくか。」

「でもさ、家族構成からそうだったけど、絶対なのはって“普通の”」

女の子じゃないよな。」

そりゃそうだろ、あいつが普通だったら世間一般の普通の女の子って何さ？

みんななのはみたいなのだったら、正直怖いよ？

「同感だな「ねえ刻」ん？どうしたソニア？」

「さっきから何、独り言言ってるの？」

「何だよ独り言って、俺はさっきまで……あれ？誰と話してたんだ？」

「刻……疲れてるんだね……少し休もつか？」

「そんな優しい眼差しを俺に向けないでくれ、ソニア!!」

.....

.....

そして入学式

たとえ進学校だろうと・・・いやこついう所こそ、『大切なお話を何十分も時には一時間以上校長や教頭たちはしてくれがあるのである。

そのお話がなされている間、刻は・・・ずっと寝てました。

いやほんと、最初の五分後には夢の国に行ってしまった

あ、ちなみにソニアは刻が学校に行っている間はお留守番。万が一の時のために、だそうです。

Side 不真面目だが知識はすでに大学教授真つ青なほどあるN
さん

。 何でコイツラの話って必ず毎回長いんだよ
。 簡単にお話ししますって何処が簡単？
ホントこいつらの感覚が分かんねえ。

にしても、掲示板見たけどなのはとはクラスは違ったな。
ま、そのうち何らかの形で会うことにはなるだろうけどな

にしても眠い うん、寝よ、それが良い、そうしよう。

Side 将来魔砲少女、現在（自称）普通の小学生Tさん

今日は待ちに待った入学式の日です。

今は校長先生のお話の途中ですけど、（スースー）後ろの方で誰

かが入学式始まったぐらいからずっとねてるの・・・。

何か不真面目な人もいるみたいなの。

まあ気にしちゃダメなの。

友達いっぱい作れるかな？

・・・そう言えばあの時の人も入学してないかな？

お父さんにあの人達のこときいたけど、ちょっとした知り合いとしか教えてくれなかったの。

そんなことないと思うんだけどな。

でも何か事情があるみたいだからこれ以上は聞かないの。

S i d e E N D

- - - - -

- - - - -
- - - - -

入学式から数カ月後の昼休み

刻は今屋上に来ていた

S i d e
刻

「良い天気だな・・・
にしてもなんかどんどん時間が飛でるきがするよな・・・。」

(うるさいな、ネタがないんだよ。)

「いかん、何か幻聴が聞こえる・・・疲れてんのかな？
・・・昼寝でもしよ。」

ってなわけですらばらく寝て、教室に帰っていた途中、

「痛い？ でも大事な物を盗られちゃった人の心はもっともつと痛いんだよ？」

何か聞き覚えのあるセリフが俺のことは違う教室から聞こえてきました。

………これってあれだよな。

教室の中をのぞいてみると、案の定金髪と茶髪の二人が取っ組みあっている、そこから少し離れたところで紫の髪の女の子がおるおるしていました。

三人の友情フラグ発生イベントですね、分かります。本当にありがとうございます。

どうしよっかな………
二人の喧嘩を俺が止めると3人の親友フラグを叩き折りそんな気がするんだよな……。
でも見てしまった以上見て見ぬ振りもなんか気分悪いしな……。

そんな事を考えていたらおろおろしているすずかと目が合っていました。

んでその子がやってきて、

「あの、すいません二人を止めて下さい！」
って感じでよりもよって俺に仲介を頼んできやがった。

どうしよこれ？

「あ、あの………」

目の前には涙目で必死に訴えかけてくるすずか。
頼む、そんな潤んだ目で見つめてこないでくれ。

俺のSAN値が罪悪感とかでガリガリ削れていつてるから。

ああ、見て見ぬふりをするという選択肢は消滅しちゃったよ。

しかしどうにかしてすずか自身に止めさせないと後々困ったことになる。どうしようか」あの………。(グス……)

考え込んでいたらすずかがまじ泣きしそうになっていた。

頼む……！やめてくれ……！

あの二人以外の周りのやつらの殺気がやばいから……！
もう殺気だけで人殺せそうなくらい出してるから……！

「分かったからその表情やめてくれ……で、どうしてこうなっ
た？」

「え？」

涙目でことん、と首を傾げるすずか。

………SAN値に新たなダメージが発生。

もう俺の心臓が萌えてマツハになりそうです!!

「原因を教えてください。」

「そうしないと行動の起こし方がない。」

「ええっと……、私のカチューシャをバニングスさんが取り上げて返してくれなくて、そしたらそれを見た高町さんがバニングスさんを叩いちやっつてそのまま……。」

「えっと……（月村すずかです）月村さんね。」

月村さん、自分でちゃんと「嫌だ」とか「止めて」って言った？」

「え？」

俺の質問に疑問の声を上げるすずか

「……まあそんなとこだと思っただけだよ。」

「言っていないんだろ？」

「あ……うん。」

「ならハッキリと自分の意思を伝えな。」

「そうしないと今後も同じ様な事になるぜ。（で、でも）」

「……ああわかったよ！月村さんが言っただめだったら俺が止め

るから!！」

「わ、分かりました。」

そう言ってすずかは二人の方に歩いていき・・・

「やめてっ!！」

と大きな声で叫んだ

そしてそれに反応して、なのはとアリサは驚いたような表情で動きを止めた。

これなら大丈夫だな。

自分の出番はもうないと判断して俺は教室を後にした。

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

そして「あっ」、という間に放課後。

授業？

寝て、質問されたら起きて答える、また寝る、質問されたら起きて答える

以下無限ループって感じだったけど？

んで下校の準備をしていると、すずか達おなじみ三人組が俺のところに来てきた。

何かなのはが俺見た瞬間驚いた顔にかわったな……

「えっと……、仁神君、だよね（そうだけど？）よかった。

あ、あの、昼休みはありがとう。」

「どういたしまして。とはいっても俺はお前の相談に乗っただけだがな。」

解決したのはおまえ自身、だろ？」

「そんな事無いよ。仁神くんの後押しのおかげで止めれたんだから。」

「

いや、俺があの場合に居なくても自分で止めてたはずだぞ？

少なくとも原作ではそうだったし。

「これからは思った事ははっきり言いな。言葉にしないと相手に伝わらないからな。」

まあ、言葉じゃ相手に伝わらないこともあるんだけどな……………

「

うん！！分かった！！」

俺の忠告に力強くうなずくすずか

「おう……. そんじゃ俺はこれd)一緒に帰らない?」なに?」

「えっと、だめ……. かな…….」

すずかさん潤んだ目で上目遣いするのやめてください。

涙腺弱すぎんぞ!!

もう俺の残りライフはゼロよ!!!!!!

つてか、周りから(発生源は男限定で)殺気……. いや瘴気が!?

なんか「湖」とか「コンクリート」とか聞こえるんですけど!?

なに、犯行計画!?!、お前らただけ用意周到で行う気!?

……. そうだこれはきつと気のせいだ、よし無視しよう…….

(……. ……. コドモの武器使いまくりだな、すずか)

なんかつぶやきが聞こえる気がするがこれも無視しよう

「分かった、一緒に帰るから!!!
だから頼むから、その表情やめてくれ!!!」

その瞬間、満面の笑みになるわずか、
さっきまでの様子からの変化をずッと見てたから一層グツとくるも
のがあって.....

ほんと.....ドウニカナッテシマイソウデス。

いかん気を確かにもて!!!
素数を数えるんだ!!!

2 . 3 . 5 . 7 . 11 39111 . 3917 . 3919

よし落ち着いた

(この間思考約0.5秒)

「ありがとう！ あ、高町さんとバニングスさんも一緒なんだ」

「こんにちは、アリサ・バニングスよ。」

「そうか、俺は仁神 刻 よろしくなバニングス。
んで、高町とは久しぶりだな。」

俺の言葉にぴくっと肩を震わすのは

「やっぱり刻お兄ちゃん？」

「いや、だから俺はおまえと年齢変わんない……………って、
そっぴああのときお前、わき目も振らず走り去ってたな。」

「んーじゃあ……………、刻君？」

「ま、それならいいな。」

「高町さんと知り合いだったの？」

そんなやり取りをしていたら、さすがが話しかけて来た

……………なぜか少し不機嫌そうな顔をしている

「まあ、二年以上前に一度会ったつきりの中だけだな。」

「そんなんで二人ともよくお互いのこと覚えてたわね……。そんなに印象的な出会いだったの。」

あきれたような声を出すアリサ

「そんなことなかったと思うがな……。」

さっそろそろ帰ろうz（ピリリリ、ピリリリ）ん？、電話？

誰からだ？（カパッ）

着信『from カルマ』

……な、なんであいつから電話！！！

俺は急いでそれに出る

「おい、どうしゅ（第十【世界】（エニグレスト）でイクストが出て現した【守護者】第十柱ハウエル・ブランドルから応援要請が出ている。おまえも至急向かってくれ）っ！！！！
悪い用事ができた、俺は先に帰る。」

そうしてびっくりした様子の三人を残して俺は走り去った。

アリスちゃん私達と一緒に帰りたい人がいると言って隣のクラスに来てみたら、そこにはあの人とよく似た人がいた。

「……………そうか、俺は仁神 刻 よろしくなバニングス。んで、高町とは久しぶりだな。」

私のことをしってる、てことは。

「やっぱり刻お兄ちゃん？」

「いや、だから俺はおまえと年齢変わんない…って、そっぴやあのとときお前わき目も振らず走り去ってたな。」

刻お兄ちゃんの間違いないの。

そっか……………同い年だんだ……………

「んーじゃあ、刻君？」

「ま、それならいいな。」

「高町さんと知り合いだったの？」

月村ちゃんが途中で口を挟んで来たの……

……あれ？なんか不機嫌そう……なんで？

「二年以上前に一度会ったつきりの中だけだな。」

「そんなんで二人ともよくお互いのこと覚えてたわね……
そんなに印象的な出会いだっただけ？」

うん、あの日のことはよく覚えてる。

公園で泣いてた私とソニアお姉ちゃんが友達になってくれて、しかもお父さんが目を覚ましてくれた日……

「そんなことなかったと思うが……」

さっそろそろ帰ろうぞ（ピリリリ、ピリリリ）ん？、電話？

……おい、どうして……
……っ！！！！

悪い用事ができた、先に帰る。」

そう言って、急に顔色を変えた刻君はものすごい勢いで教室を出て行った。

S i d e ず ず か

高町さんと仁神さんはしりあいだったのね………。
何でかな………ちょっとうらやましい

それにしてもなにかたいへんなことでも起こったのかな？
最後のあの豹変は少しおかしかったな。

それに、なんだかあのいつしゅん私たち一族みたいな、普通でない人みたいなきがかすかにした気がしたけど……。

気のせいだったのかな？

S i d e アリサ

何だかかわった人だったわね。

なんて言ったらいいかわからなく表現できないけど、なにかを背負ってる、みたいなの？

それに最後の瞬間、あれって絶対緊急事態の連絡が突然来た、って感じの表情だったわね。

ちょっと気になるわね・・・・・・・・少し調べてみようかしら。

S i d e E N D

完全なる後付け設定

004話で言っていますが、刻は様々な加護により（そう言うて良いのか微妙ですが）、中身がとんでもないことになっています。

なぜかDNAにジェノバ細胞と一致する部分があったり、吸血鬼に連なる部分があったり、イノベイダー化してたり……といった感じですよ。

吸血の必要性などといったデメリットは無いそうですが……

まあ、とにかく、それに気付いた刻は速攻でそれを隠す措置をとりました。

そのため健康診断をしようが、血液検査をしようが、偽装された情報しか採取されません。

ですが感情の揺らぎで、自分の人外の気配が漏れだしてしまいます。

まあ普通は気付くことなんかないんですが、すずかは同じく人外だったからこそ気付けたと。

ちなみに同じ理由で、忍さんも分かります。

黒

「というわけで第009話でした」

刻

「で?」

黒

「ん?」

刻

「予告と題名全く違うじゃん。」

しかもハヤテの名前一度だって出てこないし!!--!」

黒

「いやほんとは今回中に出す予定だったんだよ。」

でもさ、A's 設定読み返してたらハヤテって休学中って設定だったんだよ。

ひよっとしたら推薦だったかもしれないけどさ、

このころはまだ歩けたかもしれないじゃん。

だから急遽ハヤテの登場を遅らせました。

後計算したらこれも入れて三話だね、無印に入るまであと。」

黒

「なるほどな。」

それにしてもやっとな印か。

本編に入るまでにこんなにかかった作家って居たっけ？」

黒

「さあ？それにリリなの書いてる作家多いからさ、かぶらないようにするのって結構大変なんだよ。だからいろいろと仕込んでおくわけ。」

刻

「ふーん。」

さて、この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。」

黒

「次回刻の二つ名が決まります」

刻

「では次回「イクスト」でまた会いましょう。」

此処までが修正前のあとがき

此処からが修正後のあとがきです

黒

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ソニア

「ねえ、なんで作者、膝抱えながら「パリは燃えているか」を聞いているの？」

刻

「ほっておいてやれ、軽く絶望してるんだ」

ソニア

「なにかあったの？」

刻

「・・・・今回の話、修正前は4437字あったんだけどな」

ソニア

「あ、結構あったんだね。」

刻

「ああ……で、何文字になったと思う?」

ソニア

「えっと……前は約3000字で1800字増えたから……
今回は2500字増えて7000字ぐらい?」

刻

「8258字だ」

ソニア

「は?」

刻

「だから8258字、4000字近く増えたんだよ……
文字も膨大だし、増えた割合も修正前のほぼ二倍ってことであつて
でるんだ。」

ソニア

「ああ……それはまた……」

黒

「うん……吊るう……」

刻

「ちよつ!」

ソニア

「刻！！マウントポジション！！」

刻

「分かってる！！」

黒

「離せ
！！」

「疲れたんだ！！もうゴールしたっていいだろー！！」

カルマ

「えー作者がご乱心なので俺たちが引き継ぎます」

アルシエ

「この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を」

グレン

「バルディッシュ様、ルファイト様、HAZUKI様、紅雲様、九尾様、感想と誤字の報告をありがとうございました。」

メリエル

「作者はこっちでどうかしとくんぞ。

「だが次の投稿ははたして今日中にできるのか微妙だ元の文章が3500字あるからな・・・。」

カルマ

「まあ、気長に待ってやってくれ、できるだけ早く完成させさせるから。」

010 イラスト（前書き）

今回の結果修正前3516字 修正後7184字

もはやなにも言いません、素直に喜ぶことにします。

あ、あと修正前からいくつか設定変えました

010 イクスト

Side ハウル

私は【守護者】第十柱 『ブラッディ・ミラー・ジュ紅き幻想』、ハウエル・ブランドル。
皆は私のことを愛称でハウルと呼ぶ。

まあ今はそんなことはどうでも良い。

今問題なのは……………

「くっ！！！！！」

応援はまだですか！！！！」

数年ぶりに私の担当の【世界】にイクストが現れたのですが、私ひとりでは倒すことができそうにないということなんです！！！！

あ、

「ぐあ、しまった！！！！」

さばききれなかった触手(?)の塊につかまってしまいました、

くそ、やばいですね!!!!!!

そう思っていたその時

私を握りしめていた触手(?)が次々と手リになっていった。

カルマから連絡を受けた刻はソニアを迎えに行きすぐに第十【世界】
（エニグレスト）へと跳んだ。

そして……………

「っ!!なんだこの感覚!!!!!!」

「デプトの比じゃないね……………」

そこは、今までにないほどのノーバディーの感覚で満ちていた。

そして刻たちは遠くを見、顔を引きつらせる

そこには、うまくいえないが………
あえていえば、『ジリ』の「ものの姫」に出てくる崇り神の
表面をうねっているあの気持ち悪い奴』の塊みたいなやつがいた。

「あれが………。」

「そう、イクストだ。」

いつの間にか刻の隣に現れていたカルマが答える

「カルマ!!!何でここに。」

後何で電話で連絡入れてきたんだ!??」

「第一の質問の理由は、あいつに攻撃をすることはできなくても、
お前らをサポートすることはできると思ってな。たまに来るんだよ。
……それに少し気になることがあってな。

第二の理由はおまえの周りに一般人が多数いたからな、いきなりお
前が不可解なアクション起こしたらいぶかしむだろ。」

「なるほどな………、気になることって？」

「ん、ちょっとな。」

今回で判明するかわからないから。分かっただら言うよ。

………というか早く助太刀にいつてやってくれないか？
ヤバそうなんだが。」

見るとハウエルが触手(?)に飲み込まれそうになっていた

「やば……！行くぜソニア……！！」

「うん……」

「ユニゾン・イン……！！」

「GO……！！」

刻はソニアとユニゾンシイクストの方へ飛んでいく

そして

「デュアルワールド 兵装展開、一二丁の銃」

二つの銃を展開させ

「カードリッジ四つずつロード、いくぜ〜〜〜」。

『コラプスショット』（連撃ver）！！！！」

味方を捕まえている触手に向かって魔法弾を撃ちまくった。

着弾した部分が次々と崩壊していく

そしてゆるんだ触手からこの【世界】の守護者が抜け出してきた

その人は薄めの蒼髪で青緑色の目の……………

……………みた目ぶっちやけ、そのまんまゼクシオンだった。

刻はその守護者のもとに行く

「【守護者】第十三柱 仁神 刻です。応援に来ました。」

「ありがとうございます。私は……………紹介は後で!!!!!!」

刻とハウルのもとに押し寄せる無数の触手。

しかもよく見ると、その中には肥大化した神経繊維や血管にしか見えないものも多分に含まれていた。

薄気味悪く脈動しながらうねって来るそれは、小さな子なら軽く一生のトラウマ物である

「げ……………そうですね、ツインソードぜひそうしましょう!!!!!!」

ソニア、モード変更、二刀流!!!!!!

……………喰らえ、「閃光」おおおおお!!!!!!」

そして彼らは反撃に出た

しばらく)と言ってもせいぜい十分)後、

彼らは苦戦していた

「くそ、何だよあれ。」

「どうやら、あのイクストは、(く)、再生に特化して、いるようですね。」

「防御力が、大したことがないのが、唯一の助け、ですが、(はあ！！！)、普通の攻撃じゃああ焼け石に水です。」

相手の攻撃をさばきながらハウルが言う。

普通の攻撃って言うてもかるくSS越えぐらいのはあるんだけどな
.....

「そう、（はっ）、ですね。強力な砲撃を、（蒼破そくは！！）打とうにも、この、（うらっ）、激しい攻撃じゃあ、チャー・・・ジできません。」

こちら相手も相手の攻撃を防ぎ、応戦しつつ話す

相手の近くになると体のいたるところから触手（？）を伸ばして来、しかもそれを切っても切っても次々と新しいものが向かってくるので、まともに本体に攻撃できない。

ならば距離を取って・・・と彼らは思ったがあの触手の伸びる長さは無敵らしい。

それにある程度離れたらレーザーのような攻撃までしてきた。どうやら放つ瞬間ある程度他のことに意識を向けられないらしく、二人以上で付近に行つたときは放つことは無いというのが唯一の救いだったが。

見た目のせいで、精神的にもどんどん疲弊していく二人

そして彼らが万策尽きようとしていた時

やってきたアルシエとグレンに刻が疑いの目を向ける

具体的に言うと何おいしいところ取るうとしてんの？と

・・・・・・・・自分のことは棚に上げておいて・・・・・・・・

「なんのこと？」(いろいろいろいろいろいろいろいろいろいろ)
)

「俺達は今来たばかりさ。」(いいですね・・・・ああああはあああ
ああ・・・・・・・・)

「そうか・・・・んで、(すばらしい~~~~~)
つちで光悦な表情してトチ狂ったこと叫びながら鎌振りまわしてる
のは誰？」

刻が指をさし、顔をしかめながら聞く。

そこには赤い吊り目で、黒髪を逆立て、黒みがかつた赤の巨大サイ
ズを振り回したり、同じような魔力光で攻撃したりしてる男一名。

見てたら凄く強いのが分かるんだが・・・・・・・・なんかいや
だ。

それを見てアルシエとグレンが目がしらに手を当てる。

「はあ……、第十一【世界】（ディクト）の守護者ソル・ロー
ジングレイヴ。まあ見たらわかると思うけど、二つ名は『狂喜乱舞』
よ。（ああ……）何かこれ以上ないくらいぴったりな二
つ名だな……。（まあね、ちなみに実質的には彼が実力
no.2だと言われているの。」

「試してみたりしなかったんですか？」

「そうなんですがね、ソルのやつ『本当の殺しあいではないと楽しめ
ない』って言うって参加しなかったんですよ。まあ私たちは助かった
んですがね……。本当の殺試合にならなくて……」

そこにハウルが話の中に入る
ちなみに現在彼らは四人で結界を張っているので相手の攻撃はそう
簡単には届いてこない

ソルの特攻まがいでの猛攻のおかげもあり、彼らは話を中止するこ
とも無く話す

「ああ……なるほど。」

「ついでに私も自己紹介しときますね、第十【世界】（エニグレスト）を担当させてもらっているハウエル・ブランドルです。二つ名は『ブラッディ・ミラー・ジュ紅き幻想』ですね。ハウルと呼んでください。」

「ちなみに由来は様々なトリッキーな攻撃と実態の在ったり無かったりする幻を用いて相手を混乱に陥れる戦術を好んで取るからだな。」

「そうですか、では改めて仁神 刻です。（敬語は良いですよ。）あ、すみません。」

【守護者】第十三柱を担当させてもらってる。二つ名はまだ無いな。……で、どうする、あれ？」

「（順応早いですね）彼なら負けることは無いでしょうけど、あの入って純粹に戦うのが好きなんで広範囲殲滅系の技持っていないんですよ。」

それにつだんだん押されてきたみたいです。」

ふむ……と少しだけ考え、刻が提案する

「じゃあちよっと試してみたい技があるから、時間稼いでくれない

か？

五分あれば大丈夫だから。」

「私は良いですがほかの二人は（いい）わよ（ぜ）（と）の」とです。」

「十分までだつていけるから落ち着いて用意していいわよ。でも威力はあるんでしょうね？」

「たぶん大丈夫です。」

刻がうなずく

「よし、じゃあ決まりだな、ソルの野郎にはこつちから話すとくから気にするな。
んじゃいつちよやりますか！！！！！！！」

「「ええ！！！！ハイ！！！！」」

そして彼らは飛んで行った。

そして刻は……………、

「出る「エア」、リミッター解除。」

刻はまず、アームドデバイス「エア」を出し、魔力処理リミッター（処理能力を超えた過剰な魔力を充填しないようにしたもの）を解除した

「武装解除、全処理能力を「エア」へ、システム「デイマイズ（終焉）」「作動」

「了解、武装解除・・・完了、全処理能力をエアへシフトします・・・完了。」

システム「デイマイズ」作動、魔力充填開始」

エアに大量の魔力が込められていく・・・。

「目標値魔力充填60%完了、カードリッジロード、各属性変化開始」
始………圧縮開始。
テラグラビトンクラスター アルカンシエル
超引力魔法、空間消去魔法混合開始
………カードリッジロード、弾頭抑制術式を作成します。
………圧縮完了、弾頭形成・魔力因子循環開始、制御術式付加………完了。
カードリッジロード、弾頭強化開始………」

「エア」からキィィィィという魔力の耳ざわりな音が聞こえ始める。

「弾頭の状態基準値をクリア。
薬室、安全装置解除、発射準備………。
最終フェイズ開始します、薬室内魔力圧力上昇中………25・30・35・40・45・50・55………」

「エア」から聞こえる音が大きくなり、「エア」も周りがとんでもない魔力の影響でバチバチと放電現象のようなものが起き始め、銃口あたりの空間がゆがみ始める

「発射します！……！離れてください！……！！……！！……！！……！！」

刻の叫び声を聞き、刻の方を向いた皆が顔を引きつらせ、急いで離れる

「最終安全装置解除……………オールグリーン……！！」

「『デイズ……ブレイカー……！！……！！……！！』」

その瞬間「エア」から鈍い光を放つ灰色の魔力弾が発射された。

それは光速に追いつくかのような速度で「殲滅対象」へ……。

そして着弾した瞬間……。

あらゆる効果音を混ぜ合わせたような爆音をたて次の瞬間、イクストは辺りの空間ごと消滅した。

「排熱開始……。」

ソニアからの声と同時に、『エア』の彼方此方に備えられた排熱口が一斉に開き、冷却用に使用された漆黒の魔力が噴出される

「想像以上だったな……………（バガン）イテ！」

「じゃないでしょ、なによあれ。」

少し呆気にとられた口調でつぶやく刻の許ににやってきたアルシエが突っ込む。
割と本気で……………

「超広範囲殲滅魔法『デイマイズブレイカー』だよ……………
徹底的に相手を葬り去る技作ってたらなんか出来たんだ……………
……………」

「に、してもあんなに威力あるなら先に言え！！地表も結構削れてるし……！」

俺達もヤバ気な感じがして離れまくらなかつたら良かったものの、

そうでなかったらかなりヤバかったぞ！！！！」

刻に詰め寄るグレン、ハウルも近くに来る。

………三人ともやや涙目である。

「いえ、本当はもっと規模が小さいと思ってたんですよ！！！！
これが初披露だったんです。威力だって本来の6割ぐらいしか出してないですよ！！」

全力ならばらく反動でソニアとエアは、機能復旧するまでは使用不可になるんです。

なのに今普通にソニアとユニゾンしてるでしょ！！！！」

必死の弁護する刻だがそれは三人にとっては逆効果だったらしい・

……

「………」

黙りこくる三人、

それを見て刻は「あれ？」と首をかしげる

そして少しの間黙った後、おもむろにグレンが口を開き

「おまえの二つ名『ラストレクイエム終焉への誘い』に決定な」

と言った。

「へ……何それ!!!!!!」

グレンの発表に異議を唱える刻

だが、

「異論無し。」
「私もです。」

残り二人が賛成の意を唱える。

「ちょっとー！ー！ー！。ソニア！！（ごめん、私に振らないで）ブルータスお前もか！！」

がっかりと、orzになる刻

こうして刻の二つ名は『ラストレクイエム終焉への誘い』になった

その後しばらく刻は暗雲を背負いながら「痛い……痛すぎる……
……」とorzになっていた

オマケその？

「あれ？ソルは？」

「そう言えばソルは？」

「戦いのないところに興味はないって言って帰りました。」

「……………根っからの戦闘マニアだな。」

「いやあれは戦闘狂だろ……………なんかの境地に達した」

何処か遠くを見る守護者四人の姿がそこにあつた

オマケその？

〈微妙に強化〉

「そういえばカルマ」

刻がカルマに通信をつなぐ

「なんだ？」

「（作者が書くの）忘れてたんだけどさ、結局お前の気になることってなんだったの？」

「ああ、ノーバディーの正確な気だよ。」

は？と疑問の顔をする刻たち守護者四名

「ノーバディーの気ってあの切り裂かれるような感覚のやつでしょ？」

「実はそれ違うんだよ。今まで君たちが感じてたのは【世界】からのSOSだったわけ、実は君たちの感の一部って【世界】とリンクしてるんだよ。あれは【世界】の苦痛の感覚だね。」

「そうだったのか・・・ってか俺たちあれがノーバディーの気配だって教えられてたぞ。」

「そう説明して何の問題もなかったからね、本当の気配もそんな感じのものだったし、てゆうか何よりぶっちゃけ詳しく説明するのめんどかったし。」

「」「」「うおい！」「」「」

何かとぶっちゃけ始めた創造神

思わず四人そろって突っ込みを入れる・・・・・・動作まで入れて

「気にしない気にしない。」

で、本題に戻るんだけど今回のノーバディーの正確な気配がわかったってわけ。」

「で、どうなるんだ？」

「今までのノーバディー出現 破壊活動開始 【世界】が悲鳴を上げる 守護者にSOS発信

だったのがノーバディー出現察知で終わるんだ。」

「ってかさ始めからそうしときゃ良かったんじゃないか？（あ、それむり）
なんでだよ？」

カルマの答えに刻が意見するが、あっさりとカルマに否定される

「あいまいじゃ駄目なんだよね。」

君たちを世界ともっと深くつなぐっていうのも一応できるんだけどさ、この方法は十中八九使えない（なんでだよ）、君達って世界中の感覚、地面の踏まれた感覚、岩肌に吹き付けるそよ風の感覚、砂が舞う感覚、そんなのを全部リアルタイムで送られ続けて耐えていられる？」

「「「無理だ（だな）（ね）（ですね）「「「

四人そろって答える

カルマはそれに頷く

「そういうことだ。ま、とにかくこれで作業効率も上がるってものさ。」

「何か微妙なパワーアップだよな。」

「そうでもないぞ、あいつらがでてくるところに先回りして、出てきた瞬間仕掛けておいた広範囲殲滅魔法くらわすって手が使えるようになる。」

「あ、ほんとだ。」

カルマの説明でポンと手を叩く刻・・・・・・・・・・実行する気満々である

「鬼畜だな・・・・・・・・」

グレンがつぶやく……………まあこいつも実行するんだろ
うけど……………

『コラプスショット』

着弾した地点、および周囲の物質を原子レベルで霧散させる。
範囲は拡大可能だが、拡大すればするほど威力と効果がまばらにな
る。

一応カードリッジ追加で強化は可能。

だが、範囲を拡大すると『溜めの時間』も格段に長くなるので、細
かい範囲の設定で、連射した方が何かと楽。

『閃光』

簡単に言えば『月牙天衝』の連撃
ある程度の誘導性を持つ。
本当に（ある程度の）だけ。

ノーバディーの大まかな強さ(魔導師ランクver)

ワスト AA以下

デプト AA)SS

イクスト SS+)EX

マスターマインド EX

但し個体によって強さのパラメーターの偏りがあります

(パラメーターが皆同じような奴もいれば、攻撃特化型、再生特化型、防御特化型……、

さらに攻撃特化型の中でも射撃特化型……といった具合)

あと、ソル・ロージングレイヴのキャラ設定は烈火の炎の「刹那」を参考にしました

似ているのは外見だけです。

010 イクスト（後書き）

黒

「遅れてすみませんでした。」

刻

「理由は……あ、なんとなく分かるから良いよ。」

黒

「どうも……」

ソニア

「刻とハウルの二つ名変えたんだね」

刻

「前のもそうだったが……今度のもものすごく痛いんだけど……」

黒

「俺の趣味だ、あきらめてくれ。でも結構悩んだんだぜ？」

『ブラッディ・ミラー・ジュー紅き幻想』にするか、『終わりなき悪夢（スパイラルラナイト
メア）』にするか結構悩んだんだ」

刻

「俺じゃなくてハウルのかよ!!」

黒

「お前のは「終焉」入れるのは決めてたから結構速かった」

刻

「・・・・・・・・まあいー!!」

では、この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を」

ソニア

「CITY様、バルディッシュ様、HAZUKI様、感想をありがとうございました。」

あ、そう言えばこんな質問があったよ『ジヨジヨのスタンドは使えるのか？スタープラチナとか。』ってやつ。」

黒

「ああ・・・・・・・・それな・・・・・・・・結論から言えば使えるんだよ・・・・・・・・」
他にも『ザ・ワールド世界』とか『クレイジー・ダイヤモンド狂った金剛石』とかも・・・・・・・・
ただど作者、ジヨジヨのことはよく知らないんで、迂闊に手を出せないんです・・・・・・・・」

刻

「ってなわけでたぶん使わない。ワリいな・・・・・・・・」

011 はやてとの遭遇（前書き）

直した方がいいが……結局駄文になった

落ちもないし……

011 はやてとの遭遇

Side 刻

俺の二つ名が決まってから一年チョイ後。

俺は無事に（あたりまえ）二年生に進級しました。
ちなみに今度もなのは達とはクラスが違った。

なのは達との関係？

うん……普通に友達付き合いしてます

ソニアの存在の説明？

適当に俺の親せきで、親のいない俺の世話をしてもらってるって説明して納得してもらった。

裏関連？

「ビハインド」はさらに成長したよ。

んで、「ライトヴァイス」のサポートとかはおもにこの会社（裏の部門）でするようになった。

つとと言うか会社の裏の部門とライトヴァイスの本拠地同じ場所にしたらから自然とこうなったんだけどな………

「ライトヴァイス」の方は俺はめぼしい奴全員引き入れといたんで、ほかに入れたい奴いたら俺に情報送るよう中心的組織のやつらに頼んどいた。

大丈夫なのかって？

そもそもさ、犯罪者って言っても、ちゃんと道理は通すやつ、そもそも目的のためへのプロセスで犯罪を犯しているだけで、こっちが環境そろえたらなんの害も無い奴らって結構いるんだよ。

例えば遺産盗掘関連の犯罪者、

古の遺産発掘するのがただ単に好きなやつら（発掘すること自体が

好きで、発掘し終わったものは正直いらない)、
未発見の太古の遺産を調べて見たい奴ら(調べられるんなら、過程はどうだっていいし、調べ終わったものは正直いらない)、
珍しい遺跡のデータ集めたいだけの奴ら(いわゆる遺跡マニアの限定発展型または歴史研究家、写真とか、詳細なデータもらえるんならそもそも遺跡に潜る気なんてさらさらない。)

みたいな感じのやつって結構多いんだよ、だからコントロールすれば犯罪思いつき減るし。むしろそのあふれんばかりの意欲で俺の会社の役に立ってもらってるし……。

最初のやつも、出たロスログア俺が全部買えばどっかに流れる心配ないし。

それに「ライトヴァイス」自体かなりの大きさになったんで、ほかの犯罪者抑制したりしています。

経過は順調だ。

(……………すみませんほんと駄文です)

何か聞こえてくる声は無視した

011 ハヤテとの遭遇

Side
刻

んで、ある日の休日、ソニアと二人で外に遊びに行っていた帰り道

「~~~~~」

「ん？」

溝に車椅子の車輪を挟ませている茶髪の女の子を見つけました。

うん、あの狸だな。

Side 子狸？

図書館から帰っていたら、溝に車椅子の車輪を挟んでもおた。

少しぼーっとしてたみたいやわ……………。

にしてもこれ、取れへんなー。

って車輪を溝から外そうと頑張っていたら、

「よっと、ほら、これで大丈夫だ。」

と、誰かが後ろから椅子を持ち上げてはずしてくれた。

S i d e E N D

「あ、おおきにー。えっと、・・・」

お礼を言おうとするが名前が分からず詰まる女の子

それに気づき刻とソニアは自分たちの名を教える

「ああ、俺は仁神刻、んでこっちはソニア」

「はじめまして、ソニアだよ」

「あ、仁神さんに、ソニアさんですね。

私は八神はやてゆうます。」

「（うわあ~~~~い、やっぱはやてだよ………）
別に敬語使わなくていいぞ。名前も呼び捨てでいい。」

「私もソニアでいいよ〜。」

「んで、どこに行くんだ？押して行ってやるぞ？」

「一人で大丈夫や。心配せんといてな。」

刻は提案するが、はやてはそれを断る

「今さっき溝に車輪挟ませてたやつが何を言っ。」

「さっきのは偶然や！―いつもはそんなへマせえへん！―！」

頬を膨らませるはやて

それを見て刻が笑う

「ま、そうだろうがな。

ここで会ったのも何かの縁だ。

こっちはこの後何の予定もないんでな。

ま、人の好意遠慮せず受け取っとけて。」

「刻って意外と頑固だから折れた方がいいよ。」

「はあ……………じゃあよろしゅうお願いするわ。」

二人の物言いに少し茫然とするはやて

「おう、じゃあ行くか。」

「後で私にも押させて。」

で、はやて連れて八神家に行った刻とソニアだったが、その後の会話で二人暮しで親はいないことをうっかりソニアが話したら、

「うちも両親いないんや、なんやったら一緒に暮さん？」

と言って来たが、『仕事』があるから一緒にいると少しヤバいので、刻が適当に理由つけて、最終的に少なくとも一週間に一度は時間が空いたら遊んだり、泊まったりしに行く、って約束をした。

011 はやてとの遭遇（後書き）

黒
「やっとアップできた。」

刻
「なんで、昏送れなかった？」

黒
「実家に帰ってたから。」

刻
「で、作者？
俺の心労わかる？」

黒
「俺は楽しければそれでいい」

刻
「死ぬ『天地乖離す開闢の星』^{エヌマ・エリシュ}！！」

黒
「させるか『万難排す魔除けの盾』^{アイギス}、
『刺し穿つ死棘の槍』^{ゲイ・ホルグ}」

カルマ
「あちらでバトツてる二人に代わっておれたちが。」

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。」

ゼウス

「次回から無印に入ります。」

ソニア

「ではまた次回「無印突入!!」で会いましょう。」

此処までが修正前のあとがき

此処からが修正後のあとがき

黒

「今回は速攻で終わりました。」

刻

「ホント早かったな……………」

黒

「今回は特に書き直したい部分なかったからね

……………というか書き直し方がわかんなかったんだけどね……………」

特に前半!！」

刻

「ま、気楽にやれ……………」

黒

「さて此処からですが……………少しオリジナル要素を入れていくつもりです。

まあ、ほんとに少しだけで、しかもつもりなんであまり期待しないでください。……………004話の刻の能力把握描写の追加みたいなものなんで……………」

ソニア

「では感謝コーナー!!」

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を!!

バルディッシュ様、HAZUKI様、感想をありがとうございます!!」

黒

「ホント、感想を書いてくれてありがとうございます。

これなくなるとマジで鬱になるんで。

あれ?俺の作品って面白くないのかな?みたいな気分になって。」

刻

「では次回」

ソニア

「またね……………」

EX - 01 PV五万突破で送る他作品クロス番外編

Side 裕樹

「封絶^{ふうぜつ}！？ 悠二、シヤナ！！」

「うん！！」

「分かつてる！！」

俺達は封絶^{ふうぜつ}（結界の一種）が発動されたことから『紅世の徒^{くげのともせがら}』が来たことを悟り、それを討伐すべく急いでその元に向かう

だがそこには彼らが予測していた、人間が徒に『喰われている』光景はなく。

「ギヤア~~~~」

「は~~~~.....五月蠅いな」

『燐子』（徒の下僕）が二本の剣を持った、一人の黒いコートを着た少年に一方的に葬られていく光景があった

そして

「うわあ~~~~~」

「『虚空』……………消える。」

最後に残った『紅世くぜのともがらの徒』が特攻をしかけるが、そいつは、一瞬で相手をすり抜け……………、その一瞬後、徒は細切れになりながら消えていった

俺達は気晴らしに並行世界の「地球」に転移したのは良いが、突然わけのわからん奴らに襲われたので迎撃した。

「終了つと。ま、デプトよりは強かったかな？」

俺は武装を解除する。

「なんか変な奴だったね、なんか……こう……不快感が……」

「あいつ等はどうかやら、『存在の力』を糧にして生きてるみたいだからな……そのせいだろ。」

ソニアのつぶやきに答えると、

それを聞いたソニアが嫌そうな顔を（ユニゾン中なのではっきりとは分からないが）して、ため息をつく

「はあ……にしても、こんな「地球」もあるんだね……」

言っちゃんだけど、私たちのところにこんなのがいなくてよかった
~~~~~。」「

「ま、それは同感だな……」

（にしても『紅世の徒』か……ってことはここはシャナの



世界か？」

そんなことを考えていたら

「ねえ、」

声がかけられました。

んで、ああ、この釘宮ボイスは間違いないよ………  
って思いながら振りかえると………

そこには確かにシャナ、そして悠二がいたが………

「………誰？」

ほかにも知らない男と二人の女の人がいた。

p v 五万突破で送る他作品クロス番外編

とりあえずその後、刻はソニアとユニゾンアウトし（みな（特に裕樹）が目を見開いていた）、お互いに自己紹介した。

ちなみに刻は自分は魔法使いであり、世界を渡り歩く通りすがりの旅人であると（どっかのライダーみたいな）説明をした。

「へー。兄さん以外の魔法使って初めて見たなあ。」

「ほんとね〜」

悠二とシャナがやや驚いた声を上げる

「俺も驚いてるよ……………」

裕樹も感想を述べる

「ユニゾンデバイスを持つてることとはベルカの魔法を使うの？」

裕樹のユニゾンデバイスであるプライが聞く。

「ん……詳しく言えばベルカ式『も』だな。

ま、さっき言った理由であちこちの世界を渡り歩いてたんでね。

魔術形態なんてほんとたくさんあるんだよ？

例えば……」

俺は創造で、『四宝剣』を創り見せる。

「こんなの使って戦う世界とかさ。」

「な……なんなのだそれは!!」

アラストールが引きつった声を上げ尋ねる

まあこの宝具の性質上、こいつが一番敏感に察知できるんだろな・

……

「これは、『四宝剣』って寶貝。

アスラトールは気付いたみたいだけど、これは全てを消滅させる確立歪曲兵器。

この先端から放たれた光線に当たると、存在する確立を崩壊させら

れる……つまり攻撃した相手を存在していたこと自体まで消滅させてしまうことのできる武器だね。完全犯罪にはもってこいだよ……ほんと。」

刻の説明に皆一斉に顔を引きつらせる。

「んなもん使ってる世界があるのかよ……」

「ま、と言ってもこれ、オーバーテクノロジーでできて、しかも作者も製作法も分からないからこれ以上作られることも無いけどね（俺は別だけど……）」

「そ、それにしてもさっきの戦闘を見てたけど、結構強いんだね。ねえ、裕樹と戦ってみてくれない？」

シヤナが話題を変え、裕樹と戦うことを提案する

「何でおれが？普通ここはおまえが戦うんじゃないやねえ（いや、我もそれを所望する）」

「何でだよアラストール。」

アラストールの申し出に疑問を投げかける裕樹。

「先ほどの戦闘からおそらく彼はシャナよりも強い。ならばそれよりも強い裕樹殿に戦ってもらった方がいい勉強になると思ったのでな。」

その言葉に「仕方ないな……。」と了承する裕樹。

驚きの顔をする悠二、

そして自分より強いとアラストールに認められ微妙にへこむシャナ

「頑張つてね、刻々々々」

「いや……………俺の意見は無し？」

「悪いな……………」

少し離れたところでソニアに応援されながら疑問を口にする刻とその肩をたたく神龍がいた

「あ、その剣は使わないでくれよ?」

「もう戦うの決定事項なのか……分かってるよ。こんな危ないやつ、使うわけ無いだろ」

×

×

×

×

×

×

「んじゃあ始めるか」

地面に降り互いににらみ合う

「ああ、プライー!!（了解!!）」

「「ユニゾン・イン」」

「そして、起きろ、神龍!!」

《龍騎武装!!!!!!》

裕樹が黒色に魔力光に包まれそれが晴れると、手に黒い太刀を持ち、黒いバリアジャケットを展開した裕樹が現れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ス・・・・・・・・と身構える刻。



その手には卍型の鏝、柄頭に途切れた鎖がついており、その全てが漆黒の日本刀………卍解状態の『天鎖斬月』てんさざんげつを持つ。

しばしにらみ合う二人、  
そして

「ハアアアアアアアアアア!!!」

刻に突っ込む裕樹。

「はぁあッ!!!」

二人の刀がぶつかり火花が散る。

「早いな………」

刻が睨み合いながらつぶやく

「まだまだ!!!」

そう叫び、力任せに剣を振り、その反動を利用し距離を一気に取る裕樹。

そして居合の構えをとり、

「神龍!!!!」 《夜方流、攻式壱!》

「《夜叉!!!!!!》」

裕樹は魔力を乗せた斬撃を刻に飛ばす、刻は『げつがてんしゅう月牙天衝』でそれを相殺する。

「次はこっちだ!!」

刻は、縮地で一気に距離を縮め

「一閃」

一気に勝負をつけるべく、そのまま一瞬で相手の背後まで移動しながら13回もの斬撃を浴びせる。

だが、

「あ……あぶね!」

裕樹はその全てを防ぎきった

「Attack Skill」「Over Drive」とAttack Skill「Delay」ってな  
作っておいてよかったよ。」

呟く裕樹。

「今のはきまっただと思ったんだけどな……」

「ぬかせ!」

残念そうにつぶやく刻に裕樹がかえす。

「にしてもお前、本当に八歳か？ありえないぐらい強いんだけど……」

「八歳だぜ？ただし……」

「グウ……!!」

刻は再び距離を詰め、二人は鏝迫り合いの状態になる

「あり得ないぐらいのチートだけどな!!」

刻の言葉に裕樹は苦笑いをする。

「自分で言うとは、大した自信だな!!」

「自覚あるんでね……」

「……」

二人はしばしにらみ合い

「ハアアツ！！！！！」

お互いにはじきあい、再び距離を取る。

「さて……………じゃあ次で終わりにしようか？」

「いいだろう……………望むところだ！！」

刻の提案を承諾する裕樹

そして二人は各々の構えをとり

「夜方流、奥義……………」  
「散れ……………真神……………」

「神速！！！」  
れんごくきつ  
「煉獄刹！！！」

二人の技がぶつかり合い、衝撃波が発生した。

「結局引き分けか……………」

「残念だったね……………」

刻とソニアが残念そうにつぶやく

「すごかったな……………」

「ええ、こつちはいい勉強になったわ、ありがとね。」

悠二とシャナがお礼を言う。

「そう言ってくれると嬉しいよ……（……なあ、刻）ん、なんだ裕樹？」

「自分が如何したら良いか分かんなく為ったら……. . . . .お前ならどうする」

裕樹のおもむろに投げかけて来た質問に一瞬だけ眉をひそめ、刻は答える

「考える。」

そう一言。

その返答に眉をひそめ、裕樹がさらに聞く

「……. . . . .考えて分からなかったら？」

「だったらさらに考えるさ。（だから）考えて考えて考えぬく。そしてどんな形であれ、自分の結論を見つける。

そうすれば、たとえ悲しい思いはしても、後悔やみじめな思いはないよ。」

それを聞き黙る裕樹

「そっちが何に悩んでるか知らないけど、俺からはこれしかアドバイスが出来ないな……」

悩んでたら、助けを求めれば良い。

でも、流されるなよ？自分で決め、それを貫けば後悔はしない……」

しばらく考えたあと裕樹がうなずく

「なるほどな……ありがとう。」

また今度会えれば勝負を頼んでいいかい？」

「もちろん!!」

拳をぶつけ合う刻と裕樹

そして刻とソニアは彼らの前から消えた



「にしてもホント強かったな……………」

悠二がつぶやく

「ええ、ほんと、裕樹と同じ実力なん（たぶん…………ちがう）え？」

裕樹の言葉に眉をひそめるシャナ

「あいつ、多分手加減してた。

どっちかと言うと下手に本気を出すことはできないって感じだったけど。」

「うむ…………扱いきれない能力に振り回されると言った感じが所々にあった……………」

「それ以前にソニアちゃんって刻のデバイスなんだろう？  
なのに刻と戦わずに僕たちと応援してたからね。

多分その能力のせいで不公平だって考えたんだろうね……………

自分はチートだって言った時のあの顔は少なくとも、自慢するものじゃなかったから」

裕樹とアラストールと悠二の言葉に目を見開くシャナ

「どちらにしろ、あつちはまだ全力じゃあなかったってことですね．．．．．」

「何かませたガキね．．．．．」

神龍のつぶやきを聞きながら愚痴るシャナ

「いや．．．．．シャナがいつても（ハア！！）いた~~~~！！」

思わず口を滑らし制裁される悠二。それをはた目に見ながら裕樹はいう。

「ああ、でもやっぱ年相応かな？結構もろいところはあったよ．．．．．」

裕樹のつぶやきを聞き、不思議そうな顔をするシャナと悠二

それを苦笑しながら裕樹は言った

「俺に助言をしたあの後さ、本当に小さくだけどつぶやいてたんだよ。」

『そう……後悔なんかしない……してたまるか』ってさ・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「一体何を決心したんだか……」

と。

『しほりけん四宝剣』

《封神演義》より。ちなみに宝具ではなく宝貝。

全てを消滅させる確立歪曲兵器。この先端から放たれた光線に当たると、存在する確立を崩壊させられる……。つまり攻撃した相手を存在していたこと自体まで消滅させてしまうことのできる武器。

『てんさきさげつ天鎖斬月』

《BLEACH》より、死神の使う刀、斬魄刀ざんぱくとう一つ、これには【始解】（しかい）と【卍解】（ばんかい）の二段階の解放がある。

ちなみに卍解状態の天鎖斬月は強大な霊力の全てをその小型に凝縮することで強力な攻撃力を保ったまま超スピードの斬撃と移動を可能にしている。

『げつがてんしやう  
月牙天衝』

同じく《BLEACH》より、刃先から超高密度の霊圧を放出し斬撃を巨大化させて飛ばす技

『くうくう  
虚空』 『いちめい  
一閃』

技が使われているゲームは違うが、どちらもFF7に出てくるセフィロスの技  
どちらも一瞬にして相手の背後に移動しつつ無数の斬撃を放つ。

『まじんれんげくまっし  
真神煉獄刹』

《Tales of Destiny 2》より。ジューダスの  
秘奥義。

闇をまといつつ突進(?)  
ちなみに、よく似た……と言うか全く同じモーションの技で『  
魔神煉獄刹』というのがある

黒

「完全オリジナルの話です。」

ですが………HAZUKI様、もうほんと、色々すみません！！

主人公の性格もなんかおかしくなっただし、武器とか技とかも結構こつちで勝手に判断して使わせてもらいました  
キャラの扱いとかもホントすみません！！」

刻

「これが作者の限界なんだ、マジで済まん！！」

ソニア

「えっと………では、感謝コーナー」

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！！

cter様、バルディッシュ様、誤字訂正をありがとうございました  
天意無法の歌武鬼者 鬼龍院獣侍郎様、アンケートをありがとうございました  
ございました

HAZUKI様、ソラト様、感想をありがとうございました」

ソニア

「次回は無印開始？」

黒

「いや、二話ほど挟まないといけない。あれがあるから。」

刻

「ああ……あれね。」

魔法少女リリカルなのは〜神龍騎士の英雄説〜

作者：HAZ

UKI

現在A・Sを中断しSTS編に入っています。

正体不明の魔道師である主人公とシャナ達が交わり、どのような物語を紡ぐのか？

主人公はオリ主で転生者ではありません。



012 VS 御神(前書き)

ーから書き直しました

なのは・アリサ・すずかの騒動があつてから数日後のあるお休み、刻はソニアと一緒に翠屋に向かつていた。

翠屋のお菓子を食べられるのでソニアはかなりご機嫌だ

「久々の翠屋だね。土朗さんげんきにしてるかな？」

「ま、大丈夫だろ、俺らが言うのも何だが高町の連中って軽く人外だし。」

「着いたらデザートいっぱい頼んでいい？」

「ずいぶん気に入ったんだな。二年前、しかも一回しか行ったことないのに。」

「うん、だってあの口に入れた瞬間トロっと溶けて、フワッと口の中に広がるあのおいしさがなんとも……………」

うつとりした表情で熱く語るソニアに、刻は思わずたじろぐ

「……………さいですか。」

0  
1  
2  
V  
S  
御  
神

そして、翠屋に来た刻とソニア

カランカラン

「いらっしやいませ。あら、刻君たちじゃない。

士朗さん、刻君達が来ましたよ。」

刻とソニアが中に入ると、それに気づいた桃子さんが奥にいる士朗さんと呼ぶ

「お、やっと来たか。

そろそろ来るんじゃないかとずっと待っていたんだぞ。」

士朗さんの言葉に眉をひそめる刻

「？俺達が来ると予測してたんですか？」

「ああ、なのはが「アリサちゃんとすずかちゃんと友達になって一緒に帰って来たの。ほんとは刻お兄ちゃんも一緒に帰るつもりだったけど、なんか急な呼び出しがあったみたいで先に帰っちゃったの」って言うてて、その翌日「刻君とも友達になれたの。」ってよろこ

んでたからね。」

それを聞き納得する刻、そして土朗さんに近づき耳打ちする

「なるほど、（処でなのはに俺のことは）ボソ」

「（大丈夫誰にも君のことはちょっとした知り合いとしか説明してないから。）ボソ」

「（ありがとうございます。）ボソ。ってあれ、ソニアは？」

いつの間にか近くにソニアがいなくなったことに気づき辺りを見渡す刻

「あそこよ。」

「ん~~~~」

そして桃子さんの指差した方を見ると、そこにはいつの間にか大量の菓子を注文し、光悦な表情ではおぼっているソニアがいた。

その量はそれを見た刻が頬を引きつらすほどもあった

「いつのまに……」

しかもあんな大量に注文して。」

「ははは……」

そうだ刻、よかったら私と手合わせしてくれないか？」

「そうですね、予定もないし、ソニアもしばらくあのままですう  
なので。」

「よし、ではさっそく道場に行こう。」

士朗さんは「さあ……さあ……さあ……」といった具合に催促する

「分かりました。」

ソニア、俺ちよつと士朗さんと手合わせしてくるからここにいろよ。

あ、桃子さん、ソニアをお願いします。会計は後で払うんで。」

「はい 行ってらっしゃい」

「気をつけてね……」

そして刻は士朗さんに付いて、道場に行った

んで道場

「さて、得物はどれがいい？」

いくつかの種類の獲物を指しながら土朗さんが聞く

「じゃあその日本刀サイズので。」

そして俺は日本刀サイズの木刀をとる

土朗さんは小太刀サイズの木刀を手取る

二人はお互いに礼をし、距離を取り

「では………。『御神の剣士』高町士朗、参る！」

「『【守護者】第十三柱』、『終焉への誘い』仁神刻、参る！」

(あ、そうだ、せっかくだから常駐型身体強化能力きつとこ。)

互いに名乗り、構え……。

「ッ！！！！」

一気に地を蹴り、お互いにぶつかっていった

「ハアア！！」

刀を振りぬく刻、士朗はそれを体をややひねりながら避け、その回転を利用しながら刻の懐に潜り込み、一撃を加えようとする

ガン！！



それを何とか柄の部分で防ぐ刻、相手の威力を利用し蹴りをくらわせようとしますが、土朗はすでに距離を取り態勢を立て直していた

神速を一瞬だけ発動し、一気に距離を詰める土朗、

刻はそれに反応し、カウンターをくらわせようとするが土朗に防がれる、そのまま土朗をはじき、一撃くらわせようとするが、土朗は先ほどの刻のはじく力を利用し、再び距離を取る。

刻と土朗は一瞬お互いににやりと笑い、再びぶつかり合う

「ハッ!!」

「せい!!」

「ッ!!」

「フッ!!」

ギン!!、キン!!、ギン!!、ギュイイン!!!!

「.....」

「はああああああ！！！！」

キンキュンチンキンギン、ギーン

刻と士朗さんは激しく（木の）刃を交え、物理的な意味で（木刀なのに）火花散る戦いを繰り広げる

「やはり強いな！！手加減しているのだろう！！！！なのに私の上をいくとは……！！！」

つばぜり合いをしながら士朗が話しかける

刻はそれをはじき返し、攻撃を加えながら答える

「まあ、俺の体は結構魔改造（って言っでいいよな？）、されてるんでね、正直化けモノじみた身体能力してるからなあ！！！！！！  
だが！！！！俺の攻撃は見よう見まねを力技でやってるだけだ。  
あなたみたいに洗練された動きは、できねえよお！！！！」

刻の回答を聞き、嬉しそうな顔をする士朗

「嬉しいことを言ってくれるじゃないか。  
さあ、もっと行くぞ！！！！！！」

「こっちもだ。」

二人の攻防はさらに激しさを増す

（ただいま、もはや表現できないほどの激しさで戦闘中。）  
（しばらくお待ち下さい）

ガキイイイン

ズサーー

お互いに弾きあい、距離を取る二人

「ははは、名残惜しいが次の一撃で終わらせようか……!!」

「望むところですよ……!!」

士朗さんの申し出に受けて立つ刻

二人は各々構えをとる、

士朗は神速の一撃を発動せんと体全身に力を張り巡らせる、  
刻はそれを受けて立たと全力で脱力を行う

そして、

「奥義……………」

「一刀流居合……………」

「『絶』!!!!!!」

「ッアアアア!!!!!!」

ギイイイイイイ~~~~~ン

グサ!

お互いの刀（木刀）が折れ、畳に突き刺さる

「引き分け、か」

「いや、私の負けだろう。  
なにより君が魔法を使っていたら、私は手も足も出なかっただろう  
からな。」

刻の言葉に士朗が反論する

「そんな反則技この勝負で使うわけ無いじゃないですか。」

刻が眉をひそめ答える

それを見て（フツ）と士朗が笑う

「そうか、じゃあまたいつか組手をしよう。」

「まあ、機会があれば、お手柔らかにお願いします。」

「君にそれは必要ないだろう。」

「まあそうなんだけどな……」

そして俺はソニアを迎えに行き、帰路についた。

おまけ

「ではお会計、57800円になります。」

「は？」

桃子さんの言葉に一瞬何を言っているのかわからなくなる刻

「はいこれ。」

そして桃子さんから明細書を渡され、

ピキッ（刻が石化し、どこかにひびが入ったような音）

ゴゴゴゴゴゴゴ（刻からオーラが発せられる効果音）

グシャ（刻が、明細書を握りつぶす音）

「……………カードをお願いします。」



天使のような『いい笑顔』で桃子さんにクレジットカードを渡す刻

「はい、分かりました。」

それに全く動じず、いつも通り微笑みながら、カードを受け取り処理をする桃子さん

「あ……………あは……………は……………」

刻の後ろで引きつった笑みを浮かべるソニア  
ついでに桃子さんの隣で土朗さんも引きつった笑みを浮かべている

「はい、ありがとうございました。また来てくださいね。」

「じゃ……………じゃあ……………また来てくれ。」

……………歓迎……………するから……………」

微笑みながらカードを渡す桃子さんと、引きつった笑みを浮かべ冷や汗を流す土朗さんが対照的だった

「ええ……また来ますよ……」  
「さあ……ソニア……」

とても素晴らしい笑顔で、しかし底冷えするような声を出しながら刻はソニアに話しかける

「あ……えつと……刻？」

「サア、カエルヨ？」

「ヒイイ!!」

そしてソニアを引きづりながら、刻は店を後にした

『絶』

神速と併用して行うわざ、眼にもとまらぬ速さで距離を詰め、一撃をお見舞いする

「居合」

そのまんま、作者はトリコに出てくる「マッチ」のやつを題材にしたが、あれ、技名が書かれてなかった。

012 VS 御神（後書き）

ソニア

「ガクガクガクガク！！！」

刻

「コンドカラハ、ジチヨウシロヨ？」

ソニア

「ハイハイ！！！」

黒

「あ~~~~~.....そこから辺にしておけ.....」

刻

「つたくしゃあ~~~~ねーな。」

ソニア

「故・・・怖かった・・・。」

刻

「さて.....そういやーから書き直したんだな」

黒

「ああ、と言っても同じような場面はあるんだけどな。ただ戦闘描写はかなり良くなったと思う。」

ソニア

「あつこ書くためだけにるる剣見てたもんね……」

黒

「ま、他の作者に比べたらまだまだただけだね。」

刻

「では感謝コーナー。」

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。

HAZUKI様、兵隊様、K(21)様、紅雫様、感想をありがとうございました。」

黒

「クロスの受けが良くてよかつた〜」。

ホントホツとしています。」

刻

「さて、次回はあれだがすぐ投稿できそうか？」

黒

「むり。」

ソニア

「いや……即答？」

黒

「だってあれ……修正前ですでに7128字あるんだよ？ 今日中とか絶対無理！！」

「刻  
・  
・  
・  
・  
頑張ってくれ  
・  
・  
・  
・  
」

013 とある日の事件 前編

Side アリサ

ある日わたしは、リムジンですずかと忍さんと刻と一緒にすずかの家に遊びに来てもらっていた。

「にしてもなのはちゃんが必要な用事で来られなくなっちゃうなんて残念だったな。」

すずかがさびしそうにつぶやく  
それを聞いた忍さんがほほ笑んでいた

「ふふ、ほんとに仲のいい友達ができたみたいね。  
皆さんありがとうございます。」

「いえ、こちらこそ。」

それにそちらの家にお招きいただき、こちらこそすみません。」

「ま、そういうわけだ、俺らもすずかといて楽しいからな、別に御礼言われるようなことしちゃいないよ。」

にしてんもおまえんちの車って乗り心地いいよな。

俺、なんだか眠くなってきた………着いたら起こしてくれ。」

あ、刻、眠っちゃった。

………にしても、こんな状況で寝れるなんて、変な奴よね。

……でも、そもそもこいつは経歴から異常だった。なんとなく気になってこいつのこと調べさせてみたが、その報告書は、

『名前：仁神にかみ 刻とき』

性別：男性

経歴：親とは3歳の時死別し、一人暮らしをしていた。他の親戚もとうに絶えている。

四歳の時より、遠い親戚のソニアと暮らすようになった。



また財産はかなりのもの。

となっているが、調査したところ

確かに親の住民票はあり、そして墓もあつたが、彼らのことを確実に知っている人はいなかった。

彼らとともに働いていたはずの同僚や、葬式を行ったとなつていゝる和尚、さらには結婚式の仲人をしたはずの者でさえも、「そんな人がいた気もする。だがはっきりと……というよりほぼ記憶がない。」と答える始末である。

彼自身、彼の生まれたはずの病院関係者は、だれも彼のことを覚えていなかった。

彼の担当医に、彼のものとなつてゐるカルテを渡したが、「確かに俺が書いたもの……だと思つ。そんな気がしないでもないし……だ。だが変だな、たった6・7年前のはずなのに思い出せない。」と答える始末であつた。

親戚も調べたが上記と全く同じ結果である。

ソニアのことも調べたが、そもそも彼女が親戚であつたかすらあやしい。

データはあったが、すべて巧妙な偽装であった。

記録はあっても彼らの過去をはつきりと知っているのは一人もいなかったのである。

また、彼らの財産についても調べたが、完全に出所不明のものだった。

一応これらもデータ上は全て納得ゆく理由はあるのだが、それを裏付けるものが全くなかったのである。』

というとんでもないものだった。

なんなのよこれ、記録がないってレベルじゃないわ。  
もつと異常じゃない。

絶対こいつは普通のやつじゃない!!

……でもこいつを見ている、危険な感じも全くしないのよね。

正直あの報告書が嘘じゃないのかと思ったりしさえする。

それに何だろう、こいつといるとなんだかんだで楽しいのよね。

あんま離れたくないと思っちゃうし………て何私考えてるのよ!!!

「あれ、アリサちゃんどうしたの？  
顔赤いよ？」

「な、なんでもないわよ。」

と、こんな感じのやり取りをしながら月村邸に向かっていたら、

キヤーーーー、ガシャン

「「「キヤア」「」」

急に横から自動車が私たちの乗っているリムジンに体当たりしてきて

ボタン

とマスクをかぶって顔を分からなくした男達がドアをこじ開け侵入してきて

275

「ちょ、あんた達なにすんの。」

「放して。」

「やめなさい。」

「うるせえんだよ」

といった感じで私達は拉致られてしまいました。

．．．．．その間刻はずっと寝てたけど．．．．．  
．．．．．どんな神経してるのかしら？

013 とある日の事件。(すみません良い題名思いつきませんでした  
したby黒天使)

S i d e    アリサ

縛られ転がされている私たちの向こうで犯人達が騒いでいる

「おい、あの餓鬼は知らないけど、あつちの譲ちゃんもバニングス家の後釜だぞ」

「マジか、」

「ああ、なんだか今日の俺達は付いてるぞ!!」

「油断するな。思わぬ事態から壊滅する可能性だってあるのだからな。」

「了解、全くリーダーは心配症なんだからな」

「ん……。あれ？」

「目が覚めたみたいね。」

あ、刻が目を覚ました。

良く今まで寝ていられたわね……………

「ああ、で、どういう状況だ？」

「見たまんまよ。」

月村の子供をさらって身代金要求、ついでに私の家族からも……………  
つてところでしょうね。」

「すみません。」

「ごめんね、私たちのせいで。」

刻の質問に私が答えるとすずかと忍さんがすまなそうな顔をして謝ってきた

「別にあなた達のせいじゃないでしょ。」

「そろそろ、悪いのは俺達をさらった向こうの方。ま、おとなしくしてたら帰してくれんだろ。」

私に合わせ刻が楽観的な意見を述べる

でも………本当にそうかしら？

犯人達………もうマスクをかぶっていないのよね  
………

あ、犯人の内の数人がこっちに来た。

S i d e E N D



「よお、おとなしくしてるか？」

犯人の一人が刻たちに話しかける。

「こんなことやめなさい、どうせすぐ捕まるわ。」

忍が睨みつけるが、犯人達は馬鹿にしたように笑う

「は、この国のぬるま湯に漬かったような警察に俺らが捕まるか。」

「にしてもおまえら二人は災難だったなこんな化け物なんかと一緒にいたせいで捕まったんだから」

「！！！！！！！！！！」

犯人の言葉に忍とすすずかが驚愕の表情を取る

「まさかあなた達！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんのこと？」

叫ぶ忍にアリサが尋ねる。

刻はただ犯人をにらみつける

アリサの疑問に答えたのは犯人だった

「は、やっぱり知らなかった見たいたな。」

「やめて・・・。」

「すずかがつぶやく

だが犯人はそれを無視し答え続ける

「そいつらはよ」

「やめてー！ー！。」

「叫ぶすずか、

だが犯人はにやけながら最後の言葉を言った

「吸血鬼なんだよ」と。

「・・・え？」  
「・・・」

呆けたような表情をするアリサ

すずかは涙を流し始め、忍も苦渋の表情をする

「おまえらもかわいそうな奴らだよな、こんな、けがらわしい化け物と一緒にいるせいでこんなめにあうんだからよ」  
「グアツ・・・」

心底嘲笑うように言いながら泣いているすずかを蹴る犯人

その時、

ブチ

何かが切れた音がし……、

「すずかから離れる……。」

先ほどから黙っていた刻が口を開き、底冷えのする声をあげた。

……言葉を発した一瞬後、すぐに刻は自分の気を抑えたが、分かる人が見れば分かるだろう。  
今刻の中で……辺りがゆがむほどの禍々しい気が抑え込まれているのが

「あ、なんだと？」

犯人は気分が高揚しているのか、さっきの言葉を発した時の刻の様子に気づかなかったようだ。

「すずかから離れると言った。」

刻が感情を全く乗せずに話す

だが、そんな刻の様子に犯人は全く気が着かない

やれやれ、と言ったように刻に話しかける

「おまえ俺達の話聞いてたかこいつらは（吸血鬼だろ？・・・  
・・・で、それがどうした？）へ？」

刻の返答に、一瞬言葉を詰まらす犯人

「は、お前こんなけが」 (だまれ)

そう言って刻は立ち上がる。

刻に巻きつけられた縄は完全にほどけていた

刻に話しかけていた犯人は刻から半歩ほど身を引く

周りにいた他の犯人達は武器に手を回す

「な、お前、いつの間に縄を外しやがった。」

「べつに・・・、どうだっていいだろ。」

何でわざわざためえらに教えなきゃいけない?」

心底めんどくさそうに刻が言う

「貴様、俺達を馬鹿にしてるのか!!!」





「……………覚悟はできると取っていいな？」

と一番自分に近い……と言いかすぐ隣に立って眉間に銃を突きつけている犯人に聞く。

「は？」

と声を上げる犯人A

「それは殺すためにある道具だ、生半可な気持ちで人に向けるものじゃない。」

おまえ達は殺す、そして殺される覚悟はあるのか？」

「は、なめた口をきくガキだな！！！！」

そんなもん俺達が持つてないと思ってるのか？  
てか状況が分からないのかこのバーカ。」

そしてそれに合わせ笑う犯人達、

確かに普通ならそうだろう。

この状況でそんなことをほざくのは判断能力がどうかになったやつぐらいだ。

だがそれを聞き、刻は凶悪な笑みを浮かべる  
思わず身を引く犯人達

そして

「言ったな？」

そう刻がつぶやき、押さえつけていた禍々しい殺気を解放した瞬間

「「「「「え？」「」「」「」

刻に銃を向けた犯人Aの首が飛んで行った、

そして……………

「う、撃て！！」

「うわーーーーー」

バババババ

我に返った犯人が叫び銃を撃つ、他の犯人達も一斉に銃を乱射する

だが、そこに繰り広げられたのは八手の巢になる刻ではなく

「……遅いよ。」

さきほどの一瞬のうちにすずか達を物陰の方に放った刻による、

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
一  
方  
的  
な  
殺  
戮  
だ  
っ  
た

013 とある日の事件 前編（後書き）

黒

「すみません、此処で一度区切らせてもらいます。」

刻

「にしても……俺……」

黒

「あ~~~~。すまん。」

ソニア

「つてかき、私の出番はないの!?  
なんで!?!」

黒

「……私の力不足です。  
ソニアが増えても……空気になるのが目に見えてたから……」

ソニア

「……」

黒

「だ、大丈夫。（たぶん）

他のところでは出番が増えると思うから）万が一ぐらいで」

ソニア

「……………」  
頭……………冷やそうか？」

黒

「すみませんでしつうぶおうああ！！」

刻

「ああ……………では感謝コーナー！！」

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！！！！  
バルディツシユ様、リーク様、ルファイト様、HAZUKI様、刃  
の下に心在り様、感想をありがとうございました」

黒

「うつ……………ひどい目に合った……………」

え……………『ソニアが太らないか？』そんな心配をしてくれ  
た貴方達に、この言葉を送りたいと思います。」

『ソニアはデバイスなので太りません。体格など思いのままです』

刻

「世の中の女性陣に喧嘩売ってるな……。」

黒

「仕方ない、デバイスなんだから。」

刻

「無りやりまとめたな……。」

できるだけ早く残りも書きあげます

014 とある日の事件 後編(前書き)

最後、追加しました(2010/6/18)



014 とある日の事件 後編

Side はずか

今日私はなのはちゃん、アリサちゃん、刻君と一緒に遊ぼうと家に招待し、一緒に家の車で向かってました。

実は、刻君のことを家族に見てもらおうっていう考えもあったんだけどね。

おねえちゃんが一緒に乗っていたのも、そんな理由からだった。

あのと看以来一度も刻君からは、私たちみたいな人間じゃない感じはしなかったから、やっぱり気のせいだったのかもしれないけど。

おねえちゃんにそつと聞いても何の感じもしないって答えられた。

でもその途中私達と敵対する裏組織にとらわれて、二人に私たちの正体を知られちゃった。

そして犯人の一人が私をかけた時

「すずかから離れる……。。」

刻君が底冷えのする声で呟いた

そしてそつちを見た私とお姉ちゃんは背筋が凍る思いをする  
もう抑え込んだみたいで分からないけど……さつき刻君  
が一瞬放っていたのは

……今まで感じたことのないほど強烈な……  
……殺気だった

「あ、なんだと？」

犯人は気分が高揚しているのか、さっきの言葉を発した時の刻君の  
様子にまるで気づかずにはなす

「すずかから離れろと言った。」

刻君が感情を全く乗せずに話す  
私はそれに恐怖を覚える。

なのに犯人はやれやれ、と言ったように刻に話しかける  
何で気付かないの？

「おまえ俺達の話聞いてたかこいつらは（吸血鬼だろ？……  
……で、それがどうした？）へ？」

刻君の返答に、一瞬言葉を詰まらす犯人

でも、私も……刻君は私たちが怖くないの？

「は、お前こんなけが」（だまれ）

さらに言おうとする犯人に口をつぐませ刻君は立ち上がる。

刻君を縛っていた縄は完全にほどけていた

刻君のすぐ近くにいた犯人は半歩ほど身を引き、  
周りにいた他の犯人達は武器に手を回す

「な、お前、いつの間に縄を外しやがった。」

「べつに……、どうだっていいだろ。」

何でわざわざためえらに教えなきゃいけない？」

心底めんどくさそうに刻君が言う

まるで周りの反応を意に介していない

「貴様、俺達を馬鹿にしてるのか!!!」

俺達は「夜の一族」を殲滅すべく結成され、やってきた数百人からなる偉大な（はいはい、虚偽の報告はやめようね。お前達の組織の名は「ヴァンヘルジュ」本部は上海、リーダーを「龍」とする組織に従う組織の一つ。確かに龍はお前らに依頼したみたいだが全く成功すると思ってない。つまりそんだけ末端、ってかいらないしっぽ切り。構成人数もたった32人、つまり此処にいるので全員。っつかさあ~~~~お前から自身そいつらに吸血鬼みたいになる措置をしてもらってて、吸血鬼をけがらわらしいって………おまえらの言動っ



「・・・・・・・・・・覚悟はできると取っついていいな？」

と一番刻君に近い・・・・と言つかすぐ隣に立って眉間に銃を突きつけている犯人に聞く。

その声におびえと言った表情は全く感じられない

「は？」

「それは殺すためにある道具だ、生半可な気持ちで人に向けるものじゃない。

おまえ達は殺す、そして殺される覚悟はあるのか？」

物怖じもせず、眉間に突きつけられた銃を指さしながら尋ねる。

正気の沙汰とは思えない

「は、なめた口をきくガキだな！！！！」

そんなもん俺達が持つてないと思ってるのか？  
てか状況が分からないのかこのバーカ。」

だけど、その犯人は刻君を馬鹿にして、そしてそれに合わせ笑う犯人達、

確かに普通なら、そうだ・・・・・・・・

この状況でそんなことをいえるのは判断能力がどうかなってしまっ  
た人ぐらい・・・・・・・・

・・・・・・・・でも刻君は違う！！

だってさっきの言葉を言い始めた時から・・・・・・・・刻君から・・・・・・・・  
にじみ出初めているのは・・・・・・・・

そう思っていた時、刻君は犯人の答えに笑顔を・・・・・・・・凶悪な笑みを  
浮かべこたえる

思わず身を引く犯人達。

このときになってやっと刻君の様子 of 異常さが分かったみたい・・・・・・・・  
・・・・・・・・

でも・・・・・・・・多分もう遅い。

だってさっきから刻君からにじみ出たのは・・・・・・・・





ヒュ

「「「「「え?」「」「」「」

そう刻君ががつばやいた瞬間、刻に銃を向けた犯人の首が飛んで行く。

「「「!!!」「」

犯人達が呆けたと思ったたら私たちは一瞬で物陰の方に飛ばされた多分刻君がやったんだろう

そして私たちの目の前で

「う、撃て!!」

「うわーーーーー」

バババババ

「遅いよ」

刻君による、  
.....  
一方的な殺戮がはじまった

014 とある日の事件 後篇

刻は初めに倒した人の銃を奪い、相手の銃弾を避けながら確実に相手を打ち抜いていく。

しかもそのまま犯人達の元へ飛び込んでいき、武器も使わず、体術だけで相手を倒していく。

刻に寄られた者は、貫かれる、分断される、へし折られる、爆散させられる、いずれかの末路をおい、全員倒れ伏していく。

生きているなどと誰も思えないような状態となって

「う……………」

アリサが青い顔をして吐く

すずかも、口を押さえ、必死に我慢する。

忍は、吐く気配はないが……………青白い顔になっている。

そして片づき、刻が動きを止め、彼女らの方へ向かった

殺気は完全に消沈し……………悲しそうな顔をしながら

「大丈夫か？」

「う、うん。」

話しかける刻に答えるすずか

「あなたは……………」

忍が何か言おうとした  
その時

ダーン

刻の頭が撃ち抜かれた

「え？」

いきなりの展開にしばし思考がストップする三人  
だがすぐに何があったか理解し

「いや……………」

「刻……………」

叫ぶすかとアリサ

ダダダダ

だがその間にも、何度も刻の体に弾丸が撃ち込まれる

「ひやはははは、やってやったぞ化け物め!!」

目を血走らせ笑う犯人。

どうやらこいつだけは物陰に隠れ隙を窺っていたらしい。

刻が冷静さを失っていたという理由もあるのだが……………

「いやだ、いやだよ」

「黙れ、このけがらわしい吸血鬼め、てめえもすぐに後を追わしてやるよ……!!」

泣き叫ぶすずかに銃を突きつける犯人

「うぁ……………」

すずかはそれを見て絶望とも悲愴とも感じる声をこぼす

「死ねー！ー」

そして犯人が引き金を引こうとした瞬間

「バレッターゼフレア  
踊る爆炎」

銃自体が爆発した。

「ギャー……」

ボロボロになった手を抱えうずくまる犯人  
そして

「全くひどいな、見るよ。あちこち傷だらけだ。  
服だって穴だらけで、しかも血で真っ赤じゃねえか。」

「なあ！……！」

その傍らに撃たれたはずの刻が歩み寄ってきた  
犯人はそれを見て驚愕の声を上げる

すずか達も完全に絶句するが、次に起こった光景が彼女らを一層驚  
かせた



刻を見ると体も頭もあちこち傷だらけだったが、それらはまるでビデオを逆回して早送りするようにとんでもない勢いで治癒されていく。

そしてあっという間に刻は傷どころか治癒の後さえもない状態となる。誰も彼が今先ほど撃たれたと聞いて信じる人はいないだろう。

そしてその状態を見た刻は

「うん、ふさがったな。で、服も（パン・バシン）っと。」

手を叩いてボロボロになり、血で真っ赤になった服を触ると、それは電気（？）を発生させながらあっという間に新品と同じになった。

「なっ・・・貴様なに者だ、何をした！！！！」

手を抑えながら犯人が刻に叫ぶ

刻はそれを見、

「ん？」

おまえの銃を爆発させたのは俺の魔法で服を直したのは錬金術。  
んで俺が何者かと言うと……  
ってかおまえ自分で言っただじゃないか、俺は……」

刻は再び口元を三日月の様にゆがめ、凶悪な笑みを浮かべ自分の隠していた氣を露わにする  
人外の氣を

それを感じ取ることのできた犯人は震え上がる。  
それを満足そうに見、

「バ・ケ・モ・ノ・だ・よ。  
それも多分世界一の、ね。  
く……くくく……あはははははははははは。」

狂ったような笑い声を上げる刻  
それを見た犯人は戦慄し、

「う、うわ……」

刻から一歩でも、できるだけ離れようと逃げ出す  
だが、

シュ・グッ

「どこ行くの？」

刻は一瞬で犯人の正面に回り込み、頭を鷲掴みにする

「は、放せ、頼む！！ゆるしてくれ！！！」

必死に懇願する犯人、だが刻は冷やかな目でそれを見下し

「そうやってきた人たちを、貴様たちはどうした？」  
と尋ねる

「あ……………」

思い込みがありすぎ何も言えなくなり、絶望に落とされる犯人  
そして刻は頭を握りつぶそうと手に力を込め始める

ギユウウ……………」

「ぎゃあああああ……………」

だがその時、

「やめて……！もうやめて……！……！」

すずかが叫んだ。

刻はそれを中断し、怪訝な表情をしながらさすがに尋ねる

「……………なんでだ？」

「もうそれ以上する必要はないよ。」

「そいつには聞かなきゃいけないことだってあるし。」

さすがとアリサの返答を聞き、少しの間黙ったと思つと

「……………よかったなお前。死ななくてよ。」

そう呟き、犯人を放し……………立ち去ろうとした。

「待つて。」

「……何か？」

忍の声に立ち止まる刻  
振り向かずに質問する

「どこに行くの？」

「家に、そしてこの町から出ていきます。」

「なんで!?!」

刻は振り向き、笑いながら答える

「君は俺といたいのか?こんな俺とさあ。」

「それなら私だって吸血鬼だよ……ごめんアリサちゃん黙つて。」

「別にいいわよ(でも、)第一あなた襲つたために私達と友達になつ

たの（そんなことない！）でしょ、ならなんの問題も無いじゃない。だから刻、なに勝手に行くこうしてるのよ私はあんたが吸血鬼だってどうも思わないわよ。」

刻はすずかとアリサが問答してるうちに立ち去ろうとするがまた呼び止められる

「俺は吸血鬼とは比べ物にならない化け物さ。すずかと忍さんなら俺の『中』が分かっただろ？俺はもう基盤<sup>ベース</sup>が人間だっただけの生物さ。」

第一すずかや忍はその力を使ってどうこうなんてしていない。だが俺は……はつきり言うてこう言う血なまぐさいこと、俺にとっては日常茶飯事だ。四歳ぐらいからな！！」

刻は答える。その顔には明らかかな苦笑が現れていた

「それでも構わない……だからお願い、一緒にいて。」

「……言っとくが俺は「夜の一族」の派閥闘争に参加する気はないぞ。」

「そんなこと望んでない。ただ私と……その……友達でいて。」

刻は赤くなりながらつぶやくすずかを見、そしてため息をついた

「……で、ほかの二人は？」

「私もすずかと同じね。すずかの親友でいてあげてね。」

「私も、っと言っかけてに逃げ出したら許さないんだから。」

二人の返事に再びため息をつく刻

「はあ……。物好きな奴らだなお前ら……。」

その顔には苦笑が現れていたが、何処かすっきりしたような雰囲気があった



「で、説明はしてくれるの?」

「ある程度までならね。なにが聞きたい?」

「全部」

「いや全部って」

アリスの質問にやや困った顔をしていた刻に忍が助け船を出した

「じゃあまずあなたは何者、はっきり言ってあの治癒力は私達の比じゃないわ」

「何者かって言われてもな、組織【守護者】第十三柱としか言いようがない。

んで俺の体だけど、ベースは普通の人間だけど、魔術とかで色々改造されてんだよな」

「魔術?そんなの本当にあるの?」

「もちろん………で、実は俺ここの並行世界の住人で、異世界移動が出来るほどの実力者でね、その御蔭で数々の世界にあるほとんどの魔術、魔法、神術その他もろもろをマスターしてるってわけ。」

「並行世界の住人……そんなことが、いや……でも……  
……だからあなた達の報告書はあんなにおかしかった  
のね……ごめんなさい勝手に調べてみたの。」

アリサが謝罪するが刻は肩をすくませ答える

「別にいいさ、俺もソニアもそんなの気にしないよ……悪  
用しようとしないう限りは。」

「ええもちろんよ、そのデータだつてとつくに廃棄したわ。」

取りあえずアリサはこれで納得した。  
だが、忍は未だ疑問に思うことがあった

「じゃああなたのその異様な気もそのせいなの？」

「まあ、ある意味はそうだな……」

「ある意味？」

「さっき言つたる？ 基礎ベースが人間だつて……俺はキメラなんだ。」

「な！？」

「そ、俺の中には大量の因子がある。だから俺の気もこんなになっ  
ちやっってるってわけ。」

……どうっ……

刻は肩をすくめながら本当に俺といれるかと聞く

しかし、すずかはしかめっ面を見せ、アリサは刻をにらみつけた

「確かに衝撃的だけど、それでもいい。」

「……………逃がさないわよ」

「そ。じゃもういいかな。」

あ、後俺のことは皆に内緒にしといてくれ。なのはも含めてだな。」

「なのはもなの？」

「ああ、でも三年の終わりには話ささ。理由は聞かないでくれ。」

322

「わかったわ」

「わたしも」

「わたしもね」

刻にうなずく三人

こうしてこの三人はA's どころか無印が始まる前に刻と魔法の

ことを知ることになってしまった。

それがどのような影響を与えるのかは神のみぞ知る！！！！！！

「いや作者は分かってないとダメだろ！！！」

『バレッターゼフレア  
踊る爆炎』

ネタ元は、R A E

指定した空間に大小自在の爆弾を設置する。自分がその空間を認識

しているほど威力が増す。

実際はこれ、魔道具DBによって起こすのだが、まあ刻は同じことを魔法でできたってことで。

「それから数刻後」

中国

ある高層ビルの一室で窓の外の夜景を見ながら龍は背後にいる部下から報告を聞く

「以上が今回のあらまわしのようです。」

「ふん！！確保まではうまくいったのにまんまと殺られよったか。まあ良い。どうせあんな奴らに期待などして居らん。」

部下の報告に忌々しそうな声を上げる龍。

此処までうまく行くなかも少し戦力を与えておけばよかったか？  
などと考え、

次の『夜の一族の殲滅』の作戦を思案する。

だがそれが実行されることは一切ない。

なぜなら・・・・・・・・・・・・・・・・

「そんなんなら、最初<sup>ハナ</sup>つからあんな奴らよこさなきゃあよかったな。  
そうすりゃあ俺の逆鱗に触れることは無かったかもしれないのに・・  
・・・・・・・・」

突然ドアの方から第三者の声がかかる。

振り替える龍とその一味

そこにはいつの間にかドアを開け侵入してきた黒コートを目深にかぶった少年がいた。

彼の両手にはリボルバー式装弾数六発の漆黒のハーデイス装飾銃を持つ。

「いや、あいつらを傷つけようとした時点でお前らが俺の逆鱗に触れるのは時間の問題だったかな？」

「何者だ貴様！！外の部下はどうした！！」

叫ぶ龍

「全員死んだよ。後はお前たちだけだ」

淡々とコートの子は答える

一斉に銃を抜き、構えようとする部下たち。

だが刻はその動作が終わる前に全員の脳天を早打ちで打ち抜く。  
一発たりともミスはない

「やっ」



少年は龍のもとに歩いていく。

「待て！！、貴様、わしが誰か分かってるのか！！」

少年は構わず近付いていく

龍は後ずさり始める

「そうだ、わしの下に来い！！優遇してやるぞ！！」

少年は立ち止まる気配すらしない

龍は尻もちをつきながらも後ずさるが、ついに窓に追い詰められる

刻は龍の目の前に立ち、眉間に銃を突きつける

「ま………待て………待ってくれ！！話せば分かる！！  
何でもする、だから頼む！！見逃してくれ！！」

そこでやっと刻が動きを止め口を開く

一瞬安堵する龍

だが、

「命乞いなんかをするな。見苦しい。話したところで何も変わらない。」

第一貴様はもう手を出したんだ。」

そこから出できた言葉に今度こそ絶望に落とされる

「その時点で……お前はもう戻れなくなったんだ。」

殺られる覚悟がないなら……はなつから殺ろつととするな」

「く……く……バカにしゃがって……さあ、殺してみろ少年、このことを知った誰かが、いつか貴様を追い詰め殺す!! そして俺も一生恨み通してやる!!」

俺を殺さなければこのことはなかったことにしてやるぞ?。」

なけなしの虚勢を張り、どうにか助かろうとする龍  
だが少年は淡々と答える

「どうぞ。恨まれる覚悟なんてとっくにできてる」

驚愕に龍は息をのむ

「待て……待ってく」

龍が最後まで言い切る前に少年は最後の言葉を紡いだ

「さようなら……龍<sup>ロン</sup>。できれば俺を……許さな  
いでほしい。

さあ、此処が君の終焉<sup>ユール</sup>だ。」

そして少年は引き金を引いた

この日より地球の裏で正体不明の暗殺者<sup>キルスマン</sup>の名がささやかれるように  
なる

その名は『<sup>コードネーム</sup>終焉』



014 とある日の事件 後編（後書き）

黒

「やっと終わったー！！」

ソニア

「お疲れ様」

刻

「にしても二話編成にしてよかったのか？」

黒

「よかつたんじゃない？」

前編4000字、後編5900字ぐらいあるから。」

ソニア

「あ、そうなんだ。」

黒

「うん、よくやったよ（そっぴや作者？）ん？」

刻

「バラして本当に良かったのか？」

黒

「では感謝コーナー」

刻・ソニア

「「逃げた!!」」

黒

「この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。」

バルディッシュ様、HAZUKI様、刃の下に心在り様、猫缶様、感想をありがとうございます。

次回、ついに無印に突入です。

たぶんこれは今日中に投下できる………と思います。」

「でもよかったな。かなり改善できて」

「でも書きたくてもうまく書けなかったこともあったんだよ……」

「」

「たとえば？」

「犯人たちが刻の様子に気づかなかったのは、大きな力を手に入れ

「気がとても大きくなっていたから。とか。」  
「ああ……なるほどな……」

015 無印突入(前書き)

やっと無印突入です



時は流れて……三年生最初の日……。

Side  
刻

「いやー時が経つのは早いなー、この二年間、三日の間に終わった気がするよ。」

(だからそういう危険な発言はやめろって、今は突っ込み要  
因ないんだし。)

何か聞こえる気がするけど、まっいいか。

じゃあとりあえず経過報告。

現在、俺の作った会社「ビハインド」は俺が帰って見ると、いつの間にもやら次元世界を代表するどころかダントツの総合企業になっていました。

周囲からは、あまりの本社の情報の無さとかで「ブラックボックスカンパニー」って言われたりしています。

裏とつながっている、とか言った黒いうわさ（正解ではあるが）も色々存在する。

んで、管理局が「不法な研究をしている」という情報があった」って言って視察に来たこともあったらしい

まあ実際は弱み見つけてゆすってやれ、っていう上層部のやつらがでっち上げた嘘だったんだが……。

こちらが断るのを火蓋に、「隠すのは怪しい」って難癖付けて強制捜査したり、「管理局に強制捜査された会社」ってのネタに、「会社の信用を落としてほしくなかったらこちらの言うことを聞け」って脅したりしてくるつもりだったらしいけど。

だがこっちは「分かりました。思う存分どうぞ。」ってすんなり通したので、呆気にとらわれた、んでその後「いきなり捜査に来ても快く通し、しかも全く問題が見つからなかったともクリーンな会社。」って世間一般に認知され、これ以上手出しができなくなっ

悔しがってたらしい

うん、情報局を作っておいたのは間違ってたかったみたいだ。

ん、本当にヤバいのはしてないのかって？

してませんが、違法研究、なにか？

俺の考えた一線（人の命や人生をもて遊んだりする（多少の例外はあるが））を越えてないからいいんだよ。

管理局が裏でやってるのに比べたら全くだ。

内容だって、実際は管理局が違法だって叫んでるだけってやつがほとんどだし。

さて、こっちの準備はほぼ順調だ。

はっきり言って原作の終わり方じゃあ、すぐに悲劇が繰り返されるんでね。

やるからには徹底的にやらせてもらおうよ？

待ってるよ最高議員とそれに連なるもの、あとその他、今のうちに  
せいぜい甘い汁吸って、胡坐かいているんだな。

後十年以内に俺がお前らを殲滅しつくしてやるよ。  
ウラミハラサデオクベキかってな。

S i d e   E N D

0 1 5      無印突入

「ん、今年はなのは達と同じクラスなのか。」

掲示板に自分の名を見つけた刻がつぶやく

「うん、初めてだね。」

アリサちゃんとすずかちゃんも一緒だよ。」

なのはがそれに答えるが、ふと刻は考える

「……そういえば、おまえらって三年間一緒のクラスなんだよな。  
五クラスあるから、 $\binom{1}{5} \times 3 \times 5 \times 3 \parallel 1 / 15625$ 。  
……  
15625分の1ってどんな確率だよ……。」

「なったものはしょうがないじゃない。」

「とりあえず今年一年よろしくね。」

「ん、ああ。」

アリサとすずかに刻が答える。

「思い出に残る一年にしたいな」

「そうだなあ。」

(安心しろなのは間違いなく一生思い出に残る、今までにない一年になるから。)

数週間後

「あつこつちこつち……ここを通ると塾に行くのに近道なんだ」

帰り道、アリサの提案で、刻たちは公園の横道を通ることになった

少し歩くと、

「あっ………!!」

「どうしたの？」

「なのは？」

「あっ………うん、なんでもない!!ごめんごめん」

突然声を上げるなのは

アリサとすずかが心配するがなのははごまかす。

「大丈夫？」

「うん!!」

「じゃあ行くっ」

なのは以外は歩きですが、なのはは立ち止まったまま思案にふけり

「………まさかね………」

とつぶやく。

「なのはちゃん？」

「おい、置いていくぞ。」

「あっ……うん!!」

すずかと刻に呼ばれ、なのはは走りだし皆に追いつく

だがその時

(助けて……)

頭の中に再び声が聞こえたなのはは突然止まり、それにつられ他の三人も止まる

念波が聞こえなかったすずかとアリサは怪訝そうな顔でなのはを見る

「なのは？」

「今……なにか聞こえなかった？」

なのはの疑問にすずかとアリサは顔を見合わせる

「なにか？」



「なんか声みたいな…」

「別に………」

「聞こえなかったよ」

「ああ」

3人は周りを見渡し

刻は目だけ念波の発生源に向ける

そして

(助けて!!!)

「あ………」

ガサガサ

今度こそ声ははっきり聞こえなのはは茂みの中へ走りだした

「なのは!?!」

「なのはちゃん?」

「追っぞ!」

三人はなのはを追いかけて茂みに入っていく

そしてその目の前に現れたのは一匹の生物。

そこには赤い<sup>レイジングハート</sup>宝石を持った傷だらけの<sup>ユートノ・スクライア</sup>フェレットもどきがいた。

「どうしたのよ、なのは? 急に走りだして」

「あつ見て!! 動物……ケガしてるみたい……」

「うん……ど……どうしよう?」

「どうしようって……とりあえず病院!」

「獣医さんだよ……」

「え〜と……この近くに獣医さんってあったっけ?」

「あ……えつと……このあたりだと確か……」

「待って!! 家に電話してみる!!」

傷付いたフェレットの処置を話し合うのは達、

それを見ながら刻は誰にも気付かれないように呟いた

「（いよいよ無印開始か・・・。）」

015 無印突入（後書き）

黒

「眠い……………」

刻

「まあ、さっきまでレポート書いてたからな……………」

黒

「ああ、ホント目がいてえ……………」

刻

「じゃあさっさと終わらせようぜ？」

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！！

ソニア

「ソラト様、HAZUKI様、感想をありがとうございました！！」

黒

「やっと、無印に突入です。」

刻はどのように介入していくのかどうぞお楽しみに！！

## 016 ジュエルシード

その日の夜。

「キヤア!!」

真っ黒になって手足が無くなったモリ　ウミたいな魔法生物から逃げるなのはの姿があった

なのはは逃げながら一緒に逃げるフェレットの説明に耳を傾ける

「僕らの魔法は発導体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そしてその方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです!!」  
そしてあれは………忌まわしい力の元に生み出されてしまった思念体。

あれを停止させられるにはその杖で封印して元の姿に戻さないと行けないんです!!」

なのはは赤い宝石レイジングハートから起動した杖を見、聞く

「よく分かんないけど……どうすれば？」

「攻撃や防御みたいな基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力とする魔法には呪文が必要なんです！！」

「呪文？」

「心を澄まして……心の中にあなたの呪文が浮かぶはず」

そう言われてなのは目を閉る。

目を閉じている間に謎の生物がなのはに向かって襲いかかってくる、

だが

349

《 protection 》

レイジングハートの声とともに展開されたバリアが敵の攻撃を防ぐ。

そしてなのはは目を開ける、その目は真剣そのものだ

「リリカル、マジカル」

「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシード！」

杖を掲げながら呪文を紡ぐなのは、それを見ながらフェレットは叫ぶ

「ジュエルシード、封印！」

《Sealing Mode・Setup》

なのはの魔力糸が敵を縛り上げ、敵の額に「????」の文字が浮かび上がる。

《Stand by ready》

「リリカル、マジカル。」

ジュエルシード、シリアル????、封印！」

レイジングハートの声に答え、（何故かくるくる横回転しながら）呪文を紡ぐのは

《sealing》

そして、なのはの魔力糸が敵を貫き、宝石の状態に封印する。

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

その宝石に近づき、なのはに指示を出すフェレッツ……いや、  
ユーノ

なのはがレイジングハートの先を近付けるとジュエルシードが宙に  
浮かび杖のコア（赤い宝石）に取り込まれた

《R e c e i p t . . . N o . . . ? ? ? ? 》

そしてなのはの体がピンク色に光り、元の服の姿となり、杖は赤い  
宝石の姿に戻りなのはの手のひらの上に乗った



016

ジュエルシード………後フェイトとの遭遇

刻とソニアは、なのは達が戦っていたはるか上空で逆さまに浮かび、  
彼女らの戦いを見ていた。

ってか、刻はなぜか空座第一高等学校の制服を着崩している

「……はい、まんま某仮面かぶると強くなるやつらの一人、平子真子ひらこしんじですね、本当にありがとうございました。」

「（へー視点が違つとまた新鮮だなー。）ま、初戦闘としちゃ十分すぎるぐらいだな。」

「魔法を知つて半刻も経たないうちに封印をマスターね……。刻ほどじゃないけど、あの子も十分すぎるほど今の魔導師を馬鹿に出来る存在よね……。にしても、「リリカル、マジカル」って一々言つたり、あんなくるくる回つたりする意味あるのかな？」

ソニアの質問に刻は答える

「さあ？魔法の起動キーか……。とつさに思いついたパフォーマンスじゃないのか？」

「でも刻は封印する時、あんなパフォーマンスはしないよね？」

「誰があんな恥ずかしいことするか……にしても、ジュエルシードか……。」

「どっかしたの？」

刻のつぶやきにソニアが覗き込みながら聞く

「いやな、ジュエルシードってあんな小さいけど半端ない魔力内包してるだろ？あのしくみ、カードリッジに採用できないかなって？  
願い叶える仕組み取り外したらさらに入るはずだし。」

「一発だけで次元震を起こす魔力が封じ込められたカードリッジ……」

うん、アリだね」

刻の意見を考え、答えるソニア

それを聞き、よし、と手を叩く刻

「んじゃ、そうと決まれば早速、研究&開発だ!!!  
ジュエルシード探しに行くぞ!!!」

「イエッサー!!!」

できたら私でも簡単にノーバディーのやつら血祭りにあげられるかな」

ソニアの返答に言葉を詰まらす刻

「あ、ああ、多分・・・な。

まあ、デプトぐらいまでならいけるだろ。  
じゃ行くぞ。」

「はい」

「（とりあえず原作であんま関係しないジュエルシード集めるか。  
それでも十個近くあるし。にしてもいつごろ原作に介入するかな？）  
」

と思案を巡らせる刻、

まあ、他にも、

（にしてもソニア最近擦れて来たよな。何でだろ？・・・  
・・・俺のせい？やっぱり？しょうがないじゃん。

ま、とりあえずそれは置いといてジュエルシード集めジュエルシード  
ド集め（現実逃避）

・・・あ、そーいやフェイトっていつ来るんだろっ？（

とかとも考えていたが………

ちなみにその数日後、

刻とソニアがはやての家に泊まりに行く準備をしていた時

「ソニア、行く準備はできたか？」

「もうちょっと待って〜。」

「はやくs (ピンポーンくん?)」

ピンポーン

「はい今出ます。」

ガチャ

「あ、どうもこんにちは。今度となりに越してきたアルフっていいです。」

で、「ごっちは妹のフェイト。」

「よろしく……。」

「……あ、どうも、こちらこそよろしくお願いします……。」

357

と言う感じで刻の疑問が解けました。

やって来ました、刻の隣部屋に……！！

突然の展開に刻はやや混乱した！！

「それにしても二人ですか？」

「ああ、姉妹で生活することになるんだよ。」

「（……もういいや、）そうなんだ、実はこっちも兄妹二人暮しなんだよな。ま、お隣同士兼似た者同士ってことで仲良くしようぜ。」

一瞬思案にふけり、思考を放棄する刻

「ああ、じゃあまたこんど。」

ガチャン

アルフ達が出て行くのを軽く手を振りながら刻は思う

「（ま、仲良くなって損はないよな。）」

「かわいい子だったね。」

でもあのお姉さんって、あの子の使い魔だよな。

つと言うか、姉妹って言う割にあの二人似てなかったし……。」

刻の近くに来、声をかけるソニア  
だが刻は思考にふけており答えない

「（せっかくのお隣さんだし、俺が魔術師だつてことは……  
ばれてるかどうかが微妙だな、Dぐらいの魔力は一応放出されてるか  
らな……）」

「刻どうしたの？」

刻をのぞきこむソニア、そこでやっと気付く刻

「いや、ちょっとあの二人が気になって……ってどうしたソニ  
ア！」

にやけるソニアにたじろぐ刻

「ねえ刻、気になるってどういうこと？  
一目ぼれ？（おい、ソニア？）一目ぼれね、どっち？ねえ、教えて  
？（ちよつと待て！！）俺が気になったのは、あいつらに俺が魔法  
使えることばれたかどうかってことだ！！！！」



それを聞き詰まんなそうにするソニア

「何だそんなことだったの。」

刻について好きな人が！！って期待してたのに……………」

それを聞きため息をつく刻がいた

016 ジュエルシード（後書き）

黒

「いきなりですが感謝コーナー！！」

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！！」

ソニア

「ロキ様、HAZUKI様、感想をありがとうございます！！」

黒

「ではまた今度。」

すみません今チヨイ忙しんです

## 017 介入開始

ある日、刻ははやての買い物に付き合い、そのままはやての家に向かっていた

「じくろーさん。」

「ああ……………」

にににしているはやてと、やや虚脱状態の刻が対照的だと言つか刻は少し白くなってる気さえする。なんかこう……………全体的に……………」

「なんや刻にー、白うなってもうて、まるで世界チャンプと戦った後みたいやで。」

「当たらずとも遠からずだろ……………」

〈回想、数十分前、とあるスーパーのタイムセールゾーン〉

「じゃあ、あれよろしくな。」

「あそこにか！！？？」

はやてが指さす先には主婦の方々がまるで、バックヤードレスリング又は終了間近、0・0のアメフトの試合の様を体現していた

「じゃあ刻兄は、か弱い足の不自由な美少女に行けって言うんか？」  
(涙目で上目づかい)

「ああ、もう！！  
分かったからそんな顔すんな！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
実況中継、音声のみでお楽しみください



・・・・・・・・・・以上、実況中継でした

~~~~~ついでに回想も終了~~~~~

（あんなタイムセールスって壮絶だったっけ？
なんか人間やめたっぽい人いたし・・・・。
ってか何人がマジで殺り合ってた？）

って感じでふらふらとはやての車椅子を押しながら歩いていく刻、
そのとき

「あ、刻じゃないか。ちょうどよかった・・・・・・ソニアちゃん
は？」

「なー刻兄、この人は？」

刻とはやては士郎とエンカウトした、まあ戦いはしないが

「高町士郎さん、俺の友達の父親さ。まあ、俺自身ともちょっとした知り合いなんだがな。(へー)

ソニアははやての家で俺達を待っていますよ。」

はやてと士郎の質問に答える刻

「はやて？」

「ああ、俺達が世話してるこの子狸の名前です。」

はやてを指さしながら答える刻

はやてはガンと言った表情を取る。十中八九わざとだが

「ちよ、ひどいわ刻兄。

こんな薄幸の美少女を子狸なんて、およよよ……………」

「うるさい、色んな無理難題こっちの良心に訴えかけながら押しつ

けてくるやつは、子狸で十分だ!!!
つてか自分を薄幸の美少女ゆうな!!
わざとらしい泣きまねもするな!!!」

「む〜!!!」

刻とはやてのやり取りを見て笑う土郎

「ははは、仲がいいんだね。

そうそう、今度僕たちみなで温泉に行くんだけど、君達もどうだい
?」

「私も良いんですか?」

「もちろん。」

「刻にー、行こー」(子供の純粋な目)

刻のすさんだ心が痛たむ!!!

ダメージ限界突破!刻の精神に9999999のダメージ!!

刻ははやてに屈した

「じゃあ、おねもよろしくお願いします。」

「ソニアちゃんはどつなのかな？」

「あいつなら俺が行くって言ったら喜んで付いて来ますよ。」

「そうか。じゃあ連絡しとくよ。楽しみにしてくれ。」

「はい。」

こうしてはやてはなのはと顔を合わせてしまつことになった！
大丈夫か原作！！！

「やってるのはおまえだろつが！！！」

「どうしたん刻兄!？」

「あ、ワリイ、気にすんな」

017 介入開始

くくく やって来ました温泉に！！！！！！くくく

S i d e
刻

ってわけで、あの一週間後温泉にやってきた俺達

ああそうだ。ジュエルシードは集めたよ、原作にあまり関係ない奴
だけ。

研究したおかげでカードリッジの性能が飛躍的に伸びました。

研究（あれ？探究だったけ？）に終わりはないって言った人がいるけど、あれ本当だよな。

でも予想以上に出力が大きすぎてデバイスが耐えきれなくなっちゃった。

いや、あれはビビった。ロードした瞬間デバイスが吹っ飛んだんだもん。マジで。

頑丈な試験室でやってよかったよほんと。

取りあえず今度は個のエネルギーに耐えきれぬシステムの構築だな。

ん？ 介入？

まだしてないよ。

今日までは大人しくしてるつもりだったから。

まあ、とにかくそんなわけで……。

さっそく俺達は風呂に入ることになったわけだけど。

Side END

「なーなのは。」

「この風呂ってペット同伴OKだっけ？」

「大丈夫だよ、ユーノ君は賢いから。」

「いや、そういう問題じゃあないと思うぞ？」

刻の質問になのが答える

だがその答えは何処かおかし

しかしここで桃子さんが助け船を出した……………なのはに、
ダメな内容で

「まあいいじゃない……………ばれなければ。」

「それでいいのか保護者あゝゝ!!
完全に間違ったこと教えてるぞ!!
士郎さんなんか言ってください!!」

「すまない、俺の家庭内ヒエラルキーはあの二人より下なんだ。」

そう言って目をそらす士郎さん

どうやら高町家での士郎さんの立場は女性陣（9歳の子供も含む）より低いらしい

一応党首なのに………

その一方では、はやてとすずかがユーノを触りながら話していた
ユーノは二人に撫でられている、まんざらでもなさそうだ

「にしてもこの子、ユーノ君って言うんやな。」

「うん、私達できれいにしてあげようね。」

あ、ユーノが暴れだした。
今まで気がついていなかったらしい。

「おい、ユーノが暴れだしたぞ。」

「変だなー。いつもはおとなしいのに。」

刻の言葉に首をかしげながらなのはが言う

「さ、行こうユーノ君。温泉につかったら落ち着くよ。」

「キュー、キュー……！」

そして連れられて行くユーノ。

どんなにもがこうと所詮今のユーノはフェレットである

「ドナドナドゥ〜ナ〜ドゥ〜ナ〜 ドナドナドゥ〜ナ〜ドゥ〜だな。」

まあ行くのは桃源郷だろうけど。」

「つくづく思うけど、君って全く子供らしくないよね。」

なのは達を見送りながらつぶやく刻に士郎が近づきながら話しかける
士郎さんの方に向く刻

「まあ、裏の世界にどっぷりつかって生きてきたんで、
でも俺ほどじゃないけど、なのはも妙に大人びたこと言うことあり
ますよ?」

「まあ、僕と、恭也のせいなんだろうな!。
というか、そこで恭也が僕達の話思いつきり聞いてるけどいいの?」

「いいんですよ、すでに俺に関して色々といぶかしんでましたから。
じゃ、行きましようか、温泉の中で話しますよ恭也さん。」

「なるほど、そんなことが……。」

「別に信じてもらうかどうかはあなたに任せますけどね。」

あ、あとこれで俺のこと知ってるのはあなた達二人と、忍さん、すずかちゃん、アリサちゃんです。この三人は誘拐事件の時に話しました。

他の人たちにもそのうち言うつもりですけど、その時がきたらこちらから言うのであなた方から広めることは出来ればしないでください。

なのはにも言わないでくださいね……ヒエラルキーとかあると思いますけど。」

「ああ、安心してくれ。誰にも言わないよ。」

それにしても君が『終焉』だったのか……。」

「私も初めて知ったな。まあ活動を始めたのがあの後だったから仕方ないが……。」

「まあ、結構成り行きだったんですけどね……自分で決めて実行したんです。」

後悔はしてませんよ……。」

ふ……と苦笑する刻

だがすぐにその表情を振り払う

「すみません、いやな気持ちにさせてしまいましたね……それにしても……。」

「キヤア」

「いや、やめて〜。」

「ちよ、あんた……その手の動きやめなさい!!」

「う〜」

「うん、みんなまだほとんど成長してへんけど将来は有望やでー、
第一なのはちゃんは桃子さんのこの」

「あ……」

「遺伝子受け継いどんやから!!」

「元気な子ね。」

「ほんと。」

「なに静観しとるん？さて次は美由希さんと忍さん、あんた達や」

「え？」

「ちよ……ひいあん。」

「自重しろはやて！…！他の客に迷惑だろが！…！」

「そんなことゆーたって、おっぱいソムリエとしてこの状況、揉むしか無いやろー。」

叫ぶ刻にそれ以上（魂からの叫び）で答えるはやて

「てめえ、いつそんなジョブにチェンジした！…！つかなんつうはた迷惑なソムリエだ！…！」

「こんなより取り見取り揃うなんて又と無いからなー。今のうちに堪能しとかへんとー」

いえ、あと数カ月したらあなたの家に揃いますから、永久に変わらぬ大、中、小がそれぞれ……とは言えない刻。

え、これを聞いて刻は除かないのかつて？

忘れてない？刻の隣は一重度のシスコン（恭也）と一重度な親馬鹿（土朗）な御神の剣士が二人いるんだよ？

魔法を使わないのかつて？　そこまでしてやるほど刻は餓えちゃいない。

それになぜか覗いた自分はこの二人には勝てそうにないと全力で思えてしまう。

だから

「（すごいよ）、録画しとこうか？」

「（いやな予感しかしないんで、全力で却下させていただきます）」

とソニアの申し出も却下していた

「それにしてもみんなと入るのがって楽しいーな！。

まあ、刻兄やソニア姐と三人で入るのも楽しんやけど。」

「え、刻君そんなことしてるの!!??」

「ハヤテは不自由なんだから仕方ねえだろ。」

「ソニアさんがいるじゃない!!」

「刻兄はやさしいから、私が何も言わんといても連れてってくれるんや」

「あれは無言による重圧っていう立派な脅迫だろ!!
きらきらした目で上目遣いでこっちずっと見つめてくるんだぞ!!」

「刻ってなんだかんだいって甘いしね。」

「それを煽ってるお前が言うか、ソニア(怒)」

「うう、全然納得いかない。」

「わたしも」

「なんや、二人とも刻兄と一緒に入りたかったんか？」

「え、い、いやべつに。」

「そんなんじゃないわよ（あ、そういえば）」

「ここって十一歳までならどっちの風呂に入ってもいいみたいやっ
たな〜。」

「「！！！！！！」」

「士朗さん、恭也さん、俺先に出ますんで！！！！！！」

いやな予感がし、戦略的撤退を行う刻

女風呂の方から舌打ちが聞こえたのは気のせいだと思いたい

その後先に出た刻のもとに二人が不機嫌になって上がって来た。ほ
かになのは少し惚けた顔でハヤテは・・・ワキワキした感じで。

刻は考え、（ああ、あのイベント（アルフとの遭遇）があったんだ
るうな。ハヤテの動作の原因もそれなら説明つくし。あいつ巨乳だ
ったからなー。）と結論づける

で、その夜皆が寝静まった頃、

刻はなのはが起きて旅館を離れえていく気配を感じ起き上がる。

「（行くぞソニア）」
「ランチャー（了解）」

S i d e
刻

現在俺は件の現場の上空にい、

俺の下ではジュエルシードを賭けなのはとフェイトが戦っている

ちなみに今の俺の姿は漆黒のローブを目深にかぶった姿。
ちなみにソニアとはユニゾンしている。

また、現在俺は独自の認識障害を展開しているので、今の状態の俺
を見ても二人にはどこかで会った人のような気はしても決してそれ
が仁神刻という人物とは結びつかない。

ん、決着がついたな。
よし、いよいよ介入開始だ。

S i d e なのは

私は先日知り合った子に負けて、封印したジュエルシードの一つを取られてしまったの。

そのことも悲しいけど、何よりあのこともっとお話ししてみたいの。

「待って！」

「……出来るなら、私達の前にもう現れないで。もし次があったら今度は止められないかもしれない……」

私の声に反応してくれたけど、言葉は辛辣なものだった。
でも諦めない！！

「名前……あなたの名前は？」

「……フェイト、フェイト・テストロッサ」

「・・・あたしは！」

あ、フェイトちゃんが行っちゃった。

そう思ったとき、

「自己紹介をしているところ悪いが少しいいか？
さっきの魔法はおまえらのだな？」

突然上の方から誰かが私たちに声をかけてきたの。

「だ、だれ？」

声の方向を見たら黒色ののローブを着た少年がいた。目深にフードをかぶって顔は分からないけど・・・でも、よく見たらあの人って私たちぐらいの年齢？
それにあの声どこかで・・・

「そんなことはどうだっていい、問題はさっきの魔法を放っていたのはおまえ達だったのかということ。
そして、おまえ達がこいつを（すっ）集めているかということだ。」

あ、あれはジュエルシード!?

「それを渡してください。」

「だが断る」

フエイトちゃんが武器を構えて言うが、少年はその意見をバツサリと切り捨てた。

「今ちよつと研究中でね、使わせてもらってるんだ。ほしいんなら終わったらあげるよ。こんなものを持ち続けることに興味は無いから。」

それより問題は君達の方だ、研究の結果分かったことだがこれにはとてつもない魔力が内包されてる。まあ、あるていどの規模の次元震が起こるレベルってぐらいかな。

「……俺がここに来たのは君達に注意をするためだ。これを使って君達が何をするつもりかはどうでもいい。」

ただ扱いには気をつける様に。ヤバそうになってたら俺は迷わず破壊するからそのつもりで。じゃ、そういうことで。」

「!!!!!!」

そしての子は一瞬で消えた。
フェイトちゃんもしばらく周りを見回した後、アルフさんと一緒に帰って行った。

私は茫然として動く事が出来なかったの………

S i d e
刻

ま、こんなところかな。
え、武力介入はしないのかって？
それはお楽しみ。

「ねえ刻、彼女達のジュエルシードは奪わなくていいの？
それに海鳴にある残りのジュエルシードは？
後なんで嘘ついたの？研究なんてとっくに終わってるじゃない。」

宿に向かいながらソニアが俺に話しかけてくる
ちなみにユニゾンはもう解いている

「一気に質問するなよ……。」

二つ目の質問だけど残りは彼女達が見つけるさ。

俺達はその過程で少しお邪魔するのさ、彼女達の悲劇を回避させる
ために。

それが第一と第三の質問の答えだな。」

「悲劇って、何でそんなこと分かるの？

未来の情報は見れないようになってるんだよね？」

「そうだけど。」

「じゃあなんで（超直感？）……何で疑問形？」

実際は原作知識だしね。

「ま、それは置いてとつと帰るぞ。
なのは達より先に帰らないと怪しまれる。」

「はい」

017 介入開始（後書き）

刻

「又とないぐらいの介入の仕方だったな。」

黒

「うん、こういう展開ってほかの小説になかったからなんか新鮮じゃない？」

刻

「ってことは今後俺は武力介入はしないのか？」

黒

「一応する予定はあるけど、どの時点かまではね？」

刻

「大体どのくらい？」

黒

「おそいとA'sまで延びる。」

刻

「おそ！！！！」

黒

「早けりや次回。」

刻

「うおい、アバウトにもほどがあんぞ！！！！！」

黒

「しょうがないじゃん。」

思いついた内容とよく似たやつがすでに出てたって結構あるんだよ。せめてかするぐらいまでにしなないとやかく言われそうじゃん。」

刻

「ま、そうか……リリなの二次小説ってかなり数があるからな。」

黒

「そういふこと。」

というわけで、これとよく似た内容があっても作者は盗作する気はさらさらありませんでしたから。

影響を受けたかどうかって言われると……受けたって言わざるを得ないけど。」

刻

「ま、そういふことです。」

ではこの作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。」

黒

「緋水様、基地の概要ありがとうございます。」

俺もラピュタは好きですね。」

ついでにあの名言、「ふははは、見る、人が（ry」ってやつが！

「！

刻

「はいはい。」

では次回、「予想外の出来事はあると思え」で。

・・・なあ、この題名の雰囲気他と違くないか？」

黒

「しょうがないじゃん!!」

他に良いのが思いつかなかったんだから!!」

刻

「ま、本文の方がネタ切れするよりはましか。」

黒

「そういうこと、それじゃあ次回で」

黒・刻

「また会いましょう」

此処までが修正前のあとがきです

此処からが修正後のあとがき

ソニア

「今回はいつもほど目立った改変は無かったね」

黒 「まあ、この辺りはちょうど話の大筋を決定し終わったところだからな。

今後は描写追加とかが主な仕事だよ」

刻

「じゃあ投稿は速くなるのか？」

黒

「もれなくほぼすべて4000字超えてるから無理。」

刻

「あ……そう……」

黒

「では感謝コーナー。この作品を読んでくれたすべての皆様にかからの感謝を！」

ソニア

「鏡花水月様、ソラト様、感想をありがとうございました」

黒

「さあ、これから大学だ」

刻

「さっさと行け!」

EX-02 VS京谷(前書き)

PV10万突破記念作品!!

最近アニソンばっか聞いている俺がいる……………。

最近聞いたのは「Madder Sky」「The Master
「TRANS-A M Raiser」「Lapis Piloso
phorum」「Xing Symphony」「Tobek
ing」「ブライチャ」

他にも「At the very beginning」とか……………

EX - 02 VS 京谷

Side 刻

ある日俺達はノーバディーの気配を感じて、時空間転移して迎撃に向かったは良いんだが………

「エクスカリバー約束された勝利の剣！！」

ズゴオオオオオオオ

グレンとよく似たやつがノーバディーと戦ってました（かなり一方的に）

「ねえ？あれってグレンさん・・・・・・・・・・じゃないよね？」

「ああ、あいつはあんな戦い方はしない。第一、魔力波長が違うしな。」

「・・・・・・・・・・とりあえず俺らも行くぞ。」

「うん！ー！」

・・・・・・・・・・・・・んで、ノーバディーとの戦いの終了後、

「ねえ、あなただれ？グレンさんじゃないよね？」

「グレン？俺は氷上京谷だ。君は？」

「私はソニア。刻のユニゾンデバイスだよ。ちよっと特殊だけだね。」

「んで、俺がこいつのマスターで、仁神刻だ。よろしくな。」

「ああ。で、グレンって誰だ？」

「ん〜俺の同業者で、兄貴分ってとこだな。」

「（同業者……ひょっとして……）なあ、おまえってひょっとして、時空管理局だったりする？」

「……時空管理局？」

「いや？ちがうけど。」

「（気のせいか……）にしてもさ、（ん？）」

「お前もエクスカリバー使えるんだな。」

「ちよっと待て、お前もって……ひょっとして……」

「俺も使えるぞ？ほら。」

俺は『エクスカリバー約束された勝利の剣』を創造で作り出す

「（ってことは……）……なあ、おまえってひょっとして転生者？」

「ん？……まてよ、ひょっとしてお前もか？」

「え？ほんとに？」

「ああ……！」

「やっぱおまえも手違いで殺されて、お詫びに能力もらって転生させられたくちか？」

「いや俺は……ゼウスの野郎が故意に殺しやがった。」

「へ？……マジで……？」

「本気と書いて『マジ』と読むぐらいはな……」

「そりゃまた……何でそんな目に……」

「さつき戦つたる。あいつら討伐させるためだつてよ。ま、そのためにチートじみた能力もらつただけどさ。」

「そりゃ御愁傷さまだな。」

「まあな。でもま、前世より充実した毎日送らせてもらつてるんだ。悪くないぜ？ 結構楽しんでるしな！！
ところでお前はどいつに殺されたんだ？」

「俺は死神に殺されたな。手違いで！！」

マジで！？死神つていたんだ・・・・・・・・・・今度会いに行つてみるかな？

「そりゃゝまた・・・・・・・・洒落になんねえな・・・・・・・・。」

「だろゝ。でもこつちも楽しんでるからよかつたよ。大切な仲間もできたしさ。」

「ははは、そりゃ何よりだ。」

「ああ。所でさ、ちよつと一戦やってみないか？
久々にチートどうしやってみたい。」

「ああ、もちろん良いぞ！！ソニア、先に帰つといて。」

「はーい。でも早く帰って来てよ？
刻がやった方が良い書類がまだあるし？じゃあね。」

そう言ってソニアは転移した。……………現実^{こゝろ}思い出させやが
つて。

「……………書類？管理局員じゃないんだろ？」

「いやまあ……………ちょっと次元世界最大級の会社の社長やつ
ててね……………」

「おい！！！年齢とか大丈夫なのかよ！！！」

「フツ……………心配は無用さ。世の中には、こういう状況
を切り抜ける手段がある。」

そして俺は一呼吸入れ、言い放った。

「そう………
偽装という
手段がな!!!」

「思いつきり犯罪じゃあねえか!!!」

「世の中、清濁合わせ呑まなきゃ生きていけないよ？」
「……その年齢でほごく言葉じゃねえな……」

あ、なんか疲れた表情してる……。
グレンとよく似てるし、なんか新鮮だな〜。
あいつとじゃ、こんなやり取りできないからさ!!

「ま、実は俺の代理の社長を置いてるだけなんだけどね。」

「……………もういいや。やり過ぎには気をつけるよ?」

「大丈夫。それぐらいできないと管理局改変しようなんてできないからさ。」

「ん?お前もそのつもりなのか?」

「なったからにはやるだろ?」

「そうかな……………ま、俺が言えた義理じゃないか。」

「ってことは、お前も何かするつもりなんだな……………ま、詳しくは聞かないよ。」

「サンキュー。」

「ああ、じゃあ俺の基地に行こうぜ?」

「ここでやりあったらこの星がかわいそうだ。」

最先端技術の結晶がある』ですね。分かります。(俺のセリフ取るなよ………)
つま、で、その一つに『精神と時の部屋』っぽいのがあってわけな。」

「なるほどな。じゃ、行きますか。」

道中

「なあ、何これ？」

「迷路（DMC3の最終ステージのあの重力無視で階段だらけのステージを思い浮かべて下さい）
ま、今は面倒だから一本道にする。」

「おい！！」

あれってナイトメアじゃねえか、しかも第九世代のランスロット・アルビオン！！！！

こっちはストライクフリーダム！？

それに、しんきゆう層気楼にダブルオーライザーにアーチャーアリオスに、シモンにヨハネにペテロに……………
ってかどんだけあるんだ！！！！

「さ…？調子に乗りすぎたからな……………」

あ、ちなみに全部太陽炉搭載したからエネルギーは無尽蔵
んで基本無人行動で此処の防衛してもらってる。

ちなみにOSは『ユダ・システムSYSTEM - JUDAH』。

「……………もう過剰防衛じゃね？」

「防衛に過剰も無いだろ？」

「……そうかな？」

………で、到着。

「ステージどんなにする？」

「じゃあこの地下空間ジオフロントNERV本部上空で。」

「了解………よし。じゃあ行きますか。」

刻と京谷は互いに向き合っ、

「俺はこれだな。」

そう言っ、て京谷は『エクスカリバー約束された勝利の剣』を出した

「じゃあ俺はこれかな？」

刻は機械仕掛けの西洋刀『レッドクイーン』を出す。

「対悪魔武器か、そんなの使いこなせるのか？」

「心配無用、仲間に剣マニアの翼人がいてさ……………いろいろと叩きこまれたからな!!」

そうやって刻は剣を地面に突き刺し、グリップを回し内臓エンジンをふかせる

京谷は面白そうにそれを見て、剣を構える

「なるほど、それじゃあそろそろ……………行くぞ!!」

「来い!!」

「ハアアアア!!」

「グ……………ハッ!!」

俺は思いっきり横薙ぎに払うが、京谷はそれを受け止めはじき返し、そのまま剣を掲げ、

「『エクスカリバー約束された勝利の剣』！！」

『エクスカリバー約束された勝利の剣』を放ってきた

「ヤバ！！」

『ロー・アイアス熾天覆う七つの円環』×『炎（雷属性）』！！！！」

俺は雷属性の炎を纏わせた熾天覆う七つの円環ロー・アイアスで何とか防ぐ。
そこへ、

「出る！！『ガット・テンベスタ嵐猫Ver.v』」

「……ガトリング・アロー！！」

「なら、すいとん水遁・だいはくふのじゅつ大瀑布の術！！！」

俺の技が相手の技を飲み込み襲いかかる。
だがあいつならこの程度、無傷でしのぎ切るに違いない。
だから………

「暇は与えない!!」

詠唱廃棄!! 『コキユートス』 『ルーイナスドライヴ』 『テンペス
ト』 『メルトン』 『インフェルノ』 『アルデアリス暗黒の樂園』 『ウーラニア・フロゴシス燃える天空』
『インディグネーション』!!!!!!!!」

辺り一面に魔力残滓による煙が立ち込めるが、少しずつ晴れていく

さてこれだけやれば……………な!!無傷!?

しかも…………こそ!!

「出る『エア』!!…カードリッジロード…」

「『エヌマ・エリシユ天地乖離す開闢の星』!!」

ズギアアアアアアア

二つの『エヌマ・エリシユ天地乖離す開闢の星』がぶつかり合い、相殺した

あ、あぶなかった……。

「なあ、なにそれ？」

「あーこれ？アームドデバイス「エア」。

まあ見たら分かると思うけど……乖離剣エアを魔改造しました。」

「あーやつばか……俺よりもチャージ少ないのに拮抗したからおかしいと思ったんだよな……てか形違うし、もうそれ銃じゃん！！！剣の面影ないだろ！！！」

「気にしないで……自分でもやり過ぎたと後悔してるから……
……。
……ま、反省はしないけど。」

412

「まあいい……それよりも……続きをやるぞ！！！」

「望むところだ！！！」

「宝具一斉照射＆『壊れた幻想』
フローケン・ファンタズム」

・・・・・・・・え？

「・・・・・・・・ってうわ~~~~~!!!!!!」

そんなこんなで数時間後

・・・ステージは選んだ意味をなさなくなっていた。
具体的に言うと、上は穴が空いて青空が見え、下はクレーターばっ
かで月面のようでもう本部どこにあったか判別がつかなくなっている

そしてそんな中

ガン、グアアアアン、ギン、ガン、グウオン、ガキン

ふたりの獲物が周囲に衝撃波を放ちながら打ち合わされていたが

「ハアアアア！……！」

ガアン！！

「ッッ！！　しまっ……」

京谷が一瞬よろめいた刻のすきを突き、刻の剣を打ち上げ

「……あああああ……！！！！！！」

ガアアアアン！！

それを弾き飛ばした

レッドクイーンは宙を舞い二人から数メートル離れたところに突き刺さった
そして

スッ

「降参するか？」

「ああ、俺の負けだな」

京谷は刻の喉元に剣を突きつける

刻は両手を肩と同じぐらいの高さまであげ、降参の意思を示した

「ちちえ……まげか……」

「だが、お前もなかなかだぞ、俺がお前と同年代の時はそんなに強くなかったはずだ」

「サンキューな。……よし、ということはこのまま鍛練を積みばお前を越すことができるってことだな」

「まあ、そう簡単には負けるつもりはないけどな。」

「見てろよ、すぐに追いついてやるからな」

指を突きつけて意思を示す刻に京谷は笑顔を向ける

「ははは……にしてもこんなに早いうちから積極的に鍛練を積みもつとするなんて、何か目標があるのか？」

「あ、いや……純粹に死にたくないから……」

「偉く切実な理由だな……ってかそんな相手がいるのか」

「ほら……俺達が最初会ったときに戦ったやつら。」

あいつらの上位の存在がとんでもなく強くてね……」

「……どれくらい？」

「ふつうにSSSオーバーの魔力弾で弾幕はつてきたりするやつがいる……」

「・・・・・・・・・・頑張ってくれ。」

「ああ。ま、大丈夫さ。いざとなったら仲間に救援要請出すからなるほど、自分の力を過信してないってことか。大丈夫そうだ。じゃあそろそろ俺は帰るわ。」

「送ろうか？」

「いや大丈夫。自分でできるから。」

「そうか。あ、ちょっと待って・・・・・・・・・・これよし。」

刻は腕を振り、目の前にコンソールとモニターを出し、何かを打ち込む

「ん？なにしたんだ？」

「お前の魔力波長登録したんだ。これで迎撃システム通過していつでもここに転移できる。」

「サンキュー、じゃまたな。」

「ああ。」

そして京谷は消えた。

その少し後、『ビハインド』真の本社、執務室。

「刻~~~~遅かったね~~~~。
書類、たまってるよ?」

「総師。とりあえず先ずはこれ进行处理して下さい」

「これって.....なにこの量!?
引っ越して使うぐらいの大きさの段ボール箱いっぱい書類ってど
んだけ!!」

「.....ってちょっと待て!!」先ずは『?」

「これと同じ量、あと段ボール三箱分あるんで.....。」

「ギヤアアアアア!.....!」

「これを合わせたら四箱……………なんか不吉な数字だね。」

「ソニア、お前も縁起でもないこと言うな!!」

……………「たたくユニゾンしてさっさと終わらせるぞ!!」

「え……………どうス」(後で翠屋のお菓子食べ放題)さあ、さっさと
終わらせよー」

あ……………なんかそのうち過労死するんじゃないだろうか……………?

注釈

刻はビハインドの社長としてレオン・ボーウエルという人物を置いており、一般には彼が社長ということで通している
真の社長は刻。それを知ってるのはトップ付近やその他の一握りだけ。(元ライトヴァイスの連中とか)

ビハインドが成長するに従い刻の処理する書類量も増加。

現在はこんなことになりました。

EX-02 VS 京谷（後書き）

黒

「すみませんでした！！」

刻

「開口一番がそれかよ！？理由は痛いほど分かるが」

刻

「なんかキャラが違う・・・戦闘描写が少ない・・・いろいろと突っ込みどころがある駄文ですが勘弁を！！」

刻

「k y o様、ずいぶん前に許可をもらったのに結局こんなものになってすみませんでした。」

アリア

「それでは感謝コーナー。」

これを読んでくれた皆様に心からの感謝を！！

緋水様、AINO様、HAZUKI様、直人様、感想をありがとうございました。」

此処までが修正前

此処からが修正後

刻

「ずいぶん前に引っ張ってきたんだな。これ本来無印終了後に合っ
たやつだろ。」

黒

「うん、でもやっぱ早いとこ再掲載しとかないと申し訳ないじゃん。
ってことで此処まで引っ張ってきた。」

ソニア

「でも今回あんまり変更は無かったんだね……………」

黒

「うまく治せなくてね……………まだまだ精進が必要です。」

刻

「ま、がんばれな？」

では感謝コーナー!!!

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を!!!」

ソニア

「HAZUKI様、僚様、リトラ様、感想をありがとうございました!!」

黒

「ではまた次回!!」

018 予想外の出来事はあると思え

Side 刻

俺とソニアは今フェイトが住んでる部屋の前に来ている。

理由は先日のやり取りの結果フェイトがどうなったか少し気になったからだ。

ま、大した影響は与えてないと思うがな、一応……………

ピンポーン

「はい」

ガチャ

アルフがドアを開けて出て来た後ろにはフェイトもいる

「こんにちは、あのこれ、翠屋のシュークリームです。たくさんも

らったので、」

「少しおすそわけだよ。」

「あ、これはどうも。」

「……ありがとうございます。」

アルフが笑顔で箱を受け取るがフェイトは相変わらずの無表情……
・・違いが分かん。

ま、表情に乏しい奴だったから仕方がないか。

「いえいえ、どういたしまして。じゃあ帰るつか。」
「うん。」

そしてフェイト達の部屋を後にしようとした瞬間、

「……!!!!!!」(バツ)

突然真後ろから殺気を感じ思わず振り返る

だがそこにいたのは

「え？・・・フエイ・・・ト・・・え？」

「（ ）しまった！・・・！！！！！！（ ）（ ）（ ）」

こっちをじっと見てくるフエイトだった。

「あなた達何者？」

「あ・・・あは・・・あははははははは・・・orz」

やっちまった。

018 予想外の出来事はあると思え

く主人公も策にはまることはありますく

で………

「あなた達魔法使いだよね。管理局の人？」

「（ギロリ）」

ただ今フェイト達の住んでる部屋で……尋問を受けてます。

でもおかしいな、オレ魔力放出Dランクギリギリまで下げたはずなのに。

前そのこと気になった後、少し調べたが、フェイトは気にしてなかったみたいなんで、念のためさらに魔力を抑え込んだんだが。

……仕方ないか、とりあえず目の前にあるお茶（フェイトが入れてくれた）を飲んで、

「（はー）とりあえず説明するよ。まあ確かに俺は魔法使い……
ってか魔術師だな」

「魔術師？、魔導師の間違いじゃないのかい？」
「俺達地球の魔法使いは自分たちのことを魔術師って言ってるんだよ」

「え？地球の魔法使い！？」

「そ、此処地球にも魔法文化はあるんだよ。裏世界では、な。できたら他言無用で頼む。ちなみにソニアが俺のデバイスだ。」

「この子が！？」

「そ、まあいわゆるユニゾンデバイスってやつだな。ちなみに俺が作った。」

フェイトがソニアをしばらく見る

ソニアはフェイトを笑顔で見返していた

「そう・・・で、あなた達は管理局の？」

「いや違う。全くとは言わないがな。」

「じゃああなた達はここで何をしてるの？」

「仕事だな」それってジュエルシードを探す？「ジュエルシード？

いや、そんなものとは全く関係ないよ。」

俺の言葉を聞いて少しフェイトが威圧感を持たせながら聞く

「……何でジュエルシードのことを知ってるの？」

「そういう情報は入ってくるんだよ。ソースは教ええないよ。」

「……………それに嘘はない？」

「もちろん。なんだったら嘘発見器でも持ってくる？」

嘘は言っていないよ。

ジュエルシード探しと仕事（ノーバディーの討伐）は全く関係ないし、情報は調べたら入ってくるから。

「ライトヴァイス」や「ビハインド」経由から。

「分かった」

しばらく俺を見つめたあとフェイトはうなずいた

「アルフも良いか？」

「まあ一応ね」

アルフもうなずく。よしこれでこっちの話題は終了っつと。

で、

「それは良かった。所で俺からも質問していいか？」

「？ なに？」

「なんで俺のこと魔法使いってわかったんだ？ 自分で言うのもなんだが、おれDランクもやっとしてぐらいしかないんだけど。」

うん、これが気になった。

Dは正規魔導師予備軍、一般レベルギリギリ。

そして俺はあれから限りなくE近くに下げている。

これなら調べたり注意深く感じれば分かるとはいえ普通なら分からない。

なのになぜわかったんだ？

「これといった理由はないんだけど……ただあなたは普通の人じゃないってきがした……」
それで……ちよつと感覚を伸ばしてみたら魔法の気配がして……
……」

まじかよ………カンがよすぎるぞ。

対策の取りようがないじゃないか。

はぁ……しかたねえ

「そうか……じゃあもうひとつだけ聞いていいか？」

「なに？」

「おまえちゃんと飯食ってるか？」

「え？」

「いや、この前会った時もそうだったんだけど、心なしか顔色が悪いからさ。」

「あ……。うんあんまあり食べてないな。少食だから……。」

アルフがため息をつく。なんか母親じみてるな……。使い魔としてフェイトを見守っていたせいなのか、プレシアがあんなんだから反面教師だったりするからなのか……

「それはだめだよ！育ちざかりなんだから!!！」

「よし、それじゃあせっかくだから今回俺が何か作るうか？」

ソニアの叫びを聞き、（ついでに何か腹が減ってきたので）俺が昼食を創ることにする。

「あんだ料理できるの?」

「うん、もちろん 私とローテーションで作ってるんだよ。」

アルフの質問にソニアが楽しそうに答える

「そういうこと。なんかリクエストあるか? 懐石だって作ってるぞ?」

「ずいぶん自信があるんだね。」

「もちろん!」

アルフの感心した声に力強く答える

だつてさ、

? アカシックレコードで作り方検索

? ダウンロード

? 料理(ダウンロードしてるので腕は超一流シェフ)

? 完成

で事実上作れない料理ないし。

「……まあ、そうでなくても色々あって俺とソニアは人一倍料理のレパートリー持つてるんだけどさ。」

「じゃあ私、北京ダックで」

「……材料があるやつでお願いします。」

「一般家庭にガチヨウは常備されていないと思う。」

「……俺達が一般的な家庭かどうかは置いて。」

「フェイトは？」

「えっと……お任せします……」

「それはそれで結構困るんだけどな……。ま、いいか。じゃ早速作るから待つてな。」

（ただ今作業中……しばしお待ち下さい）

「よし、完成!!」

ペペロンチーノとサラダの盛り合わせ。

乾?があったので手っ取り早くこの料理にした。

フェイトがおいしそうな匂いにつられてクーと腹を鳴らす。

正面から覗き込んでにやりと笑ったら真っ赤になってうつむきました。

うん、すごくかわいい。

今度ソニアにカメラと録画機能つけようかな?フルHDに余裕で耐えられるぐらいの。

「わーい。んーおいしー。」

「(ガツガツガツガツ)」

まあ、なんつうか凄え楽しい、と言っか面白い……いや嬉しいのか。

ともかくすっごく癒される。

とりあえずソニアにカメラと録画機能追加は確定だな。

018 予想外の出来事はあると思え（後書き）

黒

「018話でした」

刻

「描写が細かくなつたな」

黒

「うん。後は前回のときにはあつた矛盾点を修正しといた。詳しく言つと刻のランクについて。」

ソニア

「そう言えば、魔道師ランクのDってどのくらいなの」

黒

「本文でも書いたけど、そうだな・・・一応この作中では

EX 人外というのも甚だしい

SSS 人外

SS 人間終了予備軍

S 軽く兵器レベル

AAA エースオブエース

AA エース2

A エース

B 武装管理局員強レベル

C 武装管理局員平均レベル

D 武装管理局員予備軍

E 一応魔道師としてやっていける最低レベル

F 魔道師才能なし

って感じにしています。魔力資質もまあこんな感じ。」

刻

「あ、そう……」

では感謝コーナー

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！！」

ソニア

「バルディッシュ様、感想をありがとうございました
所でこれどうする？」

「火車切広光、鮑切長光、小烏丸天国、雷切、あと真打・童子切安綱。」

刻

「草壁五宝か。とりあえず亜空間の中に入れとく。戦闘で使うか
もしれないから。サンキュ。」

黒

「では次回。」

「ついに……感想を書いてくれた人が一人だけに」

「あ~~~~まあ、元気出せや？」

「何が悪いんだろ？」

「……やっぱり駄文だからじゃない？」

「……やっぱり？」

019 目的のためなら非情になる必要もある(前書き)

たくさんの感想をありがとうございました

019 目的のためなら非情になる必要もある

あの日以来、俺はフェイトに気に入られ、頻繁に飯を作りにお邪魔するようになりました。

いや、いいんだけどね。

それにしても、なんか会ったたびに表情豊かになってきた気がするんだよな。

最近は後ろでぶんぶん振られる尻尾の幻覚まで見えてきたし。

なんとなく頭なでたら、もんっのすごい嬉しそうな顔してたしな。

あ、ちなみに動物っぽい反応してくる奴もう一人いる。

………はやてだよ。

なんか風呂上りとかベッドで一緒に寝るときとかさ、俺に体こすり

つけてくるんだよ」「ん~~~~~」とか言った幸せそうな声
出しながら。

フェイトが犬なら、はやては猫かな？

狸はイヌ科だけど。

はっきり言って間違い起こさないよう自粛するのにもすごい精神
力使ってます。

いやマジで！..!

ハヤテってやっぱ美少女だしさ、思わず抱きしめたくなくなってしまっ
んだよ.....

感情が制御されてるからって言っても、こころいうものはやっぱり本能
レベルで刻み込まれているもんなんだろうな.....。

S i d e e n d

刻たちが温泉から帰った数日後の学校

「いい加減にしなさいよ！」

教室にアリサの叫び声が響き渡る

「あー！」

はっとしたようになるのがアリサを見る。

先ほどまでなのは完全に心ここに在らずの状態だったのだ

「この間から何話しても上の空でボーとして！」

「あ、ご、ごめんねアリサちゃん」「ごめんじゃない……！」

「私たちと話して退屈ならいくらでもそうやってぼーっとしてなさい

いよ!

行くよ、すずか

「あ……アリサちゃん。」

教室を速足で出ていくアリサ。

すずかはなのはの方を一瞬見て、アリサを追いかけていく

そして階段のところまで追いついたすずかはアリサに話しかける

「アリサちゃん

「なによ

「なんで怒っているのか、なんとなく分かるけど、だめだよ。
あんまり怒っちゃ。」

それを聞いてアリサは唇をかみしめる

「だってむかつくわ！」

悩んでるの見え見えじゃない！迷って、困ってるの見え見えじゃない！

なのに、何度聞いても私たちには教えてくれない。

悩んでも迷ってもいないなんて嘘じゃん！」

「いくら仲良しの友達でもいえないこともあるよ。」

「そうそう。」

「あ……。」

「刻……。」

すずかを補足するように刻が発言する

いつの間にか近くにいる刻に二人は少し目を見開いた

そんな二人に肩を潜ませ、刻は続きを言う

「お前があいつの役に立ちたいって気持ちもわかるがな、誰にだつて秘密にしておきたいことぐらい一つや二つあるんだ。俺にもあるぞ。お前らに話したあのこと以外にもな。」

お前もそうじゃないのか？」

それを聞きうつむくアリサ
そしてバツと顔を上げながらつぶやく

「……………でも、でもそれじゃ私はどうしたらいいのよ！」

「待っててやりな……………あいつが俺たちに話してくれるまでな。」

「……………わかった。」

アリサは又しばらくうつむいた後、了承した。

447

「よし！（ガシガシ）」

「っ！！（//////////）」

アリサの頭を刻がなでる。

アリサはビクツとした後、真っ赤な顔になった。

……………ついでに後ろのすずかから真っ黒なオーラが刻へ発せら

はじめた。

顔は微笑んでいるが目が全く笑っていない。

その後焦った刻がすすかもなでたら、こちらも真っ赤になったが・
・
・
・

そして二人は刻と別れ、それを刻は見送る。

「（俺も大概偽善者だよな・・・・理由を知ってるのに俺の都合で教えないのに。そのせいで傷ついた人を励ましてやるんだからさ・・・・）」

と小さな声でつぶやきながら

019 目的のためなら非情になる必要もある

その日の夜とある場所の上空

なのはが魔法を知った時のように刻は宙に浮き下を見下ろす
そこには我先にとジュエルシードを手に入れようとする二人がいた
なのはとフエイト

そして二人の砲撃(?)によって封印されたジュエルシードを同時に取り込もうとし、ジュエルシードを挟んでデバイスでぶつかり合った瞬間、

ジュエルシードが暴走を始めた。

「んじゃ、行きますか。」

刻は何処からともなく一丁の狙撃銃とをり出す

(この世は綺麗ごとでは回らない。不幸の上に幸福があり、悲劇と希望は隣合わせ。
大きな幸せを手にするためにはそれだけの対価がある……
だから……)

銃に弾丸を込める。

それは現在研究が進んでいる、撃つと同時に魔弾化する弾丸。
そして、それに更に刻印されている術式は『シオネの円環』

「狙い撃つ」

そして一発の魔力弾が射出された

S i d e フ ェ イ ト

あの子と同時にジュエルシードをデバイスに取りこもろうとしたら、ジュエルシードが暴走し始めてしまった。

バルディッシュも深刻なダメージを受けて機能不全になったから、頼ることは出来ない。
どうしよう。

・・・と考えていたら、突如魔力弾が飛んできて、ジュエルシードに当たったと思うと、そこからジュエルシードを包むように魔方阵が表れ、

その効果なのかあたりのジュエルシードからあふれていた魔力が無くなり、

……ジュエルシールドが粉碎された。

「え？」

ジュエルシールドが……壊れた？

「なあ、俺前言ったよな」

そしてこの前会った、フードを目深にかぶったローブの少年が怒気を発しながら現れた

S i d e e n d

「俺、前言ったよな。」

それには次元震が起こるぐらいの魔力が内包されているから、扱いには気をつけろって」

「さっきのは・・・あなたが？」

「ああ、そうだが。」

なのはの質問に少年（ご存じでしょうが刻です）が答える

「なにをしたんだ!!」

叫ぶユーノ。

但しフェレット形態なのでいまいち迫力に欠ける

「何をって、ジュエルシールドの破壊だが？」

前に言っただろ、ヤバそうだったら迷わず破壊するって。」

「あり得ない。あれには大量の魔力が内包されてたんだ。」

それはどこに行っただんだ!!」

「どこにつて?そこらじゅうに。」

ジュエルシードに展開させた俺の術式見なかったのか?

あれは対象と周囲の魔力を無効化する、まあ所謂AMFみたいなものだな、それを展開して、さらに対象を破壊するやつでさ。」

「そんなことが個人で・・・」

「げんに俺はやってのけたぜ? 『あり得ない、なんてことはあり得ない』何百年も生きて強欲の名を冠したホムンクルスの口癖だ。至言だよな。俺自身も、信じられないことにはよく遭うからな。」

その言葉にユーノが反応する。

「ホムンクルス!？」

結構(刻にとつて)どうでもいいとこで、

「そ、ホムンクルス。なかなか面白い奴だったぜ、まあもう死んだんだけどな。」

あいつらの中じゃあ俺が一番あいつのことが好きだったな。
つと、話がずれたな……。で、お前らはジュエルシードを乱暴に
使うなんてどういっつ見だ？
はつきり言っつて今でさえ軽度な次元震が起こっつてただけど。」

「そんな……。」

絶句するユーノ

「私達はジュエルシードを回収してる、ただそれだけなの。
悪い人の手に渡らないようにするために。」

なのはが自分の意志を言う。

「いや別にお前らのジュエルシード集める目的聞いてたわけじゃな
かつたんだが。
つでそののやつ、なんか喋っつたらどうだ？」

「……………」

少年はフェイトに話しかけるが、フェイトは俯いたままだった

それを見てやれやれといった雰囲気を出す少年

だが、

「だんまりかよ」「なんで」「ん？」

「何で壊したんですか？」

フェイトがやっと口を開きつぶやいた
声は震えていて、顔は俯けたままだったが………

「さっき言ったろ。あのままほっとくとやばかったからだ。最
悪この星が滅んでたからな。」

「私にはあれが必要だったんです!!！」

「じゃあ今度からはキッチンと扱うんだな。
言っとくがまたヤバそうなのがあったらおれは破壊するんで、じゃあな。」

フェイトは顔を上げ叫ぶが少年はそれを一蹴し、かき消えた

「………」

「フェイト……ちゃん？」

黙りこくるフェイト

そこになのが近づこうとするが

「アルフ……行く。」

「あ……、待ってフェイトちゃん。」

なのはの制止を待たず、アルフを連れフェイトは去って行った

我ながらひどい扱いだっとな。

フェイト最後の方泣きだしそうだったし

でも必要だったんだこのプロセスは

くく、だからと言って、まあ殴られるぐらいはされそうだ。

……次はあそこだな

……魔力はもう完全に隠しておこう

『シオネの円環』

魔力因子を吸い込む魔法陣。円環は、回転が上がれば上がるほど多くの魔力因子を吸い込む。

これにより、周囲の魔力を吸収し、あらゆる魔法を無効化する。制御者がいないと、際限なく吸い込んで危険。

だが逆に言えば魔力の塊じゃないものなら効果が無い。

炎とか雷とかに変化した魔力は消去不可。

- ・ いまいち使い勝手が悪い。まあこの世界じゃ十分脅威だが・・・

019 目的のためなら非情になる必要もある(後書き)

黒

「とうわけで、019話でした。
にしてもお前結構ひどいことしたよな。」

刻

「仕方なかったんだよ、目的のためなんだ……。
後で償いはやるよ。」

黒

「ま、がんばれや。
ではこの作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を!!」

ソニア

「バルディッシュ様、眠る人様、ゆう様、HAZUKI様、僚様、
K(21)様、サンタ様、ソロモン様、紅雫様、magica | f
riend様、感想をありがとうございました!!」

刻

「10名からも来たぞ!!よかったな。」

黒

「ああ。うれしい限りだよ!!」

刻

「んじゃ次回予告、つぎは『役者はそろっ』だ。」

黒

「この回でやっと無印の主要人物が出そろいます。」

ソニア

「お楽しみに。」

020 役者はそろつ

「みんなどう？今回の旅は順調？」

緑の髪を伸ばし、額に簡単な模様のある女性
次元航行艦アース
ラの船長リンディがクルーたちに声をかける

「ハイ。現在、第3船速にて航行中です。

目標次元には、今からおよそ160ベクサ後に到達の予定です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きはないようですが、
3組の探索者が、再度衝突する危険性は非常に高いですね」

モニターを見ながら答えるクルーたち

「そろつ」

と言い椅子に座るリンディ。

そこに茶髪のクルー エイミーがお茶を入れた湯のみをもってや
つてきた

「失礼します。リンディ艦長」

「ん。ありがとね、エイミー」

リンディは（大量の砂糖を投入して）それをすすった後、呟く。

「そうねえ。」

小規模とはいえ、次元震の発生、ちよつと厄介なものねー。
危なくなったら、急いで現場に向かってもらわないと。
ね？クロノ」

リンディは黒髪の少年　クロノの方を向く
それにうなづくクロノ

「大丈夫、分かってますよ、艦長。
僕は、そのためにいるんですから」

それに微笑んだ後、また難しそうな顔をするリンディ
目の前にはモニターが表示されている

「どうしました？艦長。」

「いえね……ちよつとこの三組目のことが気になってね。」

「なるほど……そうですね。」

この魔導師から検出された魔力クラスはD、しかもその中でも下の方、なのに発射された魔法はAクラス、レベルが全く違いますもんね。」

「ええ、それにその魔法の効果もさつぱりだわ。」

この計測からすると着弾地点および周囲の魔力を霧散、又は吸収により無効化させるものらしいけど……AMFと言うのは聞いたことがあるけど、それは専用の機械から出されるもの。」

それを魔法で展開するなんてことが……それもこんなに膨大な魔力をいつぺんに……しかもこんな方法で……さらにその後、転移魔法を使ったんだろうけどその痕跡が全くないというのも……。」

「こちらの未知の魔法、ということなのでしょうかね？」

リンディのつぶやきを聞き、尋ねるクロノ

二人とも真剣な顔をしている

「まだ憶測でしかないけれどね。でも気をつけることに超したことは無いでしょう。」

「気をつけてね。」

「了解!」

020 役者はそろそろ

それぞれの思いを持ち

とある（かなり大きい部屋）の一室。

そこには透明なポットが安置されており、その中にはフェイトと瓜二つな少女　アリシアが浮かんでいる。

そこに、ろくにジュエルシードを集めてこれなかった（プレシア視点）フェイトにお仕置きをしたプレシアがやって来る。

彼女はそのポットを愛おしげに触りながらつぶやいた。

「ほんとあの子は役に立たない『人形』ね。あなたとは大違いだわ

アリシア。」

だがその時、

「それはひどいんじゃないか？プレシアさんよ。」

プレシアに突然、第三者の声が背後から掛けられた

「な！！！！！！！」

プレシアはバツと振り返る。

そこには黒色のローブを目深にかぶった少年が居り、彼はプレシアが入ってきたドアのすぐ隣の壁に背中を預け、もたれかかっていた。

驚愕の表情を一瞬見せ、睨みつけるプレシア

「あなたはどこの子？どつやってどこに来たの？」

「そんなことはどつだっていい。」

フエイトって子がジュエルシードをあんなに必死に集めている理由が気になってな、

調べてみたら……ずいぶんな扱いしてんじゃねえか。

散々こき使ってほめもせず、挙句の果てには『人形』呼ばわりか？」

少年は少々怒気を孕んだ声で質問する

プレシアはそれに馬鹿にしたように答える。

「なに？なんか文句でもあるの？」

あ、ひよつとしてあの子にでも惚れたの？それなら役目がすんだらあんな子あなたにでもあげるわ。

あんなアリシアのできそこないのクローン。」

「……………(ギリッ)」

それを聞きしばらく黙る少年。

そして歯をかみしめる音が聞こえたと思うと、

ズン

少年は足を一度踏みしめた。

そしてその瞬間

「があっ!!!!」

プレシアが地面に押しつけられる

彼女の周囲の重力が急激に増加したのだ!!

プレシアのそばに行く少年

「ふざけんなよ。」

そして声をかける

「あいつはおまえの人形なんかじゃない。アンタの死んだ娘の代わりでもない。

……アンタのもう1人の娘だ。

フェイトは……あいつは、てめえに……母親である貴様に笑ってほしくて頑張ってたんだよ!!

いくらてめえに乱暴されようが、いくら頑張ってもほめてくれまいが、……あいつにとってそんなことはどうでもいいことなんだ!!!!

貴様のために頑張ってた!!!!

例えば自分がどんなに傷つこうが、母親である貴様にどんな仕打ちを受けようがなあ!!

なのに貴様はそういう態度を取るのか!!!!!!!!!!

「私は、あの優しいアリシアを取り戻すのよ!!!!!!」

あの温かい家庭を！

そのためな」(いいかげんにしろよ!!!)」

プレシアは必死に弁解しようとするが少年はそれを許さない

「ハッ！自分の可愛い娘を取り戻すためなら何だってするってか？
いいなあ、最高だ、小説でも書いたらどうだ？ きっと売れるぜ！
……てめえ……なめてんじゃねえぞ……死んだ娘
の為ってのを免罪符にするんじゃないやねえ!!! 貴様はとっくにアリ
シアを穢してるんだ！」

「違う！ 私は……私は優しかったアリシアの為(だまれ
!!!!)」

「考えてみやがれ!!」

フェイトがアリシアのクローンって言うなら、つまり、あいつはア
リシアから生まれた存在ってことだ……ならフェイトは典
型的に言えばアリシアの子供になるよな？ もし本当にアリシアが
貴様の言うとおり優しかったってんなら、アリシアはフェイトを受
け入れると考えなかったのか!?
ああ!？」

「わたしは……わたしは……」

必死に反論しようとするプレシア

だがいくら考えても言葉を思いつく事は無かった

「……………もう一度よく考えなおしてみるんだな……………
・又来る。」

そう言って去ろうとする少年

「まって、あなたは何でこんなことを？」

「べつに……………ただ気に入らなかっただけさ。
今回だってフェイトがあんたのことを大切にしていなかったら……………
俺は迷わずあんたを、
殺してた。」

そう言って少年は消えた。

その後にはしばらくつぶやくプレシアの姿があった

私は……………どうすれば……………アリシア……………私の可
愛い娘……………フェイト……………あのこも……………

۵

020 役者はそろそろ(後書き)

黒

「020話っ」と

刻

「これでちょうど二十話か、無印もやっと転換期だな」

黒

「まあ、クロスもの合わせたら22話で、全投稿数は24話なんだけどね。」

ソニア

「とうかやっつとというほど無印本編やってないんだけどね……これ入れて六話だけだし。」

黒

「まあ……その前が長かったからな……」

刻

「ま、とにかく次回はクロノとなのは達の遭遇だ。俺は武力介入するのか？」

黒

「お前、分かって言ってるだろ？
知ってる人はすでに知っている。知らない人は……どう言おう？
楽しみにしておいてって言えない。」

刻

「さあ？」

黒

「……………よし、感謝コーナー！！」

刻

「思考を放棄したな……………」

黒

「何のこと？」

では、この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。

バルディッシュ様、ソラト様、眠る人様、秋代様、僚様、HAZU
KI様、ソロモン様、緋水様、感想をありがとうございました」

刻

「ではまた次回」

「刻々プレゼントで服が送られてきたよ？
はいこれ。『虹高の女子制服』」

「おれに……どうしろと？」

「さ、せつかくだから……」
「……」

服を持ちにじり寄るソニア。
じりじりと後退する刻

しばし二人はお互いをけん制し合っていたが、次の瞬間

「っ!!」「フッ!!」

ズダダダダダ

黒

「おっっっっすっげー勢いで逃げて（ソニアは刻を追いかけて）行
ったな……プレゼントありがとうございまして!!」

021 アースラ到着

前回のジュエルシードによる次元震が起こった翌日の夕方……

……アースラブリッジ

「現地では、すでに二名による戦闘が開始されている模様です」
「中心となっているロストログアのクラスはA+。動作不安定ですが、無差別攻撃の特定を見せています」

クルーの報告に頷き答えるリンディ

「次元干渉型の禁忌物品。回収を急がないといけないわね。クロ
ノハラオウン執務官、出られる？」

「転移座標の特定はできてます。命令があればいつでも」

「それじゃクロノ。」

これより、現地での戦闘行動の停止と、ロストロギアの回収。各参考人からの事情聴取を」

「了解です、艦長」

「気をつけてね」

「ハイ……、行ってきます……」

せつかくいい感じに引き締まった雰囲気だったのに、リンディのハ
ンカチをふりながらの見送りで微妙な気分になりながら転移するこ
とになったクロノだった

……一方その二名の魔導師なのはぐフェイト

彼女らは協力することで、木に取り込まれ発動していたジュエルシールドを封印することに成功した。しかしそれぞれの目的を持つ者同士、やはりそれをめぐって対立することになった。

「ジュエルシールドには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん……。昨夜みたいなことになったら……。私のレイジングハートも……。フェイトちゃんのバルディッシュも、かわいそうだもんね。」

「……。譲れないから。」

《Device form》

そしてフェイトはバルディッシュを構える

「私は、フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど……」
《Device mode》

なのはもレイジングハートを構える。

「私が、勝つたら……」
ただの甘ったれた子じゃないってわかってもらえたら……
お話……聞いてくれる？」

二人の間に緊張が走る……そして次の瞬間、一気に二人は
駆けだす
二人の距離はあっという間に詰まって行く。

そしてなのはとフェイトが同時に飛びかかり、ぶつかりそうになる

そして!!

「ストップだ！」

「……………そう言って現れた魔法使いがなのはとフェイトのデバイスをつかんで止めた。

先ほどの緊迫した雰囲気をブチ壊され、また違った緊張の空間を醸し出されたあまりの速さに、周囲の空気が混乱する

（四人目の魔法使い！？……………だけど……………正直あの雰囲気飛び込んで来てほしくなかったの……………雰囲気がち壊しなの……………）

と、なのはが思ってしまったのも致し方ないだろう

まあそんなことに気づかないクロノは話を続けるのだが……………

「ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ ハラオ ウンだ。

詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「クッ」

「時空管理局……？」

その様子を距離を取って見ていた二人……二匹か？

まあとにかく動物形態のアルフとユーノがそれぞれの反応を取る

「まずは2人とも武器を引くんだ。」

なのは達はクロノと一緒に地上まで降りる。

「……このまま戦闘行為を続けるなら……ッは……」

クロノが斜め上を見上げると、空からオレンジ色の魔力弾が彼に向かって降り注いだ。

だが、クロノはそれをバリアを展開して弾き飛ばす。

「フェイト！撤退するよ！離れて！」

そう言っただアルフは更に魔力弾を発射する、それはクロノに向かうがいくつかがなのはも巻き込む軌道を取る。

とっさに避ける二人

フェイトその隙にジュエルシードを回収しようとする

だが

「ウアッ！」

クロノが放った魔力弾が、不意打ちでフェイトにクリーンヒットする

かなりの魔力が込められていたのと意識外からの攻撃のせいもあり、フェイトは力尽き、落ちかける

「フェイトオ！」

そんなフェイトをアルフがうまく受け止めてた

それを容赦なく打ち落とそうと構えるクロノ

「ダメエ！」

「!!!!!!」

だがその前になのはが立ちふさがる

「やめて!撃たないで!」

「ああ………」

「逃げるよフェイト、しっかり?まって!」

そしてアルフはフェイトを背中に乗せ逃げて行った……。

「戦闘行動は停止、搜索者の一方は逃走。」

「追跡は？」

「多重転移で逃走しています。．．．追いきれませんね。」

それを聞いてリンディは息を吐く

「そう．．．．ま、戦闘行動は迅速に停止、ロストログアの確保も終了。よしとしましょう。事情も色々聞けそうだしね。」

椅子に備えつけられていたボタンを押すリンディすると正面にモニターが表示された

「クロノ、お疲れ様」

「すみません．．．片方は逃がしてしまいました。」

モニターの向こうにいたクロノがリンディに謝る

「んゝま、大丈夫よ。でね、ちょっと話を聞きたいから、そつちの子達をアースラーに案内してあげてくれるかしら？」
「了解です。すぐに戻ります。」

そしてリンディは通信を切り、軽く思考に入った

（結局三人目の子は来なかったわね。　　．．．まあ、今の本題はあのロストロギアね。

あの子達から詳しい事情が聞けたらいいんだけど．．．．．）

少々『日本人を馬鹿にしてるのか？』と小一時間問い詰めたくなるようなコーディネートで、盆栽やお茶の道具、置や獅子脅しが置かれていたリンディの私室？に連れてこられたのはとユーノは今回の事件についての表しを説明する

二人の話を聞きリンディが頷く

「……なるほど、そうですね。
あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは、アナタだった
んですね」

「それで……、ボクが回収しようとして……」
「立派だわ」
「だけど、同時に無謀でもある」

咳くユーノをねぎらうリンディ
だがクロノの言葉でユーノはうなだれる

「あ……、ロストロギアってなんなんですか？」

話に出て来た知らない単語を聞くのは

「まあ……、遺失世界の遺産、って言ってもわからないわね。
えっと……、次元空間の中には、いくつもの世界があるの。それ
ぞれに生まれて育ってゆく世界。

その中に、ごく、稀に進化しすぎる世界があるの。
技術や科学、進化しすぎたそれらが自分達の世界を滅ぼしてしまっ
て、その後に取り残された失われた世界の危険な技術の遺産」

「それらを総称して“ロストロギア”と呼ぶ。使用法は不明だが、
使いようによっては、世界どころか次元空間さえ滅ぼすほどの力を
持つこともある、危険な技術」

「しかるべき手続きを持って、しかるべき場所に保管されていなければならない危険な品物。」

「あなたが探しているロストロギア……ジュエルシードは、次元干渉型のエネルギー結晶体。」

「いくつか集めて特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を惹き起こし、最悪の場合次元断層すら巻き起こす危険物」

「次元震……そう言えばユーノ君、聞くのを忘れてたけど次元震って？ なんだかとても危険なものみたいけど。」

「君とあの黒衣の魔導師がぶつかった時に発生した空間の振動と爆発、あれが次元震だよ」

「あ……」

「なのはの質問に答えるクロノ、それを聞いてその時の状況を思い出すのは」

「たった一つのジュエルシードの、全威力の何万分の1の発動でも、あれだけの影響があるんだ。」

「複数個集まった時の影響は、計り知れない」

「聞いた事ありません。旧暦の、462年、次元断層が起こった時の事」

クロノの説明を聞き、呟くユーノ

「ああ……、あれは酷いモノだった」
「隣接する世界が幾つも崩壊した、歴史に残る悲劇。繰り返しちゃいけないわ」

そう言つてリンディは緑茶に角砂糖を入れた。

「ああ！」

信じられない光景に思わず声を出すなのは
それに構わずリンディはそれに口をつける

「これより、ロストロギア、ジュエルシードの回収については、時
空管理局が全権を持ちます」

「え？」

「君達は、今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って、元通りに
暮らすといい」

「でも、そんな……」

クロノの言葉に反論しようとするのは

「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

「でも！」

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩、ゆっくり考えて、3人で話し合って、それから改めてお話をしましょ」

「……………はい……………」

なのははリンディの出した案に渋々うなづく

それをみて微笑むリンディ

そして少し表情を真剣な様子にし聞く

「所で話は変わるんだけど、あなた達三人目の搜索者について何か知らない？」

「三人目の搜索者？」

首を傾げるなのは

「ええ、これを見て。」

そう言っつてリンディは空間にモニターを表示する

そこにはとある時間帯の魔力の観測グラフが表示されていた

「これは前のあなた達も戦った時の記録なんだけど・・・ほらこれ、たった一度だけDクラスの魔力が検出されたの。その発生源はこのDクラスの魔力が検出された魔導師。」

「これって、あの黒色のローブの男の子の？」

「そんな馬鹿な！ あの魔導師がDクラスな訳無い！！
しかもあの魔法がA!？」

なのはがつぶやく隣でユーノが叫んだ

それに頷くリンディ

「ええ、でも計測によればDの下の方、一般武装局員以下。
なのにさっき言ったようにはなった魔力弾はAクラス。
しかもこの結果から分かるように着弾地点および周囲の魔力の無力化効果付き。」

「いえ、それ以前に、ジュエルシールドはAクラスの魔力弾では粉碎
できません!!」

「!!!??? 粉碎したの!??」

リンディーはユーノの言葉を聞き驚きの表情をする。クロノも同じだ

「ええ、それはもう完璧に。」

「そんなことが……。」

「あ……ユーノ君どういふこと。」

話についていけないのはがユーノに訊ねる
ユーノはそれに気づきごめんと説明をする

「えっと……、なのはも分かっているとと思うけど、ジュエルシ
ールドにはとんでもない量の魔力が封じ込められているんだ。」
「うん。」

身をもって体験したなのはは頷く

「それだけの量を封じているジュエルシードは当然ものすごい強度を持っているんだ。

たかが・・・と言つのもなんだけど、Aクラスの魔力弾でどうこうできるものじゃない。」

「こっちはてつきりジュエルシードを無効化してるんだと思ってただけど・・・。」

「粉碎だなんて・・・そんなことありえないよ。」

「・・・あり得ない、なんてことはあり得ない。」

なのははリンディとクロノのつぶやきを聞き、ふとあの時の言葉を口にする

「え？それは？」

それに反応したクロノがなのはに尋ねる

「い、いえ。ただその魔導師が言ってたんです。『あり得ない、なんてことはあり得ない』って。」

「彼によると、それは数百年も生きたホムンクルスの口癖だったみ

たいですけど。」

なのはを補足するユーノ
それを聞き二人は驚愕した

「数百年生きたホムンクルスですって!？」

「ええ、もう死んでしまったそうですけど。」

「冗談じゃないぞ!! くそ、そんな訳の分からないやつがジユエルシードなんかを手にしたら(「え?もうもってるよ。」「なんだって!」)」

なのはの方に詰め寄るクロノ

思わずなのはは身を引く

「ひ……わ、私とフェイトちゃんがあの子と会った最初の時見せてくれたの。一つだけだったけど。」

「く、これ以上ジユエルシードを渡すわけにはいかないぞ。早急に対策を取らないと「その必要はないかもしれないかも」なんですだ! これは緊急事態なんだぞ。」

ユーノの発言にガシツとユーノの襟ををつかむクロノ

それをリンディはなだめる

「クロノ落ち着きなさい」

「あ……す、すみません。」

「ユーノ君、どうしてそう思うか教えてくれないかしら？」

「はい……まずその時彼が言ったことから考えると……彼はもうこれ以上ジュエルシードを集めるつもりは無いようでした。それに二回目も、ジュエルシードが暴走していたから来ただけだったようでしたし。それにさっき言ったようにジュエルシードを回収するのではなく、粉碎しました。」

そして今回、彼は現れなかった。以上のことから推察するに。」

「なるほどね。」

それを聞きつなずくリンディ

「そんな……言うのはなんだが、ジュエルシードは様々な人のどこから手を出すほど欲しがるものだぞ。」

「彼にとってはそうでもないみたいでした。」
「あれは研究のために取ったって言うていたもんね。それにその研究が終わったらもういらなくなって言うてたし。」
「ジュエルシードを『こんなもの』ってかなり軽視したこと言うてましたしね。」

クロノの呟きに二人が反論する

「そう……。」

「あり得ない……あり得ないぞ……。」

その後しばらく思案にふける四人の姿がそこにあつた

021 アースラ到着（後書き）

黒

「021話でした」

刻

「結局俺は介入なしか……って俺登場すらしてねえ!!」

黒

「一応話の中では出てるよ？彼とかあの子と違って感じで」

刻

「出てる内に入るかあああ!!」

黒

「ま、安心しろ。次回はお前、アースラ御一行と接触するから。」

刻

「ああ、やっと武力介入か……」

黒

「では感謝コーナー」

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を!!」

ソニア

「バルディッシュ様、眠る人様、えんヴいい様、緋水様、感想をありがとうございました」

黒

「黒の古ぼっこを楽しみにしていた皆様すみませんでした。
次の次ぐらいにそうなるんで。あんまうまくぼっこにできないかも
しれないけど」

ソニア

「じゃあまた次回!!」

022 優しさ(前書き)

題名はホントに適当です

022 優しさ

Side なのは

あの後私とユーノ君はジュエルシード回収の民間協力者としてアースラー御一行のお手伝いをすることになりました。

その間学校に行けなくなるのはつらいけど・・・頑張らないと！

side end

数日後・・・。

アースラの一室

「これで私が回収したジュエルシードとフェイトちゃんが回収したジュエルシードが二つずつだから……。」

「あの魔導師が持っているジュエルシードを合わせれば、残るジュエルシードは多くて九個か……。」

なのはがベッドに寝っ転がり、レイジングハートから出したジュエルシードを見ながら言つのを聞き、ユーノがつぶやく

さらに数日後

アースラの食堂

「今日も空振りだったね……………」

「うん…………。ひよっとしたら残りのジュエルシードはあの魔導師が全部持っているのかもしれない…………。もしかしたら結構長くかかるかもね。」

なのは…………ごめんね。」

なのはが残念そうに言うのをユーノが謝る。

所でユーノ、二人つきりなのに何もアプローチもしないのか？
お前なのはに好意持つてるんだろ？

お前なのはの借りてる寝室でもよく二人だけで話したりしてるよな？
今だってスポットは食堂とはいえ、二人つきりで食事だろ？

何こいつ？ マジありえねえ。

てめえ淫獣だろが！！ 奥手になんかなるんじゃねえ…………！！

「誰が淫獣か〜〜!!」

「ど、どうしたのユーノ君？」

「あ、ごめんなのは、君に言ったんじゃないんだ。
ただ……なんだか急に……」

「あ、あははは……（とりあえず話題変えたほうがよさ
そうなの……）」

あ、そうだユーノ君、あのね……」

二人がそんなお話をしていた時……突然警報が鳴りだし、

『エマージェンシー 捜査区域の海上にて大型の魔力反応を感知』

そんな報告が艦内に響き渡った。

ブリッジに展開されているモニターにはジュエルシードをどうにかしようとするが、完全に翻弄されているフェイトが映っていた。

「なんとも呆れた無茶する子達だわ！」

「無謀ですね。間違いなく自滅します。あれは個人が出せる魔力の限界を越えている！」

画面を見ながらリンディが呆れ半分、心配半分に、そしてクロノが呆れ果てたように言った。

「フェイトちゃん!!」

そこになのはがやって来、フェイトの様子を見、
救出に行こうとする

「あの……私急いで現場に……(その必要はないよ)」

しかしそれをクロノが制した

「放っておけば、あの子は自滅する」

「!?!」

クロノはあくまで他人事のように言つのを聞き、なのはが目を見開く

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けば
いい。」

「でも……」

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

クロノはなのはを無視しオペレーターに指示をする
オペレーターは躊躇もせずクロノの指示に従う

「私達は、常に最善の選択をしなきゃいけないの。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

リンデイが険しい表情で画面を見上げながら言う。

フェイトは、まだジュエルシードを封印しようと必死に戦っていた。

そしてなのはが歯を食いしばっていたとき

(行って!!)

ユーノからなのはに秘匿通信での念波が届いた

「!!!!!!」

(なのは、行って!! 僕がゲートを開くから、行ってあの子を!!)

(でもユーノ君、私があの子と・・・フェイトちゃんと話したいのはユーノ君とは)

(関係ないかもしれない・・・。。。だけど僕は、なのはが困ってるなら・・・力になりたい!!)

なのはが僕にそうしてくれたみたいになんて・・・)

ユーノがそう言い後ろの転移ゲートを開く

「……! きみは……!」

クロノとリンディがそれに気づきそれを止めようとするが、ユーノが2人の前に両手を横に広げて通さない意志表現をする。眼には今までにないほどの意思の表れがあった

そして……なのはの目にも

「ごめんなさい。高町なのは、指示を無視して勝手に行動します。」

「あの子の結界内に転送……!」

ユーノが印を組み叫び、そしてなのはは転送されていった。

S i d e
刻

つたくなのはのやつまだか？
危なっかしくて見てらんねえ。

……ん？来たか！！

「さて、それじゃあ、」「うん」

「ユニゾン・イン」

よし、俺も行動開始と行きますか。

両腕に拳銃形態のデバイスを展開し、空を蹴った

S i d e
e n d

《power charge》

なのははフェイトの元へ駆けつけ、バルディッシュに魔力を供給する。

《supply complete》

バルディッシュのコアが点滅しお礼を言う
それを確認し、なのはがフェイトの笑いかけ、提案する

「二人できつちり半分だよ。」

なのはの行動に戸惑うフェイト

どうしたらいいか分からずおろおろしていた時

バアアアア！！

いきなり辺りに複数の魔方陣が無造作に展開され、竜巻の威力が一気に弱くなった……

「な！！」

「何だ、この魔方陣……。。。。
周囲の魔法を……。。。。簡易的だけど……無効化してる……。。。。？」

突然の展開にアルフは驚きの声を上げる
ユーノは魔方陣を周囲の状況から分析する
しかし、前回同じようなことがあったとはいえ、信じられない気持ち
でつぶやく

なのは達は魔方陣を展開した術者を探すべく周りを見渡す
そして

「あ……黒ローブの男の子……。」
「!!!!!!!!!!!!!!」

なのはが原因と思しき人物を見つけ眩き、それによって気付いたフ
ェイトはその人物の方向へ一直線に飛んで行った

「あなたは………なにを………」
「なにをつて？ 前と一緒にだ。危ないからジュエルシードを破壊する。」

フェイトの眩きにローブの少年は答える

「そんな………」
「なんで………」

「前も言ったが、俺はヤバそうになったらジュエルシードを問答無用で破壊する。 実際今もそうだ。 暴走して、しかも共鳴し合っている。」

そう言って少年は作業を再開しようと銃型デバイスを上げようとする

「やめて………」

その時、フェイトが絞り出したような声を上げる
少年はデバイスを下げフェイトの方に向いた

「……………無茶をしてこんな風にしたのはおまえ達の方だろっ?」

「でも…………お願い、見逃してください!!!!!!」

フェイトは頭を下げ懇願する

「……………」

「私にはそれが必要なの。母さんがそれを必要としてる……………」

・私はその願いを叶えてあげたい!!!!!!」

「フェイトちゃん……………」

なのはが心配そうな顔をして呟く

「……………おまえは母親に利用されてるだけかもしれないぞ?」

少年はしばらく黙っていたがおもむろに口を開きフェイトに言う。

それを聞き、アルフは悲痛な顔をする

しかし

「それでも良い!!」

母さんのためなら……私はなんだってする!!」

フェイトは自分の意志を叫ぶ

「フェイト……」

それを聞きつぐやくアルフ

そして

「……なあフェイト……」

黒ローブの少年がおもむろにフェイトに語りかける

「え？」

「母さんは好きか？」

「もちろん。私の大切な……家族だから。」

「そっかぁ……………」

黒ローブの少年はそれを聞き、懐かしむような、そして何処かうらやましそうな声をだし、しばらく無言で動かなかったが

突然デバイスを構え指令を出す

「モード変更、『ドレミソドレ』」
《All right . Mode “dread” star
t》

「「え？」」

突然の展開にフリーズする二人

その一瞬の間に莫大な魔力が彼のデバイスの先端に収束され……

「dread」《breaker》

黒ローブの少年とそれに追隨し発せられた電子音声の直後
銃の砲身から漆黒の魔力光による強力な収束砲撃が放たれた

そしてそれは海を貫き……、
それによって発せられた水しぶきがやむと

そこには六つのジュエルシールドが浮かび上がっていた……。

「っ!」

「す……す……す……」

フェイトとなのはは目の前で起こった出来事に驚きの声を上げる

そしてその結果を確認した黒ローブの少年はデバイスを何処かに消し去り、フェイトに話しかける

「さてと……フェイト、俺が粉碎したジュエルシードのシリアルは??だったよな?」

「え……あ……は、はい。」

フェイトのどもった返事を聞き、

「よし。それじゃあ」

そう言ってローブの少年は手のひらを上にして前に突き出した。

・・・少し時は戻りアースラのブリッジ

「六個のジュエルシード・・・封印確認しました。」

エイミーが現場のジュエルシードが全て封印されたことを報告するが、クルー達は現場を映し出しているモニターに釘づけた

「な・・・なんだ、さっきのは・・・？」
「データから顧みるに・・・最初に展開された複数の魔法陣は周囲の魔力結合を弱めるもの・・・。そして発射されたのは・・・。クラスS+の収束砲撃です・・・。」

クロノのひとり言のように呟いた質問にエイミーが答える

「…………あの魔導師の魔力素質は？」

「クラスD…………いえ！！ 前回より魔力値がものすごく下がってます…………これだとあの魔導師のクラスはE！！ しかも、あの収束砲撃を打つ前からです！！！」

「な！！…………なんだそれは！！！」

理解不能な報告にクロノが叫ぶ

しかしそこにリンディがなにか納得行ったといったよつなつびやきが放たれた

「なるほどね…………。」

「え？」

リンディの方へ向くクロノ

他のクルーの数人もリンディの方へ顔を向ける

「まだ推測でしかないけど……………たぶん彼は自分の魔力を隠

「すことができるんだわ……。」
「そんなことが……まさか……。」

クロノが首を振りながら言う……。

「私もまだ信じられない」さてと……フェイト、俺が粉碎した
ジュエルシードのシリアルは??だったよな……え?」

リンディはひとり言のように説明するが途中で聞こえて来た、少年
が言った内容が気になりそれを中断する

「なんでそんなこと聞いてるんだ?」

クロノも……と言うかほかのクルーも全員モニターの方へ向く

『え……あ……は、はい。』
『よしそれじゃあ』

そうやって黒ローブの少年は掌を上にして前に突き出す

そして・・・

『Creation start・・・』

コートの子が呪文を唱え始めたすぐ後

「膨大な魔力反応を確認！・・・SSS以上です！！
収束地点は・・・彼の掌の真上です・・・」

エイミーが信じられないと言った表情でリンディの方へ振り向く

そして

「くくくなに！！！！」

彼の掌の上で翻弄していた魔力が収まるとそこには・・・

022 優しさ

黒ローブの少年は手を出し、呪文をつむぎだす

『Creation start』《物質創造開始》

Set object “Jewel seed Serial
number??” 《対象を設定『ジュエルシードシリアル？
』》
Form Magic square 《必要術式を展開》
Magical power inject, start 《術
式に魔力注入開始》

呪文によって魔力が掌の上に集まって行き、バチバチと電気(?)
を発生させながら形をなしていく

そして、

『completion 《完成》』

現象が収まると、彼の掌にジュエルシードシリアル??が出来あが
っていた。

「ほらよ。」

それをフェイトに投げ渡す

「あ。」

フェイトはそれを慌てて受け取り、それを眺める
他の三人もそれを覗きこむ

「ねえ、私の目がおかしくなったのかな？そのジュエルシード、
？って刻印されてるように見えるんだけど。」

「大丈夫・・・私もそう見えるから・・・」

「わ、わたしも」

「いや、どう見たってジュエルシードシリアル？？だろうが。」

呟くアルフにフェイトとなのはが答える

それを面白そうに見ながら（表情は見えないが）少年が答え

そこにユーノが尋ねる

「ねえ、ジュエルシードシリアル？？って君、粉碎したよね？
僕の目の前で。」

「えっと・・・お前の名前なに？「ユーノ」スクライア」ユーノ
ね。で、確かに俺はしたがそれがどうした？」

「じゃあなんで・・・此処にあるの？」

「いや、俺お前らの目の前でさっき創ってただろうが……」
。 何現実から目をそらすうとしてんだよ。」
「作った……」
「ん？ ああ。 まあお前らじゃこんなふうに創るのは無理か。
でも設備とかがあつたらお前らでも作れるだろ？」

少年の言葉に反応しユーノが叫ぶ

「できないよ!!というか、何で君はそんなことができるのさ!?!」
「いや何でって言われてもなあ……研究して仕組みが分かつたからとしか。 ナンバリングによる違いは無かつたから刻印変えればいいだけだったし。」
「ジユエルシードの仕組みを……解析した……?」
「え? …お前らひょっとして……そんなこともできないの?」
「できないよ!!だから何で君はそんなことができるのさ!?!」

心底意外そうに言う少年

その言い分にもはや詰め寄りそうになっているユーノ

「あ……もういいや」
「良くないよ!?!」
「しつこいな……。それよりも早くあそこのジユエルシード……
を……」

クロノを軽くいなしながらジュエルシードを回収させようと振り返る少年。

だが、その言葉を途中でやめ、（おそらく）睨む

他の四人も少年につられ、そちらを見ると

「あ……………」

「クロノ……君……？」

そこには先ほど少年が封印した六つのジュエルシードを持つクロノがいた

そして彼はそれを自分のデバイスに取り込む

「その魔導師達、アースラに連行させてもらうよ。こっちに来い。」

クロノが命令するが、だが五人とも動こうとはしない

クロノはいらいらした様子でなのは達に言う

「君達もだ。 ああ、命令違反で勝手な行動をしたんだ、後でリン
ディ提督のお叱りがあるからな。 さあ早くしろ!!」

そこで少年がやっと口を開いた

「お前……何様のつもりだ？」

但し冷たい声で。

だがKYなクロノは気付かずに答える

「僕は時空管理局執務官、クロノハラオウン「ああ、そんなことを聞いたんじゃない」なに？」

「俺が聞いているのは、なんで今来たばかりのお前が、そのジュエルシードを勝手に全部手に入れようと……じゃなくて手に入れ、この場の主導権を握ろうとしてるんだってことだ。

お前が勝手に手に入れたジュエルシードを手に入れる権利は、俺かなのはか、ユーノか、フェイトか、アルフにしかないぞ。

手伝いも、助けに来もしなかったやつが何しやしやり出てきてるんだ？」

「何を言ってるんだ!! 僕達にはロストロギアを回収し、しかるべき措置を持って保管する義務がある!!!」

「お前こそ何を言ってるんだ？」
「なに？」

馬鹿にしたように言う黒ローブの少年
クロノは眉をひそめる

「此処はおまえらが言う第九十七管理外世界『地球』何で管理をしていない世界で、権力を振りかざそうとしてるんだ？ ま、お前らなんかに管理してもらいたいとも思わねえがな。」

「貴様、馬鹿にしてるのか！？」

「俺の正直な感想を言っただけだ。で、さっさとジュエルシールドを返してくれないか？ こっちで分け合うんだから。」

「誰が貴様なんかに渡すか！！さあ、さっさと来い！！」

それを聞きこれ以上問答するのがたいぎになり、ため息をつく少年
そしてなのはの方を向き訊ねる

「はあ……おいなのは。あいつはお前の仲間か？」

「う・うん……あれ？ 私名前言った？」

「最初に合った時お前フェイトと自己紹介してただろうが……まあとにかく、あいつがお前の仲間ならお前の分のジュエルシールド、悪いけどあいつからもらってくれ。ほらよフェイト。これをやるよ。」

そう言って少年は三つのジュエルシードをフェイトに渡す

それを受け取りフェイトはつばやく

「これは……」

「俺の集めてたジュエルシードだ。言つたる？ 研究が終わつたらやるつて。研究は終わったからな。もう俺はそいつを手に入れることにも保持することにも興味は無い。」

「あ……ありがとう……」

「さっき言つたる、俺はもうそれはいらないんだ。破壊するよりは必要としてるやつに渡した方がずっといい。さ、行きな。母さんが待ってるんだろ？ ほめてもらえたらいいな。」

「あ……うん！！ 行こうアルフ！！」

「ああー！すまないね。」

「良いつてことよ。」

そう言ってこの場から逃げようとするフェイトとアルフ

黒ローブの少年の行動に呆けていたクロノだがそれを撃ち落とそうとデバイスを構える

「あ!! ……え?」

それに又立ちふさがろうとするのはだが、少年はそれを片手で制し、二丁のハンドガンタイプの武装を再び展開する

そして

ドガガガガガガ

クロノが撃った魔力弾をすべて打ち抜き、爆発させた

魔力残滓が立ち込め、視界を閉ざす。そして、それが晴れるとフェイト達の姿は何処にも見えなくなっていた

S i d e 刻

フェイトは行ったな………さてと!!

「貴様、何をしてくれたんだ!!」

このKY馬鹿クロどうしょ?

正直これ以上相手するの面倒なんだよな………適当に切り上げて逃げようかな……

533

「おい、無視をするな」

「ああ……わり、ちよつと考え事してた」

「貴様………何をしたか分かってるのか!!」

「何をつて………権力振りかざしてせまってきた男ンタイから母親
思いの純粹な少女を逃がしてあげました?」

「何を言ってるんだ、あいつ等は犯罪者だぞ!!」

「………そうなのか?ちなみに罪状は?」

「公務執行妨害だ!!」

「………一応聞いとくが、それがあつたのは管理世界内なんだよな?」

ま、知ってるんだけどさ、

「この世界だよ。」

「そりゃ罪にやならんだろ。 さつきも言ったが此処はおまえらが言う第九十七管理外世界『地球』。 わざわざ管理外と自ら名を打っておきながら、そこでお前らの法律や権力を適用して公務執行妨害なんて、おこがましいにも程があるぞ。」

「僕たちは皆の幸せのために行動してるんだ！！その邪魔をする気か！！」

「皆ねえ・・・俺には、あの子が幸せになるよう行動してるようにはとうてい聞こえないんだが？」

「何言ってるんだ、彼女は犯罪者なんだ。 そんな奴が幸せになる必要がどこにある。」

・・・は？

・・・今、こいつ・・・ナンテイッタ？

「さつきの子は、母親に甘えたくて頑張っている子供だぞ？ そんな奴に幸せになる必要はないとはよく言ったもんだな。」

「は！！ 当たり前だろ。 犯罪者はどう言おうと犯罪者だ。 弁解の余地なんか無いよ。」

ホウ・・・・・・・・ナルホド・・・・・・・・

「それがたとえお前の家族や知り合いでもか？」

「当たり前だろ？ ま、僕の知り合いの人達が犯罪なんかには手を染めるわけ無いけどな。」

へエエエ・・・・・・・・ズイブンナジシンダネエ？

何も・・・・・・・・何一つとして・・・・・・・・知らないくせに！！

「さあ、もう良いだろ！さっさと来い！！」

「だが断る！！」

「なに！！」

なるほど、これが憤怒か。

憎しみとはまた違って・・・・・・・・マジでムカついた。

本当はまだ武力介入なんかするつもりはなかったけど・・・・・・・・

「遊んでやるよ!! クロノハハラウン!!」

『ドレッドブレイカー』

簡単に言えばSTBの超強化版。収束の様子はダイバインバスターの方が似てはいるが
また、威力は『エア』を使った『エヌマ・エリシユ天地乖離す開闢の星』の方が強い。

刻の分野上たぶん二度と使わない。

022 優しさ(後書き)

黒

「022話でした!!」

刻

「お疲れ様。」

ソニア

「後半全部書き直したんだね。」

黒

「ああ……なんか前のやつ展開に無理やり感があったからな。」

まあ、今回もなんだけど、だいぶ緩和されたと思う。」

刻

「そつだな、俺の心象描写も削ったり、新たに追加したりしたもんな」

黒

「ああ……ホント疲れたよ……」

ソニア

「はいこれ。」

黒

「ん？なんだこれ？」

ソニア

「HAZUKI様から千草さん特製紅茶だってさ。効能はリフレッシユ、疲労回復などだって。」

黒

「どれ……（ズズ……）……は、落ち着く……。ありがとうございます。」

刻

「さて、では感謝コーナー

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を……！」

ソニア

「バルディツシュ様、HAZUKI様、眠る人様、僚様、緋水様、匠様、感想をありがとうございます。」

黒

「後突然ですが、アンケートは今週で閉め切ります。詳しく言うと6/27AM00:00を持って閉め切ります。」

ソニア

「ではまた次回……！」

023 クロノとの戦闘(ただし一方的)(前書き)

ついに1000pt突破!!

ありがとうございます!!!

023 クロノとの戦闘（ただし一方的）

Side 刻

「遊んでやる……だど？」

まあ安心しろ。

チヨオオオオオオオオオオオオオオオオオットだけプライドをずたずたに引き裂いてやるだけだからよお。

「ああそつだ！！ ああ……、なのはとユーノは離れてる。それともクロノにつくか？」

「あ……あの……。」

「え……えつと……。」

「さつさと戦闘隊形につけ。この犯罪者を捕縛するぞ……！」

オイオイそりやないだろがクロノ
何考えてんのお前？

「「え……あの……えっと……」」

あゝあ、二人ともどうすればいいか分からずどもってるよ
ま、仕方ないだろうけど

ってかさ、まあ殺^やることはやってるんだけど、

「俺いつの間に犯罪者になったんだ？（公務執行妨害だ）いやだからそれは……ったく。にしても何考えてんのお前、俺わざわざお前指名したのに戦闘員追加しようとするか普通？ しかも自分から命令して戦闘意思の無い子達を強制に加えて……」
よつと。」

俺はなのは達の方へ腕を向けかろく振りながらアースラへの転移術式を発動する

ビュン

「な！？なのは達をどこにやったー!!」
「うるさいな・・・アースラーに転送したただだよ。
それにしてもお前らってさ・・・」

Side リンゴイ

ジョン

「あ、あれ、ここ・・・」
「なのはちゃんー!!」

彼が転送させたの!?

『な!?!なのは達をどこにやった!?!』

『うるさいな……アースラーに転送しただけだよ。
それにしてもお前らってさ……』

そう言っつて彼は……

『人の体を無断でスキャンするなんてどういう見だ!?!?!』

そう叫び……私たちの見てる方へ腕を伸ばしてきた!?
何で分かったの!?

ジジ、ザザ、サツザ、ザー、ジジ……

そしてその瞬間モニターが乱れ、すぐに戻った
……今のは?

『?……腕を振り上げて何したんだ?』
『べつに……ただ……かっこをつけて見ただけだよ』

違う!!.....これは

「大変です!!!!」

「一体どうしたの!?!」

「どうやってかは分かりませんが、さっきの一瞬でアースラーがハッキングされて.....この事件にかかわる今までの記録が全て消去され、さらにこれからの情報が一切書き込めなくなっています.....」

「何ですって!!!!」

『さてと、これで心おきなく力が使える。』

『? 何を言ってる?』

『さあ、なんだろうな?』

クロノ、気をつけて。

S i d e
刻

アースラーのシステムにハッキングしていじったから俺のデータを収集される恐れはない。
はつきり言っただ俺の能力が今管理局の上層部に報告されるのは拙いからな。

「さーて始めますか。 あ、そうだ、つまないから俺、通常の1 / 100000000ぐらいで戦ってやるよ。」

「はあ？」

「その状態の俺倒すことできたら質問に答えてやるよ。 よかった

ね。 出血大サービスだ。 これは買いたYO！」

「ば……馬鹿にしゃがってー!!!!!!」

0
2
3
クロノとの戦闘（ただし一方的）

「ハッ！」

クロノの先制攻撃！！
クロノが魔法弾を一発撃つ。

「（四番バッター……………振りかぶってええええ）」

刻はホームランバットを取り出し構える

「打ちました!!」

クリーンヒット!!

クロノの魔力に自分の魔力を乗せクロノに打ち返した!!

「クッ!!」

クロノは何とか避ける

「うおおおお」

クロノは突撃をしかけた!!

ズバン!!

しかし刻は体をひねりそれをかわす
そしてその回転を利用しクロノの背中に強烈な蹴りをくらわせた!!

もろに入りふつとばされるクロノ

だがある程度まなれたところで態勢を立て直す

「ステインガースナイプ・マルチプルシフト」

クロノによる再び遠方からの攻撃

今度は多数の魔力弾がクロノの周囲に一度に浮かび上がり一気に放たれた！！

ズガアアアア

だが刻に寄って放たれた砲撃によりそれらは拮抗もせず押し負ける
！！

「うわあああ」

そしてクロノはもろに食らった！

「くそ………な！！」

もろに食らったがなぜか無事(?)のクロノ!!

だが気付くと目の前には刻がいた。その手には魔力で作成した非殺傷の二本の日本刀を展開している!!

「(ソニア治癒術式強化よろしく)」

「(了解)」

「ほらほら、三散華・追蓮、虎牙破斬、散沙雨、絶破烈氷撃、幻狼斬、峻円華斬、蒼牙刃、ダオスコレダー、魔人闇、(ガシャン)アーチェリーモードに変更)(エレメンタルマスター)」

「ぐわあああ……」

刻による連続攻撃のラッシュ!!

クロノは全てをもちに食らいふつとばされる!!

「はいつぎ以下省略……バーストライク、スプレッド、ライトニング、ネガティブゲート、ホーリーランス、サイクロン」

「うわーーーーー」

刻による詠唱魔法の嵐がクロノに襲いかかる！！

クロノはなすすべも無く翻弄される！！

「くそ！！・・・何処に・・・」
Let's see how
you dance！！（踊れ！！）「え？」

「はああああああ」

攻撃がやみ、刻を探すクロノ、だが声が聞こえてきた方向を見ると、二丁の銃を構え、オーラを発しながら無数の魔力弾を打ち出す刻がいた

クロノが放った何倍ものスピードで放たれた魔力弾をクロノはまともにも食らいまくる！！

そして魔力残滓が立ち込め・・・それが晴れるとボロボロの姿になったクロノが出て来た

だがまだ元気である！！

それもそのはず。刻はソニアに頼み自分の攻撃全てに治癒効果を付加してもらっているのだ。しかもソニアによりリフレッシュ効果付き！！

簡単に言えば刻にやられればやられるほどクロノは元気になるのである

・・・何も知らない人から見れば気持ち悪いこと間違いないが・

しかしそんなことに気づかないクロノは刻の方を睨みつける

「ほらほら、最初の威勢はどうした？」
「くそお・・・」

クロノは再び多数の魔力弾を放つ

それを全て弾き飛ばしながら刻は敗北フラグなどがん無視で、さらに挑発する!!

「ははは……そうそうその調子」 さあ来い!! 実は俺、
一回刺されれば死ぬぞ!!」
「ふざけるな————!!」

さらに憤るクロノ

そしてその後、笑いながら踊るように動き、攻撃する刻の姿が展開され続けた

S i d e リンディ

クロノとあの謎の黒ローブの魔導師が戦ってるのだけど……

「一方的だね。」

「うん、接近戦も、遠距離戦も彼の方が全然上……それには彼の使ってる剣術も魔術も見ただこと無いものばかりだ……って言うか彼まじめに戦ってない……。」

「うん・・・あれでほんとに百万分の一なのかな・・・？」

「一応魔導師ランクはCくらいまでは上がってるんだけど・・・」

「Cってどのくらい？」

「あなたやクロノ君よりずっと下・・・。一応魔導師の強さはそれだけじゃあ決まらないんだけど・・・。というか多分彼コントロールしてるから・・・。」

そう、クロノは一方的にやられていた。

勝負にすらなっていない。

もしあれで本当に1/100000の実力なら、彼の本気っていったい？

「で・・・でも、クロノ君もすごいよね・・・あんなに攻撃されるのに・・・むしろ元気になってるように見えるよ・・・。」

なのはちゃんが苦笑いしながら言う。

そこにエイミィが複雑な表情をして言った

「ううん。違うのなのはちゃん・・・ほら、これ見て。これクロノ君の現在の状態を表してるんだけど・・・ほら、彼が攻撃した瞬間、疲労回復などの現象が起こってる。たぶん、彼、全

ての攻撃に治癒と癒し効果のある魔法を付加して攻撃してるの・・・」

「・・・ってことは、完全にクロノ君・・・遊ばれてる？」

「・・・そう言うことになるね・・・」

私たちはそろってため息をつく

「とりあえず・・・結果は見た・・・というかすでに出てるわ。どうかして戦闘をやめてもらってお話をしてもらわないと・・・」

「そうですね・・・」

どう切り出せばいいかしら・・・？

と考えていたその時、

『あー、お楽しみのとこ悪いがちよつといいか?』

突然黒ローブの少年の横にモニターが出現し、中に人のよさそうな男の人が現れた・・・

あれは・・・だれかしら?

『何だよカルマ、楽しんでたのに。　ってか今度の通信はこのタイプかよ・・・。』

そう言いながら彼はクロノをバインドで封じた・・・・・・・・無意味なほど嚴重に。

『おまえ結構Sに目覚めたな・・・・・・・・。』
『あんだけ荒んだ所いればこうもなるって。』
『それもそうか・・・・な?　まあいい、アドリアン・ロサーノから救援要請だ。　第一【世界】(レディアント)にイクストが現れた。』

それを聞いて、あからさまに少年は身を引いた

『げ、あいつから!!!.....なあ、ぱっくれていい?』

『良いわけ無いだろ。おまえはもう他の【守護者】の実力とも遜色がなくなってきたるんだから。』

『でもさーあいつ助けた後で絶対、「ありがとうお〜、おかげで〜うわたしはたすかった〜。やはり同じ運命を背負った者同士のきずな、じ・つ・に・すばうらしい〜。さあ、わたしと熱いヴエ〜ゼをし合おうではないか。(c v 若本規夫)』って言ってくるぞ。』

『まあ.....我慢しろ.....あれで結構有能な奴なんだ。』

『そう言うことは、遠くにいるから言えるんだ! あいつマジでうざいんだぞ!!! 無駄にうっとうしんだぞあいつ!!! まあ知ってるだろうがさ!!!』

『あははは..... まあ頼むよ。今度なんか願い事叶えてやるからさ。』

『たく.....まあいい。ちょうどこっちも頼みたいことがあったし。』

『すまないな、たのむ』

そしてモニターが消えた。

『それじゃークロノ、俺、用事が出来たわ。もう俺の勝ちでいいだろ。』

『僕はまだやれるぞ！！！！』

『分析はキチンとしましょっと』

そして彼が無造作に腕を振ると

『ビュン』

(ビュン)

「うわー！ー！」

クロノがいきなりブリッジ現れた……いえ、転送させられたのね。

『おーいクロノ。』

そしてあの少年はまたなぜかこっちの方を向き喋った。

『とりあえず警告しとくぞ〜全てをおまえの物差しで測るな。はつきり言ってお前の言ったこと自己最上主義とあまり変わらんぞ。後お前、無理やり連れて行こうとしたお前の行動、おまえらの法律で言えば90%以上そっちに非がある。そこんとこちゃんときまえる。それと相手の実力をよく見ろ、すぐ死ぬぞ。では・・・』

ズズズズ

「これは次元震・・・いえ・・・次元断層!? 彼の周囲に超局地的な次元断層ができてつあります!!!」
「なんですって!?!」

『じゃあな〜』

そして彼は閃光とともに消えた。

本当に彼は・・・・・・・・一体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『三散華・追蓮、虎牙破斬、散沙雨、絶破烈氷撃、幻狼斬、峻円華
斬、蒼牙刃、ダオスコレダー、魔人闇、エレメンタルマスター、バ
ーンストライク、スプレッド、ライトニング、ネガティブゲート、
ホーリーランス、トルネード』

テイルズの技と魔法です

023 クロノとの戦闘（ただし一方的）（後書き）

黒

「023話でした!!」

刻

「結構改良されたな!!」

ソニア

「具体的に言うとはこってるあたりが!!」

黒

「おう!!……でもそのあとがあんま納得行ってないからまたあとで直すかも……。」

刻

「ま、無理せずに頑張ってくれ。」

黒

「分かってるよ。」

ではこの作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を!!」

ソニア

「バルディッシュ様、ルフアイト様、HAZUKI様、緋水様、ソラト様、僚様、ソロモン様、感想をありがとうございました!!」

黒

「ではまた次回!!」

024 その後？

此処はプレシアの居るフェイト達の基地、時の庭園のとある広間
プレシアは玉座に座り、フェイトは部屋の中心に立ってる。

「すみませんジュエルシードを回収できませんでした、手に入れたのは謎の魔導師からもらった四個だけです……」

フェイトが怯えながら報告する。

プレシアは、それには答えず宙に佇む九つのジュエルシードを見つめながら

「回収したジュエルシードの数は全部で九つ……」

とつぶやく。

「い、ごめんなさい、母さん……」

フェイトは顔を俯かせ、また震えだしながらプレシアに謝る。
折檻が始まると思ったのだ。

だが、

「……残りジュエルシードを必ず回収するのよ。
いいわねフェイト？」

そうプレシアは言っただけで終わった。

「え？……
あ……はい……」

呆けた顔でフェイトは返事をする。

いつもならこのような失態を犯した場合、
いや、そうでなくてもプレシアの折檻が始まるはずなのに……
……なのに今回、それが無かったからだ。

「何をボーツとしているの？
早く行きなさい」

「は……はい……」

プレシアに言われてフェイトは急いで部屋を出て行くところ。

そこへ、

「ああそうだ。……フェイト。」

「え？……あ……はい。」

プレシアが声をかけフェイトが立ち止まる。

「……………ジュエルシード集め御苦労さま。
私のためにありがとね……………。
さあ、行きなさい。」

プレシアが思いもよらぬ言葉をフェイトに向けた。

「あ……………はい!!!」

フェイトはプレシアの予想外の御礼に茫然とした後、嬉しそうな顔で扉の外に向かった。

そして扉の前で待ってたアルフも、プレシアのお礼の言葉に度肝を抜かれていたが、我に返り急いでフェイトの後について行く

そして二人が見えなり、プレシアだけとなったはずのその部屋に、

「へー、ずいぶん優しくなったじゃないか。」

どこからともなく現れた、黒いローブを目深にかぶった小学生くら

いの男の子の声が響いたのだった……。

024
その後？

Side テスタロツサ

Side 刻

あの後俺は速攻で用事を済ませここに転移してきた。
どうやら間に会ったらしい。
ちよつと二人が会話をしているところだ。

「何をボーツとしているの？
早く行きなさい」

「は……はい……」

(どうやらプレシアさんはフェイトちゃんに折檻をする気はないみたいだね。)

(ああ、これなら及第点かな?)

「ああそつだ。……フェイト。」

「え?……あ……はい。」

ん?

プレシアがフェイトを呼び止めたぞ

「……………ジュエルシード集め御苦労さま。
私のためにありがとね……。さあ、行きなさい。」

プレシアがフェイトに御礼を言った!?

(ねえ……………今プレシアさんフェイトちゃんに……………お礼を
……言った……………よね?)

(ああ!!)

「あ……………はい!…!…」

そしてフェイトが駆けていく。

(フェイトちゃん嬉しそうだったね。)

(そりゃそうさ、多分フェイトが望んでいたことの一つがかなったんだろっからさ。『お母さんにほめられたい』って言う願いが……な。)

(そうだね……………)

さてプレシアとお話でもしますか(魔王式に非ず)

いつの間にか彼がまたここに来ていた。

「ほんと、あなたはいきなりね……。」

「別に良いだろ。」

そっけない態度で返してきたわね……

でも、

「そうね、……あなたにもお礼を言わないと。貴方の御かげで大切な物に気付く事が出来たわ。

ほんとうにありが……。うう……。!!ゴホ!!　ゴホ!!」

私は突然苦しくなり、口を押さえて咳込む。

手を見ると赤く染まっっていて、床には血の池ができていた。

「……。私には……。もう時間がない……。」

やっと気付いたのに、遅すぎた……
そう思うと私の目に涙が浮かんできた。

そこへ、

「まったく、狂気の次は絶望か？ ほらこれを飲め。」

そう言って彼は二つの瓶を渡してきた。

「これは？」

「病気の進行を遅らせる薬と、体が健康な状態だと感じるようになる薬だ。」

これであと数年は生きられるし、見た目は元気に過ごせるはずだ。」

私はその二つを飲む

「あ……」

すぐに私の体が軽くなった。
すごい効き目だわ……。

「さて、お前はどつする？自首でもするか？それともフェイトと逃げるか？
それとも・・・フェイトを突き放し、なにも教えぬまま、罪をすべてかぶり何処かで一人で死ぬか？」

私が薬を飲んで効果が表れたのを確認し、そんなことを彼は言ってきた。

でもそれぐらいしか選ぶ道は無いわね……………。

「ま、今結論を出せとは言わないさ。でもできるだけ早く出せ、時間はあまりない。

ああ、たとえどれを選んで俺はバックアップしてやるよ。」

「ごめんなさい……………何から何まで……………」

「別に良いさ、俺はフェイトを助けると決めた。決めたからには何が何でもやり通す。

……………たとえどんな手を使おうとも……………それだけさ……………。

そう言って彼は消えた

そしてわたしは考える

こんな私といてもフエイトは幸せにはなれない・・・

・・・あの子が幸せになるためには・・・

・

024 その後？（後書き）

黒

「024話！！すみませんちょっと時間がないんで簡潔にやらせてもらいます」

刻

「では感謝コーナ。

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を」

ソニア

「餅缶様、猫缶様、ロキ様、緋水様、バルディッシュ様、HAZU K I様、幻想の庭師様、ソロモン様、感想、誤字訂正、アンケートをありがとうございました！！」

黒

「ではまた次回！！」

「どじするっこの作者？」

「これ食べさせてみる？」
「卵焼き」「モドキ」。
「ん、ま、そうしてみるか……」。

025 その後？

あの後なのはとユーノはリンディーに勝手な行動をしたことについて怒られていた

「……………しかし結果として今回のことでいくつか得るものがありました。」

よって今回のことは不問とします。」

「……………」

「但し……………二度目はありませんよ。いいですね。」

「はい。」

「すみませんでした。」

なのはたちの返事を聞きリンディーは満足そうな顔をしたが、又すぐに険しそうな顔に戻す

「さて……………問題はこれからね……………クロノ、事件の大本について何か心当たりは？」

「はい、エイミー、モニターに。」
『はいはい。』

そして机の中央に女の人が映し出される

「……………そして彼女らはこの女性……プレシア・
テストロツサ……がフェイトの母親であり今回の黒幕だと聞いた。」

「家族と行方不明になるまでの行動は？」

「そのあたりのデータは、きれいさっぱり抹消されちゃってます。
今本局の方に問いあわせて調べてもらっていますので。」

「時間はどれくらい？」

「一両日中にはと……………」

リンディーがしばらく考え込む

「フェイトちゃんはあれだけの魔力を放出した後だからしばらくは

来ないでしょう。

報告を待つしかないわね……でも、これ以上に分からないのが……

「三人目の……魔導師ですね……」。

「そつなのよねー」

つなげるようにエイミィも発言し、リンディが仰ぐように答える

025 その後？

Side アースラ

「とんでもなく強かったね……。」

「うん、クロノが完全に遊ばれてたからね……。」

「そ、そんなこと無い！！ 第一僕はダメージをあまり受けなかつたんだ！！」

なのはとユーノの感想にクロノが必死に反論する

だが

「クロノ君……あれだけの攻撃でダメージがあまりないなんておかしいと思わなかった？」

クロノはエイミイの発言を聞き、え？と言った顔をし、そして黙ってしまふ

「証拠は無いんだけど……あの時の状態をモニターしてたとき、あの子の攻撃が当たることにクロノ君のメンタルがよくなつて行つてたんだよ？」

「え？」

「多分あの子、全ての攻撃に治癒効果とかを付加してたんだと思う、魔力まで回復してたから相当高性能な魔法だよ……」

「つまり、かんぜんにサンドバツク扱いされてたつてことだね。」

「そ、そんな……」

「クロノ。はたから見たらあなたの負け、と言うより、勝負にすらなっていないのは明白でした。」

あの後彼も言つてましたが、状況把握と相手の分析は客観的に、冷静にして下さい。

殺されてたかもしれないんですから。」

エイミイ、ユーノ、リンディの言葉によりうなだれてしまふクロノ

「あ……………すみませんでした……………」

「それに今回最初に攻撃したのはこちら……………フェイト側の事情を彼が知らなかったとすると……………私たちに非があるのは彼の言う通り明確なのですから。」
「す……………すみませんでした。」

あ、さらにうなだれた……………
心なしかしおれたように見える……………すすけて見えるって言った方がいいか？

それを見たりンディーが気を取り直したように発言する。

「彼について何か分かったことは？」
「なにも……………彼の使った魔法に該当するもの……………と言うより酷似するものすらありませんでした。データが記録できないので完全にその場で見たデータの断片だけからの判断なのですが……………」

エイミィがすまなさそうにするけどそれを慰めるようにリンディーが言う

「でも、たとえば彼の使った魔法のデータがそろっていても、ヒットしたかどうか怪しいわね……………時々一瞬彼の周りに展開されたあの魔法陣……………」
あんな形の、私は見るどころか……………聞いたことすら無かったから……………」

「僕もです。術者の周囲を帯状に取り囲み発動する魔法陣なんて聞いたことはありません。それに展開されていた術式もミッドでもベール力とも全く違いました……………」

「それにもすごい速さで発動させてたね……………」

ユーノやなのはの意見を聞き、クロノも少し自分の相手との戦いを考え直してみる

「そう言えば……………そうだったな……………
属性すら違う魔法をあんな……………連射と言っていていくらの速さで発動させるなんて……………それに僕の知らない属性もあった気がする」

「ただ単に複数の属性変換をそれぞれ使える人は過去にも例があったけど、あんなふうに見える人はいなかったな……………みんな属性を変えて発動するのにある程度インターバルがあったから……………それにクロノ君の気のせいじゃなかったよ。あの子は確かに『火』『雷』『氷結』以外も使ってた。」

リンディはエイミィの発言にうなづく

「ええ。それだけでもとんでもないことなのに、さらに彼はなのはちやんやユーノ君の前でジュエルシードを作った。ただ彼の力だけで……」

なのはは目の前で起こったことを思い出す。
あれにはびっくりしたの……と。

「そしてその後、『機材があればお前らでもできるだろ?』と言ってきたり、『ジュエルシードを解析した』と言っていた。そして最後、次元断層を発生させてのおそらくは転移、そこから考えると……」

ユーノも難しそうな顔をしながら自分の考えを言っていく

「彼はジュエルシードのようなレベルのロストログアでさえ解析する手段を持っていて、しかも一人だけで何の機材も使わずに作るこゝとが出来、さらには次元震や次元断層を任意に、制御して発生させるだけの技術を持っているということですよ。むしろこゝちの技術力の低さに驚いていたっばいですから……」

そういえばそうだったかもとなのはは思う。
だが彼女にとって……………

「私からすれば、ここの技術力でさえ、理解不能な域なんだけど……………」

ユ一ノが苦笑いをして言う

「まあ、そうだろうね……………」
でも僕、管理局の技術が一番なんだと思ってました。」

「私も……………」
「僕もだ……………」

「でも確かに存在した。そして戦闘中に彼に通信してきたカルマと言う彼の上司らしき人物、【守護者】と言うおそらくは組織またはチームの名前
それから考えると……………」

「彼と同じ……………またはそれ以上の技術を持った人が他に……………
……………という事ですな。」

それを聞いたユーノが考えるように言葉を紡ぐ

「守護者なんて組織……確か数年前反管理局組織にそんなのがあるって聞いたことはあるけど……」

「名前が単純だからおそらくその組織は違うわ。口惜しいけどあんな技術を持つてたらとつくに攻めてきてるはずだし……」
第一ユーノ君の言ってる組織は、すでに壊滅してるわね。この前聞いたことがあるわ。

過激過ぎて被害が甚大なことで有名だったんだけど……原因不明で、二年ほど前に壊滅したの。
主要なメンバーは全員殺されてたわ。」

その時クロノがふと思いついたように言った。

「ビハインドが裏から手を貸しているってことはありえないか？」

なのは以外の人たちはそれぞれ考えるそぶりを見せたり顔をしかめたりするが、

なのはは……ビハインドって何？と首をかしげていた。

「クロノ、そういうことを言っただけじゃありません」
「しかし艦長……」

「あの一……」

「ん、何なのはちゃん？」
「ビハインドって何ですか？」

それを聞いたリンディーは「え？」と少し驚いた後微笑みながら言った。

「そういえばなのはちゃんは知らないんだったわね。」
「ビハインドってのは次元世界を股に掛ける総合企業のことだよ。その技術は管理局と同等とも……超えているとさえも言われている。」
「ちなみに会社の理念は「ゆりかごから墓場まで」、うたい文句は「いつもあなたの真後ろに」だよ。」

なのはは引きつった表情を浮かべ思う………なんかそれって……

「ストーリーみたいなのうたい文句ですね……」

ユーノも苦笑いをする

「でも市民にはものすごく人気があるんだよ。会社も次元世界一・二を争うものだしね」

「そうなんだ……でもそれをなんでクロノ君は？」

「たまに黒いうわさがあるのよ……でもそれを言うのは、管理局員だけなのよね。」

「人員が少ないのがたぶん理由なの……あそこには良い人員がそろっているみたいだから……。」

「それでね、一度管理局が視察に訪れて、完全にクリーンだったんだけど、そのことについて疑問を言う人たちがいるの……クロノみたいに……。」

「ふん、ま、そうでなくても【守護者】なんて偉そうな名前、どうせ奴らもろくでもない奴らの集まりさ。」

クロノの言葉になのはは思う。

「それを言ったら管理局だってそうじゃうような……管理」って付いてるから。」

「な……なんだ（クロノ） あ……。」

「なのはちゃんの言う通りよ、名前だけで判断してはいけないわ。」

リンディに言われクロノが渋々引きさがつた

「とりあえず彼らの会話から分かったことは、
？ 彼らの敵にイクストと言う者がいる。
？ おそらくそれぞれで担当している世界が一つ、または複数ある。
？ 第一世界と言う場所の担当はおそらくアドリアン・ロサーノと
言う人物。

？ 彼は『不動の意志』と呼ばれていて、性格がかなりあれ。
？ あの黒ローブの少年はその人が苦手。
？ その子の担当する世界はおそらくこの周辺。
？ 彼自身も守護者の一員。
？ 構成人数は少なくとも三人。
？ 彼らの上司にカルマと言う者がいる
つてとこかしら？」

リンディが皆に確認を取る

なのはやユーのが（性格がかなりあれって………あ、でも
もなんかわかるかも（の）（）と苦笑いをする。

「彼たちの行動はいつたい？イクストって奴らからから何かを守っ
ているのか？」

クロノがあごに触れながら言う。

「クロノ君、イクストって？」

なのはが聞くがクロノは首を横に振る。周りを見渡してもみな同じだ。。。

そしてなのはやユーノもは考える

守る。。。。そういえば私たちのところに来たのも危なそうな時だけだった。。。

最初は注意しにだったけど。。。。

でもとにかく

「分からないけど、悪い人じゃないと思う。だってフェイトちゃんのお願いを聞いてくれてたし、ジュエルシードを研究が終われば渡すっていう約束は守ってくれたもん。全部フェイトちゃんに渡してたけど」

「でも、クロノがあの場合のジュエルシードを全部取っていったことや、フェイトがあんなに懇願してたのから考えると、納得は少しするけどね。。。。」

「うん、私が彼でも多分全部渡してた。。。。」

「な。。君達「私もそうしてたかも、かわいそうだったから。」

エイミイ!？」

なのはとユーノの発言にクロノは抗議の声を上げたが、エイミイの
追い打ちにびっくりしていた

まあはたから見ればそうもなるだろう。

「まあ、そうね。ならこっちから敵対しない限り彼から攻撃してこ
ない、と言う方向でいいかしらね。」

さて、アースラの整備もしないといけないし……。」

それを聞いたクロノが苦虫をかみつぶしたような顔をする。

「そういえば……そうでしたね。こっちから見たら腕を振り上げ
て何かをつかむような仕草しかしてなかったのに……。」

「でも実際は、その腕は見ていたこちらの方に向けられていて、そ
の瞬間ハッキングされた……エイミイ彼が何をしたか分かる？」

「すみません……なにも……方法の断片さえ……。」

「ま、仕方ないわね……復旧までどのくらいかかり
そう？」

「技術班が必死に解析してるんですがめどは全く……。しかもそれが
セキュリティ自体が大幅に改変されて……。しかもそれが
従来のものよりも格段に強固になってるんです。いつそれが解除
できるか分からない上、改変された内容を全て見つけ出し、修正す
るとなると……。」

「そうなの……とにかく引き続きお願いするわね。」
「はい！」

「じゃあとりあえず今日はお開きにしましょう。あなた達も
一休みしておいた方がいいわね。
一時帰宅を許可します。」

「え……でも……」

「とくになのはさんは、長い間家や学校を開けておくのは良くない
でしょう。」

「ご家族と学校に少し顔を見せておいた方がいいわ。」

そしてなのはは一時帰宅することになった……。

再びフェレットもどきの姿になったユーノとなぜかアフターサービ
スと言って付いて来たリンディと一緒に……

おまけ（いろいろと事情があり、やめた展開）

「証拠は無いんだけど……あの時の状態をモニターしてたとき、あの子の攻撃が当たることにクロノ君のメンタルがよくなっ行ってたんだよ？」

「え？」

「多分あの子、全ての攻撃に治癒効果とかを付加してたんだと思う、魔力まで回復してたから相当高性能な魔法だよ……」

「あ……そう言えば、あいつに攻撃されるとだんだん気分が良くなって体が軽くなって言ったような……」

「クロノ……状況をしっている私たち以外が聞くと、そのセリフは少し危ないわよ……」

025 その後？（後書き）

黒

「025話！！」

ソニア

「あの組織ってひょっとして……………」

刻

「ああ……………俺が昔つぶした組織だな。あいつら、我々は管理局の呪縛から皆を解き放つために結成された諸君らの守護者だとか言いながら、無差別テロばっかやりまくっていやがったからな……………」

「何が関係ない奴らばかり攻撃しておいて守護者だよ……………」

「

ソニア

「ほんと、最悪な奴らだったね。」

「結局の本音は『我々こそが全ての世界を支配するのにふさわしい存在なのだ』ってものだったし。」

黒

「さすががしいぐらいの悪党だな。」

刻

「悪党なら良い。あいつらは自分の信条や吟じを持っていたからな。だがこいつらは完全に外道だ。言い分と行動は矛盾してるし、俺が殲滅に言った時も我先に仲間を見捨ててでも逃げようとしてたからな。」

黒

「フリ……………いやなことを思い出させちまったな。」

刻

「別にいい……………」

ソニア

「さ、さて、では感謝コーナー。」

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！！

緋水様、HAZUKI様、バルディッシュ様、ソロモン様、感想をありがとうございました！！」

黒

「ではまた次回」

「さて……………外道麻婆贈だ。もらったからには食うぞ！！」
「了解。」

「水の準備は十分だよ！」

「では」

「「「いただきます！」「」」

「「ギヤアアアア！！」「」

「か……辛すぎる！！」

「唐辛子をそのまかかじったのより辛いぞ！！……つて刻は？」

「二人ともそんなあからさまな悲鳴を出さなくてもいいだろ。確かに辛いが結構いけるじゃんか。うん、ご飯がすすむ。」

「ま……マジ……？」

「うわ……普通に食ってる……」

外道麻婆贈はスタッフ一同（ほとんど刻）でおいしく（刻談）いただきました。

026 その後？

プレシアと話した後、刻はカルマの所へ転移した

「ちっす。」

「よう、じくろつさん。っで、お願いって何だ？ 言っとくが、おまえの伴侶を創造してくれってのはだめだぞ。」

カルマがおどけたように言う。

言っている内容を除けば言動はほんと神らしくない。

「……まあ他のやつにも言えることではあるんだが

「んな訳無いだろ、こんな年で……。願いつてのは死者蘇生したいから輪廻にまだ入ってなかったらその魂を呼んでほしいってことさ。」

「ん、なるほど……。で、そいつはだれなんだ？」

「アリシア・テストアロッサ」

「え？」

カルマが意味が分からないって言った顔をした

「『え?』?」

「いやだって既にそこにいるじゃん。おまえの背後に。」

刻の後ろを指さしながらカルマは言う

「はあ!?!」

刻は後ろを振り向く、だがそこには誰もいない

「びつくりした……いやな冗談はよせ。」

「いや冗談じゃないぞ、霊体見えるようにしろ。」

「あ………」

そして幽霊を見えるようにし、再び振り向くと……

「いやがったよ………」

そこには首をかしげながら浮かんでいるフェイトに瓜二つの少女、
アリシア・テストアロツサがいた……。

026 その後？

） side 刻

アリシアの話聞いたところ、幽霊の状態でずっとプレシアやフェイト達のことを見て来たらしい……

「……じゃあお兄ちゃんが私を生き返らせてくれるの?」

「そのつもりではあるがな……プレシアによる。ま、あれなら十分合格だ。」

「じゃあ!」

「ああ、生き返らせてやるよ。お前が生きかえりたくないっていうのなら話は別だけど」

「そんなことないよ!」 ありがとう!」

はしゃぐアリシア

それを刻は微笑みながら見るが、ふと思い出したことがありアリシアに話しかける

「あ、でもね。」

「え?」

「いくつか約束してほしいことがあるんだが……。」

「なに？」

「まず、フェイトやアルフも家族として扱ってあげてほしい。」

「もちろん！言われなくなつてそうするつもりだよ。」

それを聞いてソニアががほほ笑む

「ふふ……あかるいこだね。」

「ああ、何だかフェイトの妹って感じだな。」

「な、私がお姉さんだよ！」

ソニアと刻の発言にアリシアが猛反発する

だが

「でもなあ、はた目から見ると、おまえの方が精神年齢低そうなんだよな。」

「うんうん」

「私がおねえさん！！元氣と物分かりと思ひ切りの良さが私の取り柄なだけ……！！」

それにあの子は根暗なだけだよ……！！」

必死に反論するアリシア。

「まあ確かにもの分かりは良いな。でもさ、その言い方はちょっとひどくない？」

「ひどくない！！それに私は死んでから20年はたってるの！！だからわたしの方が大人なの！！」

どんどん言葉遣いが退化していくアリシア。

その言い方を聞くとより一層アリシアの方が妹に思えてくる

刻とソニアはそんなアリシアを生温かい、優しい目で見つめていた

「まあそれはもういいや。で、もうひとつお願いがあるんだけどさ、俺のこと他のやつに聞かれてもごまかしといてくれない？」
「ん？　なんで？」

ちなみに現在、刻はフードを外し、ソニアともユニゾンアウトしている。

「まだばらす訳には行かないんだよな。 えっと・・・おまえって俺が「やで〜」とか言う車いすに乗ったたやつと一緒にいたの見ただ？（うん） なら話が早い。 そいつ助け終わるまで俺はあいつらに正体ばらす訳にはいかないんだよ。」

「あの子何かひどい目に遭ってるの？ そんな風には見えなかったけど。」

「まだ始まって無いだけさ・・・。 とりあえず今年中を目標にそれも解決させるつもりだから、それまではどうにかしてほしいんだ（分かった）」

即答するアリシア

刻はあまりの返答早さにしばしキョトンとする

「いや・・・うれしんだけどさ・・・。 偉い早い決定だな・・・。 大丈夫かな？とか、隠しきれるかな？とか思わなかったのか？」

「大丈夫！！ やって見せるから！！ それに言ったでしょ、私は物分かりと思いい切りが良いの！！」

アリシアがどうだ！！と言った感じで無い胸を張ってふんぞり返る

それに微笑む刻とソニア

「じゃあ頼むよ。」
「任せといて〜」

そして刻達は天界を後にした。

おまけ

「そう言えばお兄ちゃん？」

「ん？」

「フェイトを嫁にもらってくれない？胸の大きい子が好きなんですよ？優良物件だよ」

「ブツ！！ あ・アリスア、何処でそんなこ（ちがうの？）」

「お兄ちゃんが一人の時パソコンでそんな人たちの写真見てたよね？それにソニアさんだって・・・」

「お・・・おま・・・お前・・・いつから俺についてたんだ！？」

「さあ・・・何時だったっけ？」

「別に隠さなくても良いよ刻。私も知ってたから。」

ソニアからの聞き捨てならない発言に刻は驚愕する

（ちよつと待て何でおまえも知ってるんだ！！履歴は全部消したはずだぞ！！）と

「ただ消してもね・・・ログって残ってるんだよ？アースラを十数秒足らずでハッキングしてプログラムを改変して見せた私がパソコンにハッキングしたらそんなもの簡単に探し出せるんだから」

詳しく言うのであれば刻がソニアに補助してもらって行ったことではあるのだが

「……………まあ計算のほとんどはソニアがやったのだが……………刻やソニア一人だけでももちろん出来たろうけど

「いや、それより俺の地の分読むな！！ってかそんなことしてるのかよ！！！」

「そりゃもう！！刻の要望にこたえるために！！！！！」
「いや、何の要望だ何の！！！」

力強く発言するソニアに刻は突っ込みまくる

そしてその発言を聞いたソニアはにやつと笑う

「ほら少し私の構成をいじったら……………（ピカ！！！！）こんなふうに。」

そして光が収まると、胸を強調したデザインの……………

「（おお墮天使エロメイド、たわわに実る二つの果実が……………じゃねえ！！）たのむ……………戻してくれ……………」

「ふふふふ」

刻の言葉を見殺してソニアそのまま刻を抱き上げる……
顔は満面の笑みだ、ってか悪魔のようなしっぽが見える気さえする

「だれか……俺を殺してくれ……」

誰へとも向けず呟く刻
だがそれに返答があった

（駄目だよ。おまえはものすごく有能なんだから。
たとえ死にそうになってもどんな手を使っても回復させるからな）

カルマから、念波で

（てめえ！カルマ！！どこから見てもやがった！！！！）
（最初から、面白かったよ。頑張ってくれ、期待してるから。）
（なにをだよ……）
（不幸とか修羅場とか）
（……）

……はやく帰ってベッドに潜ろう……

そう心に決めた刻がいた

026 その後？（後書き）

黒

「その後は今回で終了、次回はついになのはvsフェイトです」

ソニア

「ついに無印も架橋だね……」

黒

「ああ、そう（で、ちょっと聞いていいか？）なんだ？」

刻

「俺、いつの間にあんな設定できたんだ？
つてかなにあの文章？」

黒

「だが俺は反省も後悔しない！！なぜなら書いてて楽しかったから。
楽しみながら書くって重要なんだよ？」

刻

「……………」

黒

「では感謝コーナー。」

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を

サテライト様、僚様、HAZUKI様、刃の下に心在り様、緋水様、
バルディッシュ様、ソラト様、ソロモン様、感想をありがとうございます

いました。」

「さて、では逝きますか。」

「字が違・・・いや、あっているのか？」

「そんなことはどうだっていい。問題なのは此処にある三つのものだ。」

「ブライ特性ミルフィーユと、神龍特性ロールケーキ、そしてリンデ
イ茶だ」

「やはりじゃんけんか？」

「なあ、俺の目がおかしくなったのかな？」

「ロールケーキとリンデイ茶から・・・瘴気みたいなのが出て
ないか？」

「なんか歪んで見えるんだけど？」

「ほんとに食べないとだめなの?」

「あきらめる・・・いや、あきらめるなソニア!信じていればきっと救われる!」

「さあ・・・DEAD or DEAD or ALIVE
だ!」

「「「じゃんけん!」」」

・・・結果

黒天使の前・・・ロールケーキ
刻の前・・・ミルフィーユ
ソニアの前・・・リンディ茶

「た、助かった・・・」

「「・・・死んだぜ・・・」

「な・・・なあソニア、やっぱりくわないとだめ・・・かな?」
「そ、そうだよね」

「・・・くえよ?」

「助かったからって、うるせえよ!!」「なんだったら私のも飲んでよ!」

「いや……ソニアは大丈夫だろ? あんだけ菓子食えたんだから。」

「翠屋は別! あれは上品な甘さでおいしんだから! こんなのと一緒にしないで!」

「そ、そうか……」

「ぐすん……」

「所で……俺の方のフォロオは……無し?」

「……めん。」

「……もういいよ……おつおつと終わらせてやる! いただきます」

「いただきます」

「パク!」

「あ……おいし……（ねえ、刻）ん？
どうしたソニ……大丈夫かソニア！！顔色がおかしいぞ
！！」

「ねえ刻……デバイスって……魂あるのかな……
？」

「そんなこと言うな！！大丈夫……きつと助かるから！！
おい黒なん……黒？」

「く……く……く……く……く……く……」

「おい、何押し殺した笑い声上げながら食ってんだ！！
むっちゃ恐いぞ！」

「くくく……そうだ……これもみんな……が悪い
んだ……」

「……くくく……あいつめえ……」

「しっかりしろ……気を確かにもて！！」

「刻……いつまでも私のこと忘れないでね……」

「あきらめるなソニア……」

その後駆けつけたカルマや他の守護者によってソニアと黒は一命と正気を取り戻しました

教訓

Noといえる人になれるよう訓練をしましょう。
でないとそのうちほんとに死んでしまいます。

027 なのはvsフェイト

ある早朝。

刻とソニアは（アースラでも絶対見つけられないレベルの）ハイドをかけるか上空に平子信子よろしく浮かんでいる

そして彼らの下の方には駆けているなのは

そう、今日はなのはとフェイトの決闘イベントの日である。

027 なのはvsフェイト

「同じなら……、いいね。
出てきて……、フェイトちゃん！」

なのはの言葉にこたえるように現れたフェイトは、初っ端からバル

ドイツシュをサイズフォームにして構えた。

「フェイトちゃん……………こっちに来る気は……………無い？」

しかしフェイトは悲しそうに首を横に振る

「私は、あの人の娘だから。

それに……………ほめてくれたの……………やっど。

わたしは……………母さんの夢を……………叶えたい!!」

それを聞いたなのはただ一度頷く

「そうだよね……………ただ捨てればいってわけじゃないよね……………。

願いのために……………捨てるわけにはいかない……………
でも……………私も負けられないわけがある」

《Put out》

レイジングハートからジュエルシードが出てくる

「きっかけは、きつとジュエルシード。だから賭けよう、

お互いが持つてる、全部のジュエルシードを！」

それに答えるようにバルディッシュからも、

《Put out》

ジュエルシードが出された。

「それからだよ………、全部、それから！
私達の全てはまだ始まってもない。

だから、本当の自分を始めるために………、
始めよう………、最初で最後の本気の勝負！」

そうして、なのはとフェイトの決闘が始まった。

S i d e
刻

「とりあえずさくあいつらの精神年齢ってやっぱむっちゃ高いだろ。
あんな小学生見たことも聞いたこと無いぞ。」

いやほんと、小学生がみなあんなこと言ったら俺正直自分の正気
疑うぞ？

「そう言う小学生筆頭の刻が何言ってるの。」

「俺は良いんだよ。」

「ふーん。」

(数分後)

現在、下では二人が激しい戦いを繰り広げています。

「へー二人とも思ったより強いな。

なのはなんか魔法を知ってから一カ月経つかどうかでぐらいなの
に。」

「そうだねー。でも刻に比べたら足元にも及ばないよ。」

「いや俺と比べたらかわいそうだって。

戦いで過ごしてきた年期も知識も場数も全然違うんだから。」

「まあね〜」

「ん？フェイトのやつ大技を使う気だな。」

「そろそろ決着かな？」

「ああ。多分な。さて、……プレシアはどう出るかな？」

S i d e E n d

空中にいるフェイトの周囲に無数の魔力弾が浮かびあがる。

それに反応したなのはがレイジングハートを構えようとするが

「あっ!!」

いつの間にかなのはの両手両足を、金色の魔法環が拘束していた

「ライティングバインド」

フェイトが小さく呟く

「(マズイ！フェイトは本気であの子を潰す気だ！)」

アルフが焦った声をだす

「(なのは！今サポートを！)」

ユーノがサポートに向かおうとする

だがなのははそれを止める

「(だめ〜アルフさんもユーノ君も邪魔しないで。全力全開の一騎打ちだから、あたしとフェイトちゃんの勝負だから！！)」

「(でも……………フェイトのそれは本当にマズイんだよ！)」

なのはの(念波での)叫び声にアルフが心配そうに返す

「へいきー！！」

なのはは真剣な表情で断る。

「アルカス、クルタス、エイギアス……」

その間にもフェイトは、呪文を完成させつつあった。

「疾風なりし天神よ、今導きの元に撃ちかかれ。

……バリエル・ザリエル・ブラウゼル『フォトンランサー・
フランクスシフト』」

そして手を空に掲げ、バインドで拘束されてるなのはを視野におさ
め……

「打ち砕け！ファイア！」

手をなのはに向けて振り下ろしたのを合図に、無数の魔力弾がなのはに襲い掛かり爆発する。

フェイトは余波に耐え切れず目をつぶった。

そしてなのはのいる所に魔力残滓による煙が立ち込める

「なのは！」

「フェイト！」

やがて魔力弾を撃ち終ったフェイトは残った魔力弾を集めて、ひときわ大きな魔力弾を作り、立ち込める煙が晴れるのを待つ。

そして晴れるとそこには……………

「撃ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね」

ほぼ無傷のなのはの姿があった。

障壁を張って、あの魔力弾の雨を防ぎきったのだろう。

フェイトは驚愕の表情を浮かべる。

そして……………

「今度は、こっちの……………」

なのははレイジングハートを突き出すように構え

「《divine》 番だよ!! 《buster》」

そうやってなのははディバインバスターを放つ。

それに対しフェイトは先ほどのスフィアを撃つが拮抗すらせずなのは砲撃に飲み込まれる。

フェイトはシールドを張ってなんとか防ぎきる。だがフェイトは最早満身創痍、疲れ果ててしまっている。

そこに……

「受けてみて……、ディバインバスターのバリエーション!」

《Starlight Breaker》

レイジングハートの声とともに極大魔法陣が展開され、膨大な魔力が収束していく。

フェイトは避けようとするが、いつの間にか四肢にバインドをかけられていた。

「これが私の全力全開！」

そしてなのははレイジンググハートを振り上げ、

「スターライト・ブレイカー！！！」

振り下ろすと、巨大な桜色の閃光がフェイトに向かって放たれた。

「容赦しないなーあいつ」

殺傷設定だったら間違いなく塵の一片も残らないだろうな。．．．
あれ。

絶対フェイトにトラウマができたよな。

「うん、あれだけ疲れ果てたところにあの砲撃．．．．．鬼だね．．．
」。

「いや．．．．．悪魔だな．．．。」

「そうかな？」

「おう、んでもって将来は魔王つと。」

俺の言葉に反応しソニアが笑い転げる。

「あははははは。かもね〜。でもさー、フェイトちゃん詠唱長
すぎでしょ。
二分近くかかるなんて、あんなの使い道ほとんどないと思っけどな
」

「いやそうでもないぞ？俺も場合によってはあれぐらい長い使っ
し。」

「え、そうだっけ？どんな時？」

「精密制御された魔法が必要な時とか、どうしても強力な殲滅魔法
が必要な時とか・・・」

「・・・後者ってどのくらいの規模？」

「あれぐらいなら・・・ちょっとした惑星ぐらいなら一瞬で消し
去るレベルだけど、なにか？」

「・・・それが必要にならなきゃいいね・・・」

「ああ・・・」

さてと・・・落ちたフェイトはなのはが助けたな・・・」

「うん。あ、バルディッシュからジュエルシードが排出されたね・・・
・・・っつ！!???」

ソニアが急に険しい表情をする、だが俺もだ。

なぜなら・・・

「次元跳躍魔法！？プレシアのやつ・・・なるほど・・・この道を選んだか！！
避けるぞソニア！！」

「うん！！」

S i d e E n d

プレシアにより放たれた雷はフェイトに直撃し、ジュエルシールドは

物質転移によりプレシアのところへ送られた。

そして雷によりボロボロになったバルディッシュとフェイトは、
のはよってアースラに送り届けられたのだった。

027 なのはvsフェイト（後書き）

刻

「急に遅れ出したな？どうした？」

黒

「大学が忙しくて……。最近レポートのラッシュが起きてるんだ……来週も3教科分書かないといけなし……。」

刻

「ため込むからだろ？」

黒

「いや猶予期間3週間ぐらいしかなかったんだけど？ひどいものは1週間半。」

ソニア

「ま、まあ体には気をつけてね？」

黒

「ああ……分かってる。」

では感謝コーナー、この作品を読んできた皆様に心からの感謝を！！」

刻

「バルディッシュ様、緋水様、HAZUKI様、志貴様、ソロモン様、直人様、リトラ様、感想をありがとうございました。」

「じゃ、やるか？」

「えっと今回は・・・プライ特製のチーズケーキどシユークリーム、あと・・・コハクの好物の、サクランボ入り味噌焼おにぎり（お焦げつき）？」

「まあ、今回は大丈夫だろ？軽い罰ゲームくらいだ。

危険度は小学校の時やった食塩入り牛乳ぐらいだろ？たぶん・・・。

「

「じゃあ今回もじゃんけんで行こうか？」

「俺は良いぞ」

「私も」

「それじゃあ」

「」「」「じゃんけん・・・」「」「」

・・・結果

黒天使……シユークリーム
刻……焼きおにぎり
ソニア……チーズケーキ

「よし!!」

「……………」

「前回俺たちは食ったんだ？お前も食べよ？」

「頑張ってねー、刻」

「大丈夫だよな？」

「『軽い罰ゲームくらいだ。』って言ったのはお前だろ？撤回は認めない。」

「く……わかったよ……。」

「「いただきますす!!」」

「いただきます……。」

パク×3

「お、うまい！！」

「うん、甘さ控えめでおいしー！！」

「「どっ？刻は？」

「……………てめえら……………」

「うん、死にそうにはなってないね」

「あつちの世界に入る気配もないみたいだな」

「「で、感想は？」

「……………題して、無邪気な悪意……………」

アースラのモニターには突入した局員と対峙するプレシアが映っている

なのは達はそれを黙って見えていた

『私のアリシアに……近寄らないで!!』

突入してきた局員をにらみながら叫ぶプレシア。

『う……撃てー!!』

それに恐怖し一斉射撃しようとする武装局員たち。

しかしプレシアはそれをあっさり防ぐ。
そして……

『うるさい……………』

「危ない!…!防いで!…」

ズシャアアアアン!!

『があああああ!』

巨大な雷の魔法を武装局員に浴びせた

局員たちは全員死んではないだろうかボロボロになり床に倒れ伏す。

「いけない!局員達を送還して!」

そしてリンディの指示で、局員達は急いで送還された。

『もうだめね．．．．．時間が無いわ。たった9個のロストロギアではアルハザードにたどり着けるかはわからないけど．．．．．でも、もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間を．．．．．この子の身代わりの人形を娘扱いするのも．．．．．』

プレシアが動いたことで、彼女の背後にあるポットの中身が見えるようになり、それを見たフェイトがハッと息をのむ。

『聞いていて？貴方のことよフェイト？
せつかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちつとも使えない。私のお人形』

その言葉を聞き、エイミィがつらそうに説明する。

「最初の事故の時にね、プレシアは実の娘『アリシア・テストアロツサ』を亡くしているの。」

彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる、使い魔を超える
人造生命の生成、そして死者蘇生の秘術。フェイトって名前は、当
時彼女の研究に付けられた開発コードなの」

『よく調べたわねえ、そうよ、その通り……。……だけどダメ
ね、ちつとも上手く行かなかった……。……。作り物の命は、所
詮作り物……。失ったものの代わりにはならないわ……。ア
リシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々わがままも
いったけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた……。』

「……。やめて……。」

なのはがつらそうな声を出す……。しかしプレシアは続ける

『アリシアは……。いつでも私に優しくかった……。フェイト、やつ
ぱり貴方はアリシアの偽者よ。折角あげたアリシアの記憶もあなた
じゃダメだった……。』

「やめて……。やめてよ!」

『アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使っただけのお人形……
……。だから貴方はもういらぬわ……。どこへなりと……
・消えなさい!』

「お願い！もうやめて！」

『ふふふふ、いい事を教えてあげるわフェイト。貴方を作り出してからずーっとね

私は貴方が・・・・・・大嫌いだったのよ！！！！！！』

その言葉を聞き、絶望に包まれそうになるフェイト・・・・・・
だが彼女はプレシアにお礼を言われたことを思い出し、その矛盾に
気づき、それを支えに必死に心を保つ

・・・・・・そして・・・・・・

「母さん・・・・・・何で泣いてるの?」

「「「「「「「「「え?」」」」」」」

フェイトの言葉に一同はプレシアをよく見、プレシアは自分の目をぬぐい驚く。

『ちがう……これはちがう!!』

……そうよ……わたしは旅を邪魔されたくないだけ……
……そう……これは安心の涙よ!!

私たちは旅立つの、忘れられた都アルハザードへ……そして
取り戻すのよ!全てを!!!!』

そして通信は切れた……だがフェイトの目には強い光が宿っている。

そして……

「お願いします……私を母さんの所に行かせてください!」

フェイトは力強く言う。

「な・・・そんなわけに行くわけ（行ってどうするつもり？）艦長
！！」

クロノが反論しようとするがリンディに言葉をかぶせられる。
どこまでいってもKYなやつである・・・

「母さんを説得します。

私は・・・母さんを助けたい！！」

フェイトが答える。

そこへ・・・

「私も行くよ！！」

「僕もだ！！」

「もちろん、あたしもだよ！！」

なのは、ユーノ、アルフが名乗りを上げる。
フェイトは驚き皆を見渡す……。

「フェイトちゃん一人じゃ、行かせられないよ!！」

「なのはに同じく!！」

「あたしはあなたの使い魔、地獄にだって付いて行くよ!！」

皆の言葉に泣きそうになりながら笑顔を浮かべるフェイト。

「さあ行く、フェイトちゃん!！」

「うん!！」

そして転移装置の方に向かっていく皆。

「ま、まで!！僕も行く!！」

慌てて追いかけていこうとするクロノ。
その背中へリンディが

「クロノ。今回の皆さんの勝手な行動はおとがめなし。私たちは駆動炉のロストロギア封印とプレシア・テストロッサの説得、確保を最優先に行動。皆さんにもそのように言って。」

と声をかける。

どこか嬉しそうだ。

「了解しました!!!」

そしてクロノは急いで先行した皆の所へ向かった

黒 「自動車教習所に言ってきました！」

ソニア 「のっけからなにいつてんの!？」

黒 「いや……これぐらいしかネタがなくてね……
それに結構面白いものがあったんだ。」

刻 「どんな？」

黒 「いや……心理テストがあったんだけどさ、YES、NO形式
で、その中に面白いのがあったんだよ。」

ソニア 「たとえば？」

黒 「『法律を守らなくても生きていけると思っ』
『法律は不平等だと思っ』
『法律のせいで生きにくい世の中になっていると思っ』とか……」

刻

「……………マジで?」

黒

「『自分の周りにはスパイがたくさんいると思う』とか」

ソニア

「何その質問!？」

黒

「『たまに幻覚を見る』とか」

刻

「……………なあ、それホントに心理テストだったのか?」

黒

「マジ話。そこも国公認のちゃんとした場所だったよ。」

刻

「……………結果が楽しみだな……………」

黒

「ああ……………」

さて、それでは感謝コーナー!」

ソニア

「この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！！
お気に登録がいつの間にか400人を超えていました！！」

刻

「直人様、緋水様、バルディッシュ様、HAZUKI様、ソロモン様、感想をありがとうございました！」

黒

「お気に登録がいつの間にか400人を超えていました！
皆様こんな作品につきあっていただき本当にありがとうございます
！！」

029 時の庭園（前書き）

黒

「すみません！！投稿が遅れました！」

刻

「なにかあったのか？」

黒

「いや……純粋に大学が忙しくて……しばらくこの状態がつづくかも……」

刻

「……まあ体だけには気をつけるよ？」

黒

「ああ……では、029話です」

此処はプレシアやフェイトたちの基地、『時の庭園』のとある空間

此処までの道のりでなのはとユーノは駆動炉のロストロギア封印をするために途中でフェイト達と別れ、そしてフェイト達はプレシア
「テストロツサのもとへ向かった。

そして現在フェイト達はプレシアと対峙している

え？詳しい経緯？

別にプレシアの方へ向かったメンバーに最初っからフェイトが入っていた以外変わったとこなかったけど？

ってか、ぶつちやけ書くのめんどかった。

「時代の変化に溺れて溺死しろ!!この半引き籠り作者!!!!」

「どうしたのクロノ!?!」

「あ……すみません艦長。

なんだか急に言わなくちゃって思って……。。。」

「そっ……。」

「母さんっ!」

フェイトに気づき、プレシアの顔に、戸惑いの表情が浮かぶ。

「何をしに来たの!!」

「……消えなさい……もうあなたに用はないわ」

だがフェイトはプレシアのすぐ傍へと近づきながら言う。

「あなたに言いたい事があって来ました」

「……………」

「わたしは……わたしは、『アリシア・テストロッサ』じゃありません。

あなたが作った、ただの人形なのかもしれません……. けどわたしは、『フェイト・テストロッサ』は、あなたに産み出してもらって、育ててもらったあなたの娘です！」

「フ……. フフフ……. アハ……. ハハハハハ…….
だから何？今更……. 貴方を娘と……. 思えと言っの？」

プレシアが必死に取り繕いながら、しかしはた目には限界寸前に見えながら言う。

そしてリンディが声をかける

「もう諦めなさい……. プレシア女史。

どうい理由があるのかは分かりませんが、あなたが必死に嘘を言っているのは、明らかですよ。」

「そんなこと無い……!」

「いえ、あなたは（良いんです）リンディさん（ フェイトちゃん？」

リンディはプレシアを説得しようとするが、それをフェイトは止めた

そしてフェイトはプレシアを真正面から見つめ、プレシアに語りはじめる

「たとえあなたがどう思っても良い、たとえ本当に私のことを娘とは思っていないなくても……」

プレシアはフェイトの言葉に唾然とした表情を浮かべ始めた

「でも、……私はあなたの娘をやめるつもりはありません。たとえ突き放されても、私は何処までもあなたを追いかけ、世界中の誰からどんな出来事からも、あなたを護る。たとえ……あなたがどう言おうと……、あなたは……わたしの母さんだから!!」

プレシアは茫然とし、固まってしまう。

そして

「……くだらない……くだらないわ」

我に返ったプレシアは握り締めていた杖を足元に突き立て、魔法陣を展開する。

その瞬間、ジュエルシードを暴走させたのであろう、あたりが激しく揺れ始める。

フェイトのやり取りにに啞然としていた周りのメンバーも、振動に振り回されて膝をつく。

フェイトも、思わずプレシアから引き離されて尻餅をついてしまった。

「まずい！」

『艦長！ダメです、庭園が崩れます！戻ってください！』

この規模の崩壊なら次元断層は起こりませんから！クロノ君たちも脱出して！崩壊まで、もう時間がないの！』

「了解した。フェイト・テストロッサ！フェイト！」

だがフェイトはあまりの展開に茫然としてしまっている。

そしてプレシアの足元が崩壊し、プレシアはアリシアの入ったポットと落ちて行きそうになり

「あ……！！！！母さん！！！！」
「フェイト！」

フェイトはあわてて母の許に行こうとするが、アルフがフェイトを抑える。

そして何処か、様々な感情を感じ取れる、泣きそうな顔をしたプレシアはだんだんと、虚数空間に落ちて行きそうになった

そのとき

Side 刻

(全く、あそこまで子供に言われて逃げようとするか普通？少しど
うかと思うぞ。)

(仕方ないと思うよ・・・恥ずかしさとか、申し訳なさとか、
いっぱいごっちゃ混ぜになっちゃってるんだと思う・・・
でも、そんなこと言っても、助けるつもりなんでしょ？)

(ふ・・・まあな・・・)

《 Operate of creation start (万象
操作)

“ Bomb blast ” break out (爆風発生)

Coordinate set “ under Preshia

Testarossa ” (座標設定『プレシア・テスタロッサの真
下』)

Send them to the ground (彼女らを地
面へ上げよ)

But don't hurt them (但し、傷つけること
なかれ)》

これでよし・・・もう大丈夫だろ、いくぞ。(

(うん。)

Side END

突然プレシアの真下で爆発が起こり、彼女はアリシアの入ったポットとともに地面へ飛ばされた。

フェイトがプレシアのもとに行き、抱きつき、泣きじゃくる。

だがぼんやりともしていねず、彼女らはアースラに急いだ。

S i d e
な の は

。。
私たちは今、ブリッジにてリンディさんのお話を聞いてます。。。。

「フェイトさんは今回の事件の重要参考人なので暫くは事情聴取を受け、本局の保護施設に移送する事になります。ですが、おそらく罪はかなり軽いものになるでしょう。」

良かった・・・・・・・・でも・・・・・・・・

「あ・・・・・・・・母さんは・・・・・・・・？」

フェイトちゃんがリンディさんに尋ねる。
だがリンディさんは険しい顔をして

「・・・・・・・・残念だけど、プレシアさんは管理局員を傷つけ、次元断層を引き起こそうとした本人、これほどの罪状だと、私達もつづつすることもできないの・・・・・・・・」

といった。

フェイトちゃんがとても悲しそうな顔をする・・・・・・・・

「そんな・・・・・・・・」

「フエイトちゃん……」

あ、そうだー！

「あの……あのコートの子じゃないけど……管理外世
界で起こったことってことでどうにかならないんですか？」

あ、クロノ君が睨んで来たの……でも、これは譲れないのー！

663

「残念だけど無理だわ……それを入れても……ここ
までだと……」

だけどリンディさんはそう、すまなそうに答えたの

「……そうですか……」

「ごめんなさい……」

でも……たかが知れてると思うけど、できるだけ罪が軽くなるよう頑張ってみるわ。」

「でもあんまり期待しないでくれよ、こんな罪状じゃ（クロノ！！）ですが艦長！！」

「クロノ……いくらなんでも言っただけで良いことと悪いことありますよ……。」

たとえそれがどういふ状況でも、不用意な発言のせいで、深刻な関係悪化が起こったことは数多く実例があるのです。

次からはそのことを意識して行動してください、クロノ・ハラオウン執務官」

「あ……はい……。」

クロノ君がしおれちゃったの……ちよつとかわいそう。

でも、少しいい気味だと思ったのは内緒なの！！

それにしても……

「やっぱり皆仲良くハッピーエンドって無理なのかな……」

「残酷だと思うけど……」

「いいのよ、ありがとうなのはちゃん。」

「フェイトも元気を出して、私は大丈夫だから……」

「プレシアさんがフェイトちゃんの頭をなでてあげてる。」

「……でもとてもつらそうなの……」

「ではとりあえず会議室に行きましょう。」

「詳しい事情を放してもらって、報告書を書かないといけませんから。」

「分かりました……」

「アリシアも連れていって良いですか？」

「未練がましいようだけど……もう少し一緒にいたいので。」

「……」

プレシアさんの言葉にリンディさんが優しく微笑む

「ええ、もちろんいいですよ。」

では行きましょう。」

そして私たちは会議室に向かった。

その間、皆必死に明るくしようとしたけど無駄だったの……

そしてそんな中、会議室の扉が開くと……

「よう、遅かったな」

そこには机に腰掛けたあのフードを目深にかぶった黒ローブの少年がいて、私たちを出迎えたの。

黒

「しばらくの間、投稿が遅れそうです。」

刻

「大学だっけ？」

黒

「ああ……今、レポートと小テストのラッシュが起こってるんだ。」

「さ来週から定期試験が始まるし……。」

ソニア

「大丈夫なの？」

黒

「なんとか単位は取れると思う……。」

刻

「そうか。」

黒

「では感謝コーナー……！」

「この作品を見てくれた皆様に心からの感謝を……！」

ソニア

「ソラト様、バルディッシュ様、緋水様、直人様、ソロモン様、ロア様、F様、感想をありがとうございました。」

黒
「ではまた次回！」

030 無理を通して道理を蹴っ飛ばす!! (前書き)

『無理を通せば道理が引っ込む 無理も通れば道理になる 』

意味・世の中には道理に合わない事が罷り通る事も良くある

そのうえでこの題名をどうぞ

030 無理を通して道理を蹴っ飛ばす!!

「よう、遅かったな」

なのは達が会議室に入るとそこには椅子に座った黒ローブを目深にかぶった少年がいた

「な!!何で貴様がここにいる!!」

「ん? 転移してきたから。ちょっとやることがあったんでね。」

クロノが叫ぶが黒ローブの少年はなんでもないように返す。

「やること?」

「そ、リンディさんのIDを使って管理局本部に勝手に報告書を送っておくって言うね。」

「な!!なんだと!!」

「ほらよ。これだ。」

クロノの叫び声を無視するように少年はクロノ達の目の前にモニターを展開する。

彼等はそれを見て

「ん？って何だこれは！！！」

「だから俺が送った今回の事件の報告書だって。」

「真実捻じ曲がってるじゃないか！！！」

「当たり前じゃん真実は管理局の不利になることばっかだよ。うその報告をしないように真実の一部を書いたんだ。」

クロノの叫びに黒ローブの少年がやれやれと言ったように答える

「どこに僕達が不利になる要素があつたんだ！？
と言うより、ここに書いているのは全部嘘だろ！！」

「どこが？」

クロノが顔を完全に真っ赤にさせながら叫ぶが、黒ローブの少年は
どこ吹く風と言ったように答える。

「たとえばここ！！」

なにか『回収したジュエルシードが偶然暴走した結果、次元震が起
こつた』だ！！

プレシアが集めたジュエルシードを使用して無理やり次元断層を引
き起こそうとしたんだろ！！」

「何言ってるんだ、あれは偶発的な事故だろ？」

第一、そもそもプレシア達テストロッサー家がジュエルシードを集
めていた目的は、危険なロストロギアを海鳴市から回収するため。
つまり彼女らは善意でジュエルシードを集めていたんだ。」

「なにを………言ってるんだ………？」

クロノは訳の分からないという顔をしている

また、リンディは顔をしかめ、その他はただ茫然としながら見守っている

「だ〜か〜ら〜、薄情だわ、行動は遅いだわな組織、時空管理局の代わりにテスタロッサ一家は必死になってジュエルシードを集めてたってことだよ。」

「な……………」

「つまりこれは対応が遅れたあんたたちアースラ御一行に問題があるってわけ、テスタロッサ一家には何の罪もないよ。ほら、こういうことまで詳しく書かなかった俺って良心的だろ？」

「どうだ？といったかんじで黒ローブの少年が言う」

クロノは苦虫をかみつぶしたような顔をした

「なるほど、そうくるか……………だが！！
たとえそうであっても、ジュエルシードの暴走はテスタロッサ親子の責任で（あ〜できないできない）なんだと？」

「さつきも言ったように、テスタロツサー家は対応の遅れたてめえら時空管理局の代わりにジュエルシード集めをしてたんだ。つまり、ジュエルシードを管理局がいち早く察知して回収していればあんな事にはならなかったってことになるね？」

更に言えば、むしろ責任問題があったのはロストロギアを管理する義務があるとか言っておきながら、迅速かつ適切な対応をしなかったあんたら時空管理局員の職務怠慢の方じゃないかな。

どう？KY執務官どの？」

「な・・・な・・・」

クロノが黒ローブの少年に言い負かされ、呆気に取られる

675

「プレシア女史が局員を攻撃した事について書かれていませんね・・・」

「そうだ、それがある。」

こっちにはその人たちのカルテがあるぞ！！！！
つてかKYってなんだ！！！！」

あ、リンディのつぶやきを聞いてクロノが復活した

「あれはプレシアさんが愛娘のアリシアを護るために行った行為。無断で強行的に侵入して、さらに拘束しようとして来た奴らから、アリシアを守るためにしたんだ。んで更に言えばさ、善意でジュエルシードを集めてたプレシアの城に勘違いして勝手に侵入した時空管理局員達の方が犯罪者になるよね、不法侵入罪でさ。」

「……ん？待てよ？時間的に考えて、ひよっとしてジュエルシードの暴走の原因は、直接的か間接的か分かんないけど、管理局員が無理やりあそこに侵入したことが影響してるってことになるかもしれないのか？いや〜だとしたら管理局の責任問題がさらにやばくなるな〜。」

「……ま、とにかく、あんたらそんな自分の首を絞めるようなこと書いてほしかったのか？」

何だか少年の声がとても楽しそうである

具体的に言つと今にも笑い出したっていうような……むしろ鼻歌ぐらいなら今すぐやってもおかしくなさそうな……

あとKYについては無視か？

まあ、リンディとクロノとは少年の言い分に呆気にとられた顔してるしちやつてるし、なのはやユーノやフェイトは少年が言っている内容を頭の中で処理しきれず、なんかぼかんとした表情をしてるし、プレシアやアルフは現在の状況の考察で処理落ちしちやつているのでそれに突っ込む人員はいないんだけどさ

……あ、クロノがハツとした表情になった

「そつだ、お前の言ってる内容は全く裏付けがないじゃないか。お前の話している今回の事件の全様を証明する物的証拠が全く「ちやんとあるぞ?」え……?」

「なにを言っているんだ?

アースラにきちんと状況の映像データが残っているじゃないか?」

「お、お前こそ……何を言ってるんだ?

アースラの記録システムはお前が全部『艦長!!』」

その時エイミィから、凄く慌てた表情で通信が入った

全員一斉にエイミィが映ったモニターの方へ向く

「どつしたの、エイミィ!?!」

『少し前、またノイズが入ったので調べていたんですが、アースラのシステムが全て元通りになっていました。ハッキングどころか、異常があったという痕跡すら残っていません！！！』

「おまえ……」しかも！！「！？」

クロノが愕然とした表情をしコートの少年の方へ向こうとするが、次の瞬間エイミーから送られてきたものを見て、彼等はさらに驚愕することになった。

『変なデータが書き込まれてたんです。これ見てください。』

モニターに移されたのは黒コートの少年が言っていたことを裏付けるような映像データだった。

そしてその映像は、その時の現場にいた彼等だからこそ偽物だと分かるものの、それを知らない第三者から見ると、到底偽物だと分からない……いや、偽物だと言われてもそれを信じる事が出来ないほど精巧に作られたものだった

『他の……例えば、周囲の魔力数値変動グラフのデータなどもそうなんですが、全部改ざんされていて、しかも完璧につきつまが合わされているんです。到底偽物のデータだなんて分かりま

せん!』

「さて……」

エイミィの報告を聞き、黒ローブの少年が切り出す。

その時になってやっとエイミィはコートの子に気づき、あつと声を上げた

「で？君たちはどうしてそんなにプレシアやフェイトちゃん、そしてアルフに罪をかぶせたいんだい？」

今にも吹き出しそうに肩を微妙に震わせながら黒コートの少年は言う

呆然とするなのは達、および何が起きているのか知らずモニターの向こうで『??』マークを頭上に浮かべるエイミィの中で、リンディは目を閉じ、クロノはわなわな震わせる

そして、リンディはしばらく考え込んだ後、遂に折れ、降参と言ったようにため息をついた

「分かりました。こちらの勘違いだったようですね「艦長! ! !」
ククロ、こちらの負けよ。では、こちらの不手際で被害を受けた民間協力者、テストロッサー一家を管理局で保護することにします。」

「ああ。いや、勘違いを正せてよかったよ。」

リンディの発言を聞き、道化的な喜びを表す少年

そしてプレシアとフェイトは……………

「そ、それじゃあ……。」

「私と母さんは……………」

「いくつかの手続きなどを踏んでもらうことにはなりますが、これからあなた方二人は一緒に暮らすという事になりますね。」

リンディの言葉に信じられないと言った顔をし、満面の泣きだしそうな笑みになった。

アルフも涙ぐんでおり、なのはやユーノも嬉しそうである。

「あ、ありがとうございます。」

「母さん……」

「後残り数年、フェイト達と一緒に入れるなんて……」

その言葉にフェイトから喜びの表情が消える。

「え？……残り………数年？」

プレシアは悲しそうな顔をして、フェイトに語りかける

「ごめんなさいフェイト………私の体はもうボロボロだったの、あと数日で死んでしまっぐらいに」

「そんな……」

「ごめんね……でも彼のおかげであと数年生きる」あ、悪いあれ

嘘
「

だがそこに黒ローブの少年が言葉を挟んだ。

「え……？そ、それじゃあ……私の体は……」

「実はあの薬さ」

混乱し、どういうことが訳が分からなくなるプレシア、そこに少年が切り出す

「最初のは万能薬で二つ目はエリクサーって名前なんだけど、それ
それ生命の水アクアウオーターつてやつから『状態異常回復』と『損傷・体力・精神力回復』の効果を抽出して作った秘薬だったんだよな「え……と
言うことは……つまり」そう、あなたの体はもう健康そのもの
だよ。数年どころか数十年生きられるさ。
ま、それでも死にたいなら俺は止めないがな……悲しむやつ
が出ると思うぞ。」

その場にいる黒ローブの少年以外の全員が驚愕の表情を浮かべる。

(彼の表情はしてやったりと言つ笑みだろつ……たぶん)

「それじゃあ……私は……」

「そ、フェイト達四人で寿命が無くなるまで暮らしていけるよ。
今までやってあがなかつた分、しっかりとかわいがってあげなよ?」

「ええ、もちろんよ!!!四人で幸せ……に……え……え……え……え……え?」

「四人?」

黒ローブの少年はさらつと、爆弾発言を投下する

プレシアとフェイトは一泊遅れて疑問の表情を浮かべた

「そう、四人。」

黒ローブの少年はそう言いながら机を飛び降り、アリシアの入っているポットの方に歩いて行くき、折った指を立てながら言う

「プレシア、フェイト、アルフ、そして……アリシアって
いう養子でだよ。」

「え？」

周りをよそに、ローブの少年はアリシアをポットから出し、何処か
らともなく出した布に包み、

「先ず俺の血とフェニックスの尾を蘇生の媒体にして……体力
劣化対策にパワーアップとHPアップ、ガードアップは……一応
使っとくか、んで治癒に万能薬とエリクサーにエリクシル改……
……『死者蘇生』のカード……念のためユニコーンホーン
も使かうか……よし！そんじゃ！！！！」

『瞳閉じし者 鼓動の旋律を奏でよ』『リジェネレイト』『！！』

そう叫んだ瞬会アリシアの周囲に魔法陣が展開され、どこからとも
なく光が一瞬差し、アリシアが動き出した。

「うっん……。」

「「「「「ええ!!!!!!!!!!!!!!」」」」」

「アリ……シア……?」

皆が叫び、プレシアがつぶやく。
そして……

「えへ。ただいまお母さん。」

「アリシア!!」

笑いながらアリシアが答え、プレシアは彼女のもとに駆け寄って行った。

「それじゃ、幸せにな……」

「あ、ありがとうございます。」

彼女らの様子を満足そうに見た黒ローブの少年は立ち去って行くとする

その背中にプレシアは声をかけた

「お礼ならフエイトに言え。」

最初に会った時も言ったが、フエイトがお前を大切にしていなかったら俺はおまえを問答無用で殺してた……。」

「それでもよ……ありがとう。」

「……そうか……。」

彼はプレシアの言葉に（おそらく）微笑む。

そして和やかな雰囲気になったところへ、リンディが茶化したようにその子へ声をかける。

「あなたも母親のところへ甘えに行くの？」

だが・・・

「・・・・・・・・親はもういない・・・・・・・・俺が殺したからな。」

(ビシー!)

彼の言葉で部屋の空気が凍った。

「え?・・・・・・・・」

そして彼は虚空へと向かうように話します・・・

「・・・・・・・・俺の親父はある経営をしてたんだけどさ、ある時それがうまく回らなくなっただ。で、俺と母さんがそれを如何にかし

よつと手伝つようになつたんだ。

初めは親父も喜んでくれてさ、嬉しかったよ……。」

彼は懐かしむように話す

「でもそんな中、どんどん経営は悪化して行く一方でさ、俺達もどんどんきつい仕事をするようになっていったんだ。で、ある時母さんがたまりかねて親父に文句を言ったんだ。

だけどさ……その時親父、叫んだんだ、『うるさい!! おまえらは俺の言うことを聞いていればいいんだ』ってさ」

彼は虚ろに紡いでいく

「その後母さんは何も言わずに手伝いを再開した。俺も一生懸命やったよ、今の親父は忙しいからこうなつたんだ、経営が元に戻ればあの優しい親父に戻って、一緒に幸せに暮らしていける。そう信じてたから……。」

でもさ……それは叶わなかつたんだ……。」

そこで彼は一度言葉を区切り、絞り出すように話し始めた。

「そしてついにあの日、俺が家に帰ったら……真っ赤になった親父が倒れてて……その隣に包丁を持って返り血を浴びた母さんが立ってたよ。」

「な……」

周りの人達は息をのんだり驚きの声をあげたりした

「その後、母さんが立ちつくしてた俺に気付いて言ってきたんだ……薄笑いを浮かべながら『もう駄目だったわ、さあ、私と一緒に天国に行きましょう』ってさ。」

俺は思わず後ずさったよ。そしたらさ、『どこに行くの？さあ、こっちに来なさい、さあ……』あ、もう……うざったいわね！！こっちに来いって言ってるでしょ！！』って叫んで突っ込んで来たんだ。俺はわけも分からず必死に抵抗したよ。

で、多分死に対する恐怖から無意識に行動したんだろうな……とにかく俺が気付いた時、そこには血だまりにしずんだ母さんと真っ赤になった……母さんが持ってたはずの包丁を持った俺がいた……」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

周りの表情はそれぞれだったが、全員何も言えなくなっていた

「それから少し後だったな、俺が力を手に入れてこの世界に入ったのは・・・・・・・・」

で、そのしばらく後、俺は決めたんだよ。『手に届く少数でいい、俺の世界の人達を、守ると決めたやつらを何としてでも守り抜く・・・・・・・・』
例えばどんな手を使ってでも『ってさ。』

・・・・・・・・俺みたいなやつを・・・・・・・・少しでも増やさないために
「！！」

彼は自分の手を握り締めて言い放ち・・・・・・・・そして消えた。

030 無理を通して道理を蹴っ飛ばす!! (後書き)

刻

「さて……………次回はいよいよ無印最終回だっけ?」

黒

「正確に言えば無印本編最終回だな。

そのあと、何話か挟んでからA's本編開始だ。」

ソニア

「そっか。」

刻

「さて、みなさま、こういう結末になりましたが……………
どうだったでしょうか?」

黒

「でも正直これ以上のやり方は思いつかなかったんで……………
。。。

一応、『武力で徹底的にO H A N A S I』てのも考えはした
けどあんまりだったので」

刻

「さてそれでは感謝コーナー。」

ソニア

「この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。
緋水様、キラ様、忍冬様、バルディッシュ様、HAZUKI様、ソ
ロモン様、感想をありがとうございます。」

黒

「ではまた次回。」

ちなみにあの事件があったのは刻が11歳の誕生日だった時という
裏設定があります。刻が転生したのはその約半年後、その間刻は孤
児院にいました。

後、現在刻の肉体年齢は9歳、中の年齢は大体17歳、まあ精神年
齢は絶対もっと上だけど。

031 ここから(前書き)

最近、なぜかコードギアス(一期二期両方)のDVDを買いました
なぜかカットになってやってしまった。反省はしていない。だけどち
よっと後悔してる。

食費が.....

Side 刻

「一まゝい、二丁枚、三まゝい、……………あれ、一枚足りないぞ？」

くくくくく……………」

「なにトチ狂ったこと呟いてるの刻!？」

「しつかりして下さいよ総師……………あと……………10箱分ぐらい処理したら終わりなんで!！」

「グボアア!！」(吐血)

「刻!！」

「総師!！」

現在……………ビハインドとライトヴァイス関連の書類処理に追われている刻です。

経過は順調なんだけど……………

「なあレオン……俺ってさあ、たとえ俺が不在でも確実に回るように組織しておいたと思ったんだけど……」

「まあ確かに、これらの書類、ぶっちゃけ総師以外が処理しても良いんですけどね。」

「ふざけんな！ーじゃあ俺何でこんな目に会ってんだよ！！」

「やっぱ総師がやった方が何千倍も早くつくし、カツコが付くんで

まあ、隊長の支持率はもう十分すぎるほどあるんですけどね……

「……」

「はあ……」

「後、俺がすごく楽です！」

「明らかにそつちが本音だろ！？」

ちなみに今俺達がいるのは、ビハインドとライトヴァイスの真の本部のとある一室……一応俺が執務室として使ってる場所だな。

まあよく映画とかであるような広々としたイメージなんか無く、文字通り書類に埋もれてるけど。で、今此処にいる俺と、ソニアと、レオン、この三人で書類の処理を行っているってわけ。

ちなみに基本、俺とレオンはアナログ　つまり紙面に書かれた書類　を処理して、ソニアにはデジタルの書類を担当してもらってるんだけど・・・アイツとんでもない速さで処理してるから、もうモニターの画面が何か処理ミスした映像を流してるようにしか見えない・・・

うん！！ビバ、廃スペック！！

・・・書類作業やらせるためにこんなそこのロストログリアなんかめじゃない性能に設計したわけじゃ無かったんだけどな・・・ま、いつか。

あゝそれにしても、何で俺こんな目に会ってるんだろ。

アースラを後にした後、なんとなくここに来たら捕まって、ずっと缶詰だよ・・・。

間違い無く十二時間はぶっ通しで作業してるのに・・・

「終わんねえ！、終わんねえよ！！キャハハハ・・・」

「ほんとしつかりしてよ刻！！」

「あんたが倒れたら、軽く六桁以上の人が路頭に迷うんですけど・・・」

「いやだから、もともとこれらの組織って俺がいなくても稼働でき

るようにはしておいてるだろが!!!!」

そついや今頃あいつらは別れの挨拶でもしてるころかな。
まあ、今度あいつらとぶつかるのは数カ月は後だな。

とりあえず今、あいつらに言っておかないといけないこととは・
・・・・・

「ああ!!!!」

「どうしたの刻!!!!急に叫んで!!!!」
「なんか書類にヤバいものでもあつたんですか!?!」

「あ、いやそうじゃないんだ・・・・・ただちょっと伝言頼む
の忘れてただけだ。
ちよつと行ってくる!!!!」

「・・・・・伝言ならこつちでやりますけど。」
「いや俺が行かないと意味がないんだ。」

「総師………まさか………逃げる気ですか？」

ちよっ、レオン、そんなどす黒い気を放つな！！

「安心しろ、すぐ戻ってくるから！！」

「………分かりました………」

「わりいな！！じゃあちよつと（三分以内に戻って来て下さいよ？）俺はウルトラマンじゃねえ！！ そんなに早くできるか！！ 一時間以内には戻る。行くぞソニア！！」

「はっい。」

031 ここから

）無印本編編、最終回）

Side なのは

ここは海鳴臨海公園。

今私はフェイトちゃん達に会うために集合場所に向かっています。

あ、いた！！アルフさん、クロノ君、プレシアさん、アリシアちゃんもいる。

「フェイトちゃん！！」

「あ……」

「僕達は向こうにいるから。」

私が手を振りながらみんなのところにたどり着くと、クロノ君がそう言っアルフさんとプレシアさんを連れて歩いて行った。

私とフェイトちゃんとアリシアちゃんはお互い何も言いだせずしばらく黙る、そして私は切り出した

「おかしいね。話したいこと、いっぱいあったはずなのに、二人の顔見たら忘れちゃった。」

「私は……私、うまく言葉にできない。だけど嬉しかった。」

「うん。友達になれたらいいなって。．．．．．でも、今日はこれから出かけちゃうんだよね。．．．」

そう思うとさびしくなる。．．．．．。

「そうだね。少し長い旅になる。．．．．．」

「私たちは無罪になったけど。．．．．．手続きとか。．．．．．いろいろあるんだよね。．．．」

「でも。．．．．．また会えるんだよね？」

「うん。」

「もちろん!」

フェイトちゃんとアリシアちゃんは微笑んで頷いた。

「少し悲しいけど。．．．．．」

「ほらフェイト、元気出して! ! ! 言いたいことがあるんですよ。」

フェイトちゃんが顔を俯かせると、そこにアリシアちゃんが声をかけた。

あ、フェイトちゃんが顔をあげた

「うん……今日来てもらったのは、返事をするため。」

フェイトちゃんは顔を赤らめて言った、

「え？」

「君が言ってくれた言葉……『友達になりたい』って……」

「あ……うん!!うん!!!!」

「私に出来るなら……私でいいならって……
だけど……私……どうしていいかわからない。母さんに聞いてもわからないって……それに、アリシアに聞いたら……
『なのはちゃんに聞いたらいいよ』って……だから教えてほしいんだ……どうしたら友達になれるのか……」

「そんなことないよ……友達になる方法、すごく簡単……」

名前を呼んで!! 初めはそれだけでいいの、君とかあなたとか、
そういうのじゃなくて、ちゃんと相手の目を見て、はっきり相手の名前を呼ぶの。私は、高町なのはだよ!!」

「なのは……」

フェイトちゃんはささやくように言った。

「うん!そう!」

「じゃあなのはちゃん。これで私も友達だね!!」

アリシアちゃんも嬉しそうに言うてる。

「うん!!!!」

私たちは手を取り合い、笑顔になった。

どうやら嬉し涙を流してたらしく、フェイトちゃんがそれを拭ってくれた。

「うう……………あんたんこの子はさ……………」
「ん？」

何故かアルフが泣きながらユーノ君に話しかけていた。

「どうしたのアルフ？」

「だって……………なのは……………ほんとは……………ほんとにいい子だね……………
……………フェイトが……………あんなに笑ってるよ……………」
「ええ、そうね……………」

私はそれを聞き三人の方をもう一度見る。

なのはちゃんとフェイトがリボンを交換しているようだ……………

「ほんとうに……………よかった……………」

「これで、よかったんだよね……………」

クロノ君もそれを見て、思う所はあるみたいだけど、頬をほころばせている。

そこに、

「おまえも頑固だよな。素直に喜んでくれよ。」

後ろから、私たちに聞き覚えのある声がかかってきた。

『バツバツ』

「よー!!」

振り向く私たちにその子が軽く手を挙げてあいさつする。

やっぱりあの黒ローブの少年だ。

「お、おまえは!!」

「にしても、ほんと良い子達だよな………助けた甲斐があったってもんだ。」

ローブの少年が（クロノ君を無視して）満足そうにつぶやく。

「僕を無視するな!!」

「いい加減すぐ怒るのはやめた方がいいぞ？カルシウム足りてない

んじゃねえか？ カルシウムを取れ、それで全てがうまくいく！！」

そう言つてクロノ君に『カルシウムせんべい』と書てある袋をいつの間にか取り出し、投げ渡してきた。

「僕は牛乳を毎日飲んでる！余計な御世話だ！！ それに怒ってるのはおまえのせいだろ！！」

「あははは……ま、そうだよな、わりいわりい。」

その子は昨日のあのやり取りが嘘のように明るく軽快に笑う。

「それで、どうかしたの？」

「ん、ああ、そうだったな。まあ、あいつらの様子を見に来たってのも理由の一つだったんだけど、本題は……」

そこで少し、真面目そうな雰囲気になり、

「クロノ、おまえに伝言を頼みに来た。」

そう言ってきた。そしてクロノ君はそれに対し眉をひそめる

「伝言？」

「そ、伝言。」

「僕の知り合いに、おまえと知り合いの人なんかいないと思うけど。」

「ん〜・・・それは分からないぞ？ 人間関係の範囲って狭いよ
うで広いからな。 意外なところでひょつとしたら知り合いになっ
てるかもしれないぞ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

コートの少年の言葉にクロノ君が険しい顔をする。

「まあ、でも少なくとも今から俺がお前に頼む相手、『ギル・グレ
アム』は俺のことは知らないだろうな。」

「な!?!」

クロノ君が驚きの声をあげた。

「彼とどういふ関係なんだ!?!」

「いやだから、多分あいつは俺のことを知らないって。」

「じゃあ・・・・・・・・なんで・・・・・・・・」

「いや、今俺がかかわってるやつのこと調べてたらそいつが浮かび
上がってきたんだよ・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「んで、肝心の伝言の内容だけど、『おまえがその計画を実行する

つもりなら、俺はおまえを……殺す!!』って伝えといて。「な!? どういうことだ!」

「詳しく知りたければそいつに聞け。」

あ、そうだ。あと『闇は俺が夜天に戻す。変な行動はとらないように。』って伝えといて。んじゃあそう言うことで

「ちよつと待て、説明しろ!」

「だからグラムに聞けつて。……あ、そうだ、あとこれやるよ。」

そう言っつて彼はクロノ君に一冊の本を投げ渡してきた。

えつと……。「背を伸ばすための100の知識」?

「それ読んでおけ。そのなりで14歳つてちよつと低すぎるぞ。俺と同年代かとマジで思ったから。」

「余計な御世話だ!」

「はは、じゃあな。」

そう言っつて彼は消えた。相変わらず静かな魔法ね……

「ああ……くそ……はぐらかされた!!」

クロノ君はその後、しばらくの間肩で息をしていた……

翌日の朝

Side
刻

あの後俺達は執務室に戻り書類地獄を何とか終わらせた。

デス・マーチ

で、今は学校に登校してきたと（刻くくん）

「ん？ああ、おはようなのは。どうかしたか？」

「おはよう。ねえ？刻君ってフェイトちゃんと友達なの？」

ああ、なるほど、フェイトのやつ俺のこと（魔導師ってこと以外は）話したんだな……

「ああ、そうだけど。ってかなんだ？お前とも友達だったのか？」

「うん！！と言っても、昨日やつとなれたんだけどね。」

「そっか、よかったな。」

「うん！！！」

なのはは満面の笑みで笑っていた。

「あ、それでね、フェイトちゃんが刻君に代わりに御礼を言っておいてちょうだいって。昨日家に行ったら留守だったみたいだから。」

「あ、なるほどな……悪かったな……あいつ引越したんだよ……。」

「大丈夫だよ、それにきつとフェイトちゃんともすぐ再会できるよ。」

「!!」

「そっか………なあ、なのは」

「ん？」

「あいつのこと……大切にやってくれよ……。本人、隠し通せてるって思っているみたいだけど、時々さびしそうな表情してたからさ………」

「そっか……。でも大丈夫!! もうそんな表情はフェイトちゃんにはさせないんだから!!」

「なのは、刻、二人でなんの話してるの？」

「なのはちゃん、刻君、おはよう。」

「あ、アリサちゃん、すずかちゃんおはよう!!」

「よっす」

「おはよう。で、なんの話してたわけ？私達も仲間に入れなさいよ。」

「うん、いいよ!!じつはね………」

さて、A's開始まで約半年、……つかの間の休息か。でも次の謀略の仕込み、早いとこ終わらせないと……。

031 ここから（後書き）

黒

「031話、これで無印本編終了です。」

刻

「そして、A's編へと、か。」

黒

「まあ、少しずつ進めていきます。」

さてと、今回感想で「守護者全員のなつたきっかけや経緯を教えてください」と言うものももらったんですが、すみません。設定はまだ完全じゃないんです。それに、作ってもそれが本編で活かされるかどうか分かんないし・・・とりあえず今はこれだけで勘弁して下さい。」

第二【世界】

榊 鴻祢

（さかき かたね）

『タイラント暴君』

戦闘センスを買われ守護者に抜擢された。

自分が満足に戦える相手が彼の世界にいなくなっていた時、『なら守護者にならないか？もつと強い奴らと戦えるぞ？』と神に誘われ承諾。守護者となる。

第三【世界】（ステルマ） リオン＝クリミナル 『魔術師の王』^{マオウ}

先代の守護者と友人だった。

彼等はイクストと遭遇し、その友人は巻き込まれた彼を守りながら戦うはめになる。

そして結果的に撃退するが、その友人は死んでしまった。

彼はその遺志を継ぎ、また罪滅ぼしのために神に頼み守護者となる。

第七【世界】（エブナント） グレン＝ブルームフィールド 『闇^{ノクターン}光』^{オフティクス}

一言で言うと、生き様を買われた。で、その後あの世で神に頼まれて守護者となり転生。

また、彼は前世で一応天寿を全うしているらしい。

第十一【世界】（ディクト） ソル・ロージングレイヴ 『狂喜乱舞』

戦闘センスの評価。

前世はある組織の実行部隊で死因はその関係、一応神はそれに関わっていない。

第十二【世界】（スタルジア） アステリスクII グロウリー ㊦

数奇の技巧アンバランスアート ㊦

神の手違いでトラックにはねられ死亡、転生。

ついでに守護者も二つ返事で承諾。

第十三【世界】（ファンタジア） 仁神 刻 『終焉への誘いしよな』
ラストレクイエム) ㊦

ゼウスが目をつけ、承諾もとらずに殺して守護者に。
本人曰く、守護者にしたら面白そうだったかららしい。

刻

「つまりほとんどのやつの設定は完璧じゃあないんだな。」

黒

「ああ……何処で登場させるかは決まったやつらはいるけど……此処まで細かい設定は考えてなかった。今後もするかどうかわかんないし。」

刻

「大丈夫なのか？」

黒

「一応本編に影響は無いよ……。」

刻

「そうか……では感謝コーナー」

ソニア

「この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を、バルディッシュ様、白狐様、僚様、緋水様、ソラト様、ソロモン様、ロア様、HAZUKI様、感想をありがとうございました。」

黒

「ではまた次回」

032 Secret (前書き)

..... 来週から定期試験。

なのになぜこういう時に限って筆が進むのだろうか？

Secret

とある部屋で三人の老人が話し合っている……………

「経過はどんな感じだ？」

「ただ一言、『素晴らしい』『これに尽きるよ』」

「……………それほどまでなのか？」

「ええ……………時間はかかる方法ですが、確実に彼の言ったようになっ行ってやるよ。」

「まああれならそうでしょうね……………彼の訓練の効果は着実に表れているわね。」

「全く驚いたもんだ、我々の懸案事項の解決案をこつもあつさり出してくれたんだから。」

仰ぐように一人が言う。

「ああ・・・・・・・・・・我々が考えてもみなかった方法。
・・・・・・・・・・いや、考えれなかったのか・・・・・・・・」

「魔法は使い方次第でどうともなる。か・・・・・・・・ああ、そう
だ・・・・・・・・そのはずなのに我々は魔導師ランク・・・・・・・・魔力資
質を絶対視してた・・・・・・・・」

「私達ははずつと間違ってたのよね・・・・・・・・それに彼の言っ
た『魔法は質量兵器より危険である』考えてみれば当たり前なのに。
」

老婆も疲れたように呟く。

「魔法の神聖化とでも言うべきか・・・・・・・・ああ、その
さ。なぜ我々はこれほどまでに魔法を絶対視しておきなが、らその
危険性にまったく付かなかつたんだ。非殺傷など誰にでも解除でき、
そしてその瞬間、魔法は質量兵器を超える脅威になる。魔法はそう
いう諸刃の力だったのだ・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

三人は黙り込んでしまふ

しばらくの沈黙の後、老婆がそれを破る

「……………そろそろね、彼が来るのは。」

「ああ。さて、『魔導師の質を上げてやる。その代わりに俺に協力してほしい』……………か。」

彼は何を我々に求めてくるのやら……………。」

そこへ彼が入ってきた。

s s e c r e t l y

(暗躍せし者)

T h e p e r s o n w h o a c t

「……………まさか」

「言っとくけど、これは全部真実だよ。」

「分かったわ、私たちは全力でそうするわね。」

「全くだ……………安心しろ、必ず成功させてやる。」

「これを見せられ、見捨てるわけにはいかないのよね……………」

「

それを聞き彼は微笑み、そして………秀囲気を変え、切り出す

「実はもう一つ、協力してほしいことがある。」

突然の彼の変化に一同は身を固くする。

「して……それは？」

「まずはこれを見る、言っておくがこれも真実だ。覚悟しておいてくれ。」

そして彼の出した資料を見、彼らは絶句し、眩暈を起こしそうになった

は事を運ぶ)

H e m a k e s p r o g r e s s (彼

「『ネフィリム』?」

「ああ、一・二年ほど前に三提督が作った組織のことだ。なんでも魔導師ランク・・・と言うより魔力資質の低い人たちの救済策として、試験的に作ったらしい。まあその後まったく音沙汰が無いからどうなったのかは知らなかったけど。」

Truth (真実)

「第13【世界】の……そうだな、いわゆる旧暦462年のことだったな。
あいつと出会った……いや、……再会したのは。」

┌

defector (離反者)

「ぶじいじいもじだ？」

「お前を殺す」

新たな章が始まる

「やっと目覚めたか、

………守護騎士諸君？」

「「「「?!?!?!」」」」

彼は自ら望みさらに堕ちていく

TO

be continue to As

黒

「次回A's編開始です！！本編開始はもうすこし後でだけど」

刻

「やっぱやったのか。」

黒

「だから大丈夫だって！」

たとえ少し言い回しとかが変化しても全部出るから！！」

ソニア

「失敗しても知らないよ？」

黒

「しつこい！！」

さて、この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。

妙に洗練された無駄の無い無駄な動き様、緋水様、バルディッシュ様、ソロモン様、ロア様、HAZUKI様、感想をありがとうございます。

刻

「次回はすぐ投稿できるのか？」

黒

「明後日までには投稿する」

033 守護騎士(ヴォルケンリッターズ)との出会い(前書き)

そっごいでアップしました

033 守護騎士（ヴォルケンリッターズ）との出会い

Side
刻

本日は六月四日、そう、はやての誕生日の日である。

俺は翠屋で誕生日ケーキを買い、八神家へ向かっていた。

「さーと、ソニア、いよいよヴォルケンリッターズとの遭遇だ！
」！
」

「うん、どんな人達なのかな？」

「さーな、ま、会えば分かるさ。」

ホントは知ってただけだな。

あ、ちなみにヴォルケンリッターズが出て来たことは真夜中に魔力

の奔流があつたので分かつたし、その後あいつらの魔力をたどつて
たから、今はあいつらが病院から帰つて来て八神家にいるのも分か
っている。

にしても………発動の時の魔力奔流の規模、あんだけす
ごかつたのに、よくなのはのやつ気付かなかつたよな………やっ
ぱ寝てたからか？それともそついう感覚が鈍いのか？

まあ、おかげではねなくて済んだんだけどさ。

「………さてと、じゃインターホンおすぞ？ 発言には気を

つけるよ？」

「分かつてるよ。」

ピンポン

「はい、あ、刻兄にソニアネエ！！」

「よ。」
「遊びに来たよ。」

「待つといてな、今開けるから。」

ではやてがドアを開けてくれたんだが

「シグナム!？」 「!?!、(動くなソニア!!) (え?)」

入った瞬間、ピツチリとした黒い服を着たピンクのポニーテールの女性がいきなりそう尋ねてきた。

……俺の喉元に剣先突き付けながら

ま、予想の範囲内なんだがな。

ソニアにも動かないよう念波で指示を出しておいたし

「なあ、出会いがしらに人に剣を突き付けるのやめた方がいいぞ？」
「……おまえ達は何者だ？」

「何者つて、そこにいるはやての友達だ。にしても……」

そして俺は切り出す。

「やっと目覚めたか、……守護騎士諸君？」

「……?!?!?!?!?!」

シグナムと後ろにいた女性シャマルとヴァイタ二人と男性ザファイラ一人、そしてはやてが驚きの表情を浮かべる

「ま、そんなことより、ほらはやて。誕生日おめでとう」

ケーキの箱をハヤテに渡す。

「あ、ありがとう……」

はやてはお礼を言って箱を受け取る。

しかし明らかに思考が混乱してるな、標準語になってるし……

「おい貴様（まあ、まてつて）」

「とりあえずそれ冷蔵庫にいれとけ。質問はそれからだ。」

シグナムが叫んでくるがそれをいなし、俺達は居間に向かった。

・・・数分後、八神家の居間

「さて、何から言おうかな・・・」

俺は用意してくれた茶を飲みながら話し始め・・・

「じゃあまずは、（ズズ・・・ん？なんかトロミが）・・・グバァァ
！！！」

（バタ！！）

「刻~~~~~！！！」

・・・
（まる）

032

ヴォルケンス
守護騎士との出会い

く シリアス？何それ？食べれるの？く

「うっ……」

「あ、刻、起き」お母様、俺の本に折り目つけたでしょ!!」って大丈夫!？」

起きたら目の前にソニアがいた。

どうやら俺は気絶して八神家のソファーに横にされていたらしい。

「……ああ……俺はどのくらい気絶してた？」

「十分ぐらい……」

「そうか……なあソニア？ これはどういう状況だ？」

横を見ると、バインドを徹底的に施されたヴォルケンスがいた。

周りを見ると、部屋があちこち壊れてるし、んではやては……意識を失ってもう一つのソファーで寝てる……。

「ひと悶着あって、武力制圧した。はやてはその余波で気絶したんだよ……」

「そうか……で、何が原因だ？」

「刻を殺そうとしたことにきまつてるでしょ!!」

ソニアが叫ぶ。

「我々はそのようなつもりはなかったと言ってるだろ!!」

叫び返すヴォルケンズの長シグナム
で、二人で言い争いを続ける。

ああ、なるほど、そっぴやそっぴだな……気絶するなんて何年ぶりだろな……。
この体頑丈だから、失血による気絶も無いし、毒とかの耐性も物凄
いからな……。

……シャマルだよなっばあの茶を入れたの……

どんな奇跡起ケミカルこしたんだろ？

「んん……」

あ、はやても起きた見たいだな。

「よ、おはようはやて」

「あ、刻兄、気付いたんか……」

「ああ、さてと………おーいそろそろ言い争いやめろ、ソニア、シグナム」

「んじゃあとりあえず聞きたいんだけどさ、あのお茶入れたの誰？」
「あ、私です。」

答える、必殺料理人^{シヤマル}。うん、やっぱりお前だったのね……

「お前かシャマル……」

「え、なんで私の名前が……」

「今はそんなことどうだっていい。で、お前は俺を殺すつもりだったのか？」

「いえ、そんなことはありません!」

「じゃあ刻はあんなことにな「落ち着け、ソニア」……うん……」

「じゃあお前はどっいつつもりだったんだ？」

「せつかくだから……一工夫してみようと思って他の材料を……」

一瞬俺達の時が止まった

「………なあはやて？ お茶って普通、入れ方以外手を加えるっけ？」

「いや、私も初耳や……」

俺は軽い頭痛に額を抑えながらさらに聞く。

「ちなみに……何を入れた？」

「えっと……まず……もつと酸味が欲しいと思って……」

「……『まず？』、『酸味』？」

「塩酸を……」

「はやて！！ 何でお前の家にそんなものがあるんだー！！」

「知らんわー！！ うちだってそんなもの買った覚えあらへんー！！」

俺は頭を抱える。

「えっと他には……独特な香りが欲しくて……トリクロロエチレン（甘い香り）とシアン化カリウム（アンモニア臭）を……それに体にいいと聞いたのでトリカブトを、あと……」

「いや……もう良い……これ以上言うな」

「そうですか？」

こいつ料理を何だと思ってるんだ？

加えるもん殆んど食材ですら無いし、しかも全部猛毒のやつばかりだし……

どっから持って来たんだ？
やっぱあれか？旅の扉か？

くそ、本人やばいもん作ってるって自覚ない分ポイズンクッキング
してるやつより性質が悪い。

あー、シヤマル以外のヴォルケンスも顔を引きつらせてるよ……。

はやても唾然としてるし……

「なあ刻兄、……『料理』って……なんやる？」

あー俺もよく分かんなくなった……俺の中の『料理』とい
う定義が根本から崩壊しそう……まあ、お茶を料理と言って良い
かどうかも分かんないけどさ

「とりあえず、シヤマルのやつは料理と呼んじゃいけないと思う……」

「そつやな……。」

「……はあ~~~~~」

二人してうなだれる……………

「あ~~~~とりあえずソニア、その殺気やめろ。」

「え、でもこの人刻を殺そうと」

「本人そのつもりなかったみたいだ……………目 見てみるよ……………」

ソニアはシャマルの目を見る。シャマルはせっかく作った料理が両親にまずいと言われた子供のような目でソニアを……………

「……………うわあ~~~~」

ソニアも頭を抱える。

「じゃあ何？刻は冗談ぬきでこんな馬鹿らしい理由で死にかけたの？……………私は今、有り得ない物を見ている。天然ドジっ子？戦略兵器？そんなチャチな物じゃない……………もつと恐ろしいものの片鱗を……………」

ソニアはぶつぶつと呟きだした。ようこそこのカオスの世界へ

あゝでもあんまりこのままにしとくわけにはいかないよな……。

「取り合えず………誤解も解けたってことで………この話題やめよう。」

俺、頭がおかしくなりそうだし………。」

「そつやな………」

本日の豆知識、

・塩酸

強酸、人体には（とんでもなく）有害、つてか体が溶ける。

・トリクロロエチレン

甘い香りを持つ。

半導体産業での洗浄用やクリーニング剤として使われる。土壤汚染、地下水汚染の原因としてあげられている。

発がん性あり。

・シアン化カリウム

アンモニア臭を持つ。

極めて強い毒性がある。

皆さんご存じ青酸カリ。

・トリカブト

確かに漢方薬として使われ、それには強心作用や鎮痛作用がある。

また、牛車腎気丸及び桂枝加朮附湯では皮膚温上昇作用、末梢血管拡張作用により血液循環の改善に有効である。しかし、ご存じであるろうが毒性が強く、弱毒処理を行ってから使用しなくてはならない。

もしそのままでは使えば、毒により嘔吐・呼吸困難・臓器不全などを起こし、死に至る可能性が十分ある。

033 守護騎士（ヴォルケンリッターズ）との出会い（後書き）

黒

「033話、無印突入です。」

刻

「本編まではどのぐらいかかるんだ？」

黒

「少なくとも、五話分は挟む。
では感謝コーナー。」

ソニア

「この作品を読んできた皆様に心からの感謝を。
緋水様、感想をありがとうございました。」

黒

「次の話は今晚にでもupできるようにするつもりです。」

034 (前書き)

お気に入り登録500人突破!!

「……………で、とりあえずあの後ソニアにヴォルケンズの拘束を解くように言って、部屋を錬金術でバッシュツと直しました。」

ヴォルケンズが目を見開いてたのを追記しておく……………

「さて、じゃあ改めて、何が聞きたい？」

「全部だ。」

即答するシグナム

「いや……………アウトにもほどがあるんだけど……………このやり取り久しぶりだな……………（……………じゃあとりあえず言うけど、質問は後でな。」

「分かった。」

シグナムがうなづく

「そつちも良いか？」

「シグナムがあたしらのリーダーだからな」

「私も」

「同じく」

「私もええで。」

ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、はやても答える。

「じゃあ説明するけど、そうだな。」

んじゃまず、俺の名前は仁神刻、日本人、組織【守護者】の第十三柱。

魔力量は分かんないけどSSSオーバーなのは确实。」

「『『『『な!!』『』『』』」

「後はそうだな~~~~ああ、俺はそつちで言う戦闘機人みたいなもんだな。厳密に言うとは違っけど。んでもってソニアが俺のユニゾンデバイス。

んじゃあ質問タイム。なんかある？」

「あなたはやてちゃんに魔法をかけているわよね？魔力波長が一緒だわ。」

先ずはシャマルか

「疑問形使ってるけど、完璧に断定してるだろ……まあそのとうりだが。」

「そうなんか刻兄!？」

「ああ、おまえに身体強化の魔法をかけた。最近は体調が良いだろ?。」

「石田先生も疑問におもったが、刻兄のおかげだったんやな・

……」

「まあな」

「どう言いつつもりなの?。」

「……と言つと?。」

シャマルの質問に首をかしげる。

「何でそんなことを?。」

「何でって、はやての苦痛を楽にする方法があったからそれを実行した。お前ならしないのか?。」

「あ……そうね……ごめんなさい。」

「分かってくれたなら良いさ、他には?。」

「ユニゾンデバイスってホントか!!」

次はヴィータか……

「ああそうだぞ?ちなみに俺が作った。」

「えへへへへへ。」

なぜかピースをするソニア……。

「戦闘機人って?」

こんどははやてが聞く。

「ん、簡単に言うと改造人間だな。」

「!!!???」

はやてが目を見開く。

「冗談や……ないんやな?」

「ああ。まあさっき言ったように厳密に言うと違うんだけどな。」

「具体的に言おうと？」

「戦闘機人っていうのは、先天的に人為的強化処置を行って、さらに機械とかと融合させたりしたやつらを指すんだけど、俺の場合は先天的なものも一応あるが、ほとんどが後天的処置。しかも魔術とか神術とかそう言ったやつばっかでやってるな。機械とかは一切使ってない。」

「……………」

はやては黙ってしまった。

「だが傷の再生速度も、内包魔力も俺は異常なほど高い、正に戦闘に特化したバケモノだ。怖いかな？」

「いや……驚いとするだけや……………」

「……………無理しなくても良いぞ？」

「そんなことあらへん。刻兄は刻兄や！！」

「……………ありがとなはやて。」

俺ははやての頭をなでる。

いつもは、こうするとはやては気持ちよさそうに目を細めるが、今回は少し違った

「さてと、じゃあほかに質問はあるか？」
「……………お前の目的はなんだ？」

シグナムが言う。

「とうとう？」

「お前は我々のことを知っているのだから？」

「ああ。」

「どういづつもりだ、我々を利用するつもりか？闇の書を手に入れようとしても無駄だぞ。」

「安心しろ。そんなつもりは毛頭ない。俺はそんなものはいらないからな。」

「……………なぜだ？これがあれば、莫大な力が手に入るのだぞ？」

「詳しく言つと他人の力をコピーして、だろ？ やりたい魔法があるなら自分で作りゃあいい。何でわざわざ他人の技コピーしなきゃいけないんだ？」

「元の威力より強力なものを発動できるが？」

「強化したいならカードリッジ使えば十分だろうが。」

俺はどうでもいいと言ったように言う。

シグナム達ヴォルケンリッターズは目を見開く。

「それにその書が欲しんなら、自分で複製作るし！！！」

「ちょっと待て、お前はこれと同じものが作れるのか!？」

シグナムが叫ぶ。

「少なくとも今はできないぞ？ ま、さっき言ったみたいな理由で
必要性ないからどうでもいい。」

「『『『『(ポカ〜〜ン)』』』』」

ヴォルケンス達は呆けてしまった。

「……シグナムが呆気に取りられた顔するって結構レアだよな？」

ソニア「画像保存しといて〜」。

「はい。じゃあ次。なんかある？」

「お前がさきほど使った魔法はなんだ？」

今度はザフィーラか。

「ん〜錬金術つてやつだな。まあ名前から分かると思うけど物を生成するのに特化した魔術だ。」

「……我々の魔法とは違うのか……」

「まあ本質はあんま変わらないけどな。魔術つて言うのも俺達がよくそう言ってるだけだし。」

「……」

「魔術体系なんてたくさんあるんだ。他にもあるぞ？例えば純粹な魔力攻撃の方法はほぼゼロだが、その代わり気絶魔法、沈黙魔法、浮遊魔法、即死魔法と言った特殊魔法に特化した魔術形態つてのもある。」

「……聞いたことも無かったな……」

「お前らみたいに魔術を重要視して世間一般に大々的に公表して使ってる奴らもいれば、俺達魔術師みたいに基本的に魔法技術を魔法の使えない一般人から秘匿するのもいるってことさ。一応お前達も自分達の住む世界以外に対しては魔法文化の無い世界つてレベルで区切ってはいるみたいだが俺達はそんなレベルじゃないぞ？その無いはずの世界の中ではねないよう秘かにやってるんだ。ちなみに、非殺傷設定なんて使ってるのお前ら以外俺は知らない。」

「そうなのか……」

「ああ。ちなみに、俺らにとって魔術はただの力の一つ、だが危険度はとんでもなく大きいものとして扱ってる。そんなところもお前らとは違うな。」

さて、他には？

「私は無いな。」

「私も」

「……」

「我もだ。」

「私もやな。」

「それじゃあもう良いか？」

「あ、そうや刻兄ってお金結構持つてる？」

切り上げようとすると、はやてがよく分からない質問をしてきた

「ん？大丈夫だぞ？なんか欲しいのでもあるのか？」

「良かった。じゃあシグナム達の服の財布係よろしくな」

「え？」

「いろいろと秘密にしていた罰や」

「え……ちよ……」

「な〜刻兄〜？」

「はい……分かりました、お嬢様。」

034 (後書き)

黒

「祝！お気に入り登録件数500名突破！！」

ソニア

「やったね！！」

刻

「だがその記念すべき回にこの文章はどうなんだ？」

黒

「頑張ったんだけど……これ以上改善できませんでした。俺の限界です」

刻

「しっかりしてくれよ。」

黒

「……善処します……」

ソニア

「では感謝コーナー」

黒

「この小説を読んでくれた皆様、そしてお気に入り登録していたただいた皆様に心からの感謝を。」

刻

「緋水様、バルディツシュ様、ソラト様、感想をありがとうございました。」

「……さて作者、次回は？」

黒

「大体終わったから明日中には投稿できる。」

035 噛み始める歯車(前書き)

投稿数ちょうど40部目です

035 噛み始める齒車

「わかったことが1つあるんや。

闇の書の主として守護騎士みんなの衣食住、きっちり面倒みなあかんいうことや

幸い住むところはあつし、料理は得意やしな。」

「なるほどな。」

「あ、あの本当に良いんでしょうか？」

話し合っているはやてと刻に尋ねるシグナム。
顔に戸惑いが表れている。

「言ったやろ。闇の書の主として守護騎士みんなの衣食住、きっちり面倒みなあかん。」

「諦めた方が良くぞシグナム？一度決めたらはやてはそう簡単には止められないからさ。」

「あゝ酷い刻兄！！それは刻兄の方やんか！！」

「あ、そうだったな。お前は相手の情に訴えかけてやらせる子狸だ

ったな。」

「そうそう……っってもっとひどいやんか!」

「あははははは……」

俺達のやり取りに腹を抱えて笑うソニア、

そこでふとはやてが聞く

「そついや刻兄、あんなこと言ったけど大丈夫なんか？
服って結構高いで？いろいろと買わんといかへんし」

「大丈夫だつて俺の月給億超えてるから……
うしたはやて？」

何でおれの頭をわしづかみにしようといててやめるギブギブ!!
」

「刻兄、お話、聞かせてな？」

「イエス、ママ!!」

はやての笑顔が、怖かったです。

その後、俺が「ビハインド」って会社の社長やってること話しました。
ある程度ほかしての説明ではあったけど。

でその後はやてとの服の買い物だけど……、

俺達が店を出るとき、店員一同、店主までもが満面の笑みでお辞儀をして、送り出してくれたとだけ言っておく……。

あとその日の夜には居間が埋まるほどの服がそろっていたとも……

まあいんだけどさ……
俺に対して遠慮がないよね……はやて。

まあ信用してくれてるからこそその行動だと思うし、なんだかんだ言
って頼ってくれて、俺も嬉しんだけどさ……

「そこんとこどど思つづヴァータ？」

「知るか！…ってか私の出番ここだけかよ！！」

文句は作者に言ってくれ。

(シャマルとザフィーラは登場さえしてないんだ。
登場しただけでしたと思ってくれ by 黒天使)

036 噛み始める歯車

その頃時空管理局本部

とある執務室で初老の男と猫耳とっぽのある二人の若い女性が話している。

「そうか、闇の書がついに起動したか。」

「はい」

「……彼女にはつらい思いをさせてしまうな。」

初老の男は疲れたような表情をし、上目で祈るように手を組み口元を隠すような格好　人はそれをゲンドウポーズと呼ぶ、メガネはかけてないが　をとる。

「はい……しかしこれしか方法が……」

「いや、いいんだ。」

姉妹の一人が声をあげるが男はそれをいさめる。

「私だってこの方法が正しいなんて全く思っちゃいないんだよ。実際今だって本当に良かったのかと葛藤してるんだ……」

「そうですか……」

三人の間に暗鬱な空気が流れる……………

その時、

ドンドン

「グレアム提督、いらっしやいますか？クロノ・ハラオウンです」

「ああ、入っていいよ。」

突然のクロノの来訪に一同は少し疑問顔をするが、すぐにクロノを通す。

「失礼します」

「やあクロノ、久しぶりだね。地球でのことは聞いてるよ。災難だったみたいだね……………」

「ええ……少し聞いていいでしょうか？」

「ん、なにかね？」

クロノの様子を疑問に思いながらグラムは答える。

「今回の事件、グラム提督はどのくらいご存知ですか？」

「ジュエルシード事件のことだろ。輸送船が事故に遭い、第九十七管理外世界に運んでいたジュエルシードが落下、それを危惧したテスタロッサ親子がそれを回収。」

しかし、それを勘違いした管理局員が親子を襲撃、プレシアテスタロッサがそれを撃退、しかしその時ジュエルシードが原因不明の暴走を開始、それにより彼女らの拠点「時の庭園」は崩壊。」

その後の取り調べでこちらの非が全面的にあることが発覚。こんなところだろ。」

彼女達はこちらの局員を傷つけたし、結果とはいえジュエルシードの暴走はおこったが、まあ彼女らの無罪は確定だろうね。こちらの非は明確だったし、この事件を聞いた三提督もそのように動いてくださってるようだからね……。」

「ええ、そうなのですが……。」

クロノの様子をいぶかしみ、グラムが眉をひそめる。

「なにかあったのかね？」

「……これから言うことは他言無用でお願いします。」

クロノの真剣な様子にグレアム達は顔を引き締める。

グレアムはリーゼアリアに周囲に盗聴対策の結界を張るよう指示する。

「で、なにかあったのかね？」

「はい、実は……今回の事件に関連する証拠物件のデータ、あれは全部偽造されたものなんです。」

「何だと?!?!」

クロノの発言にグレアムは身を乗り出す。

「詳しいことは省略させてもらいます。アースラー一行もこの件については結果的には良くなったということでも何も言わないことになっているので。」

「そんなことが……」

「はい、で、それに関連することなのですが……」

クロノは一息入れ繰り返す。

「それらは一人の魔導師がアースラーにハッキングをして行なったことなのですが……」

「ちょっと待って、あれだけの偽造をたった一人でやったっていうの!？」

「と言うかアースラーにハッキングしたの!？
かなり最新のセキュリティシステム導入してたはずでしょ!？」

「ええ……物の数十秒でやってのけたみたいですが……」

猫姉妹は驚愕する。

彼女らはある計画のため管理局のセキュリティ防衛システムの解析を行っているが、だからこそ、そのでたらめさが分かるのだ。

「それで、その魔導師は九歳ぐらいの少年だったんです。黒いコートを目深にかぶっていたので顔は分からなかったんですが。そして、彼に関しては全く謎なんです、彼のデータはすべて消されています。」

分かってるのは彼の使っていた魔法は僕たちの誰も知っていない体系であること、自分の魔力を隠せるということ、後は【守護者】という組織に所属しているということだけです。」

「そんなことが……。」

「それでなんです……。」

「ん？」

「地球を離れるとき、彼があなたに伝言を言うよう僕に頼んできました。」

「なに!?!」

「……一応お聞きしますが、グラム提督は彼に心当たりはありますか？」

「いや……ないな。」

グラムは考え、自分の知り合いで特徴に当てはまる九歳ぐらいの男の子を思い浮かべるが、思い当たらない。

と言うかそれ以前にそんなハイスペックな魔導師は見たことも聞いたことも無い。

「そうですか……。」

で、その伝言なんですけど、『おまえがその計画を実行するつもりなら、俺はおまえを……殺す!!』と。」

「「「!!!???」「」」

「あと『闇は俺が夜天に戻す。変な行動はとらないように。』とも……」

グレアム提督はこれについて何か心当たりはありますか?」

771

「いや、ないな……。お前たちはどうだ?」

「わ、私ありません。」「私もです。」「

グレアム達は想定外の言葉に驚愕の表情をするがすぐに元に戻す。

「そうですか……。ではこれで失礼します。」「

そう言ってクロノは部屋を後にした。

それを見送った後、グレアムは椅子にへたり込む。

「お前たちは彼に心当たりは？」

「いえ……」「すみません……」

「いや、いいんだ……」「闇は俺が夜天に戻す」か……

『闇』は『闇の書』、『夜天』は『夜天の書』を指しているなら、
もしかしてその魔導師は闇の書を修復する方法を知ってるのだろうか？

「ですが……私たちはその方法はないと結論づけたじゃないですか……」

「ああ……そうなんだが……
……とにかく、少なくともその魔導師は我々の計画を知っている……」

それは確かだろう……
……いつたい何処でつかんだんだ……
……」

彼らの間には再び暗鬱な空気が立ち込めた。

クロノは管理局の廊下を歩きながら先ほどのやり取りを思い返していた。

「グレーム提督は彼のことは本当に知らなかったようだ……。
しかし、彼の伝言に関する心当たりは……。」

グレーム達は驚愕の表情をすぐに元に戻したが、しかしクロノはそれを見逃さなかったのだ。

「くそ、いったい何が起こってるんだ……。」

クロノはやり切れない思いの元、歩いていく……。

035 噛み始める歯車（後書き）

黒

「この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。」

ソニア

「月光閃火様、バルディッシュ様、ルフアイト様、緋水様、感想をありがとうございました。」

黒

「すみません、今週から定期試験なので、その期間約2週間ほど投稿できないと思います。」

036 とある一日(前書き)

試験中なのに投稿する俺ガイル

036 とある一日

数週間後・・・・・・・・・・

・・・・・・・・朝

ピンポン

「はい」

「よ、はやて」「遊びに来たよ」

「あ、刻兄、ソニア姐!!
待っててな、今すぐ開けるけん。」

刻とソニアがはやて家にやってきた。

リビング

「ほらよ」

刻は翠屋とプリントされた箱をはやてに渡す。

「ありがとう〜」

それを笑顔で受け取るはやて

「後これだな」

刻は書類袋をはやてに渡す

「ありがとう……なんやこれ？」

笑顔で受け取るがすぐにいぶかしむ表情をするはやて

「どうかしましたか主？」

「はやてちゃん？」

あ、シグナムとシャマルがやってきた。

「見れば分かるって。」

「まあそうやな……ってなんやこれ!？」

「これって……」

「我々の……？」

その中から出て来たのはヴォルケンリッターズの住民票とかパスポートとかビザとかその他もろもろの書類

「見ての通りお前らヴォルケンリッターズ関連の書類だ。」

「いやそら見たら分かるんやけど、なんでや？」

「なんでって、このままだとシグナム達は出自不明、不正入国の外国人だ。警察にばれたら身元不明の密入国者とかの罪状でつかまんど。匿ってたとかいった内容でハヤテ、お前もヤバいしな。」

「あ……そうか、ありがとな……」

キツネに抓まれたようにとりあえずお礼を言うはやて

「あれ？ちよつと待って刻君、此处にある書類、どうやって作ったの？」

私たちは今まではここに存在していなかったのよ？」

「それにこの写真はなんだ！？撮られた覚えはないぞ……！」

気が付きそれを聞くシャマルとシグナム
はやてもハツとした表情を取る

「写真は前来た時、画像記録としてソニアに撮って保存してもらった。」

「なるほど」

それにうなずくシグナム。

「んで書類は全部偽造な。」

「チヨイ待ちいや!!」

突っ込むはやて

目を点にするシグナムとシャマル

「そんなことしたんか刻兄!!」

「しょうがないじゃん。こうでもしないと調達なんか不可能だし。

ああ、安心しろ。さかのぼって生まれまで偽造したんだ。関連する奴らにも『平和的に』話し合いして口裏合わせしたから、到底ばれやしない。」

「は……あはは……」

乾いた笑いをするシャマル。

その時、

「……なあ『平和的に』って……どっしりしとやせ。」

あることに気づき聞いてはいけない気がするが好奇心に負けはやてが聞いてしまう

「なに………ちょっとあいつらのはれたら破滅する資料見せて、『社会的、精神的に死ぬのと要件のんで平和に暮らすのどっちが良いか』って質問しただけ。」

「………そうか、とりあえずわたしは何も聞かなかったことにするわ」

「そうですねはやてちゃん。」

何処か遠くを見るはやてとシャマル
苦笑いするシグナム。

数時間後、昼

「お気をつけを主」

「ほんならいつてきまーす」

「留守は頼んだぞ」

「まあ刻が結界はってるから変な奴はだれも来ないと思うがよ」

「うう……、専門の私より何倍も高性能です……」

「すまん……でも念を入れておくにこしたことは無いだろ？」

「そうそう」

刻とはやてとソニアとヴィータとシグナムとシャマルで出かけることになった。

ザフィーラは家でお留守番

図書館

「騎士甲冑？」

はやてがシグナムに聞く。

「ええ、我らは武器は持っていますが甲冑は主に賜らなければなり

ません」

「自分の魔力で作りますから形状をイメージしてくださいれば」

シグナムが答え、シャマルがそれを補足する

「そっか……。そやけど私はみんなを戦わせたりせえへんから……あつ!!」

服でええか？騎士らしい服……な？」

「ええ、構いません」

「ほんなら資料探してかつこええの考えてあげなな……そういや刻兄はどんなのなんや？」

「ん？おれか、俺はこれと同じやつ設定してるな。」

そう言っつて刻は黒良ローブを空間から出す。

「………偉い質素やな……装飾がまったくあらへん……」

「別におしゃれにした方が防御力が上がるわけでもないからな。」

「………そう言えばそうやな……」

「ま、気楽に考えな？一応再設定だつてできるんだからよ。」

「うん……分かったわ……」

そして………、

刻達は『といざるす』というおもちゃ屋にやって来た！！

なんだろな………この店名……明らかにネタだよな……
あとさ、はやて………ちょっと安直すぎねえか？

まあ騎士甲冑のカタログ見て考えるよりはいいかもしれないけどよ……
………までよ？

もしそうならドウナツテタンダロ？

．．．．．甲冑をガチャガチャ言わせながら攻めるヴォルケンス．．．

うん、考えるのやめよ！．．．．．ろくでもないもんが出来そうだから．．．．．

「じじは．．．．．？」

「ええからええから　こついところにこそそれっぽい材料が．．．．．な？」

シヤマルの質問にはやてが答える。
だが『な？』って言っても分からんぞ？シヤマルあいまいな表情しちゃってるし．．．．．。

「ん？」

刻はシヤマル達の後ろを歩いていたヴィータがいないことに気づき辺りを見渡す。

．．．．．あ、見つけた
ぬいぐるみコーナーでゴス風のウサギのぬいぐるみをぼーっと見つめてる

「ヴィータちゃん、どうしたの？ヴィータちゃん？」

シヤマルの声にもきかずぬいぐるみを見つめ続けるヴィータ
なにか惹かれるものがあるのだろうか

それに気づいたはやてが少し考えた後、刻の袖を引っ張る

「（なあ刻兄ちょっと頼んでええか？）」

「（あれだろ？了了解。）」

・・・夕方

「いい風ですね」

「ほんまや」

「お天気もいいですし」

「絶好のお散歩日和やな」

「フフッ」

はやてとシャマルが2人で仲良く話している間ヴィータは紙袋を抱いて無言で歩いていた。

はやては振り返りヴィータに話しかける

「ヴィータ」

「ん？？」

「もう袋から出してもええで」

ヴィータは中身のわからなかった紙袋に手を入れ、中身を取り出す
そこにはあのウサギのぬいぐるみがあった

「わあああーーーー」

ヴィータの顔が綻ぶ。かなりうれしかったようだ

……まあ、まあ。状況見てたら容易に想像はつくのだが

「はやて、ありがとう！！」

「喜んでくれてよかったわ～～。わたしと刻兄からのプレゼントや。
大切にしてくな。」

「刻も？」

「ま、俺はやてに言われて買ったただけだな。」

刻はなんでもないと言っただけに手を軽く振る

「あ……ありがとう……（トトトトトト）」

「ん？ヴィータなんか言ったんか？」

「な、なんでもないはやて……！」

「？そっか？」

そしてはやて達は再び歩き出す

そしてそれについていこうと歩き出すヴィータに刻は近づき小声で
つぶやく。

「どじりたしまして」

「……？？」

それを聞いたヴィータは驚いた後、真っ赤になっていた。

・・・
夜

晩御飯をこちそうになった数刻後、刻とソニアは帰ることになった。

玄関ではやてが刻とソニアを見送る

「じゃあ刻兄、ソニア姉、今日はアリガトな。」

「どういたしました。」

「こつちも楽しかったよ」

「ほんまに泊まっていけいいのに……。」

「ワリいな、やらなきゃならない用事があつてな……。」

「そうなんか……。」

はやてがさびしそうな表情をする。

「別にこれで一生のお別れじゃないんだからそんな顔するなつて。

ヴォルケンスが心配すんぞ？それに、俺たちだつてそのうちまた遊びに来るんだからさ!!」

「そつやな……楽しみにしてるで!」

ハヤテは気を取り直し笑顔を見せる

刻とソニアも笑顔で答える

「ああ、じゃあな」

「またね」

そして刻とソニアはやての家を後にした

そして少し歩いた時、

「……………猫か」

「そうだね」

「ニャー」

刻とソニアは猫を見つけ、そちらへ近づく

「かわいいね〜ほらほら〜」

「ニャー!!…………ふうにゃあ〜」

「えへへへ…………ほら刻」

ソニアは猫をしばらく撫で刻に渡す

「よっと、ほらよーしよしよし。いーこだねえ」

「ふみゃう!?!?・ナアアアアアア~~~~~」

気持ちよさそうな声をあげ、ふにゃける猫

それを見た刻は笑う

「ほらこれはどうだ」

「にゃう」

「これは~~~~」

「ニヤア~~~~」

「これならどうだい猫ちゃん」

「ナアアアアア」

「なあ猫ちゃん」

「にゃ~~~~~?」

そして刻は笑みを一層深め言った

「……………伝言は受け取ったかい？」

「!?!?!?!?!」

驚愕する猫。

猫はソニアの方に勢いよく振り向く

ソニアは満面の笑みを浮かべていた……………浮かべていた
のだが……………

……………それを見た猫は背に冷たいものが流れる気が
した

それを満足そうに見た刻はさらに猫に話しかける

「お前のお父様おとうさまによるしくな？
おいたはするなよ」

そして刻は猫を下しソニアと再び帰途につく。

猫は茫然としたまま、しばらく動く事は無かった

ソニア

「あの猫ってどっち？」

黒

「一応リーゼロッテって言う設定。
だからどうした？って感じだから書かなかったけど」

刻

「そうか。所で作者。試験は良いのか？」

黒

「ちょっとやばい。見直してたら間違いが……。」

刻

「いや、そつちじゃなくて試験中なのにこんなことしてていいのか
って言うことだ。」

黒

「なぜかこういう時に限って筆が進むんだ。」

刻

「単位落としても知らんぞ？」

黒

「ははは……幾つかはもうあきらめています。ORN」

ソニア

「あゝ・・・あきらめなかったらきつといいことあるよっ」

刻

「ここに来てる時点であきらめが入っているような、ってかさつきこいつあきらめたって（それ以上言わない！！）」

ソニア

「気を取り直して感謝コーナー

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。」

刻

「バルディッシュ様、HAZUKI様、月光閃火様、緋水様、ソロモン様、えんヴいい様、3様、感想をありがとうございました。」

黒

「久々に次回予告。時間は一気に飛んで夏休みです。

題名は「キャンプに行こう」

037 模擬戦(前書き)

色々やっちゃった感がある

ある日のこと

「ん？模擬戦？」

刻がシグナムに聞く

「ああ、刻はかなりの実力者なのだろう？ぜひ私と勝負してくれないか？」

「まあいいが、何処でするつもりだ？下手なところでしたら被害が出るぞ？」

「刻なら良い場所を用意できるだろ？」

「お前も結構他力本願だな……………まあ確かにできるんだけどな。」

0
3
7

模
擬
戰

と言うわけで、俺は結界と空間拡張の魔法を使い、はやて家の庭を疑似的に広大な戦闘場所にした

「ほわ、庭がとんでもなく広くなったわー。」

「しかしなんというか」

「相変わらずすげえな・・・」

「刻君・・・ハイスペックすぎますよ。」

「そりゃあ刻ですから。」

はやてとザフィーラとヴィータが感嘆の声を上げ、シャマルが膝をついてうなだれる。

もはやシャマルの結界の専門家としてのプライドはずたずたである。

まあ、様々な分野・流派に手を出し、手当たり次第その知識を吸収

しそれらを融合・発展させている刻と比べる時点で色々と間違っ
ているのだが

結界関連の知識量だけでも、すでに刻の知識は群を抜いているのだ
なので先ほどのソニアの自慢の言葉は意外と的を得ていたのである

「やはりすごいな、では早速始めよう」
「了解」

そんな中、うずうずした様子でシグナムがせかすのでさっさと始め
ることになった

「ルールはどうする？」
「俺多分魔力切れは起こさないから、気絶か戦意喪失で終了にしよ。」
「分かった。では始めよう」

刻とシグナムはルールを確認し合い、お互いに距離を取る。

シグナムはレヴァンティンを抜き、刻は非殺傷設定を施した卍解状

態の『天鎖斬月』^{てんさざんげつ}を作りだし構える

「ヴォルケンリッター烈火の将シグナム、推して参る」

「【守護者】第十三柱、仁神刻……参る」

「では、はじめ！」

そしてザフィーラの合図と共に二人は駆けだした

Side はやて

「あれ？ソニア姐、刻兄とユニゾンせえへんのんか？」

「む、そういえば」

「そうですね。」

「忘れるなんてどじなやつだな。」

「ちがうよ」

はやての言葉に残りのヴォルケイズもソニアが刻とユニゾンしていないことに気づく。

ヴィータはそれを茶化すがソニアはそれを否定する

「ユニゾンなんかしたら卑怯じゃない。ユニゾンデバイスの与える恩恵ってその他のデバイスの比じゃないんだよ？魔法の補佐だけじゃ無くて、他の思考全般の補佐が出来るんだから。それにレヴァンティンはアームドデバイス、つまり近接戦闘型重視で魔法は二の次レベル。どっちにしる、刻にとつたら十分誤差の範囲内よ。」

「でもやっぱりシグナムの方ら有利なんちゃうん？」

「さっき言ったでしょ、誤差の範囲内だって。見てたら分かるわよ。」

S i d e E N D

「ハッ！」

シグナムが横に振りぬく

だがその瞬間シグナムの視界から刻が消えた

「クッ！」

ガキーン！

背後に寒気を覚えとつさに剣を背に回すシグナム、そこに刻の剣がぶつかった

刻はシグナムがさきほど振りぬいた瞬間、身をかがめながら半回転し、シグナムの横をすり抜けつつ切りつけようとしていたのだ

シグナムは反動を利用し距離を取ろうとするが、そのシグナムはバランスを崩しかけ、刻の方はそうではない。刻はあつという間に距離を詰めてしまう

ギイーン！

シグナムと刻はつばぜり合いの状態になる

だが、重心のしっかりした者としていない者、シグナムはだんだん押され始める

「アアアア！！」

シグナムは力任せにそれを押し上げ、距離を取った

ギンガンキンギャンキンキュン

そして二人は剣の打ち合い弾き合いの状態になる
だがだんだんとシグナムの表情がっらそうになって来た

シグナムは思いっきり剣を振りぬき、刻がガードすることでそのまま距離少しだけ開け、そしてカードリッジをロードしつつ再び振りかぶる。

レヴァンティンに炎がまとわりつき

「紫電一閃！」

シグナムはそれで刻を切りつけようとする

だが刻は剣を逆手に持ちその軌道をずらし、そのまま回り込みつつ横に振りぬこうとする。

シグナムは上に飛び、それを避けた。

だが刻はその行動を読み、そのまま剣の軌道をずらしシグナムの方へ向ける

シグナムは急いで飛行術式を起動しそのまま飛び上った

刻も術式を起動し後を追う

S i d e シグナム

く、腕がしびれる。なんて攻撃をするんだ

私は刻の実力を完全に見誤っていた。

私といい勝負が出来るほどの物を持っているのだと思っていたがそれは全く違っていた

刻は私よりもずっと洗練された動きをしている。剣の腕は確実に一流で、おそらく私よりずっと上だ。

しかもこんなに体格差があるのにあいつの攻撃はとんでもなく重い。刻の重心は常に安定していて、しかも私に最大限のダメージが行くよう無駄なく攻撃しているからだ。

しかも私は攻防のせいで動きがやや鈍り始めているのに、刻の動きは衰えるどころか、息切れ一つ……いや、疲労の色さえ全く見えない。

これは明らかに手加減をされているな……

ああ、素直に認めよう。あいつは私よりもずっと上手だ。今の私では、決して刻には勝てないだろう。

だが、素直にやられる訳にはいかない！

「飛竜一閃！」

カードリッジをさらにロードし、レヴァンティンを連結刃形態であるシュランゲフォルムに、そして飛竜一閃を発動する

せめて一撃でも食らわせて……

「な！」

だが刻は高速機動でそれをかわしつつ私のもとへ急接近してきた
く、刃の回収が間に合わない！

「降参する？」

そして為す術のない私の喉元に刻の剣先がきた

「ああ、私の負けだ。」

私は素直に負けを認めた

S i d e E N D

「刻兄って強いんやな。」

「ありがとうございます。」

「手も足もでないとは・・・私もまだまだだな。」

「そうでもないぞ?」

「謙虚にならなくていい、刻は手加減していただく。なのに私は負けたんだ。」

「そうなのか!?!」

「・・・・・・・・」

ヴィータが叫ぶ。

「ああ、見た限り刻は飛行魔法以外の魔法は使わなかったからな」

「それに、結局息切れ一つ見せなかった」

それにザフィーラとシグナムが答える

「マジかよ」

「とんでもないですね・・・」

ヴィータとシャルマルがため息をつく

「言ったでしょ、誤差の範囲内だって。」

そこにソニアが続ける

「刻とシグナムの剣術の洗練具合は全然違うの。それこそ天と地ぐらいいは。」

「おい、んな訳ねえだろ！！シグナムは歴戦の戦士なんだぞ！」

叫ぶヴィータに刻とソニアはため息をつく

「はぁ………あゝ、シグナムって斬鉄はできるか？」

「斬鉄とは？」

「剣で鉄を切ることだ」

「それぐらいならでき（言っとくが魔法なしでだぞ？普通の剣でだ）………普通できるわけ無いだろ。」

「それが出来て初めて達人だそれ以前は所詮は一人前レベル」
マスタークラス

そう言いながら刻は鉄を出し、それを剣で切裂く

それを見てソニアを除く全員が目を開く

「はじめて見たんだが………」

「と言うか、普通いねえだろそんなことできる奴」

「あのな、世の中にはスプーンで鉄切れる奴だっているんだぞ？」

「いやそれ、何処の星の戦闘民族や………」

刻は額を抑えながら言い、はやてがそれに突っ込む
だが刻はけだるそうに言う

「いや、普通に日本人のことだよ」

「なんやと!？」

「ちなみに此处、海鳴に高機動の戦闘をこなし、一時的には人の認知外の速度での行動さえすることが出来る剣術を、家伝で継承している人が2人いるから。ちなみにそいつらならA A Aの陸上魔導師ぐらいなら普通に倒せる。ひよつとしたらSにも勝てるかもしれない。言っとくがこの二人は達人クラスの剣士であって、魔法使いじゃないからな。そいつらは魔法を一切使えない。」

「マジなんか？」

「マジ。あ、そいつらも一応裏のやつらだから他言無用な？まあとにかく、こんなふうには表のやつらって何も知っちゃいないんだけど、ここ「地球」って実はさ、そんなふうには実は次元世界屈指の洗練された武術と魔術の宝庫なんだぞ？」

「え？魔術もなんですか？」

「ああ。武術とかと同じで流派みたいのが大量にできてて・・・まあそんなもろもろの事情で多分1万通りは軽く行くと思う。あ、その中に俺のぞいてお前らみたいなデバイスとか非殺傷設定とかを使う奴らは一人もいないから。そんなもん使ったらばればれだし、必要無いからな。」

「何なんだよこの世界・・・。」

「怒らしたらヤバすぎる奴らが大量に居る世界。まあ、安心しろ。何度も言うようだが俺達魔術師は基本自分が魔術師だって言うことを徹底的に秘匿するんだ。実際今までそれっぽい奴にあったことなんてないだろ？裏の武術家達も以下同文。」

「私ちよつとこの世界が怖くなってきました。」

「安心してえでシャマル・・・私もやから。」

「別にかまわないだろ？実際今まで何もなかったんだ。これからはきつとなにも無いさ。」

ここは魔術師に超能力者、武術家に超人執事、妖狐や妖怪などといった文字どおり人外が存在に暴走退魔師、そんなやたらめったら戦闘能力の高い者が集まる魔窟である。

ようこそ、この世界「地球」へ

マスター
達人クラス

素手でコンクリートの壁に穴を空ける、数十メートルの距離を跳躍する、人の目では捉えきれないほどのスピードで走る、息で人を吹き飛ばす、飛来する銃弾を弾き返すなど、非常識的なレベルの強さ

を持った武術家達のこと。

他にも数百メートル先の人の口の動きを読み取れるとか
もちろん彼等は魔法は一切使っていません。 純粹な身体能力です。

《史上最の弟子 ケイチ》より

香坂 しぐれ (こうさか しぐれ)

《史 最強の弟子 ケン 子》の登場人物。 達人の一人。

彼女の手にあるものはすべて強力な武器となり、鉄製のスプーンは
おろか木製のしゃもじにすら刀剣並みの切れ味を持たせることがで
きる。

037 模擬戦（後書き）

すみませんなんかこの話が急に思いついて、先に完成してしまいました。

あ、前回予告した分はまだ完成してませんがちゃんと投稿するんで

あと、バルディッシュ様、緋水様、ゆう様、僚様、えんヴいい様、ソラト様、ソロモン様、感想をありがとうございました。

038 キャンプへ行こう(前書き)

・・・うん、完璧駄文だな

八月にはいつてから数日後、刻とソニアは自宅でフェイトから送られてきたビデオメッセージを見ていた。

「フェイトちゃん、家族と仲良くやってるみたいだね。」

「ああ、見た限り健康そうだし、問題点はなさそうだな。」

「にしてもフェイトちゃん、囑託魔導師になるつもりなんだ。それに将来は執務官か。」

「世の中に立ちたいと思った、ねえ………だからって、その年齢でそこまで実行しようとするなよな。戦闘とかで死ぬ可能性だって十分あって、かなり危険なのに。」

まあ、それが出来るようにしてる………ってかむしろ才能があれば年端も行かない子供であろうとどんどん確保して、率先して戦場で戦わせようとする管理局にも問題があるだろうけどさ。」

「刻は？」

「だから、俺を引き合いに出すなって。俺の場合は特殊だ。それに危険性だって十二分に理解してる。」

「だがあいつ等は非殺傷設定を祭り上げてるせいとその危機感がかなり薄れてやがる。何が『非殺傷なので我々は安全である』だ、追い詰められた犯人がわざわざそんなこと律儀にする訳無いだろうが非殺傷なんて本当の戦闘では効率を下げる以外の何物でもないんだからさ。なんせ威力自体格段に下がるし、やっぱ、目に見えて傷つけることが一番手っ取り早いからな。相手はその傷でそれ以上動いてくることは無くなるだろうし、そのお陰で士気が混乱すればさらによしだ。」

『はあ？たとえ犯人達は追い詰められていても、効率を無視して我々を傷付けることの無い非殺傷を使って来ます？馬鹿にしてんのか？んなわけないだろ！』ってな。」

「実際犯人に直接やられて死んだってやついるし。まあ他に、ビルの崩壊に巻き込まれたとかいった理由でで亡くなったやつらもいたけどさ。」

「そうだね・・・まあ、確かに便利なのは認めるけど、やっぱり危ないよね非殺傷設定って。それに、そのせいであんな威力の攻撃を危険性を自覚しないでやるんだからさ。非殺傷設定を解除して同じことしたら、いったいどれだけの被害が出るんだか。」

「なのはとフェイトの戦闘を殺傷設定に置き換えたら、確実にお互いに何度も致命傷をおわせているよな・・・ってか数回は殺してるかも。なのはが最後にフェイトに食らわせた収束砲撃、あれがもし殺傷設定ならフェイトは即死してただろうな、全くガードできてなかったからほぼ確実だ。」

「そう考えると、ほんと怖いよね……………」

「ああ……………」

「……………ハア……………」

刻とソニアは、二人してため息をつく

ピリリリリリ

そんな時、刻の携帯が鳴った。

「ん？誰からだ？」

刻は携帯を見る

From 高町士郎

「？なにかあったのか？」

はいもしもし、・・・・・・・・え、そこは・・・・・・・・大丈夫ですけど・・・・・・・・え？
・・・・・・・・それは面白そうだな・・・・・・・・ああ、それじゃあ俺もぜひ
・・・・・・・・ええ、ソニアも・・・・・・・・はい、俺も楽しみにして
ます。」

ピ

刻は携帯を切った。

「なにかあったの刻？」

「いや、土郎さんから誘いの電話があつてね。俺も参加させてもらうことにしたんだ。
お前も来るだろ？」

「もちろん！・・・・・・で、何処に・・・・・・・・なにしに行くの？」

「東北地方の 県でクマ狩り。ちなみにメンバーは、俺とソニアと土郎さんと恭也の四人」

038 熊狩キヤンブに行こう

『熊狩り』と書いて『キヤンブ』と読む

．．．．． 県・秘境

刻たちはうつそうと木が茂った森を歩いていた

「それにしても、誘っていただきありがとうございます。」

「いや全く構わないよ。いつかお礼をしたいと思っていたんだ。」

「でも大丈夫だったんですか？ほら、此処の山の持ち主からの許可とか．．．．．」

「ああ、その心配は無いよ。むしろこここの地主とはしりあいだし、それに今回は彼から頼まれてたんだ。『熊の群れが最近村を荒らしまわっているから対峙してくれ』ってね。」

鍛えるついでにボランティアもできてまさに一石二鳥だろ？」

「本当ですね。」

ソニアの質問に土郎が答え、刻がそれに相槌を打つ
そこに恭也がある提案を持ちかけた

「そつだ、お父さん。どうせなら誰が一番狩れるか勝負しませんか
？」

「そつだな・・・私は良いが刻とソニアちゃんはや？」

「私は大丈夫ですよ？刻のデバイスたるもの、このぐらいのことは
出来ます。」

「つてことだ、俺ももちろん良いぞ。」

「それなら獲物を集める場所はこれから行く地主さんの屋敷にしよ
う。彼ならちゃんと処理してくれるだろうしね。」

「分かりました」

「俺もだ」

「腕が鳴る〜」

そんな一般人の感覚とはかけ離れたことを楽しそうに談笑しながら、
進んで行く四人の姿があつた。

数刻後

S i d e ? ? ?

俺達とはある犯罪集団、察サツから逃げてきて、こんな山奥までやって来た。

828

「兄貴、大丈夫なんですかいね？」

「安心しろ、ここは詳しい地図すら存在しないような秘境だ。そう簡単には奴らだって追ってはこれねえよ。」

「それにしても……此処は辺り一面木が生い茂って薄暗くなっている……なんか不気味っすね。」

「気をつけるよ、ここはクマが出るからな。」

「ちょ……マジっすか！！俺たち大丈夫なんですかい！？？」

「は、俺達にやあ銃チヤカがあるんだ。弾薬タムだって十分ある。恐れることなんてないさ。」

兄貴と呼ばれている人物（おそらく彼らのリーダーだろう）が子分たちを元気づける

「へへ・・・さすがは兄貴、ですが、やっぱり怖いもんですね。」

「あ、おいらも。」

「マジでなんか出てきそうだもんな・・・。」

「なさけないな、俺は大丈夫だぞ、怖い話や心霊スポットなんか大歓迎だ。」

「あ、おれもつす。」

「ほ、それは良かった」

兄貴は子分達の話している内容を聞き、そちらを向いてにやりと笑う

「実はこのあたりではある怖い話があるんだが、聞くか？」

「あ・・・俺は勘弁（ぜひ話して下さい兄貴）」

子分の一人が拒否しようとするが、他の仲間に抑えられてしまった

「よしだろう。昔このあたりにある四人一家がいた。父親・長男・長女・次男の四人だ。そしてそいつらは殺人一家で、日々人を殺しまわっていた。だがある時、その一家はついに捕まり、はりつけの刑にされてしまった。その間そいつらは命乞いなどせず、こう叫んでたらしい『殺し足りねえ・・・もつとやらせる』や『ちだ・・・もつと血を見せる』ほかに『キャハハハ』と笑っていたりもしたそうだ。」

「で、どうなったんですかい。まさかそこから世紀の脱走を果たし、その子孫がこのあたりにいるとか？」

「いや殺されたよ。」

「なんですかい、全く怖くないじゃないですか。」

子分がつまらなそうにするが兄貴はそれをいさめる

「いや、まだ続きがある。」

でだ、実はその現場はちょうどこの山の中らしくてな、それ以来出るようになつたらしんだ・・・その四人一家の悪霊がな。そして日夜獲物を探し回っているらしい。」

「マジですかい？」

「嘘にきまつてるだろ！」

兄貴は二人を制し、声を低くしながら話を続ける

「かもな……さてその四人の特徴なんだが……まず、父親と長男、この二人は剣を使い殺すのが好きだったそうだ。しかも二人ともよくお互いに殺した数を競い合っていたらしい。」

「はは……怖い二人ですね……でも、そんなんじゃ後二人の居場所は無かったんじゃねえんじやないですか？」

「いやいや、その二人よりもある意味後者の方が最悪だ……例えば長女だが、そいつは死体で遊ぶのが好きだったらしい。」

「ウワァ……」

「まじですか……」

「ああ……よく死体を持ちながら歌っていたらしいぞ。」

「……じゃあ……次男は……」

「血を浴びるのが好きだったらしい……しかも恐ろしく身体能力が高くこいつを捕まえるためだけで兵士が何十人も死んだそうだ。よく『血だ……血だ』とつぶやいていたらしい。」

生々しい言い方で兄貴は語り、子分達がそれにやや引く

「ははは・・・まあ所詮作り話だ、そんなやつ（おい、なんか聞こえないか？）」

一人が虚勢を張るが、そこに他の子分が声を上げる。
全員身をかがめ、息をひそめ、耳を澄ます。すると何かを引きずる音が聞こえて来た

「（あそこだ・・・）」

「（おいあいつ・・・何を引きずってるんだ？）」

「（俺の見間違いかな・・・大きめだが・・・あれ、人に見えるんだが・・・）」

「（お、おれもだ・・・）」

「（おい、誰かと合流したぞ）」

「（静かにしろ、よく聞こえない・・・）」

男達が耳をひそめると二人の会話が聞こえて来た。

「ああ、お父さん、そっちはどれくらい？」

「私はこれで七体だ。そっちは？」

「僕はまだ五体です。」

「「「「「!!!!??」」」」」

「（殺した数を競い合ってる!?)」

「（まさか本当だったのか!?)」

「（んな訳無いだろ、きつと偶然だ……とりあえずここから離れるぞ!）」

そうしてこそそそと移動する男達、だが

「（おい……鼻歌が聞こえないか?）」

「（ホントだ!?まさか……）」

「（んな訳無いだろ、きつとこのあたりに住んでるただの……」
「（」

男の一人が士気を高めようとするがその言葉は途中で止まってしまった

「（あいつ……熊を引きづってないか?あの細い腕の何処にあん

な力が……」

「（いやそれよりも、あの熊はどう見たって死体だ。つまり……）」

「（だからそんなことは……）」

ズドン！！

「（おいなんか飛んできたぞ）」

「（ああ、大きな熊（グシャ！）……え？なんだあいつ……子供？）」

「（ク……熊を、なにも使わず、自力でだけで殺した？……まさか）」

男達が恐怖する、そしてそんな彼らの耳にときれときれの少年の声
が聞こえて来た

「……ち……だ」

「（ひ……）」

「（あ……あ……）」

「（本当に……）」

皆が身震いする。

その時、少年が彼等に気づいたらしく、ふと彼らが隠れている茂みの方を向いた

「……ん？」

「（こ……こっちを向いたぞ！？）」

「（兄貴！）」

「（に……にげ、る……（にげろ～～～～！！）」

そして男達は全速力で駆けて行き、そのまま我先にと交番に自首をしに行った。

Side 刻

「どうしたんだあいつ等？真っ青になって逃げて行って？」

「返り血でぬれちゃってる刻が怖かったんじゃない？と言っかどうするのこれ？」

首をかしげる刻のもとにソニアが近づいて行く

「良いじゃん、どうせ錬金術でも使ってばっときれいにできるんだから・・・（パン、バシユン）・・・さ。」

刻は錬金術を発動し、服の汚れを消しさり、ついでに体に付いた血痕も分解して消し去った

「まあ、そうなんだけどね・・・それにしてももう八匹目って速いよ。私まだ四匹だよ。」

「十分いけると思っけどな……そういやさっき何歌ってたんだけ？」

「え？ああ、あれ？私のオリジナルの歌。《今日は熊鍋》」

「……そうか…….とりあえずコイツラ持って行くぜ。」

「うん。」

そして集合場所へ歩いて行く俺達、

その後も俺達は狩りを続け、

そして結果は、俺は 17頭

ソニアは 9頭

土郎は 14頭

恭也は 13頭というものだった。

ちなみに、狩った獲物は俺達と村人たち全員でおいしく頂きました。余ったものは干し肉にして、後日地主さんが毛皮と一緒に売ったそうです。

おまけ

『次のニュースです、
県の交番に数名からなる犯罪者の集団が自
首をしにきました。』

彼等は『助けてくれ、あいつらが来る、殺される』とわめいているらしく、警察は彼らが麻薬や覚せい剤などを使用していた可能性があるとして調査を進めています。』

「怖いな。うち、絶対麻薬なんかには出さんわ……」

「ええ、それが良いですよはやてちゃん。あんなのを使う必要なんてどこにもありませんからね。」

「まったく、何時にもそのようなものに手を出す輩は絶えぬのだな、精神が軟弱だ。」

狼状態のザフィーラにもたれながらニュースを見るはやての言葉に、シヤマルとシグナムがうなずく。

ドタドタドタ

そこにヴィータがやって来た

「はやて、冷蔵庫に遭ったアイス食べていいか？」

「またなの、ヴィータ？少し我慢したら？」

「精神が軟弱だぞ。」

「良いんだよ！私は育ちざかりなんだから！！」

シヤマルとシグナムはため息をつき、それにヴィータは怒る。

「一つだけやで？」

「おう、ありがとなはやて！..！」

はやてに許可をもらい、ヴィータはニコニコと台所に駆けて行った

038 キャンプへ行こう(後書き)

黒

「駄文だ〜prt1」

刻

「なんだprt1って!prt2があるのか!?!」

黒

「見れば分かる、今日中に投稿します。」

039 八神家御一行の旅行(前書き)

駄文 print。たぶん後で修正する。絶対する。
でも今はアイデアが思いつかないのでしない、できない。

039 八神家御一行の旅行

刻とソニアがはやての家へ転移してきた

「よーっす、はやて。遊びに来たぞ〜。」

「あ、刻兄にソニア姐！」

「よし」

刻とソニアに、はやてとヴィータとがあいさつする

「まったく、驚かさないでくれ」

どうやらシグナム達は突然の転移に警戒していたらしく剣から手を放しながらシグナムが言い、狼形態のザフィーラは座りなおしていた。ちなみにシャマルは「こんな嚴重な結界の中にも簡単に転移できるんですね・・・。」と疲れたように呟いていた

「悪かったなシグナム。後シャマル、俺がこの結界を張っている以上俺がこの結界の特性を一番よく知っているんだ。簡単にできて当たり前だろ？それよりソニア。」

「うん。はいはやて、おみやげだよ。」

「おみやげ？何処が行つとつたんか？」

ソニアははやくに紙袋を渡し、はやくはそれを確認する

「……………ってなんやこれ？」

そこには熊の干し肉と毛皮のコートが入っていた。

「だからお土産。」

「……………北海道でも行つとつたんか？」

「いや、ちよつと知り合いに誘われてな。県に熊狩りに行つてた」

「熊鍋おいしかったんだよ

ちなみにそれは私と刻が狩ったぶんの一部。ちなみに成果は私は9頭、刻は17頭でした！」

「……………先ず何処に突っ込んだらええ？」

はやて達は顔を引きつらせていた

「はあ……。にしてもええなあ、私も何処か行ってみたいわ。」

「……………そういえば、はやては海鳴からあまり出たこと無かったんだよね。」

はやての言葉にソニアが表情を曇らせる

「6年前に両親と大阪に行ったのが最後だな。
親が死んでからは遠出なんかできへんかったから……………」

「あ……………ごめん……………」

「ええんやソニア姐、今はみんなが居るから私は幸せなんよ?」

そう言うてはやては笑うが、その他は皆苦笑か苦渋の表情をしてしまふ。

そのとき

「そうだ！ヴォルケンズ、お前らとはやて、しばらく予定はあるか？」

刻が声を上げた

「？そうだな、今日図書館に本を返して新しいものを借りに行く以外はないな。」

代表してシグナムが答える
確認に皆を見渡すと全員うなずいた

「よし、じゃあ早速それを返しに行って来てくれ。んで新しいのは借りてこないように」

「刻兄、ひよつとしてどっか連れて行ってくれるん！？」

「ああ。その通りだ。」

「いいねえ、行こ行こ」

「でも刻君、大丈夫なんですか？はやてちゃんも車椅子だからちゃんとした所を取らないといけないし、それに今は夏休みだからそう言う場所ってすでにいっぱいじゃあないんですか？」

「はやてを落ち込ませること言っちなよシヤマル！……まあ、でもその通りだな。大丈夫なのか刻？」

ソニアがはしゃぐがそこに心配そうにシヤマルが言う。
ヴィータがそれをとがめるがやはりこちらも心配そうな表情をする

だが刻はにやりと笑った

「ま、まかしときなうて。」

039 八神家御一行の旅行

「ようこそ、^{イリア}楽園、リベル＝アークへ」

「ふわ〜すごいな〜。」

「なんて規模だ……。」

「この塔もすごく高いですね〜」

そう、刻ははやて達をライトヴァイスとビハインドの本拠地として機能させている秘密都市リベル・アークに連れて来たのだ。

此処リベル・アークは確かに本拠地ではあるのだが、その規模はとてつもなく大きい。本部だけではなく、研究機関や工場や居住区間に始まり、果樹園や農場や牧場（食料生産だけでなく研究場所としても兼ねてはいるが）、果てには教育機関や娯楽施設、ショッピングモールといったものさえあり、此処だけで冗談抜きで一生不自由なく生活できるほどの設備をそろえているのである。

中央区間のご真ん中にそびえたつ本部の屋上にある空中庭園に刻に連れられて転移してきたはやてやヴォルケンリッターズがその端から辺りを見渡し、目を丸くして感嘆の声を上げたのも致し方の無いことであろう

「これほどの物ができあがるまで、一体どれほどの年月がかかったのか……」

「え？此処、刻が3・4年ほど前に一から作ったんだよ？細かいのはのけて基礎だけなら半年で工事は終わったし。みんなで使い始めたのはそれからさらに半年後ぐらいだったから……まあそれぐらいしか年期ははいつていないんだよ？第一、今もどんどん施設の増築や改修してるし。」

「……まじで？」

ザフィーラ（今は人型）の呟きにソニアが答え、それにヴィータが冷や汗をかきながら信じられないような表情で聞く。

とそこに

「それがマジなのよね」

彼女達の後ろから声がかかった。

後ろを振り向くと、そこには耳を隠すように髪を金色の筒状の髪留めでまとめ流している16歳ぐらいの少女が居た。

刻がその少女に声をかける

「久しぶりだなミカ、二カ月ぶりぐらいか。何時来たんだ？」

「今さっきだね、久々にこっちの世界に来て、天空の灯りに行ってみたんだけど、誰もいなかったからこっちに来てみたんだ。」

「そっか、しばらくこっちにいるのか？」

「うん、そのつもりだよ。」

「なあ刻兄、どなたさんや？」

はやてが刻の袖をひっぱりつつ聞く

「ああ、こいつは俺の仕事仲間で名前はミカエル＝コープスだ」

「どうも〜守護者第九柱ミカエル＝コープスです。ミカってよんでね。」

「あ、どうも、うちは八神はやてゆいます。」

「我の名はシグナムだ」

「あたしはヴィータ」

「私はシャマルです」

「ザフィーラだ、お初にお目にかかる。」

「はやてちゃんにシグナムにヴィータにシャマルにザフィーラね。
分かったわ。」

はやて達はお互いにあいさすする。

「そう言えば刻、守護者とは一体どんな組織なのだ？」

ふとザフィーラが尋ねる

「ん〜まあ、簡単に言えばノーバディーってやつらを討伐するのを生業にしているやつらの集まりってところかな？」

「ふむ、なるほど・・・そしてその拠点も此処と言っわけか」「いや違うぞ？」

シグナムがうなずくがそれを刻が否定する

「別に俺らが集まる特定の場所ってのは無いし、拠点は一人一人、それぞれの持っている。ちなみに俺の守護者としての基地はさつきミカが言ってた『天空の灯り』ってやつだ。」

「此処ではないのか。」

「まさかそこも此処みたいな規模があるのか？」

「いや、そんなことはない」

ヴィータの質問に刻は腕を振り否定する

「規模はずっと小さいぞ？」

なんせ基本そこに行けるのは俺と俺が認めてる数人だけだからな。」

「でもまあ、防衛設備とかは此処よりずっとえげつないもの用意してるんだけどね。」

「ああ、勝手に侵入なんかしようものなら、そいつは……」

「アハハハハハ……」

ただ薄気味悪く笑う刻とソニアにミカ以外の皆がどん引きする

「ま、此処とは違って虚数空間内に作ったから、侵入以前にそもそもそう簡単には辿りつくことさえできないんだけどな」
「ちよつと待ってくれ!!」

シグナムが声を張り上げる

「なんだ？」

「いま、虚数空間と聞こえたのは私の気のせいかな？」

「いや、気のせいじゃないが？」

「なぜいけるのだ！あそこではどんな魔法も使えない筈だろ！！」

「『お前らの既知の魔法では』な、出来ないならその理由を探して、使える魔法を新しく作りゃあいだけの話だろうが。何処に問題点がある？」

「そんなのが出来るのはお前だけだろうが！！」

「え？私も行けるよ？」

「『『』は？』『』」

ヴィータの突っ込みに横から口を挟むミカ、確かに彼女は先ほど言っていた。

『『天空の灯り』に行ってみただけど誰もいなかった』と

『あれ？ひよつとして、私達の常識の方が間違ってるのか？』と真剣に悩み始めるヴォルケンリッターズの面々。

ちなみにはやては知らない単語があるせいで会話について行けず、首をかしている。

「気にしなくて大丈夫ですよみなさん。そんなことが出来るのは彼達守護者だけでしょうから。」

「……常識……私あたし(俺)の常識」とそんなことをヴォルケンズがつぶやいていた時、刻たちのもとに苦笑いしながら一人の青年がやってきて刻に一礼する

「お帰りなさいませ総師。」

「ただいまな、レオン。つてか、かしこまらなくていいぞ。」

ああ、こいつはレオン。ビハインドの社長をやってもらってる。」

「社長は刻兄やなかったん？」

「いえ、実質的最高責任者は総師……ああ、仁神刻のことなんです。子供だと舐められたりするってことでこっちがやるようになったんです。」

「ついでに言うと、俺は事務より研究してる方が気楽だし。まあ、結局やらされてるんだけどよ。」

「そうなんか……」

「そう言うことです、ちなみに刻はそれ以外のリーダーをしていた

り、俺達を鍛えたりしてくれてるんで、そついつの全部ひっくるめて俺達は総師ってよんでますね。

……所で総師、今回は基本まる一週間こちらにいるそつですね。

「

「ああ、その予定だが………まさか！」

逃げ出そうとする刻、だがレオンはそれよりも早く刻を捕まえる

「助かります総師、さあ行きましょう、真っ白いゲレンデが待ってますよ。」

「ま、待てレオン、俺ははやて達を案内（大丈夫ですよ、ミカ殿がしてくれるそつなんで。）なんだと!？」

刻はミカの方を見る。

ミカはにこにこしながら手を振っている

「そついうことです。だから安心して………一緒に地獄に行きましょう。」

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝアアア~~~~~………」

そして刻は引きずられて行った、ちなみにソニアも刻について行った

「では皆さん、改めてようこそ『リベル＝アーク』へ。」

そして啞然としつつ取り残されたはやて達にミカエルが言った

そしてその後一週間、はやて達はミカの案内の元、ショッピングを楽しんだり、刻とリベル＝アークに来ていた他の守護者の戦いを見たり、自然公園やサファリーパークなどで地球外の動植物と触れ合ったり、エリスのやっていた路上ライブを聞いたりとしっかりと満喫したのだった。

ちなみに刻参加は三日目以降、少々やつれて見えたとはやては言っていた

ついでにシグナムとヴィータは訓練施設にいたフリズ・アストレア（守護者第四柱、剣術なら守護者一）とミカ（戦闘スタイルは必殺の一撃をあらゆる手段を使い食らわせようとする）による模擬戦
身体能力のみ、二割本気状態、それぞれの獲物はアストは愛刀『ヴァーサルソード』でミカは大槌（Dグレのまんま『大槌小槌』）
を見て技を磨く事を心に決め、シャマルは大規模図書館『知識の泉』で発見した資料に驚愕し自分の補助魔導師としての知識を深めたことを追記しておく。

設定集(？)

楽園・リベル^{イデア}パーク

第一地区 中心地区(本部とか大規模図書館『知識の泉』(無限書庫並みの蔵書量。ちなみのこっちはちゃんと整理されている)とかがある)

第二地区 研究施設集合地区

第三地区 商会関連集合地区(簡単に言えば一区画ほぼ丸ごとシヨッピングモール)

第四地区 住宅街1(テーマ都会・・・ってかマンション街)

第五地区 住宅街2

第六地区 住宅街3(テーマ自然との共存・・・後は想像にお任せします)

第七地区 娯楽関連集合地区(遊園地・温泉など)

第八地区 訓練施設関連地区

第九地区 自然公園区画

第十地区 牧畜関連実験地区

第十一地区 農業関連実験地区

第十二地区 隔離型実験区間LEVEL1~3

第十三地区 隔離型実験地区LEVEL4

第十四地区 隔離型実験地区LEVEL5

第十五地区 工場区画A

第十六地区 主動力発生区画(大規模核融合式魔導炉設置区画)

第十七地区 空港

第十八地区 工場区画B

第十九地区 実験施設集合地区

まあ、こんな感じ？ちなみにそれぞれの区画は順番道理に並んでいるわけでもないし大きさもめちゃくちゃです。

ちなみに、^{アイデア}楽園のアイデアは「理想・究極的な目標」の英訳“idea”（アイデア）から取ってきています。ついでに“idea”（アイデア）で「着想・知識・観念・思想」ってのもある。

ミカエルⅡコープス

守護者第九柱で二つ名は『守護天使』

女性

一人称は私で、水色の髪と瞳をしている。
耳を隠すように髪を金色の筒状の髪を通すタイプの髪留めでまとめ流している。性格は高町桃子さん似（天然気味、笑顔が絶えない、直感が結構鋭い、優しい、けど良い意味でも悪い意味でも面白いことが好き）

外見年齢は16歳程度でロリ巨乳。だが実年齢は3000をゆうに

越えてるらしい。

そんな彼女に年齢とか若作りとかいった内容を言っと一生忘れられない恐怖が待っているので要注意。

結構派手好きな彼女の戦闘で使うのは大剣や槌や大魔法など威力重視の物

なので戦闘スタイルは必然的に一撃必殺がメイン。

そうでなくても威力重視の攻撃が多いのだが……………

あらゆる手段を使って 一直線だったり、フェイントを混ぜたり、カウンターだったりどうにかして相手を拘束したりなど 必殺の一撃を当てようとする

エリス＝クロスロード

守護者第八柱で二つ名は『バラノイドメロデー叫喚旋律』

黒髪黒眼の女性で二つ名の通り「音」を使って戦う。

結構活発な性格で趣味は作詞作曲

主な戦闘方法は音や音楽の使用、音波など使って相手を切り刻んだり脳を揺さぶったり同士打ちさせたり、音楽を使った魔法（この曲を聞いた奴全員に攻撃判定とか、音楽によって天災発生とか・・・まあ簡単に言うと英雄伝説？で主人公達が使う音楽魔法の超強化ver）^{エトセトラ}やつたりetc.

武器はその性質上、楽器（特に弦楽器）を使うことが多い。

ちなみに音痴と言っわけではなく、かなりの（良い意味で）音楽の才能を持っている。

ただこんな戦闘方法のため、旋律を聞き（敵が）阿鼻叫喚状態になるからこんな二つ名になった。

862

フリズIIアストレア

守護者第四柱で二つ名は『亡都の蒼剣士』

男性

現守護者唯一の翼人で、細身で長身、腰ほどまである青みがかった

白銀の長髪。瞳は真紅眼で翼の色は灰色がかった白
よく左腰に黒塗りの鞘に納められた白銀の剣『ヴァーサルソード』
を下げている。

一人称は私で趣味は剣集め。剣の魅力を丸一日語り続けられるらしい。いや、語り続けた。悪乗りして質問した刻に丸三日。ただしノーバディーが現れたので途中で中断、つまりもつと語れる。

そんな彼の基地は技物や妖刀や神刀などが所かしこにてんこ盛り、それぞれが妙な威圧感を放っていて慣れないと大変心臓に悪い。

そんな彼の戦闘方法はもちろん剣を使った戦術。

魔法は基本補助程度しか使わず、攻撃に使うとしてもほとんど剣に付加させるだけ。

だがこれで遠近両方をこなしている。そして剣術のレベルは守護者随一。

左腰の愛剣『ヴァーサルソード』（伝勇伝でフェリスが使ってたやつとほぼ一緒。ただし装飾無し）は守護者になった際にカルマからプレゼントされた。

他の守護者の剣術の師匠をしていたりもする。

039 八神家御一行の旅行（後書き）

黒

「一応これ、ヴォルケンス強化フラグです」

刻

「下手な伏線だな。」

黒

「うるさいな、某小説みたいなの伏線だらけのものなんてとうてい俺には書けません！」

ソニア

「努力したら？」

黒

「人には向き不向きがあるんだよ……前回の文だって、
概要思いついた時は「お！面白いのが書けそう」って思ったけど結局あんなのになつたし。今回のだってうまく文が書けなくて、かなり流れを省いたし……」

刻

「あ~~~~~」

ソニア

「……………ファイト！」

黒

「はいはい……………さて感謝コーナー……………はゲストとして

「この二人に」

エリス

「では、この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！」

ミカ

「バルディッシュ様、緋水様、ソロモン様感想をありがとうございます
ました。」

連続投稿の間に空いた三十分程の間に感想を書いてくれたバルディ
ッシュ様にはもう一度感謝を！ありがと〜〜〜！」

黒

「後一話か二話でA's本編に入ります。」

題名が決まってるないんでk y o様式次回予告を」

「……………さて、必要な歯車は揃った」

「ここからはお前たちの仕事だヴォルケンス」

040 賽は投げられた(前書き)

40話目!

実は038の時点ですでに50万pvを突破してました

なんかやりたいけどネタ思いつかないんでそのまま

040 賽は投げられた

11月のある日

・・・・・・・・さて、必要な歯車は揃った。
メインプラン異常発生の際のサイドプランも二つほど用意したし・・
・・・・・・・・よし、大丈夫だろ。

それじゃあ、いよいよ歯車を回し始めますか。

ブルルルル

俺ははやてに電話をかける。

「あ、はやてか。・・・・・・・・ああ、俺だ・・・・・・・・いや俺俺詐欺じやないから・・・・・・・・いや、名前を言ってみろって・・・・・・・・つく、俺の名前は仁神刻・・・・・・・・つかお前出た時最初に「あ、刻兄」って言っただろうが。・・・・・・・・ああちよつとな。今度の日曜、お前とヴォルケンス全員分の予定空いてるか？・・・・・・・・そうか、じゃあそのまま予定をあげてくれ
・・・・・・・・ああ、説明したいことがあるんだ、・・・・・・・・あほか！そんな内容じゃねえよ！！・・・・・・・・いや大丈夫そんなお前が心配することじゃないから。どうにかなるさ・・・・・・・・そう

だ、だから安心してろ。じゃあまたな。」

さてと、これで賽は投げられた。投げられた賽はどつなろつと必ず何らかの目を刻むはたして、どんな結果になるかな？

040 賽は投げられた
く A S 本編編開始に向けてく

……日曜日、八神家の居間

「それで、私との結婚の（だからその話じゃねえ！！）なんや、私は何時でもOKやで。」

いや、むしろ何時でもウエルカムや！具体的に言っと（ズビシ）あいた〜！暴力反対や刻兄〜！！」

「お前この小説R18にする気か（刻、……メタネタやめた方がいいよ？）……すまん……まあとにかくその年齢で言うな、そう言うことはもっと成長してから言え。」

「……ちえ。」

「舌打ちするな！！俺はそんなふうな子に育てたつもりはないぞ！」

「完全にお父さんじみているね、刻。」

グサー！ソニアの言葉が刻に深く突き刺さった。

「（……………え？俺って9歳でもう子持ちのお父さん状態？ヤンパパってレベルじゃねえぞ？）アハハハハ……………」

刻は暗鬱な空気をまといながら虚ろな笑い声を上げる。

「ハア……………とりあえず本題に入るぞ……………」

「あ、ああ……………で、話とは一体何なのだ？」

無理やり話題を変える刻にシグナムが聞く

「俺がはやてに身体を強化する魔法をかけてるのは前説明したよな？」

「ええ、そのお陰ではやてちゃんはこんなに元気にいられるん

「ですよ。」

「そうだったんだけどな……。」

シヤマルの返事に刻はあいまいな答え方をし、それに感付いたザフイーラが質問する

「何か問題があったのか？」

「ああ……このままじゃあ、はやてが死ぬ。」

「「「「なんだと（ですって（でだよ（！！」「」「」「……どう言っことや……。」

叫ぶヴォルケンズ、はやても混乱しつつ聞く

「まず説明すると……はやて、お前が立って歩けない原因は闇の書のせいだ。」

「……え？」

はやてが疑問の声を上げる

「ヴォルケンリッターズに質問。これ、ホントは言いたくは無いいんだけどな。お前達は普通の人間じゃ無くて、闇の書の守護プログラムとして生み出された魔法生命体だ。ここまでは良いな？」

刻はヴォルケンズを見渡しながら質問し、ヴォルケンズはそれに頷く

「ならその闇の書の活動及びお前達を維持するために使われる魔力は、いったい何処から供給されていると思う？」

「そりゃあ……まさか!!」

「我々を維持しているのは主から供給される魔力」

「……と言うことは」

「そう言うことなのか？」

目を見開くヴォルケンズ。それに刻とソニアは頷く

「そう、闇の書が絶えずはやての肉体と魔力に負担を与え、蝕んできた。そのせいではやては歩けなくなっていたの。しかも、今は封印が解かれたことにより闇の書が活性化して、さらにあなた達、守護騎士ヴォルケンリッターが表に現れたことで魔力の消耗が増加。それにも拘らず魔力を蒐集していなかったことからはやての状態はどんどん悪くなっていったってわけ。」

「多分今俺がはやてにかけてる魔法を解いたらはやてはかなり苦しむことになる。しかも、今俺がやってるのはあくまでそれを感じな

くさせると言った応急処置レベル。だからこのままだと、はやてはいずれ死んでしまう・・・多分来年の一月の終わりぐらいがタイムリミットかな。」

「ならば急いで蒐集をしなくては!!！」

「待ちいやシグナム、そんなことしたら他の人に迷惑がかかってしまつやる!!！」

「でもはやてが（落ち着ヴィータ、まだ続きがある）」

はやてと刻はヴォルケンスをなだめる

「さて、確かにシグナムが言った手段、つまり蒐集をするしかはやてを助ける方法はない。」

「そうなん?」

「ああ。それはヴォルケンリッターズが一番詳しいだろ?」

「そうだ、ですから主、われわれが蒐集する（だから待ってって）なせ止める刻!!！」

「落ちつけシグナム、なにか原因があるのだろ刻?」

掴みかかろうとするシグナムをザフィーラが止める。

ザフィーラは一見落ち着いているように見えるが、しかし言葉にやや焦りを感じる。やはり主のことが心配なのだ。

隣でヴィータも握りこぶしをしてじっと耐えているし、シャマルも暴れそうな気配は無いものの、顔に恐怖の色が鮮明に表われている。

「ああ、でもその前にヴォルケンリッターズにもう二つ質問だ。」

「……なんだ？」

「まず一つ目、お前達のはやてのもとに来る前につかえていた主人たちのことだ。そいつらは蒐集を完了した後どうなった？」

「決まっているだろ、彼等は巨大な力を……」

言いかけて口をつくむシグナム。顔には困惑の色が表れている。辺りを見渡すが他の三人も同じである。

「……やっぱり記憶が無かったんだね……」

ソニアがつぶやく

「一体どういふことなの？」

「いや、こいつの理由は俺達にもはっきりとは分からない。一応納得のいく説明はいくつか用意できるが、結局は全部、全く根拠の無い俺の想像による憶測の域だからな。」

「さてもうひとつだ、お前達は『夜天の書』と言うものを聞いたことがあるか？」

「いや・・・無いな。お前達は？」

「私も」

「私もだ」

「我もだな」

シグナムが答え、他のメンバーに聞くが全員首を横に振る。

だがそこに

「え？私はあるで？夜天って部分だけやけど」

はやての言葉に一同の視線がはやてに向く

「何処で聞いたのだ？ 主ははやて。」

ザフィーラが代表して質問するが、はやては首をかしげながら答えた

「何処って……それ言ったのはザフィーラ達じゃん？」

『はい？』と惚けるヴォルケンス

「ほら、シグナム達が初めて私と出会ったとき『夜天の主のもとに集いし雲ヴォルケンリッター』ってゆうとったじゃん？」

ヴォルケンスはしばらく考え、『あれ？』と首をひねる

「言われてみれば・・・確かに言ったな。」

「我々の決まり文句だな・・・気付かなかったが言われてみれば
そうだ・・・まあどちらにしる大した問題ではないか」

「あのなあ・・・気付けよ・・・大問題だろうが・・・」

ザフィーラとシグナムの眩きに額を抑えながら刻がつぶやく

「む・・・何処がだ？」

「もう一度一語一語意味をかみしめながら言ってみる。」

「?」『我等は夜天の主のもとに集いし雲ヴォルケンリッター』・・・
・・・何処が変か？」

「あれ？　そう言えばうち何で闇じゃなくて夜天の主なんや？」

ヴォルケンははやての眩きに一瞬黙り込み

「「「「・・・あああ！」「」「」

めいっばい叫んだ

あまりのうるささにはやてと刻とソニアは耳をふさぐ

「とりあえずそういうこと。で、その疑問の答えは『夜天の書』と『闇の書』は同一の物・・・いや、各地の偉大な魔導師の魔法を蒐集し研究するための資料書だった筈の『夜天の書』を歴代の所有者がプログラムを下手にいじくりまわし、その結果旅をする機能が転生機能に、復元機能が無限再生機能へと変化、しかも暴走して主を取り込みただの破壊を繰り返すという最悪の改悪物となってしまった魔法蒐集装置。これが『闇の書』だからだ。俺の予想だが、多分ヴォルケンスの記憶がおかしいのもそのせいだろ。」

「まさか・・・。」

「言っとくがこれは事実だ。・・・これを見て見る。管理局をハッキングして手に入れたものだ。」

刻は彼女らの前にモニターを展開して、歴代の闇の書の事件の様々なデータ資料を見せる

「ちょっと待って・・・それじゃあ・・・。」

「ああ、ただ普通に蒐集したんじゃ、はやては闇の書に取り込まれて闇の書は暴走を開始、その世界は崩壊しそしてはやても死亡することになる。」

「つまり……………はやては……………」

ヴィータが泣きそうになる。

他の面々も唇をかんんだり顔を真つ青にしたりしている。

「な、なら後数カ月、みんなで笑って過ごそうや。私は大丈夫やら、だからみんな泣かんといてな。」

はやてが必死に笑顔を作りながら言う

「何、勝手に終わりみたいなこと言ってんだ……………」

だがそこに刻が声をかける、ソニアも少しだけ苦笑している

「え……………」

「俺は助かる方法が全く無いとは一言も言っていないぞ。」

「主を助ける方法があるのか!？」
「てめえ嘘ついてたらぶつ殺すぞ!」

シグナムとヴィータが刻につかみかかる。

「ちょ……くるし……説明するから、離せって!」

シグナムとヴィータは刻を放す。
だが目を爛爛と輝かせている

「ゴホ、ゴホ……えっと、闇の書はその主以外の外部からの操作を受け付けない、またそれでも無理にしようとすれば持ち主を飲み込み暴走。ならば、主なら良いかと言えば完成以前にアクセスすることは主でも不可能。つまり闇の書の完成以前の修正は一見不可能である。

というわけで思いついた一つ目の方法、蒐集を行い、完成と同時にはやては取り込まれるが、それと同時にはやての管理者としての権限がある程度使えるようになる。俺の予想だが、はやての精神はかなり強いからおそらく書の圧力にそう簡単には屈しないだろう。だからそれを使って闇の書の闇の部分を持ち離してもらい、それを俺達で破壊する。防御プログラムが無い以上、残った部分のバグはこちらでも修正できるだろうしな。」

「なるほど、ならばそれ(だがここで問題点がでた)なに?」

シグナムがその意見を採用しようとするが、刻がそれを止める

「切り離しに成功したとして、それで本当に完全に破壊できるかという疑問が残浮かび上がったんだよ。万が一防衛プログラムの部分だけが転生されたらちよつとヤバいんだよね。」

実際この資料にかいてあるけど、アルカンシエルを受けても闇の書は残っていたの。それにバグの方だつてここに書かれてるのはあくまで今分かつている部分だけであつて、他にもあるかもしれないから。」

「例えばだが、バグによつて防御プログラムは複数の核を持つ、又は持たなくても活動できるようになっているという可能性すらある」

「だけど、それならばやてはどうなるんだよ！」

ヴィータが叫ぶ

「だから落ち着けて。でだ、行き詰まっていたある時俺は『外側からがだめなら内側からやればいいんじゃないか？』とふとおもいついた。で、それを実行できるよう今まで研究してたつてわけだ。」

「えつと・・・つまりどついでつことや？」

「調べた結果、どうやら『夜天の書』は蒐集した魔法を再現するために、その魔法の執行者の中で疑似的に再現するシステムが備わっているらしい。そして闇の書もこの部分は、例えばバグで変化していても根本的な所は変わっていないだろう。だから俺はそれを利用することにした。」

「つまりね・・・刻は自分を蒐集させるときに、ただの魔力じゃなくて自分の分身をプログラミングした魔力を流し込むの。それは闇の書の中で刻の分身として形作られるから、それにバグを処理してもらおうってわけ。」

「「「「「ああ!」「」「」「」

はやてとヴォルケンリッターズが叫ぶ

「そ、ってわけではやて、闇の書かして。」

「了解や!」

刻ははやてから闇の書を受け取る

「さてそれじゃ・・・グッ・・・」

「刻……大丈夫……？」

「ああ……よし、これで大丈夫だ。」

はやて達が見守る中、刻は自らの（プログラムした）魔力を蒐集させる。

その際の激痛でややしかめっつらをした刻をソニアが心配そうにのぞきこむが、刻はソニアを安心させ、そして無事蒐集は完了した。

刻は闇の書をシャマルに渡す

「とうるか刻、お前の魔力いったいどれだけだよ……」

「闇の書の項……三百ページ以上埋まったんですけど……」

ヴィータはあきたような眼差しを刻に向け、

シャマルはページを確認しながらつぶやく

それにザフィーラとシグナムも追従する

「それに刻、なぜお前は平気そうな顔をしているのだ？」

「ふつうは意識が混沌としたり……下手をすると死んでしまうの

だが……。」

「俺の全魔力のせいぜい1パーセントしか使っていないからだ。まだ十二分に余力が残っているからだよ。」

慣れてきたとはいえ、相変わらず自分達の常識をことごとく足蹴りにする刻にシグナムは軽い頭痛に額を押さえ、シヤマルは首を振り、ヴィータとザフィーラはため息をつく

「……ホント、どれだけ膨大な魔力持ってたんだよ。」

「気にしない方向で。さて、ここからはお前たちの仕事だヴォルケンズ。蒐集して660ページぐらいまで完成させてくれ。ただし魔法生物だけからな。はやてもそれなら良いだろ？」

「……それで迷惑がかかる人はおらのやな？」

「ああ、そいつらの愛護とか保護団体なんて聞いた事ねえし、大丈夫だろ。」

たとえ文句言ってきたって、十分対応できる自身がある。」

「……分かったわ。」

しばらく思索した後はやては頷いた

「よし、んじゃあはやての許可も出たつてことで。ヴォルケンス、よろしく頼むぞ？俺も一応手伝うしな。」

「ああ、もちろんだ。何から何まですまないな。」

「気にすんな。俺ははやてを助けたいからしてるだけで。別に恩を売るためにしてるんじゃない。」

「ほんとひねくれたやつだなお前、素直に受け取ればいいのによ」「我からも礼を言わせてもらおう。」

「ありがとうね刻君。」

「………そうか。」

ヴォルケンス達に御礼を言われやや慚然としながら答える刻

そしてこの日より、ヴォルケンスと刻による蒐集が始まった

裏設定

1・10月にヴォルケンズが異常に気づいて蒐集を開始しなかったのは、刻がはやてに強化魔法をかけていたため倒れて病院に運ばれることも無く、結果としてはやての異常に気づかなかったから。

2・マテリアル達は夜天の書の『蒐集した魔法を再現するために、その魔法の執行者を中で疑似的に再現するシステム』がバグって生まれたもの。姿がおかしくなっていたのもそのせい。

3・猫姉妹は刻のことをグレアムに伝え、刻の情報を得ようと刻の監視も始めるが、成果は全くといって良いほど無し。

4・刻があげた本『背を伸ばすための100の知識』はクロノの愛読本になっていた

5・なのはとヴォルケンズが会わないよう刻は巧みに彼女らの行動を制御していた。(なのはがはやての家に来た時、刻ははやてとヴォルケンズ連れてリベル・アークに行っていたりとか。)はやてにも『顔を合わせた時驚かせてやろう』とっておいて、電話とかでヴォルケンズ存在を教えないようにしておいた。

040 賽は投げられた(後書き)

黒

「さあ、いよいよ此処まで来たぞ！」

刻

「ああ、ついに此処まで来た」

ソニア

「にしても、よくこんな方法思いついたね」

刻

「裏設定で書いてたマテリアル達のことから思いついたんだよな。」

黒

「いや、他の作品がこの方法とらないか結構びくびくしてました。何せこれがA・Sの流れで以外と重要な位置しめるんで修正がきかないんです。」

刻

「そんなこと言っているのか？」

黒

「ある程度カンの良い人なら分かるでしょ？
さて、では感謝コーナー！」

ソニア

「この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！」

刻

「バルディッシュ様、ルファイト様、ソロモン様、感想をありがとうございました。」

黒

「次回の話はもう決まってるんですが……すみません、うまく予告できません。早ければ明日には投稿できます。遅くても三日以内には……。」

041 『A』 S本編編開始・・・開始 (前書き)

ついにA, S本編編開始です!!

041 『A's本編編……開始』

……12月1日 夜

アースラの一室

「もうすぐ地球か」

「ふふ、フェイトったらさっきからそればかりね。」

「うん、なのはとやっと会えるんだから。」

フェイトは満面の笑みで言うが、アリシアはニヤニヤ笑いながら言う

「ほんとにそれだけ？」

「え……な……なに？」

フェイトはやや引きながら尋ねる

「刻って子。」

「ふえ！？」

「しってるんだよ、手紙書くとき何度も何度も読み返してたでしょ？それこそなのはちゃんに送る手紙の時以上に」

「え……えつと……」

「この前なんか写真を」

「それ以上言わないで〜！」

「ほんと、フェイトったらあの子がお気に入りなのね。」

「まあ、あつちにいた時なんだかんだいって一番世話を焼いてくれた奴だったからね。」

それを少し離れた所から見つめながらプレシアがつぶやき、それにアルフが答える

「それにしても地球の魔導師、ね」

「あいつは自分のことを魔術師って言うてたけどね。」

「そうね、ぜひ話をしてみないと。」

「ユニゾンデバイス………未だ完成の目処が立っていない失われたはずの技術だったっけ。あいつ、軽く言うてたからただのマイナーなデバイスなんだとしか思ってたよ。」

「まあ………ある意味マイナーかもね………。とにかく会うのが楽しみだわ。」

「………一応もう一度言っとくけど、会うときは他のみんなにばれないよう細心の注意をしてくれよ？ あいつが魔法を使えるってことは私達一家以外は絶対に秘密なんだから。本当はあんたとアリシアにだって秘密だったはずなんだからね。」

「分かっているわよ。」

「それにしても専攻でもないのに何でそんなにあいつと会いたいたい？」

「実はそれだけじゃないのよね。」

「え？」

予想外の返答にアルフは疑問の声を上げる

「ほら、あの黒ローブの子。」

「あいつが何か？」

「あのこがあそこに現れたってことは、少なくともあの子の活動範囲に地球が含まれてるってことだから、ひょっとしたらその子のことなにか知ってるんじゃないかと思ってね。」

あの子には返しきれないほどの恩があるし、私達のことをちゃんと報告したいの。」

「ああ……なるほどね……」

アルフが納得と言ったようにうなづいた

そしてそれをフェイトとワイワイ言いながら聞いていたアリシアは

「（お兄ちゃんがその張本人だつて分かったら母さんたちどんな顔をするのかな？

．．．．．それにしてもお兄ちゃんが言つてたこと、まだ何の問題も上がつて来てないんだよね。

お兄ちゃんの杞憂だったのか、まだ起こつて無かつたのか、それとも．．．．．気付いて無いだけで、もう始まっているのかな？」

と考えていた

・・・ほぼ同時刻、アースラの一室

「クロノにリンディさん、どうしたんですか？」

難しそうな顔をするリンディとクロノにユーノが話しかける

「ああ、実はついさっき本局所属の武装局員と『ネフィリム』の武装魔導師の模擬戦があったらしいの。これはその内容が書かれているんだけど。」

「『ネフィリム』？」

ユーノはリンディが言った聞きなれない言葉について聞く

「ああ、一・二年ほど前に三提督が作った部隊のことだ。なんでも

魔導師ランク……と言っより魔力資質の低い人たちの救済策として、試験的に作ったらしい。まあその後まったく音沙汰が無いからどうなったのかは知らなかったけど……。」

「え？ そんなのがあったの？

結構重要そうなんだけど、聞いたことも無かった。」

ユーノの呟きにクロノが苦笑いする

「まあ、それはしかたないよ。さっき言ったように、魔力資質の低い人たちの救済策として、試験的に作っただものだからね。つまりそこに集まるのは必然的に魔力資質が低かったり、それ以外にも光るものが無い局員ばかりだったから誰も気になんかしなかったんだ。」

実際そこは『落ちこぼれ部隊』と呼ばれていくらいだしね。」

「そうなんだ。でもそれがいい。」

「独占したのよ。」

「え？」

リンディの呟きにユーノが疑問顔を向け、そこにクロノが詳しく話す

「その部隊が勝ちをほぼ独占したんだ。しかもどいつも相手よりもランクが下だったのに。負けた方も高ランクを相手にかなりいい勝負をしてたらしい。」

「しかも極め付きがこの人。AAAランクの本局魔導師に勝っちゃったのよ、4ランクも違う、Cランクなのに。」

「まあ、このAAAの魔導師は才能にかまけて訓練をおろそかにしてるので有名だったんだけど、それにしてもこの結果は圧倒的すぎる。」

「すごいですね……………本局の第一線に行けるんじゃないんですか？」

「実際本局に引き抜こうとしたらしいわ、断られたらしいけど。」

「え……………本局に引き抜き？」

「三提督が作ったからには『ネフィリム』は海か空に所属する部隊だったと思っていたユーノはこの言葉に疑問を持つ」

「『ネフィリム』の所属は地上なのよ。」

「三提督が作ったんですよね？」

「ええ、でも、さっき言ったみたいなたちの部隊を作るのを本局は反対したのよ。『そんな落ちこぼれどもの部隊を作ってどうする』って。だから地上に作るようになったのよ。」

「だがふたを開けてみたらこれか。
レジアス少将はさぞ大喜びしてただろうな。」

「最近、『地上の英雄』と呼ばれ始めて来た人ですね。」

「ええ、とにかく私たちの訓練……これから絶対厳しくなるわね。」

「ああ、相手よりも高ランクだったのに此処までひどくやられたんだ。絶対僕達の訓練にも影響が出る。覚悟しといたほうがいいな……。」

「あ……その……頑張ってください」

暗鬱な空気を背負うクロノとリンディに引きつりながら励ますユーノだった

・・・ほぼ同時刻 時空間の狭間

なにも無い空間にカルマに呼び出された【守護者】一同が全員揃っていた

「何だと！」

「第六【世界】が消滅!？」

「ほんとうなの!?!」

「ああ。」

「ばかな! ソドムはどうなったんだ!

あいつは俺達の上位三本の指に確実に入る実力者だぞ!」

グレンが叫ぶが、カルマは首を横に振るだけだった

「分からない、あいつの反応は完全に消えている。」

「ち、あいつは自分で抱え込んで自分だけで解決したがるやつだったからな……」

「まったく、あいつは協調性が無かったからな……」

「だがしかし、われわれに助けを求めなかったとうわ、悲しいな。」

「本当です。いくらなんでも助けを求めてくれたなら急いで駆けつけたものを。」

さかき かたね
榊瀉祢、

メリエル、アドリアン、ハウルがそれぞれ文句を言う

「くくく、確かにそうだな。だが俺としては奴を追い詰めるほどのノーバディー。」

そいつに興味がある。ああ、ぜひ戦いたい！」

「相変わらずだなお前は。だがカルマ、いくらなんでも劣勢になってたんなら俺達に連絡をよこしてもよかったんじゃないか？ 実際俺の前任者の時は他の守護者をお前が勝手に呼んでたそうじゃないか。まあ結局、予想外の不意打ちで、そいつは死んだそうだが。」

ソルに呆れながら刻がカルマに聞く。

カルマは重々しく一度頷いた

「ああ、あの時は予想以上の多さで、しかも倒し終わった瞬間次の群れがやってきたって連戦だったからな。だが今回は違う。……
……とんでもなく短時間だったんだ。」

「……なに？」

「どう言ってる？」

「知ってると思うが、俺はお前達の世界をバラつきはあるがある

程度の周期で異常が無いか見て回っているんだが……
・約二・三週間。たったそれだけの期間目を放している間に【第
六】世界は消えていたんだ。」

「何でだ？」

「おそろくだがやつ……マスターマインドが出たんだと思う。」

「ち……やつか……」

リオンが苦渋の表情を取る

「普通なら完全に消滅には一カ月は軽くかかるはずだから……
「つまり、それほど強大な力を持っているのか？」」

刻とメリエルの質問に会ったことのある他の守護者とカルマは頷く。

「ああ、初めて会った……いや、再会した時は恐怖の一言だった」

「再開？」

「あいつは元最高神なんだよ。」

言い回しに疑問を持ち、尋ねる刻にリオンが言う

「そいつは俺の世界を統べる神だったやつなんだ。」

「はあ!?!」

「ちよつと待ってくれ。」

「いったいどう言うこと?」

「つまり、人間の業ってやつさ。」

叫ぶ刻・メリエル・エニスにアステリスクⅡグロウリーが答える

「どう言うことだ、アスト」

「そいつの世界の過去の魔法技術はとんでもなく発達してたらしくてね、あるときそいつらは触れてはいけない領域、神に領域まで手を出したのだ。」

アストの言葉にリオンが続ける

「ああ、イカロスの翼ならよかった。だがそいつらはいじつてしまつたんだよ『神』を！結果はこれさ。俺達の世界の元最高神は狂いもはや神ではない、破壊神でさえ無く、創造も再生も共なわないただの【破壊】を行うものになつてしまつた。」

「私達が戦つてるのはつまりはそいつの眷属と云つことです。ノーバディーは神ではない神によつて作られた【生物】。そしてさらに最悪なことがありました」

「神をいじつていた時の実験内容は『神に負けない生命の創造』。神に負けないためにはかあみの術が効かないようにすればいい。そうおして愚かにも彼等は実験した！どんなものが効果的なのか神を使つてな。う笑えるだろ？そうおして生まれたのが神の手出しが出来ない狂つた存在。つうまり王^{マスターマイン}とておう、いとうわけだあ。」

フリズとアドリアンにカルマがうなづく

「ちなみにそいつらはそいつ自身に滅ぼされたよ。そして俺が駆け付ける前にあいつはどこかに消えていた【世界】全てを壊さなかつたのは不幸中の幸いだったが……」

それが数千万年前の出来事だ。そして数百万年前から【世界】が消え始めた。

俺はノーバディーの存在を確かめ戦つたが、あいつの眷属であるあいつらにこちらの攻撃はほとんど通じない。だから俺は守護者を作つた。そして第13【世界】の……そうだな、いわゆる旧

暦462年のことだ。俺はあいつと再会した。さらに強大になったあいつと。」

「その時の結果は君が知ってる通りよ。何とか王は撃退したけど、戦いの余波で生まれえた巨大な次元震と次元断層で第十三世界にある沢山の次元世界が滅んじゃったの。あれから色々な魔法を開発したし、カルマもいくつか手を加えたからそんな被害は二度と起こることは無いだろうけど。どっちにしる苦戦は免れないわ。」

「そうなのか……………」

「マスターマインドってのはどんな容姿なんだ？」

「あいつは現れることに姿は違った。理由は分からないがとても不安定なのだと思う。」

それに強いことに変わりないが毎度かなり強さも行動も違っていた。」

「へ……………」

「とにかくみな気をつけてくれ……………いやな予感がする。」

「神が予感つてのも微妙だよ……………とりあえず分かった。」

「私も」「俺も」「ふん」「僕もです」「あいよ」「
了解」「わたしもです」

そして彼等は解散した

………ほぼ同時刻、海鳴なのはの部屋

机に向かっていたなのはにレイジングハートが突然警告を発した

《—Caution(警告)・—Emergency(注意して
下さい)》

「えっ?」

なのはがその声に疑問を投げかけた時なのはの家に結界がかかる

「結界!?!」

窓から外を見るなのはそこにレイジングハートがさらに警告する

《It approaches at high speed(何
者かが此方へ凄いスピードで向かって来ています)》

「近付いてきてる? こっちに?」

なのははもう一度空を見上げ、レイジングハートを見る。

そして赴く事を決心し、なのはレイジングハートを持ちそのまま
上空に飛び上がった

そしてそこよりはるか彼方、なのはの魔力反応を見つけたヴィータ
がなのはに向かって飛んで行くのだった

それぞれの歯車はかみ合い、回り始める

第四十一話

『A S本編編……………開始』
スタート

黒

「ネタがないんで……感謝コーナー！」

刻

「おい……」

黒

「この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！
えんヴいい様、バルディッシュ様、リトラ様、junk様、黒い
鳥様、ソロモン様、感想をありがとうございます」

刻

「マジでそのまま言ったよ……たく、では次回予告……
・まあ、独断暴走したヴィータとなのはの戦いとかです。
ではまた次回」

042 再会

そこには鬼神が降臨していた

「グイーーーーーーイーーーーーターーーーーー？」

「あ、あはは……………」

漆黒のローブのフードを目深にかぶった少年が震えあがるような怒気を孕んだ声でヴィータに呼び掛ける

彼の背景にゴゴゴゴゴという文字が浮かび上がっているように見える彼からなにかこう、ゆらゆらとオーラの的なものが発せられてる気がする

彼はフードを目深にかぶっているため口元ぐらいしかはつきり見えない筈なのに、何故かピキーンとあやしく光ってる目が見える気がする

てか、その見えてる口元が作りだしている笑みがもんつのすごく怖いただでさえ夜で暗いのに、彼の周りだけさらにそこだけスポットライトを消したみたいに暗くなっている気がする……というより、そこらへんの空間がゆがんでる気がする

「なぐをやってくれたのかな？」

つまり刻はとんでもなく怒っていた

042 再開

．．．．．時は少し戻る

《It approaches at a high speed .
》

なのはが街中のビル屋上に来た所でレイジングハートから注意がか
かった

《It comes 》

「あっ！」

レイジングハートの警告と共に、なのはは紅い魔力をまとった何か
が向かってくるのに気付き、身構える

《Homing bullet》

レイジングハートの解析を聞き、手を前に出し障壁を展開し魔力弾
を受け止める

「うう……」

必死に魔力弾を防ぐなのは、そのとき背後に何かを感じとり後ろを
見た

そしてなのはの目に紅い姿の女の子がうつり

「デートリヒ・シュラーク!!」

その女の子がハンマーで思いつ切り攻撃してきた
なのははそれをもう片方の手で障壁を張り防ぐ

だが圧倒的な力により圧され……

「きゃああ!」

ついに吹き飛ばされた

そして女の子　　ヴィータ　　は間髪をいれずなのは追撃する

一方なのはは手首を押さえながら此処に来てやっと胸にあるレイジングハートを起動する

「レイジングハート、お願い!!」

《Stand by・ready・set up》

「さあ……「おらああ「きゃあ!？」

《Flash Move》

バリアジャケットを展開し、改めてヴィータを見ようとしたなのはにヴィータが襲いかかる。

レイジングハートが高速起動術式を起動しなるとかなのははそれを避ける。

「いきなり襲いかかれる覚えはないんだけど、どこの子？
一体なんでこんなことするの？」

なのはの質問にヴィータは黙ったまま、なのはへ攻撃しようとする

「教えてくれなきゃ・・・わからないってば!!!」

なのは手を前に出し横に振るう。

するとヴィータの認知外の後方方から魔力弾が2つ向かってきた

「!? ちっ!」

ヴィータはその魔力弾に気付き、その魔力弾を二つともグラ　ファ
イゼンで防いだ

だが一瞬できた隙になのはは

《Shooting Mode》

「話しを…」

《Divine》

杖を射撃形態に変え、魔力を杖先に集め

「聞いてっば!!!」《Buster》

それをヴィータに放つ。

ヴィータはそれを避けるがそのさい帽子をかすめてしまった

「あっ！」

ヴィータのお気に入り帽子がふっとばされてしまい落ちていく
ヴィータは傷ついた帽子が下に落ちていくのを見て、目の色が変わる。

そして

「くっ!!」

「あ……」

その怒気を孕んだ目でなのはを睨みつけた
その目に思わずなのはは震えあがる

ヴィータはグラーフアイゼンを横に振りベルカ式特有の三角形の魔法陣を展開する

「グラーフアイゼン、カートリッジロード!!」

《Explosion》

ハンマーの柄にある撃鉄が鳴り、ヴィータの魔力が増幅した

《R a k e t e n f o r m》

そしてグラ　ファイゼンをラケーテンフォーム　ハンマーの叩く部分の一方が鋭利な円錐形の三角形に、もう一方がバーナーの形状にし、バーナーを吹かせその力を利用して魔力陣の上をグルグル回りだす

そして

「ラケーテンハンマー!!!!!!」

そのまま回りながらなのはに突っ込んで行った

なのははすぐに障壁を展開するが、高威力の攻撃にあつという間に障壁を破壊される

なのははデバイスで防御するが

「ああ!」

レイジングハートの杖の部分が攻撃に耐えきれなく、ピキピキと壊れだしていく

「うおおおおお!」

「きゃああー！」

そしてそのままなのはヴィータに吹き飛ばされ、ビルに衝突する
それを見届けたヴィータの持つグラーファイゼンの排熱口から煙が
吹き出しカードリッジが二発弾き出された

「う……あ……」

倒れるのはにゅっくりとヴィータの影が近付く

満身創痍のなのは揺らく視界の中、それでもレイジングハートを
ヴィータに向け、戦闘を続けようとする

ヴィータはそんなのを見下しながらグラーファイゼンを振り上
げ、振り下ろした

思わず目をつぶるなのは
だが、一向に攻撃がこない

そして目を開けるとそこにはデバイスで攻撃を受け止める黒衣のマ
ントを羽織った金髪の少女、フェイトテストタロッサがいた

「ごめんなのは、遅くなった」

そして後ろからなのはの肩に手が置かれ、声がかけられる

「ユーノ……君……」

「くっ……仲間か」

つばぜり合いの状態から思いつきり後ろに引き、乱入してきた二人、
フェイト「テストタロッサとユーノ」スクライアを視界におさめる

フェイトはバルディッシュをヴィータに向け

《Scythe Form》

デバイスを鎌の形に変え

「友達だ」

そう呟く、そしてヴィータをにらみながら警告する

「民間人への魔法攻撃………軽犯罪では済まない罪だ」

「あんだテメー？ 管理局の魔導師か？」

ヴィータはフェイトの物言いに眉をひそめる

「時空管理局嘱託魔導師、フェイト〓テストロッサ。抵抗しなければ弁護の機会がある。同意するなら武装を解除して」「誰がするかよ！」

ヴィータはその場から飛び去る

「ユーノ、なのはをお願い!!」「うん！」

フェイトはなのはをユーノにまかせヴィータを追った

「……………ユーノ君」
「うん」

ユーノはなのはに治癒魔法をかけ、なのはの傷を治療する

「フェイトの裁判が終わって、みんなでなのはに連絡しようとしたんだ。そしたら、通信は繋がらないし、局の方で調べたら広域結界が出来てるし。だから慌てて僕たちが来たんだよ」
「そっか。ごめんね……………ありがとう……………」
「あれはだれ？　なんでなのはを？」
「わかんない……………急に襲ってきたの」
「そっか……………でももう大丈夫、フェイトとアルフが居るから」
「アルフさんも？」

「うん、だから「きゃあ!」「フェイト!……………きさ……………うわああ!……………え?」

ズシャン×2

「フェイトちゃん、アルフさん!」

二人がなのは達の目の前に落ちる

「全く、後で怒られても知らないぞ……………」
「わかってる……………大きな魔力反応見つけて我を忘れてた……………
覚悟しとかないとな……………」

そして彼女達の目の前に、ヴィータに加勢に来、フェイトを落としたシグナムと、それに気を取られ一瞬隙を見せたアルフを落としたヴィータが下りて来た

まだ傷が治りきっていないのはと、それを守ろうとするユーノ、そして満身創痍のままフェイトとアルフは立ち上がり彼女らをにらみつける

だが

「取りあえず……どうしようシグナム？　せつかくだからやっぱ蒐集するか？」

「だが、いやな予感しかしないのだが……やめないか？」

「シグナムもか……実はあたしもなんだ。

……冗談抜きで恐怖のビジョンしか……思い浮かばねえ
！！！」

さつきとは違い戦闘意思が全くななくなっている……と言うか、むしろさつきの威勢の良さがすっかりなくなり、震えだし始めたようにさえ見える二人にすっかり気を抜かれてしまう

そしてそんな時

「そうか……じゃあとりあえず詳しく話を聞こうか？ オフ
タリサン？」

「……!?!?」

ビクっとなりギギギと錆びた機械のように首を回し後ろを振り返る二人、そして

「ぎゃあああああああ!?!」

フードを目深にかぶった刻を見つけた。

ちなみに刻は認知障害の魔法の効果をこの二人だけ対象外にしている

「あ、あのだな……k（俺の名前を此处で出すな!!不自然そうな表情もするな!）」

刻は自分の名前を言わないよう秘匿回線の念波で二人に注意する。さすがに名前がばれたら気付かれてしまうからだ。それを聞いて不自然そうな顔をしないよう注意もするが、……まあ、それは杞憂だろう

二人とも刻の怒気に完全に引きつってしまってる

……ついでに思いがけない人物が来たって意味も合わさって後ろの4人も

「(詳しいことは後で話すよ)……で、シグナム？」

「ヴェータの独断です!!」

「てめ……シグナム!!」

シグナムは恐怖に屈して仲間を売った
まあ、真実はその通りだったのだが

シグナムに詰め寄ろうとするヴェータ。
だが

「ヴェー……イ……ター……？」

「あ、あはは……」

刻の死を予感させるような声に笑うしなくなってしまふヴェータ

「なぐをやってくれたのかな？」

「えっと……大きな魔力反応を見つけて……つい……」

すみませんでした！」

最後は全力の謝罪になるヴィータにため息をつく刻
そして

「はあ………とりあえずおまえら、あいつらに謝れ。」

「え………だってあいつ等。」

「守護騎士の罪は主の罪ってあいつは絶対言うぞ、アヤマレ！」

「「ご迷惑をかけて申し訳ありませんでした!!」」

言い訳を言おうとするが、刻の言葉を聞いて潔く謝る二人

はやてのためなら恥も外聞も喜んで捨てる

ああ、麗しき主への忠義心………多分それ以外にも理由
はあるけど

「そういうわけで、すまないけど許してやってくれないか？」

「あ、あの、それはいいんですけど………なんで私に攻撃してきたか教えてもらえませんか？ 理由を教えて貰えれば、何か御手伝いできるかもしれませんし……。」

「ありがたい申し出だけど、却下させてもらうよ。 目処は立つてるから、このままで十分うまくいくからな。むしろ余計な介入のせいで失敗する可能性だってあるし。 ちなみに今回はこいつの暴走

のせいだ、本当ならこんなことは起こらなかつたはずだからな。」

「あ……じゃあせめて理由だけでも……。」

「……わり、それできない。」

「何ですか？」

「君の後ろには管理局がいる。そして管理局が介入して来たら、賭けても良いけど最悪な結果になってしまうからね。」

「それはどういう」言えない、だから今回はこれで」「

なのはがさらに聞こうとするが刻はそれを拒否し彼女達に向け腕を振り

「許してくれ」

刻の持つ中でも高位の治癒術を発動する

なのは達は闇にくるまれびっくりするが不思議と恐怖感はない。こず、そして体についたあらゆる傷は一瞬で治癒され、魔力も完全に回復し、さらに日々の疲労などによってできた体の彼方此方のよどもも癒され、むしろ戦いに赴く前よりもリフレッシュした状態になる。

「ふわ〜何だか気持ちいい」

「何だかぬるま湯につかってるみたいだね」

「あゝなんか生き返る」

「アルフゝその言い方はどうかと思うよゝ」

優しき闇にくるまれ戦いのことを忘れ極楽状態になるのは達。そして闇が晴れ彼女達が気付き辺りを見渡した時、フードの少年と二人の女性の姿はどこにもなかった

・・・・・・・・とある場所

「で、改めて聞くが・・・・・・・・言い訳はあるか？」

管理局に気づかれないうつヴィータとシグナムを連れ転移してきた刻は尋ねる

「ごめんなさい……」

「許してやってくれないか刻？ ヴィータもはやてのことが心配でつい忘れてしまったわけであって、決して悪気があった訳わけではないのだ。」

「今完成させたって意味無いもんを急ぐ必要なんてどこにもないだろう……」

「え？」

「どう言うことだ刻？」

「へ？」

ヴィータとシグナムの問いに刻が呆けた表情で答える

「え？ 俺……言わなかった？ 660頃ぐらいまで集めるって。」

「む……？ 言ったが……」

「あれ？」

「……俺の説明不足のせいか……。あ……いくらなんでも一瞬でバグを全部修正できる訳ないだろ？ だから、

660項ぐらいまで蒐集しといて・・・たぶん12/23ぐらいに修正が終わるからその時残り6項ほどを一気に埋めようっていうつもりだったんだが・・・」

三人の間に暗鬱な空気が立ち込める。

うわ~~~~~やっちゃまったってきな

刻はしばらく頭をかきむしり(すでにフードは脱いでいる)そしてはあ〜と、思いっきりため息をつく
そして、

「とりあえず、そんな訳だから次からはどんなに大きな魔力反応を見つけても絶対に魔導師を襲い蒐集しようとしないうこと。襲われても撃退するだけで蒐集は決してしない。守れるな?」

「・・・大丈夫だ!」

「もちろん私もだ。」

それを聞いて再びため息をつく刻
だがこれ以上怒る気配はない

「・・・あの・・・刻?」

ふとヴィータが尋ねる

「はやては……今回の私のせいでひどい目に会ったりしないよな？」

「おそろくだが大丈夫だろ……」

「なにか、考えでもあるのか？」

心配そうに尋ねるヴィータに刻は答え、シグナムは根拠を聞く

「十中八九……今回のことで管理局は出てくるからな……
そしたらこっちのモンだ。」

「どう言うことだ？」

「一応口頭ではあったが、今回の原因であるヴィータの粗暴行為なのは許した。つまりこの時点で向こうとこちらはほぼ対等だから、もし向こうから襲ってきたらそれは先ほどとは関係ない。

つまり大した理由も無いのに『危険かもしれない闇の書』を回収するために権力を行使してやって来たという構図が出来上がる。

そして俺達は闇の書はなんとかできることと、こちらの行為は法に触れてないことを叫びつつあいつ等を撃退する。おそろくだがあいつ等はこちらの話を聞こうとせず捕まえに来ようとするからな、そして捕まえてもこちらの主張はどうせ無視する。賭けても良いがあいつらは自分達の保身ことを優先するからな。失敗の可能性が少しでもあるよりも現状維持を選ぶ。そんな中、俺達が闇の書を夜天の書に戻せばこちらの完全勝利だ。

なんせこの時点であいつらが掲げて来るであろう『闇の書は危険物

であり修正は不可能、消し去れなくてもせめて転生させ被害を後伸ばしさせる』以上の成果を上げることになるからな。俺達の説明を無視して攻撃し続けて来た管理局の言い分はほぼ無いに同然だ。しかもうまくいけば聖王教会は完全にこちらの味方になる。勝つたも同然だよ。」

「確かにそれなら大丈夫かもしれないが……うまく行くのか？」

説明を聞き一応納得するが、それでも心配そうに尋ねるシグナム

だが彼女等は刻の顔を見て身震いした

「まあ見てなつて、うまく行かせるからさ。クククク……」

正直この時ばかりは嫌いな管理局に合掌しなくなったシグナムとヴィータだった

042 再会（後書き）

刻

「ケケケケケケ」

黒

「お前、もう完全に悪役だぞ……」

刻

「容赦？何それ？おいしいの？」

黒

「おいもどってこい……ソニア」

ソニア

「了解」

刻

「さあさあさあ、今こそ（ドゴン！）はっ！？俺はいったい何を？」

黒

「ご苦労様ソニア」

ソニア

「いえいえ〜。」

黒

「所でさ刻？ 確かお前聖王教会も粛清の対象じゃなかった？」

刻

「肅清つて言っても全員つてわけじゃないからね。カリム辺りは一応大丈夫そうだし……。第一利用できるものなら何だって利用するよ俺？」

黒

「さいですか……。さて、では感謝コーナー」

ソニア

「この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝をバルディツシュ様、緋水様、ソロモン様、ソラト様、感想をありがとうございました」

黒

「次回は題名、内容ともまだ未定です……。いや、どんなの書くかは決まってるんだけど……。まだ形になってない。」

あ、ちなみにヴォルケンスはこの時点で原作よりも強くなっています

043 歯車は止まらない(前書き)

試験終了〜〜！

ついでにお気に入り登録600件突破&pv60万突破！

043 歯車は止まらない

海鳴、とあるビルの屋上

「じゃあ各自気をつけて、管理局と出会っても余計なことを言わないように」

「分かってる……それにしてもよりによってあの魔導師が主はやてのご友人だったとは……」

「世間って狭めえな……」

「言っときますけど、こうなったのはヴィータちゃんのせいなんですからね……」

「うっせえぞシャル！ 何度も言わなくたって分かってる！」

「とにかくこれからはより注意深く行動するぞ。 はやてが主だつてことは、万が一にでもばれちゃいけないからな。」

「「「「了解！」「」」」」

そして彼らの姿はかき消えた

管理局

「どつだつた？」

体調の検査から戻って来たのは達にリンディーがたずねる

「大丈夫です、みんな全く問題ないそうです。」

代表してなのはが答える

「と言つより艦長……………わたし羨ましいです。」

「？と言つて？」

「見て下さいよこれ」

なのは達の検査について行ったエイミイの報告に疑問の顔をするリンディ

エイミイはなのは達のカルテを見せる

「みなさんの状態、とってもいいんです。疲労とかストレスとかの数値もほとんどなくなってるし、肌とかもつやつや、まるで最高級エステに行った帰りみたいになってるんですよ!! うらやまし過ぎます!..!」

エイミイの叫ぶような報告の向こうではははと笑うのは達四人全員若返ったように見える。.....まあ、もともものすごく若いのだが

「すごいわ.....全ての項目で理想的な数値を叩きだしてる.....」

「あ〜ん、私も行けばよかった!..!」

叫ぶリンディ「ハラオウン32歳、そろそろ肌が気になりはじめるお年頃

その隣で悔しそうにしているプレシア「テストロッサ4・50代、

彼女がこのような表情をする理由はコートの少年にお礼を言えなかったからかそれともリンディと同じ理由か
咳いてる内容から多分後者

それを見ながらクロノはため息をつく

「艦長……趣旨が完全にずれてますよ……というより、
そんな理由でやられに行くつもりですか……。」

「クロノ……女はね……肌が命なのよ……!!!!」

「す……すみませんでした!」

リンディ……とついでにその後ろにいる女性数名にすごまれるクロノ。不用意な発言をしたのは確かだがそれでも理不尽さを覚えるのは彼だけではない……。答

0
4
3

デバイスルーム

フェイトがデバイスの方歩いていく

「バルディッシュ、ごめんね……私の力不足で……」

「破損状況は？」

「正直、あんまり良くない。

いまは自動修復をかけてるけど、基礎構造の修復がすんだら一度再起動して部品交換とかしないと」

それを見ながらクロノは質問し、コンソールをいじっていたユーノが顔をしかめながら答える

「そうか……」

なのはもレイジングハートの浮かぶケースの前に行き眩く

「いっぱい頑張ってくれてありがとね、レイジングハート……今はゆっくり休んでね」

「ねえ、そういえばさ……あの連中の魔法ってなんか変じやなかった？」

「あれは多分ベルカ式だ」

それを見ながら先ほどの戦闘を思い出し、ふと質問を投げかけたアルフにクロノが答える

「ベルカ式？」

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」

「遠距離や広範囲攻撃をある程度度外視して、対人戦闘に特化した魔法で、優れた術者は“騎士”と呼ばれる。最大の特徴は、デバイスに組み込まれたカートリッジシステムって呼ばれる武装」

「儀式で圧縮した魔法を込めた弾丸をデバイスに組み込んで……
・瞬間的に爆発的な破壊力を得る……
・危険で物騒な代物だな」

「ユニゾンデバイスとは……ちがうのか……」

「……何でベルカ式を知らないで、そっちを知ってるんだよ……」

ユートとクロノの説明を聞きながら呟いたアルフに、じと目を向けるクロノ

「い、いや、昔ベルカの秘術のデバイスってのを見つけて、どんな

ものなのかなって調べたことがあるんだよ……」

「……そうか」

焦りながら答えるアルフ、一応クロノは納得する

「ユーノ君、ユニゾンデバイスって？」

「えっと……正式名称は『融合型デバイス』でベルカによって開発されたデバイスのことだよ。ミッドチルダ式のインテリジェントデバイスを極端化したもので、姿と意志を与えられたデバイスが状況に合わせて術者と「融合」し、魔力の管制・補助を行う。姿を持っている以外の特徴としては、このデバイスと融合すれば他の形式のデバイスを遥かに凌駕する感应速度や魔力量を得ることができるというものがあるね。」

「ふわ〜。すごいんだね……」

「うん、だけど深刻な問題があるんだ。融合適性を持つ者がとても少ないうえ、術者に合わせた微調整・適合検査の手間があるし、そして何よりデバイスが術者をのっとり、自律行動を始めてしまう「融合事故」の危険性がある。」

「最近やっと理論が固まりかけたんだ。だけど事故例が多発してて製品化には未だに至ってないよ。だからもしそんなものを使う人がいるとすれば、そいつは何処からか融合機を発掘したか盗んだ犯罪者だ」

「……どっかの研究機関が完成させたってこととかはないのかい？」

「そんな訳無いだろ。管理局が聖王教会と協力し合って莫大な予算をつぎ込んでやっと完成の目処が立ちそうになったんだ。そう簡単に他の研究機関が完成できる訳無いだろ？」

「そ、そうかい。」

「なにか知ってるのか？」

「い、いや。ただとつくに完成してるけどマイナー過ぎてはやって無いただなんじゃないかなとか……」

「そんな訳無いだろ。ユーノも言っていたが融合すれば他の形式のデバイスを遥かに凌駕する感応速度や魔力量を得ることができるんだ。それこそ完成してたら一大ニュースだ。第一聖王教会が黙っちゃいない。」

「そ、そう言えばベルカの秘術だもんね……当たり前だよね……」

あはははと冷や汗を流しながら笑うアルフ
少し離れた所でフェイトも冷や汗を流していた

会議室

「各世界で報告されていた魔法生物襲撃事件、そしてあの剣士の女性を持つていた本、今回の出来事は一連の事件と同一で、そしてこれらは第一級指定ロストロギアである『闇の書』に関係があると考えて間違いないだろう」

「どう言うこと？ クロノ君」

「いままで襲われた魔法生物達は、皆リンカーコアの衰弱が見られた。彼らの狙いはなのはのリンカーコアだったんだろう」

「なにか関係があるの？」

「リンカーコアから魔力を蒐集するのが闇の書の特徴だからさ。歴代の事件では魔導師も襲われていたのに、今回はそれが全くなかったから本当に闇の書と関係があるのか本局も手間取っていたけど、

今回のことではつきりした。」

「あの黒ローブの少年……か……」

「ああ、それなら全てに説明がつく。」

フエイトの呟きにクロノが肯定する

「魔法生物襲撃事件の分布はとんでもない広さに渡っていたから、組織的な何かが行われているんじゃないかって意見もあったけど、あの魔導師が関係しているならその疑問も解ける。口惜しいが、あいつなら個人転送で行ける範囲が僕達よりもずっと広くてもおかしくないからな……」

「ええ、そしてそれを考慮した結果、なのはさんの世界が事件の中心である可能性がでたわ。」

「私の世界がですか？」

「ええ。彼らの言動から、彼等は常に共に行動している訳ではなさそうだった。それを考慮して、彼が関係しているであろう現場をすべて除外し、再計算するとある場所から一定の距離にある場所のみに被害がほぼ限定されるという結果が出た。そして、そのはじき出された場所が」

「私がいる世界……」

「そのとおりよ」

「……あの辺りは本局からだとかかなり遠いですね。中継ポートを使わないと転送出来ない。アースラを使えないのが痛いな」

「え？ アースラが使えないんですか？」

なのはの疑問にリンディがため息をつきながら答える

「運の悪いことに、ちょうどメンテナンスの時期なのよ……」

「空いている艦船があればいいんだが……」

「でも、長期稼働出来る艦は、2ヶ月先まで空きがないそうです。」

「そうか……というかフェイトになのは、君達はいいいか？」

フェイトの報告に顔をしかめるがふと、顔を上げ質問するクロノ

「え？」

「なにが？」

「囑託とは言え、あくまで君は外部協力者だ。なのはもだ。今回の件まで無理に付き合わなくても……」

「クロノやリンディ提督が大変なのに、のんきに遊んでなんていられないよ。アルフも付き合ってくれてるって言ってるし」
「今回のことは私の居る世界で起こってるんだよ？じつとなんかしてられないよ」

「そうか……すまないな……」

二人に御礼を言うクロノ、三人の間に沈黙が入る
だがその空気を突然リンディが壊した

「なら、あれで行きまっしょっか！」

「『あれ』？」
「ウフフ」

疑問顔をするのはとフェイトにリンディは笑いかけた

・・・・・・・・数日後

集まったアーススタッフにリンディーが命令を下す

「さて、私たちアーススタッフは今回、第一級ロストロギア『闇の書』を搜索を担当することになりました。ただ肝心なアースがしばらく使えない都合上、事件発生時の近隣に臨時作戦本部を置くこととなります。分轄は観測スタッフのアレックスとランディ」

「はい！」

「ギャレットをリーダーとした捜査スタッフ一同」

「……………はい！」

「司令部は私とクロノ執務官、エイミー執務官補佐、テストロッサ一家さん、以上三組にわかれて担当します」

「……………はい！」

「ちなみに司令部は………なのはその保護を兼ねて
なのはさんのお家のすぐ近所になります」

「………えっ？」

突然の報告になのははフェイトと顔を見合わせ

「うわあああ〜」

満面の笑みで喜びを見せた

管理局 グレアムの執務室

「クロノ達は今日からついに地球に、彼女達がいる世界に行くことになった……。あの少年については何か分かったか？」

「いえ……。全く。。。」

「ただ、クロスケが言ったようにとんでもない奴だっことは痛いほど分かりました。」

「お前達は勝てそうか？」

「残念ですけど……。おそらく無理です。」

「あの強さはあり得ません！ 私達の何百倍もある大きさの魔法生物を苦も無く倒していくんですよ！！ しかも超遠距離砲撃で一撃で仕留めることもあれば、素手での一撃で沈めることもあったんですよ！！ 接近戦から超遠距離での戦闘まで全てにおいてあんなに圧倒的に立ちまわれるなんて異常にもほどがあります！！ なにあれ！？ ホントに九歳児！？ と言つかそれ以前に人間！？」

「……………と云うことです」

叫ぶロッテの隣で額を抑えながらアリアが言う

それを聞いてグラムも頭を抱える

「彼とぶつかるわけにはいかないな……彼の居ない時を見計らって行動するしかないか……蒐集はどれぐらい進んでいる？」

「おそらく500をすでに超えていると思われる。ひょっとしたら600近くまで行っているかもしれない」

「もうそこまで……速いな……」

「彼が原因なのは明らかですね……本当にどう言ってもりないんでしょう……？」

先行きが不安になる三人であった

……無用な心配なのに

管理局 三提督のお部屋

「じゃあ、よろしく願いしますね」

刻が三提督に言う

「ええ、まかして。」「

「それにしても、ホントにあくどいな……………あいつらが全てを知ったら卒倒するかもしれないぞ……………」

「だから向こうにも一応チャンスは与えるようにしてますよ。それこそ一度や二度じゃ無くてね？」

「『だが十中八九、あいつ等はそのチャンスを不意にする』だろ？」

ミゼットとレオーネの言葉に刻は澄まして言うが
苦笑いしながらラルゴが続ける

「ま、そうだけどさ、俺が提示するチャンス……そんなにひどい条件だと思う？」

結構あからさまなのもあると思うんだけど？」

「ああ、そうだな……」

「不意にするのはこちらのせいね……」

だが刻の言葉にラルゴとミゼットは苦笑いした

「そういつこと、それにだからこそあんた達は……」

そう言いながら三提督を見渡す刻

そして、三人ともそれに答えるように一斉にうなずいた

043 歯車は止まらない(後書き)

黒

「色々動き始める043話でした」

刻

「結構コンスタントに更新するよなお前？」

黒

「試験から解放されて、今のってるからね。スランプにならないうちにできるだけ書いてきます。」

刻

「そうか……所で試験はどうだった？」

黒

「では感謝コーナー！」

刻

「……おい！」

ソニア

「刻……察してあげて？」

さて、この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！
バルディッシュ様、緋水様、ソラト様、感想をありがとうございます！

黒

「では次回予告……簡単に言えば後日談2です。」

刻

「おい……なんだよその予告……」

黒

「いや〜だってこの部分原作とあんまり変わらなそうだし……」

刻

「……」

黒

「ではまた次回！」

044 それが童顔を持つ者の定め

海鳴市の市内にあるとあるマンション

「うわああ〜すっごーい！ 凄い近所だあ！！」

「本当？」

「うん！ ほら、あそこが私の家！」

「そう言えばなのはちゃんちって、洋菓子屋さんだったね。」

「うん！」

マンションのテラスで騒ぐのはとフェイトとアリシア

一方リビングで色々と設置をしていたエイミイは姿を変えたアルフとユーノに気づく

「ん？ ユーノ君とアルフは……こっちではその姿かぁ」

「新形態、子犬フォーム！」

「なのはやフェイトの友達の前ではこっちの姿でないと……」

「君らも色々と大変だね〜」

ユーノはフェレットの姿に、そしてアルフは可愛らしい子犬の姿に……つてあれ？

お前確か狼じゃなかった？……ま、いつか。本人が子犬っ

て言ってるし。

「あれ、アルフ？」

「うわあ〜、ちっちゃい！！ どうしたの？」

「ユーノ君、フェレットモード久しぶり〜」

アルフとユーノに気づいたフェイトとなのははアルフ達を抱きにく

「かわいいだろ〜」

「うん」

「とつても!」

「にはははは」

「あ、ははは………」

可愛すぎて頼ずりをはじめた三人、そんな時クロノから声がかかった

「なのは、フェイト、アリシア友達だよ」

「「「はい!」」」

「こんにちは」

「来たよ〜」

「アリサちゃん、すずかちゃん!」

なのはとフェイトとアリシアが玄関に行くと、アリサとすずかがいた。

「初めまして……つてのも何か変かな？」

「ビデオメールでは何度も会ってるもんね」

「うん、でも会えて嬉しいよ。アリサ、さすが」

「よろしくね！」

「うん！」

「私も！」

仲良く玄関で談笑していると

「あら？」

「フェイトにアリシア、お友達？」

リンディとプレシアが顔を出して来た

「「こんにちは！」」

「こんにちはわ、さすがさんにアリサさん……よね？」

「え……はい」

「私たちのこと……」

「ビデオメール、私も見せてもらったの」

疑問顔をする二人にプレシアが答える

「そうですか……ところで刻は来てませんか？
家にはいなかったみたい何で先に来たのかと思ったんですけど……」

刻と聞いて少しピクつとなるフェイト
それを目ざとく見つけてにやにやするアリシア

「刻君って……いえ、まだ来てないわね。」

「あ……にやはははは……」

呟くプレシアの隣でなのはが苦笑いする

「なにか知ってるのなのは？」

「えっと……刻君はね……」

翠屋

「なのは……桃子さんどうにかしてくれない?」

「じゃははは……ごめんなさい。」

刻は翠屋で臨時ウエイトレスをしていた………メイド服で!…

………ちなみにソニアも。

「で、でも、いつの間に刻君もメイド服に? 私が店を出るときは、執事の格好してたよね?」

「こっちの方が需要があるからって桃子さんが………」

刻は遠い目をする………と言うか桃子さん、あなたそつち系?

………てかいつの間にかこんな服用意してたの? 後刻がつけるロングのエクステ。

二つとも明らかに翠屋とは関係ないよね?

「え……えっと……似合ってるよ?」

「フェイト……それを言われて俺が喜ぶとでも思ってるのか?」

「……ごめんなさい。」

「はあ……もう良いよ、女装するのも別にこれが初めてじゃないし……。」

「え? 刻君って前にもしたことがあるの?」

「……聞きたいのか? すすか?」

「遠慮します。ごめんなさい。」

暗雲を背負った暗い目で見つめられ、一瞬で態度を翻し全力で謝る
すすかだった。

「はあ……とりあえずしまらないけど、久しぶりだなフェイト。」

「うん」

「っで、そっちが」

「こんにちは義兄ちゃん！」

時が止まった

「……………え、アリシア、何で刻のことをお兄ちゃんって呼ぶの？」

アリサがアリシアに聞く。するとアリシアはふふふと笑って

「だってフェイトは刻「な、何でも無い！」むぐぐ……………」

真っ赤になりながらアリシアの口を押さえ叫ぶフェイト。
そしてそれを見ながら黒いオーラを発し始めるアリサとすずか、お

るおろとするなのは。という構図がしばらく続いた。　ちなみに刻
はいつの間にか接客に戻っていた。

一方大人組

「そんなわけでこれからしばらく」近所になります。よろしく願
いします」

「それになのはちゃんには娘がお世話になっています」

「ああ、いえいえ、こちらこそ」

「どつぞ、」鼻唄に「」

「そういえば、フェイトちゃん……3年生ですよね？　学校
はどこらに？」

「はい、実は……」

カランと扉が開く音がし、リンディとプレシアが後ろを振り向くと、
金髪の青年が持っていた二つの箱を手渡して来た

「あの……母さん……」

「ん？なに？」

「あの……これって……」

二つの箱の中にはそれぞれなのはたちが通う学校……私立聖祥大付属小学校の制服が入っていた

「転入手続きは取つといたから。二人とも週明けからなのはさんのクラスメートね」

リンディが楽しそうに言う

「あら？ 素敵！」

「聖祥小学校ですか……あそこは良い学校ですよ！ なっ、なのは？」

「うん！」

「良かったわね、フェイトちゃんにアリシアちゃん」

「あの……えっと……ありがとう……」
「……」

箱を抱き締め照れるフェイトとアリシア

「ってことは私たちも一緒ってことね！」

「私とアリサちゃんと刻君も一緒のクラスだもんね！」

アリサとすずかもフェイトとアリシアが同じクラスに来ることを喜ぶ

「刻君はどう？」

ふと桃子さんが刻に尋ねる、

彼女の的には『刻君も嬉しいよね？』的なことを聞きたかったんだろ
うが、さっきまで彼女達の会話に入らず接客をしていた刻は勘違い
をした

そして

「……………今度は何の格好をさせる気ですか？」

夢も希望もありません的な音程で刻はつぶやく

翠屋にブリザードが吹き荒れた

所は戻って臨時司令部

エイミイの近くに展開されたモニターに何かメッセージが入った

「はいはい、エイミイですけど」

『あ、エイミイ先輩、本局メンテナンスのマリーです』

「あつ、なに？ どうしたの？」

『先輩から預かっているインテリジェントデバイス二機なんですけど……なんだか変なんです』

「え？」

『部品交換と修理は終わっただんですけど……エラーコードが消えなくて』

「エラー？ なに系の？」

『ええ………必要な部品が足りないって………いまデー

タの一覧を』

モニターにデータが送られてくる

「あ、きたきた．．．．え？ 足りない部品ってこれ？」

『ええ．．．．これなにかの間違いですよね？』

エイミィはデータを見て驚き、モニターの向こうのマリーも困惑の表情をする

「エラーコードE203 必要な部品が不足しています

エラー解決のための部品、 “ CVK - 792 ” を含むシステムを組み込んでください」

『二機ともこのメッセージのままコマンドを全然受け付けません。それで困っちゃって』

(レイジングハート．．．．バルディッシュ．．．．本気なの？

CVK - 792．．．．ベルカ式カートリッジシステム)

《Please》

悩むエイミィのモニターの回りで、レイジングハートとバルディ
ッシュがそう頼んで来た

おまけ

「フエイトちゃんもアリシアちゃんも良く似合ってるよ!」

「そ、そう?」

「ありがとう……。」

なのは達の前に聖祥小学校の女子制服を着たフェイトとアリシアが並ぶ
二人とも恥ずかしそうに顔を俯かせていて……大変眼福な状態です

……で

「じゃあせつかくだから刻君も聖祥小学校の制服（女性用）を……」

「お母さん、なんでそんなもの持つてるの!? 私のとサイズ違うよね!?!」

桃子さんが聖祥小学校の女子制服をどこからともなく取り出しながら刻に言い、それを見たのはが叫ぶ

それは明らかに刻にぴったりなサイズだった。そして刻はこのメ
ンバーの中で一番背が高い。
つまり……

「は……あははは……わざわざ用意したんですか……桃子さん……」

「刻……すまない……」

「無力な私たちを許してなの……」

「えっと……きつと似合うよ!」

「すずか……今度はお前が言うのか?……そしてソニア!　なんでお前はカメラを構えている!」

「きつといい思い出になるよ!」

「黒歴史以外の何物でもないだろうが!」

「ソニアさん……できたら後で私に焼き回ししてくれませんか?」

「あ、わたしにも!」

「フェイト!?　アリシア!」

「あ、ずるい!!　私も!」

「すずか、てめえもか!!　アリサ、どうか」

「(わたしも……でも……やっぱり……)(」

神は死んだ、刻の逃げ場はどこにもない!

……後の展開は皆さんのご想像にお任せします

044 それが童顔を持つ者の定め（後書き）

刻

「おい……………」

黒

「俺は楽しければそれでいい。以上！」

刻

「ちよつと頭……………冷やそうか？」

黒

「断る！」

刻

「却下だあああああああ！」

『はじまりの時を再び刻め！！ 消えよ！ 『ビッグバン』！！』

黒

『アルファ・ステイグマ複写眼発動！』 『存在を解析……………解除』 砕ける！

ソニア

「え〜つと、あの二人は放っておいて……………」

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！

バルディツシュ様、junk様、月光閃火様、緋水様、汝らはな
んぞや！！様、ソラト様、HAZUKI様、僚様、ロア様、感想を

ありがとうございました！
ではまた次回「

なかなか他の守護者を出せなくてすみません……………。
黒コートのおかげですが……………もう少ししたら進展があり
ます

045 二度目の戦い？（前書き）

ソードアートオンライン5の表紙を見た。

男の娘は正にあいつのことだと思う。

045 二度目の戦い？

「ねえ、なのはあの人たちの事、どう思う？」

フェイトがなのはに尋ねる

「あの人たちって、あの時の？」

「うん」

「えっと、私は襲いかかられてすぐ倒されちゃったから、よくわかんなかったんだ。」

「私もすぐに倒されちゃったから全然お話できてないけど、そんなに悪い人たちじゃないと思った。うまく言えないけど、悪意みたいなものを全然感じなかったんだ。それにコートの子の言い分だと・・・闇の書の主は悪い人じゃなさそうだった。」

「そっか。闇の書の完成を目指してる理由とか、教えてもらえたらいいんだけど。」

断られちゃったもんね」

「うん……」

「どうしたの？ フェイトちゃん？」

「あ、うん……あのロープの子が言ったことが気になって……」

「そうか……そうだよね……『管理局が介入して来たら最悪な結果になってしまう』……か……」

「うん……」

「確かにそれは気になるけど、それでも少なくとも闇の書が危険なものであることに変わりはないんだ。だから僕達は何としても闇の書の主を引きずりだし、闇の書を捕獲しないとイケない。」

いつの間にかなのは達の近くに来ていたクロノが言う

「うん……そうなんだけど……ひょっとしてこの事件には何か重大なものがあるんじゃないかって。私達が知らない、なにかが。」

「なにかって？」

「わからない……だけどあのロープの子が向こうにいる以

上、そこには何か理由があるんだと思う。前の事件の時……いつの間にか私達に手を貸して、助けてくれたみたいに。」

「あの人たちにはどうしても行動しないといけない理由があって、そんな人たちが不幸にならないようにロープの子は……行動してるってこと?」

「たぶん……」

「と言うことは……まさかまたハッキングを仕掛ける気か!？」

叫ぶクロノの声を聞きながらフェイトは考える

「(気になってるのはそれだけじゃない……あのロープの子って……もしかして……)」

12月9日 強装結界内

十数名の管理局員がヴィータとザフィーラを取り囲んでいる。

「管理局か」

「でもチャライよこいつら。返り撃ちだ！」

身構える二人、だが管理局員達は一斉に散開して行く。

「え？」

「上だ！」

「つつ！？」

頭上を見上げる二人。そこには大量の魔力刃が展開されていた。

「ステインガーブレイド・エクスキューションシフト！　喰らえ！」
クロノの叫び声と共にヴィータとザフィーラに無数の魔力刃が襲いかかる。

「はああー！」

ザフィーラはヴィータの前に出て障壁を張る
魔力刃はそれに着弾した瞬間が爆ぜ、視界が遮られる

「はぁ……はぁ……少しは……通ったか？」

息を切らせながらつぶやくクロノ

だが魔力煙が晴れるとそこには無傷のザフィーラとヴィータがいた
しかも

《Schwalbfliegen》

「うおりゃあああ！」

ヴィータがすかさず『シュヴァルブフリーゲン』　鉄球を取り出しハンマーで打つことで射出する攻撃　で四発の鉄球を放って来た

「ぐわああああ！」

バリアを貼るがそれを貫通され全弾をまともに食らうクロノ

「一応言っておくが、先にやって来たのはそっちだからな。これは
正当防衛だ！」

ヴィータが叫ぶ

「大丈夫か？ ザファイラ」

「問題無い、盾の守護者としてこの程度の攻撃、防ぎきれなくてど
うする？」

「とか言いながら、あいつ等の特訓のおかげだろうが。」

「むづ……まあ、否定はしないが……」

「さて、どうやってこの結界を壊すか……」

「くっ何てやつらだ……」

『クロノくん!』

話し合うヴェータとザフィーラの向こうでつめき声を上げるクロノに通信が入った

「エイミーか。どうした?」

『武装局員、配置終了。それと強力な助っ人呼んでおいたよ!』

「助っ人? まさか!?!」

クロノが眼下を見下ろす。そこには、ビルの屋上に並んで立つのはとフェイトがいた。

「レイジングハート!」

「バルディッシュ!」

「セーット、アープ!?!?!」

レイジングハートとバルディッシュが交互に認証を開始する。

《Order of the setup was accepted》

《Operating check of the new system has started》

《Exchange parts are in good condition, completely cleared from the NEURO-DYNAMIA IDENT zero one to beta eight six five》

《The deformation mechanism confirmation is in good condition.》

《Main system, start up.》

《Haken for deformation preparation: the battle with the maximum performance is always possible.》

《An accel and a buster: the modes switch and become possible. The percentage of synchronicity, ninety, are maintained.》

《Condition, all green. Get set.

《Standby, ready.》

ローディングが終了し、起動態勢に入る

「レイジングハート・エクセリオン!」

「バルディッシュ・アサルト!」

《Drive ignition.》

「あいつらのデバイス!あれってまさか!?!」

それに気づいたヴィータが叫ぶ

《Assault form, cartridge set》
《Accelerate mode, standby, ready》

そして変化したデバイスを持ったなのはとフェイトがヴァイタ達を
見据えた

Side シグナム

結界の上

「強壯型の捕獲結果?.....ヴァイタ達は閉じ込められたか

「？」

《Please choose your action.》

「レヴァンティン、お前の主はここで退くような騎士だったか？」

《No.》

「そうだレヴァンティン、私は今までもずっとそうして来た」

シグナムはそう言い放ち、足下にベルカ式魔法陣を展開する
そしてカートリッジをロードし、レヴァンティンに炎が纏う

S i d e E N D

再び結界内

「私たちはあなたたちと戦いに来たわけじゃない。まずは話しを聞かせて……」

「闇の書の完成を目指している理由を……」

フェイトとなのはが叫ぶが、ヴィータはそれを拒否する

「あのさ、ベルカのことわざにこういうのがあんだよ。 和平の使者なら槍は持たない」

「え？」

「話し合いをしようってのに武器を持ってやって来るやつあるか！バカ！！って意味だよ。バーカ」

「なっ……いきなり有無を言わさず襲いかかってきた子がそれを言う……？」

「もうそのことは謝ったし、お前も許しただろうが……！」

「はっ……」

「所でヴィータ、それはことわざではなく小話のオチではなかったか？」

ヴィータの言葉になのはがたじろぐが、そこにザフィーラがつつこんだ

「うっせー！ いいんだよ細かいことは！」

ズガアアアア

ザフィーラの突っ込みに切れかけるヴィータだがその瞬間轟音が響き渡り、上からシグナムがやって来た

「シグナム！」

「ユーノ君、クロノ君、手を出さないでね！ 私とあの子と一対一だから！」

構えるフェイトとなのはアルフもザフィーラと対峙する

「（ユーノ、それなら丁度いい。僕と君で手分けして闇の書の主を

探すんだ」

「(闇の書の?)」

「(連中は持っていない、おそらくもう1人の仲間が主かがどこかにいる。僕は結界の外を探す、君は中を)」

「(わかった)」

一方念波でクロノとユーノはお互いの役割を確認し合いそれぞれの担当に散って行った

なのはvsヴァイタ

ヒュン

上空を飛ぶヴィータ、その後を追うようになるのはが飛んでいた

「ふん、結局戦うんじゃないかよ」

「私が勝つたら話しを聞かせてもらおうよ！ いいね！」

「やれるもんなら……やってみるよ……！」

《Raketen form》

「うおりゃあああ！」

ヴィータは急停止、反転し、ラケテンフォームでなのはに攻撃する

「きゃあ！」

《Protection Powered》

急に反転して攻撃してきたことで、よけきれずにもろにハンマーヘッドに突っ込む形になるのは

レイジングハートが急いでバリアを張りヴィータの攻撃を防御する

ギイイイイン

「へえ……堅くなったな……」

前回はあっさり破られたバリアは、カードリッジで強化されたこと
によって前回よりも硬度が増していた

だが

・・・キ・・・ピキ・・・ビキ・・・バキ・・・

攻撃に耐えきれずにまたひびが入り始める

《Barrier Burst》

レイジングハートの音声と共にバリアは爆発し、なのはとヴィータ
は爆風によりお互い吹き飛ば

「うおー!!」

「きゃああ」

なのははレイジングハートから予告があったためかすぐに体制を立
て直す、不意を付かれたヴィータは体勢を立て直すのが遅れ、
その際にレイジングハートがなのはにアクセルシューターを放つよ

う助言する

《Let's Shoot it Accel Shooter》

「うん！アクセルシューター！」

《Accel Shooter》

「シュート！！」

ズガアアン！

「えっ！？」

カートリッジで強化されたことによりレイジングハートは12発の魔力弾を発射する。

なのはは想像以上の魔力弾の数に驚きの声を上げる

「ぐっ……なっ！？」

体制を立て直したヴィータはその数に驚くが、それに囲まれないよう急いで飛行する

《Control please》

「ん…！」

なのは目を閉じ、意識を集中し、振り切ろうとするヴィータを追撃させる

「やるな、これだけの弾を全部制御するなんて」

《It can be done as my master》

ヴィータの呟きにレイジングハートが答える

「ああ、確かに見くびっていたみたいだ………だけど！」

「え？」

ヴィータが進行方向をなのはの方向へ変え加速し、なのはのすぐ目の前で急停止する

そして

「よけられるかな？」

ギョーン！

そう眩き一気に加速しなのはの上に行く

訳が分からず一瞬意識に空白が生まれるのは、そこに

《Master!!》

「え？ きゃあ!!」

レイジングハートの叫びで我に返ったなのは目の前に、ヴィータを追いかけていた自分が放ったアクセルシューターが意識から外れたことでそのまま自分に向かって襲いかかってくるのを見つける

急いで制御し、何とか四発を再びヴィータを追わせることに成功するが、八発が制御が間に合わず、自分の張った障壁にぶつかってしまう

そして再び制御した四発も

《Schwalbefliegen》

「はああああ!!」

ゴガアアン

ヴィータが放った鉄球に全て押し負けてしまった

フェイトVSシグナム

ガン！ ギン！ バシン！

フェイトとシグナムはお互い攻撃をしながらビルを駆け上がっていく

「はああああ！」

「ぬああああ！」

フェイトとシグナムはデバイスでぶつかり合い、お互いを弾き合い、距離を取り体制を整える

「ほう……カードリッジを搭載したからとはいえ、この短期間で見違えるように強くなったな」

「あなたを倒せるように頑張りましたから！」

シグナムのほめ言葉にそう返すとともに、フェイトはデバイスを振りかぶり

《Plasma Lancer》

「プラズマランサー ファイア！」

シグナムに向かって魔力弾を放つ

「はああ！」

シグナムはレヴァンティンを振りフェイトの攻撃を振り払う

ブオン！

しかし四方八方に散ったはずのプラズマランサーは空中に静止し

「ターン！」

フェイトの命令により向きを逆転させ、再びシグナムに襲いかかる

「はっ！」

シグナムは襲い掛かってくる魔力弾を上昇してかわす

《Blitz Rush》

魔力弾はシグナムを追尾し、さらにバルデッシュは加速魔法をかけ魔力弾のスピードを上げる。

しかしシグナムはレヴァンティンを構え

「レヴァンティン」

《Sturm wind》

「てええい！」

魔力が籠った衝撃波でプラズマランサーを全て迎撃した

「はああ！」 《Haken Form》

その隙をついて、フェイトはバルデッシュをサイズフォームにしてシグナムに接近して攻撃しようとする

だが、

「紫電一閃！」

「きゃあああ！」

シグナムはそれをなぎ払う

フェイトは爆風で吹き飛ばされた

「くっつー！」

なんとか体制を立て直すフェイト
シグナムはそれを見据え話しかける

「強いなテストタロツサ、半年前の私ならばやられていたかもしれん。この身に成さねばならぬ事が無ければ心踊る戦いだっただが仲間たちと我が主の為、今はそうも言っていられん。あいつとは違いうまく手加減が出来ぬうえ、殺さずに済ませる自信はない。この身の未熟を許してくれるか？」

そう言い、シグナムは居合いの構えをとる

「構いません……勝つの私ですから」

フェイトは笑いながら答える

「フツ……全く、あいつといいお前といい、最近の子供は恐ろしいものだ。」

シグナムもまた口元に笑みを浮かべていた

アルフVSザフィーラ

「デカブツ！ あんたも誰かの使い魔か！」

アルフは拳を繰り出すが、ザフィーラは難なく受け止めながらそれに答える

「ベルカでは騎士に仕える獣を使い魔とは呼ばぬ」
「んん？」

「主の牙、そして盾……守護獣だー！！」

「おんなじような……もんじゃなかよー！！」

二人の魔力を纏わせた拳がぶつかり、爆発が起こる

「うわー！」
「くー！」

ザフィーラは再びアルフとぶつかり合いながら戦況を分析する

(ふむ……こちらが負けることはなさそうだが問題は強装結界だな。シャマル、なんとかできるか?)

S i d e シャマル

「（・・・・・・・・・・シャマル、何とかできるか？）」

結界外にいるシャマルの元にザフィーラの念話が届く

「（何とかしたいけど 局員が外から結界維持してるの。私の魔力じゃ破れない シグナムのファルケンかヴィータのギガント級の魔力を出せなきゃ・・・・・・・・・・）」

「（二人ともまだ手が放せそうにない）」

「（ええ・・・・・・・・）はっ！」

チャキ・・・・・・・・

「 搜索指定ロストログアの所持、使用の疑いで貴方を逮捕します」

背後からクロノがデバイスをシャマルに向けていた

「（シャマル？ どうしたシャマル！？）」

ザフィーラの念話にシャマルは答える事ができない

「抵抗しなければ弁護の機会が貴方にはある…………同意するならば武装の解除を」

ビュン

「えっ！？」

ガシャアアン！！

クロノは突如現れた仮面の男に蹴飛ばされ、金網に激突する

「……………くっ！ 仲間！？」

クロノは何とか立ち上がりながら仮面の男を睨む

「貴方は………?」

シャマルは仮面の男に尋ねる

「………使(チャキ!)ッッ!」

仮面の男はシャマルに闇の書の項を使うよう言おうとするが、真後ろから剣を首筋に突きつけられ、言葉を詰まらせる

「あ!」

「お前は!」

その人物に気づき、安堵の声を漏らすシャマルと叫び声を上げるク
ロノ

「どう言ってもりだ?」

その剣の主はフードを被った刻だった

045 二度目の戦い？（後書き）

黒

「俺の友人が自動車免許の試験に落ちました。（五回目の）」

刻

「のっけから何言ってるの？」

黒

「いや・・・これぐらいしか話題が思い当たらなくて・・・。」

刻

「たく・・・そういや、お前は大丈夫なのか？」

黒

「やっと第一段階が終わるところですが？ まだ第二段階が残ってる。試験はまだ先だ。」

刻

「あ・・・そ・・・。」

黒

「そっぴや俺のほかの友人がさ『AT車より絶対MT車だろ!!』って力説してたんだけど、どうなんだろ？」

刻

「だからなんでそんな話を振る・・・まあ、人それぞれだろ？ そいつかなりの車好きらしいし・・・。」

黒

「だよね！そっだよね！　じゃあ感謝コーナー！」

刻

「話題に一貫性を持たせろ！！！！！！」

黒

「……………ごめん。」

ではこの作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を！

バルディッシュ様、緋水様、リトラ様、感想をありがとうございました！」

刻

「じゃあ次回予告。」

黒

「刻による『ずっと俺のターン！』の予定です……………たぶん」

046 刻vsアイスラ組(前書き)

イマイチきるところが分からず無駄に長くなった挙句(ほぼ120
00字)、なんかgdgdになりました

046 刻vsアースラ組

「ようし！！ クロノ君、グッジョブ！」

リンディとエイミィが喜ぶ

彼女らが見ているモニターの向こうにはシャマルを発見し、S2Uを突きつけるクロノの姿があった

だが、

ガシャアアン！！

「ああ！」

「クロノ君！！！」

クロノは突如現れた仮面の男に蹴飛ばされ、金網に激突する

「あの人たちの仲間！？」

『……………くっ！ 仲間！？』

叫ぶエイミィのモニターの向こうで、クロノは何とか立ち上がりながら仮面の男を睨む

『貴方は……………?』

「いえ……………違うみたいね……………」

シヤマルが仮面の男に尋ねるのを聞きリンディがつぶやく

『……………使(チャキ!)ッッ!』

「あ!—!」

シヤマルになにか言おうとした仮面の男に、いつの間にか現れたフーードを目深にかぶった黒ローブの少年が後ろから剣を突き付けていた

『あ!—!』

『お前は!—!』

シヤマルとクロノが声を上げる中、少年は冷たい声で仮面の男に話しかける

『どう言ってもりだ？』

『異なことを言つな。こちらはお前たちを助けたというのに。』

仮面の男は答える。だが少年はそれを鼻で笑う

『俺がお前の正体に気づいて無いと思ってるのか？』

『なに!?!』

叫ぶ仮面の男、だが少年はふと上を見てこういった

『あ、ごめん、訂正する。』

その瞬間

『ぎゃあああああ!』

ズドン!

彼らの隣に少年が剣を突き付けている仮面の男と瓜二つの容姿をした仮面の男が落ちて来た。バインドでがんじがらめにされ気絶している。

『お前らだ。』

そして、そう少年は呟いた

『く……なぜわかった！』

『そんなばればれの魔力放出しといて何言っでやがる。』

『なに？』

『ああ、そうか。俺達と違って、お前ら魔導師にはこういった概念はあんまりないか……』

少年は呟く

『どう言うことだ。』

『簡単に言えばなんで個人個人によって魔力色は違うのかってことだよ。魔力波長は個人によって微妙に違う。それこそ指紋や声紋と同じようにな。俺達魔術師の中にはそれを正確に判断できるよう訓練してるのがいるんだよ。そしてお前の魔力波長。俺達を監視してたやつと全く同じパターンだ。後は言わなくても分か

るよな?』

『く!』

そう呻き、仮面の男は相方を抱えて何処かへ転移した

「魔術師……」

「プレシアさん、何か心当たりがあるんですか!?!」

プレシアがつぶやくのを聞いてリンディが尋ねる

「いえ、わざわざ自分達を魔術師、つまり魔導師と区分しているのは、何か理由があつてわざわざそう言うようになったのか、それとも私達が知らないだけで実は前から彼等は存在していたのか……と思つて。」

「あ……なるほど……」

それを聞いてリンディは考え込む。その時

『さてと……そうだ。ちょうど良いからひとつ教えといてや』

るよ、シャマル。』

モニターの向こうでパチンと指を鳴らす少年。 その瞬間

「艦長！ 強装結界を覆う結界が展開されました！！」

エイミーが叫び、彼女等は再びモニターに目をくぎ付けにする

「お前も知ってるだろうけど、自分の魔力を他人のデバイスに流し込んだり、自分の魔力を封じ込めたカードリッジを渡すことで間接的に他人に自分の魔力を使わせることは出来ても、魔法使い自身に自分のそのままの魔力を流すのはご法度だ。 下手をすれば流し込まれた魔法使いは死んでしまうからな。 そしてその理由は簡単。

さっき言ったように個人によって魔力波長は違う……つまり水と油とまでは言わないが、そう簡単には混ざり合わない物同士だからだ。』

そう言いながら少年は片手に銃型のデバイスを展開する

『だからこそそういうもの同士を完全に混ぜ合わせた時、そこからは足し算や掛け算どころか乗数クラスのエネルギーを取り出せるんだけど……さっき言ったみたいにそう簡単にできるものじゃない。 俺達魔術師の中にもそんなことをする奴はまれだしな。

まあ、それは置いて、今回重要なのはそう簡単に魔力同士は混

ざり合わないってことだ。それでも足し算ぐらいの物にはなるんだけど・・・致命的な欠点がある、それこそ個人での時は生じ得ない欠点が出る。お互いの魔力が干渉し合い、不安定になる場所が出来てしまうという欠点がある。そういう所はえてして脆かったりするものだ。そして、そういう場所をうまく探し出し、さらにそこから連鎖するようにうまく攻撃すれば少ない労力でこんな結界だろうと簡単に破壊することが出来る。」

そしてデバイスを構え

『それこそ一発の魔力弾で、な!!』

魔力弾を一発放った。その威力はほぼB

普通ならこの程度では強壮結界にはひびすら入らない

だが

ビシ

着弾した瞬間そこから大きなひびが出来上がった

ピキ・・・びき・・・ピキキキキキ・・・

そしてそのヒビは結界全体に広がって行き

バアアアアン！

強装結界は呆気なく割れてしまった

そして少年はシャルマルの方へ向き直り

『以上、魔力についての講義でした。　じゃ俺は適当にあいつ等の相手しとくから、シャルマルはさっさと帰りなよ。　あいつ等にもすぐ帰るように言っし。』

そう言っつてその場を後にした、シャルマルもハツとし転移する

ちなみにクロノは少年がデバイスを展開していた所で攻撃しようとしたが、そのまま返り討ちにあっていた。　説明しながらの片手間で。

「何なの・・・あの子・・・」

「こんな・・・どうすれば・・・」

自慢とまではいかないものの、局員十数人によってはられた強装結界をたかだかBクラスの魔力弾一発で破壊されてしまうのを見たりンディとエイミィは頭を抱えていた

「さーて、おーいヴォルケンズ!!
時間稼いでいてやるからさっ

さと転移しろ」

「すまないな。」

「やられんなよ」

「俺がやられるとでも思ってるのか？」

「それはないだろうが、油断は禁物だぞ？」

「『小穴大船を沈める』『窮鼠猫を噛む』『千丈の堤も螻蛄の穴を以って潰ゆ』『油断大敵』、全て日本の諺だ。油断なんかしねえよ。シグナム」

「小話の落ちとかじゃねえよな？」

「……お前が何を言いたいのか分かんないんだけど……」

「いや、なんでもねえ……じゃああたしも先に行く……任せたぞ」

「この勝負は預けたぞ、テストロッサ！」

シヤマルで連絡を受けていたのであろう、ヴォルケンス達は少年の登場に驚いた態度はせず、お礼を言い転移していった。……ひと悶着みたいなのはあったが

「さて、と……」
「どう言ってもりだ!!」

黒ローブの少年がそれを見送っていると、クロノが再び復活してや
つて来た……。回復が早い……。思ったより結構撃
たれ強かったのか……

「なにが？」

「あいつ等を逃がしたことだ。公務執行妨害だぞ!!」

「……。これ三度目だね？ 管理外世界で出しゃばるな！

！ 此処ではお前らの法律は適用されないんだよ！」

グ……。となるクロノ。だが今回の彼には余裕があった

「そうだな……。確かに前はそうだったが……。今回は立
派な理由がある！ 広域犯罪者に関しては管理外世界は関係ない。

「そしてお前達は広域犯罪者だ！」

が

「へえ……それはなんでだい？」

「それは、（あ、先に言つとくけど、魔法生物襲撃犯つて内容だつたら、それ罪状にならないよ？）……なんだと！？ そんな訳無いだろ！！」

あっさりつぶされた

「じゃあ言わせてもらうけどさ、俺達は確かに魔法生物を襲撃した。だが、その現場はいずれもお前らが管理外と名を打っている世界。何度も言うようだが、わざわざ管理外と言っておきながら、そこでおこった内容にしゃしゃり出てくるのはお門違いだ。さらに！ お前らの法に書いてある魔法生物に関する罪状は『管理世界内への未知の魔法生物の持ちこみ』、『危険種指定された魔法生物の違法取引、無断所持』、『絶滅危惧種に登録された魔法生物の非許可での手出し』、そしてペットとして扱われている魔法生物に対しての『ペット関連の罪状』、これだけだ。そして俺達はこれらの罪

状のどれにも反していない。」

少年は一度区切り、そして演説するようにクロノに話し……いや、叫びかけた

「それを踏まえて聞こう、クロノ」ハラウン執政官殿。俺達を犯罪者たらしめるものはなんだ？俺達に適用される罪状とはなんなのだね！！」

「な……な……」

完全に言葉を無くすクロノ。だが、事実管理局の法には基本管理内世界のための法律しか書いていない。管理外についての法律など無いに等しいのだ。つまりクロノに言い返すことはできないのである。

「お前がこれに関して俺らを犯罪者呼ばわりする理由は何処にもないんだよ。勝手に法律に違反していない事柄を事件にして、勝手に存在しない罪状を作って、勝手に俺らを犯罪者にするな！！」
「ぐ、ぐぐぐ……」

「わざわざお前らの法にのっとって行動してやったんだ。ありがとう
たか思ってくれよ？」

皮肉をこめて少年は言う。クロノは怒りから肩を震わせるが、前回の鉄を二度と踏まないように、攻撃したい思いを必死に抑えながら言う。

「ぐ……確かにそうだな……。だが、そっちには闇の書を持っている奴がいる。『搜索指定ロストロギアの無断所持』は立派な犯罪だ！そして、そのお前達はその共犯者。罪科は十分だ！」

「……………ま、普通ならそれが正論かもね。」

「……………どう言うことだ」

少年は面白くなさそうに言い、クロノは今までにない少年の反応に眉をひそめる

少年は人さし指を上げた

「一つ目。まあ分かんと思うけど、俺は闇の書の主の知り合いだ。だが、そいつは管理局の存在……。俺は一応俺が教えたが、管理局の法に関してはまだ何も知っていない。なんせ魔法の存在を知ったのがつい半年前だからな。知らない法律を守って無いから逮捕するのは少しひどすぎる話だと思わないか？」

「……………え？」

少年は次に中指を上げながら言う

「二つ目。まあ俺が行動してる理由の一つなんだけどさ、ヴォルケンズはあいつにとって掛け替えの無い家族で。そして、ヴォルケンズにとってあいつは何としてでも、それこそ主であるあいつの命令にそむいてでも助けたい奴なんだ。そして闇の書を回収するってことは、あいつ等を離れ離れにさせるってこと。あいつ意外ともろいところがあるからな、そんなことになったらあいつは絶望して自殺しかねない。お前らはそこまで、あいつの幸せを無視してまで闇の書を回収するのか？ まあ、お前らがあいつの命よりも回収を選んで、どっち道俺がそんなことは許さないが。」

「な・・・・・・・・・・」

クロノは目を見開く

隣でもなのは達が驚きの表情をしている

そして少年は薬指を上げていった

「三つめ。そもそもさ、ジュエルシードの時から思ってたんだけどお前ら、対象のロストロギアについてまともに情報集めてねえだろ。」

「そんな訳無いだろ！」

「じゃあお前らはものすごい無責任な組織ってことかな？俺とお前が初めて対峙したあの時。俺が抑えなかつたらジュエルシードはさらに暴走して、きつと滅んだたよ地球。なんせジュエルシード

ドの一部の魔力だけでも軽度の次元震が起こるんだ。それが六つも集まって、さらに共鳴してたんだから……。地球は時の庭園と同じ運命を辿ってた可能性は十分あるよね。」

「……。あ……。。」

事実そうであったため、あの場面での自分の言動の危うさに気づき、言い返せなくなるクロノ

「それに。どっち道、お前らが闇の書について何にも知らないのは明らかだ。お前らの言動、知ってるこっちから言うと、ばからしいの一言に尽きるからな。問題点すら正確に把握してないんだからさ。」

「な！ どう言っことだ！！ 言え！！」

クロノが叫ぶが、それを少年は拒絶する。

「どうせ話したって活かせないし、そもそも教える義理はないよ。」
「ずいぶん言い方だな。」

「俺、管理局信用しちゃいないし。第一、それが人にものを聞く態度か？」

「つまり、僕達の邪魔をすると言うことか……。」

「その答えはYesだよ。なんせお前らのせいで最悪な結末に向

かいかけてるからね。 阻止させてもらう。」

「戯言を。 僕達はそんなことはしていない!!」

「無知であることは恥ではない。 恥をしるべきなのは、知らないことを知らないと自覚せず、知らないことを知っていると思ひ込み、自分は知っていると言ひ張って（ビュン!）」

そう呟いていた瞬間、コートの子を一発の青色の魔力弾がかすつて行つた

その目の前にはデバイスを構えるクロノ、どうやら我慢できなくなつたらしい

「結局……力づくか」

「お前を連行して……全てはいてもらう!」

「……傲慢だな……いいぜ、相手してやる。」

クロノの叫びにそう呟き、ふとなのは達の方向を見る

「で、なのはとフェイトはどうする? 戦わないなら此処から離れてほしんだが。」

それを聞き少し黙るなのはとフェイト、そして

「私達が一緒に戦ったら卑怯になりませんか？」

フェイトがそう尋ねるとコートの少年は首を横に振った

「いや、それも一応立派な戦略の一つだ。それに、戦場では一対多数や不意打ちなんてことはザラだからね。むしろ正々堂々って方が異常だ。別に何とも思わないよ。」

それを聞きなのはとフェイトは顔を見合わせうなづく。

「それなら……私達も戦わせて下さい！」

「たぶん君の言うことは全部本当なんだと思う……………」

それを聞いてクロノがギョツとするが、なのはは続ける

「でも、それでも私達はこんなところで、こんな形で立ち止まりたくない。だから、私達が勝ったら、教えて！君が知っていて、私達が知らないことを！！」

そう言い、フェイトとなのははデバイスを構える。アルフも構えの格好を取った

「良いだろう………」

そして、それを聞いたコートの少年は口元をゆがめて言い

「でも、守護者の第十三柱を任されてきた俺に、そう簡単に勝てると思わない方がいいよ！」

そう言い放ち、コートの少年は突っ込んで行った

《Acceler Shooter》
「アクセルシューター！」
《Plasma Lancer》
「プラズマランサー！」

「ステインガーブレイド・マルチシフト！」

三人から複数の魔力弾が放たれる

「竜之炎壱式 『なだれ崩』」

ドガガガ……

「風よ！」

ヒュウウウウウウ

少年は複数の火球を生み出し、全て相殺させ同時に風で両手に四本ずつ短剣を形作り、

ヒュン

それを高速で放った

なのははバリアを貼り防ごうとし、フェイトとアルフとクロノはそれを避けようとし、四人は散り散りになる。

フェイトとアルフとクロノは避けきることが出来たが

パキ ピキ

「え？ キャアー!!」

なのははバリアをあっさりと貫通されてしまい、モロに食らってしまっただ

「なの「気にしてる暇あるの?」……E?」

それを見て叫ぶクロノだが、瞬間加速で一瞬にしてクロノの背後を取った少年に、後ろからポンと肩を組まれ言葉を詰まらす
そして

「撃・爆碎!!」

ズガアアーン!

「ぎゃああああ」

少年がクロノを殴った瞬間、その接触面で爆発が起こり、クロノは吹っ飛ばされる

「はああああああ！」

そこへ、アルフが正面から突っ込んで来た
構える少年、そこへ

「……ああああああ！」

少年がアルフに気を取られた隙に、デバイスを一瞬フォーム
先端に魔力斬撃用の圧縮魔力の光刃を形成した大鎌サイスの様な形態
にし、ソニックムーブで背後から奇襲を仕掛けようとするフェイ
ト、だが

「え？」

「奇襲の時に叫び声をあげてどうする………」

少年は後ろを向いたまま、魔力刃を片手の魔力を纏わせた三本の指
(親指・人差し指・中指)だけで受け止め

「な！……うわぁ！」
「フェイ……ぐわ！」

そのままアルフに向かって投げつけ、ぶつけた

「フェイトちゃん、アルフさん、どいて……！」

ふと見ると、ややボロボロになっているものの健在なのはが、魔力の収束を終えようとしているのが目に入った

急いで離れるフェイトとアルフ

だが、少年は動かずにそれを見据え呟く

「破道の八十八」

そして

「スターライト……ブレイカー……！！！！！！」
「飛竜撃賊震天雷砲」

そしてなのはのデバイスの先端からピンク色の巨大な収束砲撃が、

少年の手から巨大な雷の光線が放たれ

ズガアアアアアアアアアア！！！！

二人の砲撃は轟音を立てぶつかり合い……相殺された

「そ……そんな……」

自分の最強魔法を相殺され、呆然とするのは

そのとき

「ステインガーブレイド・エクスキューションシフト！」

いつの間にか少年の頭上に移動し大量の魔法刃を展開し、それを放つクロノ
さらに

ズガガガガガ

いつの間にか再び展開していた武装局員たち、十名が四方八方から一斉に少年に向かって魔力弾を放った

全て少年に命中し、刻は魔力残滓に包まれる

「な！」

「クロノ君！」

フェイト、アルフ、なのははクロノの所へ向かう

「やりすぎだよ！」

「このままじゃあ負けてしまってたんだ！ そんなこと言ってもらえなかっただろ！」

フェイトの叫びにクロノは食ってかかる。ただクロノ自身にも罪悪感があり、やや顔をしかめてはいたが

「だからってこんなこと………」

「確かに非道だったかもしれないけど、あいつは一对多や不意打ちは立派な戦略だと言ってたんだ。文句は言えない筈だよ………」

「でも………」

後味の悪い結果に喜べないのは達………だが

「ああ文句は言わないよ。」

煙の向こうから聞こえて来た声にギョツとする四人、そして煙が晴れて行くと

着ているコートよりもさらに深い漆黒の、闇の黒炎で燃え上がっている少年がいた

「な……」

「無傷……」

「そんな……」

「なんだよ……あれ……」

「フロ・アルマティオー家ム・コアブリカウツタイオー
術式兵装『獄炎煉我』、闇の補助魔法だよ。」

そう言いながら少年は魔法を解除した

「く……」

「さて、時間も遅くなってきたし、そろそろ終わらせようか？」

「ぐ……気をつける！ どんな魔法を使ってくるか分からない
！」

武装局員たちに警告し、自らも身構えるクロノ
そしてなのは達も身構える

「ああ、そうだな………うん、じゃあ予告してあげる。
次に俺が放つのはミッド式の魔法だ。ちなみにやるのはなのは
のアクセルシューターの亜種のようなもの、つまり高速で対象に向
かう複数の魔力弾。」

ビュン

「な！ どこに」でも………「………ッッッ！！」
「上だ！！」

一瞬だなのは達よりもさらに上空に移動し、逆さまに浮かぶ少年、
その手には二つの銃型のデバイス

「カードリッジロード………」

ジャキン、ジャキン

両方から二発ずつ、計四発のカードリッジがロードされ、

「分かったからと言って………」

足元に巨大なミッド式の魔法陣が展開され

「よけきれると思うなよ!」

なのは達の方向に向けた二丁のデバイスの先端が魔力でぶれ始め

《Despairing rain》デスヘアリングレイン「絶望の雨!」

ズガアアアアアアン!!!!

そして魔法が放たれる

その放たれる様はなのはのアクセルシューターとほぼ同じだった
ただ決定的に違う三つの点を除いて

一つ目は魔力弾の色、なのはの魔力色であるピンクではなく少年の
魔力色である漆黒になっている

二つ目はその速さ、それぞれの球の早さはただでさえ早いなのはの

アクセルシューターをさらに上回っている、まともな目で追えない
速さで魔力弾が対象に向かって駆ける

そして三つ目……数が……圧倒的に違った。その数最低
でも480!! なのは達と武装局員合計十四名、それぞれに三十
を大幅に超える魔力弾が殺到した!!

「……………うわああああああああああ!!!!!!」
「……………」

なのは達や、局員達はなにも為す術もなく………と云うか、例
え何か為しても文字通り焼け石に水でしかないような猛攻を受け、
全員が撃墜され、気絶した

「・・・・・・・・・・ちょっとやりすぎたか・・・・・・・・」

地面に降り立ち辺りを見渡す少年

「ま、死んでないし。大丈夫だな。」

そしてそう呟くが

「う……」

動く気配、そちらを見るとフェイトがいた

「ま……まだ……」

「……やめとけて。いくらなんでもこの状況が分からないことわないだろ。」

そう言いながら少年は手を合わせ、近くの壁におもむろに手を付ける、そこから電気のようなものが発生し、戦いによって被害を受けた建物や道路などが修復された

「すごいね……」

「錬金術……物を生成するのに特化した魔術さ。対象について正確に理解しないとリバウンドでヤバいことになるけど……ま、それを含めても便利さは一級品だね。」

そっかと呟くフェイト、そしておもむろに尋ねる

「ねえ、闇の書の主のこととかのあの三つって……本当？」

「……ああ、全部本当だよ。」

「私のやってきたことって間違ってたのかな？」

フェイトがうつむきながら言う

「さあね、自分で考えな。絶対に正しいことなんてないんだからさ」

「え？」

少年のよく分からない答えに首をかしげるフェイト

「一面だけの出来事ってのはほとんどない、たいていのことは多面に渡ってるんだ。ある一方で見ると正しく思っても、他方から見たら悪以外の何物でもないって具合にね。それが分かり始めたのなら、後は考えるだけさ。何が自分にとって正しいのか、ね。」

「そう、自分にとって。例えばある隊の仲間が窮地に陥いつていたらとしよう。『仲間を見捨てる訳にはいかない、すぐに助けに行こう』と『行けばこちらが多大な犠牲を払うことになる、それにまだその必要はない、むしろそれに釣られてきた敵を打倒することを優先するぞ』。さてどっちが正しいかな？」

「それは……やっぱり助けに行く。」

「うん、でもそのせいで任務に失敗したらどうしようもないよね。」

「任務よりも人命……」

「その任務の結果がひいては自分の味方の数百人の命にかかわる内容ならどうする？」

「え？……それは……」

黙るフェイト、それに少年は頷く

「そう言うことぞ。さて……おい、どうせ見てるんだろ。モニター出せ。」

そう言い空に向かって言う少年、少したった後モニターが表示され、そこにリンディーが現れた

『やっぱりわかるのね』

「当たり前だろ、お前らが遠距離から同員たちの行動をモニターしない訳無いから何処から見てるのは容易に想像はつく、ちなみにサーチャーの隠蔽もずさんだからあると思って調べたら一発だ。」

『そう……』

「で、コイツラさつさと回収してくれな。一応後十分後に自動的に境界が解除されるようにするからそれまでに」

『まって、ずうずうしいみたいだけど、あなたの知ってること教えてくれない？ こちらの不敬は謝るから。』

「……………だめだな。」

『私達は……………信用できないから?』

「どっちかと言えば……………あんた達は比較的信用できそうだな。でも管理局は信用できない。」

『それは、どついう……………』

「……………そうだな……………」

そう呟きながら少年はちらっとフェイトの方を見る

「ま、少し楽しめたから教えてあげるよ。そうだな、自分達の居る世界の犯罪なくして無い奴らがその範囲拡大してよそのとこに口出してくんとか、自分達の法をよそに無理やり押しつけてくんとか色々あるけど。ま、とりあえず……………お前ら不正がひどすぎ。」

『え?』

「俺がつかんだ情報の一部をやるよ。後ついでにこっちのカードリッジシステムの理論書もやる。お前らのやり方だと体に負担がかかり過ぎだ。やりすぎたら廃人になるぞ。調整し直しとけ。」

そう言ってモニターの方へ腕を向ける少年

『あ、データが……………これって……………』

モニターの向こうからエイミィの声が聞こえてくる

「さて、じゃあ俺は行く。俺の行動の理由を知りたいのなら無限書庫で闇の書を調べ直すことだな。そして俺がお前らに言ったことと合わせたら見えてくるはずだよ。」

「あ……あの……」

そう言って立ち去ろうとする少年にフェイトが声をかける。だがなかなか言い出せずにどもっている。

その時ふと少年が言った。

「悩んだり迷ったりするのは恥ずかしいことじゃないよ。」
「え？」

唐突に話題を振る少年にフェイトは疑問の声を上げるが、少年はそのまま話を続ける

「この世の中に完璧な奴はいない。数年間裏の世界にいた俺だって簡単な策にはめられたこともある。例えば、殺気をぶつけられて思わず振り向いたり……とかかな。」
「……あ……」

それを聞いてフェイトは目を見開く

「そつだ、ちなみにお前に質問したやつの場合の答えはな、場合によりけりだよ。百人の中に俺の守りたい奴がいて一人がそうでないなら俺は百人を。一人が俺の守りたい奴で百人の中にそんな奴がいらないなら一人を。一人が助けたい奴で、さらに百人の中にも助けたい奴ならば両方を助ける。傍から見ればこんなものは馬鹿らしいの一言かもしれないし、俺もこれが正しいことだとは思わないけど、この意思を変えるつもりはないな。」

そつ言つて少年は消えた

竜之炎壺式 『なだれ崩』

《烈の炎》より、烈火の技の一つ。ちなみに捌式はぢしきまであります。この技は炎の玉を作りだすもの。ちなみに数や大きさは任意で変更可能、さらに途中で分割することも可能である。、ちなみに作者は同時竜『なだれ崩』×『こくう虚空』（虚空は圧縮された炎をレーザーよろしく打ち出す技。威力は烈火の持つ炎の型の中で文句なしの一番）がお気に入り。あのストライクフリーダムみたいな一斉砲撃の様が・
・
・。

撃・爆碎！！

《こわ や我聞》より、殴打に乗せて氣を爆発させる技。技の発動と同時に轟音・閃光・爆煙が発生するため、非常に派手。

破道の八十八「飛竜撃賊震天雷砲」
ひりゅうげきぞくしんてんらいほう

《BLEACH》より、死神の使う鬼道の「破道」（はどう）（相手を直接攻撃する技）、ちなみに鬼道は数字が上がるほど一般的に威力が高くなる。掌から巨大な雷でできた光線を放つ技。

プロ・アルマティオーネ
術式兵装「獄炎煉我（シム・ファブリカートウス・アブ・インケン
デイオー）」
㊦

《魔法先 ネギま！》より、詠唱により闇の炎をまとう。簡単に言えば攻撃・防御力アップ。スピードダウン。魔力を吸収効果付加。

ちなみに詠唱は

アギデー・テネフラエ・アヒュシス・インケンデンス
『**来れ深淵の闇、燃え盛る大剣！！**』
エト・インケンテイウナギニス・ウンブラエ・イニミキテチカククオオニス・
闇と影と憎悪と破壊、復讐の大焰！！
インケンダント・エト・メー・エト・エウダト・ソールム・インケンデンス
我を焼け彼を焼け、そはただ焼き尽くす者
インケンテイアムナエ
奈落の業火！！！！
スタグネット
固定！！！！
フロ・アルマティオー家ム・フアブリカレウズイオー
術式兵装「獄炎煉我」』

です

046 刻vsアースラ組（後書き）

黒 「なんかグダグダになった。」

刻 「わざわざあんなこと言いながら破壊する必要無かったんじゃないか？ あんなことしなくても、俺なら余裕で破壊で来たぞ？」

黒 「うん……そんなことを京谷がやってた。」

刻 「……じゃあ先に侵入して中から。中から破壊を……」

黒 「御剣さんがすでにやってた。」

刻 「……ごめん。」

黒 「いや、別にいいよ。
では感謝コーナー。この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。

junky様、エミリア&志保様、HAZUKI様、ソラト様、バルディッシュ様、緋水様、ロア様、ソロモン様、感想をありがとうございます。」

刻が言っていた無知であることは云々は、ソクラテスの『無知の知』から作っています。あんな言い方にしたのは挑発のため

臨時本部

「カードリッジシステムは扱いが難しいの……」

リビングでエイミーが、なのはとフェイトに説明を行う

「本来ならその子たちみたいに繊細なインテリジェントデバイスに組み込むような物じゃないんだけどね……本体破損の危険も大きいし……危ないって言ったんだけど、その子たちがどうしてもつて……よっぽど悔しかったんだね？ 自分がご主人様を守ってあげられなかったことや……ご主人様の信頼に応えきれなかったことが」

「ありがとう、レイジングハート……」

《All right》

「バルディッシュ……」

《Yes sir》

なのはとフェイトが自分のデバイスに御礼を言い、レイジングハートとバルディッシュがそれぞれそれに答える

「モードはそれぞれ3つずつ。 レイジングハートは中距離射撃のアクセルと砲撃のバスター、フルドライブのエクセリオンモード。バルディッシュは汎用のアサルト、鎌のハーケン、フルドライブはザンバーフォーム。だけどフルドライブはなるべく使わないように……特になのはちゃん」

「はい？」

「なのはちゃんの方は反動がすごくてまだ未完成なの。 フレーム強化をするまでエクセリオンモードは起動させないでね？」

「はい」

「それに、これはフェイトちゃんもね。 一応あの子がくれた技術書を確認が終わったら二つとも改修するけど、それでも負担はかなり大きいから。」

「えっと……つまりどうなっちゃうんですか？」

なのはが質問する

「まずデバイスが耐えきれなくなって破損する可能性があるね。それになのはちゃんとフェイトちゃん自身の体も耐えきれなくなっ

て、潰れちゃうかもしれないの。」

「え?」

「潰れる?」

「えっと……つまり……使いきると身体自体に見えないダメージが溜まって行って、体に異常が出てしまうかもしれないし、リンカ コアに異常が出来て、魔法が以前よりもうまく使えなくなっちゃう可能性が出てくるんだ。」

「そうなんですか……」

「まあ、あの子のおかげで大分軽減は出来ると思うけど、それでも……ね。だから気をつけてね。」

「はい。」

「分かりました。」

「それにしても、その技術書に書かれているのは信用できるのか?」
「ええ、大丈夫よ。」

クロノの質問にプレシアが答える

「私とアリシアとエイミィと、後本局にいるエイミィの知り合いの数人で調べてるけど、大丈夫そうよ。問題個所は見当たらなかったわ。」

「ついでに言えば、レイジングハートとバルディッシュのエネルギー効率に20%アップ、負荷にいたっては60%近くの軽減を見込めるの。後、サブとしてフレームとかの技術書もあったからなのはちゃんのデバイスのフレームの問題も一応解決したよ。」

「『これを書いたのは誰!?』って、マリーが目を輝かせながら聞いて来ました」

プレシアに続けてアリシアが発言し　アリシアは魔導師としての才能には恵まれなかったが、技術者としての才能はプレシアの血を色濃く受け継いだらしい　、最後にエイミイが苦笑いしながら報告した

「そう・・・所でクロノ、あっちの方は？」

「はい、今信用できる数名に頼んで調べてもらってます。」

「あれって？」

「あ、そう言えばなのはちゃんはまだ知らなかったんだね。」

「あの子はカードリッジシステムとその関連の技術書のほかに・・・」

・・管理局の汚職リストを送って来たの。　管理局を信用できない理由の一つとして。」

「ただの嘘と考えたいけど・・・今までのあいつの行動から、そうも言ってられない。」

「もし嘘だったら、名誉毀損罪とかにできるけど・・・そんなことをあの子がするとは思えないから。　つまりあの情報は本当である可能性が高いの。　だからこっちで改めて調べてるってわけ。」

首を傾げるなのはリンディとクロノが説明し、エイミィがそれを補足する

リンディとエイミィは疲れたような顔を、クロノは苦虫をかみつぶしたような顔をしている

「さて、じゃあこの話題は此処までにしといて・・・問題は闇の書ね」

「ええ、もしあいつが言ったことが全部本当のことなら・・・どうも腑に落ちません。　行動の理由が全く分からない。」

「ん？　闇の書ってのも、ようはジュエルシードみたくすごい力

がほしい人が集めるもんなんですよ？ だったら……その力がほしい人の為にあの子たちが頑張るってのもおかしくないんだと思うんだけど……」

アルフの質問にハラウン親子は首を横に振る

「第一に闇の書の方はジュエルシードみたいに自由な制御が効くものじゃないんだ……」

「完成前も完成後も純粋な破壊にしか使えない。 少なくともそれ以外に使われたという記録は一度もないわ……」

「そっか……じゃあ、少なくともあいつ等が行動する理由にはなりそうにないね。 じゃあなんで……」

「考えたくなかったんだけど……だけどこれならつじつまが合う……」

アルフの言葉に呟くりンディ、そこにユーノがたずねる

「え？ どう言つことですか？」

「……多分……あの子と私達持つてる情報は……違つ。 そして間違つてるか……不足してるのは……こちら方である可能性が高いわ。」

「そんな馬鹿な!!」

「クロノ、考えてみなさい。あの子達の言動には私達が持つてる情報ではありえない物がたくさんあったわ。」

「それは……………あ……………」

クロノが反論しようとするがリンディに言われ考え、顔色を変える

「例えばなんですか？」

情報が不足しているため、会話について行けないのは達は尋ねる

「そうね……………たとえばあの騎士たち……………彼の言動から彼女達は闇の書の守護者に間違いないはずだけど、その性質が違うわね。……………まず、彼女達は人間でも使い魔でもないの。」

「……………え！？……………」

驚くのは達にクロノは教える

「彼女達は闇の書に合わせて魔法技術で作られた疑似人格……………
・主の命令を受けて行動するただそれだけの為のプログラムに過ぎない筈なんだ……………」

「その……使い魔でも人間でもない疑似生命っていうと、私みたいな……」

「違う！！ フェイトは生まれかた少し違っていただけでちゃんと命を受けて産み出された人間でしょ！」

恐る恐る呟くフェイトにアリシアが叫ぶ

「あ……ごめんなさい姉さん」

「今度また同じようなこと言ったら怒るからね。」

「うん……」

「……………」

「あつ！！ モニターで説明しよっか？」

エイミイがしんみりした空気を変えようとそういつてモニターを開き闇の書を中心に守護騎士たちが映し出した

「守護騎士達は闇の書に内蔵したプログラムが人の形をとったもの。闇の書は転生と再生を繰り返すけど……この四人は闇の書と共に様々な主の元を渡り歩いている」

「意思疎通の為の対話能力は過去の事件でも確認されているんだけ

どね……。。感情を見せたって例は今までにないの」

それを見せながらクロノとエイミイが説明するが、なのはとフェイトはそれに疑問の顔をする

「でもあの帽子の子、ヴィータちゃんは……怒ったり悲しんだりしてたし……」

「シグナムからもはつきり人格を感じました。成すべきことがあるって。仲間と……主の為だって」

「ええ……。。私達の情報では彼女達に感情はなく、闇の書の蒐集と主の護衛をし、主の命には絶対に服従し行動するだけのはずなのに、実際は彼女達は鮮明に感情を見せていて、しかもあの子の言うことが本当なら、彼女達は闇の書の蒐集と主の護衛以外のことをしていて、しかも主の命令に背く事が出来る……。。全部こっちが持っている情報と違うわ……。。」

リンディは説明を終えると同時にモニターを消した

「つまり……あいつの言った通り……僕達は闇の書についてまともには知っちゃいなかったということか……」

俯き眩くクロノにリンディがうなずく

「それどころか間違った情報を信じていたみたいだわ。おそらくきつと間違った情報はこれ以外にももつとある。それに多分、私達は闇の書のとても重大な部分を知らないのよ。そして多分それが、あの子があの子達と行動している理由……クロノ。」

「分かりました。」

クロノは顔を上げ、力強く頷いた

おまけ

1065

「……………そうだ、ユーノ。君も手伝ってくれないか？」

「え？ 僕？ 良いけど……………何するの？」

「そうだな……………とにかく、先ずあの二人に会わないとな……………
……………」

「あの二人？」

「会ったときに説明するよ。」

「えっと……………ひょっとして……………お偉いさん？ 正装とか
で行った方がいい？」

「いや、そんなもの必要ないよ。別に何も持っていく必要もない
し。」

「あ、でも一応気をつける点はあるよ？」

話す二人にエイミーが入って来た

「なにかあるんですか？」

「うん、食べられないように気をつけてね」

「分かりました、食べられないよう………はい
!?!」

頷き復唱する途中で気付き、ギョーンとエイミーの方を向くユーノ

「ユーノ君って女顔だから」

「え?……ちよ……。」

おどおどするユーノの隣ではクロノが頭を抱えていた

047 反省会(?) (後書き)

刻

「また俺の出番なしかよ!!」

黒

「すまん!! まあ良いじゃないか、お前の登場頻度はぶっちゃぎりで一番なんだから偶に一切登場しない話があっても!」

チャキ・・・

黒

「さて、その構えてる拳銃型超電磁法をおろせ・・・ソニア!!」

す・・・

刻

「ああ、こっちはこっちで斬鉄剣構えてる!」

ソニア

「私にいたっては登場どころか、私のことをさす言葉さえないよね?」

黒 「えつと……このシヨコラで勘弁して？」

ソニア

「うん、いいよ……」

黒

「（いいんかい！！！！いや、まあ許してくれて何よりだけどさ
！！！」

俺の命<シヨコラ！？ 正直物申したい（がし！）……あ。」

刻

「辞世の句は思い浮かんだ？」

黒

「えつと……紙と鉛筆を取りに行つていいですか？ 大丈夫です。一年以内には戻つてこれると思いますから……たぶん。」

刻

「お前の血文字で書け。」

黒

「ぎゃあああああああ……」

ソニア

「モグモグ……あ、では感謝コーナー！」

この作品を読んでくれた皆様に心からの感謝を。

バルディッシュ様、ギャラリー様、HAZUKI様、緋水様、神無月様、ソロモン様、リトラ様、感想をありがとうございました。」

「ここら辺がターニングポイント、そろそろ終盤に向かって動き始めます……」 血文字

048 (前書き)

祝

総合評価2000pt突破

お気に入り登録700名突破

pv87万突破

管理局本部の一室

「艦長、裏取れました。」

「で、どうだった？」

「はい、全部……本当でした……。」

「そう……。」

エイミィの報告にリンディが頭を押さえながらため息をつく。

彼がリンディ達に贈ったデータには、管理局員の不正のリストがその証拠も付属されて事細かく書かれていたのだ。その人数もさることながら、その中には相当たちの悪いことをしているのが多々含まれている。それらは文字道りリンディ達の頭痛のタネとなっていた。

「着服、横領、裏金、横流し、その他にも……よくまあ、こんなにも……。」

「はい……。」 しかもあの子の言うことが本当なら……
・いえ、きつと本当なんだと思いますけど、此処に書かれているの

はほんの一部……つまりもつといるってことですね。その中には此処に書いてある人達よりも軽度の人もあるかもしれないけど、多分もつとひどいことをしている人が……。それこそ管理局の信用を一瞬で失墜させるようなことをしている人がいてもおかしくありません。此処に書いている人たちでさえここまでのことをしていますから……。」

「ええ……こんなものを見たら、たとえ私達は信用できても、管理局を信用することは出来ないと言うのもうなずけるわ。……。」

「もう逮捕に向かわせました。半日中には全員、縄についています。」

「そう。」

エイミイの報告にリンディは頷く

「それにしても、彼の言った通りね……。」

「え？」

「私達は法を守るよう言いかけてる張本人なのに、自分達の足元がこんな酷いことになっていることに気づかないままで、しかも行動する範囲をどんどん広げて行って、あまつさえその世界の人達に私達の法を押しつけているのだから。これを知っている人から見たら、ふざけるなの一言ね……。」

「そうですね……。」

ため息をつく二人の姿があった

無限書庫内

此処は無限書庫、管理局本部にある、管理局が誇る膨大な量の蔵書を誇る図書館である

だがなぜか此処、まともな資料整理をするどころか、どんどん新たに手に入った書物を手当たり次第に適当に突っ込んでいるらしく、どこにどんな事を書いたどんな資料があるのかだれも把握していない・・・と言うかできない状態である。

そのためここは全くと言って良いほどデータベース化していない

というわけで、此処で目当ての情報を探す場合、この膨大な書物の中から先ず表紙の題名からこれかなと思うものを選び、一つ一つ調べて行かなければならないと言う何とも人を馬鹿にしたような状態になっている。

ちなみにリベル「アークにある大規模図書館『知識の泉』はしっかりとした管理をしているのでそんな手間は不要。ってか規制の掛かっている書物以外の主要な書物のほとんどは電子書籍化してあるのでそもそも資料を取りに行かなくても手元にあるコンピューターで読むことが出来るようになっていたりする。まあ、そのような状態にできたのは本の虫様達が文字道り（自主的に）寿命を縮めながら 具体的に言うと、熱中し過ぎて気付いたら三日間飲まず食わずだった・・・ってぐらいじゃもう驚けないレベル 膨大な資料を読みふけり、整理してくれたからと言う裏話があったりする。

《閑話休題》

ユーノは無重力空間内に浮かびながら座禅を組むような格好をして、
検索魔法を並列して駆使し、十数冊の本を一度に次々と調べて行き、
それを補佐するリーゼアリアとリーゼロツテはそれを感嘆の表情で
見る

このようになったのは二・三日前のこと

〈回想、管理局のとある一室〉

「クロスケ〜？ お久しぶり〜」

「ロツテ！？ わ・・・離せ、こら！！」

「なんだと〜？ 久し振りにあった師匠に冷たいじゃんかよ〜 う
りやりりや・・・」

「アリア！ これをなんとかしてくれ！！」

「久し振りなんだし、好きにさせてやればいいじゃない？ それに、
まあなんだ、まんざらでもなかるう？」

「そんなわけが「ニヤア〜？」うわああああ！！」

その部屋の中ではクロノを押し倒すリーゼロツテの姿があった。クロノはリーゼアリアに助けを求めるが受け流されてしまう

「リーゼアリア、お久し」

そしてそんな二人を無視してアリアに挨拶をするエイミィ

「ん〜!! お久し」

「リーゼロツテも相変わらずだね〜」

「我が双子ながら時々計り知れんことはあるな」

「ふう、ごちそうさま」

そんな会話をしていると、満足そうな顔でロツテが顔を出したエイミィが苦笑いしながらロツテにも挨拶する

「リーゼロツテ・・・お久し」

「おお〜! エイミィ、お久しだ・・・ん? なんか美味しそうだなネズミっ子がいる」

ロツテもあいさつしようといイミイの方を振り向くが、その時後ろに控えていたユーノに気付き、ビュンと近寄る

「どなた？」

「うつ・・・」

ユーノは思いつきり身を引く。それが彼女の言動からなのか、それとも自分がフェレットもどきと言つネズミ科に変身できることから来る無意識の警戒行動からなのか・・・。

まあ十中八九前者だが

「なぜ・・・あんなのが僕の師匠なんだ？」

それをはた目に見つつ、体を起こしながらつぶやくクロノ

ちなみにその頬にはキスマークが・・・てめえ、良い根性してんじゃねえか！

「ああ・・・なるほど、闇の書の搜索ね」

「事態は父様から伺ってる。できる限り力になるよ」

「よろしく頼む」

「エイミーさん」

ユーノは小声で隣に座るエイミーに話しかける

「ん？」

「この人たちって？」

「クロノ君の魔法と近接戦闘のお師匠様たち。魔法教育担当のリーゼアリアと近接戦闘教育担当のリーゼロット。グレアム提督の双子の使い魔。見てのとおり素体は猫ね」

「んん？」

視線を感じたのがユーノの方を向き、手を振るロット

何だか背筋が凍るような熱い視線にユーノは顔を引きつりながら手を振りかえす

「な……なるほど……」

「2人に駐屯地方面に来てもらえると心強いんだが……今は

仕事なんだろう?」

「うん・・・武装局員の新人教育メニューが残っててね」

「そっちに出ずぱりにはなれないのよ、悪いね」

「いや、実は今回の頼みは彼なんだ」

その言葉にロツテの目が光る

「食っていいの!?!」

「いい!?!」

「ああ、作業が終わったら好きにしてくれ」

「なっ! おい、ちょっと待て!」

澄まして言うクロノにユーノは食ってかかり、それを周りの皆が笑う

「それで頼みって?」

「彼の無限書庫での調べ物に協力してやってほしいんだ」

そして気を取り直して聞くアリアにクロノが言い放った

「? どう言うこと?」

「僕達は二度守護騎士達と戦ったんだが、その際得た情報は管理局

から提示された事件資料に書かれているのと違ってたんだ。」

「で、その騎士達には……えっと……。」

この先を言っつて良いか分からずともるエイミー、それをクロノが引き継ぐ

「大丈夫だエイミー、前に僕が他言無用であいつのことは教えてる。で、僕が前言ったあの少年が守護騎士達と一緒に行動してたんだが、その時無限書庫で闇の書について調べ直してみるように言ったんだ。かあさ……艦長も事件資料の情報はもう信用していいか分からなくなつたから無限書庫で過去の歴史から闇の書の資料を集めるようにと。」

「そんなことが……。」

「分かつたわ……。」

それを聞いて姉妹は頷いた

く回想終了く

ってなわけでユーノは此処でリーゼ姉妹と調べ物をする事になった

その時のことを思い出したらしくふとアリアがつぶやく

「それにしても、管理局の事件の報告書が信用できないなんてね・・・」

「終わったことだつてことで適当に書いてたのかな？」

「そう言えば、クロノ達が事件資料の一部が機密事項として封印されていて、どうやっても見る許可が下りなかったっていぶかしんでましたけど、お二人は何か知っていますか？」

「ああ、あれね・・・」

「ごめんね・・・私達も見せてもらうようかけ合つたことがあるんだけど結局許可が下りなかったの。なんかたいして関係のないことだから見る意味はないと言われた。」

「それなら何で機密事項になつてるのかつて聞いたんだけどそいつも理由は知らなかったらしくて結局わからなかったんだよね・・・」

「そうなんですか・・・」

そして会話が終了し、三人は再び黙って黙々と作業を再開した

・ ・ ・ ・ ・ 海鳴 刻の家、リビング

そこにはテーブルをはさんで座るソニアとテストタロッサー一家の姿があった

刻は台所でお茶の用意をしている

こうなった理由は数刻前のこと

〈回想、 私立聖祥大附属小学校、 放課後〉

「えっと……刻？ ちょっといい？」

「ん？ どうしたフェイト？」

帰る用意をしていた刻の元にフェイトが来る

「えっと……今日、刻の家に行つて良いかな？」

ザワザワと騒ぎ始めるクラス

「あ、私も行くから」

「ああ、別にいいけど？」

「よかった」

「じゃあまた後で。」

そして刻の机から離れて家に帰って行くフェイトとアリシア

(ポン)

「刻、どう言うことか説明してもらおうか？　＼(^ ^メ)」

フェイトとアリシアが帰ったのを見計らって、刻の肩に手を置く・
と言うかつかんでくる少年A。　そしていつの間にか刻の周りを男
子生徒達が囲んでいた。
皆さんとてもいい笑顔です。

「どう言うことって？」

「何で転校して来てから一週間も経ってないフェイトとアリシアが
お前の家に行きたいって言うてるかってことだ!!」

「そうだぞ！お前俺達のアイドル、フェイトとアリシアに何をした
」！
」

「ファンクラブのメンバーでも無いくせに!!!!」

どうやら一週間と経たずに彼女達のファンクラブが出来上がって
いたらしい。　俺はあんたらのその行動力もすごいと思う

「いや・・・ちよ・・・」

「はぐらかされないぞ！」

「そうだ、きつちり答えてもらっつぞ！」

「・・・そうだそうだ！」

「いや・・・」

「何で誘っている訳でも無いのにお前の家にあの二人が行くことになんかなるんだ！」

「何だ・・・何をした・・・何をすればそんなに一気に仲良くなれるんだ！」

「ちくしょ～アリサやすずかだけじゃ飽き足らず、さらに二人もなのか!!」

「このやる～～!!」

「・・・」

「どうしてお前の家に行きたがるぐらい仲良くなっただよ！」

「普通、自分から家に誘うだろ？ 何で向こうから頼んでくるんだ

よー」

「白状しろ～～!!」

「・・・」

「うらやまし過ぎるぞこのやるっ！」

「・・・」

「ダメレ (^ _ ^) #」

「・・・」

「・・・」

背後からズゴゴゴゴと効果音の出るような殺気を放ちながらニッコリとほほ笑む刻に絡んでいた男子生徒全員が手のひらを返すように

異口同音に、まるで何度も練習したかのようにずれることなく謝罪した

〈回想終了〉

で、そのメンバーにアルフとプレシアも加わって来たというわけ。
まあもともとテストロッサー一家全員で来るつもりだったんだろうけど

「紅茶でいいよね？」

全員に紅茶の入ったカップを配り刻も席に着く

「さて、まあ理由は想像がつくけど。何の用？」
「あなたはあのローブの子で間違いないわね？」

刻の質問にプレシアが質問で返す

「ローブってのが……ソニア」了解「」

「ユニゾン……イン」

「このバリアジャケットを指してるのなら正解だよ。ユニゾンア
ウト」

そう言っただけはソニアとユニゾンし、バリアジャケットを展開し、
すぐに融合を解除する

その瞬間テストロッサー一家はアリシアを除いて目を一瞬見開いていた

「ってことは間違いないってことね。」

「ま、そう言うことだね。で、何処で分かったの？ あんたたち
以外はまだ俺の正体分かってないんだろ？」

「……何でそう思うわけ？」

「もし他のやつらも気付いてるのならあんた達一家だけで来るって
ことはまずないだろうからな。少なくとも、俺の知り合ってこ
とでなのはほぼ確実に同行してるよ。ついでに言えばその場合
何処からか俺達のことを監視するはずだけど、そんな気配は全くな
いしね。」

プレシアの問いに刻は紅茶を飲みながら答える

「そう……。」

「で、理由は？」

「……初めにひよつと思っただのはユニゾンデバイスについてクロノとユーノが詳しい説明をしてくれた時。」

フェイトが語り始める

「二人はユニゾンデバイスは簡単に作れないものだって言ってた。

管理局でも成功例がほとんどない。市場にも全く出回って無いと。なのにあなたはすでに持っていた。クロノはそういう場合は何処からかの盗掘品か研究所から盗んだものだって言ってたけど、ソニアは刻が作ったんだつたよね？」

「ああ、俺が五年ほど前に作った。まあ、その後もたまにアップグレードさせてるが。」

「そんなに前に可能にしてたのね……。」

「クロノは管理局以外にそんな技術を持っている所はないって言うてたけど、あのローブの子ぐらいなら持っていてもおかしくないと思った。そしてあなたはそんな技術をすでに持っていた。だから刻とローブの子は同一人物じゃあないかって思ったの。他にもあのローブの子は魔力反応を小さくできて、あなたの魔力反応も小さい。」

「なるほどね。で、当りを付けたってわけか。」

「一度疑い始めたら止まらなくなつて。」

「ま、そうだったみたいだからあの時俺はお前とアルフだけに分かるような答え合わせをした訳なんだけどな。」

刻は紅茶を又一口飲み聞く

「じゃ、俺にたどり着いたってことでいくつか質問に答えてやるよ。答えても良い範囲でだけど。」

「闇の書については教えてくれないの？」

「俺からは言わない。まあ、今ユーノが無限書庫で調べてるみたいだからそのうち大体のことは分かるだろ。」

「何でそんなこと知ってんだい!？」

「だって管理局の中に俺の協力者がいるもん。」

「え!？」

「ちなみにそいつらには基本口出ししないように言っておいてる、邪魔されることはないから安心しろ。あいつ等には後始末の時に動いてもらうつもりだからさ」

「……なるほどね。つまりあなたの協力者は複数、しかもそのうち数名は少なくともかなり上層の人ってことかしら？」

「正解。誰とは言わないけどね。」

「はじめからこちらのぶは悪かったってことかしら？」

「戦いつてのは戦い始める前の状態で大体が決まるっていうからね。色々と計画を練って手を回させてもらったよ。メインプランからはすでに外れちゃったけど、まあそれでもこっちの勝ちかな？」

「勝ちってなんなの？」

「夜天の主とその守護者全員の無実と、あいつの夜天の書の所持権の取得、あと今後管理局員があいつ等に放つであろう嫌悪感とかの意志を全部押さえつける。それが今回の俺の目的。」

「え？ 夜天の書？」

「……そう言えばあの時……どう言うこと？」

「闇の書 夜天の書ってことだよ。ユーノがそのうち詳しいこと調べてくるさ。ちなみに、問題点はすでに対処してる。後はしばらく日にちを置けばすべてクリアできてるはずなんだ。蒐集ももうすぐ終わるし。」

「え？ もう完成するの！？」

「日にちを置くって言ったろ？ 今完成させたって意味が無い。計画道理なら二十三日には修復が終わる。そうすれば、あとは完成させたらあいつの命も助かるってものさ。」

「命？」

「ユーノが調べると思うけど……ま、これぐらいならいいか。闇の書はほっとけば主の命をむしばんで殺すんだよ。だけど完成させたら暴走してどっち道主を殺す。これが闇の書の特徴で、俺は暴走させない方法を作って実行してるってわけ。」

「つまり私達の行動は……完全に無駄？」

「さあね。管理局ってロストロギアならたとえ持ち主が居おうと問答無用で強奪していくからなあ。どっち道何かしてくることになっただろうし。だからこそ俺も行動してるんだけど。」

「強奪って……」

「あれって強奪だろ？ 『我々は管理局だ。お前の持っているものはロストロギアである。よって回収させてもらう。従わなければ公務執行妨害で逮捕だ！』で、たとえそれがその持ち主にとってどんなに大切なものだろうと問答無用でかっばらって行くんだからさ。実際それで親の形見失ったとか言う奴、意外といるんだよ？ しかも拒否したらばこにされたってのも少くない。」

「そんなの聞いたこと……」

「ま、そんなこと報告書に詳しく書かないだろうからね。無理やり奪ったとしても『無事にロストログアを回収』、例え拒否されてそいつをボコにしても『違法所持者の抵抗があったがそれを撃退、ロストログアは無事に回収できた』これで終わりだ。」

「そんな。」

「一々自分の不利になること書きたい奴なんかあんまりいないよ。」

「実際調べたらさ、闇の書の事件資料もか~~~~~
~~~~~なり管理局の都合の悪い部分を排除しまくった物しか書いて無かったし。調べたら部隊が多大な被害を受けたって書いてるけどこれって自業自得じゃね？この世界が滅んだのもどっちかと言ったら管理局のせいじゃね？ってのも普通にあつた。」

「なんてこと……」

「まあ、そう言うことを含めてちゃんと書いてたから俺は一応ハラオウン家は信用してるんだけどね。ちなみの俺の協力者が協力してくれてるのもそう言う背景があつたからだったりする。」

「……………」

黙るプレシア、そこにふと思ったアリシアが聞く

「そう言えば嫌悪感ってのは？」

「ああ、まあお前らも知ってると思うが、結果としては闇の書って結構な被害を与えてるんだよね。そのうちいくつかは『これ管理

局のせいだろ！』つてのもあつたけどさ！！で、まあ、その被害にあつたやつとかその親族とかで闇の書に対して恨んでるやつが結構いるんだよな。しかも中には主を殺してやるうって考えてるやつすらいる。理不尽だろ~~~~、今の主にそんなのは何の関係もないのにさ。しかもあいつ魔導師からの募集は絶対する訳にはいかんって死ぬつもりだったし。何であいつが理不尽に恨まれなきゃなんないんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「しかも闇の書自体・・・・・・・・・・・・・・・・」

「？ 自体？」

「いや、この先は教える訳にはいかない。そのうち教えるかもしれないが今は言わない。第一この先はあいつ等にもまだ教えて無いらしい。とにかく俺はそう言うのをひっくるめて解決できるように行動してたんだけど・・。」

「あ・・・・・・・・私達が邪魔になつてる？」

「多少ね・・・・・・・・まあ、今はそれすら利用して行動させてはもらつてるけど。クロノには悪いけど・・・・・・・・あいつ、良い味出してくれたぜ。d（ー）」

にやりと笑いながらサムズアップする刻に、（クロノ君、何に利用されてるか分からないけど御愁傷さま）と合唱するテストロッサー一家

「じゃあこれぐらいでいいかな？」

「ええそうね・・・・・・・・あ、そうだ。」

フエイト達は立ち上がりかえろうとするが、ふとその足を止めるプ  
レシア

彼女は振り返り刻に頭を下げる

「改めてだけど、助けてくれてありがとうございます。おかげで  
私は家族と幸せに暮らせるわ。」

「どういたしまして。でも、俺はやりたいたいからやっただけだ、そ  
こまでかしくまられることしたつもりはないよ。」

「でも、私の気持ちは変わらないわ……ほんとうに……あ  
りがとね……。」

そしてテストロッサー一家は帰って行った

(書けなかった) 設定

・フェイトとアリシアはすでに入学しています。ちなみに二人とも刻たちと同じクラス(刻が裏で校長と学年主任を脅してそうさせたから)

・この時点で蒐集は620項を突破しています

・テストロツサー一家は仮本部として使っているハラオウン家の他に家を買っており、そこに住んでいる(一応そこも翠屋の近く)。)  
ちなみに刻の住んでいるマンションはやや離れた所にある)

・プレシア達は今回の出来事を他の皆に言う気はありません。少なくとも今回の事件が終わるまでは誰にも話すことはないでしょう。



048 (後書き)

色々無理やり感はありますが……スルーしてください！

後二話ぐらいでいよいよあの子が登場します。

十二月二十日、夜

………アースラ、会議室

「……あ、あなた方は！」

クロノ達は本部からアースラに乗って帰って来たリンディ達と共に来た人物に驚愕する

「こんにちは。」

「ふむ……皆元気そうじゃな。」

「ああ、かしこまらなくていいぞ。」

三提督がアースラに乗ってやって来た！！

0  
4  
9  
胎動

「何なんだこれは!!」

クロノ達はユーノから聞いた情報に顔をしかめる

・闇の書は本来の名前ではなく、古い資料によれば正式名称は夜天の魔導書だと言うこと。

・本来の目的は各地の偉大な魔導師の技術を蒐集して研究するために作られた主と共に旅する魔導書であること。

・破壊の力を振るうようになったのはロストログアを使って無闇やたらに莫大な力を得ようとした歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだろうと言うこと。

・その改変のせいで旅をする機能と破損したデータを自動修復する機能を舗装している、詰まり転生機能と無限再生が備わったと言うこと。

・持ち主に対する性質の変化が特にひどく、一定期間蒐集がないと持ち主自身の魔力や資質を侵食し始め、しかも完成したら持ち主の魔力を無差別破壊の為に際限なく使わせ、それによって持ち主を殺すと言っていること。

・闇の書が真の主と認識した人間でないとシステムへの管理者権限が使用出来ない、つまり主以外はプログラムの停止や改変が出来ない。そして真の主と認められる条件は書を完成させることであり、よって完成前の停止はほぼ不可能であると言っていること。

・それどころか無理に外部から操作をしようとするれば主を吸収して転生するシステムも備わっていると言うこと

「これが闇の書の真実……………」

「危険なものに変わりはないけど……………こんな……………」

「で……………でもじゃあなんであの人は完成させよう……………」  
「今までの情報から統合すると、もう直す手立てを見つけたと言うことでしょうね。方法は分からないけど……………」

「あ……………」

「『闇を夜天に戻す』、『目処は立っている』、『このままで十分うまく行く』、その可能性は十分あるね。」

「そうね。とにかく、これであの子の言葉のほとんどの意味が分かったわね。」

エイミイの疑問にリンディが答え、プレシアがアルフに相槌を打つ

「あと分からないのは……」管理局が介入して来たら最悪な結果になってしまう』か？」

「それも大体理由が分かったわ。」

全員の視線が苦渋の表情をするリンディに集まる

「このことを上に報告して、私達の行動を見直してもらおうとしたのだけど……。本局は依然として闇の書の破壊を指示して来たわ……。主ともども破壊するのもやむを得ないと。彼の言った通り最悪な状況よ……。アルカンシエルの使用許可さえ発行して来たわ。」

「そんな！」

「で、私達が見届けにやって来たというわけ。」

そこに黙っていた三提督の一人、ミゼットが会話に入ってきた  
三人とも顔をしかめている

・  
・  
・  
・  
・  
とある次元世界

「あゝ、今回も終了つと。」

武装を解除しながら刻が言う

「何事もなく終わってよかったね。」

「ああ、応援を呼ばなくてもコンスタントにイクストを狩れるようになってよかったよ……………着せ替え人形にされなくて済むから。」

「あはは……………そうだね……………」

朗らかに笑う二人、だが

「さて、じゃあ帰ろ……………ソニア!!」

一瞬にしてその場を離れつつソニアとユニゾンする刻  
その瞬間刻が立っていた場所が広範囲にわたって抉れた

「イクス……………違うな……………これは「やりますね」。うまく不意打ちが決まったと思ったのですが……………へえ。」

「あの人って……………ソドムさん!?!」



刻は仲間であり死んだかと思われていた人物、ソドムⅡツヴァルトの登場に目を細め、ソニアは驚きの声を上げる

「全く、力を貰ってまだ五年ほどしかたっていないと言つのにもう此処まで実力をつけたのですから恐ろしいものです。」

「おほめにあずかり光栄だね．．．．．であんたは誰だ？」

「おやおや．．．．． まあ、私みたいな引き籠りは忘れられて当然でしょうが、それでも仲間を忘れるなん「ああ、なるほどね。」．．．？ どう言うことでしょうか？」

睨む刻にソドムはやれやれと言つたように手を肩の高さほどまで上げるが、刻の苦笑いしながらの呟きに目を細める

「はじめは発している気が違うから、同じ姿をした奴が乗っ取つたやつかと思つたけど、違うだろ？ どちらかと言えばお前は今の俺と同じ、なにかと融合している状態だ。 しかも自意識はやや汚染されているようだけどころはつきりしている．．．．．なるほどね．．．．．ただだんに付け込まれたと言つわけじゃなさそうだな。」

「ほう．．．．．」

マスターマインド

「で、このかつて無い濃厚な気配、王だろ、お前と融合してるやつ。見た感じ意識はないみたい．．．．．と言つより破壊されてしまつてるみたいだね。 あるのは条件反射と本能に近いものばかり．．．．．何があつたんだ？ どういうつもりだ？」

刻の質問にソドムは押し殺したような笑いをする

「くくく、あなたはどう思いますか、この世界、人間達を？ 私と同じ考えのはずだ！」

「ん？」

「あんな奴らを救う価値があると思いますか？ 我々の苦勞を何も知らず！ 褒めもせず！ ねぎらいもせず！ それどころか化け物と言いき放す！ そんな奴等を！」

「・・・・・・・・」

「あなたの行動は少し見せてもらった。あなたなら分かるでしょう？ あんなふうに関私私欲にまみれたやつ！ 自分さえよければそれでいいと言って何だつてするやつ！ そんな奴等を葬つて来たあなたなら！！・・・・あ、独りよがりなことだと言いたいですか？ そうかもしれないね、でも私だつて必死にやった、ですが我々のことを知らないくせに、あいつも・・・・こいつも・・・・もうこんな世界を守るのはうんざりなんですよ！！！！！」

「・・・・・・・・」

「絶望に・・・・怒りに・・・・憎悪に・・・・そんな時でしたね。」

こいつが私に歩み寄って来てくれたのは。」

自分の胸に手を添え叫ぶソドム

「で、そいつと一体になって・・・・自分で世界を壊したってわけか。 どおりで救命信号もなにも来なかった訳だ。」

「ええこいつは私を理解してくれて、力をくれて、教えてくれた・・・・・・・・解決するには破壊しかない。 あなたも来ませんか

？ 一緒に全部浄化しましょう。全てを真っ白にするんです。  
そうすれ「ばからしい」・・・なに？」

陶酔したように叫ぶソドム、だが刻の吐き捨てるような言葉に表情を険しくし睨みつける

「そんなのごめんだね。」

「なぜですか？ あなたなら人間の業が理解できると思いますがどう？ 王のこ<sup>マスターマイン</sup>事だってもう知っているのでしょうか？」

「ああ。・・・で？ だから？」

「なに！」

「そうだな・・・確かに許されざる業だ。で、だからって全部破壊するの？」

「償うべきだとは思わないのですか？」

「思わない。身に覚えのない罪を償うも無いだろうが。」

「だが「ってどうかさ」」

「所詮お前のって自己満足だろ？ お前の正義だろ？ それが俺と一緒にだと思わないでほしいな。俺は貫くのは俺の世界を守り抜く。ただこれだけさ。」

「あなたが助けようとしてるやつらのことですか？ ですが果たして彼女達はいつまでも君を受け入れるのでしょうか？ 簡単に裏切るかもしれませんよ？ 人間は流され簡単に移ろいゆくものからね。」

「かもね」。ま、そんなときはそんな時だ。」

「・・・？」

「それはどうであろうとあいつらが選んだことだろ？ 俺を拒絶す

るって。 じゃあ俺もあいつ等を除外するだけだ。 幸せを手にしてほしい奴は他にもいるし。」

「なら、あなたの世界にいる全員に否定されたらどうします？ もう行き場はありませんよ？ そうなって初めて私の様になりますか？ ひたすら黙々とノーバディーを狩りつづけいつしか」

「いや、そうになったらおれは自分の機能を停止するだろうね。 俺の世界が無い以上行動する理由もないってことだから。」

「ノーバディーのことはいいのですか？」

「俺の行動原理は『俺の世界を守る』こと。 無くなった以上関与する義理ないし。」

「不真面目ですねー。」

「人は目的があるから行動できるんだ。 目的が無い以上行動できる訳無いだろうが。」

「ふう………。 どうやら手を組むことはありえそうに無いですね。」

「当たり前だろ。 お前の正義は『全てを破壊し浄化する』俺の正義は『自分の世界を守る』、この二つは相いれない以上……。」

「殺すしかありませんね。」

構える二人、だが

「全く、二人だけで始めないでほしいですね。 私も混ぜてもらいましょうか？」

二人に声がかかり、刻の背後から何処ともなく『亡都の蒼剣士』を冠する守護者フリズニアストレアが現れ、歩いて来た

そして次々とソドムの周囲に人影が現れる

「うあたしの美の探求はむうあだ終わってはいないのでね。」

大げさな動作をしながら『不動の意志』、アドリアンロサーノが

「まだ研究したいことがいっぱい世の中にはある。興味は尽きないな。」

白衣のポケットに片手を突っ込んだ状態で『真実の探究者』、メリエルモアが

「私は今の空間が気に入っている。壊してほしくないわね。」

バイオリンを手に『バラライドメロデー叫喚旋律』、エリスクロスロードが

「くひゃひゃひゃ・・・戦うことが出来なくなるのはいやですからね。」

大鎌サイクスを構え、薄気味悪く笑いながら『狂喜乱舞』、ソルロージン

グレイヴが

「……俺も今回はこいつと同じだな。戦う相手（生きがい）  
がいなくなるなんてまっぴらごめんだ。」  
少し額を抑えやや顔をしかめながら「暴君タイラント」、  
榊瀧祢さかき かねが

「僕を信頼してくれている人がいる限り。」  
ちよつとした辞典のような厚さのある本を片手に「紅き幻想ブラッディ・ミラー・ジュ」、  
ウエルブルブランドルが

「俺もだ。少なくとも俺が戦うには十分すぎる理由だな。」  
腕を組みながら「数奇アンバランス・アクトの技巧」、アステリスクグロウリーが

「俺は誓いを果たすために。」  
魔力を圧縮し形成した剣を突き付けた格好で「魔術師マオウの王」、リオ  
ンクリミナルが

「『まだ終わりにたくない』、俺の理由はこれで十分だ。」  
銃を構え現れる「闇光ノクターン・オブ・ディークス」、グレンブルームフィールド

「ん〜私にはいま大切な理由が無いな。あ、そうだ！生きて  
みんなとワイワイやりたい！」  
そして「守護天使」、ミカエルコープスが顎に手を当て少しうな  
りながら現れ、ニパツと言い

「私は坊やのこれからを見ていきたいのよね。」  
最後に『夜天に舞う黒姫』、アルシエクイエム「ブライトが現れ、  
終焉ラストレへの誘い」、仁神刻の頭の上に手を置いた

「全く皆さん揃いもそろって……。全員素直に消滅してくればいいものを。」

「……そんなことはご免だ（だね）（だな）（ですね）」

周りを見渡し、笑いながら言うソドムに、全員が一斉に叫び、戦いが始まった

・・・再びアースラ、会議室

「と言うわけだからあなた達に任せるわ。」

「あ・・・あの・・・本当にいいんですか？ 本部の決定に逆らっても良いなんて。」

「私達は出来るだけ多くの人を幸せにしたいの。」

「可能性があるのなら喜んで模索しよう。」

「と言うわけだから思い思いに動いていいぞ？ なぐに、駆け引きには慣れておるんでな。年寄りを舐めてはいかんぞ？」

ははははと豪快に笑うラルゴ、ミゼットとレオーネも優しく笑う

「はあ・・・」と皆がやや呆然とするその時



~~~~~

艦に警報が響き渡る

「何があったの!!」

リンディがブリッジに急いで回線をつなぐ

「海鳴に結界が展開されました! 現在内部の様子を解析中、大雨で少し手間取ってますがもう少しで……出ました!! そちらに映像を送ります!!」

会議室にモニターが展開され映像が映し出される

「守護騎士達! 戦ってるのは……あの時の仮面の男!?!」

「あそこに倒れてるのって・・・確かシャマル!?!」
「シグナムも!」

「どつ言つことなんだ!?!」

エイミー、フェイト、なのは、クロノがそれぞれ叫ぶうちにヴィー
タとザフィーラもバインドでがんじがらめにされてしまった

そして仮面の男二人は奪った闇の書に四人から魔力を蒐集する
そしてシグナムとシャマルは体が崩壊し消えてしまう

「な・・・」

「そんな・・・」

そして

「え!?!」

「フェイトとなのはに化けた!?!」

「どつ言つ・・・」

「え？・・・あの子は？」

「はやてちゃん!？」

仮面の男達はそれぞれなのはとフェイトに化けそして目の前にはやてを転移させる

はやては目の前の光景にギョツとする

「早く出勤して!! あの子、何かとんでもないことをしようとしてるわ!！」

ミゼットの叫びに全員はつと我に返り、急いでクロノ・なのは・ユーノ・フェイト・アルフが転移装置へ向かう

だがその行動はすでに遅く

モニターの中で二人に何か言われたはやては絶叫し

はやての座っている場所を中心に白いベルカの魔法陣が展開され

闇の書が起動し

そしてはやてと入れ替わるように

赤目、そしてやや青みがかつた白色の髪をした・・・闇の書の意味
が現れた

049 胎動（後書き）

という訳でリインフォースの登場です

ホントは次の話で出す予定でしたがここで出すことにしました

後皆様に少しお詫びを。

STSの設定を考えてたのですが、その内容を一度崩し作り直すことにしました。

理由は・・・まあ、このままだとちょっと無理があることが分かったのと、このままだと私の読んだことのある作品とかぶってしまふ部分が意外と見受けられたからです。

という訳で主人公の立ち位置を当初と変えました。

詳しい変更点などはこの部分まで執筆したら一応書くつもりです

またそのためA's編ですでに書いたところを少しずつ変更することになると思われます。できるだけそうならないように何とかつじつまを合わせるつもりではありますが……。

たぶんSTSに行くための展開でかなり強引な手を使うことになると思います。

「裏設定」

・ソドムのキャラの参考にしたのはTOAの『ジエイド』カーティス^④です。

作者のイメージは紙の色を薄いクリーム色、眼を緑にした以外そのまんま

050 闇の書の意味（前書き）

色々と苦情が出そうだな……

できれば皆さん、華麗にする してください！！

後、クロスもの募集中です

詳しい内容は、目次の「お知らせ」又は活動報告で

050 闇の書の意思

……グレアムの執務室

「お父様、議会在闇の書を主ごと問答無用で破壊することを決定しました！」

「アースラにアルカンシエルの使用許可が与えられ、しかも編成が済み次第武装局員が一個師団派遣されるそうです！」

猫姉妹の報告を聞きグレアムは苦渋の表情をする

「く、まともを考える時間も無いのか……闇の書の蒐集状態は？」

「ほぼ完成しているものと思われます。」

「守護騎士から募集をすれば十分完成すると思われます。」

グレアムは目をつぶりながら双子の報告を聞き、頷く

そしてふとモニターを開き、一枚の写真 中央に車椅子に乗ったはやてが居、その右前には狼状態のザフィーラ、左にはやてに寄り添うようにヴィータ、右にシヤマルその斜め後ろにシグナム、そして刻が左後ろで車椅子の取っ手に寄りかかるような格好をして映っ

ていてその隣にソニアがいる。ザファイラは分からないが、シグナムはやや困ったような、シャマルはやさしそうな、ヴィータは少し不貞腐れたような表情をし、刻は不敵な、ソニアは無邪気そうな笑みを浮かべていて、そしてそれに囲まれたはやくとも幸福そうな笑顔をしている。 を表示し、それを苦しそうな表情で見つめる

「……………あの少年については？」

「目的は不明ですが、不定期に何処かに転移することが分かっています。 その場合一時間以内に帰って来たことはありません。」

「それを見計らった瞬間に行動を起こせばあの少年が帰ってくる前に作戦を終えることが出来るでしょう……………結局あの少年の言葉の真偽は確かめられませんでしたね。」

三人は目をつぶり……………しばしの静寂が訪れる

「……………だがもうそんな時間はない……………
・次にあの少年が離れた時が……………決戦だ。」

「はい………」

0
5
0

滝のような雨の降る中間の書が起動をしている間に仮面の男達は移動し、その片割れが町の周囲を覆う巨大な結界を作りだす

「よし、結界は張れた。デュランダルの準備は？」

「出来ている……来たようだな。」

「ああ」

もう片方がそれに答え、カードを1枚 氷結の魔法を使用するために作りだした特殊なデバイス、『デュランダルの待機状態』を取り出しながら今やっと到着したなのは達を見つめる

前者もそれを見、相棒の方に振り向きながら聞く

「さて……これであの闇の書の意志は勘違いをしてあの子達を攻撃するだろうけど、はたして彼女達は保つかかな？」

「できれば暴走開始まで保ってほしいね」

「ああ、強力な魔法を使わなくてはいけなからな。 できるだけ魔力は温存しておきたい」

「まあ、あの五人ならおそらく保って」

「他力本願は感心しないな」

「……!?!?!?」

二人はいきなり会話に第三者が入って来たことに動揺する。 しかも

「な！ 闇の書の意志……!」

「なぜ……あいつ等は……!?!」

さっきまでなのは達がいればは達の方角を急いで向く二人、そこには強力な結界に閉じ込められた五人の姿があった。

「あの程度で私がだまされと思ったか？」

「く、・・・なああ!？」

「なるほど、それがお前達の正体か。」

闇の書の意志は二人の意識がなのは達に向いてる隙に二人に変身魔法を強制解除する魔法を放つ。仮面の男達はグレアムの使い魔、リーゼロッテとリーゼアリアになった

そして管理人格は二人を怒りのこもった眼で睨みつけ、

「さて、主を絶望させた罪は重いぞ。」

そう言い放った

・・・何処かの次元の無生物世界

ギヤインズギヤアアアアギユンガンゲウアンゴガガガガアア
アアアアアギギギギガガガガツガガガギシャアア
アアアアアアアアa a a h d h s あ s c p j d s g j あ
s b g g n c l z g k u g g a a アア

「あー！ー！、クソ！！ 前よりも全然強えぞ！」

「そうね・・・ねえ、今までの王の姿は融合した宿主の物だった
ってことかしら？」

「そうですね、強さにはらつきがあったのもそれなら納得がいきま
すし。」

「ちよつと待て・・・つてことは今回最悪じゃねえか！！ 守護者
つて考えうる限り最も力を発揮できる組み合わせだぞ！！」

「おやおや、雑談する暇があるのですか？」

「「「五月蠅い！ さつさと死んどけ！！」「」「」
「「「余裕ねえ（だな貴様（テムエ））！！」「」「」

話すさかき榊、エリス、ハウル、グレンの四人にソドムがアルシエ・リオ
ン・刻の波状攻撃を受け流しながら言い、それぞれが叫ぶ

「やられま・・・せんよ！！ 全てを終わらせるまではねえ！！！」

ソドムは三人をふっ飛ばし死角から来たソルの大鎌を宙返りで避け
つつ、アドリアンとミカの魔力砲撃に魔力弾をぶつけ相殺し、アス
トの蹴りを受け流し、フリズの斬撃を防御の魔法陣で受け止めはじ
きながら言う

「チッ！ 能力が大幅に上がってやがる。」

「さすがは狂った神の力と言ったところですね。」
「やや攻勢でよかったが……このままじゃあ埒があかないぞ。」

刻、ソル、フリズ、リオンが次々に魔力の乗った斬撃を浴びせ、グレンが砲撃を放ち、ハウルが感覚を混乱させようとし、アルシエとアストが肉體戦を仕掛け、ミカと榊が感覚の隙間を狙って思いつき蹴飛ばそうとする、

そしてソドムがそれをやり過ぎし、避け、耐え、カウンターで攻撃し、急回避した所に

ズギヤアアアアアアアアアアアア

メリエル・アドリアン・エリスが対悪魔軍レベルの殲滅魔法を放つソドムはなんとか中心から避け、バリアを張り耐えるが、三人の凶悪な威力を持つ魔法はほぼ一点でぶつかり合い、その余波で周囲の空間がひび割れ始め、守護者の数名が慌ててそれを制御する

「ちょっと・・・次元断層が出来てるわよ!!」
「ちよっどいい、そのままそこに突き落とすぞ!!」
虚数空間なら
周りを気にせずに済む!!」

「了解!!」

刻・リオン・ミカが即座に頷き回り込み、

「アアアアアアアアアア!!」

ソドムを次元の穴へ、虚数空間へ叩き込む

刻たちも次々に飛び込み、そして次元断層は閉じた

・・・海鳴上空

「プラズマランサー！！」

ズガガガ

「きゃああああ」

「アリア「スターライト」・・・ツハ！？」

アリアが闇の書の意志の放ったプラズマランサーで吹き飛ばされ、
ロツテがそちらに意識を向けてしまった瞬間、

「ブレイカーー!!」

「ウアアアアアアアア!!」

「ロツテーー!!」

そこに闇の書の意志がスターライトブレイカーを放ち、
体勢を立て直したアリアがそれを見て叫んだ

S i d e なのは達

「ああ!! ロツテさんが収束砲撃で撃たれた!!」

「ユーノ! 解除はまだ終わらないのかい!?!」

「もう少し待って。 あと少しで解読が全部終わるから……。」

「くそ!! グレアム提督……あなたは……。」

なのはが叫び、アルフが結界の解析をしているユーノに話しかける
傍らでクロノが結界をなぐり呟く

「ねえなのは……」

「うん？ なに？ フェイトちゃん？」

「止められるかな？」

「分からない……」

「にしても、あいつ何で蒐集して無いのはやフェイトの技を使えるんだい？」

「多分誰かが私達のとよく似たのを組んで、その人の魔力を収集したんだと思う。」

（注：刻が自身の魔力を蒐集させる以前、なんとなく原作に出て来た魔法のプログラムを全部組んでみたことがあるからです）

「よく見たら微妙に違うし、私のよりもずっと強力だから」

「そうだね、あれも私の魔法よりも強力だしね……」

「そっか……」

（注：その時刻がどれだけその魔法を洗練させることができるかと言っドツボにはまったからです）

「できた！！ 結界が消えるよ！！」

なのは、フェイト、アルフが苦い顔をしていた時、ユーノが叫び結界が消えた

Side END

「デイベインバスター!!!」

ゴガアアアアア

突然闇の書の意志に桃色の魔力光が襲いかかり、管理人格はバリアでそれを防ぎ、攻撃の来た方向を見る

「お前達か……」

「あ、私達の姿……」

「クロノ・・・」

闇の書の意志はなのは達が向かって来たのをのを見て眩き、姉妹は自分達が元の姿に戻っていたことに気づき、苦い表情をしながら目の前に来たクロノにつぶやく

「あなたは・・・これはグラム提督の指示ですか？」

「違う、わたしは「邪魔しないでもらいたいな」」

クロノの言葉にアリアが反論しようとするが、闇の書の意志が横から入る

「そんな訳にはいきません!」

「みんなを助けるために!」

「だつたらまず向こうにいる一般人二名を早く保護することだな。」

「「「「え?」「」「」」

予想外の闇の書の意志の返答に全員キツネに抓まれたような表情をする

「被害がいかないよう誘導しつつ戦うのは骨が折れるんだ、さっさ

と保護してくれ。」

「あ……え？……あ……うん。」

そう言っただけなのはとフェイトは指示された方に一般人が本当に居るのをレイジングハートとバルディッシュから報告され、混乱しつつ飛んで行った

そうして闇の書の意志はそれを見送り、

「さて………続きを始めようか？」

「あ……え？」

「ツツ!！」

ピカッ……グアアア……ズシャアアア

二人への攻撃を再開した

……そう、二人への

「……えつと……クロノ……。私達はどうすればいいんだい？」

「……僕達はあの二人に加勢すれば……。いいんだよね？」

それをはた目に見つつアルフとユーノが戸惑いながらクロノに質問する

何故かやみくもに破壊すると報告されていた闇の書の意志はあの二人にしか敵意を向けておらず、しかも自分達は気付かなかった一般人を気にかけてながら攻撃してさえたからだ

「く……。ああ、よろしく頼む……。行くぞー！」

クロノは苦虫をかみしめたような表情をしながら二人と共に向かって行った

S i d e なのは・フェイト

「なのは、あそこ!!」

「あ、見つけた!」

なのはとフェイトは駆けている件の二人の人影を見つけ、保護すべく急いで向かう

「あの、すみません!! 危ないですからそこ……で……」

なのはは声をかけるが、立ち止まり振り返った二人を見てフェイトと共に驚愕する

「え……なの……は？」

「それに……フェイトちゃん……？」

その二人はなのはとフェイトの友人、アリサとすずかだった

茫然としていたなのはは遠くから聞こえて来た轟音ではっと我に返り、すぐに立ち直りエイミィに念波形式の通信をつなぐ

（エイミィさん!!）

（ちよっと待って、すぐに避難させるから!!）

「え……えっと、ごめんね、すぐに安全な場所に運んでもらうから。」

「

なんとかなのは二人に声をかけるが

「あの・・・なのはちゃん、フェイトちゃん・・・もしかして・・・」

「ちよつと・・・あなた達も魔法使いだっただの?・・・」

「「・・・刻（君）みたいに。」」

予想外の言葉になのはとフェイトは『え?』となる

「え?・・・それって・・・」

聞こえろとするが、その時アリサとすずかの足元に魔法陣が現れ二人は何処かに転送された

「あ!!!・・・ねえ、フェイトちゃん・・・えつと・・・
・・・あの・・・

今の・・・聞いた?」

「えつと・・・なのは・・・」

フェイトは何か言おうとするが

(二人とも、アリサちゃんとすずかちゃんは無事安全な場所に転移できたから急いでクロノ君達に加勢して闇の書の主……はやくちゃんに投降と停止を呼びかけて!!)

(あ……分かりました!!)

(すぐに向かいます!!)

そして二人は再び闇の書の意志の方へ向かった

S i d e E N D

S i d e はやて

．．．．．ぼんやりと目が覚めたらわたしは真つ暗な所に
浮かんどった

．．．．．此処は．．．．．何処やろう？
．．．．．それにしても眠いわ．．．．．睡魔が押し寄せて来
る．．．

私は再びまぶたを閉じようと

「……………眠らないでください、我が主。」

したら、まどろんだ頭に聞き覚えの無い声が響き渡った

そして目を開けて声のした方を見ると、そこにはシグナムに負けず劣らずなええおっぱいをした姉ちゃんがおった

S i d e E N D

「・・・・・・・・邪魔をしないでほしいんだが・・・・・・・・」

闇の書の意志は横からの攻撃でリーゼ姉妹と引き離されてしまい、
乱入して来たなのは達をにらむ

「そんな訳にはいきません。」

「はやくちゃん・・・・・・・・それに夜天の書さん止まって・・・・・・・・暴走を止めて下さい!!」

「!!!???・・・・・・・・お前は私をそう呼んでくれるのだから・・・・・・・・だがすまないな。ある程度は抑えられるが、どうにもできないからこそ『暴走』なんだ。」

「そんな・・・・・・・・どうにかならないんですか!?!」

なのはは管理人格の答えに叫び

そしてその後ろでボロボロになったリーゼ姉妹が呟く

「無駄よ、なのはちゃん。……閻の書は全てを破壊するまで止まらないわ。。。」

「今までだってそうだった……。だから破壊するしか方法が無かった……。でもそれも無駄だった、アルカンシエルで蒸発させたりしてもむだだったんだ！！ 転生されて繰り返されるだけだった！！」

クロノはそれを聞きすべてに合点がいき呟く

「だから破壊をあきらめて閻の書の永久封印の方法を探し、計画してあなた達に行動させたんですね……。グレアム提督は」

「違うクロノ！！」

「あたし達の独断だ、父様には関係な『もう良いんだ二人とも』父様！？」

クロノ達の隣にモニターが展開され、全員目がそちらに行く

『ロツテ、アリア、いいんだよ。クロノ、君の言う通りだ。私は闇の書の次の主を独自に探し、彼女を見つけた。両親に死なれ、体を悪くしていたあの子を見て心は痛んだが運命だと思った。孤独な子であれば、それだけ悲しむ人は少なくなるから……だから私は決断してしまったんだ。』

管理人格はじと目を向け、なのは達は息をのむ

「封印の方法は闇の書を主ごと凍結させて次元の狭間か氷結世界に閉じ込める、そんなところですね？」

『そう、それならば闇の書の転生機能は働かない』

「ですがその時点ではまだ闇の書は永久凍結をされるような犯罪者じゃない……これは違法だ」

ロツテはクロノに食ってかかる

「でももうこれしか方法が無かったんだ。凍結がかけられるのは管理人格が意識をなくして無防備になる、もうすぐ起こる完全な暴走が始まる瞬間の数分……そのときに「残念だが、それは無理だな」……え？」

そこに言葉を挟んだのは苦渋と憐みの入り混じった表情を向ける闇の書の意志だった

「その計画には三つつほど問題点がある。一つ目、人の欲望は果てしなく、そのために後先を考えず行動する輩は必ずいる。誰かが必ず封印を見つけ解くだろうな。」

クロノも同じ考えに至っていたらしく深刻に頷く

「二つ目、それ以前に凍結された場合、書は主が死んだと判断して転生機能が働く。凍結封印は不可能だ。」

そんな・・・とロツテが呟く・・・

「そして三つめ。お前達には残念な話だが、そもそも現在の私は自我を無くして暴走はしないぞ？ もうその部分のバグは治っている。」

「『なに!?!』」

叫ぶリーゼ姉妹とグレアム

「まったく、余計なことをしてくれた……こちらもどうにかしようとしているが、私ではどうしようもない。我が主も中から止めようとしているが修正している途中に、中値半端な状態で起動してしまっただせいで制御が困難となっている」

現在の状況を知らされりーぜやなのは達は驚愕する。

この状況にはやてや管理人格の意志はそれほどかわっていないかったのだ

そして、なのは達と戦っている闇の書の意志はなのは達の敵ではなく……彼女は修正されないうちに発動してしまったバグに動かされる闇の書の意志

「修正しきれていないバグがざわめく……全てを壊せと……この二人に向けて何とか制御しているぐらいだ……私を起動させた責任ぐらいは取ってもら……グ……」

その時間の書の意志は頭を押さえ、中から声が聞こえる

『管理局の方！ 聞こえとります？ こちらその子……リィ

ンフォースの保護者、八神はやてです。』

「「はやてちゃん!?!」」

『その声はなのはちゃんに……えつと?』

「フェイトちゃんだよ。前紹介したいって言った友達」

『あ、そうなんか。所で悪いんやけどこの子止めてくれへんか?』

「「「「「え?」」」」」」

『なんとかバグの部分を魔導書本体から切り離す準備が出来たんやけど、その子が走ってるせいで管理者権限が完全に使えへんのや!今そつちに出てるのは自動防御プログラムだけやから!』』

「え……えつと……」

なのはが状況の理解に苦しんでいると助けの声が入った

「つまりあなた方が私に魔力ダメージを負わせて私に動作不良を起こさせることが出来たら、私が起動しているせいでまともに使えなくなっていた管理者権限を使えるようになり、それを使ってバグの部分本体から分離、主も外に出られると言っことですね。」

なのは達は自動防御プログラム自身からその言葉が出たことに驚愕

する

「……………ですが私は『自動防御プログラム』、向けられた攻撃を防御し相手を迎撃するのが私の役目……………残念ですがただやられると言つことはできません。」

そして構えをとり

「どうかわたしを倒して……………主を救ってください。」

そう言い放った。

なのは達は涙を流しそれに答える

「分かった……………なんとしてやり遂げるよ!!」

「頑張ります……………だから早くやられてください!!」

「なんか複雑な気分だけど……………覚悟してくれよ!!」

そしてグレアムもユーノに治療してもらいだいぶ傷がいたリーゼ姉妹に話しかける

『二人ともいけるか？』

「大丈夫です……」

「体力もある程度戻りました……」

『そうか……クロノ、後で今回のことはいくらでも償う。
だから今だけは見逃して、彼女達と共に戦ってくれ』

「分かりました。」

そして四人も相手を見据え……

戦いが始まった

「もう良いだろ。強かったが……お前の負けだ。俺たち全員で無かったらやられていただろうがな……」

榊さかきがその目の前に歩み寄り、ほかの守護者も彼の周りに集まる
全員傷は癒えているようだが顔に疲労の色が表れている

「まだですよ……ま……だ!? ガアアアアア!?」

それでもソドムは対抗しようとするが突然苦しみ出し、その体から
白い何かがあふれ出す

「いけない!!王が!!」

「ち!!逃がすか!!」

守護者たちはそれを消し去ろうとするが王はそれをマスターマインドくぐりぬけ、何
処かへ消えた

「あ……あ……あははは……見捨てられてしまいましたね……」

ソドムは今度こそ諦め、力なく座りこんだ

ソルはこれ以上彼に戦闘意思が無いのを確認し姿を消す

「ち……なんで……」

「僕の願いはは全てを終わらせる……それにはノーバディーも含まれていましたからね。私が負けそうになった今、やられないために逃げるしかなく、それに私ごと引つ張って行く義理なんて無いんでしょう……。今までみたいに私は浸食されきっていませんでしたからなおさらに。」

「……そうか……だが」

「……さすがに見逃せない……。消させてもらうわよ。」

「分かってますよグランさん。それにミカエルさんも、笑ってた方が可愛いですよ。」

肩をすくめながらソドムが言う

「言っておきたいことはあるか？」

「……そうですね……。では、刻君。」

「なんだ？」

「言い放ったからには……。貫いて見せて下さいよ。わたしは地獄の底から見守らせてもらいますから。」

刻は静かにうなづく

ソドムはそれを見て、涙ぐんだまぶしそうな笑顔をみせ、よろよろ

と立ちあがり

「それではみなさん……ご迷惑をおかけしました。私はこれで退場させていただきます。」

ソドムは自分の力を暴走させ始め、ぎよっとした守護者たちは急いでその場を離れる

ソドムはそれをうらやましそうに見つめ

「人間、死ぬときは死ぬのがよい……私は此処で挫折です……
……頑張ってくださいね。」

そう最後につぶやき……剛大なエネルギーを発しながら爆発し

……生涯をとじた

050 闇の書の意味（後書き）

書いててふと思ったこと

今さらですけどデバイスの中でデュランダルってかなり特殊な位置づけにありますよね。

内容からして、このデバイスには氷結の魔法を放つ機構があるんでしょうが、こんなレアスキルの『魔力の性質変換』と同じことが出来る仕組みを内蔵した物はこれ以外登場しませんから

すみません投稿が遅れました。ちょっとスランプに入っただんです。キャラが動いてくれない………

後、次の投稿は二週間以上後になると思います

理由としては明日から学生フォーミュラーの大会があるのでそれに参加しなくてはいけないのでまず一週間チヨイ。

そのあとにも後かたずけとかでこたごたするのでもとにも執筆できそうにないんです。

今だって三徹でフォーミュラ完成させて、これ投稿してやっと今から寝れるんです。

ではお休みなさい

051 vs 自動防御プログラム(第二ラウンド)(前書き)

なんか筆がすすんだので投稿できました

.....良い気分転換になったのかな？

051 vs 自動防御プログラム（第二ラウンド）

・・・天界

純白の円卓を囲んでカルマとほぼ全ての守護者が座り、話し合っている

「今回の戦いから王について分かったことはマスターマインド

- ・王自身にはほとんど意識が無く、ほぼ本能のまま行動している
- ・王は宿主と融合して行動を起こし、王自身では眷属を生み出す以外の行動を起こさない。
- ・破壊活動は宿主に任せている。
- ・宿主は時間と共により破壊衝動に駆られるようになる。ただし個体差あり

といったところでいいかな？」

「付け加えると王は絶望や怒りといった感情を強く持ち、なおかつそれを吐き出せない奴に引き寄せられて、そいつを宿主に選ぶみたいだな。おそらく破壊欲の類があればもっと可能性が高くなるな。」

「なるほど……と言うことはそれを用意すれば王を呼び寄せ
ことも可能かもしれませんね。」

エリスの発言に刻が付け加え、
ハウルが思案するが

「でもどうやってそれを用意するのよ？」

「まあ、俺の世界に一応餌にしてもよさそうなくズ野郎はいるが、
だがそいつらをその状態にするのは骨が折れるぞ。」

「うまくやらないと生まれるのは恐怖とか諦めで、怒りじゃないも
んね。」

「そのために人体実験紛いのことをするのは気が引けるな」

「一応そう言うのも全部お前らの判断に任せるが……あまり感
心しないな。」

「ですね……………」

アルシエ、榊、ミカ、アストが言い、それにカルマが頷く

そしてハウルが同意し、ため息をつくが、

「刻、どうかしたのか？」

フリズが思案している刻に気づく

「……………いや、すこし……………な……………」
「なにかあるの？」

「……………これに組み込めば……………」
「……………ひょっとしたらうまく行くかもしれない。」

「なにか作戦があるのか？」
「ああ……………まだ詳しくは考えて無いけど」ちよっと待て」

刻が口を開くがカルマがそれを止める

「どうした、カルマ？」

「今、第十三……いや、第十二世界の、しかもお前が住んでる所にこんなやつが現れたんだが……」

カルマは円卓の中央に透明な球状の物を出し、件の人物とその周囲を映し出す

それを見て守護者達は「ホウ」とか「ん？」と言った表情を取り、刻は顔を思いつき引きつらせる

「……うわぁーい、絶対あいつら余計なことしやがったな……
・ハア……つたく、ワリ、ちよつと行って、さっさと片づけてくるから待っててくれ」

「助けは必要か？」

「あ……じゃあメリエル、ちよつと結界を頼む。でも、あいつが出たのは俺のせいもあるから俺が消す。だから手出しはしないでくれ。」

「お前の料理一週間分で手を打とう。」

「了解、んじゃ頼むわ」

そして手を振るカルマ達を残して一人は転移した

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
海鳴市上空

ただいま戦闘の真っ最中

ギョーン、ズガアアア、ドガガガ、ビュン、

「プラズマランサー!!!」

「アクセルシューター!!!」

「ステインガーブレイド・エクスキュージョンシフト!」

「守れ」

フェイト、なのは、クロノが魔法の絨毯攻撃を仕掛け
対するリンフォースは全方位シールドでそれを防ぐ

「ハアアア!!!」

「ウリヤアア!!!」

その隙に別方向からアリアが砲撃を放ち、さらにもう一方からロツ
テが殴りにかかるがリンフォースはさらにバリアを張る、五人の
攻撃でバリアにひびが入り始める

だが

「刃にて、血に染めよ。」

「ツク!!!」

リンフォースは自分の周囲に複数の赤黒い短剣を展開する、ロツ
テは急いでその場を離れるが

「穿て……ブラッディダガー」

リインフォースはそれを大幅に上回る速度でブラッディダガーを放ちそれはロツテとアリア、そしてフェイト達に一瞬で接近し、爆発を起す

だが何とか防いだらしく、五人は煙の中からほぼ無傷で飛び出す

リインフォースはそれを追撃しようとするが

「ストラグルバインド!!」

「チェーンバインド!!」

ユートとアルフの鎖型のバインドがリインフォースを拘束し

「ディバインバスター!!!」

ズガアアア

なのはの砲撃魔法が向かう

「砕け………盾………絶望の雨………」
デスベアリングレイン

しかしリインフォースは一瞥しあっさりバインドを砕き再び障壁を張り防ぎきり、数十の魔力弾で反撃する

「……う………うわあああああ（きゃあああ）」「」

三人は防壁を張りそれを防ぐが耐えきれず吹き飛ばされる

「ロツテ!!」

「了解!!」

ロツテとアリアが時間を稼ぐためにリインフォースへ向かい、その間にクロノとフェイトは飛ばされた三人と集合する

「あの防壁、予想以上に堅いみたいだね……」
「うん、こっちの攻撃はほとんど通って無い、生半可な攻撃じゃあ完全に防御されてダメージが与えられないみたいだね」

フェイトがアルフに頷く

「でもそんな威力の攻撃となると……」

全員考え込むが

「……ねえ、クロノ君、レイジングハートのフレイム強化は終わった？」

なのはがふと声を出す

「まっつてなのは！ エクセリオンモードを使う気！？ エイミィさんが使わない方がいいって言ってたじゃないか……！」

「でもユーノ君……！ これしか思いつかない……！ だからお願い、使わせて……！」

「……く……」

ユーノはなんとかやめさせようとするが、それ以上に有効な方法が思いつかないため悔しそうな声を出す

ブウオン

その時なのは達の前にモニターが現れた

『一応改造は終わってるよ……エクセリオンモードは一応使える……。』

「アリシア……。」

そこに映ったのはエイミイの隣で映るアリシアだった、彼女も苦渋の表情をしている

『技術者として、使用を許可したくないけど……どうせ止めたって無視してやっちゃうんでしょ？』

「うん……。」

それを聞いてアリシアがため息をつく

『分かった……でも気をつけてね……何度も言うようだけどエクセリオンモードはリミッター解除状態、反動がとんでもないから長時間の使用は文字道理命取りだから……』

だから短期決戦で頼むわよ……約束できる?」

「うん!! 行けるよね、レイジングハート?」

《Yes my master》

なのはにレイジングハートが答え、アリシアが頷く

「分かった……じゃあなんとしても成功させないとね。」

「ああ……鍵はなのはだ、なんとかして援護しないと」

「となるとあの二人にも協力してもらって……」

ユーノにクロノが頷き、二人は作戦を立てる

その間にフェイト達はお互いを励まし合う

「なのは……気をつけてね」

「頑張ってくれよ!」

「それはフェイトちゃん達でしょ? そっちこそ気をつけてね。」

「分かってる」

「任しときな!」

「みんな、作戦が決まったよ」

クロノが全員に作戦を伝え

「それじゃあ……行くよ」

そしてなのはを残し四人は飛び去った

「ああああ!!」

「ブラッディダガー!!」

「ロツテ……はあああ!!」

障壁を殴るロツテに放たれるブラッディダガーをロツテを後ろに下がらせたアリアが障壁で防ぎ

「イケエエエエー！」

「うらあああー！」

ズガガガガ

魔力砲撃を放ち、その合間に素早くロツテが前に出て再び攻撃する

二人は攻守を素早く交代しつロツテが魔力を纏わせた拳といった体術で、アリアが魔力弾やブレードなどで障壁を攻撃していた

何度もやられたおかげで攻撃パターンが読めて来たが、それでも堅固な障壁の前に二人の苦戦が続いていた

「咎人よ、この恐怖の前にただ戦慄せよ。貫け蔭光！」
「アリア！」

アリアに向けた掌の前に魔力が収束し始めたのを見、ロツテがアリアをひつつかみ素早く距離を取り

「ドレッドブレイカー！！！」

「うつつうつつ……あああああ！！！」

なんとか高速旋回でそれを避け、五人の元に行かせないようにすぐに再びリインフォースの元に行く

その時

ズシャアアアアア！！

膨大な威力の雷がリインフォースに襲いかかる
リインフォースは手を上空に向けそれを防いだ

「あの子達の元には行かせないわよ」

「あなたは!!」

「プレシアさん!？」

杖を持ち乱入して来たプレシアに二人が驚愕する

「アリア、ロツテ、作戦が決まった、協力を……あなたは!？」

「かあさん!？」

クロノが二人の元に駆け寄り話すがそこにいたプレシアに気付いき叫び

フェイト達もプレシアに気づき驚く

プレシアはそれに微笑んでクロノの方を向く

「私も協力させてもらおうわ。で、クロノ君、作戦は？」

「あ……はい……作戦は(ぴか!!) ツツ!!」

ズガアアアア

「ボウツとしないでくれクロノ!!」

「すまない!!」

クロノ達の意識が外れていたところにリインフォースが攻撃をする
が、なんとかユーノがそれをバリアで防ぎ叱責する

クロノは謝り、そしてリインフォースの攻撃をけん制しつつ三人
に作戦を伝える

(.....というわけだが、できそうか?)

(分かったわ)

(任してちょうだい!)

(師として、この事態を引き起こした責任者として、何としてもや
り遂げる)

ロツテとアリアは頷き、行動を開始した

逆方向から突然感じた膨大な魔力に攻撃を中断し、その方向に顔を向ける

そこには一発一発が膨大な雷の魔力を内包した無数の魔力弾を配置したプレシア

そしてプレシアは杖を振りかぶり

「フォトンランサー・ジエノサイドシフト!!」

振り下ろし、流星群のようにリインフォースにたたきつける

「グウウウウ!!」

それはSSクラスの強力な攻撃である上、その間ももう三方それぞれからひっきりなしに攻撃してくるせいで、リインフォースはリンスの全てを全方位防御につき込まなくてはならなくなる

「ストラグルバインド!!」
「チェーンバインド!!」

そこに何重にも編んだアルフとユーノの何重もの鎖型のバインドが一斉にリインフォースに襲い掛かり拘束する

「グッ……!!」

リインフォースは解除しようとするが何十にも嚴重に施されているため簡単にバインドブレイクできない

さらに

「ストラグルバインド!!」
「ライトニングバインド!!」
「フープバインド!!」
「クリスタルケージ!!」

攻撃をやめた四人がだめ押しとばかりにその上からさらにバインドを仕掛け、さらにアリアがクリスタルケージの中に閉じ込める

そして

「みんな、行くよ!!」

「これで終わりです!!」

そこに届くのはとフェイトの叫び声

リインフォースを残し全員一気に散会する

そして見上げたリインフォースの目の前に

「デイバイン……バスター!!!!!!」

「撃ち抜け、雷神!!! ジェットザンバー!!!」

レイジングハートとバルディッシュをそれぞれフルドライブのエクセリオンモード、ザンバーフォームにし、さらに複数のカードリッジを消費し強化された……

圧倒的なエネルギーを持つ砲撃が二方から迫って来た

リインフォースは障壁を二方に張るが、砲撃はそれを容赦なく破壊しリインフォースを飲み込んだ

そして、膨大なダメージに自動防御システムは動作不良を起こし

『我ら、夜天の主の下に集いし騎士』

『主ある限り、我らの魂尽きる事なし』

『この身に命ある限り、我らは御身の下にあり』

『我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に』

「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風、リインフォース……
セツト、アップ!!!」

はやての脱出は成功した

051 vs 自動防御プログラム(第二ラウンド)(後書き)

学生フォーミュラーに行ってきました

初日〜二日目での朝からフォーミュラの整備の作業(am 9:00 翌日am 8:00 この間一切寝てません!!)

この後いそいでトラックに車両と荷物を乗せ車に乗り大会競技場に移動!! 車の中で少し仮眠取る。そして猛暑の中再び作業!!

三日目・四日目の台風接近による大雨の中の作業!!

そのあとの嘘のような日照りの中の作業と観戦(観客席?)に日陰一切なし!!

何これ? 基本屋内生活の俺にはむっちゃきびしかったんだけど・・・

しかも残りも朝(am 9:00)から夜(pm 7:00)まで作業とかマジシネタ!!

足はこつたし、肌が無茶クチャ焼けてまだひりひりしてます!!

まあ、楽しかったんですけどね・・・上智大学のあのほかの大学

とフレームに一線をかしたデザインとか、東大のターボエンジン搭載とか、日本フォーミュラーの解体シヨウとか・・・・・・・・まあ、結構充実した一週間でした

クロスもの募集は今日までです
内容は活動報告で

052 最終決戦へ(前書き)

二話連続投稿、いつきまーす

「はやて……………」

「すみません……………」

「主……………」

「あの、はやてちゃん……私達……………」

何を言っただけで良いのか分からず言葉を詰まらせるヴォルケンリッター

だがはやては笑顔を浮かべ、首を振る

「ええんよ、みんなわかってる。リインフォースが教えてくれた。そやけど細かいことは後や……………。今は、お帰り……………みんな。」

「……………はやて……………はやて!! はやてえ!! うう……………」

その言葉と共にはやてに飛びつき嗚咽を漏らすヴィータ
残りのヴォルケンリッターも涙を流す

そしてなのは達の方を見るはやて

「なのはちゃん、久しぶりやな。それに、あんたがフェイトちゃんやな、わたしははやて、よろしくな。」

「あ、うん、よろしく。」

はやてとフェイトは手を握り合う

「あ、そうだ、他のみんなも紹介するね。」

そこに、なのはは他のメンバーも紹介する

「ユーノ君にアルフさん、クロノ君に、こっちがフェイトちゃんのお母さんのプレシアさん、で……………」
『ロツテとアリアだ……………久しぶりだね……………はやて』

モニターが現れグラムが映る

はやてやなのは達はどうしていいか分からず無言で三人を見る

「あ……あの……ごめんなさい。」

「すみませんでした!!--」

『到底許してもらえないことでは無いとは思いますが……すまなかつた。』

ロツテとアリア、そしてモニターの向こうでグラムが頭を下げる

「わかった………とりあえず、なにか理由があるんやろうから後でじっくり教えてな。」

『ああ、約束する』

はやての言葉に深く頷くグラム

そこに

「二人とも、すまないな………さっきなのはが紹介して

くれたけど、時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。水を差してしまつが、時間が無いので現状を簡潔に説明する。」

クロノが口を挟む、その手には先程の戦闘でエリアが使用していたデュランダル

クロノははやてに自己紹介をし、現状を説明する

「あそこの黒い淀み……闇の書の防衛プログラムは後数分で暴走を開始する、僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在2つある」

手に持つデュランダルを見せながら

「一つ、極めて強力な凍結魔法で停止させる、2つ、衛星軌道上の艦船アースラの魔導砲、アルカンシエルで消滅させる。これ以外に他にいい手が無いか？闇の書の主とその守護騎士のに聞きたい」

クロノが皆を見渡す

そこに、シャマルが遠慮がちに手を上げ

「えーっと、最初の方は難しいと思います、主のいない防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから」

「コアがある限り再生機能は止まらない」

一つ目の方法を却下し、シグナムがそれを補足する

「アルカンシエルも絶対駄目！ こんな所でアルカンシエル撃つたらはやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！」

両手で×の字を作りながらヴィータが叫ぶ。

「そんなにすごいのか？」

ヴィータの剣幕になのはがユーノに尋ねる

「発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を反応消滅させる魔導砲・
……って言えばわかるかな？」

そう説明された瞬間、フエイトと共に血相を変え

「あのっ！ 私もそれ反対！」

「同じく！ 絶対反対！」

二人で猛烈に反対する

「僕も艦長も使いたくは無いわ、でもアレの暴走が本格的に始まったら被害はそれより遙かに大きくなる」

「暴走が始まると触れた物を侵食して無限に広がっていくからね」

クロノはそう顔をしかめて言う
ユーノがつぶやくように補足する。

「だがどっちみち、アルカンシエルを使うわけにはいかない。過去に数回使用されたことがあったがそれでも闇の書は残っていたのだろうか？」

「あ、それなら大丈夫や。あたしとリインフォースである程度調べれたし、何とか転生機能を削除することもできたから、後はコアさえ破壊できたらもう再生することはあらへん。コアもたった一個や！！」

やや希望の見える情報を提示したはやて、だが

『はい皆！ 暴走限界点まで残り15分を切ったよ！』

そこにエイミィからの無常な報告、皆が焦り始める

「くそ・・・だけど、結局はほとんど振り出した、何か無いか？」

「すまない、役に立てそうに無い。」

「暴走に立ち会った経験は我らにも殆ど無いのだ。 どうにかして

コアを破壊するしかないとか・・・」

「なんとか周りを破壊できても、コアはとんでもなく堅いですから、
・・・それこそアルカンシエルぐらいの威力が無いと・・・」

ヴォルケンリッターズに尋ねるクロノ、だがシグナム、ザフィーラ、

シャマルはそう返すしかない

「でも何とか止めないと……はやてちゃんの家が無くなっちゃうの、嫌ですし」

「イヤ、そういうレベルの話じゃ無いんだがな……」

続けて呟くシャマルにクロノが突っ込む

その時我慢の袋が切れたらしく、はやてが叫ぶ

「あ~~~~もう、刻兄やったら絶対どうにかしてくれるのに!!」
「ほんとだ、刻のやつ、こんな時に何処に行ってるんだよ!!」

「ああ……って、おい!!」
「ああ……」

続いて叫ぶヴィータ、シグナムとザフィーラが声を出す時すでに遅し

周囲の注目がはやて達に集まっている

「はやてちゃん……今何て言った？」

「刻って言ったよね……？」

なのはとユーノの質問に目を泳がせるが、

「えつとな~~~~……刻兄は魔法使いなんや。」

仕方ないとはやてが白状する

「な、あいつが魔導師！？ 大した魔力は感じなかったぞ！？」

「なんか抑え込んでるって言っとったわ」

「武術の氣をコントロールする応用でどうとかって言ってたな」

クロノの叫びにはやてが思い出すように言い、ヴィータが補足する

「後訂正すると、刻君は魔導師じゃなくて魔術師ですね……」

「ああ、初めは眉唾ものだったが、我らのは明らかに形態が違ったな。あいつが使うのは正に魔法だ。我らのは根本から違う」

「ちなみにそう言うわけで、刻兄の魔法はほとんど使えへん、ミッドとベルカ式のは使えるんやけど、それ以外が全部文字化けしてしもうとる。……まあ、それでも十分すぎるほどバリエーションがあるんやけどな」

シヤマルがクロノの言葉を訂正し、
ザフィーラの説明に、夜天の書のページをめくりながらはやてが補足する

「えっと……刻ってそんなに強いのか？」

フェイトが質問する

「自動防御プログラムが使ったのは全部刻兄の魔法やな」

「え、あれが!？」

「ああ、刻は自分から蒐集させた、魔法使いから募集したのは彼からだけだ」

「ちなみにその際の蒐集量は約300項だったな。」

はやて、シグナム、ザフィーラの返答に、フェイトはうわ〜と顔を引きつらせる

「……………とりあえず詳しいことは保留にしよう。で、あいつは今どこにいるんだ？」

「さあ……………ビハインドの方なんか、それともノーバディーの討伐かどちらかやと思うんやけど」

「彼が転移してから一時間ぐらい経てるから、帰って来ても良いころなんだけど……………」

「……………ロツテ？」

はやてにつけ足すロツテ、色々と言いたいことがあるが、とりあえずなぜそんなことが言えるんだとクロノがじと目を向ける

「えっと……………計画の障害になりえる最大の異分子だったんで監視してました。」

目を泳がせながらロツテは答える

「……………とにかく、此処にいつ来るか分からないやつを当てにすることは出来ない。時間が無いぞ、早く結論を出さないと……………」

クロノの言葉に気づき、再びあわて始める面々、

そのとき

ドクン

深い鼓動のような振動がなのは達を駆け抜ける

発生源に一齐に振り向くのは達、そこあるのはなのは達の頭を悩ませている防御プログラムの黒い塊

一見したところ変化は見られなかったが

ピキキキキキ………

その黒球の表面に幾何学的な模様が浮かび始め

ズウウウウー………

六枚の白い巨大な魔法陣が現れ、その黒球を中心に頂点の一つを真上にした正方形の面のように集まる

そして

バチッ、ビシッ、バリッ、ビキ、バチチチ

黒球が幕放電のような現象を放ちながら周囲の魔法陣と共にみるみるちいさくなっていく

「エイミィ!!!」

クロノが焦りエイミィに叫びかける

『ちょっと待って、数値が不規則に大幅に変動してて……
これは……クロノ君!!! 暴走が始まる!!!』

「な!!!」

エイミィの報告に全員慌てる、

「ろくに案が決まって無いのに戦わないといけないのかい!!」
「仕方が無いわ、アルフ……戦いながら考えましょう。」

アルフの叫びをプレシアがなだめ防御プログラムを見据える

『行けるか?』
「大丈夫です。」
「最後までやらせて下さい」
『分かった……気をつけてくれ』

グレアムの質問にアリアとロツテは戦闘意思を示す

「なのは……」
「大丈夫、ユーノ君、私は行ける」
『フェイトは……』
「私も大丈夫。」

ユーノとアリシアの心配になのはとフェイトは笑って答える

「あ、そうや、シャマル。」

「はい、みなさんの治療ですね？ クラールヴィント、本領発揮よ」
《Yes.》

シャマルははやてに答え、指にはめている指輪、クラールヴィントにキスをした

「静かな風よ 癒やしの恵みを運んで」

その言葉と共になのは達は穏やかな光に包まれ傷や疲れがすさまじいスピードで癒される

「湖の騎士シャマルと風のリング クラールヴィント、癒やしと補助が本領です

尾の子ほどじゃないけど私だってなかなかでしょ？」

「凄いです…！」

「ありがとうございます、シャマルさん！」

笑いながらシャマルがたずね、なのは達は自分の体を確かめお礼を言う

そこに

「来るぞー!!」

ザフィーラが叱責を飛ばす

すぐ近くでシグナムも剣を抜き構えている

全員がそちらを見ると、いつの間にか黒球はなのは達並みの大きさの卵状になり、周囲の魔法陣は消え、幕放電も収まっていた

その一瞬後、

ピシュシュシュシュシュ

球の表面に浮かんでいた幾何学模様
に光が駆け廻り、

バアアアアアアアアアア

模様を避け目からが
一気にはじけ飛ぶ

そしてその中から膝を抱えるように
つづくまっっている人物が出て来た

「……………え？」

「あの人って……………」

おもむろに立ち上がる人物

彼はとある人物によく似た、色違いの真っ白なローブを羽織っていた
だがフードはかぶっていない

「そんな……………」

彼はとある人物によく似た色違いの白髪と深緑の目をしていた

「……………そんな……………」

「はやてちゃん？」

「リインフォースによると……………防御プログラムが全て
圧縮されて集まったみたいなんや……………」

彼は、白髪、緑色の目、白ローブだったが、それ以外は彼女達がよく知る人物によく似ていた

「闇の書に蒐集された、刻兄の分身に……………」

刻を模った防御プログラムははその深緑の目を開き、虚空を見据え

「……………」

ビュンー！

辺りを見渡したと思うと一瞬にして忽然と消えた

「「「な!?!」」」

「エイミィ! あいつは!?!」

突然の行動に一同は驚き、クロノはエイミィに急いで行方を尋ねる

『ちょっと待って………いた、クロノ君から十一時の方向に400メートルぐらいの所にあるビルの屋上!!!』

皆急いで移動する

052 最終決戦へ(後書き)

すぐにもうひとつも投稿します。

053 降臨!! (前書き)

連続投稿、二話目!!!

053 降臨!!

「……………なにか用？」

ビルの屋上の淵で足を組み、頬杖をつきながら座っていた彼は飛んで来たクロノ達に質問する

「（しゃべった!?) ……えっと……………刻君でいいのかな？」

「ん？」

闇の書の防衛プログラムが喋った事にかなり驚きつつ質問するフェイト。

彼は頬杖をやめ、ふと考えるように顎に手を触れる

「……………そうだな、確かにあいつと俺はほとんど一緒だが同じように呼ばれるのは俺が偽物みたいで癢に触るな……………」
『マーシャント』と呼んでもらおうか？」

「（明確な意思があるのか）……………ならマーシャント、君は何をしているんだ？」

一連の動作で自分達と同じく高い知能を持っていると結論づけ、質問するクロノ

「べつに……………待ってるだけだ。俺の元になったやつ、仁神刻をさ。」

マーシャントの答えにクロノ達はざわめく

「なぜだ？」

「なぜって、戦うためにきまってるだろ？」

マーシャントは好戦的な笑みを浮かべながら答える

「本物と……………入れ替わるつもり？」

プレシアが構えながら質問する、だが

「何言ってるんだ？ そんなことできる訳無いだろ？ 第一俺はさっき言っただろ。俺はマーシャント、あいつと一緒にしないでほしい。」

その反応にプレシアたとフェイトが驚く、過去にあったことがあったことだけに

「じゃあ聞くけどさ、同じ容姿をしてたら同一人物になるのなら、整形をして同じ姿になった人達や瓜二つの双子とかは全部同一人物になるのか？ 同じ記憶を持っていたら同一人物になるのなら、記憶喪失になったやつはもう別人になるのかな？俺は違うと思うけどな。」

笑みを浮かべながら平然と言うマーシャントに皆が驚愕する

「じゃあ、お前の目的は？」

「さっき言っただろ？ 戦うためだ。」

マーシャントは手を淵に乗せ、足をぶらぶらさせながら言う

「俺は防御プログラム、破壊されなきゃいけないんだけど……
・・・ただやられるなんて我慢できないんだよね。」

「周りを破壊しようとかは……思わないのか？」

「ああ、なんか俺の中でそんなことざわめいてるな。 どうでもいけど。」

ザフィーラがたずねるが、マーシャントはそれを一蹴する

「よう我慢できるんやな……閻の書の閻は……と
つつもない怨嗟の暴風雨やのに……私はリインフォースがお
ったからよかったもの……」

「暴風雨？ 笑わせないでほしいな……そんなもの俺
にとっては子守歌に等しい。 戦いに出れば、こんなのいつだって
聞ける。」

マーシャントの元は刻だ、つまりそれは刻の経験したことに他なら
ない

いったい彼はどんな場所にいたのかと、なのは、フェイト、ユーノ、
アルフ以外が考える

その時

「でね……………」

突然雰囲気を変えるマーシャント

「お前達はどつする訳？ あいつが来るまで俺と戦ってくれるわけ？」

先ほどまでとは違う、攻撃的な笑みを浮かべ威圧感を放ち始めるマーシャントに全員身構える

そして

「そっか……………」

マーシャントは片腕を前にあげ

「じゃあ……」

その手に簡易的な柄が現れ、その先からバルディッシュのザンバーフォームのようにバチバチと放電現象のようなものを放ちながら薄暗い白色の魔力刃が伸びる

もう片方の手にも同じ剣が一振り

マーシャントは構えをとり

「遊ぶとしよう」

なのは達の方へ向け、空を蹴った

0
5
3

1214

なのは達は相手の注意をばらばらにし、不意を突くべく散開するが、マ―シャントはそれに構わず、先ずはシグナムに狙いを定めたらしくそちらへそのまま空を蹴り走って行く

「クツ!!」

シグナムはレヴァンティンを構え応戦する、だが

ガンガンバチザシユガバシユガンガンガンガンガンザシユガン
ガンギンガンガンバシユガンバチツバシユガンギンザシユ

流れるような攻撃に防戦一方になる

「ハツ!!」

そこにフェイトがザンバーフォームで切りかかろうとする

バチッ！！

しかしマーシャントは体を回転させ、剣を逆手に持った左手でそれを受け流し、そのままシグナムの方へぶつけ

「はああああ！！！！」

さらに回転しつつ両手の剣を重ね、巨大化させ、振りかぶり、重なつた二人へ切りかかる

「ぐぐぐ……うああああああ！！！！」

二人は防ぐも、力任せな攻撃に耐えきれず吹き飛ばされる

「フェイトに何すんだい！！！！」

主が吹き飛ばされたことに激高し突撃するアルフ

マーシャントの振った剣の位置からは攻撃が間に合わない、現在何も持っていない左手側から突撃するが

バシユン

「え？」

剣が光った瞬間再び一瞬にして再び大剣は二刀に戻り、左手にその一刀が握られていた

マーシャントはカウンターの要領でアルフへ剣を振る

「うぁー!!」

しかし間一髪でロツテが横から飛び込み、アルフを抱え離脱する
そしてそこに

「アクセルシューター!!」

「フォトンランサー・ジェノサイドシフト!!」
「ステインガーブレイド・エクスキューションシフト!」
「いけーーーー!!」

なのは、プレシア、クロノ、アリアが複数の魔力弾・魔力刃を雨あられと降り注がせる

しかし、

ズバアアアアアアア

キュルルルルルルル

「うそお!?!」

マーシャントは四人に分裂し、各自両手の剣を高速回転させ、それらを全て受け止め、元来た方へはじき返した

四人は急いでそれを避ける……が

ズバアアアア

「うあああああ」

「くくくくくくく」

「きゃああああ」

そのままマーシャントがそれぞれ追い打ちをかけるように放った×
型の四つの斬撃の衝撃波で吹き飛ばされた

三人が霞の様に消え、再び一人になる

「はあああああ」

「うおおおおお」

残ったマーシャントが斬撃を放ち、一瞬動きを緩めた瞬間前方なな
め左右からアルフとロツテ、そして上からザフィーラが拳を振り上げ

「はあああああ！！」

後方から復帰したシグナムが得物を振り上げ接近する

それに対しマーシャントはサマーソルトをしつつ、剣の柄頭しながこを合わせ双刃 両端に刃がついた武器「詳しく言うと『スター・オーズ エピソード?』のダース・ールが最後に使ってたあの武器の形態） にし上下逆さまの格好でザフィーラの拳を踏み台にし

「が・・・!」

シグナムに向け蹴りつける、剣は相乗効果で一気に加速し、ギリギリ防いだシグナムは吹き飛ばされなかつたものの、やや弾き飛ばされ体勢を崩してしまう、

その隙にマーシャントは

「よっつ」 ガシー!

「へ? うわわわわわわわ・・・!!」

横回転しつつ、ロツテとアルフの手首をつかみ二人の威力を乗せさらには回転を加速させながら数回回転し、

「ほらよー!」

アルフをザフィーラへ、ロツテをシグナムの方へ投げつける

四人はそれぞれ重なり合い縦回転しながら吹き飛ばす、

マーシャントは先ほどはじかれた剣を手に取り、二刀に分け、今度は上下に合わせるように配置し、槍のような形態にする

そして

「轟天爆碎!!! ギガ(ギュン!!!!).....え?」

「悪・即.....斬!!!」

構え、ギガントシュラクを放とうとしていたヴィータに一気に突進する

ヴィータはとっさのバリアとアイゼンの柄で防ぐが

「ぐ……うわあああああ」

耐えきれずバリアもろとも吹き飛ばされる

マーシャントは再び二刀に戻し、残りのメンバーの方へ向かおうとする

その時

ジャラララ、ビシシシ、ガチン・バチン

三種のバインドが何重にもマーシャントを拘束する

発動方向を見るとクロノ・プレシア・ユーノ・シャマル

ジャラララ・ガン・スバアアア・バシン

急いで戻って来たロツテ・アルフ・ザフィーラがバインドを追加しさらにアリアがクリスタルゲージに閉じ込める、そして

「全力全開！！ スターライト……………」

「雷光一閃！！ プラズマザンバー……………」

「響け、終焉の笛！！ ラグナロク……………」

なのはとはやて、そしていつの間にか戻って来ていたフェイトが収束砲撃を発動させようとしていた、

まだ一度も魔法を使っていないはやてのものはもちろんのこと、なのはとフェイトも再びデバイスをフルドライブにし、さらにカードリッジをめいいつぱい使い強化しているので、どれもむだにとてつもない魔力を孕んでいる

そして

「っっっブレイカーーーーーー!!!!!!」「」

桃・金・白色の魔力光が轟音を立てながら放たれる

勝ったと思いきや、笑顔を浮かべる面々……プレシア・リーゼ姉妹・クロノを除いた

彼女達はマーシャントの表情に違和感を覚える

・・・笑ってる？

そう彼女らが思った瞬間

バチイーン！！

「「「「な！？」「」「」

全てのバインドとクリスタルゲージが吹き飛ぶ

回避される！？ と焦るクロノ達、だがマーシャントは動かずただ

手を宙に添える

クロノ達は疑問顔をするが

「開け……時空の扉!!」

「まさか!!」

シヤマルが叫ぶ、

どう言うことだ？ と聞こうとする残りのメンバー、だが説明を受ける前に、理由を目の当たりにした

ズバアアアアアアア!!

三人の砲撃はマーシャントに当たる一歩手前でなにかをくぐるように突然何処かへ消えて行った

そして

ピカ!!

「「「「「え?」「」「」」

ふと光るものが目に入り、そちらに目を向けるなのは達、それは急
接近してくる先ほど消え去った三人の砲撃だった

「「「「う………うわあああああああ……!」「」」」

各々急いでバリアや障壁を張るが、圧倒的な威力を誇る三つの収束砲撃の前にほとんど効果は無くなのは達は地面に落ちて行った

「よっと」

剣を消し、なのは達の前に降り立つマーシャント、満身創痍だが全員意識があるようだ

「うん、なかなか面白かったよ。」

笑顔で言うマーシャントになのは達は苦笑いしか浮かばない、

「さてと、で………うん？」

なにかを言おうとするが、ふと何かに気付いたように振り返り一点を見る

なのは達は疑問顔をするが、次の瞬間

「来たか!!!」

キイイイイイイイイイイイイイ

浮かべた残酷な笑みと、そう言った瞬間右の掌に収束し始めた感じ

たことの無い膨大な魔力に戦慄する

「はあああああああ!!!」

マーシャントは右腕を思いっきり前に突き出し、作りだした一発の魔力弾を放つ

それはバスケットボールを少し小さくした大きさだったが

ギューイイイイイイイイイイイイ

とんでもない魔力を内包したそれは銃弾の様に回転しつつ、周りと地面を巻き込み挟みながら駆ける

そして

シュン

「はい？ ……っつわあああ!!!」

ヒュン……ズガガガガガガガ

その延長線上の交差点の真ん中に突然現れた何者かに猛烈なアプロ
ーチを仕掛け、着弾した瞬間その衝撃波で辺りが吹き飛ば

……が

「ああああああ………はああ!!!」

その球を右腕で受け止めていた人物はそれを横に振り抜く

ヒュン・・・・・・・・

カツ！！

ズガガガガガガ・・・・・・・・

振り抜かれた魔力弾は数キロ飛んでいき

着弾地点周辺数百メートルを吹き飛ばした

大雨で件の人物の姿はぼやけてよく見えないが

「あゝあ・・・・・・・・町の一部が吹き飛んじやっただけだ」

「どうせまだ壊れるんだろうつから後で直すよ……………」

その肩に座った妖精のようなものが呟き、その人物は額を抑えながら答える

なのは達はその二つの声に目を見開き何かを言おうとするが、

ギョーン！！

突然遠くにいたアリサ・すずかと共に、何者かによって結界の外へ……………アースラへ転移させられた

その瞬間、周囲の結界の範囲が広がり、とてつもなく堅固なものに変わる

「よう、遅かったな！！ 早速パーティーを始めようぜ！！ 仁神

刻！！」

マーシャントはそれを一瞥して叫びかけ

「しけたパーティーだな・・・ジュースぐらい用意してほしかったけど」

片手を振りながら、刻が近くに歩み寄る

そして

「ソニア」

「うん。」

「「ユニゾン・イン」」

刻はソニアとユニゾンし

「くくく……さあ、始めようか……俺の名はマーシャント、貴様が殺す人物の……名前だ!!」

「良いぜ、じゃあ遊ぶとするか!!」

マーシャントと刻は剣を展開し、駆けだした

053 降臨!! (後書き)

ここらへんの話の戦闘書いてたときに聞いてた曲名(ゲーム編)

Masker

Genuine Devil

銀の意思

Overdosing Heavenly Bliss

The Deep End

Lord of the Castle

The 13th Struggle

The 13th Reflection

The Other Promise

Rage Awakened

Riku Final Battle

A Battle Of Great Valor

Fragments of Sorrow)BBsver)

Mysterious Figure (仮題)

Get Over the Barrier!

Wheel of Fortune Last Judgment

t

The End Of A Thought

悲しみの荒野

Eternal mind

Restless Blade

The Fated Final Battle

Bowser's Inside Story Final Bo

ss Music

VACANT INTERFERENCE

The Place Where Souls Return
Scias
Legend Of The Five Great Dragons
This Journey without End
Crudelis et Magnificus
Bethel LAST RANKER - Battle Ver.
-
Doppelganger Battle
The Viper (Battle) With Echidna
(a Power of Destroyer - Limit Break
mix -
Miracle Matter Battle
Dream Land
旧ププランド
マスクド・デデデのテーマ
Battle! Donkey Kong Vs Army Di
llo III!
Molgera Battle (仮題)
Give Me All Your Love
ツイスター

素晴らしい………統一性が………全くねえ!! (TOT)

054 刻vsマーシャント(前書き)

なんとか書けた・・・少しまいちだったけど・・・

今回は(も)丸々戦闘です!!

054 刻vsマーシャント

「ウワ!」「」

「「「「「キャ!」「」

「「「「「ちよ……重い……」

なのは達が積み重なるようにアースラのブリッジに現れ、下の方に現れ押しつぶされたクロノやロッテ姉妹がうめき声を上げる

「みんな!」

「大丈夫!」

エイミィが叫びリンディーが駆けよる

「はい……何とか……」

クロノが代表して呻きつつ答える

「ちょっと、今度はなんなのよ! 此処は何処なの!」
「あ、アリサちゃん落ち着いて……」

「え、アリサちゃん!？」
「すずかちゃんも飛ばされたんか!？」

なのはとはやてが二人に気づき叫び声を上げる

「あ、なのは、いったい此処は何処!! 何が起こってるの!!」

「えっと……此処はアースラっていう次元航行艦で何が起こっているかって言うと……えっとお……」

何から説明していか分からず目を泳がせるなのは、そこに

『よう、遅かったな!! 早速パーティーを始めようぜ!! 仁神刻!!』

『しけたパーティーだな……ジューズぐらい用意してほしかったけど』

艦のスピーカーから声が発せられ、なのは達は一斉にモニターに釘づけになる

モニターの向こうで刻がソニアとユニゾンする

「あいつが……それにユニゾンデバイス……だど？」

クロノが呟く

「ねえはやてちゃん、あの白い刻君って誰？」

「えっと……防御プログラムって言うのが刻兄のデータを元に再構成された物なんや、本人は自分のことをマーシャントって呼んどる。」

「ねえ、刻君は……大丈夫なのかな？」

すずかの質問にはやてが答える隣でフェイトが心配そうにつぶやく

「あつ、そつだ、早く戻って助けないと!」

なのはは慌てて転送装置の方へ向かおうとするが

「だめ！ 強装結界が張られてて中に転移させることが出来ない！
式が複雑すぎて全く解読できないし……。」

コンソールを叩きながらエイミィが叫ぶ

そして

ギユアアアアアアアアガガガガガガ

轟音がブリッジに響き渡った

「え？」

なのはは恐る恐るモニターの方へ振り替える

「な……なんなんだ。」

「これは……」

「とんでもないわね……」

モニターを見ながらクロノが呟き、いつの間にかブリッジに来ていた三提督のラルゴとミゼットが感嘆の声を上げる

そのほかのメンバーは声もあげられず、ただ茫然とモニターを見ていた

「なにが……おこったの？」

声を震わせながら誰にでも無く質問するなのは

モニターには、二人を中心に半径数百メートルにあるビルがガラガラとクズれ落ちて行く光景が映っていた

二人は足に力を込め、地を踏みしめ、一步踏み出すことにスピードを爆発的に上げ、互いに駆け寄る

そして二人は接近しつつそれぞれの獲物　マーシャントは殺傷状態に切り替えた刃の部分が超振動している魔力剣、刻は高密度な魔力を纏わせ、超振動させた閻魔刀^{やまと}　を振りかぶり

一切減速することなく振り抜く

ギア、イイイイン・・・・・・・・

そして二人の剣はぶつかり、弾かれ合い

ヒュン・・・・・・・・ギユアアアアアアガガガガガ

余波で辺り一面が刻まれつつ吹き飛ば

「クック(ツチ)!!!!!!!!!!はあああ!!!!!!」

二人は宙返りで態勢を立て直し、空を蹴り再び接近し、剣で切り合い、追撃するように魔力弾を作りだし放ち合い、避け合い、弾き合う

ガンギンキュンギンガンキンキキキカンガンチュンキンシュンギン
ンキンジュキンシャアアガイニングギギンキュンバババギユ
インジュンチンズガガガキユンギンシュンチチチジキュンガン
シユアアキュンチヒュルルルルルルルルルルルルルルルルルル
ルルルルガガガギンギリガンギンギンキキキガンガンギンギイ
ンギヤギギギシユジュキュアギンジャンキュリリヒュキュキキチ
チキュヒユンガンギンヒュルルルルルルルルルルルルルルルル
ンキンキンキュウン

あまりに早く振られているため二人の剣が霞のように残像を伴い揺れ動き、切られた雨が剣の軌道を次々と描き、二人の周りで剣がぶつかり合うたびに線香花火のように次々と音と閃光が次々と散り、二人をかすった剣が紅い軌跡を生み、雨に混じり紅い液体が宙を舞い地を染める

二人の魔力弾は剣で切られ、弾かれ、受け流され、彼等の戦いを鮮やかに装飾するように飛び交って行く

二人の周辺にある壁や地面にも次々と斬撃や副産物のカマイタチや衝撃波、魔力弾の流れ弾で刻まれ、吹き飛び、撃ち抜かれ、ひびが入り、崩れ

付近のものはさらに刻まれ砂のようになり、雨に溶け込み落ちてゆく

ギャン！！

そして、一瞬後お互いの武器を弾き合った二人はその弾かれた威力に己の動きを上乗せし、

ドン！！

何も持っていない魔力を纏わせた左手で抉りこむように殴った！！

マーシャントは思いっきり吹き飛ば

.....が

「ハツ.....『麒麟』!!!!」

ズシャアアアアアアア!!!

わざと吹き飛ばさせることで距離を取ったマーシャントはすぐに体制を立て直す。威力自体も自分からバックステップをすることでほとんど殺していたのだ。

そして片手を空に向け、振り下ろし刻に『麒麟』 「落雷」という自然現象を利用した術。自らの術で電気の流れを操ることで、本来何度も放電（落雷）することで失われる雷雲のエネルギーを掻き集め、一度に消費することで極大な雷を落とす を放つ

直径数十メートルのテラワットレベルの高圧電流が刻に降り注ぎ、余波で落雷地点周囲数百メートルが吹き飛び、隕石が落下したようになりさまになる

「どつだ……？」

ふつと息をつくマーシャント、だが

ムシャ、バチチ！、ムシャ

「うん、やっぱりこういうのは『天然もの』に限るよね。発電所とかで作られた『養殖もの』だとしても科学調味料みたいな味がしてさ……」

その膨大な電気を材料に、バチバチと余波だけで地面を抉るほどの高電圧の紫電で出来た雷槍を左手に作りだした刻が、余った体に帯電している電気を右手で掴み、食べていた。
閻魔刀やまこはいつの間にか鞘に入れ腰に差している

「よつとー!!」

ビシャアアアア!

刻はその槍をおもむろに投げ、雷槍は轟音を立てながら光のような速さでマーシャントに接近する

「ツツ………クツ（ジュ!）ガアアアアアアアア!」

シャアアアアア………ドゴオオオオオゴロゴロゴロ

マーシャントは刻の投げた雷槍をのけぞることでギリギリ回避するが、顔の一部がかすり、高電圧で焼ける

雷槍はそのまま飛んでいき、雷鳴を響かせ着弾地点周囲数キロを一瞬で破壊する。

あまりの轟音にそこから半径数十キロの範囲にあるビルの窓ガラスが空気の振動で全て割れた

「アアアアアアア………てめえ!!! そんなものまで完成させていやがったのか!!!」

焼かれ炭化し、煙が出ている左目の周辺を抑えながらマーシャントが叫ぶ

「まあ、なんとかね。おかげで感電せずにすんだよ。」

残りの雷も食べ終わり、口の周りをぬぐいながら刻が言う

「少しは加減してほしいな……そっちの方が知識量が多いんだから……。」

顔から手をどけるマーシャント、焼かれたはずの場所はすでに治っていた

「いやだよそんなこと。こっちはとんでもない強敵と戦ったせいで疲れはてるんだ、そっちこそ手加減してほしいんだけど？」

頭をかきながら刻が言う

「ぬかせー!!」

「ま、そう来るだろうね。」

戦いが再開した

054 刻vsマーシャント

「環境は大切にしましょう……え？」そんなこと構
ってられん！！」ですか？……ああ、そうですか……」

「何だ……なんなんだ……」

「早すぎる……」

「ちよつと待って……あれって……血？ 非殺傷じゃないの？」

「電気を……食べた？」

なのは達はモニター越しに戦闘を見ながら口ぐちに眩きを洩らす

『ガアアアアアアアアア!』

「ッヒ!」

「あ……あ……あ……」

雷槍があたり炭化した左目の周辺を抑えうづくまるマーシャントを
見てなのは達が崩れ落ちる

彼らが行っているのは彼女達の知る非殺傷による相手を屈服させる
戦いではなく、あまりに生々しい命を奪い合う戦い……
『殺し合い』だった

『てめえ!! そんなものまで完成させて居やがったのか!!』

「なに……あれ?」

茫然とただ呟くフェイト、そこに

「滅竜魔法系統かしらね？」

かけられる見知らぬ女性の声、なのは達はそちらに振り向く

そこには鮮やかな赤色の髪をポニーテールにした、白衣を羽織った中学生ほどの女性がいた

「ドラゴンと渡り合うためには人間は肉体が弱すぎる、だったらドラゴンと同じ肉体になればいいじゃないか。ってコンセプトの元に作られた魔法。雷龍の皮膚は雷を纏い、雷を操り、雷をくらってエネルギーとする。ってところね。」

彼女は何処からか持って来たのだろうか、カジュアルな椅子に座り、マグカップからコーヒーらしきものを飲みながら説明する。

隣に置かれたテーブルの上では、アルコールランプで温められている湯浴に丸底フラスコが浸されている。

フラスコの中には飲んでいるものと同じものであろうコーヒーがなみなみと入っていた

「あなたは？」

ミゼットが質問する

「私はメリエル」モア、【守護者】の第五柱を任されてる。以後会うことは無いかもしれないけど、とりあえずよろしく。」

カップを持っていない方の手で軽く手を振りながらメリエルが自己紹介する

「そうか……所で何時来たんだ？」

レオーネがたずねる

「なのはちゃん達をここに転送させて、結界を張る少し前。刻が転移して現れた一瞬後ぐらいね。」

なのは達やアースラの乗員たちがざわめく、それらを全てったった

一人で行ったことや、何よりこんなに近くにいたのに今まで全く気がつかなかったからだ

格好からしてずっとそこにいたはずなのに

「全く気がつかなかったぞ……」

ラルゴが顔をひくつかせながら言う

「ま、仕方ないんじゃない？ 基本私達は一人で戦わないといけな
いから、非近接戦闘特化型の私は誰よりも気配を操る鍛錬に力を入
れてるからね。」

「操る？」

「消したり、意識したくなくてもしてしまうようにしたり、偽った
りってことよ。」

何でもないように言うが、戦乱の時を生き抜いた三提督の記憶にも
そんなことをする魔道師はいなかった

そして何より

「そんなことに力を入れてる局員は聞いたこともないんだけど……」

「。。。」

「と言うか、逆に遠距離型のやつらが何で馬鹿正直に無防備に敵の前に姿見せてるの？ 私は自殺志願者じゃ無いから理由が無い限り、絶対そんな真似はしない。」

リンデイが呟くがメリエルはそれを一蹴する

「あ、あの……刻君を助けに行かないんですか？」

さすががメリエルの方を向き　それでも横目で戦っている刻を心配そうにちらちら見ながらであった　たずねるが、それに対してメリエルは首を横に振る

モニターに映るのは「ブルーアブソリュート絶対零度」！！」「デモンズプレス黒炎」！！」と言う叫び声と共にあたりを凍らせながら進む絶対零度の強烈な冷気と炎すら燃やす黒い色をした地獄の業火を放つ二人

二つの対極のエネルギーは拮抗し消えさるが、二つの術の通り道は目も当てられない状態になっていた

それを片目にメリエルは言う

「自分でやるから手を出さないでくれって言われた。」

「でも……」

なのは何か言おうとするが

「私達は基本的にその世界担当の守護者がそこですることには手は出さないことにしてるの。まあ、そうでなくても不必要に手を貸すべきじゃないしね。」

「でも、何かあったら、メリエルさんは強いんでしょう……」

納得できないと言った表情をするのは
一人より二人でやった方が簡単に終わる、しかもメリエルは刻と同
じ守護者なのだからかなりの実力を持っているはずだ

だったら手を貸すのが道理じゃないのか……と。

だが

「逆に手を貸したら絶対刻は激怒するな。 何で手助けをしたんだ
！！ってね。」

「え？」

「自分にとって正しいことがその人にとっても必ず正しいことだと
は考えない方がいい。 今は理解できないのかもしれないけど、覚
えておいた方がいいわよ。」

なのははメリエルの言葉に戸惑う

「度が過ぎてたり、相手を無視した一方的な善意は、相手にとって

は悪意よりも酷いものを感じてしまうことって結構あるからね。・・・
「まあ、本当にヤバくなったら私は助けるし、第一それに
刻だってそんなことになる前に救援要請出さるうから今回は心配
しなくていいよ。」

メリエルはモニターを見ながら言う

その向こうでは二人が激しく戦い続けていた。

マーシャントが数十人に分裂し四方八方から一気に襲い掛かるが、
それに対し刻は地に掌を叩きつける。

その瞬間辺り一面に電撃が走り周囲の地面やビルから様々な形態の
剣や槍などが錬成され勢いよく突き上がった

マーシャントの偽物は無数の刃物に貫かれ全て消え去り、本物は腹
に突き刺さった剣を折り、力任せに引き抜き刻に投げつけた

腹に空いた傷もあつという間に治癒される

「覚えておいた方がいいわよ。力を持ったことは責任を負うってことであって、あらゆることに介入することが出来るようになるパスポートを貰うことじゃないんだから。」

メリエルはマグカップを口に寄せ傾けながらそう言った

いつしか二人は近接戦闘から魔法の放ちあいにパターンを変更していた。

ただし

「 『アースクエイク』 大地激震 ！！ ！ 」
「 『ヴォルテックス』 大渦嵐 ！！ ！ 」
「 『ライティングダンパー』 雷の豪雨 ！！ ！ 」
「 『タイダルウェイブ』 大津波 ！！ ！ 」
「 『クレイジーコメット』 局地流星群 ！！ ！ 」
「 『エクストラール』 乖離せし理 ！！ ！ 」
「 『デストリクシオン』 時空歪曲 ！！ ！ 」
「 『フレア』 核融合魔法 ！！ ！ 」
「 『インフェルノ』 灼熱地獄 ！！ ！ 」
「 『アイスエイジ』 氷結時代 ！！ ！ 」

使用しているのは間違っても個人に対して使うものではない超大規模無差別殲滅魔法。

それを惜しげもなく互いに放ちまくる

結界の中では、地が割れ、竜巻が蹂躪し、雷と隕石が雨あられと降り注ぎ、津波が襲い、重力や空間がおかしくなり、核の光が生まれ、灼熱と極寒の極限の気候が闘ぎ合うという地獄絵図が繰り広げられていた

「はあああああああ！！！！！」

そんな中、二人はそれぞれ掌に膨大なエネルギーを収束させ

「リレイティブイェスチック
宇宙ジェット！！！！」
「ウェーブモーション キャノン
魔導式波動砲！！！！」

それを放つ、二つは拮抗し、轟音を立て相殺させる

しかしあまりの負荷に空間が悲鳴を上げ、あちこちに放電のような現象が起こる

だが二人はそれすらエネルギーとし、操作し、攻撃に使う

あっという間に空間の異常は収まった

《幕間》

刻が閻魔刀やまとに魔力を込め、居合抜きの要領で無数の次元を切り裂く斬撃を飛ばす

それに対してマーシャントは瞬動でそれを回避しつつ刻に接近し、両手に展開した魔力刀で切り刻む

刻は自分の魔力を爆散バーストさせ、マーシャントを吹き飛ばし、体勢を立て直し、攻撃を仕掛ける

二人は宙に浮いた瓦礫を足場に剣を交差させ、切り合う

目に見えた傷は無くとも、疲労と言った目に見えない肉体的な負荷や精神的な疲弊により、二人の動きは最初ほどの洗練さを持っておらず、二人の体には次々と深い傷が刻まれては消えて行く

だが二人とも攻撃を止める素振りは一切無い

彼等は獲物で切り合い、魔法を放ちあい、強化した肉体で殴り、蹴り合った

そして二人の攻防は永遠に続くかと思われたが、

終わりは急激に訪れた

デスヘアリングレイン
「絶望の雨!!」

マーシャントが数百の魔力弾を放つ

それを刻は周りに浮いているがれきを闇で創った無数の触手で掴み、
ぶつけることで相殺し

ドゴオオオオオオオオ!!

そこに火花を飛ばし、崩れ粉塵となったがれきに引火させ粉塵爆破を起こさせる

「ギヤアアアアア!!」

煙の間を突き進み攻撃を仕掛けようとしていたマーシャントはもろに巻き込まれてしまった

すぐに治癒を開始し、行動を再開できるようにしようとするが

ガシ!!

そうなる前に刻が急接近し、抱え込み、マーシャントを下にして地面に急降下する

ドゴオオオオオオオオオ

二人が墜落した場所を中心に周辺が隕石が落下したかのように大きくへこむ

「ガ………（ザシュ）ガアアアア」

ザシュザシュザシュ

傷がまだ十分治りきっていない上、あまりの衝撃には全く動けない
マーシャントに刻は四本の剣で地面に縫いつける

「アアアアアアアアア!!」

マーシャントは魔力を爆散^{バースト}させ刻と突き刺さった剣を吹き飛ばす

「ラアアアア!!!」

だが刻はすぐに体勢を立て直し、剣の鞘で思いつき殴りつけ、マーシャントを上空に吹き飛ばす

そして

「ハッ!!!」

追撃するように魔力弾を一発放つ、それはマーシャントに当たった瞬間、緑色のスフィアを中心とした魔法陣が展開され、マーシャントはそのスフィア部分にを封じ込められた

マーシャントは傷がある程度回復し行動できるようになり、なんとか破壊し脱出しようとするが、あまりに強固な結界にと四苦八苦する

「刻君の魔力が急激に上昇中!!! 300万・・・500万・・・900万・・・1600万・・・2700万・・・5800（カウンター）（PiPi）え？（バン!）キャ!!!!・・・か、魔力測定装置が!!!」

「馬鹿な!?! SSSなんてレベルじゃない、人間の限界を完全に超えてるぞ!?!」

「負荷に耐えきれず煙を上げ壊れた魔力測定装置（カウンター）にアワアワとエイミイが言い、クロノが叫ぶ」

「ちなみに魔力ランクの目安はのSランクは400万、SSランクは1200万、SSSランクは2500万からである」

「うん、これで決まりだね。」

「……ちっ。」

撃ち抜かれた

そして、どつちやらコアも砕けてしまったらしく、二度と再生することなく、マーシャントは霞のように風景に溶けて行った

「ふう……」

「大丈夫？」

「ああ……」

刻が息をつく、その体が光りソニアとのユニゾンが解除されたソニアの傷階に力無く刻は微笑む

「終わったみたいだね、ご苦労様。」

刻にかけられる声、目を向けるとメリエルが歩いて来ていた

「ああ、そつちも結界を維持してくれてありがとな。」

「まあ、それが約束だからね。街も直しところか？」

メリエルが戦場跡のようになった周りを見渡し提案するが、刻はゆつくりと首を横に振る

「いや、俺がやる……カルマ。」

『戦闘前のデータだろ？ 用意は出来てる。』

刻の呼びかけにモニターが現れ、カルマが映り、文字の氾濫のよう
な映像に変わる

刻はそれを見、手を合わせ、地面につける

その瞬間辺り一面に火花がほとばしり、町が修復された

「さてと………」

そして刻は宙を見つめ

「色々と聞きたいことがあるんだろうけど、今こっちは大切な会議
中なんだ。後で説明するから今は我慢してね。」

そう言ってメリエルと共に姿を消した

054 刻vsマーシャント(後書き)

あと数話でA's編は終了します

裏設定

自動防御プログラム・・・・・・・・・・防御を主体とした戦闘。

マーシャントvsなのは達・・・・・・・・攻撃的なマーシャント、少しふざけた感じがあればなお良し。

マーシャントvs刻・・・・・・・・殺傷設定の攻撃、前者と違い相手を殺そうとする戦闘

というコンセプトで書きました。・・・・・・・・あんまりうまく実行できなかつたけど。

ちなみに刻が最後に使った攻撃の元ネタは『英雄伝説空の軌跡』のフィリップの秘義、『エスメラスハーツ』です。
最初にあれ見た時、むっちゃ喜びました！！

055 後始末？（前書き）

スランプ再び……。

書く内容は決まってるのにちっともキャラが動いてくれない

055 後始末？

………アースラの医務室

ボタン！！

「よっつす。来たぞっつと。」

「おじゃましまーす！！」

あれから数時間後、刻とソニア（ソニアはアウトフレーム）はアースラの医務室にやって来た。

あの後突然気絶し、ようやく目が覚めたはやての周囲には、見舞いに来たなのは、ユーノ、フェイト、アルフ、クロノ、ヴィータとシグナムとシャマル、グレアム、アリア、ロツテがいた

約一名を除き突然豪快に現れた二人に目を点にしている

「………どうしたクロノ？ 頭なんか押さえて」

そんな中ただ一人、頭を押さえていたクロノに刻は質問する

「お前と言いいあのメリエルとか言う奴と言い……なんでそう守護者はホイホイと警備システムに引つかからずにアースラに侵入できるんだよ……」

「何言ってるの？　こんなに見つけて下さい、侵入して下さいってぐらいに堂々と姿現させといて？」

「確かアースラのセキュリティって、一週間前に最新のにバージョンアップしたばかりのはずなんだけど？　アルカンシエル実装した時に……」

「にしては、ステルス機能もクラッキング対策も脆弱すぎるんだけど……馬鹿にしてるのかってぐらいに。」

「……もう良い。お前らに常識が通用しないのは十二分に分かったから。」

アリアの呟きに平然と答える刻にクロノが終止符を打つ

「さいですかっと……で、はやて、体は大丈夫か？」

「む……刻兄、反応遅いで。 此処は『はやて！大丈夫なのか！？』って血相を変えて飛び込んできて、あちこち触ったり質問してくるところやんか。」

「ヤバい状況なら艦の中がもつと慌ただしくなってるだろうからな。 それに見た感じ血行もよさそうだし、異常もなさそうだ。 どうせ突然膨大な魔力を消費した反動でぶっ倒れたんだろ？」

はやてが腕を振りつつ言うが刻はそれをさらっと受け流す

「う……全部当たってるだけに全く反論できへん……」

はやての呟きに肩をすくめる

「ちなみにもうお前にかけてた魔法は全部解除してるからな。 それでも全く苦痛の表情見せてないし。 で、管理人格の名前は何なんだ？」

「ああ、なんか名前を持ってへんかったらしくてな、『リインフォース』って……」
「なるほど、『祝福の風』か。 言い名前じゃんか「ちょっとええ」

か刻兄「ん？ なんだ？」

「リインフォースのことしつとつたんか？」

「ああ。」

真顔で答えたらはやては額を抑えた

「なんで教えてくれんかったん？」

「サプライズのため。 まあ、結局俺の考えてたのとはかけ離れた
出会い方したみたいだけどね。 誰かさん達のせ
いで。」

俺はグレアム達の方を見る、三人は申し訳なさそうに頭を下げた

そこでふと思い出しはやてに聞く

「そついやはやてはどうすんの？ コイツラ？」

「謝ってくれたし私は許そうかな〜思うとるんやけどな。」

「お前らは？」

「はやてが許すって言ったんだ、仕方ねえけど今回のことは水に流
してやる」

「私も同じくです」

「だが今度このようなことをしたら……」

「なるほど。ま、いいんじゃないねえの？」

そう言うとはやて達は少し驚いた顔をした

何でだ？

「えっと……いいんか、刻兄？ 計画を台無しにされたから報復とかするんじゃないかと思うたんやけど……」

ああ、そう言うことね

「今回の問題の中心はお前だからな、お前がいいのなら別にいいよ。まあ、後でいくつかやってもらうことにはなるだろうけど。」

「そっか……ありがとな……」

「別に……（ま、それにこいつらも一応被害者っぽいしな……）

「え？」

「いや、なんでもない。で、そのリインフォースは？」

「ああ、それやったら」

はやてが説明しようとした時、扉が開き何処か沈んだ顔のリインフォースとザフィーラ、エイミーが入って来た

三人はいつの間にか来ていた二人に目を開く

そしてそんな中、刻は唐突にリインフォースに話しかけた

「で、何処がわるいんだリインフォース？」

「え？ あ、あの……」

「表情が三人とも優れない。バグが残ってたってところか？」

「「ツツ！」」

『「そんな!!」』

突然話題を振られ戸惑うリインフォースが何か言う前に、刻は続けて核心を言う
それを聞いて顔をそむけた三人にみなが叫びかけた

「残念だけど修正の余地が全くないの………。それにこのままだとバグが増えてまた暴走してしまうから時間もあまり無いし……」

「ふん……じゃあちよつと見せて。」

エイミーはすまなそうに言うが、刻はそんな言葉に適当に相槌を打ちつつ、リンフォースの前に何処からともなく丸椅子を出して座り、軽く左手を振る

その瞬間刻の目の前に複数のモニターが展開された

刻はそのモニターを少し操作したのち、真剣な表情でじっと見つめる

「刻兄・・・それ・・・気が散る。　だまつてる。」

刻の後ろにいたなのは達はそれを見て目を丸くし、代表してはやてがたずねようとしますが、刻は鋭い声でそれを拒否した

アースラの技術者代表であるエイミーは自分達の知る技術のはるか上に行くであろう刻の行っていることに興味を持ち、後ろに回り込みのぞいてみる、

「ッッ!？」

それを見た瞬間思わず息をのむエイミー

刻の開いているウィンドウにはそれぞれ、なにかを表しているのであるう様々な形態のグラフや容姿のフレームなどが映っていた。

そこに映っていたのは本部にある精密機械で測定された物と遜色ないほど詳細なもの

だがエイミイの驚いたのは特にその中央、刻が現在凝視しているモニターだった

そこは他とは違い、黒い画面いっぱいには無数の緑色の文字が高速で流れていた

エイミイは辛うじて所々の数字は読み取れたが、流れ去る文字列を目で追う事すら出来なかった。

ましてや、今現在刻は何のデータを見ているのかなど皆目付かない

「うん、もう良いよ。．．．にしても、めんどくさいことになったな．．．．．」

そんな中数分後、文字の氾濫が終わり、刻が解析終了の声を上げ、目をほぐす

「ど、どうなん、刻兄？」

「ああ、あちこちバグと融合しちゃってて、直すのは正直骨が折れる．．．．．。削除した方がいいなこりゃ。」

「と言うことはやはり私は消えないといけないと言うことですか．．．．．」

「あ、そこは大丈夫。消すのは闇の書の管理関連ですむから。たぶんユニゾン機能も消すことになるけど．．．．まあ、兎に角どうなるにしろ消える心配はしなくていいってことだ。」

リンフォースは肩を落とすが刻は手を振りながら答える
思わず顔を上げ確認を取ろうとするが、刻は斜め下を向き手を顎に
充て何やら独り言を呟く

「（となると代わりを早速作らないとな・・・リンフォースリンフォース?・・・
あれもさっさとした方がよさそうだし・・・やっぱ連れて行っ
た方が色々と無難か・・・あいつらとは会わせないようにして
・・・あっちは・・・まあ、どうとでもなるしいざとなったら脅
せばいいか）」
「あ、あの・・・刻？」

なにか色々聞き捨てならないことを呟いている刻にフェイトがキ
ョドリながら尋ねる

「ん、ああ。とりあえずこのスペックじゃどうしようもないか
ら・・・ちよつと」一方的な交渉に行ってくる。」

「と云うわけで交渉に来たよ、リンディさん。」

「……何が『と云うわけ』なのか知らないけど……
何を要求する訳？」

リンディーがため息をつきながら聞く

此処は艦長室、三提督と共に今回の事件について話し合っていた所に刻とソニアが（ロックをどのような手段かは知らないが、非正規の方法で警報を鳴らすこともなく解除して）入って来ていきなりそう切り出したのだ

「取りあえず証拠の偽造とか夜天の書の新しい管理人格とか速攻で作らないといけないから、ブツチャケ俺の要求全部のめ。」

「……どつ言ひこと？」

「夜天の書関連のことていくつかしないといけないことがあるつてのと、あとは管理局に俺に関しての情報与えたくないから俺に関すること全部無かったことにする。まだ俺の正体とかは報告して無いからちよつどいいし。闇の書関連の詳細報告で本部に一週間後に到着予定で行くんだろ？ それまでに全部でつち上げる。」

刻はそばにあつた椅子に勝手に座りながら説明する（ソニアはその肩に止まっていた）

「……………はあ……………もう何でそんなことを知つているのかつて聞く気も失せたわ……………それで、私達はどんなメリットがあるのかしら？」

「この情報を流さないであげる。」

「……………え？」

「汚職リスト第二弾」

刻はモニターを開き、リンディー達にそれを見せる

「これは……………ふう……………どうせ本物なんでしょうね……………」

でも確認とかを取っていたら時間がかかるわよ？」

リンディが半目で言うが、刻は小悪魔的な笑みを浮かべてのたまう

「ん〜・・・何言ってるの？ 俺は『渡す』じゃ無くて『流さない』って言ったんだよ？ ネット上の大衆用掲示板とかマスコミとかにばらまかれなくなかったら言うこと聞いてほしいな〜。」

リンディは数秒目を点にした後、うらみがましいような目を刻に向ける

「・・・初めから交渉する気なんてないでしょ。」

「もちろん!！」

元氣よく答える刻にリンディは思いつきりため息をつく

助け船を求めようと三提督の方を向くが、三人とも苦笑いを浮かべ『降参、打つ手なし』と言ったように頷いていた

「はぁ・・・もう勝手にして。」

そして、色々あったせいで精神的に疲弊していたリンディはいつそう大きなため息をつき承諾の意思を伝えた

055 後始末？（後書き）

なぜか今STSの部分を書いている。筆が良く進んでいる。後気分で書き始めたゼロ魔の二次も……。

なんでそつちが書けるんだろ？ 今書いてるところうまくキャラが動いてくれなくて苦労してるのに。

STSなんか到達するまでまだ最低十話分はかかる予定なんだけど……。

とりあえずぼちぼち書いていきます………気長に付き合ってください。

ちなみに数か月ぶりにゲームを買いました

零の軌跡……戦闘曲がほぼ全てやばすぎる。マジで鳥肌が立った。

イベントとかの曲だと第二章の犯人逮捕の時に流れたやつと初めのプロローグ(?)で流れたやつ(『叡智への誘い』)と第三章ラストの逃走(?)の時に流れる曲が個人的にすごく気に入っている。

さあ、いよいよ最終章だ!!

でも本全部とれなかったぜ！！

後四周することは確実だな。

056 後始末？（前書き）

無駄に長いぜ16000字!!

投稿遅れてすみませんでした

056 後始末？

刻がリンディと三提督を説得（？）した後、かなり遅い時間になっているという理由もあり、なのは達は家族達に事情などを説明するために一時帰還し翌朝再びアースラに集合し、その一方で刻とはやて達は一足先にリベルIIアークに行くことになった。

ちなみにその際クロノが刻が次元世界屈指の大企業『ビハインド』と謎の組織『ライトヴァイス』 管理局は数々の犯罪組織を潰し、時に吸収している組織があるということだけは都市伝説レベルで知ってはいたが、それ以上は知らなかった。 の創始者であると知り泡を吹きそうになっていたと追記しよう。

そしてなのは達は高町家にアリサ・すずか・そして高町家の皆を集め一通り説明することになり、その際なのは達（特になのは）はかなり緊張していたが、美由希と桃子以外のメンバー全員とこの場にはいない忍がすでに魔法の存在を知っており、しかも恭也を除く全員がなのはが魔法に出会うよりもかなり前だと逆に知り呆けてしまった。

そしてそんな中、クロノ達はそのきっかけについて質問したが、その答えを聞き、刻は数年前の時点ですでに現在管理局の持っている技術をはるかに超えた魔法を行使出来ていたことを知り天を仰いだのだった

そしてその後、忍も含めた全員で『リベル＝アーク』を見に行くことになった。

（刻が事前に『行きたいんなら連れてきていいよ。今さら数人増えたってあんまら変わらないし、あいつらなら信用できるから。』と一応許可は出していた。）

高町家でそのようなイベントが展開されていた時、アースラに泊まっていたグレアムとリーゼ姉妹は三提督に呼ばれ、とある部屋の前に来ていた

「失礼します」

ノックを行い部屋に入る三人、だが入った瞬間三提督の他に予想外の人物が座っているのに気付き驚く

そんな中ドアが閉まった瞬間、その部屋を取り囲むように『認識障害』・『人払い』・『遮音障壁』と言った傍聴対策の施された頑丈な結界が張られた

グラムはしばし固まっていたが、自分が呼ばれた訳を直感し、重い表情で先にいた五人を見渡で椅子に座る。

リーゼ姉妹も戸惑いながらグラムを挟むように座った

そしてそれを見て刻が一瞬ほほ笑んだ後、顔を引き締め

「さて、時間もあんまりないし、さっそく話を始めようか。いくつか知っておいてほしいことと、これからのことについて。」

話を始めた

……翌日の早朝、

ブリッジにスタッフを集め刻は一通り説明する

「……んじゃあ最後にもう一度警告しとくけど、今から艦ごと
転移する『リベル・アーク』はお前達の法とは違う法律ルールで動いてい
る。それにお前らはあっちではただの一般人の客以外の何物でも
ないからな。
くれぐれも勝手なことはいないように。」

「ちなみに……下手なことをしたらどうなるんですか？」
「人格否定はしたくないけど、仕方ないよね。」

クルーのうちの一人の質問に黒い笑顔で真つ黒いことを堂々とのたまう

どう言うことが察した乗組員たちは戦慄した

「そんな技術も持つてるの？」

「別に驚く事じゃないと思うけどな」（実際アルハザードのやつ少しじつただけだし）

「え？」

「いや、なんでも。ま、と言うわけで変な気は起こさない方がいいよ？ そうしなかったら結構実入りがあると思うし。エイミーとかは特に。」

「え？ 私？」

エイミーが声を上げるが、刻はそれに答えず何処からともなく杖を取り出し、床につきたてる

「時空間転移術式起動」 § ???? ???? ????
????? ???? ???? ????
セ? ???? ???? ????
? ???? ???? ????
? ???? ???? ????
?

どうやら私達は闇の書の残った問題を解決するために大企業ビハイ
ンドと詳細不明の大犯罪集団と言われているライトヴァイス共同の
と言つよりこの二つはもともと刻が設立した一つの組織を編成
しなおしたものだったらしい（クロノ達がそれをオフロレで説明さ
れたとき泡を吹きそうになつてた） 本拠地であるリベル「アー
クと言つ所に行くことになつたらしい

『簡単に言つと時の庭園を大規模にしたものかな？』つてのが刻君
の説明で、

『なんていうかすごい所としか言いようがあらへんなあ・・・と
にかくきつとおどろくわ！』というのが、そこに行ったことがあ
るっていつはやてちゃんの言葉

だからきつと闇の中にひっそりと浮かび上がる・・・お母さ
んのお城をもつと大きくした所なんだろうなって思つて・・・
・・・

．．．．．いた時が私にもあった

　　だけど刻が私の知らない呪文（そもそも呪文に使っている言葉自体私の知らない物の可能性が高いけど）を唱え終わった瞬間私達は光に包まれて、その一瞬後に私達の目に飛び込んできたのは

．．．．．明るい日差しの中にたたずむ．．．．．都会？

「ねえ刻．．．．．ここ此処？」

「いや．．．だからリベル＝アークだって」

あ、そう言うことじゃなくってね。なんでこここんなに明るいのか？
此処次元空間内だよな？ 何で暗くないの？

「何でって……人間、植物と一緒に一定以上日の光浴びないと元気がなくなっちゃうだろうが。ずっと暗闇にいたら鬱になっちゃうだろう？」

「……あれ？ そう言う問題だけ？
何処か何かが違うと思うんだけど……」

「ま、とにかくさっさと行くぞ。船を止める場所は用意させたから……うん、あそこだな。」

そして刻の指示に従ってアースは
第8発着場と書かれている所に入って行った

そして寄港した私達の目に飛び込んでくるのは様々な形態の船

「なあ……………あれはなんだ？」

刻の肩をつかみもう片方の手で一際大きい船を指さし質問するクロノ

「ああ、新型の空母『オベイロン』ね。先週ロールアウトしたばかりだ。

従来のものより積載可能量が一気に1.7倍に上がってる。」

……………その従来の空母ってあれだよな？

そつちもすでにアースラよりも大きい気がするんだけど？

「何をするつもりだ？」

「次元探索のための大航海にきまつてるだろ？ まだまだ未探索どころか未発見の次元世界は多い。数年単位の探索をするためにはこれでも足りないくらいだよ。」

「管理局が魔法文化未発達世界の干渉を禁止しているのは知っているよな？」

「そしてそう言ってる本人達がやれロストログヤだやれ次元犯罪者がにげこんだとか言った理由で『不用意な影響』つてのを与えたのが少なくないつても知ってるよ？ しかも戦争に発展したりしても『これ以上介入する訳にはいかない』とか言っ放り出してる

しよ。」

詰め寄るクロノに黒い笑顔で威圧感を放ちながら刻が答える
クロノが苦虫をかみつぶしたような顔をした

「ぐ・・・確かにそう言うので無用な混乱が起こったことがあると
言うのは聞いたことがあるが・・・」「あ、別にそんなに攻め
てる訳じゃないけどね。」・・・ん？

「一応こつちにも文明保護法第四条第五節、『魔法文化の有無を問
わず、次元間移動手段を持たない次元世界に対し現地世界出身者を
除くあらゆる他次元世界人は原則としてむやみな技術供与及び文化
干渉を禁ずる』ってのを作ってるけど、なんだかんだで例外措置多
いんだよね」

刻は私達の前にモニターを開き、様々な『過去にとつた例外措置』
を見せながら進む

それを見ただけで、此処は本当に管理局とはだいぶ違うと言うこと
がマジマジと分かってしまった

特に魔法文化有り無しにかかわらず対等な措置を行っている所が・
・・

「日本を見たら分かると思うけど、此処は侵略されたり侵略したり友好関係築いたりして他文化を積極的に吸収してアレンジしまくったり他文化同士や既存の自国の文化と融合させまくったりして新しいものを作って来たんだよ・・・これも一つの立派な『文化』」

今度は日本の歴史の転換期と言える点が要所要所強調されて年表状にして映し出される

「ってわけで、まあ、こういった内容で『べつに介入しても良いけど、その場合はそれによっておこる出来事から逃げずに責任とれよ。放置なんかしたら厳罰だからな。それが出来ないならするな。』に変えようって動きが強いね」

最後にそれについて詳しい内容がモニターに箇条書きになって映し出された

管理局だったら逮捕されてもおかしくないのもいくつかあるけど・・・
・それよりも管理局より未開拓の次元世界に対してやることちゃんとやっってる気がする・・・

クロノたちが微妙な顔をしてるから間違いないんだろうな

「もめごととか起こらないのか？」

「一応対応する部署は作ってるから、起こってもある程度はどうにかできるようにはしてるし、それにみんな最低限は自重するようにしてる。過度の技術提供は十中八九それまでの生活のバランスを崩してしまうのは分かりきってるからね。無用な混乱を引き起こしたい奴なんて少なくともこっちにはいないよ。さっき言ったみたいに介入する以上責任を持って行動するよう徹底させてるしね。」

「むづ・・・・・・・・・・」

刻は難しい顔をするクロノに微笑みかけた

「『その世界の人々の暮らしを考え、歩調を合わせ、乱させないように行動すべき』というのは、僕達が行うべき最低限のマナーだよ。」

（まあそれに、だからこそ俺らがそういったやつら楽にとりこめてるんだけどさ。そう言った所は感謝だよな。巻き込まれた奴らはかわいそうだけど・・・・・・・・・・）

「まあそれより、ようこそ実験都市『リベル＝アーク』へ！！！」

そして私達はゲートをくぐり、刻と別れ、案内に従って第一地区方面へ向かうリニアに乗り込み、行政庁でゲストIDと端末を発行してもらい、それぞれ観光したい場所ごとにグループに分かれて行った

S i d e
E N D

後始末？

くようこそ終わらなき探究の地、
楽園^{イデア}『リベル＝アーク』へく

中央図書館《知識の泉》

「ふう……もう驚きを通り越してただただあきれ返るしかない
わね……。」

リンディはゲスト発行されたIDを使い手渡された端末を操作し、モニターで電子化された書物を読みながらため息をつく

初め資料を読ませてもらおうと図書館に行くと、あらゆる資料がきちんと整頓されていることに驚き、しかもそのレベルBまでなら

それを観覧できるようになる資格を取ればだが 電子上でも読めると言われ、さらに驚愕した

・・・ちなみに書物、資料の類は（年齢制限とかいったものを除くと）A～DそしてS・SS・SSSの全7ランクに分けられている

そしてCランクまでは刻曰く『一応規制してるけど正直流してもあんまり痛くもかゆくもないレベル』である

なのに（特に技術面において）管理局にとって目を見張る技術もちらほら

そういつたことを知らない状態でさえ彼女達は此処までやるせなさがこみあげてくるのだった

この情報を知った時、彼女らがどのような状態になるかは想像するまでもなさそうだった

.....

「.....『ベルカの叡智 中〜晩期編』.....」

ユーノはおもむろに一冊の本を取り、それを眺め、苦笑いを浮かべながらつぶやく

「.....『AREA-T16』.....『ゆりか』.....
そして『夜天の書』.....はは、納得だよ。初めから立ってる位
置が全然違う。」

スクライアとしての感性なのかモニターでも直接本を手にとつて読んだ方がしっくりくるユーノは蔵書検索端末（最近の図書館にならばば確実にあるあれ）を使い今回の事件に関する事柄 つま
り闇の書と夜天書関連について調べていた

そして彼は一時間も経たないうちに自分が無限書庫で探査術式をフルに使い、必死になって調べた情報のほとんどが簡単に手に入ってしまった。むしろ初めて知った物も少なくない。

その過程で知った直接は関係しない知識も含めればなおさらである必要と思われる情報を見つけ出せるまで数日かかったユーノをクロノ達は『無限書庫はデータベース化されていないのだから時間がかかるのは当たり前、むしろあの量からこれだけの情報をこんなに早く見つけられたユーノはすごいよ!!』と褒め称えたがこの状況を見るととても空しいものに思えてしまう

自分で言うのもなんだが検索には自信があったし、実際そのお陰で普通よりもずっと早く資料をそろえられたのだろうが、そもそもきちんと資料を管理し、データベース化していれば一貫性が無く乱雑に突っ込まれた中から一つ一つ該当しそうな資料をいちいち探し回り、全てチェックするといったことをする必要は全くない。

該当する資料をリストアップし、本当に必要なものを選別する。これだけですむのだ。

『僕はなのはと肩を並べて戦うことは出来ないけど………これぐらいなら……』

無限書庫で働く事を決意したユーノだった

………第十六研究室

ウーン

自動扉が開き車椅子に乗ったはやてがシャマルに押されて出て来た。
シグナムも一緒だ

「「「あ、はやてちゃん！」「」」
「大丈夫？」「」

「みんな心配症やな。私のリンカ コアのデータを取るだけや
から何の問題もあらへんかったよ？ 痛みも全くあらへんかったし。

「
もうすぐ測定が一通り終わると聞いてはやてを待っていたのはと
フェイトとアリシア、そしてアリサとすずかにはやてが笑って答える

「それで、はやてはまた次の検査とかするの？」
「うん。必要なデータは全部取ったから遊んでおいでって刻兄
が。」

アリサの質問にはやてが答える

「刻君は一緒じゃないの？」
「夜天の書とリインフォースIIアインのプログラムを書き換えるの
にまだしばらくかかるから待たせてるみんなと行って来なさいって
言ってくれたんです。」

「本当は我々もそばにいたのだがリインフォースにこちらに
来るように言われてな。ザフィーラとヴェータを残して来た。」

首をかしげるすずかにシャマルとシグナムがほほ笑みながら答えた

「そう言っわけやから今から私達もフリーなんや。どっかいこう
？」

「うん！！ えっと・・・何処行こうか？」
「うんと・・・第七地区に遊園地とかがあるみたいだね・・・
そこに行こうか？」

「第一地区の図書館も気になるな。」

部屋の中に刻が目にもとまらぬ早さでキーボードを打ち込む音が響く

部屋の中には培養液のようなもので満たされた円筒形の容器の中に手術着を着て漬かっているアインとそのそばで心配そうな表情で見つめているヴィータとザフィーラ、そして少し離れた所でコンソールを叩く刻とそれを補助するソニアがいた

刻が使っているものは地球で現在使われているものほとんど変わらないクラシックなものだが、もちろん此処の入力装置の開発が遅れている訳ではない。

すでに此処では管理局で徐々に普及が始まった空間にタッチパネル状の仮想キーボードを展開する技術どころか、そもそも『手動入力』すら必要無い脳波から判断し入力する『思考入力装置』すらすでに携帯できるほど小型のものが開発されている。

しかもこちらは慣れれば物理的な要因で入力スピードは速いのだが誤認識率は限りなく少なくなっているとはいえ0%ではないという理由と、このキーボードを打ちこむ感触と音が好きと言った個人的なものもあり 最も刻は、明確な意思を持っておりしかも少なくとも時間共に過ごしたソニアデバイスを介することで同じことが実質誤認識率0%で、しかもより高速に出来るのでこっちが本音である 基

本これといった理由が無い限りこの従来型のキーボードを愛用していた。

《閑話休題》

そしてそんな中ザフィーラが口を開き尋ねる

「どんな感じだ？」

「安心しろ。問題個所の削除はすでに終わったし、ソニアに見落としが無いかスキャンさせたけど異常は検出されなかった。後は今やってるリプログラミングが終われば取りあえずアインとヴォルケンスの問題は終了だ。」

刻の答えを聞き、二人はほっと息をつく

「と言うことはアインはもう大丈夫なんだな？」

「ああ。」

こんどはそれを聞いてはにかんだような表情を浮かべたアインを見ながら質問するヴィータに刻が（相変わらずタイピングを続行したまま）頷く

「ただ融合機能がおかしくなっただからもうはやてちゃんとユニゾンすることは出来ないわね。後これはあなたたちヴォルケンリッターにも言えることだけど、夜天の書と切り離したことはやてちゃんからの魔力供給ラインも無くなってしまったから魔力の過剰放出やダメージが文字道理『消滅』につながるから気をつけてね。分かってると思うけどあなたは魔法生物だから普通よりもずつと魔力に敏感だから。」

「まあ、それを入れてもトップクラスの魔導師にはなれるだろうな。疑似リンク コアの出力も2300万・・・ほぼSSSランクで安定してきたし、夜天の書からミッドとベルカ式の魔法式もロードして反映させることが出来た。そしてなによりアインのベースはユニゾンデバイスだからデバイスは必要ないはずだ。まあ、慣れつつものがあると思うから一応書物型のデバイスを作っておくけど、どっちにしる様々な術式を習得している結果攻守・遠近全てをこなす万能タイプの魔導師の誕生だな。」

ソニアが注意事項を提示し、刻がそれを付け加える
三人はそれを聞いてしばし呆けていたが、すぐに我に返りお礼を言う。

最も刻は『まだ終わった訳じゃないからいらない』とそれをかわしていたが

．．．．．とあるお菓子コーナー

「「キノコプリン」に「わたがしの木のわたがし」、「クッキーアルパカのクッキー」に「スイーツサンゴ」に「天然チョコの噴水」．．．．．さすが魔法の世界のお菓子ね．．．．．なんて言うかメルフェン．．．．．」

「いえ．．．．．私も始めて見るんですけど．．．．．それにしても、とってもおいしいですね。」

「これによると．．．．．何処かの次元世界から連れて来たものを亜空間に作ったその世界に似せた簡易世界で自生させることで繁殖させてみたいね．．．．．この食材一つを作るだけで恐ろしいぐらいの技術と手間が使われてるわよ．．．．．」

並んでいるお菓子を見たり試供品を食べたりしながら呟く桃子にエイミーが答える。

その隣でプレシアが端末を操作しその食材に関する情報を呼び出し閲覧しながら答えた。

さすがに詳しい内容はランクが上らしく見ることが出来なかったが、それでもリストアップされた使われている技術の概要を見ただけで卒倒しそうになる。

空間操作技術、簡易とは言え生物の住める世界にすることが出来るフォーミング技術、半永久的な基点同士の座標結合技術（どこでも

ドアもどきを作るのに使われている）など、どれをとっても管理局が構想段階にさえ入っていない、又は『実現は絶対に不可能』と判断した物であった。

そういつたことを知らない桃子は楽しそうにシヨッピングを続けていたが、その後ろでプレシアはそれを覗きこんだエイミーと共に冷や汗を流していた

「今晚は刻君がご馳走してくれるみたいだからあんまり食べる訳にはいかないけど、明日はみんなで食道楽をするのも良いわね」

「ええ（はい）、それもよさそうね（ですね）……………」

ちなみにプレシアとエイミーが此処にいる理由だが、二人は研究所見学の申し込みをした後、開始時間になるまで桃子とシヨッピングをすることで過ごすことにしたからである。

（図書館に行かなかった理由は、かなりの量の資料が端末で閲覧できるということと、一度始めてしまうと『やめられない止まらない』状態になってしまう気がしたからである）

……………

一方忍はノエルと共に『魔法を使わない機械製品』関連が集まっている場所（しかも路地裏みたいな場所に所狭しと集まっているという見るからにコアな場所）を発見し、色々とパーツを物色していた

「……あ、これはよさそうね……これは……ノエルに使えるかしら……いえ、是非使いましょう!!」

目を輝かせながら嬉嬉として、ややマツドなオーラを放ちながら物品を物色する忍をノエルは苦笑いしながら見守る。

じつは彼女は『ロストテクノロジー』で作られた自動人形であり、壊れていたところを忍に修理してもらいそのまま彼女に仕えることになったという経緯を持つ。

ノエルはそんな忍に感謝してはいるのだが、時々こう思うことがある

「これは!? 超小型核融合炉!? これは是非ノエルに」
「あ……あの……忍お嬢様、できればほどほどにして下さい……」

『彼女はいつたい私を何処に導こうとしているのかな?』
と

・ ・ ・ 第八地区 ・ ・ 訓練施設 『DOA』

「あれ? クロノ君?」
「ん? ああ、君達か。」

訓練施設を見に来たなのは達はクロノを見つける

「どうしたの？」

「いや、此処の武装隊の訓練を見てるんだ。どんな感じなのかなって。……こつちとはだいぶ違うよ……質も、使っている設備も、そして何より、内容が。 厳しささえこつちが上だ。」

とある部隊の方向を向きクロノが言う。

「こつちは質量兵器を使うことも許可してるみたいだな。 質量兵器は非殺傷が使えないから管理局は使用を禁止してる……そうでなくても質量兵器は魔法に比べると劣っているから非魔導師以外は進んで使おうなんて考える奴はいなかった。」

ある場所からは的に向かって銃を連射する者達がいる。

ある場所では各々の獲物を持って戦闘訓練を行っている者たちがいる。

ある場所では体術を駆使し訓練をする者たちがいる。
ある場所では獲物の有無・種類を問わないバトルロイヤルが繰り広げられている

あちこちから「逃げる奴はペトコンだー！！ 逃げないやつは訓練されたベトコンだぁ！！」「逃げる！ 逃げる！！」という叫ぶ声や「全員突撃！ 確保 ！！」と言った掛け声が聞こえてくる。

「なのにあいつ等の訓練度を見るとその観念がかすんでしまう。あいつ等を見ていると魔法がとても非力なものに思えてしまう。」

クロノが呟く……………が

「何いっとんのや、クロノ君？」

はやてがそれを否定する

「え？」

「此処の人達は質量兵器つてもんを軽視はしておれへんけど、魔

法の方はもつと軽視てへんよ？ 管理局の隊員達のこととは知らへんからよう分からんのんやけど、たんに訓練度の差やと思う。」

「……………」

「それに第一、質量兵器と言うほどのもんをつこうとするのはおらんんで？」

「……………え！？ じゃあの銃はなんだ！？」

ククロノがはやての方を驚いた表情で見る

「あそこで射撃訓練してる人達のことか？ 実弾があんなに大きい訳あらへんやろ？ それにあっちの方、あれが質量兵器やったら、明らかに装弾数と発射された数が違うやんか。」

「……………！？」

そのの意味することの先にあるものに気付きククロノとフェイト・アリシアは茫然とする

「あの人達が使ってるのは特化型デバイスなんです。」

驚いているククロノとフェイト・アリシア、そしていまいち状況が分かっているのは達にシヤマルが説明する

「『特化型デバイス』と言うのはその名の通りある一定範囲のなにか。あの人達の場合は射撃に特化させたものでそれ以外の魔法は使えません。ですがその分発動の早さや効率是一般の物を使うよりもずつと高いんです。」

「でも、それだとやっぱり、いざという時困るんじゃないんですか？ 色々なことが出来た方がいいと思うんですけど。」

「確かにそうだが、なのは、お前は戦闘においてそう言うほど多彩な魔法を使ったか？ ヴィータから聞く限り魔力弾と砲撃魔法しか使っていない筈だが・・・ああ、防御魔法と飛行魔法を除いたらだがな。」

シグナムに訊ねられ、少し考えて首を振るなのは。

「そう言うことだ。実際の戦闘で多彩な魔法を使用するものは少ない。様々な魔法をただ習得するより、なにかに特化してその使い方を極めた方が有効だからな。もちろん一概にそうだとは言えないが・・・ともかくそうだった点である。デバイスは戦闘においてとてつもないアドバンテージを持っている。」

「それにクロノ君達は気がついたみたいだけど、あれにはもう一つ大きな特徴があるの。クロノ君達が気付いたみたいにあの人達の魔力はとても小さいわ。徹底的に効率化されたデバイスで、クロノ君達が魔力弾だと分からないぐらい徹底的に少ない魔力で作ったあの練習用の魔力弾でも、あんなにたくさん放つてたらずぐにばてしまう。けどあの人達はそう言った疲れを全く見せていない。」

シャマルは訓練している人達を指さしながら説明する

「これが特化型の二つ目の大きな特徴……と言うより、刻君によるともところちのために作ったらしいけど。とにかくあれは、魔導師の魔力をほとんど必要としないどころか、『魔力の有無を問わず万人に使えるデバイス』なんです。これがあのデバイスの最大の特徴。

カードリッジを質量兵器で言うマガジンと同じ扱いにしたり、大容量の物をバッテリーとして使うことで必要な魔力を賄っているらしいわ。

Bまでの出力をすでに実現したみたいよ。」

クロノはさつきまでとは違った意味で愕然とする。

先程までは『魔法は思ったよりも頼りないものだったのではないか？』と言うものだったが、今度のは『やはり魔法は強力なものである』という前提で『その魔法が魔導師であろうとなかろうと使える』と言うものだった

周りを見る限り『特化デバイス』とやらはあの『銃』^{レアスキル} だけだが、脅威は十分だ。

何せ管理局員のミッド式の魔法を使用する希少能力^{レアスキル}を持っていない魔導師が使う魔法の大半はあの『特化型デバイス』でほぼ再現できるのだ。フェイトのような遠距離攻撃の他に近接戦闘をする魔導師は本当にまれなのである！！

Bクラスまでしかできないみたいだし、なにより砲撃系統の魔法は出来ないみたいだから例えあのデバイスを持った者と戦うことになっても安心・・・なんてポジティブなことは考えられない。彼等の技術力があればすぐにより高出力のものが出来るだろうし、砲撃魔法も使える、又は砲撃魔法に特化したものが作られる可能性は少なくない・・・と言うか出来ない筈が無い！！

管理局に敵対する非魔導師の過激派がこれを手に入れ、殺傷設定でこられたら目も当てられない。それは彼等の持つ質量兵器が劇的に小型化・高性能化されたのと全く意味が変わらないのだ！！
『奴らは魔法の力に屈したぞ！！』と言う言葉の意味が喜びから焦りに 戦闘終了から戦闘激化に変わる。

そして何より！！ こちらと違い彼等は魔力の質によらず安定した威力の攻撃をカードリッジの魔力が尽きるまで際限なく放てるのだ！！ なにせ彼等のもつデバイスの放つ魔法には主の魔力資質は一切関係していないのだから！！

ベルカ式の方もそれは変わらないだろう

もしこれが世に出れば・・・・・・ごく一部の、それこそト

ツプレベルの実力の魔導師を除いた管理局の魔導師の優位性が無くなってしまうのも同然だ。

『バッテリー形式のカードリッジの幾つかは再利用が出来るから、弾薬代が浮くつてすぐ好評みたいやで。』 さらに一部は弾導操作・つまり魔力弾の誘導機能の搭載も実現できたせいで、今じゃ質量兵器の『銃』を使う人はまれみたいやな。』 『へ、すごいんだね。』 『まあそれでも刻を始め数人ほど硝煙の匂いが好きだと言った理由でいまだにそっちを使うやつもいるみたいだな。』
・
・と言つても、そう言つた奴等も実戦で使うことはまずないそうだが。』 などと話しているはやて・すずか達をよそにクロノはただただ此処、『リベル・アーク』の状況に愕然としていた

管理局内部ではビハインドからどうにかして技術力を吸い取るうとする動きがあるが、それは余りに滑稽で非現実的な話だった。

彼らが見ているのは此処の持つ技術力の一端でしかない。寧ろただのどうなつても良い餌。例え食い取られても被害はないに等しい。管理局はそれをむしり取れば自分達の配下におけると思っている。

愚かにもほどがある

此処の本当の技術力は管理局を遙かに超えているのだ。もはや管理局の技術では『ロストロギア』認定しかねない物さえある。

管理局がやっているのは『藪蛇』以外の何でもない、しかも潜んでいたのは蛇よりもずっとヤバい代物

………此処と敵対しようものなら、待っているのは
破滅だ!!!

孤児院『デュナミス』

「……………さん……………ねえ……………じ……………」
「ん？」

思考の渦に飲み込まれていたグレアムは誰かの声で引き戻される

「ねえおじさん達、どうしたの？」
「あ、ああ、何でも無いよ。ただちょっと物思いにふけていた
だけさ。」

ふと見下げるとそこには心配そうな顔をした子供がいた

「そう、なんだか悲しそうな顔をしてたけど。」
「ふふ、そうか。すまなかつたね。」

グレアムはその子の頭をなでる

「えへへ。ねえ、おじさん達も一緒に遊ぼうよ!」
「・・・・・・・・え?」

グレアムの袖をその子が引っ張る
それを見て他の子供たちもやってくる

「お姉さん達も遊ぼうよ!」
「え?」
「あ・・・・・・・・」

子供達はグレアム達を引っ張って行く
グレアム達はなその手を振り払うこともできず引っ張られて行く

・・・・・・・・

「元気な子達ね。」
「ああ。」

少し離れた場所にあるベンチに座っていた三提督はグレアムのやり取りを見て微笑む

此処に彼らが来たのには理由があった。

〈昨晚〉

「これは……本当のことなのか？」

グレアムは刻の見せた資料を見、恐る恐る顔を上げる

「残念ながら本当のことよ。私達の方から秘かに調査した結果、全部裏が取れたわ。」

「そんな……」

椅子にへたり込むグラム

「ユーノと話してたから……過去の闇の書の事件の調査所に虚偽がある可能性は思い付いていただけ……。」

「此処までひどかったのね……。」

リーゼ姉妹も落胆の表情を見せる。彼女達の目の前にあるのは独自に調査し直された管理局にあった『闇の書』事件の報告書。

その中には管理局員が持ち主の意見を無視し、突っ走った結果、闇の書の暴走が開始されたものも少なくなかった。

そして

「私達に観覧させなかったわけね……闇の書を改悪したのはそもそも管理局だった……なんて最悪だわ」

姉妹が不審がついていた閲覧できなかった闇の書の情報の中身……それは夜天の書の改良（改悪）の作業レポートだった

「なら……今までの犠牲は……クライドは……」

「ねえ、この人達は今どうなってるの？」

拳を握るグレラムを心配そうに見ながらアリアが聞く

「暴走に巻き込まれて死んだ奴ら以外は、二年前までは管理局の裏の一研究者として普通に働いたり、とある研究所の所長をしたりしていたよ。有能だったみたいだからね。」

刻の返答に唇をかみしめる

捕まるようなことも無く　そもそも指示していたのが管理局だったのだから当たり前だが　堂々とそんなことをしてたことに

だが少しして

「………していた？」

過去形だったことに気がつく

「全員殺したよ。」

無表情で言った刻に三人とも一瞬固まる

「そいつら正規の管理局員じゃ無かつたし、研究所も管理局自身が組織して隠してたから無駄に大々的になる心配はなかったからね。

実際それが発覚しても『一違法研究所が何らかの原因で自滅、残りの調査は中央が担当する』でかたづけられちゃったし。いきなりのことですれ指示してたやつらは泡食ってたみたいだけどね〜。』

「人を殺して・・・平気なの？」

淡々と語る刻にロツテはおずおずと尋ねる

「昔生き残る戦いを覚えるために戦場に放り込まれたことがあってね。その時人を殺す感覚はいやってほど体験した。やらなきゃ自分が死ぬだけだったからね。それに」

一拍置いて言う

「自分から殺すのも慣れたよ。・・・俺がこの三年で何百人殲滅したと思う？ さっきのやつらだけでも11人。俺は違法研究をすること自体はこちらは一向に構わなが人を実験動物扱いする奴らや、闇の書の時みたいに膨大な被害が起きて、それを償お

うともしないやつらは絶対に許さない。こんな条件で行動してるのにそれに該当する奴等が多すぎる。」

刻の周りどころか彼等を覆うように膨大な数のモニターが展開されるそれに写されるのはおそらく刻が殺してきた人たちのデータ

・・・その中に見たことがある人物を見つけた。

確か暗殺されたとかで取り上げられていた奴だ。確か暗殺される理由が見つからず、何処かの過激派による被害者として片づけられた。これによるとFプロジェクトを指示していたやつだ。

「あなた達はこのことを？」

「ああ。話を聞いたときは耳を疑い、資料を見たときは眼を疑ったが、事此処にいたってはもはや信じざるを得なくなったよ。君も知ってるいるだろうが、中央は闇の書のことを間違いない初めから知っていた『普通なら闇の書を修正するのは不可能である』と。だからこそ無駄なことをさせず、さっさとアルカンシエルを打つようにさせたのだろう。」

グレアムの質問にラルゴが答えた

~~~~~

此処にいる大多数は局の違法研究所から保護して来た子供達。

その資料も見せてもらったがあまりにひどかった。  
全てとは言わないが、それでも大多数でこの子供たちを文字道理『実験動物』として扱われて来た

彼らが助け出された時、すでに手遅れだった子供たちもたくさんいたらしい。

逃れようのない絶望の中全てを諦めたような、無気力な表情をした子供たちが映っている実験試料を見た。 彼等はそんな中から助かったほんの一握り。

そんなことを指示したのは管理局

此処を見に来た時、彼らは笑っていた

自分達が管理局員だといった時怯えられた。敵意をむき出しにされた。

だが私達を連れて来てくれたアスト君 本名はアステリスク「グロウリー」で刻君と同じ守護者らしい が私達を紹介し、大丈夫だと言った後、少しずつ近寄って来てくれた

私達に笑い顔を見せてくれるようになった  
心配してくれるようになった  
遊びをせがんで来てくれた

ふと横を見るとアリアとロツテが子供たちにもみくちやにされていた  
その子供たちの表情に影は見えない

「君達は幸せかい？」

なんとなくすぐそばにいた子供たちに尋ねた

「もちろん！！！！」

彼女達は満面の笑みで答えてくれた

無性に泣きたくなった



## 056 後始末？（後書き）

裏設定

情報ランク

SSS あまりにヤバすぎて刻と刻が認めたほんの一握りしか読めない。

そもそも『リベル・アーク』には置いていない『天空の雫』に保管されている

SS 刻が許可した人だけ

S 研究の権威者レベルになる必要がある。『此処までなら努力すればある程度の人が許可をもらえる』

ここから先は刻が『ヤバいもの』又は『世間に公開するのは早すぎる』と判断した資料。  
特にSS以上の資料は刻本人が許可しないと観覧は不可能である。  
（刻の作った評価方法は管理局とは違うので管理局がS判定しててもCクラスで詳細な資料が閲覧できることもある。）

A 上級研究者レベル

B 研究者レベル

C 大学生が研究に使ったりする  
管理局だとここら辺からすでに垂涎ものがある

D 事実上制限なし

あと半永久的な基点同士の座標結合技術で作った『どこでもドアもどき』ですが、任意の場所に自動にゲートを作るということはできません。あらかじめ行く場所にゲートを設置しておいて、そのゲート同士を座標結合させるという技術です。つまりトランスポートの上位種。

057 後始末？（前書き）

祝！！

お気に入り登録1,000名 突破

総合評価 3,000pt 突破

pV 1,680,000 突破！！

皆さんありがとうございました！！

057 後始末？

「ん？ 『特化型デバイス』？」

「ああ。 あれはこちら・・・つまり此処以外でも発売するのか？」

アースラー一行はとある大広間を借り、立食形式の夜食をとっていた

その中にはリインフォースⅡアインの姿もあつた

リインフォースⅡツヴァイがまだ完成していないこともあり、夜天の書の修正はまだ終了してはいないが、アインの方は修理無事終了し、問題点も見当たらなかつた。

アインの退院（？）を祝い、なのは達ははやて達とワイワイ騒いでいる。

そんな中クロノは喧騒から離れて刻の方へ行き昼に見た特化型デバイスについて尋ねたのだった

「いや、今のところそんな予定はないな。 ただの特化型・・・つまり非魔導師が使えないやつの方も発売するかどうか怪しいし。」

「そうなのか？」

「そんなことされて困るのはお前らだろ？ 無用な争いはしたくないし。」

クククと含み笑いしながら刻は答える

「それに技術を持っていることも言つつもりは無い。 こんなのが世に出たら管理局が何らかのいちゃもんつけて率先して握りつぶそうとするだろうし。 無駄な戦いはしたくないしな。」

それに、

「言っちゃなんだけど、ミッドを始め数多の魔法至上主義が蔓延した次元世界の殆どでは、此処で開発された理論に追い付くには越えられない壁があるからね………物理学って言うさ。 なんせ管理局がこいつの分野を質量兵器に繋がるっていう理由でとことん排除してるからな………プレシアさんなら理解出来たんじゃない？」

振り返らずにいつの間にか後ろに来ていたプレシアに声をかける

「ええ。 研究の一部しか見せてもらってないけど、此処では魔法と科学を積極的に融合させてたわ。 魔法技術と非魔法技術それぞれに特化した研究機関同士の技術を統合し、さらに高次元の物を作

っている。」

「そ。魔法技術と科学技術、それぞれの分野には長所と短所があるけど、二つを融合させれば問題は解決し、さらにいいものが出るからね。」

ついでに言えば、それぞれの専門機関もどれだけ互いの技術を使わずに済むか、より相手を脅かせるようなものを作れるかってライバル意識持って張り切ってるから元となる技術もより一層・・・な。あ、だからと言って互いに仲が悪い訳じゃないよ？ むしろ愚痴を言いあつぐらいには良好な関係築いてるし。

ま、こついうこともあって発表する気ないから。 『知らぬが仏』  
つてやつ?。」

楽しそうに話す刻の言葉にクロノ達は顔を曇らせる。

事実その通りでしかないからだ

管理局が此処がやっているような研究をするためには今まで最も声高らかに言っていたことの幾つかを撤回しなくてはならない。

だが魔法至上主義である管理局の議会は決してそれを行おうとしないだろう。

もし気付いた者が上申したとしてもその人が罰せられるだけ、それ以前に罰せられるのは目に見えているので例え気づいても誰も意見などしないだろう

そして彼は技術を発表する気は無い

つまり、外部から認めざるを得ない事実を突き付けられるという可能性は現状ない。

………管理局が此処の技術の壁を管理局は自ら作っている

そしてその壁を管理局自らが守護している

全く笑えない

しかも

「第一お前の言っていた『銃』型の『特化型デバイス』は今やっている研究の通過点でできたものにすぎないしねえ……」

この男は爆弾発言を次々と投下する  
だが

「第一本来の目的のものは……」  
「総師………むやみやたらに此処の機密を暴露しないでください」

そこで刻にストップがかかった

振り向くとそこには疲れ果てた顔をするレオン・ボーウエル氏

ご存じ刻にビハインドの社長とリベル・アークの取りまとめと言う重責を体よく押しつけ・・・いや丸投げ・・・モトイ全幅の信頼により見事抜擢された人

でもそれをそつなく（なんだかんだでよく刻を引きずり込んで）こなしてきたあたり結構有能だったりする

今の職務もまんざらではないらしい

管理体系も大分充実して来て最近仕事が少しずつスムーズになって来て喜んでいる

休日愛娘（リザ・2歳・愛妻と共にミッド在住）と会える時間が増えたから？

因みに彼は基本表で行動しているので、よく雑誌・新聞に取り上げられたりしている

ほら見て御覧、地球組以外がこっち見ながらひそひそ話しているよ



……で、そんな中

「ん？ 別にこのぐらいいいと思うけどな。先ず管理局が研究させないと思うし。どっち道あれ作るのに大した理論必要無かつたし。」

「それはあなたの観点から考えたらです。」

「そんなもんか」

「あなたの主導する研究は外では露見するだけでヤバすぎる衝撃を与えるものばかりなんです。」

少しは自覚して下さいよ……。」

と首をかしげる刻にレオン・ボーウェル額を抑えながら言ったところで刻の話は終了となった

その後二人は別々の場所で話に花を咲かせていた

(でもそんなにはれたらやばいことしてる？ 俺の研究？)

(わかりませんか？)

(やっぱ空を飛ぶのはみんなの憧れだろ「個人型飛行装置作成プロジェクト」？)

だったら実用性とか考えるとやっぱり最有力は魔法かな『魔法の資質が無い人でも魔法を使える装置を開発しちゃおう計画』、んでその延長線上で『魔法を使えるロボットを作ろう計画』か？

それともレアスキルの発動プロセスを解明してそれを後天的に習得できるようにしてみようか『レアスキルをただのスキルに墜とそう計画』？

ジュエルシードカードドリッジ化計画の途中で生まれた『魔力超凝縮結晶体の有用性の模索&実用化計画』？  
それとも……………)

(それ全てです!! そんな研究をしようとする人は此処以外にいません!!)

(え〜? そうか? 『そ〜ら〜を自由に飛びたくいな〜』とか『魔法を使うロボってかつこよくね?』とか『もつと力を!』とか『SKILLってなんか憧れるよな!?』ってのは誰でも一度は考えると思っけど?)

(それを真面目に実現させようとするのは此処だけです!!  
そんなことしたら今まで特権的にやっていた人たちが困るだろうが!!)

(そうか? 俺は俺の代わりに仕事してくれるんならばっち来いだけど?)

(…………そんな考えをしてるから平然と実行しちゃうんでしょうねえ…………  
しかも総師の直属の部下達も嬉々としてそれに参加してるし)

(類は友を呼ぶ。 それ以前に類を呼び寄せる!!)

(威張らないでください!!)

と云う管理局にとって聞き捨てならぬ過ぎる会話を念波で行いながら

おまけ

「ありがとね〜刻君。 こんなごちそうを用意してもらって  
「いえ、ついででしたから気にしないでください。」

「??？」

刻の返答に桃子は首をかしげるが刻はそのまま言葉を続ける

「それにそう言ってもらえると腕を振るった買いがあるというものです。」

「まるで全部刻が作ったみたいない方ね」

冗談と取ったらしくやれやれといった風にアリサが言う……が

「いや、全部調理したの俺だけど？」

「……うそでしょ？ ウエイター達が新しい料理を運んできてたじゃない。」

「……………」

刻が厨房に向かって歩いて行く

アリサ達が刻を追いかける

刻が厨房の扉の前だ立ち止まり中を指さす

アリサ達が中を除く

そこにはテーブルに座って食後のコーヒーをすする白衣を着た少女、メリエル。モアとその向かい側に調理服とコック帽をかぶった刻がいた

「ども・・・昨晚ぶりね。」

カップを持っていない方の手を軽く上げ挨拶するメリエル  
調理服を着た刻もとつと軽く手をふった

「これも魔法？」

「そう、魔法。やり方はめんどいから説明抜きね。」

すずかの質問に答える刻

アースラ側からの追及はもう無かった

## 057 後始末？（後書き）

（もういい加減文章に起こせなくて嫌になってくる）裏設定

・アースラや高町一家にごちそうしたのはメリエルの飯を作るついでだったりします。

・刻の料理が上達している理由。

『おいこまれると家事に逃避するタイプだから』

・ジュエルシードと同じ量の魔力を内包するカードリッジの開発は終わっています。それに耐えられるだけのデバイスはまだ開発されていません。

いくらなんでも負荷が大きすぎた見ていで。

なので現在はこれを改良した大容量魔力バッテリーなるものが開発されています。

さて今後なんですけど……正直どんな話書けばいいか迷ってます。

魔法とかで色々は無駄設定考えてるんですけどそれを生かしかれる自

信は無いけどなんか発表したいという欲望があります。

でも文章が起こせれない！！

でも今書かないと今後書く機会に恵まれそうに無い！！

まあそんなこんなで四苦八苦してるので投稿が遅くなっています。

後始末が終われば投稿スピードはもう少し早くなると思うんです。

058 後始末？

二日目

……とある実験場

「……………」  
「……………」

そこにはじつと見つめ合う二人の女の子

「えっと……………あなたがリインのますたーでしゅ……………」  
「……………」

一方が緊張のあまり噛んでしまった

リインは顔を真っ赤にして俯き周りの人物はフリーズする

そして

「かわいいー……………!!!」  
「あわわわわ……………」

リインを真正面から見つめていた人物、八神はやては思わずリインを抱きかかえ、頬ずりをしリインわ慌てた声を上げる



「なあ刻兄！！　この子お持ち帰りしてええ！？」

はやてはぐるりと首を回し、何処からともなくカメラやビデオカメラを取り出した研究員たちをどついている刻に尋ねる

「いや、リインフォース？（ツヴァイ）はお前のユニゾンデバイスだから……」

「あ、そうか〜。」

わたしの名前は八神はやてや。　はやてって呼んでな？」

「えっと……はやてちゃん……ですか？」

「そうそう！　よろしくな〜リイン〜。」

「はいです。」

そしてニコニコと笑いあう二人

「それにしても、アインとはずいぶん性格が違くなえか？」

ヴィータが手をはたきながらやってきた刻に尋ねる

「まあ、夜天の書のデータをベースにしてるから姿はアインの姉妹みたいになってるけど、同時にはやてのリンカ　コアのデータを加

えてるし、アーキテクチャーもアインはどこどころ違うからな。」  
それに、と刻は肩をすくめ

「夜天の書とのバイパスとかいった重要な部分を除いたら最低限のプログラムしかインプットしていない今のツヴァイは自我のはつきりした赤ん坊とあんま変わらないよ………さてと、じゃあツヴァイとユニゾンのテストをしてみるか。」

倒れ伏している研究員たちに「ほら、さっさと起きて計測の準備しろ」と手を叩きつつ実験場とガラスを隔てた側にある計測室に移動し、その後をヴォルケンス・エイミィ・なのは達が移動する

「んじやはやて、融合を行うに当たってだが、特にこれといったプロセスは必要ない。ただ融合機と一体化するにおいてある程度二人の息が合う必要がある。だから二人の間で合言葉とかを作っておいた方がいい。」

スピーカーを通してはやてにアドバイスをかける

『何でもええんか?』

「ああ、俺とソニアみたいに「ユニゾン・イン」でもいいし「フユージョン」でもいい。そもそも二人が一時的に『合え』ば良いんだから手拍子とかでも一向に構わないよ。」

『・・・じゃありイン』『ユニゾン・イン』でいくで。』  
『はいです。』

はやての言葉にリインが頷き

『せーの』  
『『ユニゾン・イン!』!』』

ぴかっと二人の体が光り、次の瞬間にはアインとの融合時に着ていたと同じバリアジャケットを纏ったはやてが現れた

「どっ?」

刻はそれを満足そうに見、研究員に訊ねる

「シグナルは規定値で安定しています。　バイタルも安定。異常は見られません。」

「よし。　どんな感じだはやて?

違和感はないか?」

『大丈夫や。むしろユニゾンする前よりすつごく調子があええで!』

「ま、そう言ったのもユニゾンデバイスの特徴の一つだからな。

今のはやてなら普通に歩いたり走ったりすることも出来るだろ?」

『え? あ、ホントや〜!』

いつの間にか自力で立っていたはやてはそのことに気づき、試験室を走り回る。

その後、はやてはなのは達と飛ぶ練習をしたりした後、待たせていたアリサとすずかと共に遊びに出て行った。

「そもそも魔法とは何なのか？」

『不思議な力』『奇跡の力』『神への道』『真理の断片』『魔の力』『魂さえ犠牲にする破滅の力』様々な解釈が存在し、正直なところまだこれは解明されていない。

さて、今回はそれを解明する足掛かりとなるであろうと注目される二つの『暴論』を紹介しよう

まず一つ目のだが、徹底的に『非科学的』に『魔法』を追求している少々酷な言い方になるが、これは魔法を究極的に『万能』かつ『妄想の産物』として扱っている。

おそらくこれを聞けば多数が憤るだろう

だが事実ほぼ全ての魔法発動プロセスに妄想・・・想像力は重要な位置を占めている。

ほとんど・・・つまり確かに例外もあるが、それらも何らかの形で結果を思い描く手段が為されていた。

事実、大多数の詠唱魔法は確かに詠唱すれば発動するが、その結果は個人個人で単なる威力どころか本来のものと効果さえ異なって発動した物も確認されている。

詳細な内容は後で詳しく書くつもりだが、現在知っている魔法の共通点を洗い出した結果

『魔法は事実上想像力と願いの産物であり、一定以上明確な想像物を強く願えばその通りに発動するのである。』

『しかし、人は意識無意識で様々な思考を展開しているため、曖昧なものに思考の指向性を持つのは一般的には不可能に近い。また何処かで本当に発動するのかと考えてしまう。(これは完全な指向性を簡単には持てないことの代表例でもあろう)』

『それを補助するために生まれたのが、魔法を疑似的に理論的・明確なものにし、《発動プロセス》なる詳細な部分を想像したものし付加し、さらに魔法を現実的なものに、身近なものにすることにより発動に必要な負荷を上げる『魔法形態』なのである。』

と言う結論にこの研究者は辿り着いた。

だがこの理論では不可解な現象も多数確認されている

そう、『暴走』という現象だ。

この現象のほとんどは魔導師の精神が不安定になった結果その魔導師の『力』が無意識に断裂的に展開されることによつて起こっているのだが、この理論だとその程度の物では『暴走』が説明しきれない。

最も魔法の実力がある者ほど『暴走』の被害も比例しているので、無意識的に『展開』されている可能性も無いことは無いのだが・・・。

さて、またこの理論では『理論』の正確さにも言及がなされている

『本当に『理論』は存在するのか』と

なぜならば理論は極論、『辻褃を合わせた言い訳』と同じなのだ。

極論学者は全てに使える『言い訳』を考えているのである。

真の学者ならそれを否定されれば悔しく思うが同時により『真実』  
と言つものに近づけると喜べるだろう

『この世は思い通りになるよう。』

君は思い道理になどならないと信じ、事実そうなっている。

やはりこの世は思い道理になるよう。』

『なんで鳥が飛べるかつて?・・・彼等は飛びたいと純粹に、  
心の底から、本気で思ったからさ』と言つた者がいた。

空気力学などで浮力云々と『言い訳』はなされたが、実は前者が真  
実なのかもしれない。

ご存じの通り『飛行魔法』が『存在』し、それを発動できる生物は  
人間以外にも居ることはすでに確認されており、それは『今知つて  
いる理論』では『説明できない』方法で飛んでいた。

本当に理論で説明できる法則は在るのだろうか。

実は集団で『は』で説明できる』と『強く信じ』、知ら  
ないうちに『世界』を巻き込む『魔法』を発動し、『本当にそうし  
てしまった』だけでは無いのだろうか?

『自然は簡単な方程式で表せられる』が、少々簡単に出来過ぎではないだろうか？

それはよく言う『難解』な『真理』の一部のはずなのに。

この点では、この理論は神への冒涇と断言していいかもしれない・・・  
・だがこの部分が後述で各考察でとても重要な位置を占めるのである

・・・少々ずれてしまったが、先に進めよう。

早い話『信じれば何だって叶えることが出来る』が魔法の本質と言っているのだが

『実行できない』

これはそんなに生易しいものではない。

そしてそれを容易くするために生まれたのが前述した様々な『魔法理論』である。

『魔法』を『心の底から信じれる』ようにするために『魔法の理論化』がなされたのである。

一方魔法においてなくてはならない物、『魔力』だが、実際問題これの説明は簡単だ。



『異能』の『力』を発動するに必要なものはさまざま言い方であらわされている

『氣』 『精神力』 『チャクラ』 『魔力』

これの本質は同じだ。『非現実的なエネルギー』である。『非現実的なエネルギー』つまりこれも魔法と同義で考えられる。

簡単な話だ。これは『エンジン』を動かすための『燃料』と同じなのだ。

さて、上記を読んだ諸君なら『魔力』関係なく『魔法』を放つことは可能なのではないかと思うだろう。

この理論によるとその答えは【『Yes』だが『Impossible』である。】である。

なぜなら諸君の心の根底に『対価』の概念が如何してもあるからである。

『対価』を必要としない『無限の恵み』を心の底から信じられる人は事実上いないからだ。

どんなに恵まれた者でも一度は思い通りにならなかったことがあるはずだ。

どんなに恵まれた人でも思ったただけですぐそれがかなったなんて人はいない筈だ。

どんなに恵まれた人でも『意思』を出さなければ『恵み』はもらえないという『対価』の『概念』があるはずだ

思ったらそれが叶っていたなどと言う『無限の恵み』を体験した人は一人もいない筈だ。

よって無意識に『異能』を任意的に発動するための『対価』として『不思議なエネルギー』を差し出すプロセスを作りあげているのである

『任意的な発動』の場合に無意識に『対価』を。

この部分で前述した『集団の共通の無意識の魔法で世界の法則の構築』の説明も可能である

此処でなぜ個人によって魔力の違いが出るか魔法の適正に違つかという疑問が浮かび上がる。

だが、その説明は意外と簡単だ。

上記の理論で説明できる

魔法資質を『個人差がある』と全員が無意識考え、【世界】に『法則』として『定着』しているからである、と。

まあ、もつともこの『暴論』はかなり不安定なもので、この筆者自身『神の存在、又は創り出した世界の否定による魔法』と『全能の力 神の力 魔法/全能の力 我々の使える魔法』のどちらを根本におくべきか判断できなかったようだ。

さて、二つ目の『暴論』だが、こちらの説明は前者より簡単だ

『魔法、つまり非科学的存在を、科学的に確かめる』と言う、前者とは正反対のものである

『科学』ではどうしても説明できない事象を発見することで、『魔法』と『科学』の境界線を模索し、魔法と言うものを研究するのである。

だが此処で注意しなくてはならない点がある。

それは『魔法』の代名詞『非科学』とは、『科学』ではどうやっても説明できないものであるという点だ。

当たり前のことだといつかもしれないが、諸君は以外と理解していないだろう。

『地球』の話になるが此処は魔法文化0とされる次元世界である。だが現在のこの世界の技術はスイッチ一つで明かりをつけ、火をともし、水を出し、音楽を聞き、テレビで鮮明な映像を見ることがなどを可能にしている。

さて、この事実を知らない者がこれを見た時、果たして何が起きているか理解できるだろうか？

私は彼の導きだす結論は『これらは魔導具である』というものだと思う。

つまり何が言いたいのかと言うと、極論『今現在魔法だと信じているものは、本当に魔法なのか』と言う可能性があるということなのである

この『暴論』の本質は「カオス理論などさえ含めた『科学的要素』  
Ⅱ『あり得るもの』を徹底的に排除することで『決してあり得ない物』非科学的要素』である『魔法、ひいては神』を科学的に観測する」というものである」

「ユーノ、そっちは何か見つかったか？」

ユーノは呼んでいた本から目を話し声をかけて来たクロノの方を見る

「『魔法学』……無茶苦茶言ってるよ……そっちは？」

「こんなのを見つけた、刻の書いた論文だと」

ユーノはクロノに渡された資料に目を通す

「『魔法と科学は相容れない』これは例え自覚せずとも誰もが何処かで少なからず思っていることであろう。はつきり言おう。この考えは馬鹿らしい

『進み過ぎた科学技術は魔法の様を醸し出し、また進み過ぎた魔法技術も科学の様を醸し出す』

これはミッドを見れば明らかであろう

そこにある技術は全て『魔法』を元に作られているにもかかわらず、科学の様を醸し出している。

『魔法』自体においてもそうだ。

例外は存在するが我々は『理論化』することで魔法を使用している。

特にミッドとベルカ式はそれが顕著だ

基本全ての魔法の発動に同型の魔法陣を使用する点

ミッド式・ベルカ式の魔法の構成の根幹はそれぞれ共通している部分があるという点

デバイスを使用すればより高度・大規模な魔法を放てる点

まるで科学の法則のようではないか

さらに『デバイス』に至ってはもっと顕著だ。

あれはもうほとんど『機械仕掛け』の杖である

……まあ、ミッド・ベルカ式の魔法は、『アルハザード』において高度な科学技術を発展させていく過程で偶然発見された『魔法』をそれぞれの形態に特化させたという背景があるからこそ此処まで科学技術じみているのだが、今回は割愛する。

ともかく、此処で重要なのは『魔法と科学は必ずしも相反するものではない』ということである

パン

「見なかったことにしていい？」

さわやかな笑顔でクロノに訊ねる

「同感だが……駄目だろうな」

「……………アルハガードについての資料ってみた？」

額を揉みつつ質問する

「ああ。技術関連は機密レベルが高くて詳しい内容は分からなかったが。どうやらアルハガードは『ディストピア』だったらしい。」

「えっと……………徹底的な管理・統制により自由が奪われた社会だっけ？」

「ああ。そしてその体制に反発した者達との戦争になり、結果アルハガードは国ごと虚数空間に落とすことで事実上滅ぼされたらしい。」

ユーノは一度ため息をつき、恨めしそうな目でクロノを見る

「……………というかさ、考古学者として何時か解明したいと思っていた謎をあっさりとはらしてくれたね。」

「全部此処で調べたものだけだな。因みにさっきの情報のレベルDだったよ。」

「……………まあ、確かに情報としたら『歴史』でかたづけられるレベルだけだね。」

「なんだかすごく微妙な気分。」

「まあ……………御愁傷様」

・・・訓練施設『ミラージュ・アリーナ』

此処は訓練施設の一つとして現在試運転段階にある疑似体験型訓練施設、通称『ミラージュ・アリーナ』

施設自体は既存の疑似体験型訓練施設である地下に造られたドーム状の施設を改装しただけなのだが、こちらは今までにあつた環境の再現（廃墟・平原・遺跡内と言つたオブジェクトから重力・気圧・天気と言つた物まで疑似的に再現する）に加え、敵<sup>エネミー</sup>までもを正確に再現することが出来るようになっていたのだ。

今までも敵<sup>エネミー</sup>としてロボットのなものやあまり複雑な処理を必要としない生物は再現されていたが、武人のような複雑な動きをするものは今まで再現できていなかった。

だが今回、技術の進歩と施設の大幅な改良により大型・小型を問わず様々な形態のモンスターから無手・剣・銃使い・魔導師まで様々なタイプの人型までもを緻密に、しかも複数同時に再現できるようにした。

さらにこれらは、それぞれのタイプでも数種類の基本行動パターン、



そしてそこから派生する行動パターンを何十・何百も作りこまれている。

それは開発陣が『そう簡単には倒させはしない』と生き込んで作った、プログラムたちだった。

そう、確かにこれなら普通なら簡単にはやられないだろう

「ハッ、セイッ、ハアア!!」

「閃!.....徹!!」

「イイアア! セイヤア!」

だがそんな普通に該当しないのが『戦えば勝つ』と言われる御神の  
剣士たち

士郎・恭也・美由希の三人はは刻の誘いで、テスターとして此処に  
来ていたのだが、

彼等は100人と言う人数に対し善戦していた

彼らが行っているのは対集団型戦闘訓練なので確かに一体一体の能



機器をいじる部下たちが次々に報告を上げる

「ようし、ラボに戻ったら早速開発だ、彼等なら『BOSS』型を任せるには十分だ。きつちりと再現し、それ以上の物を作るぞ!!」

「「「「Yes, sir!!!!」」」」

意気込み、眼に炎を灯す研究員たち

そして

「訓練のメニューを増やさなくてはならないな。」

刻に「面白いものが見れるかもよ?」と言われやって来た訓練を担当する教官たちの元締め

彼女の眼に鈍い光が宿っていた

頑張れ「リベル」アーク」の訓練生。

君達の（多少遠い）未来は（たぶん）明るいぞ。

そんなこんなでアースラー一行や地球組は此処で遊んだり学んだりし（一部は伝説紛いの物を作り）

三日目の夜、刻によつて偽の証拠品一式と口裏合わせのための台本を渡され此処を後にした

059 会議(前書き)

ちよつと短いかな？

「グレーム提督、コレについて詳しい説明を願おう!」

会議場は荒れに荒れていた

闇の書を破壊するために部隊の編成などを行っていた矢先飛び込んできたのはグレームが独断で闇の書の処理をしたという情報

しかも不可能と言われていた修正を独自に成し遂げたと聞くのだからさあ大変

「なぜ我々がより先に『闇の書』の在りかを割り出せたのだ!」

「いや、それ所ではない!

この報告書によると修復を独自に行い、しかも成功しているそうではないか。

いったいどうやったのだね!」

口々に声を上げる重役たち

だがグレームはそれに動じず、スクリーンに（ビハインドによって

改竄・偽造された）数々のデータを写し出し、説明を行う

「この様に、独自に調査を行い私の二人の使い魔が探索を行った結果、『闇の書』の在りか及び現在の主を第二段階に入る前に突き止め、接触することに成功しました。」

そしてその後、私は主と騎士たちに『闇の書』及びその改悪前の前身『夜天の書』について説明し、事件解決の協力を仰ぎ、そしてそれに成功しました。」

「ではなぜそれをすぐに報告しなかったのだ！！」

とある議員が激怒した声を上げ、それに呼応するように周りからも叱責が飛ぶ

「それは私の立てた計画は確実とは到底言えるものではなく、その上この計画を実行するための条件に、『闇の書』を規定値の項まで蒐集させることで起動される』ことは必要不可欠だったからです。」

その言葉に周りのざわめきが大きくなった

だがそんな中でも堂々としたままグラムは説明を続ける

「ご存じの通り起動には膨大な魔力が必要になります。」

ですが魔導師から極秘に協力を仰ぎ蒐集することは難しく、無理やり行うことは法律に触れ、闇の書の所在がばれる可能性も高い。

そして何より『闇の書の主』の強い反対の結果、蒐集しても罪にならない管理外世界の魔法生物に焦点を当てました。

あなた方数名が知っているであろう『管理外世界魔法生物襲撃事件』

あれは我々が行ったことです。」

ブーイングが飛ぶ、だがそれでも説明を続ける

「そして約一か月前、蒐集から帰還していた騎士がとある現地魔導師に発見され、現在の生活が壊される恐怖に駆られた結果その魔導師を撃沈、此処が今回の『闇の書事件』の幕開けです。」

そして今度はアースラ組と交互に説明を行う。  
勿論偽データを用いて

「そして件の日、準備の整った私はアースラの乗組員とそこに来られていた三提督方に計画の全てを話し、協力を仰ぎ、その了承を得ました。」

「三提督殿！ それは本当なのですか!?!」

叫ぶ議員、それに三提督はそれぞれ頷き

「ああ、わたらの目的は闇の書の破壊だったが、それは主も殺すことであり、しかも問題を先送りにする以外の何物でもなかった。闇の書・・・いや、夜天の書の修復、そして事件解決の可能性の魅力は語るまでもない。」



「例え失敗しそうになっただとしても、それごとアルカンシエルで消し去れば本来の目的も達成できましたしね。それに彼が発動の場を選んだのは万が一を考えて無人の管理外世界の辺境、例え暴走しても一切被害が無い場所でした。」

それになにより、彼がいなくても結局どの様な理由であろうとも闇の書は起動することは確実であり、しかもその場合、場所は地球であった可能性が高い。彼にチャンスを上げるのはむしろ当たり前のことでしょう。」

「これらの理由からワシ等は彼の計画に参加することを決心した。」

すでに予想していた最悪の事態は彼によって防がれ、しかも遂に『闇の書事件』を解決できる可能性がある。

更にもしこれが失敗してもおこる被害は過去最低の『主ただ一人の死亡』、これは我々が目的としていた闇の書の破壊の最善の結末と全く同じ。 反対する理由などなかったよ。」

その言葉に議員達は全員閉口してしまふ

合理性と道德面、どちらを取っても二提督の方に分があり

「さて、最後に現在の『夜天の書』の状態ですが……」

グラムとアースラ組は、はやての頑張りで闇の書の『バグっていた』プログラムを切り離すことに成功し、それをアルカンシエルで

消し去ったと説明。

そして、夜天の書を調べた本局の技術陣が前に出て測定の結果を述べる

「さすがは古代ベルカの秘室の一つと言うだけにはあり、強固なプロテクトがなされており現在の我々の技術ではプログラムへのアクセスは不可能でした。ですが様々な角度からの測定の結果、闇の・・あ、いえ、『夜天の書』は蒐集が完了しているにもかかわらず安定した状態であり、修正は確実に行われたという結論に至りました。経過観測は念のためしばらく行う必要はありそうですが、まあ今後暴走する可能性は限りなく少ないでしょう。」

もう会議の行く末は決定したようなものだった。

「謹慎処分は間違いないぞ!!」

「そつだ!! どんな結果であれ独断行動は許せられん!!」

その後、議員達ははやてを罪人として管理局で無料奉仕をさせることを企てたが、グレアムによってそれは全て失敗に終わった。

『ロストロギアの無断所持』といった法の観点から更には『闇の書』での被害者達は深い悲しみにとらわれている。その償いをさせる』  
と言う感情論でさえも、『管理外世界のそれまで魔法を知る機会が無かった少女が知る手段さえ無かった管理局の法律を守るはずが無い。』、『彼女は命を賭けて夜天の書の修復を行ったのだ、これ以上の奉仕をさせる意味があるか？』と正論で全て叩き潰されてしまい

そして自分達の計画の全てを潰され、苦渋を味わった議員達は最後にせめてグレアムをと攻め立てたが

「そんな手間はかけませんよ」

グレアムはそう微笑み言う

会議が始まったから初めて出したその表情に言葉を詰まらせ

そんな中

「私の悲願、『闇の書事件』は解決することが出来ました。もう心残りはありません。」

グレアムは再び真剣な顔をし、

「今回の責任を取り、私、ギル・グレアムは辞職させていただきま  
す。」

そう言い放った。

その場にいたメンバーは（アースラー行と三提督を除いて）ただただ茫然として会議室から退場していくグレアムを見送るのだった

060(前書き)

— 応これでA' S編は終了です

「なかなか、ままならないものね……………」

ふう、とカリムはため息をつく

闇の書の確保の成功、更にはそれが夜天の書として修復が完了し、おまけにそれを使いこなす子供でありながらすでに膨大な魔力を持つ主がいると聞き、管理局に進言し、是非夜天の書についてはこちらで一任させるようにしたいと思っていたのだが

何処から嗅ぎつけたのかビハインドの報道部門が『闇の書問題遂に解決！？ その全貌に迫る！！』という特集をいつの間にか組んでおり、こちらが行動を起こす前にそれが大々的に放映されてしまっている状況。

そしてその中でのはやての満面の笑顔でのセリフ

『これで安心してみんなで暮らせる』

無理やり回収しようものなら、それは彼女の生活を破壊すると変わらない

それによっておこる反発は避けられない

ならば彼女ごと自分達のひざ元で暮させば良いのではないか？と思

つたが

『早く歩けるようになって、地球にいる友達たちと一緒に遊びたい』  
『地球にいるみんなと一緒に学校に行きたい』

『地球にいる自分のことを心配してくれたみんなに早く元気に歩く私の姿を見てほしい』

無理だ！！

余りにリスクが大きすぎる

彼女が自分からこちらに来た時にスカウトするしかない

こちらと同じ理由で、ロストロギアとして如何にかして無理やり回収しようとした管理局も及び腰になってしまい、更に闇の書事件を担当していたグレアム達の働きもあり、結果として夜天の書とその主を守る四人の守護騎士、主を補助する一人の騎士、そして夜天の書の管理及び主へのサポートを行うユニゾンデバイスは一人残らず主と共に『地球』で暮すことを許可され、更にその経過観察を『地球』に住むその事件に協力していた高町なのはとプレシア一家が行うことになった。

インタビューの中に『今後魔法関連の職業につくのか？』と言う質問もあり、それに意欲的な答えを行っていたのでその結果妥協したという点もあるのだが

だがそれにしても、ベルカにまつわる物だからと来てもらったあの主従一行、手放すのは惜し過ぎる。

その際、それとなく此処に入ってもらえるように、せめて騎士として登録してみないかとそれとなく呼びかけ、それに肯定的な反応をしてくれたが、もう少し強固なつながりは是非にでも欲しい

それを考えるとビハインドの何らかのやり取りがあったのではないかと疑いたくなるほどの手際よさに唇をかみしめたのだった

・・・12/28日、闇の書事件解決より8日後

「では、」

「「「「はやてちゃん、リハビリ終了おめでとー!!」「」「」



「ありがとな〜。」

夜、アリサ家の庭に全員が集合し、はやてに拍手を送る

クリスマス関係で忙しかったため少し遅れてだが、事件解決を祝い、そして表向きはリハビリ終了のお祝いで石田先生も招待しささやかと言うには少々豪華なパーティーを行っていた

必死にリハビリを行った結果、はやてはユニゾンを行わなくても、走り回るとまでは行かないまでも普通に立って歩き回るといったことが出来るようになった。

現在はやては子供姿アウトフレイムのリンフォースツヴァイと共に、事件以来一層仲良くなったなのは達と集まりおしゃべりをしている

因みにツヴァイ、なのは達はもちろんのこと、主はやてと自分の前任者アイン及び家族ヴォルケンス、自分の作成の指揮をとった刻、そしてユニゾンデバイスとしての先輩であるソニアを一際気に入っているようだ。

その一方で刻とヴォルケンスは、此処に呼んだはやての主治医であり同時にリハビリを担当してくれた石田先生に改めて御礼を言い、招待された場所にしばしば恐縮していた石田先生も時が経つと共に落ち着いてき、刻達のお礼ににこやかに返事を返している

「それにしても、はやてちゃんよかったわね、休み明けからはみんなと一緒に学校に行けるようになるなんて。こんなに早く治るなんて驚きね。」

「もともと闇の書に浸食されていたせいで不自由になっていただけで、そうでなければ健康体だったようでしたから、ある意味この結果は当たり前のことだったみたいですけどね。」

刻君によると『今のはやては、どちらかと言えば歩き方を忘れている状態』だったそうですから。」

「はあ、ほんと、どうにかして刻君も、管理局に入ってくれたら嬉しんだけどね。」

それを遠目に見ていた桃子とプレシアの会話にリンディがため息をつく。

手当たりしだいと言っていいぐらいに勢力圏を拡大していく管理局にとつて、海は慢性的に人材不足で常に魔導師の増員が必要であり、例え他の部署が僻むほどに給与を高級にしても新たな人材を手に入れなければならぬほど切実となっている。

そう言うわけで、探索を止める、ないしはその力を緩め足元を固める方を優先しろという意見は、これによって有能な魔導師が次々と出て行く結果となりまた予算も減少傾向にあるという最も被害を受けている陸に限らず、空や海からさえも出てはいるのだが、本局の中央はその意見をなにかとはぐらかし、一行に受け入れようとせずに来たのである

そんな状態の中、ビハインド云々といったものを含めてさえも、刻にはあまりがありすぎるほどの魅力があるのだが、断られてしまった。

三提督に如何にかできないかと相談もしては見たのだが、強要させるのは百害あって一利すらない。友好的な繋がりを持たただけでも十分すぎると穏やかにいさめられ

そして現在は自分も恐らくどんなポストを用意したって無駄なのだろうと半ば諦めに至ってはいるのだが、それでも圧倒的な実力と知識を誇る刻を逃すのは未練が残る

まあ、そんなふうな気落ちした空気を放つ面々も一部にはいたのだがともかく

「肉！ 肉〜！！」

「アルフ、少しは野菜も食べないと……」

「何言ってるんだいアリシア、肉は完全栄養素なんだよ！ その証拠にライオンは肉しか食べないじゃないか！」

「それ真面目に言ってるの？」

「まあたまにはいいじゃない、ほら、このタルトおいしいよ？」

「ソニアさん……あなたもたいがいです。」

お菓子ばかり……」

「みなさい恭也、これがノエルの新しいボディーよ!!」

「いや……なんつう凶悪な武装を装備させてんだよ……」

「ふふふふ……と云うわけで、行きなさいノエル!!」

「いや、何がと云うわけなのかちつとも……」すみません恭也様』ってこんなところで攻撃してくんな〜!!」

ガヤガヤと彼方此方で華やかな雰囲気醸し出しながら夜は更けて行くのだった

060 (後書き)

なのはDVDやっと借りることが出来たので早速見て見ました

感想

プレシアの心象描写はアニメよりも良かった。

圧縮している分アニメとは展開に微妙な違いがあったが、別に気にはならなかった。

変身シーンにはスタッフの意気込みを感じた。

アースラの魔法技術がアニメより科学臭くなっていた、でも個人的にはいい。

だがなのは、あれはもう、友達になりたい奴に向けた攻撃じゃ無くない？

## EX 新年（前書き）

俺

「なあばあちゃん。此処でインターネットってできたっけ？」

ばあちゃん

「インターネット？ なんだい、そりゃ？」

俺

「うん、ごめん。聞いた俺がバカだった。」

うちのバッチャン、最近DVDのデッキを買ったんだよ（少し前まで使ってたVHSのデッキが壊れたので新しく勝った）と自慢げに報告してきました。

俺にどうしろと？

しかも昨日行ってみたらうまく使えないって……ばあちゃん、入れる方向逆だから。ばあちゃんが昔（俺が幼稚園から小学校にいたぐらい）に使ってたLDみたいに両面にデータが書きこまれてるんじゃないから。ってかどんだけ指紋つけてんだよ……。

小学生のころ全く気にしていなかったネット環境のありがたさを感じてみました。

これの投稿方法？

今、帰りの新幹線の中です。

## EX 新年

とある深夜。

「ほわー。 やっぱりすごい人数ですねー。」

「ええ。 ほんとうに。」

「ったく、 相変わらずだな、 ちとっとうっとうしいぞ……。」

とある神社の前についた三人の女性、 三人の少女、 そして一人の男性  
十二月三十一日、 新年を迎えようとする多くの人々が此処の寺にも殺  
到し

「そう言うなヴィータ、 確かにベルカの騎士である我等にこの文化  
は馴染みの無いものではあるが、 悪いものではないだろう?」

「ああ。 さて、 刻達は……。」

待ち合わせをした人物らを探すため辺りを見渡す一行、 そしてそん  
な中、 うす青色の髪をした紅目の女性がとある一行を見つけた

「ん? 主はやて、 あそこではないか?」

「あ、 ほんまや。 ナイスやでアイン。」

その女性、 リンフォースIIアインの指示した方向を見、 はやては  
ほんの一年ほど前正式に自分の家族になったヴォルケンズと共にそ



ちらへ向かう。

彼女らの向かう先にあるのは三つの影

そのうち一人がはやてに気付き声をかける

「よっはやて。」

それは自分が幼いころから世話をしてくれた幼馴染。

自分に家族が出来てからはやや自分の家へ上がってもらう機会は減ったが、それでも自分の最も親しい友の一人であることには変わりなく

毎年のことではあったが、本日の彼はこの日のため、普段のカジュアルな格好から一変し、高級そうな着物に身を包んでいる。

そのせいか、普段の佇まいと一変しているため一瞬本人が分からなくなるが、そこがなんとなくいいとはやては思う。

そしてそれはその隣にいるソニアにしても同じである

彼女の着ている着物は刻と同じく黒を基盤においてはいるが、そこには申し訳程度に桜の花弁の模様付けがなされており、それは彼女に普段のやや天真爛漫的な気風とは一線をかした雰囲気醸し出させている。

「はやてちゃん、今晚わ。」

その隣から声をかけてくるのははやての三人目の友人と断言していい  
すずか。

こちらの着ている着物の基盤も黒ではあるが、それは何処か紫がか  
つており、さらにかせみ小紋がなされている。

こうしてみると同じような着物でも少し手が変わっただけで見違え  
るのだなとははやては思い。

「みんなよう似あつとるで。」

「ありがとう。でも、はやてちゃん達もかわいいよ。」

はやての言葉にすずかが返す。

はやて達は各々色違いはあったものの、全員同じ、コスモスを散り  
ばめたような柄の着物を着ており。

ザフィーラすら普段の狼形態とは違い人間姿となり、やや色褪せた  
ような濃紺着物を着ている（獣耳はもちろん隠している）。

「あ、いたいた。みんな〜〜!!」

そこにかかってくる活発な少女の声。

そちらを見ると彼女らが待っていた残りのメンバーがやってくる。

「お待たせー!!」

「ちょっとなのは、待ちなさいよ！」

「う。やっぱり着物って走りにくい……………」

「あははは……………みんな、お待ちどうさま」

その一団から離れて駆け寄って来たのは先ほどの声を発した少女、高町なのは。

それを追いかけて続けてアリサ、着物といういつもの軽装とは比較にならないほど動きづらい服装をしたためやや不満を言うフェイト、そしてそれを笑いながらアリシアがやって来た。

「待った？」

「いや、それほどでも。」

その言葉に良かったとフェイトは笑い、なのはと共にはやての方に集まり、本殿へ向かう

刻はそれを見、ふと各々の両親（+腕を組んでやって来た京谷と忍）と共にやってきた次期司書長最有力候補と言われており、現在管理局の無限書庫の一司書としてそこに缶詰めとなっているはずの少年に尋ねる

「それにしてもユーノ、お前いつこつちに来たんだ？」

「ほんの数時間前だよ。君でも分からないことってあるんだ。」

それに朗らかに答え、ついでに軽い皮肉を言うユーノ  
その隣を歩きながら刻はそれに苦笑いを浮かべる

「俺は神でもなけりやストーリーカーでもないんでね。

そんな事細かく個人のスケジュールを把握しているわけないだろう  
が。」

「よく言うよ、あれを見てると何だってあり得そうでこわいんだよ  
ね。君が数年前に見せてくれた技術レベルに、未だ管理局は至っ  
てないんだ。こっちなんかやつと最近特化型デバイスについての  
開発が始まったばかりなんだよ?」

まあ頑張れ? と刻は笑い

そして彼等は当たり障りのない身近な出来事をしゃべりあう。

因みに実際の所、刻・・・と言うかビハインドの一般管理局員の情  
報収集は、局のデータベースに入っている個人情報以外は基本噂話  
をベースにしているので、しかもこれにしたって一人一人集めてい  
る訳ではない。

なので一応ユーノの心配は杞憂ではあるのだが

「お?」

「後大体10分、間に合ったね。」

そんな中、彼らの目に飛び込んでくるのは歴史を感じる一つの大きな鐘。

今宵、この寺では明けと共に一つの鐘をつくという行事を行うことになっており、それを見届けるためにすでに多数の人々が台を囲みその時を静かに見守る。その中にはその一瞬を納めるためにカメラを構えたり、ビデオカメラを回している人もおり。

刻達もそれをやや遠目に眺める場所に集まり時を待つ

そして時が訪れ、数名の僧の元、

時計の針が重なると共に街に重みを感じる鐘の音が響き渡る

『明けましておめでとございます』

刻達は皆でお辞儀をし合う。

彼等の向こう、本殿の方からは我先に参拝をしようとする躁然が聞  
こえてき

祝辞を述べあつた刻らはそれに加わるべく歩みを向ける

彼ら彼女らは願う、今年一年健やかに過ごせるように、楽しく過ご  
せるように、そして今年も良い一年であるように

EX 新年（後書き）

明けましておめでとうございます

|         |           |
|---------|-----------|
| 累計PV    | 2,041,360 |
| 総合評価    | 3,461 pt  |
| お気に入り登録 | 1,178 件   |

昨年は稚作をこれほどの人々に読んでいただき、たいへんありがとうございました

今年もどうかよろしくお願いします

なのはが重傷を負った。

刻達が小学五年に上がり、しばし経った時にそのような報告が入って来た

事件から数カ月ではやての足は完全に思い道理に動くようになり、現在は一・二年ほど前には歩く事さえできなかったと言われても誰も信じられないほどとなり

ほんの数カ月前、なのは・フェイトと共に（ほぼ）正式な管理局員となったのだった

最も、学校のある時間帯はそちらが優先となっているため、現状実地の助っ人の様な扱いになってはいるのだが

なお、はやてはヴォルケンスと共に騎士として聖王教会に登録されている。

これはベルカに密接にかかわっているからと、夜天の書のほぼ全権が聖王教会に移ったためその過程で彼女等は登録されることとなったのだった。



だからと言って彼女等は基本そこで働く必要はなく、有事の際召集に招じる義務が課せられただけではあったのだが。

しかしそんな中、刻とアリシアは彼女らと違い、どちらも職に就くとはしなかった

（最もミッドとかならともかく、日本では小学5・6年の時点で職を持つのは不可能と言ってよく。すでに仕事に意欲を燃やす彼女らの方が異常なのだが。）

刻は別に金に困っていないし、すでに手に職を持っているからこれ以上増やしたくないと

アリシアは自分は戦うよりも機械いじりが好きだから、そちら方面の勉学を励むことに精を出したいからと

それぞれが管理局に入ることを拒否し

当初なのは達はそれに不満顔をしてはいたが、中学を卒業したら一応考えてはみるという二人の言葉にそれなりを潜め、現在はそう言った話題は特に出さなくなっていた

そしてその数カ月後、そのニュースが飛び込んできた

その時点ではなのはは管理局本部の病室に入院していたため、刻、  
すずか、アリサ、高町一家は訪れることは出来なかった（と言うよ  
り刻を除くメンバーにその情報はいまだ届いていなかった、刻はい  
つもの情報網経由）が、彼等を除く親友たちはいち早く彼女の病室  
を訪れた

もう空を飛べないかもしれない。

皆の前で下された診断はそのような残酷なもの

如何にかならないか、彼女等は必死に医師に詰め寄るが、残念そ  
うに首を振るだけ

勿論治る可能性はあるが、断言できない。

そもそもそれ以前に歩く事さえ二度とできない可能性すら濃厚な  
のだからと

病室に絶望が立ち込める

.....で

「プレシアに使ったような秘薬をくれ、と。」

「うん、あんなすごいものがあるんなら、なのはを治せる薬もあるんじゃないかって」

すまなそうにフェイトが刻の家に尋ねて来た

刻は初めてなのはの状態を聞いたふりをし、フェイトの頼みに対し目をつぶり

(やっぱりこのイベント、あいつとは関係なかったってわけか。さてと.....エリクシルのストックはかなりしてあるから一本ぐらいならあげてもいいんだけど)

「取り合えず、様態を見ないことにはな.....」

「あ.....それもそうだね.....」

(下手に渡して、それが管理局に成分分析されて、結果俺が超重要危険人物登録されたなんてなったら笑えねえしな。.....いや、むしろそっちの方がいいのか？あ、だめだ。睨まれなければならない

方向が違った)

「となると、まず海鳴総合病院に移してもらおうように……いや、だめだな。(一々プライドの高い本部のやつらが容易にそれを認可する訳が無い)……っち、しかたない、こっちから出向くか。」

「あ……ごめんね」

「べつにいいさ(簡単な種を仕込むには絶好の機会だし)」

彼は、その腰を上げ管理局へ向かう。

「あ、高町一家とアリサ、すずかも一緒に連れて行くように申請してくれ。で、俺の面会は一番最後だ」

「え？」

「あいつ、自分自身を軽視してる傾向がある。」

俺の注意無視してその結果自分がどんなに他人を心配させたか一度心底分からせた方がいい。」

「で、言い訳はあるか、なのは？」

「返す言葉もありません・・・」

「俺言つたよな？ ただでさえ未成熟の身体で馬鹿魔力内包した魔法使い続けたらすぐガタが来るつて。 負担がかからないように注意しろつて。」

「はい・・・」

刻はなのはに辛辣な言葉を掛ける

刻の前に、自分の家族や親友たちにさんざん泣かれたなのははつらそうにそれを受け止める

「で、今どんな気持ちだ？」

「じめんなさい……………」

「俺はどんな気持ちだつて聞いてるんだけど？」

なのはは唇をかみしめ、シーツを握りしめる

目からは涙がおちてき

「ま、反省はしてるみたいだからもういい。  
痛い目に合ったからには今度こそ気をつけるよ。」

そして刻はカルテに目を通す

「……………じゃ、とりあえず結論から言っけど。」

ごくりとなのはは喉を鳴らし

「身体は元のように動くようになる。」

ガバツとなのはは目を開き刻を見る

「たーだーし！」

刻は語調を強め一泊開けめ

「まず入院場所変更、『海鳴総合病院』。  
入院および通院期間約半年、その間……………最低でも三カ月間は相当  
苦しい思いしてもらっよ。  
これが必須条件ってか方法。」

耐えられる?」

「それで、本当に、治るの?」

なのははさすがのように刻に聞き

「お前次第だな。」

刻はそれになやりと笑った

外で二人のやり取りをはらはらしながら見守っていたフェイトらは刻の言葉を聞くと共に再びなのはの寝室になだれ込んで来た

刻はそれと入れ替わるように外に出、そこにたたずんでいたユーノに声をかける

「なのはのどこに行かないのか?」

「……………」

刻は病室の方を目線で示しながらユーノに訊ねるがユーノは俯いたままじっとしている

「お〜い」

もう一度刻は声をかけるがユーノは無言のまま

「……………つらやましいよ」

そしてぼつりとそう呟いた

「ん？」

「……………僕はなののが好きなんだ」

おもむろに絞り出すように声を発するユーノ

「知ってるけど。」

刻はそれに平坦な声で答え、ユーノはガバツと刻の方を向いた

「なのに、なのはこのことに気づいてあげられなかった。何もしてあげられなかった。」

怪我をする前も、した後も、今だって！！」

刻はそれのため息をつく



「はあ……で？」

「……………え？」

「で、お前はどつするんだ？」

「……………え……………」

「なのはの前から消えるのか？今まで通り接するのか？」

それとも何かアクションを起こすのか？」

その言葉にユーノは目を開く

「それは……………」

口をパクパクさせ、苦渋の表情をする。

「あのさ、俺は職業柄人を見るのに慣れてんだ。そう言った些細な変化に敏感なの。」

それに俺となのはの付き合いは、四年目から少し距離感が出たけど、それでも三年以上頻繁に顔を合わせ、話をしていたと言っのアドバ  
ンテージがある。二年チョイしか経ってないのにこされたらたま  
ないんだけど？」

それに戸惑うユーノ、だが刻はそれにお構いなしにまくし立てる

「過去は帰って来ないんだ。振り返るなどは言わない、過去を顧み

ることは重要だ。

だが最も大切なのは、だからこそこれからはどうするか。じゃないのか？」

「あ……」

「つたく……」

「ついでに教えといてやる。少なくともなのははお前に感謝してる。」

「それは「良いから最後まで聞け」」

「二年と少し前、魔法に出会わせてくれたこと。

後にフェイトとはやてと言う親友を作るきっかけとなった魔法を教えてくださいましたこと。

自分にも何かできるんだと実感することが出来る魔法を教えてくださいましたこと。

そして自分のわがままを聞いてくれたこと。

なのははお前にとても感謝してるよ。」

「……え……」

「幼いころのなのはは基本自分で色々なことをしなくてはならなかったらしい。色々と大変な時期だったらしくてね、今はそんなことは全く無くなってきているみたいなんだけど、その時のことが心の中に根付いているみたいなんだ。」

『みんなの足を引つ張らないようにしないと見捨てられるかもしれない』ってさ。」

「そんなことが……」

「そのうえで、いつもと同じようになのはと付き合ってやれ。」

「え？ なにか、変えた方が……」

「そう言うの、逆効果になると思うからな。」

善意ってのは、諸刃の剣だから配分には気をつけないとね。」

そのうえで、なのはとの距離を縮めな。」

月日が、丁度いい場所を教えてくれるようになるだろうからさ。」

刻はくるりと背を向ける

「がんばれよ。」

そして刻はその場を立ち去った

・・・・・・・・・・ 数日後

鳴海総合病院

「あら、あの子もなかなかやりがいのある患者を紹介してくれたものね。」

「あ、あの、よろしくお願ひします!」

刻が何処からか呼び寄せた医者がなのはの様態を見、なのはの意気込みに笑顔を向ける

「その意気込みやよし、それなら私は答えてあげないといけないわね。」

「お願ひします」

「んっっっっっっっっっっあっっっっっっ」

夜の病室になのはのうめき声が響く

パチン、パチン

そこからあまり離れていない場所で刻となのはを治療することになった女性の医師が将棋を指していた

「にしてもあなた結構ひどいわね、『エリクシル』なんて私達を一蹴しかねない物を持っておきながらそれを使わないなんて。

私が彼女に飲ませた神経再生・治療促進薬、こんなに苦しむことはもちろん知ってたでしょ？」

「いざという時に使うものだからな、それに、痛みから逃げてはいけないと思うんだよね。痛みが伴った方がより強くなれる。

実際俺自身にかけてるのも主軸は回復・回帰系統じゃなくて、再生・治癒系統だ。傷ついてそれを乗り越えてこそより強い肉体と精神を

得られる。

痛みを和らげることはあっても『元の状態に戻す』魔法は基本的には使わないよ。

基本……一瞬で元に戻さなければならぬ限りは。」

「医者としては好意的に取れる意見ではあるんだけど、ね。」

女性はやれやれと首を振る

「大丈夫さ、彼女には支えてくれる仲間がいる」

「ふーん」

その女性は刻を覗きこむように見る

それに対し刻は感情を全く読みとることが出来ない、又はどんな形の感情をも読み取れてしまう笑顔を浮かべ

「王手」

「あ」

銀を進め玉の行き場をなくした

その後、彼女の海鳴の友人ら、そして暇を見つけては見舞いに来たユ一ノ達の親身な激励も後押しし、

一カ月後、なのはは退院、車椅子で生活するようになり、学校に復帰  
更に二カ月で車椅子を必要としないようになり

もう一カ月で完璧には言えなくも、走れるようになり

そして事件から五カ月後

「フェイトちゃん！ 受かったよ〜〜！！」

なのはがプレシア家に魔導師Sランクの認定証を持って駆け込んで来た

「なのは、おめでとう。」

「あらす〜いわね〜。」

「うん！！ あ、ごめん、フェイトちゃん今勉強中だった?。」

ふとフェイトの机の上に合った参考書類を見て気まずげに聞く

「あ、うん、執務官試験のね。」

「……………ごめんね?。」

前回、自分を心配していたせいか試験に落ちてしまったことにすま

ない気持ちになるが

「ううん、ただの私の力不足だから心配しないで。  
それに今度こそ、きっと今度こそ受かるから」

「うん、頑張つてね!」

その数カ月後、フェイトはそのとおり、試験に受かり皆と共に喜びあうことになる

そして、その後月日は流れ、数週間後、皆は六年となる日を迎えた  
小学生最後の一年が始まる日を

様々なことがつぎめき始める一年を



分岐点となる一年を

彼、彼女らが共に勉学する最後の一年を

そして

刻が彼女らの前から姿を消すまでの、最後の一年を

## 063 最後の始まり

「あ、みな」

小学六年の新学期初日

三寒四温の季節、登校の道のりの中で出くわし、朗らかに談笑しつつ歩いていく刻、すずか、そしてフェイトとアリシアは後ろから聞こえた声に歩みを止め振り返る

「ん、……………よっす」

「はやてちゃん、おはよう。」

はやてが駆け寄り、笑顔で皆に話しかける

「今年はみんな一緒のクラスになれたらええな。」

「そうだね。」

「うん」

「去年はまばらだったもんね。」

すずかとフェイト、アリシアはそれに頷く

三年の三学期こそ全員一緒のクラスで過ごすことは出来たのだが、

四・五年のクラス替えなので皆が一緒のクラスになることは無く、特に刻はどちらとも誰とも同じクラスになることは無かった

最後の一年ぐらいはもう一度皆と同じクラスになりたいとはやては言い

「でもそうになったらすずかちゃんと、アリサちゃんとなのはちゃんつて全学年同じクラスになることになるんだよね？」

ふと、とあることに気付いたアリシアが呟き

「えつとつまり・・・1/9765625の確率で、次に一緒だったらされに1/25で……えつと・・・四で割って・・・」

「1/244140625な。」

必死に暗算しようとし、頭から湯気を出しかけるフェイトに刻が答えを言う

「・・・すごいな〜」

いまいち実感がわかない数字にとりあえず感嘆の声を上げるはやて

だが

「そして逆に言えば一二億四千四百十四万六千二百二十四分の二億四千四百十四万六千二百二十五(244140624/244140625)の確率で三人は違うクラス。

因みに一二億分の一(1/200000000)ってのは一年間で交通事故に大体2250回遭う確率な。

つまり一日に6・7回交通事故に遭うってこと。」

「……………」

刻が発した言葉に四人はかたまる

春風が吹きぬけていたはずが彼女らの周囲の気温は心なしか一気に下がり

刻を除いた四人、特にすすかの縦線の入りようは結構深刻な様子で

「ま、今回だけで考えれば今までと同じ確率で1/25、俺達七人が揃う可能性は1/15625

こればかりは行って確認してみないとどうしようもないだろ？

と言っわけで、ほらさっさと行くぞ。」

「む……………そんなこと言って、刻君だけ違うクラスになっても知らないからね」

爆弾を落とした張本人である刻自身はそんな中カラカラと朗らかに  
笑い

その後を四人は急いでついて行ったのだった

………  
掲示板前

「えっと………」

「なんて言ったらいいか………」

「………ドンマイ？」

校門前でアリサ、なのはと合流した刻達は今年度のクラスが張り出された掲示板に向かい、すでに登校し、掲示板の前でひしめき合っ

ていた多数の生徒の合間を縫うようにして確認した結果

「でも、ほんと……刻君だけ違うクラスだなんてね」

残念そうに言うすずか

なのは達は全員Aクラスとなっていたが刻はただ一人Dクラスとなっていた

AとDの教室間の距離は軽く行き来するといふのには少々と言つては遠い

今年もやや疎遠になってしまつのかと意気消沈する

しかも登校時に言つてたことがさらにのしかかつてしまったようで、しょぼんとうなだれてしまい

「ま、こんなもんだって。新学期からそんな沈んだ顔をするなつての。」

そんなすずかの頭を刻は軽くなでる

「刻は悲しそうじゃないね?」

横から訪ねてくるフェイト

刻の無頓着な反応に、寂しさの他に少々だが不機嫌さを混ざったよ  
うなご様子でたずね

「別にこの程度で縁が切れる訳じゃないしな。」

それに対し刻はただ肩をすくめるだけだった

そして彼等はその話を切り上げ、談笑しつつ歩いていきそれぞれの  
クラスに向かい、分かれる

二手に分かれ、彼女らに背を向けた後、刻は小さく呟く

「……………悲しそうじゃない… か、」

しかしそれは誰にも聞きとられることもなく空に溶けて行った



「そんなわけ無いよ……だって俺自身がこうなるように操作したんだから」

彼はひそかに準備する、自分が抜けた時に受ける衝撃を出来るだけ少なくするために

限りなき迅速に復帰できるようにするために

**E X - 0 3 記録にない物語（前書き）**

本来これらのクロスもの、p v 1 0 0 万か1 5 0 万突破記念で募集してたのに

現在 p v 約 2 3 0 万

まじですみませんでした o r z 三

## EX-03 記録のない物語

Side 刻

最近暇な時間が多くなった

いや、確かに今でも色々と動いてはいるんだが

無印・A's 関連の揉め事は後始末も含めて大方の処理は終わってしまい、少し前までは慌ただしく行っていたビハインド関連の事務作業も、システムを整え、後塵を育て揃えていくことで自分が早急にやらなければならない仕事量は何倍にも減った。

また、現在行っている研究で数時間詰め込んでいることもあるが、学生の身である俺には限度と言うものが存在する

一言に実験と言っても、時間単位で終わるものはもちろんあるが、週や月単位で継続して行うものもざらなのだ

となると、そう言うものを中途半端に行うわけにはいかず、結果として実験は連休、又は長期休暇になるまで後回しにしたり、部下に全部任せてしまうということが多々ある

そして俺が次に行動を起こすのはまだ先の予定。

その結果、俺にはポツカリト時間が空く事が多くなって来たのだ

その時間は鍛錬につき込んだりはしているのだが、ただでさえ俺の鍛錬を行っている場所は時間の流れが此処とはずれた場所なのだ。

具体的に言つと此処の一分がが向こうの約一年。つまり53万倍の時間が向こうでは流れる

身体年齢の基準はこっちにしてあるため、どれだけあの空間いようが此方の時間に合わせて身体年齢が上がるようになっているので、向こうの空間から帰ってきたらいいおっさんになっていたとか言うことはないんだが、そんなずっと向こうの空間で鍛錬ばかりし続けるというのは精神的に参る。

某漫画に出てくる『精神と時の部屋』みたく辺り一面真っ白な空間で食べ物粉だけと言つことはないんだが、はっきり言つてどんなに頑張つても4・5年ぐらいが限界

初めの一カ月は山籠りみたいな気分で居られるが、半年もしないうちに精神的にきつくなる

ちなみにこの4・5年つて言つのはソニアと一緒に過ごした場合だ。

俺一人だつたら一年経たないうちにギブアップする自信があるね。

あ、実験もそこでやったらどうかって言うなよ？

無理だから。

時間以外にも色々で法則が違っただよあそこ。

ランダムで気温や気候や湿度や風向きや風速や気圧や重力やが変わる時点で色々で致命的。

通常はもちろん、最終耐久試験にさえつかえやしねえ。

実験って言うのは正確な数字が重要なものだから一定の状況下でやるのが普通だし、最終的な耐久力テストだって『 』 といった過酷な状態でのテスト』として行うのだ。

なんか壊れた、けどどんな状況で壊れたかよく分からんじゃ話にならない

《もう一回閑話休題》

まあとにかく、現在の俺は少ない頻度で暇が出来るのだ

だからと言ってだらだらと部屋で過ごすのは、子供だからとかいつたのを抜きにしても耐えられない

だからいいか、俺は断じてワーカーホリックじゃねえ!!

決していざ休みができても一体なにをすればいいのか判らないなんてことはない!!

せつかくの人生、仕事中毒で青春を終わらせるようなってことをする筈が無い!!

絶対にそんなことはあり得ないんだからな!!

大切なことだから何度だって言うぞ!!

というわけで、えっと.....

.....

.....

.....

.....

そつだ異世界旅行をすればいいじゃないか!!

思い立ったが吉日、行くぞソニア！！

「今度社員旅行の形でなにかツアーでも組んだ方がいいでしょうかね？」

海水浴とかイチゴ狩りとか山狩りとか。」

「そうですね。うん、それじゃよろしく頼むね？」

「ええ、青春時代は大切ですから。」

ほら、そこでレオンとぼそぼそと何かを話してないでさっさと行くぞソニア〜！！

S i d e E n d

E X - 0 3 記録にない物語

とある世界の海鳴市の隣町の遠見市にあるとある家  
そのリビングには、数名の少女がいた

そしてその中で一際背の高い女性、グレイースティン



彼女は周囲にいる少女……守護騎士達の主なのだが

現在彼女は思考の渦にとらわれていた

(俺の道……俺の歩みたい道……そんなの決まっている。  
決まっている……はずなのに……)

「え、えつと、御主人様……本当に大丈夫なんですか？」

「あ……いや、何でも無い……」

ふと我に帰ると彼女の目の前にシエアクが心配そうに彼女の顔色を見ていた

グレイは何でも無いと彼女の頭を撫で、一安心させるが、彼女が離れていくと再び思考の泥沼にはまってしまっ

。(だめだな。 あれ以来どうしても思考に没頭してしまっ……)

“鬼の道”と “人の道”

どちらを歩むのか、そう遠くない未来までに俺は決断しないといけないらしい

あいつ等はその決定権は俺にあるといった

『好きな方を選ぶがいい』と

そんなもの決まっている……決まっているはずなんだ……それなのに………)

「本当に大丈夫なのか主？ 我等の気のせいだとは思えんが。」  
「私達はあなたの騎士、相談ぐらい乗りますよ御主人様？」

今度はディアとシアリーフ

グレイははっと再び抜け出すが、その顔には苦笑の色が浮かんでいる  
そして

(駄目だな……こいつらに心配をかけたってどうにもならないのにもう三人も……いや、他の奴等も気づいているんだろうな……  
………何時までもこんな空気にいるわけには、いかないよな。……  
………よし、取りあえず気分転換に皆で“幻世”にでも行くか)

そう決断し、彼女は守護騎士の皆に準備をするように言った

“幻世”、それは知る人ぞ知る魔界。

此処は管理局が未だ観測しきれない世界、そしてありとあらゆる神獣、魔獣、霊獣、聖獣、幻獣、妖獣、果てには魔人、獣人、架空の怪物といったモンスター達が住む世界。

“幻想種の住まう世界”、略して“幻世”

此処には『人間』など住んでいない

なので

「取りあえず、訓練がてら数体強そうな奴と当たってみるか？」

「ま、それでいいんだけどさ………どうやら先着様がいるみたいだよ、主？」

「なに？」

フリユイの言葉にグレイは眉をひそめた

フリユイの言った方向へ向かうと一組の男女がいた……………のだが

「……………」

「お前らも食う？」

少年が俺達の方にぶつ切りにして焼いている肉を指し示しながら尋ねる

そう、コイツらは飯を食べていた

途中から肉などの焼けるいいにおいがして来たので予測はしてはいたのだが……………

近くにまとめてあるものを見るとどうやらあれはドラゴンの肉らしい  
勿論俺もそれは食ったことはある

風味は鶏肉に似ているが、そちらよりも格段に美味だ

そして年を経たドラゴンであるほどその肉は熟成され、より一層風味を増す

まあ、それは置いていてだ

「……………お前も神あしの関係者か？」

とてとてと「お、いい奴だな。それじゃありがたいたく御馳走になる

うか」とかほざきながら無防備に近付いて行くクエーサの首根っこを捕まえつつ尋ねる

そして、それに対しそいつらは

「ん、俺の予想が正しいなら『あいつ』と俺は知り合いですら無いと思うぞ?」

「あいつって言うのがあれの犯人なら間違いないよね。」

と答えた

そして俺はしばし逡巡し

「御馳走になります」

そう言った瞬間「わくくい」と叫びながら走りだしたクエーサをもう一度抑えつつ

俺達はこの二人と共に火をかこつた

「(ムシャムシャ)つまり現在仁神はユニゾンデバイスのソニアと一緒に当てのない旅をしていて、此処に来たのはただの偶然だったと。」

「(がっがっ)そ、此処に来た理由には異様な魔力を感じたからっ

てのものもあるけど(ゴクン)…………ま、概ねそんな感じだね。」

「まあ、これだけ異様な魔力持つてる生物がいるなら気になっても当然か。」

「ま〜ね〜。」

「(もぐもぐ)…………なあ、」

俺は塩、胡椒、醤油他もろもろの香辛料などで下味をつけ鉄板の上で豪快に焼いた肉を、飯盒で炊いたご飯と共に採取した野草に包みそれを食べながら二人の片割れ、仁神刻と話す

一応あの後も罠の可能性を考えてはいたが、結局そんなそぶりすら見れなかったので緊張をゆるめることにした

だがよく考えなおしてみたらあいつが俺に干渉してくるならば、俺の意思なんざちっとも気にする訳が無かった

我ながら無駄なことをしてしまったもんだ

ちなみにもう片方、ソニアって言うこいつのユニゾンデバイスは俺の守護騎士達とギヤーギヤー騒ぎながら(一部無言で料理を口に運んでいる奴もいたが)飯を食っている

魔法生命体同士、仲がよろしいことで

だが俺もこいつと意外と気があようだった

聞くところによるとこいつも転生者らしく、神に厄介事を押しつけられたらしい

その代償、と言うか強制支給品と言うか、まあそんな感じで様々な“要素”を詰め込まれたらしく、刻が此処に来るときに使ったという、本来相当困難であるはずの『時空間の狭間を飛び越えるのではなく侵入する』という行為を容易にしているのもその一つなのだとか

ともかく、そう言った『なんか理不尽な目に合った』かなんかのシンパシーを感じたせいかいつの間にか俺はこいつにぼそぼそと『起源』とか『選択』のことについて話してしまった

言っても仕方が無いことではあったのだが、一度吐き出し始めると押さえていたものがとめどもなく流れてきて、俺の現在の大まかな状況をこいつに話してしまった

そして

「そんじゃあ一つ、一対一で戦ってみるか。」

少し考えていた刻はおもむろにそう言った

「はあ？」

気の抜けた返事をした俺を責められるやつはいないだろう

俺の話聞き終わった後の第一声が『戦おう』だ

俺はこいつに俺の“起源”であるらしい“鬼”のせいで戦いを渴望するようになり、制御ができないと説明した

なので何で『戦ってみよう』なんだよ！？

「いや、いきなり戦おうって……………」

他のやつらにこいつに何か言ってもらおうかと辺りを見る

だが

（なっ！！？？）

思わず息をのむ

俺の辺りの風景はいつの間にかモノクロに様変わりしていた……………  
いや、ちがう

俺達二人だけがいつの間にか巨大な結界の中にはいつていた



他のやつらの姿は誰一人として見えない

「隔離結界の一つさ。

俺とお前だけ、外と様々な事象から隔離させてもらった、空間はもちろん、時間からすら。

解除しても中でおこった事象は一歳外に持ち出されない。ゆえに外は俺達が隔離された時点から、何事も無かったかのように動き始める。

神ですら此処でおこったことは知ることが出来ない。それ以前に何かしていたことさえ気付けない」

「……………何時からこれを」

唱えるように言いながら俺から離れていく刻の背中に声をかける

「『なあ、』ってところから。」

それに対してそいつは楽しそうに答え

「何だか君の雰囲気が変わったからね。張ってよかったよ。だつて……………」

そこでそいつは反転し、俺と正面から向き合った

そこ顔には満面の笑顔が浮かべられており、心底うれしそうに

「一切の気を使うことなく……お前を せるんだからな！」

地面を思いつきり踏み締め、こちらに向かって突っ込んで来た

「つくううー！」

俺はあいつの言葉に戸惑うが、あいつから発せられる殺気にすぐに反応しそれを避ける

「べつ言つつもりだ」「うらああああ、のんきに構えてたら速攻で終るぞー！」つくー！」

濃厚な殺気を感じ、すぐに其処から飛び去る

その瞬会、今さっき俺が立っていた場所が抉れた

そのすぐそばにはあいつが剣を持って……いや、銃に変えた

「そんな構えで大丈夫？」



至近距離で爆発が起こり、グレイは地面に落ちた

くすぶり、激痛を感じながらグレンは考える

( どうしてだ……………なんであいつが……………いきなり…………… )

いきなり自分を攻撃してきた刻に怒りを抱きながら、その理由をグレイは考え

そして

( 神あじの罫じか )

一つの解にたどり着く

( 俺にまた絶望を味あわせるためにあいつが仕組んだことなのか！  
？……………ふざけるな )



先程まで心底楽しそうな表情をしていた刻はいつの間にかその表情をやめ、深くため息をついた

「ウラノゲキ」  
「ウオウオウオウオウオウオウオウオウオウオウオウオウオウオンッ  
.....」

「穿テッ」  
「バシバシッ.....」  
「.....」

.....

「.....」



背後を取られるが、腕一本を犠牲にすることで素早くその場から離れ、砲撃を叩きこむ

切られた腕は炭化した部分が見るみる崩れ落ち、泡立つようにしてみるみる新しい腕が再生した

「ああ、くそ、ほんと強いなあてめえ！！ 少しくらやましいぞ！で、俺は何時までこんなことで神経すり減らしていないといけないんだ？！」

再生の想像を絶する激痛に顔をしかめつつ愚痴をこぼす

そしてその瞬間、刻はグレイの一瞬の揺らぎを見つけ

「やっとか」

苦笑いした

.....

どういづつもりだ

「で、俺は何時までこんなことで神経すり減らしていないといけないんだ？！」



なんのつもりだ

すでに戦い始めて数十分は経過しただろうか？

初めはがむしやらにあいつを攻撃し、あいつの攻撃を防いでいた

あいつはそれをかわし、俺を攻撃してきた

勿論俺はそれを防ぎ、あるいは意に介すことなく奴に攻撃を加えた

だが時がたってくるにつれ、だんだんと頭が冷えて来たのだろうか？

相変わらずあいつを　そうとする一方で、今のあいつの奇怪さを考  
えるようになった

最初のやる気が見られない

一定以上の攻撃を加えてこない

何故かしきりに訳のわからないことを語りかけてくる

そんな思考が渦を巻き始め、それがかなりの大きさになった時、いきなりあいつは周囲に展開していた武装を全て消し、招き入れるように腕を広げた

「ナに!？」

訳が分からない？

どう言うことだ？

何のつもりだ？

思考が渦を巻く

しかしふと意識を戻すと俺の体はあいつをすべく、腕を振り上げ近づいていつていた

そしてなぜか分からなかったが

(とま……れえええええ!!!!!!!!)

体に命令を送り、あいつの首に向かっていく腕を止めさせよつと必死になった

そして

.....

「.....てめえ、なにやってんだ!!」

グレイは刻の喉元付近で止まった腕でその胸ぐらをつかみ上げる  
だがそれに対し刻はただ微笑んだまま

「何って、武装を解除して動くのをやめた?」

と答える

「馬鹿かお前!? 俺がこのまま攻撃していたらどうなったか分かってんのか!?」

「そりゃあまあ……洒落にならないぐらいのダメージを負っていただろうね。」

グレンは叫ぶが刻はまるでそんなことは大したことないともいって形がいい

それにグレンはただただ混乱を募らせ

「洒落にならないぐらいって…俺が止まることが出来なかったら止まれたよね?」・・・え?」

そして、頭を振りつつ言うグレイに刻はにっこりとほほ笑んだ

「『鬼』という“起源”はお前の物だ。それは否定のしようがない事実。」

俺を心底楽しそうに そうとして1時間近く追い回したあいつは間違いないお前だ」

「ツク!」

その言葉にグレイは苦渋の表情をする

だが

「そしてその状態から俺を殺すのをやめることが出来たのもお前」  
刻の言葉に呆とする

「もつとも、そこに辿りつくまでにかなり時間はかかったけど」

そんな中刻はもう一ど笑い

「少なくともさつき、間違いなく君は自分で自分を止めることが出来た」

そう言った

慌ててグレイは何か言おうとする

「あ、それじゃあお前は」「ほらこれ」「… 肉の葉っぱ巻き？」

しかし刻はグレイに食事の乗ったお皿を手渡し

「じゃ、結界解除するからな。俺とお前はずっと二人で食っちゃべっていた。誰にも気付かれずにお前の起源の話をされてもいなければ戦っても居ない」

一方的に説明を行う

「おい……まあ、ありがとな」  
「……………どういたしまして。」

それに対しグレイはじと目を向けた後、やれやれといった塔に御礼  
お言い

刻はそれに返事を返した

「うん。楽しかった。」

食事の後、諸語騎士達と共に幻獣と戦いつかれたソニアは満足そ  
うな声を出した

「よくぞそんなに駆けまわれたもんだなあ」  
「なによお、刻だってちゃっかり何体か幻獣捕獲してたじゃない。」  
「ま、お土産にね。」

刻の言い分にソニアは言い返すが、それをしれっと受け流し

「さてと、それじゃあそろそろ帰るぞ？ いい加減戻らないとやばい時間だ。」

「うえ？もう帰るのか？」

刻の言葉にクエーサが声を上げる、遊び足りない様子で

「明日はまた学校なんでね。早い所帰らないと。」

「学校？なんだそれ？」

「勉強する所。算数とか英語とか理科とか社会とか」

「おおそなのか、がんばれよ」

「……………どうも」

回答に対するクエーサの励ましの言葉の後、しばしの間を置いて刻はお礼を言った

「ねえ、あいつ明らかに棒読みだったよね？」

「ああ。絶対に理解していないな」

「あいつはあたし達の中でいちばん頭が弱いからねえ」

「全く、我々の恥さらしだ。」

「ほんとうですわ、まったく。」

「くすすす、まあいいじゃないですか。おかげでいじりがいるんだから」

「ひいひい!？」

「……………」

後ろから聞こえてくるそんな声に刻・ソニアは苦笑いし、グレイは額を抑え、クエーサはウガーっと腕を振り上げて突撃していった

「とにかく、今日はありがとう。あいつ等がお世話になったね」  
「こっちこそ、なかなか充実した時間だった」

そして二人は握手し

「また会えるか？」  
「めぐりあわせがあればね」  
「ならそれを願ってみるさ」

そして別れた

グレイの心の重みは少しだけ軽くなっていた



……空間の狭間

二人からグレイと分かれた時の明るさは完全になりを潜め、ソニアからは哀愁が、刻からはうすら寒い気配が流れ出ていた

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

黙って先程いた世界の方を見る、そしてぼそりとソニアが呟くと

「気付いたか？」

いつの間にか彼等の背後には一人の青年が、当たり前前に、まるでしばらく前からそこにいたかのように存在していた

「あ、あなたh」

「何の用だ？」

急いで振り返り何かを言おうとするソニア、だが刻はそれを制し、その男に質問する

「はっ、言わなくても分かっているだろうが。で、どうするんだ？」  
「……………」

それに対し尊大な口ぶりでその男は質問で返す  
刻は相手を半眼でしばし見つめ

「べつに……………どうもしないさ。これはあいつの人生、あいつの物語だ」

「へえ？」

男はその言葉を面白そうに聞く

「お前が何をしようが、俺は行動を起こすことはないよ。身に余ってしまっ。」

「ふむ……………」

「それに残念だけど、今の俺じゃあ」  
『であるお前に勝つ』  
とは出来ない。どうあがいたって無理だ。」

「なるほど。うんうん、身の程が分かっているやつは嫌いじゃないぜ。いいよ。見逃してやる。行くといい。」

それに満足そうにならず、男性は道を譲るような格好をする

「感謝しておくよ」

刻はソニアを連れその男の横を通り抜ける

そしてふと立ち止まり、背を向けたまま声を出す

「……………でも、これだけは言わせてもらおう。」

うん？とその男はそちらへ向き

刻は頭だけ後ろへ向け

「……………あいつに噛みつかれないようせいせい気を付けることだね。」

そう言い残し消えた

### EX-03 記録にない物語（後書き）

魔法少女リリカルなのは ～とある兄妹の転生物語～

作者：リイーン

ある日、交通事故で死んでしまった二人の兄妹。死後の世界（？）で神様に出会い、チート能力をもらってリリなの世界に転生！！ゲームが趣味（だが卒業した）の真人間な兄と、アニメゲームマンガオタクで変態で厨二病で腐女子の妹が織りなす、原作介入アンドブレイク物語である！！ 注意 この小説には、“オリ主”“転生”“チート”“原作介入”“原作ブレイク”“残酷描写”。そして“百合描写”と“性転換”が含まれております。

現在ダーク街道を突っ走っています  
グレイ達に救があることを切に願う

レオン「ボーウエルの朝は早い

AM 06:30

「お父さん、朝ですよ〜」

ズドン!!

「グアア!?!」

腹に衝撃を受け意識が一気に覚醒し、ベットから飛び上がるように起き自分にダイブして来たものをつかみ上げる

「えへへへ・・・お父さん、おはよう!」

掴み上げられた少女、リザ「ボーウエルは顔をほころばせてあいさつする

ああ、何時見てもこの笑顔はかわいい、親馬鹿と言われようがこ

れだけは譲ることができない

しかし、この笑顔に是非浸っていたいところだがその前に確認しておかないといけないことが一つ

「リザ……………この起こし方は誰に教えてもらった？」

「ん？ アルシエさんとグロウリ さんだけど？」

あの人達は……………

軽い頭痛に額を揉む

「頼むからこんどからこういったのはやめてくれ。朝一番のフェニックス・スプラッシュはかなりきついんだ」

「私が起こすのは駄目だった？」

リザがウルウルと目を潤ませる

何だこの罪悪感は！？

私か？ お父さんが悪いのか！？

いや違う、私はなにも間違ったことは行っていない筈だ

あの起こし方では下手をすれば目覚めるどころかそのまま永久の眠りについてしまう

そうだ、私は間違っていない……………そうだよなあ！？

頼むから誰かそうだと言ってくれえ！！

必死に頭を振り混乱を振り払う

「駄目じゃあないんだよ？ただお父さんとしては前みたいにもう少し大人しい起こし方をしてほしいんだ。普通にゆすって起こしてく



AM 9:00

………複合企業『ビハインド』（名目上）本部、社長室

「社長、ラルゴ・キール様がお見えになっています。」

「通してくれ」

「はい」

椅子に座り書類に目を通してレオンに通信が入りそれを許可する

書類を揃え机に置いていると正面のドアからノックが聞こえ、レオンはラルゴを迎え入れる

「失礼するよ」

「どうぞ、遠路はるばるようこそいらっしやいました」

「なに、わしはただへりの座席に乗っていればいいだけだ。大した苦勞はしておらん」

レオンに促されラルゴはソファアに座る

「コピーで？」



「ああ、頼む」

「砂糖は？」

「いや、ブラックでいい」

「うむ、やはり君の入れてくれたコーヒーは素晴らしいな」

「それはもう、私の妻ですから」

「ふふ、総師が仕入れてくれた豆がいいだけですよ  
気に入ってくれて幸いです」

コーヒーに舌鼓を打つラルゴとそれをじまんするレオンに、それを入れたレオンの秘書であり妻であるマリアは朗らかに返し

その味をしばし楽しんだラルゴはカップを置き口を開く

「それにしても凄まじい開発速度だな、たった四ヶ月でもう本部を  
移転できるようになったとは」

「もともとこれは総師が考えていたプランの一つだったので概案自  
体は二・三年ほど前からありましたし、この『街』を作るノウハウ  
は『本部』でかなり培っていましたので」

ミッドチルダの首都クラナガンからしばし離れた場所にある都市  
『ポルタ』、今回此処にクラナガンにあったビハインドの『表』の  
本部が移転して来たのだが、此処は元々廃村寸前のような寂れた場  
所で間違っても大企業の本社がやってくるような立地ではなかった

だがビハインドは本社を此処に建設した。

いや、厳密に言うと此処ら一体の土地を買い占め、ビハインドの

『表』を担う最重要の施設を……いや、それどころか街一つを現在進行形で作っているのだ

彼等の持つ技術の一端を見せてもらっているラルゴとしても、五月ほど前にこの計画を提出された時点では眉唾もの話ではあったが

事実着工から四月と少しで寮などを含めたかなりの施設は完成し、来月には開通予定のクラナガンとをつなぐリニアの建設も終わっており、クラナガンにあった本部のほとんどの業務を何時でもこちらに移せるようになっていた。

いや、実際の所こちらに移すつもりだったものは全て移し終わっており、すでに元本部は支部と名を変え業務を行っている

そう、元本部は業務をほぼ変わらずに続けているのだ

ではいったいこの本部は、いや、この『街』はなんのために作られているのか

それは

「これからが大変になるな。 バランスを取らないと」

「ええ、気付かれない程度に」

刻の目的とラルゴ達の提案、与える影響を予測し、世間への衝撃

を減らさないようにしつつそれによる混乱を緩和するためにとれるだけの措置を出来るだけ考え、その中で出て来たこの措置

パイプとクッションとデコイとして建設されたこの街

此処は未だ具体的には決まっていけないものの、計算の結果約十年後に迎えられるだろう約束の日のため

そしてそれを迎え、それを乗り切るための布石

「ふう、しかしもうすぐあの日が来るのか。」

「ええ、こちらの行動の大凡が決まる日は近いです。ですが……」

再びカップに口を付け

「できれば、ああならないことを祈りますよ。」

「なんだかんだで総師は未だに12歳、できれば味わってほしくはないですから」

「そうだな、刻君も本当なら感情に任せて遊び回りたい年頃だっただろうに。あんな目に会ったと言うのに、管理局自体への恨みは抱かないようにしている……… やや眉唾ものな説明だったといえその事実は変わらないな」

「いえ、総師はなんだかんだではっちゃけているので、意外とリフ

レッシュはしていると思いますよ？

メリハリはきちんと付けていますので、そう言った心労は意外とないと思います」

「そうか……………」

ラルゴは再びコップを口へ運ぶ

コーヒーの味は心なしか先程より苦く感じた

P M 0 4 : 4 0

ラルゴとの話が終わり、更に社内会議や他企業との会談などの業務を終えたレオンは専用の転送装置を使いリベル「アー」クに来、そろそろポルタへの移住組の選抜を行わないといけないなと空中庭園の淵から街を見下ろしつつ考えていると

オオオオオオオオオオオオ

「ん？」

ウオオオオン

「や、お疲れ様」

ボードに乗った刻が飛んで来た

「それ、完成したんですか？」

「いや、これはまだプロトタイプだな。ベースはこれで決定として、これからスピードとか旋回力とか、耐久力とか静音性とかを色々突き詰めていかない」と

ボードから降りた刻に尋ね、それに刻はポンポンと手に持った飛行デバイスの一つとして開発していたものの一つHFBシリーズ、通称ホバーボード を叩く  
しかし、元々これは

「しかしそれ、地面の十数センチ上で浮くだけの……キックボードの派生として開発していたはずですよね？」

「ウェンディのやつが武器として使えるようにならないかって言うて来てね。」

「……………ですが彼女のISは確か『エアリアルレイヴ』ではありま

せんでしたか？ 飛行機能は不要だと思えますが。」

「だからって全部をそれで行わせる必要はないだろ。魔力は無限じゃないんだし、これはそれを補助させることもできる。第一そんなことを言っていたら魔導師を補助をするために開発してきたデバイスの存在意義がなくなるよ。」

「……………言われてみたらそうでしたね。」

「まだ此処もレアスキルについては認識が甘いよね。これも能力の一つだとして扱えない……………いや、『レア』スキルと言っている時点で俺も大概か……………」

「まあ、長い間不可侵の領域でしたからね。浸透まではもう少しかかりそうです。」

「焦っても仕方ないか。」

そう呟き、刻はボードを浮かべその上に乗る

「……………ま、気長に待つしかないよね。こればかりに拘ってても仕方ないし、やらなきゃいけない思想改革もまだまだあるしな。」

「ええ。質量兵器に戦闘機人、魔導兵器に魔法自体の認識……課題はたくさんあります。……………あ、そう言えばラルゴ提督と会って来ました。あの四人には助かっているって感謝されましたよ。」

「そりゃ何よりだ、こっちの仕事を疎かにする分しっかりとやって

もらわないとね。」

「ですが本当に大丈夫なんですか？ 体制を変え、更に常時では無いとは言え四人も抜けるんですよ？」

ふと心配そう中をレオンはする

「逆だよ、変えたから4人も抜いても大丈夫になったんだ。それにだからこそ俺達は『箱舟』を作っているんだよ、それにもう7割方完成した。」

「『箱舟』ですか……………また大層なものを作りましたね」

「まあ、『船』には程遠いんだけどね」

二人はそれぞれ苦笑いをし、しばし空白の時が流れる

「変わっていくんですね……………今はいささか急激すぎる気はしますが」

「どちらかと言えば変わらなければいけない時が来た……………が正解かな？これが転換期ってやつなんだと思うよ。」

065 デジタルよりアナログの方が情報量多いって言うけど、効率面ではデジ

銀魂的サブタイつけて見ました。



『こちらの用意は終わりました。』

次に来たときに実行して下さい。』

「うん、了解」

とある部屋の中、空中に展開されたモニターを通して話す人影があった

「普通に痛みつけても良いんだよな？」

『大丈夫です。 彼等は下手に豊富な才能があつたせいで気位は高すぎ、そのせいで中々周りの言うことをききませんでした。』

ですが、その才能のため上司達は彼らを無下にすることは出来ずに来てしまいました。』

「ま、其処じゃあよくある話だね。」

一般的な戦闘方法だって魔力とレアスキルによる力押しがほとんどだし。」

『ええ。 ネフィリムのおかげで魔力資質の絶対性は低くなりましたが、彼女らが入ったせいで想像以上に効果が表れませんでした。』

「あゝなるほど、確かにあいつ等の才能は群を抜いてるもんな……」

…しかも全員空戦型だから行先はほぼ確実に空か海だし……。

陸を毛嫌いしていて、ネフィリムを認めない奴等にとっちゃ絶好の対象だあな。

なにより攻撃は派手で花があるし。

「……………あいつらには効率を重要視させてるからどうしても地味になるしな……………」

『その方がいいんですけどね。』

と言うより、此処の方々は目先の派手さを重要視しています。

“幻術”を所詮は幻と、とんでもなく軽視していますし。』

「攻撃は魔力ダメ ジでが常識だしな。

なまじ、魔法を『エネルギー』としてしか見ないし、使っていない  
弊害か……………」

まあ、そのお陰でこっちはやりやすいんだからいいじゃないか。」

『まあ、『魔法』を教える必要なんてありませんしね。』

……………それにしても、ひどく疲れた顔をしていますね？  
何かあったんですか？』

モニターの中の人物が話題を変え

それに相対する少年は苦笑いを浮かべた

「いや……………新たに発見した研究所を潰してきたんだけどね、そこにプロジェクトFの『復活』の方で作られた奴がたくさんいるんだ。殆んど全員『継承失敗』で処分されていたけど。」

『……………』

「で、ちょっと思った訳さ。『同一人物』ってなんなのかなって」

『僕の記憶が正しければ、貴方は確か死者蘇生を行ったことがあるはずですが？』

「間違つてないよ。けどさ、俺達は魂を『知ってる』『し』『判る』から迷いようが無いんだけど、そうでない奴等にとってはどうなのかなって」

モニターの中の人物は黙って続きを促す

「『判る』俺らは『魂』で相手を判別する。

だけどそうでない奴等は？

記憶喪失や整形をしてもそれを知ってるやつは別人とは扱わないだろうけど、知らない奴等にとつたらそれはもう別人。

実際過去に顔と履歴を変えて別人として一生を終えたやつがいた。そして少なくとも周りはそいつを別人として扱っていた。

目に見える結果を欲する奴等は何をもって本人だと判断するのか………間違い無く『魂』じゃあないよね。」

『そうですね　　一つ話をしましょうか』

モニターの中の人物はしばし黙った後、再び口を開いた

『とある世界、とある研究者の最愛の娘が不幸な事故で死んでしまいました。』

彼の妻は娘を生んでからそう年月が経たない内に死んでしまい、その娘は彼の心の最後のよりどころでした。

なので、娘を失った時の彼の悲しみは計り知れないものでした。』

『彼はなんとしてでも娘を取り戻そう、生き返らせようと思いました。幸か不幸か、その世界には錬金術と言う技術が存在しました。

『等価交換』、必要なものさえ揃えれば何でも作ることが理論上可能だと言う技術です。

…………… そう、理論通りなら…………… 人さえも。』

『彼は必死になって知識を貪り、研究を行いました。娘との生活をもう一度。

ささやかなその願い、そのために彼は一心不乱になった行動しました。

その気迫の迫りよう、それは正に修羅の様でした。』

『そして、ある日、彼は膨大な年月をかけた研究の集大成を行いました。

そう、彼の娘の錬成です。』

『構成の緻密な設計図も書き上げました。

肉体に必要な物質も全て揃えました。

思いつくだけの彼女の情報も用意しました。』

『そして錬成の結果、其処には一人の少女が倒れていました。

その姿はまごうこと無き彼の娘と同じものでした。

彼は歓喜してそれを抱き起こしに行きました。

…………… しかし、』

『抱き起こしたその少女は何の反応も返しませんでした。人形のようにでした。

名前を呼んでも、手を握っても、ゆすっても、身動き一つ、わずかに表情を動かすこともありませんでした。

その肉体に、魂が宿ってはいなかったのです。』

『その少女は異様な様でした。体は温かいのです。』

呼吸をしているのです。

心臓が動いているのです。

なのに、一切の意識が無かったのです。』

『その錬成を見届けていた人物はその結果にひどく気を落としました。』

しかし、そのすぐ後に彼は戦慄しました。

その父親がこう言ったのです

『 だよ。 やったぞ。 やり遂げた。 は生き返ったんだ。』

ほら、 x x にあいさつをしなさい。 どうしたんだ黙って

? 恥ずかしがることはないんだよ』と。』

『父親は、もうこれ以上自分の技術を発展させることは出来ないと限界を感じていたのかもしれない。』

何処かで、自分のやっていることは到底実現不可能のことだと理解してしまっていたのかもしれない。

所詮かなわない夢だと悟ってしまっていたのかもしれない。

でも、それを認めてしまうと、自分を保っていることは出来ないと言っことも。』

彼はその少女を『娘』と判断したのです。』

『そのしばらく後、彼は死にました。』

そのそばには、相変わらず一切の生気が無い『娘』がいました。そして彼の死に顔は、とても満足そうなものだったそうです。』

モニターの中の人物は言葉を区切り、相手を見る。  
少年はなにも言おうとはしなかった。

『僕達にとって、その子は決して彼の『娘』ではありません、それ以前に動物ですらありません。』

なぜなら、その肉体に『魂』が宿っていませんでしたから。

それどころか、普通の人でも、本当に彼女は《生きている人》なのか疑問に思ってしまうでしょう。

ですが、彼にとって、彼女はまごうこと無き『娘』そのものでした。』

『恐らく、これが全てを物語っているとと思います。』

とはいっても、僕自身もまだ『理解』出来ているとは思えないんですけどね。』

そう締めくくり、通信が終わった

そして、モニターが切れ、静けさが満ちた部屋の中。

「お前に理解出来ないのなら、俺には到底無理な話なんだろうな。」

とある少年の呟きがむなしく響き渡ったのだった

066 その日『前編』

管理局の訓練施設の中に対峙する二つの影があった

二つと言っても片方は二人、もう片方はたった一人だったが

「ではこれより、仁神刻 対 海、第十五番隊の模擬戦闘を開始します」

「はあ……」

アナウンスの声にその一人の人物、刻はため息をつき、此方を口汚くののしってくる相手に対し局からレンタルした槍型のデバイスを構えた



「刻、大丈夫かな？」

観測室から中の様子をモニターで眺めるフェイトは、心配そうにつぶやく

二年ほど前に大けがを負ったのはを見舞いに来て以来、刻はたまに彼女らと一緒に管理局本部に来るようになっていた

だがその際、基本的に彼がしていたのは訓練施設で行われる模擬戦を眺めたり、シグナム・ザフィーラと軽く組手をするぐらいで、模擬戦に参加しようとは全くしなかった

とは言っても、それを周りの管理局員は何の疑問にも思わなかった

なぜなら管理局に登録されている彼の情報、彼の魔導師レベル……いや、魔力素質はEギリギリ、全員Aクラスを超えているのは達の模擬戦になど参加できるわけ無いと考えていたからだ

魔力操作によって出力を管理していることを知っているフェイト達はそれに疑問をはさんだが

「目立つのは嫌いだ」

と刻はそれを一蹴

そう言うわけで彼は今まで模擬戦に参加はせず、魔法を使わない訓練の参加ぐらいしかしていなかった

だが、分かる者には分かる

組手の際、刻は真剣にやっておらず、それなのに組手相手の魔導師と普通にやり合っていると

そして今日、訓練の組手に例のごとく参加していた刻の動きを見て、興味をもった人物がいた

陸の第三小队隊長、ゼストゥグライアンツ

彼はそれを指摘、すると刻はそれをあっさり肯定した

となれば怒るのはその組手の相手になっていた魔導師

なにせ彼は正式な管理局員でないどころかたまに訓練に参加する程度で、しかも魔導素質は底辺と言っているE。

戦闘班に所属する者としてそんな奴よりも下として扱われるのには我慢ならない

その後、紆余曲折………と言うほどのことでもなかったが、いつの

間にかその局員が所属する隊と刻が戦うことになっていた

「まあ確かにつこうとするのは訓練用の簡易デバイスやけど、刻兄なら問題ないやろ？ 無くてもいろんな魔法使えるんやし」

はやてはそう囁くがフェイトはそれに首を振る

「ううん、刻はそんなことはしないって」

「……………は？」

つまりあいつはEクラスの魔導師として戦うってことか？  
無理だろ」

ヴィータはあきれた声を出す

刻は素でもかなりの実力をもっているのは知っているが、それでも不可能だと

「元々勝つつもりはないのではないか？

未だ刻は管理局に入るか決めかねているようだし、そんな中で本来の実力を出して目を付けられたくはないのだろう。

あいつの魔力なら間違いなく管理局のトップを狙えるからな」

『ああ……………』

ザフィーラの説明に一同は納得する

刻が目立つのを嫌っていることは普段の行動からも明らかだった

小学校のクラスでも、餓鬼大将の様な地位にいるとは聞いていたが、だからと言ってそれ以上のうわさが流れてくるわけでもなかった

その地位も自然とそうなったようで、特にこれと言ったことをした訳ではないらしい

理由が無い限り、派手な行動はとって来なかったのだ

「…………でも、それだと刻、一方的に攻撃されて大怪我しちゃわな  
いかな…」

だが、今の刻の状況は完全に悪目立ちし、相手の怒りを買いまくっている

このままだと、クリーンには終わりそうにはなく

打算的に動く事が多々あるのだから、今回もまさか喧嘩を売って置いて一方的に殴られる訳が無いだろう

刻はどうするつもりなのかとフェイトは心配になっていた

一方で刻と数度手合わせをしていたシグナムとザフィーラは  
まあ、飛行魔法はさすがに使うだろうから、苦戦はするだろうが勝てるだろうと考えていた

『開始!!』

アナウンスと共にベルカ式の数名が刻に向かって駆けだし、隊の大半が一斉に魔法弾を放った

ドン

刻も地を蹴り、一気に加速し駆ける

放たれた魔力弾は、放った人数が多すぎた上、対象は素早く動く子供一人

大半は魔力弾同士ぶつかり合い自滅し、残りもろくな制御ができずあっさり刻にかわされてしまう

そして

バキ

『ぎゃああああ』

室内に乾いた音と、絶叫が響き渡った

叫び声をあげた人物は地面をのたうちまわる。

彼は、刻のデバイスによる一撃、

魔法もなにも使っていないただ槍型デバイスでの、純粋な『振り抜く』と言うただの単調な動作により腕をへし折られたのだった

『ブガア』

『ゴア』

『グゲエ……………』

そして又一人・一人と崩れ落ちる

腹に拳を埋め込まれ、顔面を回しげりされ、脛をデバイスで殴打され

思わず自分のデバイスを手放し情けなく悶絶する

そしてそのすぐ後容赦ない一撃をくらい気絶した

「貴様……………!!」

「やっちまえ!!」

それに憤慨し、飛んでいる者たちは魔力弾や砲撃魔法を放ち、近接型のやつらはただ突っ込んでくる

其処に統制や、作戦やなどまったくなかつた

彼等は無駄に此処の魔力素質が高い者が多く、個人戦ばかりやって  
いたため、連携なんてものはほとんど存在しなかつた

その結果、彼等の攻撃は全てが裏目に出る

ずがががが

刻は向かって来た者たちを盾にする

攻撃魔法はことごとく彼等に当たつた

彼等は相手はEランクの魔導師だからと馬鹿にし、  
魔法の攻撃など来ないとたかをくくっていた

確かに刻は魔法など一切使わなかつた

しかしだからと言って攻撃方法が無い訳ではない  
何のための槍型デバイスか

魔力で強化しなくてもそのまま殴ればいいではないか

それに何のためのチームなのか  
お互いを助け合うためのチームだろう  
彼等は何一つそれを実施していなかった  
数の暴力という言葉があるが、彼等はそれさえも全く体现出来てい  
なかった

そのつけがこれだ

来ないとたかを括っていた魔法攻撃を、味方かた雨あられとかぶせ  
られ、ろくな魔法障壁を張っていなかった彼等は、認知外からの攻  
撃にダイレクトにダメージをくらってしまった

刻に盾にされた戦闘員達がヤムチャよろしく煙を上げながら崩れ落  
ちた

これによって開始から一分と少しで近距離戦闘員は全員がダウン

そして、空中にいた遠距離魔導師もすぐその後を追うことになる

「ふん、やったか」



浮かんでいた魔導師の一人がつぶやく  
その向こうには雨あられと降り注がせた魔法弾と砲撃魔法の着弾に  
より煙で覆われていた

其処に向かっていた近距離戦闘員のことなんて別にどうとも考えて  
いなかった  
どうせ如何にかしているだろうと、  
障壁で防いでいるだろうと

相手のことを馬鹿にして、普段の時のように障壁を張ることさえめ  
んどくさがっていたとは思うまい、  
『ま、空中に浮かんで攻撃するから防御系は要らないな』  
と無意識に考えていた自分達と同じ状況に近接戦闘員もなっていた  
などとは思わなかった

そしてそんな彼等は

ヒュン

「ブガア」

何かが高速で飛んでき、一番後方に浮かんでいた人物が悶絶し、思  
わず杖を落とし、自分の魔法の制御を失い落ちて行った

思わず全員がそちらへ向き、数名が助けるべく飛んでいき、残りが  
ただそれを眺めて

…… いたら

ヒュヒヤヒュビュブオオン

「グエ」

「グア」

「ゴア」

「ブギヤア」

「な、なん……… え？」

(ゴン!) ガア、・・・うわあああああ!？」

残りの全員に雨あられと何かが飛んで来た

そしてそのうちの数名がなんだとそれが飛んで来た方を見ると

彼等の眼前に、仲間が付けていた、バツチやら、小道具やら、はては起動状態のデバイス、更にはその仲間さえまでが迫って来ていた

全員モロに食らってしまい落ちていく

そして落ちた局員の数名はその衝撃で気絶し、なんとか気絶しなかった者も

「な………ななが「ドスン」グエエエ……… き………きさま………」

腹に衝撃を受ける、そのにあったものはデバイスらしきものの柄

彼が崩れ落ちる前に見たのは、その柄を握りしめ、此方を見ていた少年の、うすら寒い、なにも感じ取れない目だった

こうして戦闘開始から三分足らずで、総勢一二名から成る一部隊の戦闘員は壊滅したのだった

067 その日『後篇』(前書き)

お久しぶりです

「うぁ……………」

「ちょ……………ひどい……………」

「やりすぎだろ……………」

隣でうめき声や対戦相手を非難する声を上げる少年少女、そして現役の本局の武装局員の声を聞きつつ、地上本部の武装隊の一つの隊長であるゼストは戦っている少年を感心して見ていた

彼の動きはかなり洗練されている

まるで機械のように淡々と相手を倒していくその姿には嫌悪感を持ってしまうものの

あの戦闘技術は素直に感嘆できる

魔力を計測するモニターを見ると、彼からは一切の魔法が発動されていない

つまり純粹に、己の、肉体の、技能を持ってあの状況を起こしているのだ

目の前では、刻の投げた数多の物体にやられ落ちていく武装局員達

恐らくこれで終わりだろう

ゼストはステージへ続く階段へ向かった

「はあ………」

入口の辺りから担架と共にやってくるざわめきを耳に入れつつ  
刻は目の前に崩れ落ち、意識を失っている空戦魔導師を見ながら  
ため息を吐く

前情報から才能にかまけてろくな訓練をしていなかったとは聞いていたが、此処までひどいものだったとは思わなかった

空戦の砲撃部隊はまあ、移動砲台としてやっていくつもりなら、許せる………とは思うものの、実際は数名ほど普通に近付いてくるし、攻撃を放つ位置だってあんまり離れていなかった  
ジャンプで届かない所にいれればいいやとは思っていなかったとしか思えない

遠距離型の最大の利点は相手から離れていることだろうに、その利点を自分から潰してどうする………まあ、ゼロ距離からの銃撃を

しまくる奴を刻は知ってはいるのだが、こいつ等はあいつとは戦闘の型が全く違う

近距離型はもつとひどい、全然なつて無い。

自分のことしか考えていないため、全員がお互いの足を引っ張り合っている。しかもその近距離戦闘の練度自体がだめだめとか……

素直に全員遠距離型やれよ、そうすりゃ自滅はしなかっただろうにと思う

そんな事を考えながら刻は額に手をやり、もう一度大きなため息をつく

「きさま、何をしたか分かってるのか」

そんな刻に怒声がかかる

そちらを半目で見ると怒る局員Aがいた

「何って……………模擬戦だろ？」

「相手に大けがを負わせて何が模擬戦だ！！ 重傷のやつもいるぞ

！！」

「何が重傷だ、全然だろ」

「何処がだ！！ 骨が折れている奴もいるんだぞ！！」

「その程度で重傷か…………」

「なぜ魔法を使わなかった、何のための魔法だ!!!」

「すみませんねえ、なにせこっちは魔力素質カラクシのEなんで魔法なんか使ったらすぐ燃料切れになるんですよ。

それに、魔法を使ってるのにこんなあっさりやられるとは思わなかったんで。

まさか障壁すらろくにはっていないなんて………貴方、よくこれで戦闘職やってくれましたね」

もう、真面目に受け答えするのも面倒になり、辛辣な言葉をかける

「何だと!! 我々を馬鹿にするとは、なんて餓鬼だ」

「戦闘職なのに餓鬼に戦闘を駄目出し馬鹿にされるなんて大人だー(棒)」

「き、きさま!!」

「殺る? 良いよ? ベつに俺は」

怒る局員に、得物を構えようともしせずにへらへらと笑う

その姿が余計に局員を怒らせる

「き………貴様………」

局員は思わず刻に突っかかるうとするが

「まあ、落ち着け。」



其処にかかる声

歩いてくる一人の男性、先程此処に降りて来たゼストだった

「……………だれ？」

「ゼスト」グランガイツ、地上本部の一部隊を任されている」

「ふうん……………」

興味無さ気にゼストを見据える、

それにややカチンとくるが、言葉を続ける

「先程の戦い、まあ、泥臭い所もあつたが先方としては見事なものだつた」

周囲の局員が文句を垂れるがそれを無視して続ける

「確実に勝てる方法を模索し、圧倒的な戦力差を覆した。

ただ魔力にかまけている中では異質で、此処ではめつたに取られない戦法であり、そして素晴らしいことだ……………とはいえ」

ゼストは纏う雰囲気を変え、己のデバイスを起動する

彼の手の中に現れたのは、彼専用のものなのだろう、刻の物よりも二回りほど大きく、無駄な装飾をそぎ落としたような槍だった

「このような一方的な結果で我々を評価されるのは不愉快なのでなどうか、俺と一戦してくれないか？」

そう言いながら、ゼストからは有無を言わさないような圧力が漏れ出る

すでにやる気満々なようだ

そして刻は

「ふうん……ま、良いよべつに」

構えを取った

うかべるのは笑顔、しかしはた目には何故かそれがうすら寒く感じる

二人の周りにはいつの間にか誰もいなくなっていた

「そう言えば、お前の名前をまだ聞いていなかったな」

「仁神刻」

「そうか、では仁神君………始めるとしようか」  
「いつでも」

しばしの静寂、次の瞬間猛撃の攻防が始まる

お互い地上の近接型

『本業の仲間』の皆に鍛えられた刻と『陸のエース』として名の通

ったゼスト

二人の戦いは図らずも同じ答えに行きついた者の戦いだっ

即ち、『魔法も手段の一つでしかない』

激しく動く近接戦闘で詠唱のいる魔法なんかやっていられるか

一か所に留まっていることが困難な接近戦でそう易々溜めのいる砲撃魔法の用意なんてできるか

至近距離で戦う肉體戦で弾幕・狙撃攻撃ばかりなんて器用なまねできるか

至極当然の結論、近接を制するのは近接型の戦闘だ。

それは無駄を省き、最小の動きで、最大の効果をもたらす戦闘方法だ。

「ほう、なかなか……」

「この程度？」

「まさか!!」

この場合最適な魔法の使い方は、単なる肉體補助と瞬間発動可能な簡易魔法

それ以外で物を言うのは、単純な接近戦での実力のみ!!

二人の戦いを見ていた者達の殆んどは啞然となる  
自分達が理解できない場所の戦闘だ

だが、それは長く続かなかった

ギヤイン

その時、刻の持っていたデバイスが槍の付け根の部分でへし折れた

刻の得物は起動しただけで、ろくな魔力を伝わしておらず、文字  
道理デバイスの耐久力しかなかった

いや、ギミックが詰め込まれたりしていた分、普通の鉄槍よりも  
耐久力が無かったのだ

そんなものをこんなに激しく強化もせずに使っていたらすぐにこ  
うなるのは当たり前であり

むしろいままで壊れなかつたのが凄い

だが、これで勝負が決まった

中途半端ではあるが、得物が使用不可になった以上、これ以上の  
戦闘は無意味だろう

誰もがそう思った

……だが、

ゾクッ

仁神の目を見た瞬間、ゼストは全身に悪寒が走る  
その目は今までの退屈そうな目とも感情の感じれない目とも違い

ザク

ブシャア……………

ゼクトの肩から血が噴き出す

一瞬の硬直、その隙に刻はその壊れた破片を、肩につきたてたのだ

「ツク」

手加減も何もなく、刻を思いつきり殴りとばす

それが顔面にもろに入り、いやな音が響き、刻は吹き飛び地を転がる

やった瞬間、しまったと後悔するゼスト

だが

「クケカハハハ……」

笑い声が響く

眼を見開いたゼストの前でネックスプリングにより起き上がり、  
声の無い笑い声を漏らすユアン

顔が引きつる

刻の顔は腫れあがっていた、口の中も切ったらしく血を流していた  
だが、笑っていた、

タノシソウニ

瞬間ゼストは思わず刻から距離を取る

先程までとは一線をかした重苦しい空気になる

ゼストは混乱する、

………なんだ、何をした？

魔法？ いや、ちがう。 そんな反応では無い  
だとしたらなんだ？

先程までの雰囲気とは、明らかに違う

見たことも聞いたこともない、現象を起こした刻にゼストは警戒

を強め

そしてはたと気がつく

………威圧か？　これが？

こんなに恐ろしいものが？

「さア、て、第二ラウンドと行こうかアア？」

刻はゼストに向けて凶悪な笑みを浮かべる

体を沈め地を蹴る

今までにないほどの加速とスピード

その手には棒きれほどの砕けたデバイスの一部、但し、先ほどの一件からゼストにはそれが自分を殺しうる凶器以外の何物にも見えなかった

「ツク！！」

カウンターをくらわせようとゼストも駆け、得物を振りかぶる

そして

「はい、ストップ」

その瞬間訓練室に第三者の声が介入する

いつの間にか二人の間に現れてにいたのは一人の青年  
彼は刻とゼストの獲物をそれぞれ片手で掴み止めていた

二人はそのまま押し切ろうとしていたが、得物が然とも動きそ  
うにないことを悟ると  
それぞれそれを引っ込める

「二人とも熱くなりすぎだ、」

いさめる男性、ゼクトは身を引こうとする

だが、刻は未だに戦闘状態を解除しておらず、ノーモーションで  
その身に力を巡らせ

「子供とはいえ、

下手な行動をするなら容赦なくその首を掻っ切るわよ」

その喉元に、ナイフを突き付けられる

それを辿ると一人の女性



「……………」  
そして刻は暗い目で突き付けられた獲物を見

「……………」

戦闘を解除した

「まったく、若いうちの喧嘩は買ってでもやれとは言いますが限度  
つてもものがあるだろうが……………」  
「そう言うお前も、まだまだ若いじゃろつが……………」  
「ありがとうございます」

眩かれる声に、後ろを見るのは達

そこには三人のご老人と、それに従う一人の青年

「あ、ジツチャン達にバツチャン」

ぼそりと呟いたヴィータに向く非難の視線

だが、それもすぐに元に戻る

「あ、あの、一体どのような御用件で」

「なに、生きの良い小僧が来ていると聞いてな。

話のタネにでもと思って見に来たのだが……………」

敬礼を取る局員達に、軽く手をふり、楽にさせる三提督の一人キール

「アルシエ、アステイー、さっさとその馬鹿二人を連れて来い」

そんな中、スタジアムに青年の声が響き渡った

067 その日『後篇』（後書き）

黒「久しぶりの談話会」

刻「ほんと久しぶりだな。で、何でこのタイミング？」

黒「いや、もう後数話で閑話編も終わるからね、何となく」

刻「ふーん」

ソニア「そう言えば、あの三人って」

黒「ま、御想像の通りだと思うよ？」

検討した結果、あの三人プラス一人がSTSで準レギュラー入りする予定」

刻「へ〜。どんなふうに関わって行くんだらうな？」

黒「ま、それはお楽しみってやつだね」

ソニア「それもそっか」

刻「ま、何時になったら完結まで行くか分からねえがな。ちゃんと終わらせるよ？」

黒「頑張ります」

刻「ったく」

刻「ま、アイツ等もそうだけど俺もSTSでどんなふうになるのか  
今から」

黒「あ、お前はSTSでレギュラー落ちだから」  
刻「なん・・・だと・・・」

黒「名前ぐらいだったら、たま~~~~~に出ると思うけど、  
本人登場は~~~~~うん、出るまでどれくらいかかる事やら」

刻「おい！！俺主人公だろ！？」

黒「主人公は必ずレギュラー扱いされると何時から錯覚していた？」

ソニア「……………ドンマイ」

夜

「~~~~~」

とあるマンションの一室、そこに響くはキーをたたく音と歌声。

「~~~~~!つと」

キーを打ち終わり、画面内ではし文字が流れた後、コンピューターの電源は切れた。

「終わったの？」

その背にかかる声。

振り向くと徐々に外装骨格<sup>アウトフレーム</sup>、つまり中高生ぐらいの身長になった

ソニア。

彼女の後ろで不自然な形で開いていたクローゼットの扉が閉まる。

「ああ。そっちは」

「確認は終わった。万が一ばれても損失は無視できるわ」

「それは上々。そしてこっちも」

とある物を取り出し、最終確認をする。

「用意終了だ。それじゃ、お茶にでもするか？」  
「勿論！！」

キッチンへお茶の準備をしに行く刻。

そして二つのカップと紅茶がなみなみと入ったポットを盆に載せ戻ると、ソニアはテーブルの上にシュークリームを積み重ねた皿を乗せて待っていた。

「じゃーん。翠屋で奮発して買って来ました」

「奮発って言っても、それ俺の金だろうが」

「いまさら別にいいでしょ。それに………これで当分食べ納めなんだから」

急にしょぼんとするソニア。

刻はあえて慰めることはせず「そうだな」と呟き椅子に座り。

「それじゃ、食べますか」

二人でそれを食べ始めた。

サクツとしたシューを噛むととろとろのクリームが溢れてくる。

シューの香ばしさとクリームの優しい甘さ、そして紅茶のハーモニーを静かに楽しむ二人。

そして幾ばくかの時が過ぎ、ポットに並々と入っていた紅茶は殆んど無くなり、皿の上のシュークリームも残り数個となっていた。  
そしてそんな時。

「来たね」

「ああ」

何かに反応し、咳いたのだった。

「それじゃ、始めますか」

そして彩佳はまず、ソニアの分のカップを消した。

.....  
.....  
.....

そして、その十数分後

「何、あんた達」

そこには6名を除き誰もいなかった。

とある路上、結界により隔離された世界。

先程と何もかもが同じ、ただ人が消えた世界。

「貴様がそれを知る必要はない」

「貴様はおとなく殺されればいいんだ」

いや、厳密に言えば消えたのは彼等側であり、それ以前に消えた  
という言葉すら正しくは無いのだが。

「いやいや、御冗談を。と一応返しておくよ。僕は芸人なんかじゃないんだからそんな難しい振りはやめてくれないかな？」

「何が振りだ!!」

「オイオイ熱くなるなよ。どうせ突然の状況に混乱して意思滅裂な  
思考になっちまったんだろ」

ともかくこの状況が普通では無いのは言つまでも無い。

「じゃあいいよ、自分で考えるから」

そしてそんな中の一人である刻は、あごに手を当て、考えるポ  
ズを取った。

さて、こんな状況にある俺の前にいるのは、何処かのイベントか  
ら抜け出して来たのかと思いたくなるような様相の者達。



簡単に言えば、此処地球の一般的感覚からすれば日常で見ること  
はまずないと言っていい部類の様装だ。

因みに、この付近でそんなイベントがあると云うのは見たことも  
聞いた事も無い。

つまりこんな服装の奴等が今いるのは普通に考えればおかしい。

まあ、こんな場所にいる時点で普通な訳がないのだが。それは置  
いておく。

単純明快。

直截簡明。

簡單明瞭。

それがコスプレでないのなら、答えはおのずと限られてくる。

先ずは普段からあんなイタイ格好をしている奴らだと言う可能性  
だが、少なくともこの町に、普段からあんなイタイ格好をしている  
奴は居ないと信じたい。

二つ目は突発的に無償にコスプレをして街を徘徊したくなり、そ  
んなみんなが集まって実行した可能性。

今はクリスマスを目の前に控えた時期、恋人のいないさびしい皆  
さまが寂しさに耐えかねて新たな扉に手をかけたとしてもむべなる  
かなだ。俺は生温かい視線と共に納得してあげる心積もりがある。

受け入れたくはないが。

まあ、とある理由があるし、どうやらそのたくいではなさそうな  
のでこれは除外。

となると残るのは普段からあんなイタイ恰好を真面目にしている、

なおかつそれをおかしいとも思わない奴等。即ち魔法使いで間違いないだろう。

「……………つてかんで、そんな結論に辿りついたんだけど、どうかな？」

当たり前だがそんな事を言われたらそんなイタイ恰好 具体的には、

五人ともまるで自分達はどっかの組織の一員です（実際に<sup>どっかの組織</sup>管理局の一員です）とでも言う風に服装を統一し。

その服装と言うのは、まるで魔法使いの様な（実際に魔法使いです）暗い藍色を基調とした改造ローブ又はコートの様な物で作った服で決めた感じで。

さらにその手には、メルヘンのかけらも感じないそれだけ魔法使いな格好してんならせめてアカザの杖とか、無駄に装飾に凝った神々しい杖とか、そうでなくてもシンプルなただの一本の棒のような杖とか、そう言った魔法使いっぽい杖ではなく、無駄にシンプルで無駄に機械っぽさ出して無駄に中央に魔法使いの杖にありそうな大きめの宝石付けた杖を装備している

を真面目にしていた魔法使い達は怒る。

そしてそんな彼等の王氏を事細かに説明すればなおさら。

「ふざけてんのか」

「良い根性してるな、餓鬼」

「よっぽど早死にしたいらしいな」

「殺されてえのか？」

「いや、俺達はいいつを殺しに来たんだろうが」

そんな事を口々に言う5名  
その中に聞き捨てならない言葉があった。

「なるほど俺を殺しに来たんですか、暗殺者（笑）の皆さん」  
「（笑）！？」

「ああ、（苦笑）の方がよかったですか？主に地球人感覚的でないわいな様相且つ、世の暗殺者に申し訳が立たないほどに堂々と正面からやってきた皆さん。もし暗に処理をするつもりなら人知れず、可能ならば本人にすらそれを理解しないままに終わらせるのが一番ですよ？」

「余裕だな貴様！？」

その言葉に魔法使い達がピキピキとこめかみを鳴らす。  
が

「余裕？は、何を当たり前な事を。お前らが来ることなんてとつくの前に予期していたんだからな。それこそ2年ぐらい前から」

は？と言う表情になる。

「ああ、別に理解しなくてもいいよ。どうせあんたらにとつちやあ寝耳に水なことだろうし。なにせあんたらはつい先日俺を殺すよう上司から命令されたばかりだったんだから。でしょう？」

管理局所属の皆さん？」

険しい表情、真面目な表情、目の前にいるのが子供でも油断を見せない表情。

かあ、そんなプロフェッショナル的な表情を取る。

しかし、

「ほう、唯の口の達者なガキだと侮っていたようだな」

「いや、今さらかつこつけんなんて。手遅れだから」

真剣になるのが遅すぎた。

最も、最初から全力でも意味は無かっただろうが。

「漫画とか映画とかだと、表情を歪めて言うところかな？」時間稼  
ぎに付き合ってくれてありがとうって』」

ま、時間稼ぎなんてしなくても良かったんだけどねと続ける。

魔法使い達は時間稼ぎだと？と聞き返そうとした。……が、思い  
とどまった。

5人とも突然、強烈な違和感を目の前の子どもから感じ取った。

なんだこれは？と刻を見る。

刻はさつきから、今までの此方を苛立たせるような、嘲笑うよう  
な表情とも不敵な笑みとも違う。唯惟、けだるげな表情をしている  
だけ……………いや、違う。

「動いて無い？」と誰ともなく呟く。

それによって残りも気がつく。

唐突に理解する。違和感の正体。

止まっていた。感情が変化しなくなった何処では無い。口以外の  
一切の動きが止まっていた。

まるで言葉を発する以外の事をわざわざするのが面倒になったよ  
うな感じだ。

「何のつもり……いや、なんなんだ、おまえ？」

誰ともなく呟く。

その答えは無かった。

それは、そのまま、まるで機械のように腕を上げ指をさした。  
彼等の後ろに向かつて。

まるでそれに呼応するように、彼等の真後ろに誰かがいる感覚が  
出現した。

いや、そちらに意識を向けて感知したのだから、ずっと前からそ  
こにいたのかもしてない。

そしてそれが真実だと彼等は本能的に感じた。

背中に冷たいものを感じる。

首を、いや、全身を回し、バットそちらに向く。

誰かが息をのむ。

誰かが「な……」と声をだす。

誰かが目を見開く。

誰かが「ヒッ」と漏らす。

誰かが「馬鹿な」と呟く。

そこには子供がいた。  
子供、と言うか男の子がいた。

とても見覚えがある男の子がいた。  
とても見覚えのある背丈、とても見覚えのある顔。  
何故か服装は違ったが。

彼は漆黒のローブを着ていたが。

「自分達を馬鹿にしておいてお前も魔法使いな恰好じゃないか」  
なんて言える者は居なかった。

そう、そこには刻がいた。  
にこにここと笑っていた。

後ろを振り返る。

先程と同じ表情の止まった、いや、全身の動きの止まった置物の  
ような刻がいた。さっきのまんまだ。  
全く同じ表情で、全く同じ姿で、全く同じ姿勢で刻を指さしながら  
ら。

後ろを振り返る、口に手を当ててクククと笑う刻がいた。  
先程と同じローブを着ていた。

5人は前と後ろを何度も目を行き来させる。

完全な混乱に陥る。  
そしてそんな中、声がかかる。

二方から。

一方、ロープの刻からはさつきまで話していたような感じの声で。もう一方、先程まで自分達と会話していたはずの刻からは、全く同じ声、しかしながら、感情の一切こもっていない声で。

「後、俺が色々な事をペラペラしゃべっていた理由だけどね？一つは精神に干渉しやすいように集中を切らすためで、もう一つは」

どうせ覚えていないし、記録にも残らないからだよ。

そして5人の意識はブラックアウトした。

何処からか「お・や・す・み」と言う声が聞こえた様な気がした。

記憶には残らなかったが。

068 そして消える（後書き）

数カ月ぶりの更新、済みませんでした。  
皆さんお久しぶりです。

さて、後二話ほどで閑話編は終わり、時は一気に飛びSTSに入ります。

次は出来るだけ早く投稿できるようがんばります。

刻「当分俺、出番なしか」

ソニア「次回は映像で出るし、その後も名前ならたまに出るかもって言ってるよ？」

刻「名前って、それにあの映像のは」

ソニア「ストップ、それ以上は禁止!!」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8733/>

---

- - - 守護者になりました - - -

2011年11月15日20時00分発行